

ヒーローガールとヒー ロー気質の転生者

振り子メンタル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

学校の帰り道、ナイフを持った不審者に襲われそうになっている女性を庇い、死んでしまった青年はスカイランドに転生する。

そこでヒーローに憧れる少女、ソラ・ハレワタールと出会い、共に日常を過ごしていく。

そして、成長した2人はスカイランドにある王国へと向かうのだが：

目次

プロローグ	1
誘拐犯を追え!	9
迷い込んだ先は夢の街!?	16
誕生! キュアスカイ!	25
お家にお邪魔します!	38
服を買いに行こう!	49
ソラのヒーロー	58
シクシクホームシックな2人	67
スカイジュエルを探そう!	76
あげはさんがやってきた!	87
覚醒の予兆	98

誕生! キュアプリズム!	107
伝説の戦士	116
傷ついてほしくない	125
友情の力	135
学校に行こう!	144
メイクマジック	151
最速決着	162
ついに始まる学校生活!	170
ソラの思いと桜の木	180
転校の挨拶のやり直し	188
ソラとのデート	197
再びの相談と謎の鳥	207
ましろとのデートとペアリング	

ボクらのヤーキターイ	306
思い出の味	299
290	
歓迎パーティーとヤーキターイ	282
あげはとのデート	275
ソウヤの過去	262
誕生！キユアウイング！	253
キユアナイトの新たな力！	
242	
ツバサの過去と空飛ぶランボーグ	233
夜の会話とエルの成長	224
謎の少年の正体	
214	

ソラの入隊	417
スカイランドへの帰還	407
届けよう！大切な贈り物	398
近づく別れの時	391
ファーストシユーズ	382
ソウヤと姉の会話	377
カバトンとの決着	364
力の起源と宣戦布告	354
決着と決戦の予兆	346
信頼	337
皆で山へ！	328
夜空の約束	321
選択	317

新たな刺客	427	旅立ちのプロローグとエピローグ	
ランボーグの襲撃と微かな違和感	439	ソラはソウヤとイチヤイチャしたい！	555
巨大ランボーグと絶望	449	あげはの気遣いと壁画アート	574
失意の帰還	462	バッタモンダーの襲撃と怪しい影	583
束の間の平穏	470	ウイングとバタフライの新たな力	594
希望を胸に	479	再びスカイランドへ	603
私のヒーロー	494	探索	611
体育祭に行こう	503	追撃	620
バトンパスと悔しい気持ち	511	帰宅と対抗策	633
実習に行こう！	523		
実習の続きと最強とは	533		
誕生！キュアバタフライ！	544		

未来を変えるピース	641
アンノウンの乱入と消えたソウヤ	649
ソラの帰省と託されたもの	659
決戦と別世界からの助っ人	669
流星の想いと決着	680
戦いの後とネタバラシ	690
エトとのデート	700
謎の夢と王様達の目覚め	710
一番星と2人の繋がり	720
澄み切った青空と一番星	732
みんなで動物園に行こう！	740
新たな敵	751

武人の意気とエルの成長	761
久しぶりのデート	773
ツバサの憂鬱	781
空港に行こう！	789
ましろの両親との再会	798
楽しい時間はあつという間	809
突然の来訪	817
アンノウンの最期と帰還	826
突然のスカウト	836
楽しいファツションショー	846
忘れ去られたぬいぐるみ	859
ぬいぐるみの想いとソウヤの試練	868

アナザーの思いとぬいぐるみとの別れ	877
海に行こう！	888
進化のピース	897
異聞の物語の結末	906
ソウヤの誕生日パーティー！	914
写真館と新たな敵の影	926
壊される平穏	934
謎の戦士	944
キュアマジスティと謎の戦士の正体	956
降臨する白銀のプリキュア	968
降臨！キュアマジスティ	978

見知らぬ場所、見知らぬプリキュアとの出会い	986
プリキュアを見守る者達	995
感じる違和感	1003
謎の少女との出会い	1013
プリキュアとは	1022
断章　くある戦いの記憶く	1031
月虹ルート	1039
夜に架かる虹	1046
皆で山へ！（ましろルート）	1055
翔び立つ想いルート	1055
あげはとソウヤ	1055

プロローグ

懐かしい夢を見ていた。

まだ俺が転生する前の夢だ。

俺は当時高校生で、家族や友人と平和に過ごしながら、それなりに幸せに生きていた。そんなある日の帰り道、女性がナイフを持った怪しい男に刺されそうになっているところを見かけた俺は、咄嗟にその女性を庇い、刺されてしまった。

そして、腹部に激しい痛みを感じながら、意識を失った。

幸いにも、俺が庇った後、ナイフを持った男はどこかに逃げて行ったから女性があつた。段階で死ぬことはなかったが、その後どうなったかはわからない。

俺は死んでしまったから。

薄れゆく意識の中で、最期まで聞こえていたのは助けた女性が必死に何かを叫んでいる声だけだった。

「ソウヤ、起きてくださいー！」

「ん…なんだソラか。どうかしたの?」

「どうかしたの?じゃ、ありませんよ!王国に行こうと前から話してたじゃないですか!」

そう言いながら、俺のことを起こした目の前の青髪の美少女はソラ・ハレワタール。変わった名前だと思った?俺も最初はそう思ったが、慣れたらそこまで変な名前じゃないと思う。

晴れ渡る空、素晴らしい名前じゃないか。

女性を庇って刺された後、俺が目覚めると、スカイランドという名前の世界に赤ん坊として転生していた。

最初はまったくもって理解できなかったが、所謂異世界転生かとすぐに納得した。

そういうえば、こういう風にすぐに順応できるから、転生者とか転移者は日本人が多いつていうのを作品の設定に組み込んでいるものがあつたな。

まあ、せめて転移が良かったなとは思っけど。

前世の記憶を持ったままで赤ん坊になるというのは…こう、なんというか、色々と精神にくるからね…うん。

「ソウヤ?聞いてますか?」

「聞いてる聞いてる。そういえば、今日だった…悪い、今からさっさと準備するよ」
「私も手伝います！これもヒーローの努めです！」

「ヒーロー関係なくない？まあ、手伝ってもらえる分にはありがたいけどさ」
「はい！頑張ります！」

そう返事しながら、ソラは俺の準備を手伝い始める。

ソラは色々あつてヒーローを目指している。

ヒーローになるためだつて言つて、手帳に色々書き込んでいるぐらいだ。

どことなく前世で見たことのあるヒーロー漫画の主人公みたいな感じだなと思つたりもするが、なりたい自分になるために努力できるのは素直にすごいと思う。

まあ、俺はできればヒーローとかにはなりたくないけど

「よし、こんなものかな…ありがとう、ソラ」

「荷物はこれだけですか？」

「ああ。あんまり多すぎても邪魔になるし」

俺の用意した荷物はリュックが一つだ。

だけど、着替えと食料と水はあるし、問題はないはずだ…まあ、一応武器になりそうなものを用意しておくべきか悩んだけど。

色々と考えた結果、最終的に武器になりそうなものは入れないことにした。

「まあ、確かにそうですね…足りないものは私が補えば良いですし！」

「ソラの荷物はかなり大きいもんな…その時は頼むよ」

「はい！それじゃあ行きましょう！」

そう言いながらソラは俺の手を引いて歩き始めた。

／／／／／／／／／／／／／／

「うーん…ゆつたりとして気持ちいいな」

「そうですね…」

空飛ぶ巨大なニワトリのような生物の上で寝転びながら、そんな会話をする。

まさか、こんな巨大なニワトリが居るとは…まあ、スカイランドって空の上にある世

界だし、交通手段としてはこれが良いんだろうけど。

それに羽毛が気持ちいいし、すごく快適だ。

「…そういうえば、前から聞きたかったんですが、ソウヤは何でヒーローになりたいくないんですか？」

「誰もが皆、ヒーローになりたいわけじゃないんだよ」

「まあ、それはそうなんですけど…私はソウヤの理由が知りたいです」

「…理由ねえ…そこまで知りたいもんなのか？」

「はい！もつとソウヤのことを知りたいんです」

そう返すソラにどう答えるべきか考える。

テキトーに答えちゃダメかな？ いや、嘘だつてすぐにバレそう…ソラとは割と長い付き合いだし。

仕方ない…しっかりと答えるか。

「…ヒーローつてさ、損な役回りだからなりたくないんだよ」

「損な役回り？」

「そう。どれだけ人々のために戦っても…敵に負けたり、何か失敗したらさ…今まで感謝してた人々が急に掌を返して責め立ててきそうじゃん？ 戦う敵はもちろん、守つてきた人々とまで戦うとか絶対嫌だし」

そう、よくある話だ…人々の為に魔王を倒した勇者が今度は逆に人々に恐れられたりするとかね。

他にも、負けた時や何か問題が起きた時に、ヒーローが負けたからだ！とか、ヒーローがなにもしなかったから！判断を誤ったからだ！みたいに責め立てる奴も出てくるだろう。

色々と重い宿命とかも背負わされるし、ヒーローつてホントに大変だと思う。

まあ、そういうのも覚悟しているのがヒーローなのかもしれないが、俺は絶対にごめんだ。

「そういう人ばかりじゃないと思いますよ？そもそも、そんなことを考えてたら誰も助けられません」

「そうだな…だから、俺はヒーローになれないし、なりたくもない」

「…でも」

そう言いながら、ソラは俺の顔を両手で包み、自分の顔が見えるように俺の顔を移動させる。

「でも、ソウヤは私のことを助けてくれたじゃないですか」

「…小さい頃の話だろ」

「いえ、今も助けてくれてます…王国に行くのについてきてくれたのも、私が心配だったからでしょう？」

「そりゃあ、お前は放つといたら何をするかわからんし…俺の知らないところで何かあったら気分悪いから」

「ふふっ！やっぱソウヤは優しいですね…それに、私以外にも目の前で困っている人が居たら、なんだかんだ助けてくれるじゃないですか」

「目の前で困っている人が居て、誰も助ける人がいないなら、俺が助けるしかないだろう？見て見ぬふりは出来ないし…誰でもそうする…普通のことだ」

「あははっ！もう、全然ヒーロー気質が隠せてませんよ！」

そんなことを言いながら、ソラは笑顔を見せる。

いや、ヒーロー気質ってなんだよ…俺にヒーロー気質なんてないだろ。

「…ソウヤは今までも、そしてこれからも、ずっと私のヒーローです！」

「…まあ、ありがとう…どう反応するのが正解かわかんないけど…」

ソラの真つ直ぐな言葉にそう返す。

流星にちよつと照れくさくなるな…俺がヒーローとか、そんなことはないだろうに。

「ふふっ！…大好きです、ソウヤ」

「…はいはい、ありがとうな」

そう口にして、顔を背ける。

いや、流星にこれは反則すぎる…あやうく惚れるところだった。

「伝わってないんでしょうか…やつぱり、もう少しアプローチをするべきですね…よし！頑張ります！」

「ん？頑張るって何を？」

急に立ち上がったソラに驚きながらそう返す。

途中ですごい風が吹いたせいかな、ソラの言葉をよく聞き取れなかった。

「それは内緒です！」

そう言って、ソラは笑みを浮かべる。

内緒か……まあ、ソラのことだからヒーローに関連することだろう。
そう考えながら、俺は空の景色を楽しむのだった。

誘拐犯を追え！

「ふあああ〜〜！」

スカイランドの城が見えてきたせいか、ソラは立ち上がり、辺りを見渡している。

「ちよいちよいちよーい！ちゃんとおまわってなかつたら落ちるで、お嬢ちゃん」

「これぐらいのことを怖がっていたら、ヒーローは務まりません」

ニワトリさんのごもつともな発言にソラは笑みを浮かべてそう返す。

「ソウヤも来てください！一緒に見ましょう！」

「わかったよ…」

そう言いながら、バランスを崩さないようにソラの近くまで歩いていく。

「おお…！あれが」

「せや！あれがスカイランドのお城や！」

ニワトリさんの言葉の通り、大きな城のような建物が目に入る。

流石、王国だな…城を見た感じ、そこで暮らしている人達も良い感じに暮らせているうだ。

もちろん、王がとんでもない暴君でもない限りはだけど。

まあ、スカイランドで生活してる感じだと、全然悪い人じゃないと思うから、そこは安心だ。

「着いたら、何食べよっかな…せっかくだし、露店巡りとかしたいよな」

「それは確かに楽しそうです!あ、良ければ食べさせあいつことかしませんか?」

「いや、流石にそれは恥ずかしい…やめとこうぜ」

「そうですか…」

落ち込んだようにソラはそう口にする。

くっ…! 罪悪感がすごい!

「…あー、誰も見てないとこなら大丈夫か…そういう場所でなら食べさせあいつことかしても良いけど」

「本当ですか!?!」

さっきとは打って変わって、ソラは嬉しそうにそう言う。

「ホントホント」

「ありがとうございます!」

「はいはい、どういたしまして」

(ワイの上で、イチヤイチャしとるなあ…まあ、別にええけどな)

そんな風にソラと話していると、城の方から紫色の煙が上がっている。

「何かあったのか？」

「えらいこつちや！」

ニワトリさんのそんな言葉を聞きながら、俺はソラに声をかける。

「…ソラ」

「わかつてます…すみませんが、スピードを上げてもらえますか？」

「まさか、くちばし突っ込む気か!？」

「はい。見て見ぬふりはできません」

「同意。何かが起きているってわかっているのに、何もしないわけにはいかない」

俺達の言葉にニワトリさんは悩んだ末にスピードを上げて、王国へと向かってくれた。

「ヒーローの定番です」

「さて、どうするか」

ニワトリさんに王国にある建物の上に降ろしてもらい、お礼を言った後、王国の様子を伺う。

すると、豚のような顔をしている怪人が小さな女の子をシャボン玉のようなものに閉じ込めて、それを抱えて走っているのが目に入った。

完全誘拐じゃん! さっさと追いかけないと!

「ソラ! 俺は先にあいつを追うから、後で合流しよう!」

「わかりました!」

ソラの返事を聞いた後、背負っていたリュックを下ろして建物を飛び下り、怪人を追う。

怪人はいろんなものを壊しながら突き進んでいき、速度が落ちる様子がない。

速いな…しかも減速する気配ないし。

これはソラに任せるしかないかもな…まあ、それはそれとして俺も諦めずに追うけどな!

そんなことを考えながら、自分の速度を上げる。

そして、飛んでくる障害物や人々を避けながら徐々に距離を詰めていく。

「待て! このやろう!」

「まさか、追いついてきてるのねん!」

「その子を離せ! 誘拐犯!」

「離せと言われて離す馬鹿はいないのねん」

「だろうな！」

そんなことを叫んでいると、道の先にソラが待ち構えているのが目に入った。

グツドタイミング！後は任せた！

怪人もソラの存在に気づいたのか、何かを言いながらそのまま突っ込んでいく。

そして、ソラはクラウチングスタートのような体勢を取り、そのまま走りこんで――

「馬跳び！」

怪人の上を跳び、そのまま後頭部を蹴って、着地した。

怪人は勢いそのままに地面に転がり、抱えていた女の子がふわりとソラに向かって飛んでくる。

それをしっかりと受け止め、ソラは捕らわれていた女の子を抱きしめた。

「女の子は無事？」

「はい！無事です！」

「そっか、良かった……！」

「お前達、誰なのねん！」

立ち上がった怪人が、そんなことを口にする。

いや、何言ってるんだこいつ……わざわざ名乗る奴いないだろ。

そもそも相手から名乗るのが礼儀というものでは？

「私はソラー！ソラー・ハレワタールです！」

「居たよ！名乗る奴！そうだよな…ソラだもんな、名乗るよな…じゃあ、俺もソラに習って名乗るか…俺はソウヤだ、別に覚えなくても良いけどな」

「ソラ、ソウヤ！お前たちの名前は覚えたのねん！何故なら、お前たちの墓石に刻む名前が必要だからなのねん！」

そう言いながら怪人はこちらに尻を向ける。

あ、嫌な予感が…：そういえば、ポケモンのブイゼルも尻から水技とかを出してたよう…：やばそうだな。

「避ける！ソラー！」

そう言っつて、回避行動をとる。

「遅いのねん」

そうして、怪人はすさまじい勢いの放屁をしてきた。

よりによつてそつちかよ！

俺はなんとか回避できたがソラは避けきれず、直撃してしまった。

そして、あまりの屁の臭さに、ソラはむせていた。

「何食べたらこんなに臭うんですか！けほっ！けほっ！…はっ！しまった！」

「あのやろう！いつの間に関連れ去った！」

ようやく落ちて着いてソラに視線を移すと、先ほどまでソラが抱えていたはずの女の子がいなく、怪人が連れ去っていた。

「いずれこのお返しはしつかりとするのねん。今日の所はさよ、オナラ」

怪人はそんなふざけたことを言いながら、紫色の時空の裂け目のような穴へと入って行った。

「この穴は……」

どこか怯えた様子でソラはそう呟く。

…そりやそうか、怖いに決まってる。

助けに行きたいけど、何が待ち受けてるかもわからないし、帰れるかもわからない。

怖くて当然だと思っ…でも、ここで助けなかったらきつと後悔するだろう、ソラも俺も。

「ソラ、行こう！俺も怖くないと言えば嘘になるけど、あの子を助けないと…後のことは助けてから考えれば良い」

「ソウヤ…そうですね！行きましょう！あの子を助けに！」

「当然！」

そうして、俺とソラは穴へと入っていくのだった。

迷い込んだ先は夢の街!?

「うわあああ!!ソ、ソウヤ! 私達、落ちてますよ!!」

「そうだな…まさか、その子を助けた後に空に放り出されるとは…」

紫の穴に入った後、豚の怪人に追いついた俺達は、誘拐された女の子を助けることに成功した。

といっても、俺達が直接なにかをしたわけではなく、宇宙デブリのようなものに豚の怪人がぶつかり、そのままどこかにいなくなつた後、開放された女の子をソラが助け出した。

そしてその後、時空の裂け目みたいなのが現れて、俺とソラは光に包まれ、今に至る。

そういえば、豚の怪人がお前達もこの子の力が欲しいのか?とか、言つてたっけ…あれ、どういう意味だったんだろうか?

まあいつか…とりあえずこの状況をなんとかしないとだな。

にしても…あの時のソラはカッコよかったな。

『ヒーローは泣いている子供を絶対に見捨てない!』つて言葉も良かった。

あの子を抱きしめながら、『もう大丈夫です。パパとママの所に…お家に帰ろう』と言いながら、抱きしめてた時の顔、月並みだけど、キレイだった。

あれ？これ、もしかして走馬灯見てない？俺？

「ソウヤはなんでそんなに冷静なんですか?!」

「そりゃあ焦って事態が好転するなら全力で焦るけど、焦っても意味ないしな…：それにこう見えて、内心結構ヤバいとは思っているよ…：軽く走馬灯が見えたし」

「走馬灯!?大丈夫なんですか?」

「大丈夫、大丈夫。まだ死ぬ気はないからさ…：さて、どうしたもんかな…：五点着地でもやってみるか?何もしいよりはマシだろうし」

「五点着地…?つて、ソウヤ!あれ見てください!人が居ます!このまま行くとぶつかります!!」

「嘘だろ!?やばっ!これは流石にまずい!」

ソラの言葉の通り、俺達の落下地点の近くに人が居た。

「このまま行くとぶつかりそうだ。」

「そこお!どいてくださあい!!」

「本当にどいてくれ!!やばいから!絶対にぶつかるから!!」

「ええええ!!」

落下地点付近の人にそう声を掛けつつ、どうするべきか思考する。

このままじゃソラ達も、落下地点付近の人も危ない…なら、せめてソラ達が無事でいられるように俺が下敷きになるか。

そう考え、ソラ達の下に移動しようとする、突如として、俺達の体が浮いた。

「へっ!」

俺とソラの声が重なり、ソラは空中を泳ぐように腕を動かしていたが、落ちないことがわかると最後は感嘆の声を上げながら、構えの態勢をとりながら、着地し、女の子を抱きとめた。

俺?普通に着地したよ。

今のやつって、あの怪人の言っていたあの子の力なのかな?まあ、何にせよ助かった。

「セ、セーフ:」

またもや重なった声に、俺とソラはお互いに笑みを浮かべた。

それを見ていたせいとか、それとも落ちそうになったのがジェットコースターみたいで面白かったのか、ソラの抱きとめた女の子が笑っていた。

そんなこんなでなんとか着地に成功した後、落下地点の付近に居た人に気づいたソラが慌ててその人に近づいて行った。

というか、落ちてる時は気づかなかったけど、この人女の子だったんだな…小豆色の

髪に格好もキュートっぽい感じで、一言で言ってしまうえば美少女だ。

異世界つてすごいな。

「…はっ…ごめんなさい！びつくりさせちゃいましたよね！実は私も相当びつくりしてて！偶然誘拐現場に行くわして、この子を追いかけて、不思議な穴にえいや！と飛び込んだら、空にポコって！それでピューって！」

ソラのマシンガントークに少女がキャパオーバーしてるのが目に見える。

あまりの事態に少女がこちらに助けを求めるように視線を移してくる。

「あはは…ごめん。正直、俺も困惑してて…って、この街って」

辺りを見渡すと、前世で暮らしていた世界のようにビルのような建物や自動車があり、広告を流しているディスプレイまである。

スマホを弄っている人もいる。

懐かしい…もちろん、俺の前世に住んでいた世界とは違うだろうが、それでも懐かしいと感じてしまう。

「えっ？えっ？なんですか？この変な街は！あれはなんですか！？あれは！？もしかして、ここって魔法の世界!？」

だが、ソラからすればこの世界は魔法の世界らしい…まあ、俺も前世の記憶がなければそう思っただろう。

スカイランドとはなにもかも違うし。

「ターーーイム!!」

たまらず、目の前の少女が手でTの形を作ってそう口にする。

正直、助かった：どう収集しようかと思っていたところだったし。

というかよく見ると、手じやなくて手帳みたいなやつを使ってTの形を作ってるな：まあ、だからなんだと言われればそれまでだけ。

そうして、しばらく間が空き、ソラと目の前の少女が同時に言葉を紡いだ。

「これ、夢だあ：」

「そんなわけあるか！現実だよ！現実！」

「またまた：夢じやなければこんな世界があるわけないじゃないですか」

「うんうん。夢だよ夢：夢じやなかったら、空から人が降ってくるなんてありえないよ」

「わかったよ：夢ということにしておこう」

絶対現実だけど、今はまともにも聞いてもらえそうにないし、話を合わせておこう。

「初めまして、夢の中の人。私、ソラ・ハレワタルです。そして、こちらが私のこ：大切な人、ソウヤです」

「今、なに言いかけたの？気になるんだけど：まあ、大切な人と言われるのは悪い気しないけどさ：ソラは俺にとっても大事な人だし」

「ソウヤ……！あ、ありがとう……ごぎいます」

「2人は仲が良いんだね！私はましろ、虹ヶ丘ましろだよ！」

「ましろさんか、よろしく」

「よろしくお願ひします……それにしても、鉄の箱が走っているなんて夢の世界はすごいですね……この夢の街、名前はなんていうんですか？」

「ソラシド市だよ！」

「ソラシド市……良い街だね……」

そんな言葉が零れる。

まさか、こんな形で前世を懐かしむことになるとは……それだけでも、この街に迷い込んだ甲斐があるというものだ。

「ソラシド市……あつ、それは！」

ソラがましろさんの持つている手帳に視線を移しながら、そう口にする。

さつきは気づかなかつたけど、これってソラの手帳じゃないか！

俺達の手帳に気付くと、ましろさんが手帳をソラに手渡してくれた。

「私のです！拾ってくれてありがとう！とても大事な手帳なんです！」

「ありがとう、ましろさん……これはソラにとつて本当に大事なものでさ」

「そうなんだ……ちゃんと渡せて良かった！そういえば、なんて書いてあるの？」

「これですか？これはスカイランドの文字で、私の……」

ソラが手帳について話そうとすると、突然後ろから物音が聞こえてきて、思わず振り返る。

「夢の中、ホントに何でもありだよ！」

ましろさんが未だにそんなことを言っているが、俺は警戒を解くことができない。

そして煙が晴れると、そこには王国で遭遇した豚の怪人がいた。

「許さないのねん……ソラ、ソウヤー！お前達をボコボコにして、それからプリンセスを頂くのねん！」

そいつを見て、プリンセス……多分、助け出した女の子のことだろう。その子が怯えて、泣きそうになっている。

「怖くないですよ。私が守ります」

「そうそう。このお姉ちゃんはずいい人だから安心して良いぞ」

そう言いながら、ソラに抱っこされてるプリンセスの頭を撫でる。

すると、安心したようにプリンセスは笑みを浮かべる。

赤ちゃんつて可愛いよな……もちろん変な意味じゃなく。

にしても、こんな幼気な子を拐って何するつもりなんだ、こいつ……まあ、なんであれ碌でもないことだろうけど。

「守れるかな？カモン！アンダーグエナジー！」

怪人がその口にすると、いきなりシヨベルカーの化け物が姿を現した。

「ランボーグ!!」

シヨベルカーの怪物はそう叫びながら、威圧感を放つ。

どういう理屈だよ……！現象には必ず何かしらの理屈があるもんだけど……つと、今はそれどころじゃない。

辺りを見渡すと、誰一人避難している人が見当たらない。

「何あれ？」

「迷惑系キュアチューバーか？」

一応騒いでいる人達もいるが、避難しようとしてはいない。

まあ、いきなりこんな事態になって、危機感を抱くのは難しいかもな。

「つ……！危ない！」

怪物の腕が通行人の一人に向かうのが目に入り、すぐに助けに入った。

「大丈夫ですか!?!」

「は、はい！ありがとうございます！」

「早く逃げて！他の人も早く！」

誰かが襲われて、ようやく他の人も事態を呑み込めたのか、一斉に逃げ出した。

「よしーこれで他の人は安心…って、うおっ！危ない！」

周りの人が逃げたことを確認すると、怪物が俺に攻撃を仕掛けてくる。それを咄嗟に回避し、怪物の足元を潜り抜ける。

「ふう…危なかった…」

こいつ…本気で俺を殺す気だな…まあ、俺に敵意が向いている分にはソラ達に被害が及ばないから良いけどさ。

…さて、とりあえずソラ達のためにも敵を引き付けるとしますか。

そうして、俺はシヨベルカーの怪物との戦闘を始めるのだった。

誕生！キュアスカイ！

「ソウヤー！」

突然現れた怪物の攻撃から通りすがりの人を助けるために、ソウヤが走っていく姿が見える。

ソウヤはいつもそうです…困っている人や危ない目に遭いそうな人が目に入るとすぐに動き出して助けに行く。

自分に何ができるとか悩むこともなく、放っておけないから…助けたいから…そんなふうに誰かを助けにいくんです。

私はそんなソウヤの在り方に憧れた。

でも、時々心配になるんです…このままソウヤが誰かを助け続けたら、いずれは自分の命を捨てても誰かを救うのではないかと。

私はソウヤの在り方を尊敬しています…でも、その在り方のために彼が命を捨てるのだけは許容できない。

「普通に痛いよ…これ夢じゃないの!？」

「…ましろさん、この子をお願いします」

ほっぺたを抓っているましろさんに女の子を預ける。

助けに行かないと…きつと、ソウヤも私と同じ立場なら、同じことをするはずですか
ら。

あの時、私を助けに来てくれたように。

「ソラちゃん、だっけ?一緒に逃げー」

その言葉を聞こえないフリをして走り出す。

「行っちゃダメ!」

そう言つて、ましろさんは私の手を掴みました。

今、掴まれてしまうのは困りますね…だつて、さつきから手の震えが止まらない。

震えているのが、ましろさんに伝わってしまう…ヒーローは守る人を安心させる存在
でなければならぬのに。

「すう…はあ〜」

深呼吸。

今、ソウヤのおかげで相手は私達を見ていない。

今なら逃げられる…わかっています、ソウヤが私達のために時間稼ぎをしてくれてい
ることくらい。

でも、ここでソウヤを見捨てたら、一生後悔する…だから!

「相手がどんなに強くても、最後まで正しいことをやり抜く…それが、ヒーロー！」
そうして、私は走り出す。
大切な人を助けるために。

「うわつと…危ない危ない」

シヨベルカーの怪物の攻撃を躲しながら、そう呟く。

さて、そろそろ逃げきれてると良いんだけど。

「ソウヤー！」

「ソラ!?」

なんでこっちに？

ましろさんとあの子は？

色々な疑問が浮かぶが、俺のやることは変わらない。

「…後で詳しく聞かせろよ！」

「はいー！」

そんなふうに会話していると、シヨベルカーの怪物が攻撃を仕掛けてくる。

それを俺達は回避し、左右に散開する。

「こつちですー!」

「こつちにもいるぞー!」

俺とソラがそう口にし、怪物は俺とソラを見落としたのか、辺りを見渡している。

「カバトントン」

怪人の謎の掛け声が聞こえたかと思うと、目の前に黒いモヤモヤのようなものが現れる。

これって…怪物に俺達の位置を教えるのか?だとしたらまずい!

そう理解すると同時に後ろへと飛び退く。

その瞬間、怪物の攻撃により俺の体に衝撃が襲う。

「ぐっ……!」

「ああああ!!」

「ソラ!!」

ソラの悲鳴が聞こえ、受け身を取った後、すぐに走って駆けつける。

「大丈夫か!? ソラ!」

「くっ……ううっ……」

見たところ、外傷はあるけど、致命的なダメージを受けたわけではなさそうだ。

とはいえ、今のソラは立つのも難しいだろう。

ふと視線を移すと、そこに居たはずのシヨベルカーの怪物も豚の怪人もいなくなっていた。

多分、ましろさん達の所へ向かったんだろう。

…正直、ソラにはこれ以上無理をしてほしくはない。

とはいえ、ソラはこのまま助けにいかないなんて選択肢は取れないだろう。

「…ソラ、立てるか？」

「は…い…だい、じょうぶです！」

「無理するな…ほら、手を掴んで」

「はい…ありがとう…ございませす」

ソラが俺の手を掴み、俺はそれに応えるように、慎重に起き上がらせる。

「ううっ…」

立ち上がったソラがふらつき、それを支えるように肩を借す。

「ありがとう…私はいつもソウヤに助けられてばかりですね…」

「何言ってるんだよ…助けてくれるのはそっちも同じだろ？」

「そうでしょうか？でも、そう言ってもらえて嬉しいです…ソウヤの力になれていると

思えるので…」

「実際、ソラは俺の力になってくれてるよ…さて、行こう。ましろさん達が危ない」
俺達はそんな会話を交わしながら、ましろさん達の元へと向かうのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「見えてきたぞ…やつぱり2人の所に行ってたか」

先ほどの怪物と怪人がましろさん達に何かを叫んでいるのが見える。

なんであれ、止めなくては。

「やめなさい!」

その様子を見たソラが叫ぶ。

そして、前のみりになりながら言葉を続ける。

「あなたの相手は私が…っあ!」

「ソラー!まったく無茶しやがって…」

ソラが倒れ込んでしまい、すぐさまソラを抱き起こす。

そして、敵に視線を移すと、怪人がソラの手帳を拾っていた。

多分、転んだ拍子に飛んで行ってしまったんだろう。

「私のヒーロー手帳?」

怪人がそんなことを言いながら、手帳を捲っていく。

『空の上を怖がっていたらヒーローは務まらない』、『ヒーローは泣いている子供を絶対

見捨てない』、ブフツ！『絶対、ヒーローになるぞ』：ヒーロー！ギャハハハ！

そう言って、笑いながら怪人は手帳を破っていく。

「弱いヤツは！ガタガタ震えて！メソメソ泣いてれば良いのねん！」

「こいつ……！」

「酷いよ！もうやめて！」

あまりの怪人の行動にましろさんもそんな言葉を口にしてている。

許さない……こいつは絶対に許さない！

「ソラ……悪い。ちよつと離れる……」

そう言って、俺は一瞬で怪人との距離を詰める。

「は、はやい……！」

「返せ」

そして、怪人の手にある手帳を奪い、そのままの勢いで蹴りつける。

その攻撃が命中し、怪人は後ろへと飛んでいった。

「ソウヤ君、すごい！」

「ええう！」

「なんなのねん！急に速度が上がった!？」

そんな怪人の言葉に一瞥もくれず、俺はソラの元に向かう。

「ソラ、悪い…手帳は取り返したけど、ページはダメだった…もつと早く取り返せたら良かったんだけど」

「ふふっ…いえ、手帳を取り返してくれただけでも嬉しいです…私の為に怒ってくれて、ありがとう…」

「ソラの想いを…夢を踏みにじったあいつが許せなかったからな…それはそれとして、大丈夫か?立てるか?手ならいくらでも借すぞ」

「ありがとうごさいます…でも、大丈夫、です!」

そう言つて、何度も体を震わせながらソラはなんとか立ち上がった。

立ち上がるのもキツいはずなのに、すごい奴だ。

だが、そんなソラの様子を心配したのか…プリンセスは泣きそうな顔をしていた。

そんなプリンセスにソラは笑顔を見せながら、言葉を紡いだ。

「大丈夫…お家に帰ろう!」

すると、プリンセスは明るい顔を見せる。

「うん…そうだな…一緒に帰ろう」

「はい!一緒に!」

そう言つた瞬間、ソラの胸から青い光の球が現れ、そこからペンのようなものが飛び出してきた。

「ふいきゅあ〜！」

プリンセスがそう叫び、光のエネルギーがソラに飛んできて、小さなアクセサリーの
ようなものへと姿を変える。

「ヒーローの出番です！」

ソラがそう言うと、ソラの周りが謎の光に包まれた。

「スカイミラージュ！ トーンコネクト！」

マイクのように変化したペンに、スカイトーンをセットする。

「ひろがるチェンジ！ スカイ！」

マイクにSKYの文字が現れ、ソラがステージに舞い降りる。

そして、空のように青い髪はより空の色に近づき長いツインテールへと変わり、髪
の先はピンク色に染まっている。

「煌めきホップ！」

「爽やかステップ！」

「晴々ジャンプ！」

ホップ、ステップ、ジャンプと段階を踏みながら、彼女の衣装が変化していき、最後は彼女の左腕にマントが装着された。

「無限に広がる青い空!キュアスカイ!」

そして、ここに1人のヒーローが誕生した。

／／／／／／／／／／／／／／

「うわあ……!私、どうなっちゃったんですか!?!」

「おお……!すごい!カッコ可愛い!」

謎の光からソラが出て来たかと思えば、姿が変わっていた。

空色の長いツインテールに翼を模した髪飾りを着けていて、服装としては青と白を基調としたドレスに所々ピンクの装飾が施されている。そして白のニーハイソックスに青色と黄色のハイカットブーツという格好だった。

そして、なにより目を引いたのは、ソラが左腕に羽織っているマントだ。

ヒーローの象徴とも言えるそれはカッコよくて、ソラ……いや、今の姿はキュアスカイだったか?ともかくその姿はカッコいいと可愛いのハイブリッドと言うべき姿だった。

「ランボーグ!」

怪人が、怪物に指示をして攻撃を仕掛けてくる。

どうやらあの怪物はランボーグという名前のように……まあ、確かにあのシヨベルカー

の怪物、ランボーグって叫んでたもんな。

そんなことを考えながら、俺も回避行動を取り、キュアスカイはその場から大きくジャンプした。

「すっげー……すさまじいジャンプ力だな……」

「あいあい！」

スカイのジャンプを見て、プリンセスも喜んでるようだ。

これは……後は任せちゃっても良さそうだ。

そう考えて、俺はましろさん達の側に向かい、戦いを見守ることにした。

まあ、結果はわかりきっているが。

とはいえ、油断禁物だ……一応、警戒はしておかないとな。

「ヒューッガッル……スカイパンチ！」

ランボーグにキュアスカイの流星を描くような軌道の青い必殺パンチが命中し、ランボーグが消滅していく。

うん。やっぱりソラが勝ったな！

にしてもすごいな…本当に変身ヒロインみたいだ…いや、ソラにはヒーローの方があつてるか。

そんなことを思っていると、ソラがキュアスカイからソラの姿に戻り、こちらに駆け寄ってくる。

「どうやら、キュアスカイに変身すると傷が治るようで、先ほどと比べて元気そうだ。」

「大丈夫ですか?怪我はありませんか?」

「ソラこそ大丈夫か?傷は治っているみたいだけど、ダメージが残つてたりしないか?」

「はい!この通り元気ですよ!ソウヤこそ、ダメージが残つてませんか?」

「大丈夫。一応直撃は避けてたし、受け身もちゃんと取れたからダメージはないよ。もちろん、ましろさん達も無事だ」

「良かったあ…!」

「あの…:ねえ、ソラちゃん…:」

「うん?」

「ソラちゃんつて、ヒーローなの?」

「それは…:」

ソラは一瞬言い淀み、言葉を続けた。

「私にもわかりません!」

「そりやそうだよな…まあ、でも…今日のソラは間違いなくヒーローだったと思うけどな」

「ふえっ!?!」

顔を赤くしながら、そう口にするソラを見ながら、俺は思わず笑みを浮かべるのだった。

お家にお邪魔します！

「はあ〜っ…ここがましろさんのお家？」

「みたいだな」

戦闘が終わった後、ひと息ついていた所で周りの人達が騒ぎ始めた。

しかも、あやうく警察までやってきそうで、ましろさんが慌てて俺達を家に連れてきてくれた。

「にしても、すごい豪邸だな…」

「そうですね！ましろさんは、もしかしてこの世界のプリンセス…ましろ姫ですか!？」

「えっ…？そんなじゃないよ!」

ましろさんの少しびっくりしたような声を聞きつつ、ソラがましろさんを姫扱いするのもわからんでもない気がしてくる。

まあ、それはさておき…ましろさんの保護者の方にどう説明したものか。

俺がそんなことを考えていると、中から優しそうな雰囲気のおばあさんが姿を現した。

「ましろさん、お帰りなさい」

「おばあちゃん」

「どうやら、ましろさんのおばあちゃんみたいだ。」

「ご両親は家にいないのか？まあ、あんまりそういうのは詮索するべきじゃないか。」

「こ、これ…絶対信じてもらえないと思うんだけど、聞いて！この子達が空の上からぴゅぷつて！モンスターがバーンつて！それから、それから…キラキラつてなつてフワーツて…」

「ましろさんがなんとか事情を説明しようとしているのはわかるが、これ伝わるのか？」

「大変だったわね」

「えっ…」

「さあお上がりなさい」

「えっ！あれで伝わったの!?このおばあさん、理解力高すぎでは？」

「え？自分で言うのもなんだけど、今の説明でOKっておかしくない？」

「ましろさんの言う通りだと思う…なんで今の説明でOKだったんだろう？」

「だよね？私、間違つてないよね！」

「うん。ましろさんのツツコミは的確だよ…まあ、とりあえずお言葉に甘えて、お邪魔するか？ソラ」

「そうですね…では、お言葉に甘えてお邪魔しましょう！」

「オーケー。それじゃあそうしよう」

そうして、俺とソラはましろさんの家にお邪魔するのだった。

／／／／／／／／／／／／／／

「スカイランド…こことは別の世界があるなんて…まだ信じられないよ」

ましろさんがほっぺを抓りながら、そんなことを口にする。

まあ、普通は信じられないよな…俺も何も知らずにそんなことを言われたら困惑するし。

「私も別の世界にいるなんて信じられません…自分がキュアスカイに変身したことも」

「その不思議なペン、何なんだろう？プリキュアってなんだろう？」

「プリキュアか…なんか聞いたことあるんだよな…」

確か…前世の友人が、熱く語ってたような気がする…うーん、ダメだ、思い出せない。

そもそも俺は前世の記憶をすべて覚えているわけではない。

自分が何で死んだのか、どんな風に生活していたのか、後は基本知識みたいなものぐらしいか覚えていない。

自分の前世の名前や家族の顔や名前、そして友人の顔や名前も思い出せない。

まあ、よく読んでいた漫画のセリフや場面、そして、アニメとかはちよこちよこ覚えていたりするが。

「ソウヤ君！何か知ってるの？」

「いや…聞いたことがあるような、ないような…そんな曖昧な感じかな？ごめん、力になれそうにないや」

「そつか…ねえ、おばあちゃん、お部屋の百科事典にプリキュアのこと載ってたりしないかな？お願い、調べてあげて…」

「私のことよりも、この子をお家に帰してあげる方法を探すのが先です！…約束したんです、パパとママの所に帰してあげるって」

「ソラ…」

本当にどこまでもヒーローだな…ソラは。

ちよつと心配になるくらいだ。

「ヒーローは泣いている子供を絶対に見捨てません！」

「バカ！声がでかい…」

「え…えるう〜！」

「ほら見ろ、泣いちゃったじゃないか！」

先ほどまで気持ち良さそうに眠っていたプリンセスがソラの声にびっくりしたのか、泣き始めてしまった。

「ああ〜！ごめんね！よしよし」

「ほら、いない、いない…ばあ〜!」

ソラとましろさんが必死にあやしているが、彼女は泣き止まない。

うーん…特に変な臭いがあるわけじゃないし、オムツではないか…なら、お腹が減ったのかもしれないな。

「もしかして、お腹が空いたんじゃないか? 粉ミルクとかないかな?」

「それだ(です)!!」

「あの、ましろさんのおばあさん…」

「ヨヨで良いわよ」

「じゃあ、ヨヨさん…粉ミルクとかあつたりしますか? まあ、流石にないとは思いますが、一応念のため」

「あるわよ」

「やっぱりないですよね〜…って、あるんですか!?!」

俺の質問にヨヨさんは頷くのだった。

—————

—————

—————

「…」

満足気な顔をしながら、プリンセスはミルクを飲み干す。

「とうか、この子の名前ってなんなんだろう？呼び名がないと大変だよな……うーん、とりあえずエルと呼ぼうかな？えるうってよく言ってるし。」

「けぷっ」

俺が呼び名を考えていると、ソラが彼女を抱っこしてゲップを出させてあげていた。

「ソラちゃん、上手だね！」

「家に年の離れた弟がいるので慣れてるんです！実は、ソウヤも上手なんですよ！」

「そうなんだ！」

「まあ、一応ね……何度かソラの家に参加されたことがあって、その時に一緒に弟君の面倒を見てたんだよ……大変だったけど……」

「そうなんですよ！ソウヤは赤ちゃんがどんな態勢でもオムツを替えられるし、ゲップを出させてあげるのも上手なんです！」

「それはすごいね……あつ！そういうえば、おばあちゃん……何で家に粉ミルクとマグがあるの？」

「オムツもあるわよ」

「ええ〜!？」

マジか……どんだけ準備してあるんだ。

「本当になんでそんなものが…」

「出会いに偶然はない…人と人がめぐり会うこと、それはいつだって必然、運命…物語の始まり」

「ん? 答えになつてないような…」

「あなた達の世界に戻る方法が見つかるまで、2階の空いている部屋を好きにお使いなさい」

「えっ、ちよつ!」

結局、質問に対する答えを出してくれないまま、ヨヨさんはどこかに行ってしまった。とはいえ、ありがたい申し出なのは間違いない。

俺は疑問を抱きながらも、ましろさんに案内されながら2階の空いている部屋へと向かうのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ふう…今日はすごい一日だったな…」

誘拐現場に行くわして、エルを助けるために豚の怪人を追いかけたら、異世界に迷い込んで…ソラがプリキュアに変身したりとか。

しかもこの世界、前世の俺が住んでいた世界と、ほとんど一緒っぽいし…もちろん、細かい違いはあるけど。

「ソウヤ君、入って大丈夫？」

案内された部屋のベッドで寛ぎながら、今日の出来事を思い返していると、ましろさんの声が聞こえてきた。

「大丈夫だよ」

「良かった…それじゃあ入るね」

そう言いながらましろさんは部屋へと入ってくる。

「ソラは？」

「秒速で寝ちやつた…まあ、無理もないよ」

「だな。ソラはめちやくちや頑張ってたし」

「ソウヤ君は大丈夫？疲れてない？」

「大丈夫。心配してくれてありがとう」

ましろさんの言葉にそう返す。

にしても、ましろさん、めちやくちや良い人だな…見ず知らずの俺達をここまで助けてくれるなんて。

「ましろさん、ホントにありがとう…この恩は必ず返すよ」

「ふふっ！」

「うん？なんか変なこと言ったか？」

「そういうことじゃなくて…ソラちゃんと同じこと言うんだなあって」

「あく…なるほど…確かにソラも同じこと言うか…」

「2人は本当に仲いいんだね！」

「まあね」

ソラとは長い付き合いだし、一緒に居る時が多かったからな…自然と仲良くなるというものだ。

「そういえば、会った時から気になってたんだけど、ソラちゃんとソウヤ君ってどんな関係なの？」

「…どんな関係か…まあ、いわゆる幼馴染ってやつだよ」

「幼馴染なんだ！確かに2人はお互いに通じ合っている感じするもんね！」

「通じ合っているかはわからないけど、まあそうだね…」

「やつぱりそうだよね！…そういえば、ソウヤ君はソラちゃんみたいにヒーローになりたいの？」

いつの間にか、俺の隣に座っていたましろさんにそう尋ねられる。

「そういや、ソラにも似たような質問されたな…そんなに気になるものなんだろうか？」

「いや、ヒーローにはなりたくないかな…」

「そうなんだ…でも、それにしても、それにしても人助けをしてるよね？」

「そりゃあ、目の前で困っていたり、危ない目に遭いそうな人を見て見ぬふりはできない
だろ…別にヒーローになりたいから人助けしてるわけじゃないし…誰だつてそうする、
普通のことだろ？」

「そつか…なんかカツコイイね！そういうの！」

ましろさんは笑顔を見せながら、そう言った。

「そうかな？まあ、そう言われて悪い気はしないけどさ…そういえば、何か手伝えること
ある？なんか…何もしないというのは申し訳ないっていうか」

「ソウヤ君は大丈夫だって言うけど、やっぱり疲れてるだろうし、ゆっくり休んで」

「本当に大丈夫なんだけどな…でも、ありがとう。お言葉に甘えさせてもらおうよ」

「うん！それじゃあ夕飯が出来たら呼びにくるね！」

ましろさんはそう言つて、部屋の外に出た。

「…とりあえず寝るか」

そうして、俺はベッドに寝転び、目を閉じる。

すると、想像以上に疲れていたのか、すぐに睡魔が襲ってくる。

そして、俺は深い眠りにつくのだった。

「ソウヤ君、夕飯出来たよ?…あれ?もしかして…」

ましろがソウヤの部屋に入ると、そこには眠っている彼の姿があった。

「やっぱり、疲れてたんだね…おやすみ、ソウヤ君」

そう言って、彼女はそつと部屋を出るのだった。

服を買いに行こう！

「はあ……やってしまった……」

ヨヨさんとましろさんが用意してくれた、朝食を目の前にしながら、そう口にする。

「ごめん、ましろさん……せっかく、夕飯を用意してくれたのに寝ちやってさ」

「良いよ良いよ。ソウヤ君も疲れてただろうし無理ないよ」

「ありがとう……よし、切り替えて……頂きます！」

朝食は、ご飯に味噌汁、鮭の塩焼きかな？後はほうれん草のおひたしに玉子焼き、きんぴらごぼうという素晴らしい朝食だった。

おっと、梅干しまである！すごいな……こんなに頂いて良いのだろうか？

「いや、ここで食わない方が失礼だな……さて、どこから頂こうかな？」

「うんま〜！何ですか？この魚！くさみがなくて歯ごたえプリプリ……甘みが口の中にブワーッと広がって、まるで目の前に大海原が広がるようですよ！」

「グルメリポーターかよ（かな？）」

「うん？ソウヤ君、グルメリポーターとか知ってるの？」

しまった！つい、勢いでツッコんでしまった……とりあえず、返事をしないと。

「えっ…まあ、知ってるけど…って、ソラ！それ梅干し！そのまま食べるとすっぱ…」

俺が注意するより先にソラが梅干しを食べ、顔をしかめていた。

「梅干しはまだ早かったかな…ん？あれ、また…」

「じゃあ俺はソラが美味しそうに食べてた鮭から頂こう…はむっ…うまつ！めちやくちや美味い！ソラみたいに食レポはできないけど本当に美味い！」

鮭を食べ、ご飯を口に運ぶ。ああ…美味い…まさかまたこんな風に鮭とご飯を食べられる日が来るとは。

味噌汁も美味しいし、本当に感謝しかないな。

「待って待って！ソウヤ君、詳しくくない？スカイランドにも同じものがあるの？」

俺が朝食を食べ進めていると、ましろさんからそんな質問をされる。

くっ…このまま何事もなかったかのように進めたかっただけど…ダメだったか。

「いえ、私は見たことがありますよ？ソウヤは物知りですね！」

「まあね…こう見えて、物知りなんだよ俺」

「いや、それは無理があるんじゃないかな…」

「…まあ、確かにね…とはいえ、説明しても信じてもらえないかわからないし、もう少し状況が落ち着いてから話すよ」

「わかった…ごめんね？問い詰めるみたいに聞いちゃって…」

「いや、こつちが話さなかったせいだから、ましろさんが気にすることじゃないよ……ごちそうさまでした！すごく美味しかった！ありがとう！」

「……ふふっ！どういたしまして！」

そうして、俺は食べ終わった食器を持っていった。

／＼／＼／＼／＼／＼／＼／

「昨日、襲ってきたやつ……えっと、ザブトンだっけ？カツドンだっけ？」

「大体そんな名前だったと思います！」

「いや、流石に違うだろ……確か……あれ？そういえば俺も知らないな」

朝食を食べ終わった後、エルをヨヨさんに預け、俺達は買い物に向かっていた。

ソラもあの子の呼び名を考えていたようで、まさかの俺の呼び名と同じ、エルちゃんという呼び名になった。

まあ、そんなこんなで買い物に向かったわけだ。

なんでも、昨日買い忘れたものを買に行くのと一緒に俺とソラの服を買ってくれるようだ。

本当に感謝しかないな……この恩はしっかりと返さないとな。

「まだこの辺に居るのかな……ばったり出くわしちゃったらどうしよう……」

「私が追い払います！」

「まあ、今のソラなら可能だろうけど…油断大敵だぞ？ちよつとした油断で足元を掬われかねないからな…」

「大丈夫ですよ！安心して私に任せて…」

ソラがそう言った直後、携帯の音が鳴り響き、ソラがびつくりした声を上げながら、思わず構えを取った。

「…任せても大丈夫かな？」

「うう…取り乱しました…ヒーローはたとえ火の中の水の中、どこであろうと冷静沈着でなければなりません！この世界の機械に驚くのはこれで最後です！」

ふんす！と意気込みながらソラはそう言い切った。

「スマホの着信音にびつくりしてるようじゃ先が思いやられるけどな…」

なにせ、この世界にはスカイランドにはないものがたくさんあるからな。

そんなことを思いながら目的地へと向かうと、案の定、ソラが驚きの声を上げた。

「た、建物の中に市場が!？」

「これはショッピングモールってやつだよ。ソラの言う通り、建物の中に市場があつて、食料品とか服、アクセサリ、後は本とか玩具、ゲームなんかも売つてたりするんだ」

「そうなんですか！ソウヤは本当に詳しいですね！」

「あはは…まあね。それじゃあましろさんを追いかけようか」

「ま、待つてくださいい！」

そう言いながら、ソラは俺の手を掴む。

「私、この場所に詳しくありませんし、迷ってしまいそうなので……て、手を握ってくださいませんか？」

ソラが上目遣いでそう言うってくる。

くっ……こんなの断られるわけないだろ……

「わかった。それじゃあ手を繋いで行こうか」

「はい！」

そう言うって嬉しそうに笑みを浮かべるソラを見ながら、ましろさんの後を追いかけるのだった。

「2人とも、早く〜！」

「ごめん、お待たせしちやって……」

「大丈夫だよ……あつ、ふふっ！2人は本当に仲が良いね！」

俺とソラが手を繋いでいるのを見て、ましろさんが笑みを浮かべながらそう言った。

なんかちよつと照れくさいな……ソラと手を繋ぐのは悪い気はしないけどさ。

そんなことを思いながら歩き始めると上へと向かうエスカレーターが目に入る。

「ソ、ソウヤ！あれ！あれは何ですか！階段が動いています！」

「あれはエスカレーターだな…自動で動く階段で、乗るだけで上の階へと行けるし、逆の上から下の階にも行けるんだ。まあ、初めて乗る時は緊張するけど、大丈夫だよ」

そう伝えながらソラの手を引き、エスカレーターに近づき、ソラがエスカレーターに上手く乗れるように誘導しながら乗った。

「すごいです！本当に動いてます！」

「落ちないように気をつけろよ」

「は、はい…」

そんなふうにはソラをエスコートしつつ、服屋へと向かう道中、今度は小さなロボットが現れ、ましろさんの元へと向かっていった。

「ソウヤー！今度は人形が動いてます！あれはなんだか怪しげです！ましろさんを助けにいかなければ！」

「待て待て、あれはお客様が道に迷ったり、行きたい場所がわからなかったりした時なにかに、あの人形…ロボットって言うんだけど、そいつに聞いたら教えてくれるんだよ…まあ、俺もあれはあんまり見たことないから、詳しいことはわからないけど」

「そうなんですか…怪しげな存在ですが、ましろさんに悪さをしようとしているわけはないんですね…」

「そうそう。だから安心して良いぞ」

そんなふうに会話をしていると、ましろさんがこちらに來た。

「2人共、お待たせ！今から案内するね！」

そうして、ましろさんに案内されながら、俺達は服屋に向けて歩を進めるのだった。

／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／

「うーん…俺はこの場に居て良いのだろうか？」

「全然大丈夫だよ！ソラちゃんもソウヤ君に見て欲しいって言ってたんだし！」

「まあ、それなら良いのかな？」

ましろさんに案内されて服屋に辿り着いたまでは良かったが、俺にはファッションはよくわからないし、ましろさんに服を選ぶのを任せて、自分の服を先に買ってこようと思っていたら、ソラに…

『ソウヤにも見てほしいです…それで、どれが一番似合っていたか教えてくれませんか？』

などと言われてしまい、断ることが出来なかった。

「ソラは普段から可愛いし、なに着ても似合いそうだけだな…」

全部似合っていた場合はどうしたものか…まあ、俺の主観で決めるしかないか。

そんなことを思っていると、ソラの小さなファッションショーが始まった。

まず、見せてくれたのはお嬢様学校の制服のような服装だった。

言わずもがな可愛いと思う…ただ、ソラのイメージとは合わないような気もする。

その次はセーラージャケット、その次はワンピースを着ていて、両方ともすごく似合っていた。

「ただ、どうにもしっくりこない…似合っているのにしっくりこないって変な感じが。」

そして、ワンピースの後は青のシャツにサスペンダーという服装で、これも似合っていて、今まで見た服装の中ではかなりソラに合っている気がした。

「そうして、次々と服装を見ていき、ようやく一番似合っていると思う格好が決まった。ソウヤ、どうでしたか？」

「どれも似合ってたよ…正直悩みどころだけど、俺はこの服装が一番好きかな？」

そうして、俺は今ソラが着ている服装を指差した。

その服装は白色と空色を基調とした袖口が広い長袖のTシャツとネイビーミニスカートの青のニーハイソックスにスニーカーという服装だった。

「今着ているこれですか？」

「そ。どれも似合っていたけど、この服装がソラに一番合ってるかなと…ソラらしさって言うのかな？ それを出しつつも、可愛くオシャレに仕上がってるなって思ってます」

「そ、そうですか？ えへへ！ 嬉しいです！ ましろさん、この服、買った後にそのまま着て

いくことつて出来ますか？」

「出来るよ！じゃあこれを着て行こっか！」

「はい！」

「えっ、ちよ…自分で言っておいてあれだけどそれで良いのか？」

「もちろんです！これが良いんです…ソウヤが選んでくれたこの服が」

そう言いながら、ソラは微笑みを浮かべる。

「そうなのか？まあ、ソラがそれで良いのなら構わないけど」

そうして、俺は少し照れくささを覚えながら、会計に向かうソラ達に視線を移すのだった。

ソラのヒーロー

「ふふっ！どうですか？似合ってますか？」

「うん！似合ってるよ！ソウヤ君も似合ってるって言ってくれて良かったね！」

「はい！ふふふ！」

「ソウヤ君はどんな格好するんだろう…男の子がどんな格好が好きなのかわかんないしなあ…」

「ソウヤの服も一緒に選びたかったですけど、私達では力になれそうにないですからね…ここで待つしかなさそうです」

服を買い終えた後、ソウヤは自分の服を選んでくるから、待っててと言って、服を選びに行ってしまうました。

最初はソウヤに付いていこうと思っていたのですが、私はましろさんに教えてもらうまでジャージ以外の選択肢がなかったですし、ましろさんも男の子の服については詳しくないということで、結局ソウヤが一人で選ぶことに…

「…ねえ、聞いても良い？」

「うん？」

「ソラちゃんは、どうしてそんなにまでして、ヒーローになりたいって思ったの?」
「…本物のヒーローを見てしまったから…でしょうか」

ましろさんの質問にそう返しながら、あの日のことを思い出す。

「小さい頃、行つてはいけなと言われていた森に迷い込んでしまったことがあつて…
その時、ソウヤが助けに来てくれたんです」

「ソウヤ君が?」

「はい。私と年は変わらないのに、怖かったはずなのに、私のことを放っておけなかったから…助けたかったから…」

「うん…確かにソウヤ君なら言いそうだね」

「でしょう?その後、私達を助けてくれた恩人のおかげで2人共無事に脱出できたんですが…その時まで、ずっと私の手を握つてくれて、『大丈夫!怖くないよ…一緒にお家に帰ろう!』と言つて、ずっと励ましてくれていたんです」

あの時、ソウヤの励ましにどれだけ助けられたか…一緒に居てくれて、どれだけ安心したか。

きつと、ソウヤは何でもないことのように思っているんですけど、私にはそれがとても嬉しかった。

「あの時から、私にとつてのヒーローはソウヤで、目指すべき目標になったんです…私も

ソウヤみたいになりたい……彼の力になりたい……私を助けてくれたように、今度は私が助けるんだって……その為に毎日トレーニングして、ヒーロー手帳をつけて……」

「ヒーロー手帳……あの手帳、本当に大切なものだったんだね……」

「はい……まあ、手帳にはソウヤならこうするだろうなあ……って想像しながら、書いたものも多くて……それがバレずに済んだのは不幸中の幸いと言えるかもしれない……」

「ソラちゃん……」

「助けてくれええ！」

助けを呼ぶ声が聞こえて振り返ると、昨日襲ってきた怪人の姿があった。

「ただだきまーす……うめええ！パワーが漲ってくるのねん！……これだけ食べれば……ん？

お、お前らー！」

「ぎ、ザブトン……！」

「ザブトンじゃないのねん！……カ！バ！ト！ン！……」

「しよこりもなくまた悪いことを！許しませんよ！カツドン！」

「カバトンだって言ってるんだろ！わざとか！……ええい！あのガキンチョはどこだ！」

「まだエルちゃんのことを諦めてなかったんですか！」

「……ここにエルちゃんがいなくて良かったです……エルちゃんが居たら、カツドンはすぐにエルちゃんを狙ってきたでしょうし。」

「フン…まあ良い、昨日のお礼をするのが先だ…ボツコボコにして、それからネチネチと聞き出してやるのねん！カモン！アンダーグ…」

「ていつ！」

怪人が昨日と同じように怪物を呼び出そうとした瞬間、私達のよく知る人物が怪人を蹴り飛ばした。

「ソウヤ！」

「よくわかんないけど、またこいつが悪さしたってことでオーケー？」

「よくわかんないけど、またこいつが悪さしたってことでオーケー？」

服屋で、白のTシャツに薄手の黒のパーカー、そして青色のジーンズに黒のスニーカーという格好をし、ソラ達の元へと帰ろうとしたところで助けを呼ぶ声が聞こえて駆け寄った。

そしたら、例の怪人…カバトンって名乗ってたな…まあ、ともかくそいつが居たのでそのまま蹴り飛ばした。

「ソウヤ！…似合ってますよ！その格好！」

「ありがとう。嬉しいけど、今はそれどころじゃないかな?」

「お前…!もう許さないのねん!カモン!アンダーグエナジー!」

そうして、カバトンによって自動販売機のランボーグが現れた。

うーん、ランボーグが現れる前に蹴っ飛ばしても、結局出てくるのか。

そんなことを思いながら距離を取り、ソラ達の所に向かう。

辺りを見渡すと避難できていない人が何人かいる…幸いにもあいつの狙いは俺達つ

ぼいし、引き付けるだけ引き付けるか。

「さて、とりあえずやるだけやるか」

そう口にして、自販機のランボーグに接近する。

すると、自販機の取り出し口のような場所からペットボトル状のミサイルが飛んできた。

「マジ!?やっぱ!」

そう叫びつつ、攻撃を回避し、懐に潜り込み、試しに蹴りを入れてみる。

「…思ったより硬いな…なら、攻撃が通じる方法を探してみるか」

そうして、俺はランボーグの周囲を駆けるのだった。

////
////
////
////
////
////

「やっぱソウヤはすごいです…」

ソウヤはあの怪物が出てきても、なんの躊躇もなく動き出していた。

今も生身で勝てる方法を考えて、そこには諦めの意思を微塵も感じさせない強い瞳があった。

「ソラちゃん……」

「未熟です……憧れのヒーローにはまだ遠い……それでも今は！ヒーローの出番です！」

「無限に広がる青い空！キュアスカイ！」

「よしっ……！ソラ！まずはましろさんを安全な所へ！」

プリキュアに変身した直後、ソウヤの声が聞こえてくる。

「はいー！」

その声に答え、ましろさんを抱え、建物の屋上に飛ぶ。

「出たな！プリキュア！」

カバトンのそんな叫びを聞きつつ、ソウヤに視線を移す。

ソウヤはランボーグの攻撃をひたすら回避しつつ、何かを待っているようでした。

そして、笑みを浮かべたかと思うと、ランボーグがバランスを崩し倒れ込みました。

「どうなってるのねん!？」

「あれは…!なるほど!そういうことでしたか…流石はソウヤです!」

ソウヤはただ回避していたわけではなく、相手の攻撃によってデコボコになった地面に相手を誘導し、相手が攻撃をしようとした瞬間にバランスを崩すように仕組んだのでしよう。

今なら!

「ソラちゃん、気をつけてね?」

「…!はい!」

ましろさんの言葉を受け、私は下へ飛び降りる。

そして、そのままの勢いでランボーグに向かって攻撃を仕掛ける。

「ヒーローガール!スカイパンチ!」

「スマキツタ〜」

「ランボーグが消えたか…俺も少しは役に立ったかな?」

／／／／／／／／／／／／／／

「さて、カバトンも逃げ出したみたいだし、帰るとするか」

そんなことを言っていると、ましろさんがソラの手をひきながら、俺のところに来てきた。

「ソウヤ君も来て！」

「え？まあ、それは全然良いけど」

俺の手も引つ張つていき、ましろさんは走り出した。

そうして、しばらく走っているとましろさんが店に入つていった。

「あー良かったー！まだ売り切れてなかった！」

そう言つて、ましろさんが手にしたのは一冊の可愛い手帳だった。

ああ、なるほど…そういうことか。

本当にましろさんは優しい人だな。

「これ、ヒーロー手帳の代わりにならないかな？」

やっぱりましろさんはソラのために手帳をプレゼントしてくれるつもりらしい。

ソラにとつて、あの手帳は大切なものだったから。

同じものは用意できないけど、せめてその代わりに、ということだと思う。

そんなましろさんの優しさに、罪悪感が襲ってくる。

俺がもつと早く取り戻していれば…そもそも、ソラの手帳が向こうに飛んでいくのを

防いでいれば良かったのに、と。

そうすれば、ましろさんが気を遣わなくても…いや、こんな風に思うのはましろさん

に対して失礼か。

「これ、可愛いでしょ？発売前から事前に情報チェックして、おこづかい貯めてたんだ！
…でも、今これが必要なのは私じゃなくてソラちゃんって気がするから！…ねっ？プレゼントさせて！」

「ダメです！もらえません！」

「…良いんじゃないか？ましろさんがソラにプレゼントしたいって言うてるんだし」

「ソウヤ君の言う通りだよ！だから、ね？」

「どうして、そこまで…」

「本物のヒーローを見ちゃったから…かな？」

「…ふふっ、ありがとうございます！ましろさん…この手帳、大切にに使わせていただきますね！」

そうして、ソラは笑みを浮かべながらましろさんからのプレゼントを受け取るのだった。

シクシクホームシツクな2人

「何か出来ることないかな…と、ましろさんが誰かとビデオ通話をしてる？」

何か手伝えることがないかと下に降りてみると、ましろさんがビデオ通話をしている姿が目に入った。

「や、やめてよ。パパ…もう子供じゃないんだから」

パパ？ご両親と通話してるのか…なら、邪魔しちゃ悪いな。

そう考えて、住まわせてもらっている部屋へと踵を返す。

そういえば、ましろさんのご両親ってどんな方達なんだろう…まあ、ましろさんのこのを見ると良い両親なのは間違いなさそうだけど。

「両親か…」

『■■■■…誰かが困っていたり、危険な目に遭いそうだったら、助けてあげてね』

『■■■■…この世界はいろんな善意で作られているんだ。誰かが誰かを助け、助けられた人がまた誰かを助ける…そうやって善意の輪が広がって、少しずつ世界が作られていくんだ…わからないか…まあ、■■■■はまだ小さいからわからないかもしれないね…でも、いずれわかる時が来るさ』

今では顔も名前も思い出せない前世の両親の言葉が頭に過る。

そういえば、俺が亡くなった後、どうなったんだろうか…今ではもう確認することもできないから両親の幸せを願うしかできないが。

「はあ…なんか色々と考え込んでしまったな…切り替え！切り替え！」

そう言いながら、俺は部屋へと戻るのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ソウヤ…起きてください！ソウヤ！」

「ん…あれ？ソラか…どうかしたか？…って！やばっ、寝ちゃってたか…それで、どうかしたのか？」

「実は…」

そうして、ソラがここに来るまでの出来事を話してくれた。

—

—

「えっ!?!ヨヨさんって、スカイランド人だったの!?!それで、ミラーパッド？を使って、エルちゃんの両親の顔を見せてあげたいと…というか、この家の裏山にスカイジュエルまであるとかどういふことだ？」

じよ、情報量が多い…と、とりあえずまとめると…

・エルちゃんが泣き止まず、ましろさんが両親に会いたいのでは？と気付き、エルちゃんもそれに頷く。

・元の世界に帰る方法がわかってないから、直接会わせることは出来ないけど、せめて両親の顔だけでも見せられないかと考えているとヨヨさんがミラーパッドというスカイランドと連絡を取れるアイテムを用意してくれる。

・そこでヨヨさんがスカイランド人とカミングアウト、しかし、スカイランドと連絡を取るにはエネルギーが足りない…そこで、スカイランドの鉱物であるスカイジュエルを探すことに。

・そして、スカイジュエルがこの家の裏山にあるから取りに行こう！

・しかも、時間は掛かるが、俺達が元の世界に戻る方法もあるらしい。

まあ、大体こんな感じか。

「…オーケー、理解した。それじゃあエルのためにもスカイジュエルを探しに行こう！ソラのペンが場所を教えてくれるんだよな？」

「はい！そうみたいです！」

「よし、それじゃあ出発だ！」

そうして、俺達は裏山へと向かうのだった。



「まさか、おばあちゃんがスカイランド人だったなんて…」

「ということは、ましろさんもちよつとだけスカイランド人ってことですよね！」

「まあ、所謂クォーターってやつだろうし、その通りだな」

そんな会話を交わしながら、裏山を進んでいく。

ちなみにエルも一緒に居る。

少しは元気になってくれれば良いんだけど。

「ヨヨさんの言う通り、私達が出会ったのは運命かもしれないですね！」

「ふふっ！そうだね！」

「運命か…」

「ソウヤはそう思わないんですか？」

「いや、俺もそう思うよ…俺もこの世界とまったく関係がないわけじゃないし…運命だ

と思う」

「それはどういう…」

「えう〜…！」

ソラが言葉を紡ぐ前に、エルが泣き始めた。

やつぱり、両親に会えなくて不安なんだろうか…なにか喜んでくれそうなのは…

おっ、あれなんか良いかもしれないな。

そして、近くにある、まだ綿が飛んでいないタンポポの花を手取る。

「あつ、ソウヤ君もそれをエルちゃんに?」

「そう、まだ綿があるタンポポなら、あれが出来るし…エルも喜んでくれるかなと」

「私もおんなじこと考えてた!」

「そうか…じゃあこれはましろさんをお願いしようかな」

「えっ…いや、それは良いけど…ソウヤ君がしなくて良いの?」

「うん…ましろさんの方が絵になりそうだし、なにより、久しぶりに綿が飛んでいくのを見たくてさ」

「そっか…わかった!任せろ!」

そうして、ましろさんはエルにタンポポを見せ、そこからふうーつと息を吹き、タンポポの綿が飛んでいく。

ああ…小さい頃、よくやったな…ふわーつと、どこまでも飛んでいく綿を見るのが好きで、よくやったものだ。

「ソウヤ!?だ、大丈夫ですか?」

「大丈夫って、なにが?」

「だってソウヤ…泣いてますよ?」

「えっ……！」

慌てて目の近くに触れると、確かに濡れていた。

「ご、ごめん……！なんでだろうな……なんか急に涙が……」

「どど、どうしましょう!? なにかソウヤを元気づけられそうなもの……あつ！あれなら！」
そうして、ソラが持つてこようとしたのはいかにも毒キノコな見た目をしたキノコだった。

もちろん、それはましろさんによつて止められ、山には危険な植物もあるから、よくわからないものは、むやみに触らないようにと注意されていた。

俺はそんな2人を見ながら、自分でも涙が出ていたことに驚きを隠せずにいる。

「……うくん！本当にフワフワで美味しいな！ましろさんの作ってくれたパン……ソラがプ口級だつていうのも納得だ」

エルがお腹を空かせていたため、休憩しようとしてましろさんが提案し、今は絶賛休憩中だ。

まあ、俺に気を使ってくれたというのもあるんだと思う……まさか、急に涙が出てくる

とは…前世のことを久しぶりに思い出したせいかなセンチメンタルな気分になってるんだな…きつと。

「名付けて、くもパンだよ！空の雲をイメージして焼いてみたんだ！」

「そっか…確かに雲みたいだな」

「喜んでもらえて良かった！…ねえ、ソウヤ君…さつき泣いていた理由、良かったら教えてもらえないかな？も、もちろん嫌だったら話さなくても良いよ！」

「ありがとう。でも、誤魔化したら気になっちゃうだろうし、話すよ…まあ、信じてもらえるかはわからないけど」

そうして、俺は言葉を紡ぐ。

「実は、俺には前世の記憶があるんだ…」

「前世？」

ソラが首を傾げながらそう呟く。

「所謂、転生だっけ？人は死んだら生まれ変わるっていう…確か、クラスの子が異世界転生がどうか話してたのを聞いたことがあるような…」

「うん、多分そうかな…俺は転生したみたいでさ、前世の記憶があるんだ…しかも、俺が前世で生きていた世界はこの世界にそっくりなんだ。ソラと一緒にこの世界に来た時は驚きよりも、懐かしいという気持ちが強かったよ」

「そっか…だからソウヤ君はこの世界に詳しくかったんだ」

ましろさんの言葉に俺は頷く。

「私にはよくわかりませんが…つまり、ソウヤはちよつとだけこの世界の人つてことですか?」

「その通りだ…だから、ヨヨさんの言う通り、俺達が出会ったのは多分運命なんだろうな」

スカイランド人のソラにクォーターのましろさん、前世でこの世界に似ている世界で生き、転生してスカイランドで育った俺。

正直、運命という言葉が一番しっくりくる。

「まあ、俺の話を通じてもらえるかはわかんないけど」

「信じるよ!スカイランドだってあるんだし、前世の記憶を持つてる人が居ても不思議じゃないよ!」

「私も信じます!ソウヤが前世?の記憶を持っていたとしても、ソウヤはソウヤです!何も変わりません!」

「えるう!」

ソラもましろさんも、後多分エルも…みんな、信じてくれたみたいだ。

「ありがとう、みんな…まあ、それでちよつと前世の記憶を思い出して泣いちゃったんだ

よ…心配かけてごめん」

「いえ…話してくれてありがとうございます。また悲しくなったら言ってくださいね！
大したことは出来ませんが、抱きしめるぐらいは出来るので！」

「あはは…その時はお願いするよ」

「はい！」

そう言って、満面の笑みを浮かべるソラを見ながら、俺は自分の心が少し軽くなるのを感じるのだった。

スカイジュエルを探そう!

「おばあちゃんが言っていたのはこの川だけど…」

休憩が終わった後、俺達はスカイジュエルがある川の近くにやってきていた。

「さあ、宝探しの時間です!」

「うん、そうだな! さて、どこにあるかな… って、なんだこれ!?!」

ふと、辺りを見渡すと、いくつもの大きな石が奇跡的なバランスで重なっていて、オブリエのようになっている石があった。

「すごい…! 誰がなんのめに…」

「さあ、それは謎だけど… これ、少しの衝撃で崩れちゃいそうだな」

俺がそう口にした瞬間。

「へくしっ!」

エルがくしやみをした。

「あっ…」

ソラとましろさんの声が重なる。

そして、エルのくしやみのせいかな、奇跡的なバランスで重なっていた石が崩れた。

「まじか…」

「える…」

俺達はみんな唾然としながらそれを見ていた。

くしやみで崩れるとか、どれだけギリギリのバランスだったんだ…

「あはは…とりあえず、他の所を探してみよう」

あの石を重ねていた人には申し訳ないが、俺達が来なくてもいずれは崩れていただろう。

そんなことを思いながら、辺りを見渡すと大玉ぐらいのとても大きな岩があった。

にしても、でかいな…あんな大きさの岩とか鬼○の刃ぐらいでしか見たことないぞ…

まあ、俺が知らないだけで他の漫画にもあるとは思うけど。

「でつかいな…なんだこの岩…」

「そうだね…まさかこの中にあるとか？…なくんて」

「やってみましょう！」

「えっ…！」

ましろさんと声が重なる。

なにを言い出してるんだ…まあ、確かにあれを使えば岩を砕くぐらいは出来るだろうけど。

そんなことを考えていると、ソラが岩の前に立つ。

そして構えを取り、まるで拳法のような動きを始める。

まあ、今からソラがやろうとしているのは紛れもない拳法なんだが。

「ソウヤ君、ソラちゃんは何をやってるの?」

「あれはスカイランド神拳だよ」

「ス、スカイランド神拳って?」

「スカイランド神拳は、スカイランドに古くから伝わる拳法でさ、あの岩ぐらいなら普通に壊せる。一応、俺も使えるよ…ただ…」

ソラを見ながら、更に言葉が続ける。

「あの通り、溜め動作が長いから、実戦じゃほとんど使えないんだよね」

そんなことを話していると、ソラが真つ二つに岩を砕いていた。

その様に思わず拍手する。

「本当に割れた!」

「うん…やっぱり決まると強いよなあ…あの長い溜め動作なしで使えればな…つて、化石がある!しかもこれアンモナイトじゃん!おお、すげー!本物だ!」

ソラが割った岩の中にアンモナイトの化石があり、思わずテンションが上がる。

前世でも凶鑑とかテレビでしか見たことなかったから、本物をこうして実際に見るこ

とが出来たのは素直に嬉しい。

「押忍！」

「いや、確かにお宝だけど…」

「いやいや、ましろさん！これアンモナイトだよ!?めっちゃお宝だよ！どうにか持って帰れないかな？化石発掘の道具とか持ってきてきてないんだけど…」

「ソウヤ君のあんな楽しそうな顔、初めて見たかも…」

「そうですね…私もソウヤのあんな顔は初めて見ます」

「木の枝とかで出来るかな？いや、さすがに無理があるし化石を傷つけるわけにもいかないよな…」

「ふふっ！ましろさん、スカイジュエルはひとまず私達で探しましょうか！」

「うん！そうだね！」

／／／／／／／／／／／／／／／／

「あ、ありました！ソウヤ〜！スカイジュエルありましたよ！」

ソラの言葉が聞こえ、そちらに視線を移す。

しまった、思いの外夢中になりすぎていたみたいだ。

そうして、俺はソラ達の元へと駆け寄る。

「ごめん、ごめん…ついつい夢中になっちゃってた」

「大丈夫ですよ！むしろ、ソウヤの新しい一面を見られて嬉しかったです！」

「ソウヤ君、すごく目をキラキラさせてたもんね！写真撮っておけば良かったかな？」
「それはやめてくれ」

そんな会話をしていると、何かが崩れる音が聞こえ、思わず振り返る。

「びっくりして崩れちゃったじゃねえか！どうしてくれるのねん！」

そこには、見覚えがあるやつが居た。

「お前ら……！」

「あなたは……」

「カバピョン！」

「カーバ！ト！ン！なのねん！いい加減覚えろつつうの！」

「え……毎回やるの？この流れ……」

もはや様式美になりそうな、ソラの名前間違いにそう呟きつつ、エルとましろさんを庇うように前に出る。

「まあ、それはさておき……ましろさん達は隠れてくれ……こいつの狙いはエルだろうから」
「ソウヤの言う通りです！ここは私達に任せてください！」

「相変わらず威勢の良いやつらなのねん！まあ良い、今度こそプリンセスを頂くのねん！カモン！アンダーグエナジー！」

そして、筍のランボーグが姿を現した。

「さて、やりますか……」

「はい！ヒーローの番です！」

「無限に広がる青い空！キュアスカイ！」

「それじゃあ行くか！」

そうして、構えを取って踏み込むとランボーグが攻撃をしかける。

ランボーグが地面に拳を叩きつけ、地面から無数の筍が槍のように出現し、こちらに向かってきた。

「うわっ！危な！」

スカイと俺はバク転しながらそれを避けていく。

そして、避けきり、俺は近くの竹藪に転がり込む。

スカイは岩の上に飛び乗るが、その岩が破壊されてしまった。

「うわっ！すごいパワー……！」

そうして空中に跳びつつ、スカイは空中からキックをするフリをして、そのまま懐に

潜り込み、そのまま拳をぶつける。

「はぁーっ!」

そして、ランボーグが吹っ飛んでいった。

だが、そのままでは終わらず、筒状のミサイルが飛んできた。

いくつかのミサイルはスカイがすべて躲けていたため、スカイ自身にダメージはなかったが、1つのミサイルがましろさん達に飛んでいく。

「まっずっ!」

筒状のミサイルがましろさん達の所に飛んでいくのが目に入った瞬間、すぐに走りだす。

そして、そのままミサイルがぶつかる前に蹴り返して、ランボーグにぶつける。

そして、ランボーグはバランスを崩して倒れた。

「ふう…ギリギリセーフ…スカイ、後は任せた!」

「はい!」

そう返事をしながらスカイは必殺技の構えをとる。

「ヒーローガール!スカイパンチ!」

「スキキッタ」

スカイの必殺技がランボーグに命中し、そのままランボーグが消えていった。

「ランボーグが消えたか…ましろさん！エル！怪我はないか？」

「うん…ソウヤ君が助けてくれたから平気だよ！ありがとう！」

「える！」

「そつか…それは良かった」

そう伝えて、カバトンとスカイに視線を移す。

すると、カバトンがさきほど見かけた毒キノコを食べていた。

「あいつ、何やってんの…」

「うま、うま！これでパワー全開なのねん！いくぜ〜！」

「ええ〜！まさかの2回目ですか!？」

2回目…だとしたら厄介だな！

そうして、すぐに臨戦態勢を取る。

「カモン！アンダーグ…イテテテ」

そして、ランボーグを出そうとして、カバトンは急にお腹を押さえ出した。

「あんなの食べるからそうなるんだ…まあ、戦わずに済みそうだし助かるけど」

「もう！山にあるものをむやみにとったり、食べたりしちやダメなんですよ！めっ！」

「覚えてろ！カバトントン」

そう捨て台詞を吐きながら、カバトンは姿を消した。

「ソラ、お疲れ様！」

変身を解いたソラに労いの言葉を掛ける。

にしても、戦いはまだまだ続きそうだな…今の俺ではランボーグを倒すことはできないし…何かしら俺自身を強化する方法を考えないとな。

「ソウヤこそ、お疲れ様でした！ましろさんとエルちゃんを守ってくれてありがとうございます！」

「どういたしました…それじゃあ、ヨヨさんに報告しに戻ろうか」

そうして、俺達はましろさんの家に戻るのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／

「エルが両親の顔を見れて良かった…これで、少しは安心できたかな？」

家に帰った後、すぐにスカイランドと通信をし、エルに両親の顔を見せてあげることが出来た。

エルの両親と通信してわかったのだが、どうやらエルの名前はエルで合っていたらしい。

しかも両親は王様と王妃様だったから、本当にプリンセスだったのだ。

カバトンがプリンセスと言っていたのはそういうことだったわけだ。

そういうえば、王様達がヨヨさんのことをハイパースゴスグレジエンド名誉博学者だっ

たかな？まあ、ともかく謎の二つ名を口にしていたわけだが、あれは誰がつけたんだろ
うか？

流石にネーミングセンスがあれすぎる気が…いやまあ、それだけヨヨさんがスカイラ
ンドで有名な博学者だったってことなんだろうけど。

「うん？あれはソラとましろさんか？何話してるんだろう？」

ソラとましろさんが何やら話しているのが見え、思わず近づきそうになる。

とはいえ、流石に話に割って入るのは無粋だよな…盗み聞きするのも忍びないし、部
屋に戻るとするか。

そんなことを考えながら俺は部屋へと戻るのだった。

「ソラちゃんは寂しくないの？両親に会えないのはソラちゃんも同じなのに…」

「私は大丈夫です。私にはやらなければならぬこともありますし…それに、ソウヤの
悲しみに比べれば、これぐらいは平気です」

「そつか…ソウヤ君は前世の両親には二度と会えないもんね…それなのに思い出だけは
残ってるんだもん…きつと辛いよね…」

「はい…でも、今のソウヤには私やましろさんが居ますから、きっと大丈夫ですよ！いえ、私が絶対にソウヤを悲しませたりなんかしません！毎朝、ソウヤを起こしにいきますし、四六時中傍にいます！どこに行くのにもついて行って、ソウヤが悲しい顔をしないように抱きしめますし、ソウヤの障害になるものはすべて倒します！」

「ソラちゃん…それは流石に重いんじゃない？でも、それだけソウヤ君のことが大好きなことだよね」

「はい！大好きです！誰にも渡したくないぐらいに…」

「うーん…やっぱり重いなあ…」

（多分大変だろうけど…ファイトだよ！ソウヤ君！）

あげはさんがやってきた！

「はっ…はっ…はっ」

「まさか朝っぱらからランニングすることになるとは…」

「ふ…2人とも…待って…」

「ましろさんはゆつくりで良いよ…自分のペースで大丈夫」

後ろから走ってきているましろさんにそう伝えながら、走り続ける。

朝にいきなりソラが俺を起こしに来て、ランニングをすることになり、ましろさんも一緒に走り込むことになった。

ただ、朝のソラはどこか変だった。

『ソウヤー！もう安心ですよ！これからは毎朝私が起こしに来ますし、必要なら夜も一緒に寝ますから！』

『えっ？なに、どうしたの？』

『どこかに行く時は言ってくださいね? 私もお供します! 困ったことがあったら私に相談してください! ソウヤの障害は私がすべて排除しますから!』

『なになに! 急にどうしたの! ましろさん、何か知らない?』

状況がわからず、ましろさんに尋ねる。

ただ、ましろさんはその質問に答えてはくれず、ただ親指を立て、『ファイトだよ! ソウヤ君!』としか言ってくれなかった。

『ええ...? まあ、それは一旦置いといて... 2人は何でジャージ着てるの?』

『今から2人でランニングをしていくんです! ソウヤも一緒に行きましょう!』

『俺も? それは良いけど... ちょっと待ってて着替えるから!』

『はい!』

そう言つて、部屋から出るかと思えば、ソラは何故かその場から動かなかつた。

『あのく何でこの部屋に居たままなんだ... 着替えられないんだけど...』

『四六時中ソウヤの傍に居ると決めましたから!』

『うん... 着替えは1人でしたいかな』

いや、今思い返しても謎すぎるな…何だったんだ？本当に…

あの後、ましろさんがソラを外に連れて行ってくれたおかげで事無きを得たけど、それがなかったらそのまま居座るつもりだったのだろうか？

いや、まさかね？

そんなことを考えていると、朝日が登るのが目に入った。

街を照らしながら登る朝日はとても幻想的で、思わず目を奪われた。

「おはようございますー！」

ソラが元気よく朝日に向かって挨拶をする。

俺もそれに続いて挨拶をしようとする、後ろから疲れ切った声で俺達を呼ぶましろさんの声が聞こえて、振り返る。

そこには頼りない足取りで、こちらに走ってきているましろさんの姿があった。

「ちよつ、ましろさん！大丈夫か？」

「み、見ての通りだよ…」

「ハトハトつてことね…了解、とりあえずそのベンチに座って」

「そうするよ…」

「ソラも疲れただろ？ベンチで少し休憩しよう」

「そうですね…休憩しましょう！」

そして、ソラとましろさんをベンチに座らせ、俺はベンチの後ろに立った。

「ソウヤは座らないんですか?」

「うん、俺は大丈夫。そういえば、ソラはともかく、ましろさんはなんでランニングすることにしたの?」

「ランニングして体を鍛えたら、もうちよつと、2人の役に立てるかなって…でも、千里の道も一歩からだからね」

「まあ、確かに…いきなり強くなれるわけでもないし」

「?ましろさん、今の言葉は何ていう意味なんですか?」

ソラがましろさんにそう尋ねる。

そうか、俺は意味を知ってるけど、ソラは知らないもんな…今度、俺の知っている限りのことわざとか教えるのもありかもな。

「毎日コツコツ頑張らなきゃダメってこと!」

「良い言葉です…」

そう言いながら、ソラはおもむろに手帳を取り出し、さっきの言葉を書き始める。

それはスカイランドの文字ではなく、こちらの世界の文字だった。

「ええっ!?!いつの間に覚えたの?」

「1日5文字ずつ、毎日コツコツです!最近ソウヤにも手伝ってもらってるんですよ」

！」

「そうなんだ！」

「うん、ちよつとね…2人には転生者だって話してるから、わざわざ隠す理由もないし」
おかげで、以前に比べて大分心が軽くなった。

ホント、ソラとましろさんには感謝しかない。

「私も毎朝ランニングしたら、2人みたいに強くなれるかな？」

ましろさんの質問に、ソラが首を横に振って答える。

「そうだよね…」

「いいえ、そうではなく…ましろさんは、今のましろさんのままで良いんです…」

「そうだな…俺もましろさんは今のましろさんのままで良いと思うよ？それに、強さというのは何も肉体に対してのみ使う言葉じゃないからね…もちろん、ましろさん自身が変わろうと努力するのを否定したりはしないけど」

強さは何も肉体に対してだけじゃなく、精神的な部分にも使うからな…某超高校級の希望のメンタルの強さとか。

ましろさんの場合は優しさという強さだ…それを本人が気づいていないだけで、ましろさんはとても強い人だ。

俺がそんなことを考えていると、ぐううぐうというお腹が鳴る音が聞こえてくる。

「あつ……!」

恥ずかしそうにソラがそう口にする。

どうやら、音の主はソラだったようだ。

「…俺もお腹が空いているし、そろそろ戻ろうか」

「そうだね!」

「はい! 行きましょう!」

そうして、俺とましろさんはソラに手を引かれながら家へと帰るのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「平和だなくまあ、平和なのは良いことか…」

家に帰って、のんびりしていると、突如としてインターホンの音が響く。

「こんな朝から誰だろう?」

「私が出ます!」

そう言いながら、ソラが玄関へと向かう。

「誰なんだろうな…ましろさんは心当たりとかある?」

「うーん…心当たりってほどじゃないけど、小さい頃に引越しちゃった友達が居るん

だ…もし、その友達だったら嬉しいな」

「そっか…うん? なんか騒がしいな…ちよつと見に行くか」

「そうだね、行ってみよ！」

そうして、玄関に様子を見に行くと、長い茶髪の女性とソラが居た。

「あげはちゃん！」

「ましろん！久し…ぶり!?ちよつとちよつと！ましろん、この男の子は誰!?もしかして、ましろんの彼氏!?!」

「ち、ちが「違います！ソウヤは私の幼馴染です！」ソラちゃん!?!」

ましろさんの言葉を遮り、ソラは俺に抱きつく。

「あ、そうだったんだ！ごめんね、ちよつとびっくりしちやった」

「いえ、俺も同じ立場だったらびっくりしたと思うので、気にしてないです」

実際、俺も友達の家に行つて、異性が一緒に居たらびっくりするだろう…しかも、知らない人だったら尚更だ。

俺も多分…お前、いつの間に恋人できたの!?!つて聞くと思う。

「ところで、あげはちゃんは どうしてここに?」

「ちよつとこつちに用事があつてね」

「それで…どちら様ですか?」

ソラが俺の腕に抱きつきながら、威嚇するように客人の女性を睨みつける。

「あれ?私、嫌われちゃった?」

「あはは……と、とにかく中で話そっか?」

「なるほど……そんなことが……じゃあ、ましろさんが言ってた小さい頃に引つ越した友達達って、あげはさんのことだったのか」

とりあえず、自己紹介?のようなのをしようとする、突然、あげはさんが紙芝居のようにタブレットに書かれていた絵を流しながら話し始めた時は驚いた。

とはいえ、ざっくりと内容は理解できた。

ましろさん達がまだ小さい頃、2人は仲良く過ごしていた……だが、ある日あげはさんの引つ越しが決まり、ましろさんと仲が良かったあげはさんは泣きながら家を出ていったらしい。

まあ、その先の話はまだ語られていないから気になるが、今は手短かに済ませてもらった方が良さそう。

さつきからソラが腕に抱きついていて力が強くて、しんどいし!

「先の展開は気になりますけど、とりあえず手短かに自己紹介を済ませませんか?」

「だね……オホン、私は、聖あげは!・18歳!・血液型はB、誕生石はペリドット!・ラッ

キーカラーはベイビーピンク！最近のブームはイングリッシュユティー・ラテ・ウイズ・ホワイトチョコレート・アド・エクストラホイップ！はい！そっちのターン！」

「えっと、俺はソウヤと言います。俺の腕に抱きついているのがソラで、ソラが抱っこしている赤ちゃんはエルです。訳あって、ましろさんのお家でお世話になってます」

「…もしかして、結構複雑な感じだったりする？」

何を思ったのか、あげはさんはそう尋ねる。

なんか、とんでもない勘違いをされてる気がする…

「いや、多分あげはさんが思っているようなことじゃないですよ…エルは知り合いの人に頼まれて俺達で預かっているだけで、やましいこととかは何もないです」

「そっか！なら、安心だね！そういえば、ソウヤ君達はこの街の人？」

「…うーん、なんと説明したのか…俺達は遠い国の人間なんですけど、その国でクードターの的なことが起こって、その時にエルを知人から託されて、この街までやってきたんです」

すべてが嘘ではない…実際、カバトンがプリンセスであるエルを誘拐したし、前にスカイランドと通信をした時に王様達からエルを任されたのも事実だからな。

「そうだったんだ…大変だったね…ソウヤ君！何かあったら相談してね！私でどこまで力になれるかわかんないけど、力になるから！」

「あ、ありがとうございます…」

あげはさんが俺の手を握りながらそんなことを言ってくれる。

なんか嘘をついているのが申し訳ないな…まあ、本当のことを言ったら言つたで、騒ぎになるだろうし、仕方ないことではある。

とはいえ、流石に黙ったままというのも罪悪感がすごい…なら、少しだけ…

「ソウヤ君？」

「…すみません、あげはさん…正直に言うのと、俺達はまだあなたに話していないことがあります…でも、それは今は言えなくて」

「…うん」

「ちゃんと話せるようになったら話します…なので、俺達を信じてください」

「オツケー! 信じるよ!」

「良いんですか?」

「だって、君が嘘をついてるようには見えないし。でも、いつか話してね?」

「はい…それはもちろん!」

なんとか、あげはさんに信じてもらえたみたいだ。

「というか、痛い! 痛いよ! ソラ! 誰か助けて!」

「ソウヤが悪いんですよ…ましろさんはともかく…さつきまで見ず知らずだった人とし

んなに仲良く話して…」

「ええ…う…」

そんなこと言ったら誰とも話せなくなりそうなんだけど…本当にどうしたんだ？というかホント痛い！腕取れそう…

そんなことを思いながら、俺は腕の痛さに耐えるのだった。

覚醒の予兆

「なんか…めっちゃ疲れた」

「お、お疲れ様…ソウヤ君」

ましろさんの労いの言葉がありがたい…ホント、ここに来るまでソラの機嫌を直すために色々と苦労したが、そのおかげでなんとかソラは機嫌を直してくれた。

今、俺達はあげさんが通うという保育学校の近くに来ている。

ソラシド福祉保育専門学校、保育士になるための専門学校らしい。

あげさんがこつちに来た理由はこの専門学校に通うためらしく、今日はあげさんがこの学校の校長先生に会いに行くということで、せっかくだから俺達もついていくことになった。

「えっ？」

エルが学校を指差しながらこれは何なのか？とましろさんに聞いている。

まあ、言葉らしい言葉をまだ喋れるわけじゃないから、そんな感じの意味合いかな？という推測だが。

「ここはね、保育士さんの学校だよ」

「保育士？」

「まあ、簡単に言えば、保育園とか幼稚園とかで子供達を一時的に預かって面倒を見るお仕事だな」

「そうなんですわね！」

「うん。あげはちゃん、昔から保育士になりたいって言ってたから…になりたいもののが為に頑張ってるの偉いよね！」

ましろさんの言葉に俺は頷く。

実際、なりたいたいもののために頑張れるのはすごいと思う。

そういうえば、俺にもあつたな…なりたいたいもの…未だにその思いだけはなかなか捨てきれない。

「エルちゃんは大人になったら何になりたい？」

「えるう？」

ましろさんの質問をエルはよくわかっていないのか、首を傾げている。

「ふふっ！エルちゃんにはまだ早いよね」

「ましろさんは何になりたいんですか？」

「私はね…」

ましろさんがそう言うと、しばらく間が空き、沈黙が続く。

そして、ましろさんが口を開いた。

「特にならない!」

「ああ、なるほど…まあ、そんなものじゃないのか? 誰もかれもがなりたいものが決まってるわけじゃないだろうし」

「そうかもしれないけど! クラスの子達の中にはなりたいものが決まっている子達が居るんだよ〜!」

そう言いながら、ましろさんは頭を抱えている。

まあ、悩むよな…そりゃあ。

「…そういえば、ソウヤは何になりたいんですか? そういう話をしてくれたこと、ありませんでしたよね?」

「ああ…俺も今のところはないかな? 昔はソラみたいヒーローに憧れたことがあったけど…」

「ホントですか!?! ソウヤもヒーローに憧れていたんですか?」

「めっちゃ食いつくな…まあ、一応な…ん? なんだあれ?」

ふと、視線を移すと、小さなブタがこの前裏山で見つけた毒キノコが仕掛けられているあからさまな罠に向かおうとするのが目に入った。

え? なにあれ? 昭和の罠か? しかも、あのキノコって例の毒キノコだよな…これって

どう見てもカバトンの罨だろ。

こんなあからさまな罨に引つかかるやつなんているわけ…

「ブタさんが危ない！」

「いや、罨だよね!？」

「バカ！あんなの罨に決まってるだろ！」

そう呼びかけるが、ソラは既にブタを助け出していた。

「マジで何やってんだ…まあ、ソラらしいと言えばソラらしいけどさ…」

そんなふうにはかいてると、案の定、ブタに化けていたカバトンが姿を現した。

「グフフ…まさか、このカバトン様がブタに化けていたとは…あつ、お釈迦様でも気づく

めえ！」

「な…なんてずる賢い！」

「コントかな？」

「えるえる」

「2人に同意だ…つて、待て待て！ソラ！ペン取られてるぞ！」

「なっ…！」

ソラが異変に気づき、慌ててペンを探すが、見当たらない。

当然だ、今ペンはカバトンが持つてるんだから。

あんなアホみたいな作戦にも意味はあったようだ…この状況…思ったよりやばそう
だ。

「カモン！アンダーグエナジー！」

そう言つて、カバトンは毒キノコのランボグを呼び出した。

「ギャハハ！プリキュアになれないお前なんか怖くないのねん！今度こそプリンセスを
頂くぜ！」

そんなことを言いながら毒キノコのランボグでこちらに攻撃を仕掛けてくる。

ランボグから触手のようなものが伸びてくるが、それをソラと俺で防ぐ。

「っ！ソラ！危ない！」

防いだ触手のようなものがソラの足巻き付こうしているのが目に入り、ソラを庇うよ
うに出る。

すると、俺に触手のようなものが巻き付き、そのまま身体を締め付けられ俺はラン
ボグに捕らわれてしまった。

「ソウヤ!!!」

ソラの叫び声が響き渡る。

「おっと、捕まっちゃったか…ふぬぬぬ！ダメか…流石に振りほどけないな…ソラ！ま
しろさん！エルを守ってくれ！俺は大丈夫だから」

「でも!!それじゃあソウヤが!」

「良いから!早く!」

俺がそう叫ぶと同時にあげはさんが、学校の中に入るようにソラとましろさんに呼びかける。

ナイスだ!あげはさん!ランボーグの大きさは学校には入れない。

「ソラちゃん!行こう!」

「嫌です!離してください!!ソウヤを助けないと!!」

「今はダメだよ!エルちゃんを守らないと!」

「うっ!...ソウヤ!待っててください!絶対助けに行きますから!」

そうして、ようやくソラはましろさんに連れられて、学校の中に入って行った。

そうそう、それで良いんだ...このままここに居てもエルを守ることとはできないだろうし。

「逃さないのねん!」

カバトンがそう言うと同時に少し小さめのランボーグが出現し、ソラ達の後を追う。

「みんな...気をつけろよ」

／／／／／／／／／／／／／／／／

「待っててください!ソウヤ!絶対、絶対に助けますから!」

階段を駆け上がりながら、私は絶対に助けると繰り返し返す。

でも、どうやって？ キュアスカイに変身しないとランボーグは倒せない。

「一体どうすれば…せめて、ペンを取り返せば…」

そんなことを考えていると、屋上にたどり着いてしまいました。

「エルちゃん、大丈夫だよ。お姉ちゃん達が守ってあげるからね！」

あげはさんの声が聞こえる…そうです…まずはエルちゃんを安全な場所に…

「あー、マイクテス、マイクテス…無駄な抵抗をやめて、今すぐプリンセスを連れて出てくるのねん！」

カバトンがそう叫ぶ…今すぐに飛び出してでもソウヤを助け出したい！でも、今は…

「くっ…！どうすれば…」

「ソラ!!聞こえるか！」

「ソウヤ！」

「あ、出てきちゃダメだぞ！俺の言葉を聞いてくれ！」

「はい！」

「ソラ！良いか？まず、エルは絶対に渡すなよ！後、焦らず冷静に状況を整理しろ…例えば、今は逆転の方法が思いつかなくても諦めるな！諦めない限りは負けじゃない」

「お口チャック」

カバトンによって、ソウヤの口が塞がれる。

「ソウヤ!! どうすれば…」

「ダメ!」

「出てこないのねん…それじゃ」

カバトンが指を鳴らすと、ソウヤの周りにキノコの触手が現れ、攻撃を仕掛け始める。軽くビンタするような攻撃でしたが、もつと強くなるかもしれない…なんとか、なんとかしないと…

「どこかに落ちてる金属バットを拾って戦えばワンチャン? いや無理…あーもう! 何か良い手は…」

「落ち着いて…冷静に…いやそんなことできません!」

「助けなきや…ソウヤ君を助けなきや」

「そんなのわかってる! でも…」

「それでも、ソウヤ君ならきつと諦めない…ここで黙って見てるだけなんてしないよ! だがら、行かなきやだよ!」

ましろさんがそう口にする、ましろさんの前にミラージュペンが現れた。

「ましろさん! それは!」

（あの光は…プリキュアの！そっか、ましろさんか！）

屋上の光に反応し、カバトンがランボークと屋上に近づいた。

（ましろさんはソラとは別ベクトルのヒーロー性があったからな…プリキュアになれても不思議はない）

後はましろさんが自分の強さを信じていることが出来ればきつと大丈夫だ。

俺はそう信じながら、屋上に視線を移すのだった。

誕生！キュアプリズム！

「ましろさん！それは！」

「何これ……」

「これって、私の……私がプリキュアに」

私の前にミラーージュペンが現れる。

これを使えば私もプリキュアになれるんだよね？ちよつと……いや、すごくびつくりしたけど……でも、これでソウヤ君を助けられる！

そうして、ペンを手に取ろうとすると、カバトンの声が響いた。

「やめろ！」

「っ……！」

「お前みたいな脇役がプリキュアになれるもんか！お前に何の力がある！自分だっただけかってるんだろ！ほら！」

カバトンの言葉に手が止まる。

その時、思い浮かんだのは……ソウヤ君ならどうするかな？つてこと……

ソウヤ君ならきつと、何を言われたって誰かを助けることに躊躇なんかしない。

ソウヤ君にとって、誰かを助けるのは普通のことだから…私はそんな強い人にはなれる気がしないけど…それでも、私はソウヤ君を助きたい!

「確かに、私はソラちゃんやソウヤ君に比べたらまだまだだけど…でも!それがソウヤ君を助けない理由にはならないよ!」

そう言つて、目の前のペンを取る。

「ましろさん!」

「ましろん!」

「ぶいきゅあ〜!」

エルちゃんから、ソラちゃんが初めてプリキュアになった時のようにアクセサリのようなものが飛んでくる。

それを手に取つて、いつものソラちゃんの決め台詞を口にする。

「ヒーローの定番だよ!」

「スカイミラージュ!トーンコネクト!」

ミラージュペンがマイクに変形し、スカイトーンをセットする。

「ひろがるチェンジ！プリズム！」

マイクに変形したスカイミラージュにPRISMの文字が現れ、ましろがステージに舞い降りる。

彼女の髪が桃色の長い髪へと変化し、純白のソックスとピンクのブーツサンダルが装着される。

「煌めきホップ！」

「爽やかステップ！」

ホップ、ステップと白のリボンとイヤリング、そして白を基調としたドレスが装着される。

「晴ればれジャンプ！」

そして、純白の長手袋が装着される。

ホップ、ステップ、ジャンプと流れるように姿を変えていき、ソラのような動きの激しさはないが、さながらアイドルのようなその動きは可愛らしいのひと言につきる。

そして、ついに変身が完了した。

「ふわり広がる優しい光！キュアプリズム！」

／／／／／／／／／／／／／／

「キュアプリズム…ましろさんもプリキュアに!？」

「かつこよー!」

「えくるう!」

(おおく! ましろさんはこんな感じなのか! ソラがカッコいいと可愛いのハイブリッドなら、ましろさんは可愛いに全振りしてるみたいだな)

まるで、お姫様のような格好のましろさん: いや、今はキュアプリズムか: 俺もキュアプリズムに感想とか言いたいんだけど、今の状態じゃ、それも出来ないな。

そんなことを思っていると、先ほど学校の中に入っていった小さめのランボーグがみんなに迫る。

「ボッコボコにしろー! ランボーグ!」

そうして、小さめのランボーグが上へと飛び、踵落としをプリズムにするが、それをプリズムは回避し、勢い余って後ろに飛んでいく。

「ええ〜!? パワー強すぎだあ!」

: ソラの時も思ったけど、プリキュアになると身体能力がめちゃくちゃ上がるよな: 慣れないのも無理はない。

(でも、特に問題はなさそうかな:)

カバトンはプリズムが力のコントロールを出来てないのをいいことにエルを捕まえるように指示をするが、ソラも傍にいるし問題はないだろう。

それに————

「させないよー！」

プリズムは壁を蹴り、小さいランボグに向かって接近し、そのまま小さいランボグを蹴り飛ばした。

そして、蹴り飛ばされた小さいランボグがカバトンにぶつかり、ソラから奪ったミラージュペンを手放した。

「しまったー！」

そう言いながら、カバトンは近くの建物の上に落下した。

「ソウヤ君ー！」

プリズムが気弾のようなものを俺を捕らえていたランボグにぶつけ、そのおかげで触手が緩んだ。

（おっ、緩んだ！今なら！）

そうして、拘束から抜け出した俺はランボグの触手を足場にして、ソラのミラージュペンを手に取り、口を抑えていたガムテープのようなものを剥がした。

「ソラー！受け取れー！」

そう叫んで、ミラージュペンをソラに投げる。

「はいー！」

屋上からソラは飛び出し、投げられたペンをキャッチする。

「ヒーローの出番です!」

「無限に広がる青い空!キュアスカイ!」

「つと、着地成功!」

「ソウヤ!大丈夫ですか!?怪我はありませんか?どこかを痛めたりはしてませんか?」

スカイが心配そうにそう尋ねる。

「ああ、大丈夫だ。心配してくれてありがとう」

「ごめんなさい!私のせいで...!」

「ソラのせいじゃない...って、言っても気にするか...とりあえず今はランボーグを倒すことに集中しよう!話はその後だ」

「そうですね...まずはランボーグを倒さないと!」

そうして、スカイは巨大なランボーグをプリズムは小さめのランボーグと戦闘を始める。

それと同時に俺は辺りを見渡し、逃げ遅れていない人がいないか確認する。

「…よし、居ないみたいだな…なら、ここは2人に任せて、俺はあげはさんの様子を見に行くか」

そうして、俺はその場を後にするのだった。

／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／

「あげはさん！無事で良かった！エルは大丈夫ですか？」

「ソウヤ君！そっちも無事で良かった！エルちゃんも大丈夫だよ」

「える！」

「そうでしたか…エルを守ってくれてありがとうございます！それじゃあ行きましょう！」

そう言って、あげはさんと一緒に出口へ向かうために階段を降りていく。

「ねえ、ソウヤ君！プリキュアとかあの怪物とか、色々と聞きたいんだけど！」

「ああ、えっと…言っても信じてもらえないかわかりませんが…」

「大丈夫！信じるから！」

「実は…」

そして、俺はあげはさんに今までの経緯をかいつまんで説明した。

俺とソラがスカイランド人であること、エルはスカイランドのプリンセスで、カバトンがエルを誘拐しようとした所を追いかけてソラシド市に迷い込み、カバトンと戦闘に

なり、ソラがプリキュアに変身して倒したことなんかを。

「そんなことがあったんだ…」

「ええ、まあ…と、2人も戦闘が終わったみたいだな…ソラ! ましろさん!」

話している内に出口に着いたらしく、戦いが終わった2人が辺りを見渡しているのが目に入る。

「ソウヤ!! 良かった! 探しましたよ! 誰かに襲われたんじゃないかって心配したんですからー!」

「ごめん。あげはさんとエルが心配でさ」

ソラは俺の言葉を聞いて、一瞬呆れたような顔をした後、すぐに表情を暗くする。

「ソウヤ…ごめんなさい! 私が…私がカバトンの罠に引つかかたりしなければ…」

「良いって。結果的にはなんともなかったんだし」

「よくありません! 今回はなんともありませんでしたけど、次はどうなるかわかりません…ソウヤを守ると決めたのに…今の私じゃソウヤを守れません…もつと、もつと強くならなくては…」

「ソラ…!」

思い詰めている様子のソラにどう声を掛けるべきか、なんてことが頭を過る前に俺はソラに駆け寄り抱きしめていた。

「ソウヤ……？」

「ソラ……ああ、えつと……正直、この後のこと考えてなかった……ソラが思い詰めてるみたいだからなんとかしないと思って思ったんだけど……いぎ、こうしてみると、言葉が出てこない」

「ふふっ……なんですかそれ……あの、ソウヤ……もう少しこのままでも良いですか？」

「ああ、もちろん……」

俺がそう返すと、ソラが俺を強く抱きしめる。

「ソウヤ……私、強くなります……ソウヤが二度と危ない目に遭うことがないように」
「……じゃあ、俺はソラが心配しないで済むくらいに強くなるよ」

そう言つて、ソラを強く抱きしめ返す。

強くならないとな……ソラや他の人達を助けられるくらい強く。

俺はそんな覚悟を決めながら、ソラを抱きしめ続けるのだった。

伝説の戦士

「はっ…はっ…はっ！」

暗闇の中を私達は走っている。

プリキュアに変身した私とましろさん、そしてソウヤは敵の攻撃を受け、それから逃れるために真つ暗な道を走り続ける。

そんな中、ましろさんに敵から攻撃が直撃しそうになる。

「ましろさんー！」

だが、そうはさせないと、ソウヤがましろさんを突き飛ばして、代わりに自分が攻撃を受け、そのまま閉じ込められてしまいました。

「ソウヤ!!」

「ソウヤ君!!」

「ここは俺に任せろ…まあ、やれるだけやるさ」

そう言いながら、ソウヤは笑みを浮かべる。

「逃げてください！ソウヤ!!」

無駄なのはわかってる…でも、声を掛けることをやめることができなかった。

ソウヤは一瞬こちらを見た後、ランボーグとの戦闘を開始し、最後にはランボーグの攻撃を受けて倒れてしまった。

「いやああああ!!」

「ソウヤ!!!」

目を覚ますと、部屋のベッドにいました。

「はあ……はあ……はあ……またこの夢……」

最近、ずっと同じような夢を見てしまいます……細かい部分は変わりますが結末はいつも同じです。

最後は私達を庇ってソウヤが倒れてしまうんです。

ソウヤはきつと、夢と同じ状況になったら迷いなく私達を庇うでしょう……そう思えるからこそ、妙な現実感があつて……なおさら、心配になつてしまうんです。

「……どうしたら、ソウヤが傷つかずに済むんでしょうか……」

そうして、悩んで、悩んで、悩んで……ある方法を思いつきました。

でも、この方法はソウヤが望むようなものではなく、結局私はその考えを抑え込み、再

び眠りにつきました。

／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／

「うーん…最近、ソラの様子が変だな…」

「ソウヤ君もそう思う？」

「そりゃあ、毎晩のようになさされてるのを聞いてるしな」

ましろさんがプリキュアになったあの日から、流星にカバトンも分が悪いと判断したのか、あの日以降1度も姿を現してはいない。

だが、ソラは最近ずつとうなされているようで、酷い日は俺の傍から全然離れないなんて日もあったほどだ。

まあ、ソラが俺の傍から離れないなんてことは、ましろさんがプリキュアになった日から割りとおったけど、最近のはそういう感じではなく本当にガツチリと腕を組み、少しの移動の時にさえ片時も離れなかった。

理由を聞いても答えてくれず、こんな風に頭を悩ませている。

「ソラちゃん、どうしちゃったんだろう…あげはちゃんにお手紙でぐつすり眠れる方法がないか聞いてみるけど…何か良い方法があれば良いな…」

「そうだね…」

「あ、そういえば！おばあちゃんが話があるって言ってたけどなんだろう？」

「とりあえず行ってみようか…もちろん、ソラも一緒に」
そうして、俺達はヨヨさんの所に向かうのだった。

「プリキュアの伝説…?」

「ええ。今はスカイランドの人々からも忘れさられている古い伝説なのだけれどね」

ヨヨさんの所にやってくると、スカイランドに伝わるプリキュアの伝説について話したいということだった。

正直、プリキュアとはそもそもなんなのかという疑問はあったから、教えてくれるのはありがたい。

そうして、俺はヨヨさんの話に耳を傾ける。

どうやら、ある嵐の夜、闇の世界の魔物がスカイランドを攻め込んできたらしい。

空は暗い雲に覆われ、絶望的な戦いが始まり、スカイランドは危機的状況に陥った。

そんな絶望的な状況で、スカイランドの姫は祈りを捧げた。

『ヒーローが現れて、青い空とみんなの笑顔を取り戻してくれますように』と。

そして、その祈りに応えるように現れた勇敢な戦士こそが——

「プリキュアってことですか」

「その通りよ…そして、プリキュアは闇の魔物を倒し、スカイランドに平和をもたらし
た」

なるほど…それがプリキュアの伝説ってわけか…そういえば、前世の友人が話していたプリキュアの話にも似たようなものがあつたな…スカイランドのやつとはまた違う
けど。

「伝説の戦士…プリキュア！」

「える？」

「エルちゃん！もう安心だよ！伝説の戦士が味方だよ！」

どうやら、ましろさんは今の話に感銘を受けたらしく、エルを抱っこしながらぐるぐ
ると回転を始めた。

「そっかあ！エルちゃんの不思議な力はスカイランドのプリンセスパワーだったんだね
！私、ますますやる気になってきちゃったよ！ソラちゃん！ソウヤ君！今からランニ
ングしよう！」

「そうだね…せっかくだしー」

「そんなことより、この世界とスカイランドを繋ぐトンネルはいつ開いてもらえるん
ですか？」

「ソラ…?」

なんだか変だ…：やっぱり、最近うなされていることと何か関係があるんだろうか？
「もう少し時間を頂戴…：トンネルを開く作業は簡単ではないの…」

「カバトンは簡単にトンネルを開いたじゃありませんか!!」

ソラの叫びが部屋に響く。

「…ごめんなさい!」

「ソラ!」

俺は、謝罪しながら部屋から出ていくソラを追いかけるのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ソラ、入るぞ?」

部屋に戻ってしまったソラにそう声を掛けながら、部屋へと入る。

「ソラ、大丈夫か?」

「すみません、ソウヤ…：取り乱してしまいました…」

「いや、それは良いんだけど…：何かあったのか?」

そう言いながら、ソラのベッドの上に座る。

それを見て、ソラも俺の隣に腰掛ける。

これは話してくれると思うって良いんだろうか?

「…実は、最近よく夢を見るんです」

「夢？」

やっぱりうなされていることに関係があるのか。

そんなことを考えていると、ソラが夢の話を始めてくれた。

「夢の中で私とましろさんがプリキュアに変身して、敵の攻撃を受けて逃げているんです…そして、最後にはいつもソウヤが私達を庇って敵の攻撃を受けて、倒れてしまうんです」

そう震えながら口にするソラを抱きしめる。

「大丈夫だ…それはただの夢だ…」

「わかってます…でも怖いんです！だって、ソウヤは夢と同じ状況になったら、同じ行動をするでしょう？」

「…そうだな…もし、同じ状況になったら、俺は2人を庇うと思うよ…でも、そもそもそんな状況になんかさせないと思うし、やっぱりそれはただの夢だよ」

もし、ソラが見た夢と同じ状況なら、俺は迷わず2人を守ると断言できる…だが、そもそもそんな状況に陥らないように立ち回るだろうし、やっぱりソラが見たのはただの夢だろう。

とはいえ、ソラが不安になるのも無理はない…実際、今の俺にはランボーグを倒せる

力がない…方が一にもそういう状況にならないとは言いい切れない。

俺もプリキュアに変身できたら力になれそうなんだけど…何か条件があるんだろうか？

「やつぱり…こうするしかありませんよね…」

「ソラ？どうかしたのか？」

「ソウヤ、少し目を瞑ってくださいませんか？」

「うん？まあ、別に良いけど…」

ソラに促され、少々疑問を抱きながらも目を瞑る。

そうして、しばらく待っていると、右手に冷たい感触がするのと同時にカチつと音が鳴る。

「どうしたんだ？…って、なんだこりゃ？手錠!？」

思わず目を開けると、俺の右手に手錠がかけつつ、ベッドの先にも手錠をかけられて外せなくなっている。

「いや、なんで手錠？というか、何でこんなことを？」

「ソウヤを外に出さないためです…もちろん、スカイランドに繋がるトンネルが開くまでですから安心してください」

「一つも安心できないんだけど…」

「ソウヤは私が止めても助けに来てしまいますから…ソウヤを危険な目に遭わせないためにはこれが一番です！」

「ええ…？ いやいや、別の意味で危険じゃないか、これ…」

「大丈夫です…ここに居ればソウヤは二度と危険な目に遭わずに済みますから…ましてさんとヨヨさんもちゃんと説得して、納得してもらいます…ランボーグが出てきたつて、私が守ります…だから、安心してここで待っていてくださいね」

そう言つて、笑みを浮かべるソラの目には光がなかった。

怖つ！ えつ、なに…まさかヤンデレ的なやつ？ よくヤンデレネタでハイライトオフとか聞いたことがあるけど、マジでハイライトがないんだけど！

俺がそんなことを思っていると、ソラが部屋から出ていき、俺は部屋に1人取り残された。

「どうすれば良いんだ…」

俺は1人取り残された部屋でそう呟くしかなかった。

傷ついてほしくない

「ソラ……ここまでするぐらいに追い詰められてたのか……」

自分の置かれている状況を把握しながら、俺はそんな言葉を呟く。

「ソラは優しいからな……きつと誰かが傷つくのが怖いんだ……俺を監禁するぐらいに……」
多分、ましろさんにも傷ついてほしくないと思っただ……そうやって、全部一人で背負って戦うつもりなんだろう。

……行かなくちや……ちやんとソラに言葉を伝えなくちや！

でも、どうやって？ どうすればソラを安心させられる？ 俺には説得するための材料がない。

「……プリキュアになるしかないか……」

プリキュアになることが出来れば、少なくともソラの見た夢はただの夢だと証明できるはずだ……だって、夢の俺は変身していなかった。あくまで夢は夢でしかない……そう証明するには十分なはず。

「……といっても、プリキュアになる方法がわからない……とりあえず、いろんな方法を試してみるか」

まず、思い出せ：ソラとましろさんがプリキュアに変身した時はどうだった？

詳しい理屈は謎だが：2人の心に共鳴するようにペンが現れた。

そして、それに呼応するようにエルがあのアクセサリーのようなものを2人に渡した。

考える：2人のどんな心に共鳴した？

「…もしかして、ヒーロー精神？みたいなものか：だとすると：俺がすべきことって：俺がすべきこと：それは、俺がヒーローになると決意することかもしれない。

俺も昔はソラのようにヒーローに憧れていたことがあった：でも、いつからか自分のその想いに蓋をしていた。

その蓋を今こそ開けるべきなのかもしれない。

『■■■■：あんな奴らの言葉なんか気にすんな！』

『そうだよ！少なくとも私達は■■■■に助けられたんだから！こういう時、何て言うんだっけ：そうそう！救えなかった人を数えるんじゃない、救った人のことを数えるんだってやつ！』

『それは少し違う気がするけど：まあ、難しいことは置いといてさ：■■■■は私達のヒーローだよ！だから、自信持って！ヒーローって肩書は大変だと思うけど、私は■■■■にはそのまま置いてほしいな』

ふと、前世の友人達の言葉が脳裏を過る。

そういうえば、そんなことを言われたこともあったな…この時、俺は確かに嬉しさを感じていたし、自分の行動は間違いなんかじゃないって思えたんだ。

まったく、それなのにヒーローになりたくないって意固地になつていたなんてな。

もちろん、それなりの理由はあったと思う…とはいえ、そう思うようになったきっかけを今は思い出せないが。

だけど、それは後回しだ…ソラを安心させるために…ソラとましろさんと一緒に戦うために…俺はヒーローになつてやる！

その瞬間、俺の胸の辺りからミラージュペンとソラ達に変身する時にエルから渡されていたアクセサリーが同時に出現し、それと同時に手錠が壊れた。

「手錠まで壊れた!? どういう理屈? まあ、抜け出せたから良いけどさ…にしても、ペンとアクセサリーが同時に出現するなんてことがあるのか…」

少なくとも、2人はエルからアクセサリーを受け取ったはずだけど…いや、今はそんなことを考えている場合じゃないか。

「待つてろよ! ソラー!」

そうして、俺は部屋を飛び出し、ソラの所に向かうのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ねえ！見て見て！新しいの出てたよ〜！」

「……」

「あれ？」

ソラちゃんとエルちゃんと一緒に街に出かけてきたのは良いんだけど……ソラちゃんの様子がやっぱり変だ。

それに変なのはそれだけじゃない……ここにはソウヤ君が居ない。

これに関しては絶対におかしい！ソラちゃんがソウヤ君を連れてこないなんて絶対にあり得ないもん。

やっぱりうなされていることと、何か関係あるのかな？それとも、私が何かやっちゃった!?

それで、ソウヤ君のいない所で話し合おう……みたいな？

「ねえ、何かあった？もしかして、プリズムショットを撃つ時の『ひろがる〜』ってスカイパンチの真似をしちやっただの怒ってる？」

「怒ってません……」

「じゃあどうして……あ、待ってよ〜！」

ソラちゃんは横断歩道を先に渡り、私が渡る前に赤信号になってしまった。

「ましろさんは、もうプリキュアには変身しないでほしいんです」

「え……」

横断歩道の先で待っているソラちゃんの声はしっかりと聞こえてきて、私は思わずそう呟いていた。

「そっか……そんな怖い夢を見ちゃったんだ……」

近くのベンチに腰掛け、ソラちゃんが夢の話をしてくれた。

その夢は私達を庇ってソウヤ君が倒れてしまうという夢で……私はその夢に妙な現実感を感じてしまった。

ソラちゃんほど彼を見てきたわけじゃないけど、ソウヤ君ならきつとそうするだろうという確信があつたから。

「でも、夢は夢だよ……それに、それだけじゃ、私がプリキュアに変身しない理由もないんじゃない……」

「わかつてます……だけど、目の前で誰かが傷つくのは嫌なんです！ソウヤは私の大事な人で……ましろさんは友達ですから……私は自分の大切な人達が傷つくのを見たくありません！」

「ソラちゃん…でも、エルちゃんを守るなら1人より2人、2人より3人の方が良くない？ 夢みたいな状況になっても私達でソウヤ君を助ければ良いんだし…そもそもソウヤ君ならそんな状況にならないように色々してくれると思うけど…」

ソウヤ君はきつと、ランボーグと戦うことになっても周りの状況を見て、行動するはず。

だって、ソウヤ君はいつも周りを見渡して、行動してくれてる…私をランボーグの攻撃から守ってくれた時もそうだったし。

「1人でやります！ 私がもつと強くなれば良いだけの話です！」
「ソラちゃん！」

立ち上がったって、歩きだそうとするソラちゃんを止めるために私も立ち上がると、いきなり大きな電車の姿をしたランボーグが現れた。

「あれはランボーグ!？」
皆を助けなきや！」

そうして変身しようとする、ソラちゃんが私の手を遮る。

「ましろさんはエルちゃんをお願いします！」

「えっ？ 待って！」

「ヒーローの出番です！」

／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／

「無限に広がる青い空！キュアスカイ！」

キュアスカイに変身したソラちゃんはそのままランボーグに向かって行った。

「待つて！ソラちゃん！」

私も行かないやだよ！でも、エルちゃんはどうかしよう…うう、エルちゃんを任せられる人が周りにいないよ…

ソウヤ君が居れば安心して任せられるのになあ…

「えっ…？」

私がどうしようか途方にくれていると、抱っこ紐が光り始め、空中に浮かんだ。

「えるう？！える！！えるうく！」

「ええっ!?どうして?そういえば、おばあちゃんが…」

『色々と役に立つと思っわ』

って、裏山にスカイジュエルを探しに行く時に言っただよ!

「おばあちゃん!ありがとうすぎるよ…:よし、これなら!」

そうして、私もキュアプリズムへと変身するのだった。

「ふわり広がる優しい光！キュアプリズム！」

無事に変身が終わり、スカイのもとに走り出す。

「行こう！エルちゃん！」

「えるー！」

そうして、エルちゃんと一緒にスカイの元に向かうと、スカイが倒れていた。

「大丈夫？立てる？」

「…私は平気です」

「…2人共！危ない！」

どこからともなく聞こえてきた声に、思わず視線を移す。

すると、目の前にランボーグが接近していた。

「プリンセスはもらったあー！」

そして、ランボーグが攻撃を仕掛けてきた瞬間、私達は凄く速い速度で担がれ、気づけば、ランボーグから離れた路地裏にきていた。

「お客様のお呼び出しをいたします…プリキュア様〜!!」

カバトンのそんな声も遠くに聞こえるぐらいに離れた場所だったみたいで、ホッとひと息をつく。

「ここなら、しばらくは大丈夫そうだね。」

「ふう…危なかった…2人共無事？エルも大丈夫だった？」

「えるう？」

「うん、大丈夫だよ！えっと、助けてくれてありがとう…あなたもプリキュアなの？」

私達を助けてくれた女の子は青みがかった長い黒髪の女の子でその格好は黒いドレスアーマー？みたいな格好だった。

この子もプリキュアだね？でも、こんな子知り合いに居たかなあ…エルちゃんのことも知ってるみたいだから知り合いだとは思うんだけど…

それともソウヤ君とソラちゃん以外のスカイランドの人かな？それなら私が知らなくてもおかしくないよね。

「あれ？もしかして気づいてない感じ？えっと、俺のことわからない？」

「俺？そういえば一人称が『俺』の女の子も居るんだっけ…えっと、初めまして、だよね？」

「気づかれてない!?!でも、この状態なら無理もないか…えっと、俺はソウヤだよ…」

「へっ？ソウヤ君？」

「本当にソウヤなんですか!?!」

「これには流石のソラちゃんも驚いたのか、さっきまでの鬼気迫る雰囲気はなくなっ

いた。

「そうだよ…正真正銘のソウヤだ…何故かプリキュアに変身したら女の子になってたんだよ…いや、自分で言っておいてあれだけど意味不明すぎるな」

声は女の子みたいになってるけど、その喋り方はソウヤ君そのものだった。

「ええくくくつ!!」

「えるう!?!」

私達は目の前の衝撃的な出来事に大声を上げるしか出来なかった。

友情の力

「本当にソウヤ君なの!？」

「あ、うん……まあね」

プリズムにそう尋ねられ、俺は苦笑するしかなかった。

いや、マジでびっくりした……ソラ達みたいにプリキュアになったすぐは力を制御できないだろうから先に変身しておこうと思って、変身してみたら……見た目が青みがかかった長い黒髪の美少女になっていた。

しかも格好が、腋が露出してる黒いドレスアーマーのようなものに黒の長手袋、黒のロングブーツという全体的に黒が多い格好だった。

この格好に関しては俺のプリキュアの姿であるキュアナイトという、夜をイメージさせる名前から来てるんだとは思う。

「ソラに手錠をつけられて、外に出れなかった時にさ、ミラージュペンとスカイトーンって言うんだっけ？あのアクセサリーみたいなやつが一緒に出てきて、手錠を壊してくれて、それで変身してみたら何故か女の子に……」

「情報量が多いよー！というか、ソラちゃん何やってるの！ソウヤ君を監禁したってこと

「普通に犯罪だよ!？」

「だって、そうしないとソウヤが傷ついてしまうじゃないですか!」

「まあ、気持ちはわかるけど…ソウヤ君つて縛っておかないと、誰かを守るためにボロボロになっちやいそうだし…」

「やっぱり、ましろさんもそう思いますよね!」

「待つて待つて! 2人で物騒な話しないで!」

なにさりげなく恐ろしい話をしてんの! この2人!

「はあ…とりあえず今はそれは良いけど…スカイ、いやソラ…お前が俺にそんなことをしたのは、やっぱり傷ついてほしくないとかそういうこと?」

俺の質問にソラは少し沈黙した後、絞り出すように言葉を紡いだ。

「…そうです…私は大切な人達が傷つくところなんて見たくない! だから、1人で戦おうとしたのに…2人共、どうしてきちやうんですか!」

「…俺もプリズムもソラの力になりたいから、かな? ソラが俺達を大切に思ってるように、俺達だつて大切に思ってるんだからさ…それに、知ってるか? 余計なお世話っていうのはヒーローの本質なんだつてさ」

「ヒーローの本質…」

「俺はソラを助けたいからここにいて…2人と一緒に戦いたいからプリキュアになった

…難しい理由なんか何もないんだ」

「ソウヤ…」

「おっと、今はキュアナイトでよろしくね…バレると面倒くさいことになりそうだから」
「みくつけた！つて、またプリキュアが増えてるのねん!!お前、一体何者だ！」

ソラと話していると、頭上に電車のランボーグが現れた。

とりあえず尋ねられているし、口調を変えて返すとしよう。

「お…私はキュアナイト！以後お見知り置きを…まあ、出来れば二度と会いたくありませんが」

「キュアナイトだと！いや、1人増えたぐらいじゃこのランボーグは止められないのねん！」

「スカイ、プリズム…一旦場所を変えましょう。攻撃は私が防ぐから安心して」

「わ、わかった！スカイ！行こう！」

「は、はい！」

「あ、そうだ…プリズム」

「どうしたの？」

「私の言いたいことは言ったから、プリズムもスカイに自分の言いたいことを言っちゃおう！ランボーグが邪魔しないように攻撃は意地でも防ぐから」

「…うん！」

そうして、俺達は路地裏から抜け出すために移動を始める。

「はっ！ふっ！せや！」

追ってくるランボーグの攻撃を捌きながら、俺達が路地裏から抜け出し、建物の上に跳んだ。

「すごい…！」

「そうだね！これでスカイも安心できるんじゃない？」

「安心…？」

「うん！だって、今の状況はスカイの見た夢とは全然違うでしょ？」

2人のそんな会話を聞きながら、高速移動してランボーグを翻弄しつつ、懐に潜り込み蹴り上げる。

「うん…良い手応え！」

「…確かにそうですね…でも、2人が傷つくのはやっぱり嫌です」

「そうだね…私達が傷つくことは避けられないかも…でも、ナイトも言ってたように私達だって、スカイのことが大切なんだよ」

そうして、次々と移動を繰り返し、建物の屋上へと辿りつき、スカイとプリズムはそこに降り立った。

「さつきからちよこまかと！いい加減にしろ！」

「いい加減にするのはそつちだ！2人の邪魔はさせない！」

そう叫びながらエネルギーで出来た漆黒の槍のようなものを出現させ、それをランボーグに突き刺し、地面に縫い付けるようにして動きを封じる。

「動けランボーグ！」

「らんぼーぐ……」

槍から抜け出そうと藻掻くが、ランボーグは動くことが出来ないようだ。

とはいえ、そう長くはもたないだろうな……今回のランボーグは今までのやつより強いし。

さて、プリズムとスカイはちゃんと話せてるかな？

そんなことを思いながら、視線を移すと2人が話をしている所だった。

「あなたは私の友達……あなたが心配だよ、助けていよ……気持ちと同じ……難しい理由なんかない。でもこれって、一緒に戦う理由くらいにはならないかな？」

その言葉を聞きつつ、状況を把握。

カバトンは頭に血が昇っているのか、電車ランボーグの出力を上げ、ランボーグの額の特急という文字が超特急へと変化し、俺の槍の拘束から抜け出そうとしていた。

「ランボーグが拘束から抜け出す……2人共、備えて！」

俺の言葉を聞いた2人は手を繋ぎ、構えを取る。

「やろう！スカイ！」

「はい！プリズム！」

「やっとその名前で呼んでくれたね！」

そう言ってお互いに笑い合う2人を見ながら、上手くいったと確信する。

「ぶいきゅあ〜！」

エルがそう叫び、2人の手に新たなスカイトーンが渡る。

それはスカイとプリズムのカラーが合わさったスカイトーンで、2人の友情の力の結晶と言えるものだった。

「さて、新しいスカイトーンの力、見せてもらおうとしよう」

スカイとプリズムが同時に新たなスカイトーンを起動し、マイクに変化したミラー
ジュペンにセットする。

「スカイブルー！」

「プリズムホワイト！」

プリズムはペンを右手から左手に持ち替え、スカイと手を繋ぎ、お互いのペンを上に掲げる。

すると、上空にディスクのようなものが現れ、そこから光がランボーグに降り注ぐ。「か、カバトントン」

その攻撃に危機感を覚えたのか、カバトンは退避した。

だが、すでに2人の必殺技を受けていたランボーグはそのまま攻撃を受け続ける。

「プリキュア！アツプ・ドラフト・シャイニング！」

そして、ランボーグは円盤に吸い込まれていき、その後勢いよく風が吹き出し、そのまま押し出されるように2人は前へ出る。

「スミキッター」

そうして、ランボーグは消え去るのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「これが2人の新しい技か…すごいな…」

まあ、色々あったけどソラが元気になつて良かった…2人の友情も深まったみたいだし、良い感じだ。

そんなことを思いながら、変身を解除する。

「ソウヤー！元に戻りましたね！」

「そうみたいだ……良かった良かった……ずっと女の子のままはちよつと困るしな」

変身を解除した俺は、スカイに声を掛けられてそう返した。

「ふふっ！良かったね！ソウヤ君」

「ああ……2人もさらに仲良くなれたみたいで良かったよ……さて、どうする？そろそろ帰るか？俺としてはもうちよつとゆっくりしたいところなんだけど」

「そうですね……もう少しゆっくりしてから帰りましょう！」

「そうだね！」

そう言いながら、2人は変身を解除し、何故か俺の腕に抱きついてきた。

「へ？どういうこと？なんで、急に抱きついてるの？まさか、また監禁する気か!？」

「……うう、すみません……私のせいで怖い思いをさせましたよね！本当にごめんなさい

！……でも、これはそういうのではなくてですね……」

「ああ……ごめん。ちよつと警戒しちやつてた……よくよく考えると今のソラがそんなことするわけなかったのに……ごめん」

「いえいえ！今回に関しては完全に私が悪いので！」

「良いよ！今は別に気にしてないし。それよりどうしたの？」

「はい……あの、その……ソウヤのぬくもりを感じたかったです……これが現実だつて思えるように」

「…そっか…そういうことならソラの気が済むまでいくらでも抱きついてくれてて良いよ」

「ソウヤ…！ありがとうございます…！大好きです！」

そう嬉しそうに言いながら、ソラは抱きしめる力を少し強くした。

「…うん、やっぱりそうだ…私もソウヤ君のこと…」

「ましろさん？どうかした？」

「ねえ、ソウヤ君…私も、いつの間にかソウヤ君に染められちゃったみたいだよ」

「えっと、どういう意味？」

「さあ、どういう意味だろうね？ふふっ！」

俺は笑顔を見せながらそう口にするましろさんを見て、頭にクエスチョンマークを浮かべるのだった。

学校に行こう!

「よし、準備完了!」

そう言いながら私服に着替えて、部屋を出る。

「ソウヤ!おはようございます!」

「うん、おはよう」

そんな風にソラと挨拶を交わしていると、ましろさんが制服に着替えた状態で部屋から出てきた。

今日は新学期が始まる日で、ましろさんは今日から学校に行く。

「ましろさん、おはようございます!」

「おはよう、ましろさん。今日から新学期だね」

「2人共、おはよう!」

「それにしても…制服姿のましろさんって結構新鮮だな…」

「まあ、制服姿を見せるの初めてだからね…」

「確かに…制服、似合ってるよ」

「そう?ありがとう…ソウヤ君」

少し照れくさそうにそう言うましろさんを見ながら、時間を確認する。

「と、そろそろ行かないとな…あ、そうだ…ソラ、俺も今日は学校に行くから」

「えっ！ソウヤ君も？でも、ソウヤ君は学校の生徒じゃないけど…」

「ああ、それに関しては安心して。ちゃんと学校から許可をもらってるから」

スカイランドの学校は誰でも出入り可能だが、こっちの学校は部外者は立ち入り禁止だからな…さすがに事前に許可を取らずに入ったりはしない。

「それなら大丈夫だね！じゃあ行こっか！ソウヤ君」

「うん、行こう」

「では、私は2人をお見送りします！」

そうして、俺達は学校に向かうことになった。

「この前、私、逆立ちでどこまで歩けるのかっていうのをやってみたんですけど…」
「あれか…確か、俺が速攻で止めたやつだろ？あの時は、マジで何やってるんだろって
思ったよ…」

「あれ?」

学校に向かう道中で、違和感を感じつつソラと会話していると、ましろさんもそうなのか、少し首を傾げていた。

その後も他愛もない会話を交わしながら、ソラがついてくる。

「ねえ、ソウヤ君…ソラちゃん、このまま学校に入るつもりなんじゃ…」

「さすがにそれは…いや、あり得るかもしれないな」

「あり得るの!?!」

「スカイランドにも学校はあるんだけどさ、スカイランドの場合は誰でも学校に入れるんだよ…もしかしたら、ソラはこっちの学校も同じものだと考えているのかも…」

「そうなの!?!どうしよう…」

「とりあえず、ソラに言ってみよう」

そうして、ソラに視線を移す。

「ソラ、1つ言い忘れたことがあるんだけど…」

「言い忘れたことですか?」

「こっちの学校はスカイランドと違って、部外者は入っちゃだめなんだ…」

「そうなんですか!?!知りませんでした…ということは、ソウヤも入れないんじゃないですか?」

「いや、俺の場合は学校に事前に許可をもらつて、今日来ても良いって言われてるから問題ないよ」

「なるほど…：そうだったんですね…：わかりました！では、お家で2人が帰ってくるまで待つてますね！」

「うん、待つててくれ！ソラにも良い報告が出来ると思うから」

「はい！待つてます！」

そんな話をしてしていると、校門の近くへと辿りつき、ソラは見送りをそこまでしてくれた後、家に帰つて行つた。

「そういえば、ソウヤ君…：今日は学校にどんな用事があるの？」

「それは…：つと、先生に挨拶をしないと」

そうして、校門の前に立つていた先生に声を掛ける。

「おはようございます！すみません、今日学校見学をさせて頂くソウヤ・ハレワタールです…：職員室はどこでしょうか？」

「ああ！海外の学生さんですね！少々お待ち下さい！」

「えっ！学校見学…：？それにハレワタールって…」

ましろさんがやつてきて、そう尋ねる。

「もしかしてお知り合い？なら、彼を職員室まで案内してくれないかしら？…：今、ちよつ

と手が離せないの……」

「わ、わかりました!」

そう驚きつつも、ましろさんは俺の手を引いて学校の中へと向かう。

「学校見学に来たんだね!それなら早く言ってくれば良かったのに!……そういえばどうしてハレワタールなの?ソウヤ君とソラちゃんは姉弟とかじゃないよね?」

「うん、そういうわけじゃないよ。実はソラを学校に通わせてあげたくてさ……その下見のためにソラの弟って言つて、ヨヨさんに学校見学を予約してもらったんだよ」

「そうだったんだ……でも、それならソラちゃんと一緒に見学すれば良かったんじゃない?」
「どうせなら、サプライズにしようかなって思つてさ……それに、ソラはこっちの世界の学校については詳しくないだろうから、色々とやらかしそうで怖いし……」

「うん……それは否定しきれないかも……」

「とにかく、そういうわけだから、悪いけど案内してもらつても良いかな?」
「もちろん!任せて!」

そうして、俺はましろさんに連れられながら職員室へと向かうのだった。

／／／／／／／／／／／／／／

「ソウヤ君!他に行きたいところはある?」

「そうだな……じゃあ、次は……」

職員室に案内してもらった後、中でおおまかな説明を聞いた後、ましろさんのクラスで授業風景を見学させてもらった。

そして、休み時間になると、ましろさんがこんな風に声を掛けてくれる。

「じゃあ行くっか!」

「ありがたい。でも良かったの?せつかくの休み時間なのに案内してもらっちゃって」

「全然良いよ!むしろ、その方が私としても嬉しいし…」

「嬉しいの?」

「うん…ほ、ほら…この学校の見学をしたってことは、ソウヤ君も通う予定ってことでしょ?3人で学校に通えたら嬉しいなあって…」

顔を赤くしながらましろさんはそう言う。

なんか誤魔化されているような気がしないでもないけど…まあ良いか…一緒に学校に通うことが出来れば俺も嬉しいし。

「まあ、確かにね…ただ、ソラはともかく俺まで通うとなるとヨヨさんに負担が掛かりそうで申し訳ないんだよね…」

ソラー人なら問題はないだろうけど、俺まで通うとなると、ヨヨさんの負担が大きくなりそうだ。

「大丈夫だよ!おばあちゃんはソウヤ君が学校に行くことを負担に思ったりしないと思

うし」

「そうかな…それなら良いんだけど…」

「うん！」

そんなふうな会話しながら、学校内を歩く。

うーん…なんかソラがないのが変な感じだな。

「ソウヤ君？」

「と、ごめん…ソラがいないと変な感じだなと思ってさ…最近はず人で過ごすのが当たり前前みたいな感じだったからかな？」

「そうだね…ソラちゃん、今何してるんだろう？」

「まあ、ソラのことだから、家事とかやってるんじゃないかとは思うけど…もしかしたら、俺達がいなくて寂しがってたりするかもな」

「そうかもね…今日は授業が終わったら、一緒にすぐ帰ろっか！」

「ああ、そうだな！それじゃあ、引き続き案内頼んで良いかな？」

「もちろん！」

そうして、俺は引き続きましろさんに案内をしてもらったのだった。

メーカーマジック

「ソウヤもましろさんも、学校に行つてしまいました…：なら、私は私のやるべきことをしましう！」

そうして、私は家の掃除を始めました。

「普段、この家でお世話になつてゐる恩義です！」

家中の廊下を掃除し、部屋の中の掃除も始めます。

「わああつ！なんですかこれ！」

掃除用のこの世界の機械を使おうとすると、誤つて自分の服を吸つてしまいました。

苦戦をしつつもなんとか掃除を終え、次は洗い物です！

「やることいっぱいです！」

そうして、次々と用事をこなしていくと、あつという間に…

「やること、なくなつてしまいました…」

どうしましょう…：まだまだ2人が帰つてくるまで時間があります。

「…ヨヨさんの所に行つてみましょう」

そうして、私はヨヨさんの部屋へと向かいました。

「何か手伝えることはありますか？」

「ええ。ちょうど良かったわ」

そして、ヨヨさんに促されるまま、お手伝いを始めました。

スカイランドに繋がるトンネルを開くために必要な材料をすり潰さないといけないようで、それをやっていきました。

「結構力がいらしますね！これ……！」

「えるうく？」

「トンネルを開くまでにはたくさんの手順が必要だから助かるわ」

「お役に立てて良かったです……それと、この間はごめんなさい！私、自分のことばかりで……」

あの時、ヨヨさんにトンネルのことで酷いことを言ってしまった……それに、追い詰められていたとはいえ、ソウヤを監禁するような真似までして……

うう、謝っても謝りきれません。

「良いのよ、気にしないで。ソウヤさんも気にしてないと言っていたわよ」

「ソウヤが？」

「ええ。ソラさんがまだ気にしているようだったら、そう伝えてほしいと」

「そうだったんですね…」

ヨヨさんの言葉を聞いて、胸が温かくなっていく…ソウヤの優しさに心が満たされていくのを感じます。

今すぐにでもソウヤに会いに行きたい。

「ソラさん？どこに行くの？」

「はっ！すみません！体が勝手にソウヤの所に行こうとしてしまったみたいです…」

「うふふ！ソラさんは本当にソウヤさんのことが大好きなのね」

「…はい、大好きです！」

「うふふ！…そういえば、今日、学校を見てみてどうだった？」

「それは…とても楽しそうだと思います！」

「あなたも行ってみたい？」

「えっ…？い、いえ…私にはこの家でやらなければいけないこともありますし…」

思わずそう返してしまいました。

「そう…？」

ヨヨさんの言葉に、私は答えることができませんでした。

本当は…でも、それは迷惑になってしまふ…ソウヤだけならともかく、私まで行くことは難しいと思いますから。

本当は、私とソウヤとましろさんの3人で学校に行けるのが一番嬉しいですけど。

「ソラさん、ちよつとまた買い物頼める?」

「買い物ですか?わかりました…」

そうして、ヨヨさんからメモを受け取り、私は買い物に向かいました。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「これもトンネルを繋げるための…」

そうしてメモを眺めていると、近くの会話が聞こえてきました。

「ついにパウダーフレグランス、買っちゃったね!」

「アハハっ!パフパフしようよ!」

どうやら、目の前のお店で買ったものについて友達と話しているようです。

今ここに、ソウヤとましろさんが居たら、私達もあんな感じで話していたんでしょうか…なんだかんだソウヤも付き合ってくれるでしょうから、きつとそうになっていたでしょう。

「ソウラちゃん!」

「はいいい!」

いきなり後ろから声を掛けられ、驚いた私は思わず振り返る。

「あげはさん！」

「コンちゃー！」

「こんにちは…えーつと、あげはさんはどうしてここに？」

「そんな警戒しないでよ…それより、どうかしたの？なんか浮かない顔してたよ？」

「いえ…そんな大したことでは…」

「OK！とりあえず気分アゲてこ！」

「え…？」

「ちよつと付き合っつて！」

「は、はあ…わかりました」

何だかよくわからないまま、私はあげはさんに付いていくことにしました。

そして、あげはさんが連れてきてくれたのはさつきのお店の2階にある喫茶店のような場所で、あげはさんは小さな花火が刺さっているパフェをスマホで撮っていました。

そして、そのパフェを食べさせてもらい、少し元気が出ました。

「元気出た？」

「はい！…それと、初対面の時はすみませんでした！私、めちゃくちゃ警戒してましたよね…」

「あはは！全然気にしてないよ！ソウヤ君が大体の事情を聞かせてくれたし」

「ソウヤが？じゃあスカイランドのこととかもですか？」

「まあ、ホントに大まかな事情だけだけど…あ、ソウヤ君を責めないでね…私が教えてほしいって言ったから、教えてくれただけなんだ」

「そうだったんですね…」

ソウヤがあげはさんに…おそらく、前にカバトンと戦った時に、あげはさん達の様子を見に行った時ですね…この様子だとソウヤは前世のことは話していないみたいです。

まあ、前世のことは話せませんよね…それを私とましろさんには話してくれたということ、それだけ信頼してくれているということ…ふふっ！なんだか嬉しいですよ！

「うん、そうなんだ！…そういえば、今日は1人でどうしたの？ソウヤ君もいないみたいだけど」

「それは…今日、ましろさんは学校で…ソウヤも何か用事があると言って学校に向かってしまつて…私はヨヨさんに言われて、お使いに…」

「そっか…じゃあソラちゃんが浮かない顔してたのは、2人がいなくて寂しかったから

？」

「そうですね…寂しいです…とても」

最近は3人でいるのが当たり前で、それが普通だったから…せめて、ソウヤが居てくれれば、こんなに寂しい想いはしなかったでしょう。

もちろん、ましろさんと離れるのも寂しいですが、なによりソウヤが近くに居ないのが寂しい。

まるで心にぽっかり穴が空いたような…世界が色を失ってしまったかのような…そんな感覚に陥ってしまう。

ついには、ソウヤと一緒に居るましろさんが羨ましいとさえ思ってしまう。

「なるほどね…でも、それは伝える相手が違うんじゃない?」

「へっ?!それはそうなんですけど…改まって伝えるのはなんだか恥ずかしいです…」

「ふふっ!それじゃあもうちよっとだけ付き合ってよ!」

そう言つて、あげはさんは私の奥に連れて行ってくれました。

そこには、いろんなメイク道具があつて、あげはさんはそれを選んでいました。

「あげはさん…私、メイクは…」

「じつとしてて」

「は、はい…」

「メークはさ、ただ美しくなれるだけじゃない…ちよつとの勇気が足りない時、力を貸してくれるんだ」

そう言いながら、あげはさんはメークを続ける。

「仕上げにもつとキラキラ〜！」

「すごい…キラキラです…それに、良い匂い」

「キラキラつてアガるよね！」

「はい！今なら何でも出来そうな気がします！」

「よし！それじゃあソラちゃんの想い、2人に伝えに行こつか！」

「はい！行つてきます…あげはさん、ありがとうございます！では！」

あげはさんにそう伝え、私は2人の元に向かうのでした。

「青春だね！」

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ソウヤ君！一緒に帰ろ！」

「うん！帰ろうか！ましろさん、今日はありがとう！おかげでこの学校についてよくわかったよ」

「ソウヤ君の力になれて良かったよ！」

「ホントに助かったよ！それじゃあそろそろ行こう。ソラが寂しがっているだろうし」

「そう、だね…」

「ましろさん？」

なんだか元気がなさそうなましろさんに思わず声を掛ける。

「あつ、ごめん…ソウヤ君との学校見学が楽しかったから、ちよつと名残惜しいというか…」

「そうだな…俺も名残惜しいかな…まあでも、俺も学校に通えたら、毎日会えるだろうし、大丈夫だよ」

「うん！そうだね！」

そんな話をしながら校門から出ると、目の前で見覚えのある人物が過ぎ去って行った。

「ソラ（ちゃん）!?!」

「2人共、良かったです！」

「こんな所でどうしたの？」

ましろさんがソラにそう尋ねる。

「実は…2人に伝えたいことがあって…」

「うん？なんかソラ…いつもと違うような…」

「…ソラ、もしかしてメークしてる？後、なんかキラキラしてるな…確かパウダーフレグランスって言うんだっけ？…うん、キレイだ」

「ふえ!? あ、えつと…その…ありがとう、ごさいます…」

顔を赤くして、ソラがそう口にする。

「…ソウヤ君は誰にでもそういうこと言うの？」

「ましろさん、そんなわけないだろ…ソラとましろさんぐらいにしか言わないって…こんなこと」

「えっ!？」

何故か2人同時に驚かれ、ましろさんまで顔を赤くしている。

俺は自分の思ったことを言っただけだし、なんならちよつと照れくさいぐらいなんだけど…でも、そう思ったんだからしょうがない。

「そ、そうなんだ…今日のソウヤ君、すごくグイグイ来てくれるなあ…嬉しいけど、ドキドキしちゃうよ…」

「同感です…もう、ソウヤは…」

「2人でなに話してるんだ？」

「な、何でもないよ!それで、ソラちゃん、私達に伝えたいことって？」

「そ、それは…」

「だーっ！ストップ！ストップ！」

ソラが俺達に何かを伝えようとした瞬間、道路警備員のような格好をしたカバトンが乱入してきた。

「あなたは！」

「また現れましたね！カバトン！」

「タイミング悪すぎだろ…後にしてくんない？」

俺はそう言いながら、カバトンを睨みつけるのだった。

最速決着

「ソウヤの言う通りです！ タイミングが悪いです！ さっさと帰ってください！」

「そうだよ！ 私達の邪魔しないでよ！ せっかくソウヤ君の言葉に嬉しくなったのに！」

「ハッキリ言つて、邪魔です！ あなたに割く時間は1秒だつてありません！」

めちやくちや言うじゃん……まあ、俺も同意見だが。

ソラの伝えたいこともちゃんと聞きたいし、2人との時間を邪魔されるのは良い気分はしない。

正直、さっさと終わらせたい。

「……というわけだから、ランボーグを呼ぶなら早くしてくれ……さっさと終わらせたいからさ。まあ、一番はお前が諦めて帰ることだけだ」

「ムカア！ それなら、望み通りにさっさとやってやるのねん！ カモン！ アンダーグエナジー！」

そうして、カバトンがヘルメットのような姿をしたランボーグを呼び出した。

「2人とも、いこう！」

「うん！やろう！」

「はい！ヒーローの出番です！」

そして、ソラとましろさんはプリキュアに変身する。

「無限にひろがる青い空！キュアスカイ！」

「ふわりひろがる優しい光！キュアプリズム！」

「レディ・ゴー！！」

「ひろがるスカイ！プリキュア！」

／／／／／／／／／／／／／／

「スカイミラーージュ！トーンコネクト！」

マイク状に変化したペンにスカイトーンをセットする。

「ひろがるチェンジ！ナイト！」

ペンにNIGHTの文字が現れ、自分の体を作り変わるような感覚に襲われ、髪が青みがかった長い黒髪に変化する。

そして、ディスク状のステージに舞い降りる。

「煌めきホツプ！」

「爽やかステツプ！」

「晴ればれジャンプ！」

ホツプ、ステツプ、ジャンプと段階を踏んでいき、姿が変わる。

黒のドレスアーマーが装着され、瞳がルビーのような赤い瞳に変化し、黒のロングブーツが装着される。

そして、黒の長手袋が装着され、最後に右肩にマントが装着された。

「静寂ひろがる夜のとばり！キュアナイト！」

「新しいプリキュアまで来たのねん!? うん? ソウヤのやつはどこに行つたのねん?」

「…あなたが知る必要はないわ。スカイ!プリズム!早く終わらせましょう」

俺の言葉に2人も動き始める。

にしても、2人の後ろで変身していたとはいえ、カバトンにいつさい気づかれないとは…まあ、見た目が全然違うから仕方ないのかもしれないが。

そんなことを思っていると、ランボーグによって黒い煙が撒き散らされた。

そして、煙によって視界が悪くなり、思わずむせてしまう。

だが、そんなことはお構いなしに俺はランボーグに接近し、そのまま蹴り上げる。蹴り飛ばしたランボーグは宙に浮かび、たちまち辺りの煙が晴れていく。

そして、それに合わせるように2人がランボーグを蹴り落とす。

「はああああ!!」

そして、ランボーグが地面に叩きつけられる。

「一気に決める!」

そう気合いを入れながら、辺りの5本の槍を出現させ必殺技の準備をする。

「ヒーローガール：ナイトミラージュ!」

5本の槍と共にランボーグへと向かっていき、槍が俺の姿を模して、ランボーグを攻撃していく。

そして、俺は高速で接近した勢いそのままにランボーグにキックした。

「スミキッター」

そうして、ランボーグは消え去るのだった。

／／／／／／／／／／／／／／

「ふう…なんとかなった」

カバトンが撤退し、変身を解除する。

「ソウヤ君、凄かったね！」

「はい！すごくカツコよかったです！」

「あはは…ありがとう。それじゃあそろそろ帰ろう！ソラの伝えたいことは、帰り道の途中にでもね」

「うん、そうしよつか！」

そうして、俺達は帰路についた。

家に向かって歩いていく…ソラはなかなか言い出せないのか、沈黙が続く。

うーん…これは、俺から話題を振った方が良いか？今日、学校に行った理由は、まだ話してなかったし。

「あの!!」

声が被る。

どうやら、ちょうどソラも言おうとした所だったようだ。

「ソウヤから先にどうぞ！」

「いや、ソラから聞かせてくれ。俺の話は別に後でも良いから」

「わ、わかりました…」

そう言つて、ソラは深呼吸する。

そして、意を決して言葉を紡いだ。

「私、今日はすごく寂しかったんです…ソウヤとましろさんがいなくて…だから、私は2人ともっと一緒に居たいです…！それで…出来れば、3人で学校に通いたくなって…」

ソラの言葉に俺とましろさんは顔を合わせて、微笑んだ。

そうして視線をソラに移し、俺が学校に行った理由を話した。

「そう言うと思つて、今日はましろさんの通つてる学校を見学しに行ったんだ」

「えっ!? そうだったんですか?」

「うん! 3人で学校に通いたいねって、ソウヤ君と話してたんだ!」

「じゃあ!」

「ああ。多分ヨヨさんがもう手を回してくれてるんじゃないかな?」

「本当ですか! 嬉しいです!」

本当に嬉しそうな顔をしながら、ソラはそう言う。

「こうしてはいられません! 急いで帰りましょう!」

そうして、ソラは走り出した。

「ソラちゃん、行っちゃったね…」

「よっぽど嬉しかったんだろうな…俺達はのんびり帰ろうか」

「そうだね!」

そう言いながら、ましろさんは俺の手をそつと握った。

「ましろさん？」

「せっかくだから手を繋いで帰ろうよ」

「それは全然良いけど…なんか照れくさいな」

「確かに、ちよつと照れくさいね…でも、悪い気はしないでしょ？」

「まあ、ね…」

「2人とも！早く来てください！…つて、ましろさん！ずるいですよ！ソウヤを独り占めして…ソウヤ！私にもお願いします！」

戻ってきたかと思ったら、そんなことを口にしながらソラは俺の手を握った。

そんなこんなで、俺は2人に手を握られながら家へ帰るのだった。

「では、本当に一緒に学校に通えるんですか!？」

「ええ、手続きは済ませてあるわ」

家に帰ってきた俺達はさっそくヨヨさんに学校見学のことを報告した。

そして、ソラが学校に通えるようになったことを話してくれた。

「良かったな！ソラ」

「はい！」

「うふふ。ソウヤさんも一緒に通えるわよ」

「俺もですか!?!いや、嬉しいですけど…」

俺とソラの入学手続きまで済ましちゃうとか…ヨヨさん、一体何者だ？

そういえば、よくよく考えると、俺はヨヨさんがスカイランドの凄い博学者だつてことしか知らないんだよな。

…まあ、良いか。

別に悪意はなさそうだし…俺としても2人と学校に通えるなら嬉しいからな。

「これで3人で学校に通えるね！」

「うん！俺も楽しみだ！」

転生前は高校生だったから、2度目の学校生活ということになるわけか…まあ、久しぶりの学校生活だ、楽しむとしよう！

ソラとましろさんが居るならきつと楽しいだろうし。

俺は2人との学校生活を楽しみにしながら、嬉しそうにしている2人を見るのだった。

ついに始まる学校生活!

「わあ……!」

嬉しそうに鏡を見ながら、色々とポーズを決めているソラが居る。

制服に着替え終わったからソラを呼びに来ただけ……ちよつとタイミング悪かったかな?

「ソウヤ君? どうしたの?」

「いや、ソラを呼びに来たは良いんだけど、制服にテンションが上がってるみたいでさ……邪魔するのも悪いかなって」

「ふふつ、そうみたいだね! でも、遅刻しちゃうし、呼んだ方が良いと思うよ?」

「だね……おーい、ソラ!」

「ソウヤ! ましろさん!」

俺達に気づいたソラはこちらに駆け寄ってくる。

「ソラ、制服よく似合ってるよ」

「あ、ありがとうございます……ソウヤもすごく似合ってます!」

顔を赤らめながら、ソラはそう言ってくれた。

なんか俺まで照れくさくなってくるな……まあ、ソラに言ったことに嘘偽りはないけども。

「うん！2人共似合ってるよ！」

「ましろさん、ありがとう……それじゃあそろそろ学校に行こうか」

「はい！2人と学校に行くの楽しみです！」

そうして、俺達は玄関に向かった。

そこには、見送りに来てくれたヨヨさんとエルが居た。

「あら？ハイハイ速くなったわね」

「確かに、ハイハイが速くなりましたね！すごいぞ！エル」

ハイハイが速くなったエルの頭を思わず撫でる。

すると、エルは嬉しそうな表情をしてくれた。

もう少し撫でたいところだけど、流石に遅刻するから、ここまでにしておこう。

そうして立ち上がると、エルが寂しそうに手を伸ばす。

「えるう……」

「エルちゃんは私と遊びましょうか。楽しい話ならたくさん知ってるわよ」

そう言いながら、ヨヨさんはミラーパットに絵本の画像のようなものを映し、スライドさせていく。

エルもそつちに興味が移ったのか、ヨヨさんにハイハイで近よって行った。

この分なら大丈夫かな?というか、ミラーパットってそんなことまで出来るのか…すごいアイテムだな。

「ヨヨさんには本当に何から何までお世話になりっぱなしで…」

「そうだな…ヨヨさん、改めてありがとうございます」

「良いのよ。学校生活、思う存分楽しんできて」

「そうですね…でも、もしスカイランドから来たことがバレてしまったら…」

ソラは不安そうに口にする。

確かに、バレたら面倒なことにはなるかだろうな…まあ、そうそうバレないと思うけど、不安な気持ちはわかる。

「フフツ、『案ずるより産むが易し』よ」

「そうそう! 万が一の時は俺もフォローするからさ」

「うん! もちろん私もフォローするから、安心して!」

「ソウヤ…ましろさん…ありがとうございます!」

安心したように笑いながら、ソラがそう口にする。

完全にはいかないけど、少しは安心してくれたみたいだな…良かった。

「それじゃあヨヨさん、エルのことをお願いします」

「ええ、任せてちょうだい。…行ってらっしゃい！」

「「行ってきまーす!!」」

そうして、俺達は学校へと向かうのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ええ…ハレワタールさんと、ハレワタール君は海外からの転校生だ。外国の生活が長いから不慣れなこともあると思うが、そこはみんなでサポートしてほしい」

「ソ…ソラ・ハレワタールです！ソウヤと一緒にましろさんのお家でお世話になってますーよ、よろしくお願いしますー！」

「ソウヤ・ハレワタールです！学校見学の時はお世話になりました！改めて、よろしくお願ひしますー！」

そうして、自己紹介を終えた俺達はそれぞれの席へと案内された。

ソラはましろさんの隣の席で、俺はましろさんの後ろの席だ。

ヨヨさんが手を回してくれたのか、学校がましろさんの後ろに席を用意してくれたよ
うだ。

「緊張しました…私、変なこと言ってますでしたか？」

「うん！大丈夫だったよ！きつとすぐにみんなと仲良くなれるよ」

「そうでしょうか…ソウヤはすごいですね！自己紹介に慣れてましたー！」

「まあね」

前世の経験もあるから、自己紹介には慣れている。

まあ、実は少し緊張したりはしたけど。

「ねえ、2人はなんて国から来たの?」

そんな会話を交わしていると、クラスメイトがソラに質問する。

「スカイランドです!」

「うん?」

俺とましろさんの言葉が重なる。

ソラ?まさか言わないよな?

「それってどこなの?」

「別の世界です!」

その瞬間、俺とましろさんの表情が一瞬凍った。

何言っちゃってるんだ!ソラのバカ!

「ソ、ソラちゃん……!」

「あ……す、すみません!間違えました!」

「ああ……ややこしいこと言っちゃってごめん……実は俺達の国はスカンディナヴィア半島辺りの国なんだ。別の世界っていうのは、所謂、異世界転生もののアニメが好きで、つい

言っちゃったみたいだ」

咄嗟にフオローを入れる。

予め、ヨヨさんにどこの出身にするのか面白いといて良かった！じゃないと危なかったかも。

「へえ！異世界転生もの好きなんだ！例えばどんなの？」

「うーん…有名どころで言うなら、『転スラ』とか？後は『モブセカ』なんかも好きかな？ソラは見てなかったけど、俺がそういうジャンルが好きなのは知ってたから、つい出ちやっただらうな…」

念には念を入れて、俺の知ってるアニメがあるか調べて良かった…クラスの人とそういう話題で盛り上がるためだったけど、意外なところで役に立った。

「あ！そのアニメ、俺も好き！」

「私も好き！グッズとか持つてる？良ければ交換しようよ！」

「いや、残念ながらグッズは持つてなくてさ…」

よしよし、完全にソラの失言については誤魔化せたみたいだな…にしても、めちゃくちゃグイグイ来るな…みんな。

「そういえば、2人は何で名字が一緒なの？姉弟とか？」

「それには色々深い訳があつて…」

「ソウヤ君はどんな女の子がタイプ？」

「えっ!どんな女の子がタイプ…? そうだな…」

いや、これは流石に予想外! 助けて! ソラ! ましろさん!

俺の願いが通じたのか、ソラとましろさんが止めに入ってくれた。

「ストップ! ソウヤ君が困ってるよ!」

「さ、流石に一気に質問されたら困ってしまいますよ…」

「そうだぞ、みんな落ち着け。ハレワタール君が困っているだろう」

先生の言葉によりみんながようやく落ち着いてくれて、席に戻ってくれた。

「た、助かった…」

「ごめん! ソウヤ君! あんまりフォロー出来なかった!」

「大丈夫だよ…ある意味、みんなと仲良くなるきっかけにはなっただろうし」

「私もごめんなさい! つい、スカイランドのことを話しそうになってしまいました…」

「まあ、仕方ないって…結果的には上手くいったんだし、問題なし」

「そうですね…ありがとうございます…ソウヤ」

「うん! どういたしまして」

そんな話をしながら、俺達は朝のホームルームの時間を過ごすのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ソウヤ、ましろさん…私はとんでもないことに気づいてしまいました」
「急にどうしたんだ？」

朝のホームルームが終わり、教室のベランダで3人でのんびりしていると、ソラがそんなことを口にする。

「どうやら私は何でも正直に話してしまうところがあるみたいです…」

「今さら？それに、それ自体は悪いことじゃないと思うけど…まあ、流石にスカイランドについて話すのはやばいだろうけどさ」

「ですよね…ということはクラスに早く馴染むには、これ以上質問されないように目立たない方が良さそうです！」

「うーん、目立たないようにか…なかなか難易度が高そうだけど、大丈夫かな？」

「そうだね…もし、何かあったら2人でフォローしようよ！まあ、ソウヤ君に任せっきりだった私が言うのもただけど…」

「いや…頼りにしてるよ！ましろさん」

「うん！任せて！ソウヤ君」

そんな話をしていると、ソラがどことなく不機嫌そうな顔をしてこちらを見ていた。

「ソラ？」

「むう…最近、ソウヤとましろさんは仲が良すぎると思います…」

「そうかな? そんなことはないと思うけど…」

「私はソウヤ君と仲良くなれたと思ってるよ?」

「まあ、確かに前よりは仲良くなれたかもだけど…」

「やっぱりそうじゃないですか!」

少し拗ねたようにそう言うソラを見ながら、最近、ソラとの時間をあまり取れていなかったことに気づいた。

もしかして、それで拗ねてるんだろうか?…うん。久しぶりに2人でどこかに行こう。

「…そういうえば、最近ソラとのんびりできる時間ってなかったかもな…ソラさえ良ければ、今度一緒に出かけないか? もちろん、2人きりで」

「へっ!? 本当ですか?」

「うん。久しぶりに2人で過ごすのも良いかなって…どう? 嫌なら無理強いはしないけど」

「もちろん行きます! ソウヤとデートしたいです!」

「そっか! じゃあ決定だ」

「はい! 楽しみにしてます!」

嬉しそうにそんなことを言いながら、ソラは教室の中へと戻って行った。

「ソウヤ君…ホントそういうところだよ？私とソラちゃん以外にそういうこと言っちゃダメだよ？」

「言わないって…」

「…やっぱり家で縛った方が良いんじゃない？ソウヤ君って、天然タラシっぽいから、いろんな娘に好意持たれそうだし…」

「怖い怖い！そんな物騒なこと言わないでよ…」

「ふふっ！冗談だよ！そろそろ教室に戻ろう」

「そ、そうだな…」

「今のが冗談に聞こえなかったのは俺だけだろうか…まあ、今は考えないようにしよう。」

そんなことを思いながら、俺も教室へと戻るのだった。

ソラの思いと桜の木

「次はスポーツテストか…」

「そうだよ！…：そういえば、ソラちゃんはスポーツテストやったことある？」

「はい！実はちよつと自信があります！いえ、自信はありますが、あまり目立たないよう、皆さんのちようど真ん中ぐらいの記録を狙います！」

「そうか…」

目立たないようにしようという言葉の通り、ソラは国語の授業の時にも自分から答えることはしなかった。

千里の道も一歩からということわざはましろさんから聞いていたはずなのにそれも答えなかった。

うーん…：確かに目立たないかもしれないけど、それで良いんだろうか？

自分のことを隠したまま学校生活を送るというのは色々とキツイと思うし…：それになにより楽しくないと思う。

まあ、もちろんスカイランドのことを話すのは厳禁だけど、もう少し自分を出しても良いと思うけどな。

「…よし、今回はちよつと本気出すか」

多分、ソラのことだから加減が出来ずに高い身体能力を發揮してしまうだろうし、俺がソラと同じくらいの記録を出した方が色々と都合が良さそうだ。

俺はそんなことを考えながら、スポーツテストに望むのだった。

「はあ…結局、すべての種目で学園の新記録を出してしまいました…」
落ち込みながらソラはそう口にする。

結局、俺の予想通りにソラはすさまじい身体能力を發揮し、新記録を出した。

といつても、そのほとんどが、ソラが意図してやったわけではなく、50メートル走の時は怪我をした人にすぐさま駆け寄ったことで…立ち幅跳びの時は後ろの人のくしゃみに驚いた結果、宙返ししながら新記録を出していた。

ソフトボール投げの時は周りの応援によって、力みすぎたのが原因だ…まあ、これに関しても仕方ないことだろう。

屋内でやったスポーツテストに関しては…うん、ノーコメントで…

「それを言うなら、俺も新記録出しちゃったけどな…まあ、ソフトボール投げは自重し

て、人間の範疇に収まる距離にしたけど」

「どうして、ソフトボール投げだけなんですか？」

「いや、あまりにも飛ばしすぎたら取りに行くの大変だろうし…それに誰かに当たるかもしれないし、危険だろ？」

ソラが投げたボールは、はるか遠くに飛んでいってしまったから、取りに行くのは無理だ…せめて、誰にも被害が及んでなきや良いけど。

「そんな加減が出来るなら、どうして全力を出したんですか？ソウヤは別の世界から来たことがバレても良いんですか？」

「もちろんバレたくはないけど…ソラはもつと自分を出してもいいんじゃないかと思つてさ…俺が本気出しても問題なかったら、ソラも自分を出しても良いってことになるだろう？」

「もつと自分を出す…？」

「そう。スカイランドのことは話せないけど、それ以外の自分のことを話すぐらいは良いんじゃないかな…運動が得意とか、ヒーローを目指していることとかさ…それぐらいなら話しても、みんなと友達になれると思うよ」

俺がそう言うと、ソラは一瞬驚いた顔をした後、言葉を紡いだ。

「ソウヤには敵いませんね…」

「じゃあ、ソラちゃんが目立ちたくなかった一番の理由って、皆と友達になりたかったからっ？」

ましろさんの質問にソラは頷いた。

「そうだったんだ…」

ましろさんは思うところがあるのか、暗い表情をしている。

もしかしたら、ましろさんにも似たような経験があるのかもしれない。

そんなことを考えていると、俺達の目の前に3人のクラスメイトが来た。

おかつぱの女子生徒と、ポニーテールの女子生徒、そして眼鏡の男子生徒だ。

流石に今日転入したばかりだから、名前は覚えていないが、同じクラスメイトだ。

「みんな、どうかしたの?」

俺がそう尋ねると、おかつぱの女子生徒が口を開いた。

「2人とも、すつごくカッコよかったよ!」

「今度オレにも宙返り教えてよ!みんなも教えてほしいって!」

「あんだ、グイグイ行き過ぎ。2人とも困っちゃうでしょう!」

眼鏡の男子生徒をポニーテールの女子生徒が止めながらそう口にする。

うん、なんとなくだけど、この人達は良い人そうだな…まあ、あくまで俺の主観では

あるけど。

「そうだな…そういうのはソラの方が詳しいと思うよ？ソラさえ良ければ俺にも教えてくれない？」

そうソラに伝える。

すると、ソラは笑顔でこう答えた。

「はい！私でよければ！…ただ、ソウヤは宙返りが出来ますし、私と一緒に教えてくださ
いね？」

「あはは…バレちゃったか…オーケー！俺で良ければ手伝うよ！」

「はい！よろしくお願いします！」

これでソラも少しは勇気を出せると良いな。

俺はそんなことを思いながら、笑顔のソラを見るのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／

「ましろさん、ここにっつて？」

俺とソラはみんなと話した後、ましろさんに連れていきたい場所があると云われて屋上へとやってきた。

前世の学校では屋上に入れなかったから新鮮な気分だ。

「私のお気に入りの場所だよ」

「ここがましろさんのお気に入りの場所か…あつ！すげー！桜の木だ！スカイランドに

はなかったから、見るの久しぶりだ！」

屋上から見下ろした先には大きな桜の木があった。

やっぱり桜って綺麗だよな…またこうして見られる日が来るとは。

「あれは桜という名前なんですわね！とても綺麗です」

「そうでしょ？学園が出来た時から、ずっとあそこにあるんだって」

「そうなんだ…きつとあの桜は、ずっとこの学園の皆のことを見守ってきたんだろうな…」

この学園が創立何年なのかは知らないけど、10年以上は経ってそうだし、あの桜はかなりの長寿ってことになると思う。

きつと、あそこには色んな人の思い出があるんだろうな。

「そういえば、どうしてここに連れてきてくれたの？俺としては桜を見せてくれただけでも嬉しいけど、ましろさんの本題は多分別だよな？」

「うん。私もソウヤ君と同じで、ソラちゃんもずっと自分を出しても良いと思うんだ」

そう言つて、ましろさんはさらに話を続ける。

「私もね…入学したばかりの頃、新しい友達と上手く話せなくて…どうしよう、どうしようって気持ちばかり焦っちゃって…そんな時、この桜に元気をもらってたんだ」

「そっか…ましろさんにとつてもこの桜は思い入れがあるものなんだな…」

ましろさんが、さつきあんな表情をしていたのはそういうことだったのか。

「うん…だから、ここに来てもらったんだ。ソラちゃんも私みたいに、この桜から元気をもらえたらなって…」

「ましろさん…」

「ソラ…どうかな？俺とましろさんの気持ちは伝わったか？少しは普段のソラに戻るきっかけになったか？まだ不安はあるかもしれないけど、大丈夫だ…また何かやらかしても俺達がフォローするからさ」

俺の言葉にましろさんも頷く。

「ソウヤ…ましろさん…ありがとうございます！ここからはいつもの私にチェンジしますー！」

「うん、良い感じだ！やつぱりソラは普段のソラが一番だな」

「えへへ…そうですかね？」

「ああ、もちろん！…あ、でもスカイランドについてだけは話さないように気をつけろよ…そこまでバレたら、流石にフォローのしようがないからさ」

「わ、わかつてますよ！ソウヤは心配性ですな…」

「あはは！冗談だよ！ソラなら大丈夫だって信じてる。さて、それじゃあそろそろ教室に戻ろう！ましろさん、ここに連れてきてくれてありがとう…俺もこの場所、すごく気

に入ったよ！」

「気に入ってもらえて良かったよ！ソウヤ君さえ良かったら、時間がある時は一緒に見に来ない？」

「そうだな…見に来よう。桜はずっと咲いてるわけじゃないし、時間がある時は見に行きたい」

まあ、屋上が常に空いているとは限らないし、毎日難しいかもしれないけど。

それでも、久しぶりに桜を見れたから、可能な限りは見に行きたいところだ。

「私も一緒に見に行きたいです！」

「うん！もちろん、ソラちゃんも一緒に！」

そんな会話を交わしながら俺達は教室へと戻るのだった。

転校の挨拶のやり直し

「皆さん！お食事中にすみません！」

お昼休みを迎えた教室で、ソラは黒板の前でそう叫ぶ。

そんなソラの様子に教室の生徒達は疑問を抱いているようだが、それと同時に注目もしているようだった。

「転校の挨拶をもう一度やらせてください！」

「なるほど……その発想はなかったな……まあ、ソラのことをちゃんと知ってもらうにはこの方が良くもされないな」

そんなことを呟きながら、ソラを見る。

すると、ソラは黒板に自分の名前を書いていく。

ルの部分が反転しているが、そんなのは些細な問題だろう。

「私はソラ・ハレワタールです！今はソウヤと一緒にましろさんのお家でお世話になっています！」

「最初の時と一緒にじゃん」

「あんたは少し黙ってて」

さきほど会った眼鏡の男子生徒こと、軽井沢あさひ君の発言に思わず睨みつけそうになるが、同じくさきほど会ったポニーテールの女子生徒、吉井るいさんが止めてくれたおかげでなんとか落ち着けた。

ちなみに、さきほど会ったおかつぱの女子生徒は仲村つむぎさんだ。

話しかけられた時に改めて名前を聞かせてもらい、ようやく名前を覚えた。

「この学校に来た時、最初は目立たないようにしようと思っていました…皆さんと友達になれるなら自分を隠しても良いと…でも、もつも自分を出しても良いと、ソウヤとましろさんが言ってくれました…だから今、転校の挨拶をもう一度させてもらっています」

そう言つて、一度深呼吸をしてソラは口を開いた。

「私は！ヒーローを目指しています!!」

そう言つて、一呼吸置いて、ソラは言葉が続ける。

「だから、体を鍛えていて運動には自信があります！ちなみに、ソウヤも運動がとても得意です！」

「俺のことまで言う必要あった？ソラの自己紹介なのに…」

「私のお話を話すには、ソウヤのことは欠かせませんから！」

「あはは…了解。でも、流石に全部話していたらキリがないぞ？」

「わかってます！ 皆さんには私とソウヤが互いに信頼しあっていることさえ伝わってくれれば良いので！」

「そ、そうか…とりあえず、続けて」

なんか恥ずかしいんだけど…何で皆の前で言う必要があったんだろう…なんか、皆からの生暖かい視線を感じるんだけど。

「はい…私はここに来たばかりで、慣れないことも多くて…でも、ソウヤが傍に居てくれて、ましろさんと友達になって…この学園に通うのもすごく楽しみで…私は皆さんと友達になりたいです！改めてよろしくお願いします！」

そうして、2回目の自己紹介を終え、ソラは深々と頭を下げた。

すると、教室からパチパチと拍手が聞こえてくる。

「話してくれてありがとう！」

「遠い国からようこそ！ヒーローガール！」

「私達、もうとつくに友達だよ！」

「あつ…皆さん…！」

ソラの表情が嬉しそうな表情に変わる。

このクラスの人達、良い人ばかりだ…良かったな、ソラ。

俺がそんな風に和んでいると、教室の扉が突如として開かれた。

「大変だ！なんかもう1人、転校生っぽい奴がいるぞ！」

「転校生…？」

転校生は多分、俺とソラの2人だと思っただけど…もし、他に転校生が居れば話題になるはずだし…でも、俺は少なくともそんな話は一切聞いていない。

一体誰なんだ？

「なんでもモヒカン頭の不良で、購買部のパンを買い占めたり、学食のカレーを飲み干したり、やりたい放題らしい」

「マジか…」

絶対カバトンだろ…あいつ、こんな所まで来たわけ？

まあ、なんであれ放置はできない。

俺はましろさんとソラにアイコンタクトを取り、一緒に教室を出るのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／

「よし、(´▽｀)ならー！」

教室を出た俺は途中で2人と別れ、屋上へと来ていた。

理由はプリキュアに変身するところを誰かに見られるのは非常に困るからだ。

それに周りを見渡しやすいから、カバトンを見つけやすいと考えたからでもある。

「さっそく見つけた！あいつ、桜の木のとこでメロンパンを食べてるな…」

そんな風に見下ろしていると、カバトンが何やら言っているのが聞こえてきた。

「うまつ！目を閉じれば、北の大地でたわわに実ったメロンが舞い踊るかのようなのねん！」

いや、メロンパンにメロンは入ってないんだけど。

そうツツコミをしようと思った瞬間、ソラとましろさんの姿が見えた。

「そのパンは形がメロンっぽいだけで、メロンは入ってないよ！」

ナイスツツコミ！ましろさん！

と、そんなことを考えている場合じゃなかった。

そう考えながら、変身しようとする。

「ソウヤ君？こんなところでどうしたの？」

「仲村さん？そっちこそどうしたの？」

慌ててペンを仕舞い、仲村さんに声を掛ける。

「つむぎで良いよ！3人が教室から出ていったのが気になって、来たんだけど…ソラちゃんとましろんは？」

「ああ…途中で別れたからわかんないな…安心してよ、もうしばらくしたら戻るからさ」

「うん！それじゃあ先に戻ってるね！」

そう言つて、仲村さん…いや、つむぎさんは教室へと戻って行った。

そして、屋上から出ていくのを見送った後、一応扉を開けて確認してみると、つむぎさんの姿はなかった。

その後、扉を閉じて屋上へと戻った。

「ふう…バレルかと思つた…マジで焦つた」

「カモン！アンダーグエナジー！」

どうやら俺が色々とやっている内にカバトンがランボーグを呼び出したらしい。

「しかも、よりよつてあの桜を！許せない！」

あの桜の木にはましろさんも思い入れがあるんだ…倒して、元の桜の木に戻さないと。

「ヒーローの定番だ！」

「静寂ひろがる夜のとぼり！キュアナイト！」

キュアナイトに変身し、屋上から飛び降りる。

「ナイト！カッコいい登場の仕方ですね！」

屋上から飛び降りると、すでに2人はプリキュアに変身していて、臨戦態勢を取つて

いた。

「そうでしょ？ さあ、行きましようか！ 2人共！」

俺の言葉に2人は頷く。

そして、俺達はランボーグとの戦闘を始めた。

「ランボーグ！」

ランボーグがそう叫びながら、桜の砲撃を放つ。

それを回避し、プリズムが白色の気弾をランボーグにぶつける。

「たあつ！ はあつ！」

「ラ、ランボ……」

プリズムの攻撃を受けたランボーグが怯む。

そして、ランボーグが怯んだ隙にスカイがキックをしてランボーグをノックバックさせた。

それを見た俺は瞬時にランボーグの後ろに回り、そのまま蹴り落とした。

すると、ランボーグがうつ伏せに倒れた。

ランボーグの近くに居たカバトンはそれに巻き込まれ、ランボーグの下敷きになっていた。

「ギャー！ 重ーっ！ お前、何ト〜ン？」

「一応念のため、これもくらえ！」

そうして槍を出現させ、それをランボーグに投げつけ動きを封じる。

「今だ！」

「はい！プリズム、いきましよう！」

「うん！やろう！スカイ！」

そうして、2人は必殺技を放つ。

「スカイブルー！」

「プリズムホワイト！」

「プリキュア！アツプ・ドラフト・シャイニング！」

2人が放った必殺技により出現していた円盤から差している光にランボーグが吸い込まれていく。

「スミキッター」

そして、光に吸い込まれていったランボーグは消滅し、元の桜の木の姿に戻るのだつた。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「転校初日…色々とありすぎて、あっという間に終わってしまいました！」

「終わりよければすべてよし、だよ！」

「ましろさんの言う通りだ。色々であったけど楽しかったし！」

ランボーグを倒したあと、元に戻った桜の木の下で、2人とそんな会話を交わす。

「そうですね！私も、とても楽しかったです！」

ソラが満面の笑みを浮かべながらそう口にする。

「そっか、それは良かった！あつ、そうだソラ」

「はい？」

「今度のデート、楽しみにしててくれ」

「……はい！楽しみにしてます！」

……宣言した以上、頑張って考えないとな。

ソラも楽しみにしてくれてるしな。

「あ、居た居た！ヒーローガール！」

ソラと話していると、軽井沢君がそんなことを言っていた。

「ソウヤ君！ソラちゃん！ましろん！一緒に帰ろう！」

つむぎさんのその言葉を聞き、俺達はみんなと一緒に帰路につくのだった。

ソラとのデート

「それで、どうしたのソウヤ君…君が私を呼び出すなんて」

喫茶店に呼んだあげはさんがそう質問する。

ちなみに俺は携帯を持っていないので、ヨヨさんの携帯を貸してもらった。

「今日はごめんなさい…実はあげはさんに相談したいことがあります」

あげはさんを喫茶店に呼んだのには理由がある。

「相談したいこと？」

「実は、今度ソラとデートしようっていう話になってるんですけど、ソラシド市のデートスポットとか知らなくて…あげはさんなら何か知っているかなと」

「なるほどね！ソラちゃんとデートかあ…良いね！青春だね！」

あげはさんがノリノリで話しているのを見て、少しホツとする。

「でも、どうして私に？ましろんに聞くっていうのもアリだと思うけど…」

「一応、ソラには当日までの楽しみにとってもらおうかと思ってまして…なら、家の中で話すわけにもいかないなあ」と

「なるほどね！OK！そういうことなら私に任せて！」

「ありがとうございます！あげはさん」

「それじゃあ、今から私がいくつか候補を見せるから、どれが良いかはソウヤ君が選んでね」

「はい！よろしく願います！」

そうして、俺はあげはさんにくっつかデートスポットを見せてもらったのだった。

「うーん…」

「どう？どれが良いか決まった？」

「それが…どれも良いと思うんですけど、なんとというかしっくりこなくて…何ですかね？」

「なるほどね…」

あげはさんはそう言いながら、考え込んでいる。

なんか申し訳ないな…せつかくいろいろな候補を出してくれたのに…本当に、何でしつくりこないんだろう？

「ソウヤ君、多分だけど…」

「はい…」

「ソウヤ君が行きたい場所じやなかったんじやないかな？」

「俺が行きたい場所じやなかった？」

「うん。ソウヤ君がソラちゃんと一緒に行きたい場所じやなかったんだよ、今まで見せたデートスポットは」

「だから、じっくりこなかった？」

「うん、多分ね…だから、想像してみても…ソウヤ君はソラちゃんと、どこに行きたい？」

「ソラと行きたい場所…」

あげはさんに尋ねられ、頭を働かせる。

そうして考えた結果、1つの場所が思い当たった。

「シヨッピングモールですかね…前にソラとましろさんと服を買いに行った時以来、行ってなかったから…まだまだ見てない所もあるし、一緒に行きたいかな…いや、我ながらありきたりだとは思いますが…」

「そうかな？ 私は良いと思うよ！…よし、それでいこう！ソラちゃんとのデートの場所！」

「…そうですね！ソラに喜んでもらえると良いんですけど…」

「大丈夫！きつと喜んでくれるから！」

「ですかね…まあ、とりあえずやってみます！今日は相談に乗ってくれてありがとうございます！
ございます！あげはさん」

「どういたしまして！また相談したいことがあったら、いつでも呼んでくれて良いからね！」

「はい！その時はまたお願いします！それでは失礼します！」

「うん、またね！」

あげはさんの言葉を聞いた後、一度お辞儀をして、喫茶店を後にするのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ソウヤ！おはようございます！」

「おはよう！それじゃあ行くかうか！」

そして迎えたデート当日、俺達は朝食を食べ終え、ショッピングモールへと向かうための準備をしていた。

「2人も、今からお出かけ？」

「ましろさん、おはよう！うん、今からお出かけだ！」

「そっか…エルちゃんのこととは私達に任せて、楽しんできてね」

「はい！ありがとうございます！ましろさん」

ソラがそう返すのを聞いて、玄関の扉に手を掛ける。

「あ、待って！ソウヤ君！」

ましろさんに声を掛けられ、立ち止まる。

すると、ましろさんが俺の耳元に顔を寄せ、囁いた。

「…今度は私もデートしてね？ソラちゃんばかり見てちや、やだよ？」

囁かれるのに慣れていないせいかわ、どことなく寒気がする。

「わ、わかったよ…とりあえず考えてみるよ」

これは、またあげはさんのお世話になりそうだな。

俺がそんなことを思っていると、ましろさんが離れ、笑顔で言葉を紡ぐ。

「うん！ありがとう！気をつけて行ってきてね！」

「はい！行ってきます！」

「うん、行ってきます！」

そう言って、俺とソラは家を出た。

「シヨッピングモールですか！久しぶりに来ましたね！」

「うん。まだ回ってないところもあるし、ソラと回りたくなって…いや、我ながらありき

たりだとは思わんだけどさ…どうしてもソラと一緒に行きたくて」

「ソウヤ…ふふっ！ありがとうございます！私のために一生懸命考えてくれたんですよ…とつても嬉しいです！」

「まあ、喜んでくれたなら良かったよ」

「ふふ！実は私もソウヤとシヨツピングモールに行きたかったんです！色々あつて出来ませんでしたけど、王国に入る前に、露店巡りをしようつて約束しましたから！」

「そうだったな…なんやかんやあつて出来なかつたか…それにしてもよく覚えてたな…王国に入る前にちよつと話したぐらいなのにな」

「当然です！ソウヤの言葉は一言一句に至るまで全て覚えてますから！」

「すごい記憶力だな…」

ちよつと怖いぐらいだ…まあ、そんなことは口が裂けても言えないが。

「…よし、ともかく行つてみようか！シヨツピングモールで露店巡りといこう！」

「はい！行きましょう！」

そう言いながら、ソラは俺の手を引つ張つて走り出した。

「ちよつ！ソラ！場所わかつてるのか!？」

「わかりません！でもなんとかありますよ！ソウヤが居ますから！」

楽しそうに笑つて走るソラを見ながら、俺も釣られて笑みを零すのだった。



「見てください！ソウヤ！変身ヒーローのアイテムです！こんなにいっぱいあるということは、実はこの世界に変身ヒーローはいっぱいいるのでは!?」

玩具が売っているゾーンにあるたくさんの変身ヒーローアイテムを見て、ソラはテンションが上がっているようだ。

「これはただの玩具だよ…本当に変身出来るわけじゃないんだ…要はなりきりグッズみたいなものだ。これをヒーローに憧れる子供達が遊んだりするんだよ」

まあ、最近は大人も普通に集めたり、遊んだりしてるけど。

「そうなんですわね！やっぱりどんな世界でもヒーローに憧れる人はいるんですね！…そういうえば、ソウヤにとつてのヒーローは誰ですか？」

「俺にとつてのヒーローか…うーん、内緒！」

「え〜！教えてくださいよ！」

「まあ、そのうち教えるよ…他のところも回ろう！」

「むう…気になりますけど、今はソウヤとのデートを楽しみます！」

そう言つて、ソラは俺の手を引きながら次の目的地に向かって歩き出した。

「ソウヤ！あれはなんですか？」

そう言いながら、ソラが指差したのはゲームセンターだった。

「そういうえば、シヨツピングモールによつてはゲームセンターがある所もあるんだっけ？」

「あれはゲームセンターだな…お金を入れれば、いろんなゲームで遊べるんだ。そういうえば、写真が撮れるやつもあるんだっけ…確か、プリクラだっけ？あれ？今は別の名前なんだっけ？…まあ、良いか。せつかくだし、一緒に撮る？」

「はい！撮りたいです！」

「よし！それじゃあ撮ろうか」

そうして、俺達はプリクラで写真を撮るのだった。

そして、プリントされた写真を取り、俺とソラの分を分ける。

「ソウヤ…この写真、大事にしますね！」

「うん。俺も大事にするよ」

「えへへ…！私とソウヤの宝物ですね」

「そうだな…喜んでもらえて良かったよ…これは、俺にとつても宝物だね」

一緒に撮った写真を本当に宝物のように持っているソラを見ながら、俺もこの写真は大切にしようと思ふのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「うーん！このクレープ美味しいです！」

「本当に美味しいな！」

「そうだ！食べさせあいつこしましようよ！」

「えっ…本気か？」

「王国に入る前に、露店巡りをしながら食べさせあいつこしようって言ったじゃないですか！」

「いや、確かに言ったけどさ…まあ、良いか。せつかくのデートだしな…ほら、あーん」
俺の持っているクレープをソラに近づける。

すると、ソラはそのクレープを食べた。

「美味しいです！ソウヤもどうぞ！あーん」

「はむっ！うん、美味しいなこれ…ちよつと恥ずかしいけど」

「確かに、ちよつと恥ずかしいですね…でも、それ以上にソウヤとこうやって過ごせるのが嬉しいです」

ソラはそう言って照れくさそうに笑みを浮かべる。

「ソウヤ！今日はすごく楽しかったです！」

「俺も、すごく楽しかった！また来よう！」

「はい！また2人で来ましょう！」

「ああ！でも、ソラ…まだ時間はあるし、もっと色々と回ろう！もちろん、ショッピングモール以外に行きたい所があるなら、全然それでも構わないけどさ」

「そうですね！私も、もっとソウヤとの時間を過ごしたいです！」

「わかった。それじゃあ次はどこに行こうか？」

「そうですね…次は…」

そうして、俺とソラは残りの時間を心ゆくまで楽しんでから、家に帰るのだった。

再びの相談と謎の鳥

「ちよつと早く来すぎたかな？」

あげはさんにましろさんとのデートについて相談したくて呼んだんだけど……待ち合わせ場所に来るの早かったな。

「ちよつと！私、人を待ってるんですってば！」

「そんなこと言わずに俺達と遊ぼうぜ」

ふと、視線を移すとあげはさんが3人の男達に囲まれていた。

それを見た瞬間、俺はすぐさま走り出していた。

「お待ちせしました！」

「ソウヤ君！」

「あ？お前がこのお姉さんが待ってた人か……」

「はい……それじゃあちよつと黙ろうか」

そう言つて、高速で3人の首に手刀をぶつけていく。

すると、3人まとめて気絶した。

「えっ！すごっ！手刀で気絶するの初めて見た！」

「まあ、後は他の人達に丸投げしましょう…あげはさん、行こう」

そうして、あげはさんの手を引き、ソラとのデートの相談に乗ってもらった喫茶店に向かった。

「さつきは助かったよ！ありがとう！ソウヤ君」

「あげはさんが困ってましたからね…そりゃあ助けますよ」

「嘘だね。君は私じゃなくても助けてたよ」

「まあ、確かに他の人でも助けていたと思います…でも、もしあげはさんとまったく知らない人を天秤にかけることになったら、俺はあげはさんを選びますよ」

「そ、そっか…ちよつと予想してた答えとは違って、びつくりだけど…ありがとう」
少し恥ずかしそうにそう言いながら、あげはさんは一瞬、視線をそらした。

もしかして、余計なことしちやったかな…まあ、あげはさんがどう思ったかはわからないけど、俺はあげはさんを助けたことに後悔はない。

「そ、それで今日はどうしたの？またソラちゃんとのデートの相談かな？」

「いや、実は今回はましろさんとのデートの相談でして…」

「えっ！ましろんとのデート!?…ソウヤ君、まさか女の子を取っ替え引っ替えしてるの？」

「待ってくださいって！そんなことするわけないじゃないですか！ましろさんに私も2人きりでデートしたいって言われたんですよ…あの時のましろさんの圧は凄かったんですよ…」

あの笑顔の圧は本当に凄かった…笑顔なのに迫力がやばいもん。

「そっか、ましろんが…ソウヤ君も隅に置けないね！モテモテじゃん！」

「モテてるんですかね？その辺はちよつとわかりませんが…それで、オススメの場所とかありますか？それとも、ソラの時みたいに俺がましろさんと行きたい場所を考えたい方が良いですか？」

「うーん…ましろんはコスメとかも好きだから、『Pretty Holiday』とかどうかな？あ、でもソウヤ君からしたら退屈か…」

「まあ、一応コスメ系統のやつもある程度調べてますし、退屈まではいかないと思います…それに、ソラから聞いた話だと2階には喫茶店っぽい場所もあるって聞いてますし、良いかもしれませんね！」

「ソウヤ君、コスメとか調べたりするんだ…ちよつと意外だね」

「まあ、ある程度把握するのは悪くないかなと…ましろさんの話についていくことも出

来そうですし、そういうプレゼントを選ぶ時にも困らないと思ひまして」

「なるほどね…よし、じゃあ一旦は『Pretty Holiday』に行くとして…その後はどうしたい？」

「うーん…あ、アクセサリーショップに行くとかですかね？ ましろさんも楽しんでくれそうだし…」

とはいえ、あまり高いのは買えないだろうし、見るだけになりそうだけど。

「良いね！ その感じで、どんどんアイデア出してこう！」

「わかりました！」

そうして、あげはさんと話し合いながら、ましろさんとのデートについて考えるのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ありがとうございます！ あげはさんのおかげでなんとかなりそうです！」

「どういたしまして！ またいつでも呼んでよ！ なんなら、デートの相談以外でも呼んでくれていいからね？」

「はい！ あげはさんの都合が良ければですけど…それじゃあ、失礼します」

そう言って、ソウヤ君は喫茶店から出ていった。

「…行っちゃった…なんか寂しいな…」

そう呟いた自分に驚いて、ハッとする。

「私、何言ってるんだろ…ソウヤ君が居なくなつて寂しいとか…それじゃあまるで私が…いや、そんなわけないって」

だつて、最近知り合つたばかりだよ？確かに、助けてくれた時、カツコいいつて思つたし…ソウヤ君が優しい男の子だつていうのはわかつてるけど。

困っている人に手を差し伸べるヒーローみたいで、自分が危ない状況でも諦めてなくて…ランボーグに捕まっていた時もソラちゃんのことを心配してた。

ましろんもきつとソウヤ君のそういうところが好きなのかな。

「いやいや！これじゃあ私もソウヤ君のこと好き…みたいじゃん…うう、私、こんなにチヨロかつたのかな…」

そんなふうには唸っていると、ソウヤ君の声が聞こえてくる。

「あげはさん、良かった！まだ居た」

「ソウヤ君？どうかしたの？」

「いや、何かあるつてわけじゃないんですけど…さつきみたいに変な奴に絡まれるかもしれないし、ちゃんと見送ろうと思ひまして」

「心配して来てくれたの？」

「はい。あげはさんが危ない目に遭うのは嫌なので…あの時一緒に帰つてれば、なんて

後悔はしたくない」

ソウヤ君の言葉にドキドキする。

だ、ダメだつて！これは勘違い…勘違いだつて！

「あ、ありがとう…それじゃあお言葉に甘えさせてもらおっかな」

「よし、それじゃあ行きましようか！俺の傍から離れないようにしてくださいね」

「うん！そうする」

私の返事を聞いたソウヤ君は私の手を引いて、歩き出した。

…もう、勘違いでも良いかな？どうやら私はソウヤ君のことが好きになってしまったみたいだ。

そんなことを思いながら、私はソウヤ君についていくのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「あげはさん、送ってくれてありがとうございます！」

「これぐらいお安い御用だよ！助けてくれたお礼でもあるし」

「いえいえ、そんなことは…あげはさんも気をつけて帰ってくださいね」

「ありがとう！それじゃあまたね！」

そう言つて、あげはさんは車に乗って帰って行った。

あげはさんが帰るのを見届けてから、俺は家へと戻った。

「うん？あれ？屋根の上に少年が…って、急に小さい鳥に変わった？」

そういえば、スカイランドにはプニバード族っていう人間に変身できる鳥さんが居たっけ…そういえば、前に空を飛びたいって言ってたプニバード族の男の子は元気にしてるかな？

夢を叶えられてたら良いんだけど。

そんなことを思いながら、歩を進めると、ソラが屋根の上の鳥さんに話しかけているのが目に入った。

あの鳥さん、絶対プニバードだよな…でも、特に話しかけられても反応してないし、何かわけありなのかもしれないな。

「あーソウヤー！お帰りなさい！」

俺がプニバードらしき鳥さんについて考えていると、ソラが部屋の窓から手を振って、声を上げている。

「ただいま！」

俺もソラの言葉にそう返しながら、手を振って家の中へと入っていった。

ましろとのデートとペアリング

「ソウヤ君！お帰りなさい！」

「ただいま！ましろさん」

家の中に入った俺をましろさんが出迎えてくれた。

さっきの鳥さんの所に行ってみるか…多分、予想通りプニバード族だと思うんだけど。

「ソウヤ君、ちよつと待って！準備するから！」

「ん？準備って？」

「うん？ソウヤ君とのデートの準備だよ」

「えっ…いや、いくらなんでも早すぎない？ついさっきデートプラン考えたばかりなんだけど」

「やつぱりそうだったんだ！ありがとう！ソウヤ君。じゃあさつそく行こつか！」

「ええ…!?まあ、ましろさんがそれで良いなら良いけどさ…じゃあ、行こうか」

「うん！」

そうして、ましろさんの準備が出来るまで待った後、デートへと向かった。

想定よりかなり早めだったけど、デートはする予定だったし問題はないか。

にしても、何で急に今日行くことにしたんだろうか？まあ、とりあえず今はデートについて考えるか。

(まさか、あげはちゃんまでソウヤ君のことが好きだったなんて…これは大変だよ！)

ソウヤが戻る数十分前。

「もしもしあげはちゃん？電話なんてどうしたの？」

『ましろんに言わないといけないことがあつて…』

「言わないといけないこと？」

『実は、さつきソウヤ君にましろんとのデートについて相談されたんだ』

「そうなんだ…ソウヤ君が…」

嬉しいけど、ちよつと複雑かも…私のために色々と考えてくれたのは飛び跳ねるくらいに嬉しいけど、他の女の子と2人きりなのはちよつと嫌だな…

まあ、あげはちゃんなら大丈夫だね！他の女の子だったら大変なことになってたかも
しれないけど。

『それでね…私もソウヤ君のことが好き、みたいなんだ…』

「そっかあ…ソウヤ君のことが好きなんだね!…え?」

『うん…ましろんとは恋のライバルってことになると思うけど、正々堂々とソウヤ君に好きになってもらえるように頑張る!ちゃんと伝えとかなないとズルした気分になるから、こうやって電話したんだ』

「そ、そうだったんだ…ソラちゃんには言わなくて良いの?」

『また会った時に言うよ…ソラちゃんは電話の使い方がわからないかもだし』

「確かにね…あげはちゃん、私も負けないよ!」

『うん!お互い頑張ろうね!それじゃあ今からソウヤ君を送っていくね!』

「あれ?何か聞き捨てならないセリフが聞こえたような…あげはちゃん?あげはちゃん!」

いつの間にかあげはちゃんとの電話は切れてしまっていた。

「これは大変なことになっちゃったなあ…」

「よーし、今日は楽しむよ!」

「了解！俺も全力で頑張るよ！まあ、楽しんでもらえるかはわからないけど…」
「ふふっ！私はソウヤ君と一緒にならどこでも楽しいよ？」

「ありがとう。本当はもうちよつと調べたかったんだけど…まあ、ましろさんが楽しんでくれるなら良いか…」

そうして、俺とましろさんはデートに向かうのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「見て見て！新商品が出てるよ！」

「本当だ！ましろさんにも合いそうだな…試供品とかないか？お、あつたあつた！さっそく試してみようか」

「うん！試してみよう！」

『Pretty Holiday』へとやってきた俺達は新しい香水の試供品を試す。

そうして試した香水は、アロマティックなラベンダーの香りがした…うーん、我ながら例えがフワツツとしてるな…でも、この率直な感想は間違いないと思う。

「良い香りだね…」

「そうだね！なんか優しい香りがする…ましろさんみたいで、すごく合ってる」

「私みたい？」

「ましろさんは優しい人だからな。その優しさはましろさんの強さだし、俺もそんなま

しろさんが好きだよ」

「す、好き!? もう、ソウヤ君! そういうことあんまり言っちゃダメだよ? 勘違いする女の子が出てくるから」

「そんなこと滅多に言わないって…」

「そうなんだ…じゃあソウヤ君が好きって言ってくれたのはすごく貴重なんだね!…嬉しいなあ」

そう言いながら、ましろさんは笑みを浮かべる。

そんなましろさんに思わず見惚れてしまう。

「ソウヤ君、どうかしたの?」

「いや、何でもないよ…そうだ。ちよつとお腹減ってきたし、2階でなんか食べない?」
「そうだね! 食べに行こう!」

「お、来た来た! 実はちよつとこのパフェは気になってたんだよな」

注文した花火が刺さっているパフェを見ながら、そう呟く。

「確かに、ちよつと特徴的だよね！どんな味なんだろう？」

「試しに食べてみる？はい、あくん」

「えっ？食べさせてくれるの？」

「うん。まあ、食べたくないなら、それはそれで良いけどさ」

「ううん！食べたいよ！ありがとう！ソウヤ君」

そう言いながら、ましろさんは口を開ける。

そこにパフェを運び、ましろさんにパフェを食べさせた。

「ん〜！美味しい！ソウヤ君も食べてみて！」

「オツケー！それじゃあ遠慮なく…」

「あ、待つて！せっかくだし、私が食べさせるよ！」

そう言つて、ましろさんは俺のスプーンを取り、パフェを掬う。

「はい、あくん！」

ましろさんに促されるままパフェを口にした。

「おお！美味しいな！」

「だよね！どんどん食べちゃおう！」

「うん！そうしよう！」

そうして、俺とましろさんは交互にパフェを食べさせあいながら、パフェをしつかり

と完食した。

「ふう、美味しかったな！」

「そうだね！また食べに来ようよ！」

「もちろん！また来よう」

「うん！」

「よし、せっかくだし他のも注文してみようか！他にもあるみたいだし…ましろさんは何が良い？」

「そうだなあ…あ！また2人で食べられるやつが良いかも！そうすると…」

そんな会話を交わしながら、俺とましろさんはどれを注文するか選ぶのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「アクセサリー店って見てるだけでも楽しいもんだね！あんまりゆっくり見たことなかったから、新鮮だよ」

「そうだね！せっかくだから、なにか買いたいけど…」

『Pretty Holiday』からアクセサリー店にやってきた俺達は店内を回りながら、そんな会話を交わす。

このアクセサリー店はリーズナブルな価格でアクセサリーを売っているようで、一応お小遣いから払えないこともなさそうだ。

どうしようか……ましろさんに喜んでもらいたいところだし、何か買いたいな。

「お、あれはペアリングってやつかな？ 値段もちょうど良い感じだし……良いかもな」
そうして、ましろさんにバレないようにこっそりと会計を済ませた。

「ソウヤ君、良いのあった？」

「うん、あったよ！」

「そっか！ どれどれ？」

「これだよ！ まあ、買うのかは悩み所だけどね……」

「確かに良いペアリングだね！ ソウヤ君とお揃いかあ……なんか良いよね！ そういうの」

「そうだね……じゃあ買っちゃおう？」

「欲しいけど……また今度にしようかな」

「そっか、じゃあそうしようか……」

「うん……ちよつと残念だけどね」

そして、俺とましろさんはアクセサリー店を出るのだった。

「ましろさん、こっち見て」

「どうしたの？」

「はい。これ」

そう言つて、さきほど買ったペアリングを渡す。

「これって！さっきの！」

「うん。実はサプライズで渡そうと思って、こつそり買っておいたんだ…喜んでくれるかはわかんないけど…」

「すごく嬉しいよ！ありがとう！開けても良いかな？」

「もちろん」

俺の言葉を聞いて、ましろさんはさっそくペアリングの箱を開けていく。

そして、ましろさんは手にしたリングをつけた。

「綺麗だね…ソウヤ君もつけてみてよ！そうじゃないと、ペアリングの意味がないでしょ？」

「まあ、それもそうか…つけてみるよ」

そう答えて、俺もペアリングをつける。

「うん！似合ってるよ！ふふっ、お揃いだね？」

「まあ、ペアリングだからね…ちよつと照れくさいけど、ましろさんが喜んでくれて良かったよ」

「この指輪、大事にするね！」

「そうしてもらえると嬉しいかな…俺もこの指輪、大事にするよ」

「ありがとう！よし、まだ時間はあるし、ソウヤ君との時間をもつと楽しむよ！」

そう言って、ましろさんは俺の手を引いて走り出した。

その後、家に帰るまでの時間、俺達はデートを楽しむのだった。

謎の少年の正体

「そんなことがあつたんだね……」

デートが終わり、家に帰ってきた夕飯時、ソラが今日の出来事を話してくれた。

「エルがおもちやで遊んでたわけか……自分で取つて、遊んでただけじゃないか?」

「でも、部屋に人の気配が……」

「えっ? 誰の?」

「そこまでは……」

「なるほどな……人の気配……ソラがそういうのを間違えるとは思えないし、誰かが居たのかもかもしれない」

まあ、間違いなくあの鳥さんだろうな……おそらくカバトンの仲間ということはないだろう……だって、あいつの仲間だったらすぐにエルを拐っていただろうし。

「それにしても、鳥に話しかけちゃうソラちゃん、可愛いね!」

「アハハ……スカイランドには言葉を話す鳥がいるので、つい」

「言葉を話す鳥?」

「うん、スカイランドの鳥は言葉を話すんだ。荷物を運ぶ手伝いをしてくれたり、中には

モデルをしてる鳥も居たり、王様の仕事を手伝っている鳥も居てさ…後は、人間に変身できて、アートも書けちゃう鳥も居るんだ」

ましろさんの質問に俺はそう答える。

「こうしてスカイランドの話を知ると、2人つてファンタジー世界の人なんだって、改めて思うよ…」

「こんなに美味しいものがチーンとしただけで食べられるなんて…そっちの方がよっぽどファンタジーですよ…うーん！カライライス、最高！」

「カレイライスはな。確かに進歩した科学は魔法と区別がつかないってよく言うしな」

そんなことを呟きながら、カレイライスを口に運ぶ。

やっぱりカレイライスは美味しいな。

「そういえば、さつきから気になっていたんですが…」

「どうかしたか？ソラ」

「2人がつけている指輪は何ですか？」

ソラがジト目で俺達を見ている。

「そういえば、外すの忘れてた…実はアクセサリー店に行った時に良さそうなペアリングがあつてさ。記念に買って、プレゼントしたんだよ」

「そうだったんですか…ソウヤ、今度は私と一緒にそこに行きませんか？」

「えっと……」

「良いですよね？」

ソラがニコニコとしながらそう口にするが、迫力がすごい……ましろさんもただけど笑顔の圧がすごい……！

「わ、わかった……また今度な」

「はい！今から楽しみにしてます！」

俺の返事を聞いたソラは嬉しそうにそう言い、ご飯を再び食べ始めた。

うーん……またお小遣いを貯め直さないといけないな……よし、頑張ろう！

俺はそんなことを思いながら、夕飯を食べ続けるのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「よし、宿題も終わったし、明日の学校の準備も完璧だな……そういえば、結局あの鳥さんと話せなかったな……ちよつと様子を見てみるか」

そう呟いて、部屋を出る。

すると、ソラがすごい顔をして自分の部屋を覗き込んでいた。

「何やってんだ？」

そうして、ゆっくり近づき、ソラの後ろからこつそりと覗き込む。

そこには、オレンジ色の髪の少年が居た。

「あなた、誰ですか!？」

部屋に居た少年の姿を見るや否や、ソラは部屋へと入っていく。

「ボ、ボクは…」

「はっ!まさか、カバトンの仲間!？」

「ソラ、待てっ!せめて話を聞いてあげよう」

俺がそう声を掛けると、少年は慌てて窓から飛ぼうとして、そのまま落下した。

「ハア—っ!」

ソラはその機を逃さず、飛び降りて少年を捕らえていた。

俺もそれに続き、窓から飛び降りる。

「うん?やっぱりの子って…」

「ソラちゃん!何かあったの?」

騒ぎが聞こえていたのか、ましろさんも部屋の窓を開けて声を掛けた。

「怪しい人を捕まえました!」

「怪しい人って…」

「ソラ、さっきの少年はプニバード族の子だよ」

ましろさんの呟きに同意するようにそう口にし、ソラに捕まえた少年を見るように促す。

ソラが捕まえた少年はオレンジ色の小さな鳥になっていた。

「本当ですね……さっきの少年が小さな鳥に……ソウヤの言った通り、あなたはスカイランドのプニバード族!」

「ソラさん、その子を放してあげて」

ヨヨさんがやってきて、ソラに言う。

「で、でも……」

「知り合いなの、私の」

「ヨヨさんの知り合いなのか……ソラ、放してあげよう。このままじゃ、この鳥さんのことが何もわからない」

「……わかりました」

渋々といった様子で、ソラはプニバード族の子を離れた。

「ボクはツバサ……」

立ち上がったプニバード族の子はそう口にする。

「鳥が喋った!?!」

ましろさんの驚いた声が響く。

「やっぱりプニバード族の子だったんだな……というか、ツバサ君だけ? 前にも会ったことがあるような……あつ! ああの時のプニバードの少年!」

「えっと、あの時？ボク達、会ったことありましたっけ？…あつ！もしかして、あの時の男の子！久しぶり！まさかまた会えるなんて…！」

「久しぶりだな！俺もまた会えるとは思わなかったよ！」

「ソウヤの知り合いなんですか？」

「まあ、前にちよつとだけ会ったことがあつてさ…その時に話したりもして、それ以来でね…とりあえず、一旦家の中に入ろうか。話すこともあるだろうし」

そうして、俺達は家の中に戻った。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「1年とちよつと前…ボクはこの世界に落ちてきました」

そう話し始めたツバサ君は、この世界に落ちた時のことを話してくれた。

どうやら、スカイランドとソラシド市は隣り合った世界のように、嵐になるとスカイランドのあれこれがこの世界に流れつくことがあるらしい。

スカイジュエルがこの世界にあったのも納得できる…もしかして、ヨヨさんもそういう経緯でこの世界に来たんだろうか。

そうして、ツバサ君もこの世界にやってきて、それ以降ずっとヨヨさんのお世話になつているそうだ。

「1年前って私がこっちに越してきた頃だよね…ずっと、ただの鳥のフリをしてたつて

「とっ？」

「まあ、喋る鳥が居たらびつくりするだろうし、仕方ないんじゃないかな」

「ターイム！」

ソラがそう言って、話を遮る。

「わっ！」

驚いたツバサ君は鳥から人間の姿に変わった。

「変わった!?!」

「びつくりすると、つい……」

「なるほど……びつくりしたら、つい変身しちゃうわけか……」

「話を逸らさないでください！私とソウヤとエルちゃんがこつちに来た後なら、いつでもスカイランドについて話せたはずです！なのに黙ってた！どうしてですか！」

ソラはじたばたしながら、そう声を上げる。

「ソ、ソラちゃん……怖い顔になってるよ」

「ワン！」

「ソラ、お前は犬か……でも、確かに気になるな……ツバサ君、もしかして、例のことが関係してる？だとすると、確かに言いづらいかもね……まあ、君が心配してるようなことはいと思っけど」

俺の言葉を聞いたツバサ君は驚いたような懇願するかのような顔をしていた。

ああ、言わないでくれってことね…まあ、心配しなくても言うつもりはさらさらないけど。

「ソウヤ？何か知ってるんですか？」

「知っているというか、予想というか…けど、言うつもりはないよ。守秘義務があるからさ」

「しゅ、守秘義務？」

「他人の秘密を勝手にバラしちゃいけないってことだ…だから、ツバサ君が自分から話したいと思えるまで待とう。安心しろ、ツバサ君は悪意があつて黙っているわけじゃないから」

「…ソウヤがそう言うなら、信じます…でも、怪しい行動をしたら、絶対に許しませんからね！後、そちらの事情についてはなるべく早く教えてください！気になってしょうがないので！」

「は、はい！」

ツバサ君がソラの迫力に驚きつつ、そう答える。

ソラはまだ納得しきつてはいないようだが、とりあえずは矛を収めてくれた。

…多分、ソラが怒っている理由は単にツバサ君が理由を隠してたことだけじゃないだ

ろうな…ソラは真面目だから、今回のことを重く受け止めてしまっているんだろう。

今回はツバサ君だから良かったものの、これがカバトンの仲間だったらエルは攫われていたかもしれない。

そう思うと怖いんだろう。

確かに迂闊だった…とはいえ、おそらくカバトンに仲間は居ないし、この不安は杞憂だろう。

だって、カバトンに仲間が居るなら、未だに姿を見せていないのはおかしな話だしな…まあ、あいつに指示を出している、もしくはエルを連れてくるよう依頼しているやつは居るだろうけど。

そういう類のやつは自分から姿を現すことはそうそうないだろうから、姿を現さないのもわかるし。

だとすると、そいつの正体って一体…

俺はそんな風に思考を働かせながら、1日を終えるのだった。

夜の会話とエルの成長

「ふああ…なんか目が覚めちゃったな」

夜中に目を覚まし、布団から出る。

部屋から出ると、ソラの部屋の扉が少し開いていた。

それが気になり、ゆっくりと部屋の扉を開けた。

「ソラ?」

「ソウヤ?起きていたんですか?」

部屋に入ると、ソラが寝ているエルの傍で起きていた。

そして、それを確認した後ソラの隣に座った。

「いや、ちよつと目が覚めちゃってさ…それで、ソラの部屋の扉が開いてたから気になつて」

「そうだったんですね…」

「ソラ、もしかしてずっと起きてたのか?」

「はい…今回はなんとありませんでしたが、もしツバサ君ではなくカバトンの仲間だったら、今頃エルちゃんは攫われていたかもしれません…そう思うと、怖くて」

「だから、朝までずっと起きて、見張ってるってことね…でも、明日は学校なのに大丈夫か?」

「大丈夫ではないですが、万が一の時は学校を休みます」

「いや、それはどうなんだろうか…まあ、エルが心配なのはわかるし、せめて交代しながら見ることにしないか?」

「気持ち嬉しいですが、それはソウヤに悪いですよ…ソウヤも明日は学校ですし」

「それを言ったら、ソラもそうだろう? 交代しながらの方がお互いに休めるし、効率も良いと思うけど? さつきから、ソラも眠そうだし」

「それは…その…アハハ…ソウヤには敵いませんね…ホントはさつきからすぐ眠たかったんです…でも、エルちゃんから目を離すわけにもいきませんから」

そう言いながら、ソラは微笑む。

「俺はしばらく起きてるし、ソラは寝てて良いよ」

「それでは、お言葉に甘えて…」

ソラは俺の肩に頭を乗せる。

「ソウヤ、肩を貸してくれてありがとうございます…ふふっ! ソウヤを独り占めですね」

「そうだな…」

「ソウヤはいつも誰かと一緒ですし、最近には私に構ってくれる時間も少なくなつて、寂し

かったんですよ？」

「昨日、デートしたばかりな気がするんだけど…」

「もちろん、それは嬉しかったです…でも、すぐにましろさんとデートに行つたじゃないですか。しかも、ペアリングまで買って…ましろさんばかりずるいです…」

「あはは…返す言葉もないな…」

「だから、ましろさんにもしてないこと、してくれませんか？」

「と、言いますと？」

「例えば、き、キス…とか」

「えっ？キス？待つて待つて…別に嫌じゃないけど、そんなあつさりとして良いものなの？後悔しない？」

「しません…だつて、私は…ソウヤに…」

言葉の続きを言う前に、ソラから規則正しい寝息が聞こえてきた。

「…まったく、急にドキドキさせること言つてくるんだから…」

ホント、ドキドキした…と、このままじやちよつと寝づらそうだな。

そう考え、ソラをそつと俺の足の上に寝かせる。

「ちよつと硬いかもしれないけど、大丈夫かな…まあ、ずつと肩に頭を乗せて寝るよりはマシか…お休み、ソラ」

そんな風に、寝ているソラに声を掛けながら、俺は夜を明かすのだった。

////
////
////
////
////
////
////
////

「んっ…あれ？私…」

「ソラ、おはよう。よく眠れたか？」

「そ、ソウヤ!? えっと、これは一体…!」

目を覚ますなり、ソラは顔を赤らめながらそう言った。

「うん。肩で寝るのは寝づらいかなと思ってさ…所謂、膝枕ってやつだよ…嫌だった?」

「いえ! そんなことは! むしろ、嬉しいです…あの、もうしばらくだけ、このままでもいいですか?」

「うん…構わないよ」

これは、今日は学校を休むことになるかな…

俺はそんなことを思いながら、嬉しそうに膝枕されているソラを見るのだった。

—————
—————

「結局、今日は学校休んじゃったな…」

「そうですね…ソウヤは学校へ行かなくて良かったんですか?」

「確かに行った方が良かったけど……ソラとエルをほっとけないな……それに、ぶつちやけ睡眠不足だ……授業中に寝る自信しかない」

「すみません！私のせいですよね……私、あの後朝まで寝てしまいましたし……」

「いや、ソラのせいじゃないよ……これぐらいは承知の上だったし。つて、あれ？エルは？」

ソラと会話をしているうちにどこかに行ったのか、エルの姿がなかった。

とはいえ、誰かが攫ったとかではなさそうだ……ソラと話してる時に別の人の気配はしなかったし……ということは、ハイハイして部屋の外に出たんだろう。

「どうでしょう!? エルちゃんが……」

「安心しろ。ゆっくり部屋の外に出てみればわかる」

そう言いながら、俺はゆっくり部屋の外へ出る。

ソラもそれに続く形で外に出る。

すると、エルがつかまり立ちをしようとしているのが目に入った。

周りを見渡すと、ツバサ君もその様子を固唾をのんで見守っていた。

「ソラ、ツバサ君も見てるみたいだし、静かに見守ろう」

「はい……」

そうして、俺達はエルを見守る。

「えくるう……」

必死に近くの壁につかまり足を震わせながら、エルは立った。

「おお……！」

思わず声が出た。

ソラとツバサ君も嬉しそうな声を上げる。

と、転んだ時の為に後ろに回つとかないと危ないな。

そうして、万が一の時のためにエルの後ろに回る。

「えくるう……！」

壁から手を離し、エルが手を振る。

まるで、立てたよと言わんばかりに。

ホントによく頑張ったよな：後でよしよししてあげよう。

だが、そんなことを考えていた瞬間、エルがバランスを崩して倒れそうになる。

俺は予め後ろに回っていたため、すぐに対応でき、ソラとツバサ君も同時に滑り込んで手を伸ばし、エルの体を支えてくれていた。

「ふう、危なかつたな……2人ともありがとう。それにしても！」

2人にお礼を言った後、エルを抱っこして頭を撫でる。

「すごいぞ！エル！よく頑張ったな！えらいえらい！」

「うん！頑張ったね！諦めなかったね！えらいね！」

ソラは涙を流しながら、エルを見つめている…かくいう俺も涙が出ているけど。

エルの成長に感動しつつ、ソラにエルを任せ、ツバサ君の近くに向かう。

「どう？ツバサ君の心配しているようなことにはならなそうじゃないか？」

泣きながら、エルを抱っこしているソラを見ながらそう口にする。

「ソラもましろさんも、君の夢を笑ったりしないさ…だから、話してみない？」

「…そうだね」

そう言って、ツバサ君は前へ踏み出す。

「ソラさん、一緒に来てくれませんか？」

／／／／／／／／／／／／／／

ツバサ君に案内され、やってきた部屋は鍵が掛かっていた謎の部屋で、部屋の中にはいくつもの飛行機の模型が飾られていた。

この部屋はヨヨさんがツバサ君のために用意してくれた、航空力学の研究室のようなものらしく、航空力学の本がいくつも本棚に並んでいた。

「航空力学なんて難しい本を読んでるな…確か、飛行機を飛ばすための学問だよな…詳しいことはさっぱりだけど、人が空を飛ぶために編み上げてきた学問なんだよな…人つてすごい」

にしても、ツバサ君はすごいな…俺にはこんな難しい学問は理解できないぞ…まあ、勉強すれば理解できるかもだけど。

「ソウヤは相変わらず物知りですね…」

「いや、流石にほとんど知らないよ…これで航空力学を知ってるなんて言ったら怒られる。俺はせいぜい気球の仕組みぐらいしか理解できてないし」

「気球…?」

「飛行機とはまた違った空を飛ぶ乗り物ね…残念ながらここに模型はないから説明しづらいけれど」

ヨヨさんがそう言う。

「まあ、簡単に言えばでっかい風船の下に人や物を乗せる籠をくくりつけて、ふわふわと浮かんで飛ぶ乗り物かな?」

「なるほど…なんとなくわかりました」

「ホントに?まあ、とりあえずは良いか…ツバサ君はここに来てからずっとこの学問を?」

「うん。この1年かけて勉強してたんだ…スカイランドに帰らなかったのはそのためだよ」

なるほどな…帰れなかったんじゃないやなくて、航空力学を学ぶために帰らなかったわけか

…すべては空を飛ぶという夢を叶えるために。

「どうして、そんな勉強を？」

「…約束してください。本当のことを言っても、笑わないって」

真剣なツバサ君の言葉に、ソラは頷く。

そして、ツバサ君は部屋の窓に近づき、言葉を紡ぐ。

「空を飛びたいんです」

短く、でもしっかりとツバサ君はそう言った。

ツバサの過去と空飛ぶランボーグ

「知っているでしょう？ボク達プニバード族が世にも珍しい空を飛べない鳥だということ……」

まあ、こっちの世界にはペンギンとか、空を飛べない鳥自体は割りと居るんだけどね……とはいえ、スカイランドでは珍しいと言えるだろう。

「はい。大昔、人間に変身する能力と引き換えに飛ぶ力を失ったって……」

「そんなある日、父が王様の都で展覧会をすることになって……そこに向かう途中でボクが落っこちそうになった時、父が空を飛んでボクを助けてくれたんです。あれから、空を飛ぶという夢がボクの中に開いたんです……でも」

そう言つて、ツバサ君は話を続ける。

同じ里の仲間達はツバサ君の夢を笑った。

それでも夢を叶えるために飛ぶ練習を続けていたようだ。

「そうして、空を飛ぶ練習をしている時にソウヤ君に出会ったんです」

「そうだったんですか……そういえば、ソウヤはどうしてプニバード族の里に？」

「ツバサ君が書いた絵がすごく良くてさ……この絵を書いた人に会ってみたいって思って

プニバード族の里に行つたんだよ。その時に落ち込んでいたツバサ君に会つたんだ」

『うん？あのプニバードの子……あの絵の子では!?!ということはある子が作者か!……おい！その君！』

『えっ……？ボ、ボクですか？』

『そうそう！君だよ！君、この前のコンクールで賞を取つた絵の作者だよね！あの絵、すごく良かった！俺、芸術とかわかんないけど、あれは良いものだって断言できるよ！』

『あ、ありがとうございます……まさか、そのためにこの里に？』

『うん！作者に直接会つてみたかったんだ!……と、ごめんごめん……いきなりハイテンションで来られても困るよね……』

『いえ、それは別に大丈夫ですけど……』

『うん？なんか元気がなさそうだけど、なにかあつたの？初対面の人の事情に首を突っ込むのはあれだけど……良かったら、悩みを聞くよ？』

『実は……ボク、空を飛びたいんです……笑つちやいますよね……空を飛べないプニバード族が空を飛びたいなんて』

『え？なんで笑うと思うんだ？良い夢じゃなか！』

『え……？』

『そもそもプニバード族が絶対空を飛べないって、誰が決めたんだ？プニバード族が飛ぶ力を失っていたとしても、飛ぶ方法はあるかもしれないし……だから、君は自分の夢を諦める必要なんかないと思うよ？』

『……そんなこと初めて言われた……』

『あはは……ちよつとカツコつけちゃったかな……ごめんね、ずけずけと……さて、目的も果たしたし、俺はそろそろ帰るかな』

『あ、あの……！』

『うん？』

『ありがとう！ボクの夢を笑わないでくれて、励ましてくれて……ボク、頑張るよ！』

『ああ、頑張れ！それじゃあ、またね！』

『またね！』

「あの時のソウヤ君の言葉のおかげで、もつと頑張ろうって思えたんです……そして、嵐の

晩にもしかして、この強い風に乗れば空を飛べるかもって……結局、落つこちてこの世界に来てしまったけど……」

そう言つて、ツバサ君は言葉を続ける。

「でも、この世界に来て良かった……そのおかげで、この学問に出会えた！この学問を学んでいけば、ボクもいつかあの空を飛べるかもしれない！」

そう口にするツバサ君の目はキラキラしていた。

そんなツバサ君の言葉にソラは感銘を受け、感極まつている様子で言葉を紡いだ。

「か……っ……いいい！一度心に決めたことは最後まで諦めない！それがヒーロー！」

「ヒーロー?」

「だって、そうじゃないですか！私はヒーローになりたい！ツバサ君は空を飛びたい！方向性は違いますけど、私達、一緒じゃないですか！他にも、ソウヤに救われたのだから一緒にです」

「ソラさんも?」

「はい！それはもう何度も……！誤解しちやつてすみません……！その、良かったら……友達になつてくれませんか?」

ソラは手を差し出しながら、そう口にする。

それにツバサ君は返事をし、ソラと握手した。

そして、しばらくしてツバサ君がこちらに視線を移した。

「ソウヤ君」

「うん？どうしたのツバサ君？」

いきなり声を掛けられたことに驚きつつ、そう返す。

ツバサ君は俺に近づき、言葉を紡いだ。

「また会えたら言うつもりだったんだ…」

「何を？」

「改めてありがとう！あの時、ボクの夢を笑わないでくれて…励ましてくれて…ソウヤ君、ボクと友達になつてくれませんか？」

そう言いながら、ツバサ君は俺に手を差し出す。

俺はその手を取り、返事をする。

「もちろん！喜んで！改めてよろしく！ツバサ君」

「うん！よろしくね！ソウヤ君！」

そうして、俺達に新しい友達が出来るのだった。

／／／／／／／／／／／／／／

「はっ…はっ…」

家に向かって走りながら帰路に着く。

2人共、大丈夫かなあ…あの健康優良児の2人が体調不良で休むなんて！ってクラスのみんなが驚いてたし。

学園はちよつとしたパニックだよ…しかも、ソウヤ君が休んだって聞いて、お見舞いに行きたいって言う女の子が何人居たこともびつくりだったよ。

ソウヤ君…私達の知らない所で、何人の女の子を口説いたんだろう…まあ、ソウヤ君のことだから口説いたわけじゃないとは思うけど。

「うう…でも、やっぱりモヤモヤするなあ…」

ソウヤ君は優しすぎるんだよ…まあ、そこがソウヤ君の良いところなんだけどね。

それに、私の自惚れじゃなければけど…私達のこととは特別に思ってくれてると思う。

でも、ワガママかもしれないけど…もつと、ソウヤ君と仲良くなりた…私だけにソウヤ君の優しさを向けてほしい。

ソウヤ君を独り占めしたい。

そんな黒い気持ちを抱きながら、家の扉を開いた。

「…ただいま！」

「おかえり！ましろさん」

私が家に帰ると、ソウヤ君が出迎えてくれた。

「ただいま！ソウヤ君！特に何もなかった？」

「うん。なんの問題もなかったよ！むしろ、嬉しいことが起きたんだよ！」

「そうなんだ！聞かせて！」

「もちろん！でも、とりあえずましろさんが着替えてからかな？」

「そうだね！また後で聞かせて！」

ソウヤ君にそう伝えてから、私は着替えに向かった。

「とまあ、こんなことがあつてさ……」

「なるほど……そんなことがあつたんだね」

家に帰ってきたましろさんに今日の出来事を話す。

その傍らでエルは赤ちゃん用のケーキを食べていて、ケーキを落としてしまいそうになったところをツバサ君が助けて、サポートをしていた。

「ツバサ君はエルちゃんを助ける騎士ナイトですね！」

「そんなことは……」

少し照れくさそうにツバサ君はそう口にする。

そんな風に和やかな時間を過ごしていると、何やら外から音が聞こえてきた。

「なんの音だ……？とりあえず様子を見に行こう！」

そうして、皆で外に出ると、UFOのような物体が街で暴れていた。

「あんな形のものが空を飛ぶなんて……デタラメだ！航空力学的にあり得ません！」

「今、そんなこと言ってる場合かな……」

「ましろさんのツツコミはいつもの確だな……まあ、俺もそのツツコミに賛成。理屈はとりあえず置いといて、止めにくいかな」とな

「その通りです！ツバサ君はエルちゃんをお願いします！」

「それじゃ俺は先に行ってるから、後で合流しよう！」

「えっ？ソウヤもここで一緒に変身すれば……」

「ストップ！ソラちゃん、ソウヤ君に先に行ってもらおう……ソウヤ君、また後でね」

ましろさんがソラを止めつつ、そう言う。

正直、めちやくちやありがたい……流星にまだ正体がバレていない人の前で変身するのは避けたいし。

ましろさん、ありがとう！

心の中でましろさんにお礼を言いつつ、俺はその場を後にするのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／

「無限にひろがる青い空！キュアスカイ！」

「ふわりひろがる優しい光！キュアプリズム！」

「レディ・ゴー！」

「ひろがるスカイ！プリキュア！」

2人がプリキュアに変身したのを遠目に見ながら、俺もプリキュアへと変身する。

「静寂ひろがる夜のとばり！キュアナイト！」

変身を终えて、街へと向かう。

すっかり変身にも慣れたもので、変身するとスイッチが切り替わる。

そのおかげか、人前で口調を変えるのもスムーズだ。

「まったく、好き勝手暴れてくれましたね…早く2人に合流しなければ…うん？あれは、あげはさん!？」

ランボーグが暴れている街で、走っているあげはさんの姿が目に入り、彼女に近づくと、

「えっと、あげはさんでしょうか？」

「そうだけど、あなたは？2人と同じプリキュア？」

あはは…やっぱり気づかれないか…まあ、気づかれたらそれはそれで困るけども。

「ええ、そうです…私はキュアナイト。あげはさんのことはソウヤさんから伺っていたので、気になって来たんですが…」

「ソウヤ君の知り合い？彼は大丈夫？」

「はい。スカイとプリズムを助けに行こうとしていたので、安全のために、家の中に避難してもらいました」

「そっか！良かったあ…」

「…それよりも、あげはさんはどうしてこちらに？今すぐ避難しなければいけないのはあなたも同じでは？」

「実は…」

そう言つて、あげはさんはここに居る理由を話してくれた。

どうやら、エルが例の抱っこ紐に乗つて2人の所に向かつて行つてしまつたようで、あげはさんはエルを探していたようだ。

えっ？あの抱っこ紐つて空を飛ぶの？ツバサ君の言葉を借りれば、航空力学的にあり得ないつてやつだな。

まあ、今はそんなことは後回しだ…まずは2人と合流しないと。

「わかりました…では、エルを探しながら2人と合流しましょう」

俺がそう言った瞬間、大きなビーム音と共に爆発音が聞こえてきた。

「まさか……！急ぎます！あげはさんはエルを見つけたらすぐに避難を！可能なら今すぐにでも！」

「待って！2人に何かあったかもしれないでしょ！私も行く！」

「あげはさん……わかりました。それでは一緒に行きましょう……近くに居てくれた方が守りやすいですし」

俺の言葉にあげはさんは頷いた。

そして、俺はあげはさんを連れて、音の発生源へと向かって行くのだった。

キュアナイトの新たな力！

「2人共、起きてー！」

「しつかりして！ねえ！スカイ！プリズムー！」

俺とあげはさんが音の発生源に辿り着くと、スカイとプリズムがダメージを受けて倒れていた。

とりあえず、屋上の扉の近くに2人を運び、今こうして声を掛けていた。

「…うつ…あげはちゃん？それにナイトも…」

プリズムが意識を取り戻し、スカイもそれに続いて意識を取り戻した。

ふう…意識が戻ってくれて良かった…そういえばランボグはどこに？

そうして辺りを見渡すと、UFO型のランボグにエルとツバサ君が吸い込まれていた。

他の皆もそれに気づいて声をあげる。

「エルちゃん!？」

「ツバサ君まで…どうして？」

「質問はなし！まず2人を助けないと！」

「あげはさんの言う通りです…まずは2人を助けだすのが先です…問題はどうかやってあそこまでたどり着くのかということですが…」

俺はそう言いながら、思考を働かせる。

飛べたら普通にたどり着けるけど、俺もスカイも、そしてプリズムも飛べないからな…空飛ぶ乗り物が都合よく近くにあるわけもないし。

となると、連携して上空のランボーグまでジャンプしていくしかないか…でも、危険すぎる気はする…俺はともかく、2人が危険な目に遭うのはな…だが、これ以外の方法は今の所思いつかない。

そんなことを考えていると、あげはさんと目があつた。

「…もしかして、同じ作戦を考えてた？」

「おそらくですけど…」

「でも、これって結構危険だよね…ホントに良いのかな？」

「…やりましょう。危険ではありますが、今のままじゃ状況は変わりません」

「そうだね…スカイ!プリズム!作戦があるの…聞いて!」

そうして、あげはさんは2人に作戦について話した。

「よし、それじゃあ作戦を始めましょうか！あげはさん、指揮をお願いしますね！」

「わかった！」

あげはさんの言葉を聞き、スカイとプリズムが一緒にジャンプする。

「いくよー！」

「はいー！」

プリズムは空中で姿勢を変え、スカイの足を蹴り飛ばしてさらにジャンプ力を上げる。

そして、地上に落下しながら白い気弾を生成していく。

「撃ってー！」

あげはさんの指示に従い、プリズムはスカイに向かって気弾を撃った。

そして、撃った後に地面に落下しそうな所を俺が抱きとめる。

「ここからは私の出番ですね！はあっ！」

プリズムを地面に降ろし、今度は俺がジャンプする。

俺は2人よりもスピードに特化しているようで、2人よりも一度のジャンプでの飛距離が長い。

それを利用し、先行しているスカイに追いついた後で、足を蹴り飛ばしてもらう。

「ナイト！お願いします！」

そして、蹴り飛ばされたことでランボーグの姿が見えてきた。

だが、たどり着くまでには至らなかった。

「くっ！目視で見えてるのと距離感が合わない！なら、せめてこれでも喰らえ！」
槍を出現させその槍を投げつける。

だが、槍の軌道が逸れ、ランボーグには直撃しなかった。

「外したか……！」

そして、そのまま俺は地面へと落下していき、衝撃を抑えるために受け身を取った。

「くっ……後もう少しなのに！」

まだまだこれからだ……さっきの目視での距離と実際の距離の誤差を修正して再チャレンジだ！

そうすれば、たどり着くことが出来なかったとしても槍をぶつけて、あのランボーグを落とせるかもしれない。

「中止！」

あげはさんがそう叫ぶ。

「ごめん。正直あの作戦に無理があった……だから、もつと別の……」

「大丈夫です！そもそも私も同じ作戦を思いつきましたから……作戦の方向性は間違い

じゃないです」

「うん。ナイトの言う通りだよ……私達は大丈夫だから！」

プリズムがそう言い、スカイも頷く。

「もう一回！」

そうして、再びランボーグにたどり着くために再チャレンジする。

「くっ……届きそうで届かない……今度こそ！」

そうして槍を投げるが、また外れてしまう。

「……またダメだった……でも体感的だけど、さっきより近づいた気がする……よし、もう一度

！」

2人も頷き、もう一度チャレンジする。

だが、それもダメだった。

方向性は間違っていない……なら、やり方を変えるべきか。

プリズムに先行してもらおう？ いや、そもそもあそこまで距離を伸ばせたのはプリズムの気弾があつてこそだ……プリズムの役割を変えるのはダメだな。

じゃあ俺とスカイの順番を変えるか？……いや、速度的に噛み合わない可能性が高いか……いつそのこと、スカイとプリズムの2人でしてもらおうとか？

うーん、悪くないけど……3人でやる想定でさっきからやつてるからな……今から試行し

ていちや間に合わない可能性がある。

どうしたもんかな…：とりあえず出来るまで挑戦しかないか…よし、やろう！こんなところで諦めたりするもんか！

そうして、立ち上がった瞬間、俺の胸の辺りから突如として眩い光が溢れ、俺の目の前にスカイトーンが出現した。

「えっ…：これって新しいスカイトーン!? え? どういうこと? 何でいきなり…」

思わずそんな声が出る…：流石にこれは予想外だ…まさか、このタイミングで新しいスカイトーンが出てくるなんて。

「それは、ナイトの新しい力ですか!」

「でも、どうしてだろう…：今、エルちゃんは近くに居ないのに…」

スカイとプリズムがそれぞれその口にする。

正直、俺も状況が理解できないけど…：この状況を打破する可能性があるなら!

「私にもわからないけど…：とにかくやってみるよ! もしかしたら状況が好転するかもしれないし!」

そうして、新しいスカイトーンを起動する。

「プリキュア・ミライレコード！」

新しいスカイトーンを起動し、スカイミラージュにセットする。

「ミライコネクト！ ナイト！」

青みがかつた長い黒い髪はさらに長くなり、髪が結ばれてポニーテールへと。

黒のドレスアーマーのアーマー部分が解除され、所々に星の装飾が施された漆黒のミリタリーロリイタ風の衣装へと変化していく。

黒のロングブーツは黒のニーハイブーツへと変化していき、黒のマントが装着され、瞳がルビーのような赤い瞳から黒曜石のような黒い瞳へと変化した。

こうして、キュアナイトの新たな力が誕生した。

その名はキュアナイト アルファ α スタイル。

キュアナイトが得るかもしれない未来の可能性の1つである。

／／／／／／／／／／／／／／

「これが新しいスカイトーンの力……なんか、すごく雰囲気が変わったような……でも、なんかいける気がする！ もう一回やろう！ 次は成功する！」

「はい！ やりましょう！」

「うん！ やってみよ！」

そうして、もう一度チャレンジする。

スカイとプリズムが同時にジャンプし、プリズムが途中で姿勢を変え、スカイを蹴り飛ばす。

そして、プリズムが空中で白色の気弾を生成し、スカイに向かって撃った。

その後、落下してきたプリズムを抱きとめ、俺は思いつきり地面を蹴って、ジャンプする。

さつきよりも凄まじいスピードで空中へと飛び、そのままの勢いでスカイを追い抜いてしまう。

やばっ！追い抜いちやっただ！どうしよう…

「大丈夫です！ナイトを必ずランボーグの元まで届けます！はあっ！」

そう言って、スカイは白い気弾を足場にしてさらにジャンプする。

「ヒーローガール！スカイパンチ！」

スカイの必殺技が俺に届き、そのままさらに高くジャンプする。

「スカイ！ありがとう！おかげで届く！」

ぐんぐんとランボーグへと近づき、ついにもうすぐで手が届く所まで来ることが出来た。

「よし…これなら！」

そして、槍を出現させ、ランボーグの上へと投げる。

この姿になったことで、俺にも新しい力が目覚めた。

それは槍を投げた場所に瞬間移動出来る力だ。

その力を使い、ランボーグの上空へと移動し、重力に従うように降下していきランボーグの上に着地した。

この力はなかなか便利だ：予め、槍をどこかに刺して置けばその場所に好きなタイミングで移動出来たり、今みたいに投げた槍の場所に移動できる。

そして、着地した俺の目に映ったのはエルがランボーグに吸い込まれそうになりながらも、ツバサ君を助けようと必死に念力のようなもので、彼を支えようとしているエルの姿だった。

それを見た俺は槍を出現させ、そのままランボーグへと突き刺した。

「これでも喰らえ！」

そうして、槍がランボーグを貫くのだった。

誕生!キュアウイング!

———キュアナイトが、ランボーグにたどり着く前

「エルちゃん…」

何をやってるんだボクは…助けにきたのに、逆に足を引つ張っているじゃないか。

ボクは、ソラさんとましろさんがランボーグを追いかけて変身した後、その後を追うように飛んでいこうとした。

結局、飛べなかったけど、坂道を転がって街へとたどり着いた。

そうして、エルちゃんを守ろうとカバトンに啖呵を切ったは良いけど…何も出来ずに攻撃を避けるくらいしか出来なくて…それどころか、エルちゃんに助けられ、しかもそのせいでランボーグに吸い込まれることになってしまっ、今に至る。

自分でやっておいてなんだけど、ボク、ホントに何やってるんだ!

そんなことを考えていると、ボクとエルちゃんの前にカバトンが現れた。

咄嗟にエルちゃんを庇うように前に出た。

「お前、スカイランドのプニバード族だろ?…ぷぷっ!聞いたことあるぞ!確か、空を飛べないださださな鳥!」

「それがどうした！ボクは諦めないって決めたんだ！エルちゃんだって、渡さないぞ！どうしても欲しいというならボクを倒してからに…」

そう口にした瞬間、一瞬の内にカバトンに倒されてしまった。

「きゅ〜…」

「えるるう〜！」

「ギャハハ！お前、なんでそんなに頑張っちゃってるの？あれか？プリンセスに恩を売るときゃ、王様から褒美をもらえるかも〜ってか！」

「…こんな小さな子が、知らない世界に放り出されて…助けてあげたいって思うのは当たり前じゃないか！」

そう叫んだボクに、カバトンはバナナの皮を投げつける。

「わからん」

そう冷淡に吐き捨てて、カバトンはその場から移動していく。

「えるう〜！」

「エルちゃん！」

「お前、なんか嫌い」

最後にそう言つて、カバトンは扉の先に移動した。

それと同時にボクの真下が開き、そのままボクは落下していった。

「うわぁー!」

このまま地面へと落下すると、覚悟を決めたところでエルちゃんが乗っていたゆりかごに乗ったことで、なんとか助かった。

「ふう…詰めが甘い奴で助かった…つて、こうしちやいられない!早くエルちゃんの所へ!」

そうして、ボクは再びエルちゃんの所へと向かうのだった。

／／／／／／／／／／／／／／

人間の姿に変身し、ランボーグの中を歩く。

すると、ある部屋の中からカバトンがなにかを言っている声が聞こえてきた。

「プリンセス・エルをついに捕まえました!今からそちらに連れて行きます…なので!約束通り、もつとT u e e e力をくださいなのねん!後、食料も100年分は欲しいのねん!あ、約束は10年分でしたけど」

どうやらエルちゃんを連れていくことを条件に色々と報酬をもらうつもりみたいだ。

でも、ラツキーだ…カバトンはボクが居ることに気づいていない。

エルちゃんは気づいたようだけど、口元に人差し指を当て、黙っていて欲しいとお願いした。

エルちゃんもその意図を理解してくれたようで、ボクの真似をして、口元に人差し指

を当てていた。

そして、未だに話し続けているカバトンにバレないように、エルちゃんが閉じ込められているシャボン玉のようなものに近づき、エルちゃんを救出した。

だけど、それと同時にカバトンにもバレてしまい、ボクはエルちゃんを抱っこして、部屋から逃げ出した。

「待て！赤ちゃん泥棒！」

「お前には言われたくない！」

そして、逃げ続けていると、後ろから大きな音が聞こえてきた。

多分、転んだりしたんだろう……まあ、ボクにとつてはありがたいことだ。

そうして逃げていると、開いている窓を見つけてそこから脱出する。

「エルちゃん、行つて！」

「える！」

「急いで！一人で行くんだ！」

「える！」

エルちゃんは首を横に振り、まるでボクも一緒に逃げろと言っているようだ。そうこうしている内にもカバトンがこちらに迫つて来ている。

ボクは悩みながらも、エルちゃんに乗っているゆりかごにぶら下がった。

「えるるう…」

「やっぱりスピードが出ない!」

「えるるう〜!」

エルちゃんの必死な顔が目に入る。

やっぱりボクのことを助けるために無茶を…エルちゃんを助けたいのに…どうすれば…

ボクに出来ること…うん、そうだね…それしかない。

「エルちゃん、逃げて」

そう言つて、ボクはゆりかごから手を放した。

ボクと一緒に運んでいなければ、エルちゃんは逃げられるはず…これで良いんだ…

「結局、飛べなかつたな…」

そうして、重量に従いながらボクは落ちていった。

「えるるう〜!」

地面に落ちていくと思つていたボクは突如として何かの力によつて上に引つ張られる。

目を開いたボクの目に飛び込んできたのは、ボクを助けようと手を伸ばすエルちゃん
の姿だった。

さつきから、ボクは落ちずに済んでいる…これはエルちゃんの力!?でも、このままじゃエルちゃんはまた!

「エルちゃん!ボクのことの良いから!」

「えるる!」

エルちゃんは首を振り、嫌だと言っているようだった。

「掃除機光線発射!」

カバトンの声が響き、エルちゃんが再びランボーグに吸い込まれそうになる。

「える!?!えるるう〜!」

「エルちゃん!」

「ギャツハツハツ!バクカ!そんな脇役なんか放つといて1人で逃げれば良かったのに

よー!」

そう言つて、カバトンはエルちゃんを笑う。

やめろ…やめろ!

エルちゃんが涙を流している。

「やめろ…エルちゃんを笑うなー!!」

ボクの胸の辺りから光が溢れる。

「嘘だろ…!あんな脇役がブリキユアになるっていうのか?」

カバトンのそんな眩きを無視し、エルちゃんに言葉を伝える。

「ボクに最期が訪れたとして、その時に思い浮かべるのはボクを笑った奴らの顔じゃない…プリンセス、ボクを守ろうとしてくれたあなたの顔です」

そう言つて、出現したペンを取りながら、プリンセスに言葉を続ける。

「だけど、それは今じゃない!だって、これからはボクがあなたを守るんだから!」

そう言葉を紡いだ直後、突然ランボーグが爆発した。

「一体なにが!?!」

「良いね!カッコいいじゃん!その覚悟、大事にね」

そう言う女性の声が聞こえ、視線を移す。

そこには夜を思わせる黒の装束を身に纏っているキレイな女性が居た。

その女性はこちらを見て微笑んだかと思うと、言葉を紡いだ。

「2人共、よく頑張ったね!エル!今だよ!」

「える!…ふいきゅあ〜!」

そう叫んで、プリンセスがボクにスカイトーンを託した。

あの人のことは気になるけど…今は!

「プリンセス・エル!あなたの騎士^{ナイト}が参ります!」

そうしてボクはプリキュアへと変身する。

「スカイミラージュ！ トーンコネクト！」

マイク状に変化したミラージュペンにスカイトーンをセットする。

「ひろがるチェンジ！ ウィング！」

ミラージュペンにW I N Gの文字が現れ、オレンジ色の髪の一部が長くなり、ディスプレイ状のステージに舞い降りる。

「煌めきホップ！」

「爽やかステップ！」

「晴々ジャンプ！」

ホップ、ステップ、ジャンプと段階を踏んでいき、オレンジと白を基調とした紳士服のようなドレスへと衣装が変化していく、

そして、最後にプリキュアに変身したツバサは宙を舞い、変身が完了した。

「天高くひろがる勇氣！ キュアウィング！」

／／／／／／／／／／／／／／／

「キュアウィング……！ ツバサ君、頑張ったな！」

変身したツバサ君を見ながら、そう呟く。

そんなことをしていると、ランボーグが落下し始めた。

「流石にこのままだと落ちるな…よし、とりあえず移動だ」

ランボーグから飛び降り、地面に向かって槍を投げる。

その途中で、エルをウイングが抱きかかえ、空を飛んでいるのが目に入った。

「すごい!空を飛んでるじゃん!」

「掴まって!」

ウイングが俺に手を差し伸べる。

「ありがとう。でも私は大丈夫!あれがあるからね!」

そう言つて、地面に突き刺さった槍を指差す。

「見せて」

そう呟いて、俺はその槍の元に瞬間移動した。

「えええつ!瞬間移動した?」

「えるるう!?!」

2人は驚きながら、着地する。

「やるじゃん!少年」

「うん、そうだね…あんな風に空を飛べたし!」

あげはさんの言葉に同意するように俺はそう口にする。

「飛べた…：そういえば、あなたは一体？」

「あ、私もそれは気になってた！」

「…私のことはまた機会があれば、ということ。今はランボーグにとどめを刺しましょう！まだあちらはやる気満々みたいだし」

俺は視線を移すように促す。

その視線の先にはランボーグが強大な黒いエネルギーを溜めていて、今すぐにも発射しそうだ。

「えるるうー！」

やっちゃえ！と言わんばかりにエルが手を上げながらそう口にする。

「はい！行つて参ります！プリンセス！」

そう言つて、ウイングがランボーグに向かって飛んでいく。

「ひろがる！ウイングアタック！」

空を飛べる能力を最大限に利用し、ウイングはランボーグに突進する。

すると、ランボーグが溜めていたエネルギーが霧散し、ランボーグの体勢が崩れた。

「皆さん！今です！」

そうして、スカイとプリズムが合体技の準備をする。

「スカイブルー!」

「プリズムホワイト!」

「プリキュア!アツプ・ドラフト・シャイニング!」

「スキキッタ」

2人の合体技が決まり、ランボーグは消え去るのだった。

「皆、お疲れ様!」

ランボーグが消え、変身を解除した皆にそう告げる。

俺はまだ解除してないけど…とはいえ、さすがにツバサ君とあげはさんの前で変身を解除すると大変なことになるからできないよな。

「あなたは一体…?」

「私はキュアナイト。あ、私の場合は夜という意味のナイトです…騎士という意味のナイトはウイングでしょうね」

「キュアナイト…あなたは何者なんですか？」

「ツバサ君！キュアナイトはね、ちよつと事情があつて正体は明かせないんだ！」

ツバサ君の質問にましろさんがすかさずフォローに入ってくれる。

その気遣いがとても嬉しい…よし、ここはましろさんに便乗させてもらおう。

「はい。残念ながら、まだあなた達に正体を明かすわけにはいきません…いずれ時が来ればお話します。ただ、私はあなた達の味方です！これだけは信じてください…それでは失礼します」

そう言つて、俺は高速でその場から移動した。

これ以上この場に居るとソラが正体を話しかねないし。

「キュアナイト…不思議な人でしたね…」

「だね…でも、なんか会つたことがある気がするんだよね…もしかして、私達の知り合いかな？」

「知り合いも何も、キュアナイトはソ…」

「ストーツ！ソラちゃん、それ以上はだめだよ！」

「そうでした！これは話しちゃだめでした！」

「2人はなにか知ってるの？」

「あはは…誰だろうね? ねえ、ソラちゃん」

「そ、そうですね…誰なんでしょうか…」

俺の知らない所で正体がバレかけていたなど、つゆ知らず、俺は急いで家に戻るのだった。

ソウヤの過去

「ソウヤ君、話してなに？私とソラちゃん、それにツバサ君も呼ぶなんて」
「うん、ツバサ君にも俺のことをちゃんと話しておこうと思つてさ」

こうして皆に集まってもらつたのは俺の過去について話すためだ。

俺が転生者であることはソラとましろさんにしか話していない。

ツバサ君も仲間に加わつたわけだし、このことを話しておくべきだろう。

もちろん、あげはさんにもいずれは話すつもりだ。

「ツバサ君、信じられないとは思うけど、今から言うことは本当なんだ…聞いてくれるか？」

「…うん！もちろん！ソウヤ君はそんな嘘は吐かないと思うし、信じるよ！」

「ありがとう。…ツバサ君、実は俺、転生者なんだ」

「転生者…？」

首を傾げながらそう口にするツバサ君に俺には前世の記憶がある転生者であることを話した。

そのおかげで、こちらの世界についても知識があるということも。

「そうだったんだ…転生ってホントにあるんだね…」

「俺も信じられなかったけど、実際そうなるからな…ホントは、黙っていいようかとも思ったんだけど、やっぱり話しておこうと思って」

「そっか…話してくれてありがとう！ちよつとびつくりしたけど、ソウヤ君が転生者だとしても何も変わらない…君はボクの友達だよ！」

「ああ、ありがとう」

ツバサ君も信じてくれたみたいで良かった。

あげはさんに話したら、信じてくれるだろうか…信じてくれると思いたいけど、どうだろうか…あげはさんに話すのはもう少し後にした方が良さかもしれないな。

「…ねえ、ソウヤ君、せっかく転生の話題になったから、聞いてみたいことがあるんだけど、良いかな？」

あげはさんに、転生者であることを話すかどうかを悩んでいると、ましろさんがそう尋ねる。

「それは構わないけど…聞いてみたいことって？」

「正直、こんなことを聞くのはどうかなって思うから、言いたくないなら無理に言わなくても良いからね？」

「ありがとう、ましろさん…俺は大丈夫だから、聞いてくれて良いよ」

「わかった。…ソウヤ君が転生しちやった理由ってなに？」

ましろさんの言葉に、ソラとツバサ君も表情を固くする。

「ましろさん、それは…」

「わかっているよ、ソラちゃん…でも、ワガママだけど、私はもつとソウヤ君のことを知りたいんだ…私の知らないソウヤ君をもつと知りたい」

そう言って、ましろさんはこちらを見つめる。

そんな風に見つめられたら、こちらも話すしかない。

「…ある日の学校からの帰り道、その日は部活が少し遅くなっちゃって、1人で帰ってたんだ。そうして、帰っている途中でナイフを持った怪しい男に、女性が襲われそうになってるのが見えたんだ」

そう言った後、一呼吸置いて言葉を続ける。

「それで、その女性を助けに行って…その結果、その人を庇って刺されて死んで、転生したんだ」

「女性を庇って…?!それはソウヤらしいと言えばソウヤらしいですけど…でも、なにも命を捨てなくても良いじゃないですか！」

「まあ、それはそうなんだけどさ…あの時はそれ以外に方法はなかったからな…それにあの人を助けたことに後悔はないよ。もちろん、まだまだやりたいことはあったし、未

練がなかったと言えば嘘になるけど……それでも、後悔なんか1つもない」

俺は本当にあの人を助けたことに後悔はない……それに、そのおかげでこうしてソラ達と会えたし、悪いことばかりじゃない。

続けてそう伝えると、少しだがみんなの表情が緩んだ気がする。

「ソウヤは前世からヒーロー気質というかなんとというか……でも！自分の命を捨てるようなことは二度としないでください！良いですね？」

「もちろん！みんなと別れるのは嫌だしな」

「本当ですよ？約束ですからね！」

「うん、約束する」

そもそも、俺は自分の命がどうでもいいというわけじゃない……まあ、自分の命を捨てるなければならないほど、危機的状況なら命を捨てるかもしれないが、それ以外では自分から命を捨てるような真似はしない。

「さて、暗い話はここまで！あ……もし、他に聞きたいことがあるなら聞くけど、なにかある？」

「じゃあ、この際だからもつと聞いちゃうけど……ソウヤ君の前世のご両親はどんな人達だったの？」

「ホントに深いところまで聞いてくるね……まあ、良いけどさ。……といっても、俺も前世の

記憶を全部覚えているわけじゃないけど……ただ、うちの両親は父が警察官で母は探偵だったよ」

ましろさんの質問にそう答える。

「警察官に探偵!? すごくいご両親だったんだね……」

「うん、そうだね……俺は母と一緒にいる時間の方が長くてさ、よく探偵の仕事を手伝っていたりしたんだ。といってもアニメとかドラマとかに出てくる探偵みたいに殺人事件を解決するとかそんなじゃないけど」

現実の探偵は、アニメや推理小説の探偵のようにとんでもない事件を解決するわけじゃない。

それでも母は探偵の仕事に誇りを持っていたし、俺も父よりも母の背中を追っていたように思う。

まあ、今はもう顔も名前も思い出せないが、その時に感じた気持ちや両親の言葉は今も俺の中に残っている。

「探偵の仕事の手伝いって、どんなことをしていたんですか？」

ソラがましろさんに続けて、そう聞いてくる。

「うーん、俺が手伝ったのは迷子のペットを探す依頼とかが多かったかな……俺が手伝いたいと言って聞かなかったから、仕方なくって感じて手伝わせてくれたんだ……後は、俺

が少し大きくなってから、何度か学校のいじめの調査をしたことはあったな」

「迷子のペット探しにいじめの調査も…ソウヤ君、すごいね！そうやって、きつといろいろな人達を助けてきたんだね」

「ソウヤは前世でも変わりませんね！」

「そうですね！ソウヤ君は変わらず、誰かに勇気を与えてくれます！」

「あはは…ありがとう」

少し照れくさくなりつつ、そう伝える。

こう改まって言われると恥ずかしいな…まあ、嫌というわけではないんだけどさ。

「とりあえず、俺の前世の話はこれぐらいにしておこう。ツバサ君に転生者であることは伝えたし…というわけで、ツバサ君、改めてよろしく！」

「はい！よろしくお願ひします！ソウヤ君！ソラさん！ましろさん！」

「よろしくお願ひします！ツバサ君！」

「よろしくね！」

そうして、俺の前世の話を交えつつ、俺達は再びの挨拶をしたのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ソウヤさん、あげはさんから電話よ」

「あげはさんから？なんだろう」

皆に俺の話をした後、自分の部屋でごろごろしていた所にヨヨさんに声を掛けられ、電話を取る。

『あ、もしもし！ソウヤ君？』

「どうかしたんですか？」

『ねえ、ソウヤ君、今時間ある？』

「ありますけど…何かあったんですか？」

『特に何かあったってわけじゃないんだけど、買い物に付き合っただけでほしいなあって』

「全然構いませんよ！どこで待ち合わせしますか？」

『それは大丈夫。私が迎えに行くから！』

「わかりました。じゃあ準備して待ってます！気を付けて来てくださいね？」

『うん！心配してくれてありがとう！気を付けて運転するよ』

「はい、それじゃあ後で」

そう言つて、電話を切つた。

「さてと、準備しようか！」

そう呟いて、俺は買い物に行く準備を進めるのだった。

あげはとのデート

「あげはさん、わざわざありがとうございます！ごさいます！」

「良いよ！むしろ、わざわざ付き合わせちゃってごめんね」

「いえ、あげはさんと出かけられるのは嬉しいので大丈夫です…そういうえば、買い物というのはどういう買い物なんですか？」

「まあ、色々…なんてね。ごめん、実はソウヤ君と出かける為の口実なんだ…あれ」

「そうだったんですか？そんな口実使わなくても、一緒に出かけたと言ってくれば行きましたよ？」

「あはは…それにはちよつと事情があつてね。まあ、それは置いて、今日はソウヤ君の行きたい所に行こう！」

そう言つて、あげはさんは笑みを浮かべる。

それにしても、俺の行きたい所か…そういうえば、そんなこと考えたことなかつたな。

「良いんですか？俺の行きたい所で…あげはさんは退屈するかもしれないですよ？」

「良いの良いの！ソウヤ君はさ、他の人のことはよく考えるけど、自分のことはいつも後回しじゃない？たまには、自分のことを優先するのも良いと思うんだ」

「なるほど、確かにそうかもしれないですね…とはいえ、行きたい所と言われても…ああ！
そうだ！この辺にカードショップってありませんか？」

「カードショップ？…あ！男の子が遊んでいるカードゲームのお店だね！確か、この辺
で前に見かけた気がする…OK！それじゃ早速行こう！」

「自分で言っておいてなんですけど、本当に良いんですか？」

「うん！ソウヤ君の行きたい所に行くって決めてるからね！」

「…わかりました。それじゃあお願いします」

そうして、俺達はカードショップへと向かうのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「おお！すごい！めちやくちやカードが置いてある！ストレージもあるじゃないか！こ
れはカード弄りだけで一日中過ごせるかも！」

「ソウヤ君、いつになくテンションが高いね！」

「すみません…カードゲームが好きなので…あげはさん、びっくりしましたよね」

「確かにね！でも、ソウヤ君がこんなに楽しんでるの初めて見たから、むしろ嬉し
いかな！」

「あはは…それにしても、俺が楽しそうにしてるのってそんなに珍しいですか？」

「うーん…普段も楽しそうだけど、なんていうか…今のソウヤ君は全力で楽しんでるっ

「感じー！」

「確かにそうかもかもしれませんね…今、めっちゃくちやワクワクしてますしー！」

久しぶりのカードシヨップにテンションが上がっているのが自分でもわかる。

シヨーケースのカードを見て回るのも良いし、ストレージから掘り出し物を見つけるのも楽しそうだ。

とはいえ、ストレージを漁るのはまた今度にしよう…一度火がついたら2〜3時間ぐらい普通にこの場所に居そうだからな…流星にあげはさんをそこまで付き合わせるわけにはいかない。

「とりあえず、パツクを何パツクか買って、シヨーケースのカードを見たら次の場所に行きましようー！」

「OK…でも、良いの？もう少し長く居ても良いと思うけど…」

「出来れば、そうしたいとこですけど…他にも行きたい所があるので、ずっとカードシヨップにいるわけにもいかないんですよ」

「なるほどね…よし！せっかくだし私もパツク？っていうのを買ってみようかな？ソウヤ君、何かオススメはある？」

あげはさんにそう尋ねられ、思考を働かせる。

オススメか…あげはさんは別にカードゲームをやってるわけでも、コレクションして

るわけでもないだろうしな。

シンプルに可愛いカードが当たりやすいパックが良いかな？まあ、人によつて可愛い
の定義は変わるだろうけど、美少女かモフモフの獣っぽいやつが妥当かな？

「そうですね…じゃあこれなんかどうですかね？」

「良いね！表紙の女の子も可愛いし！こんな可愛いカードもあるんだね！」

「最近はそういうカードも増えてきてるんですよ！可愛いと強いを両立したカードも多
くて」

「そうなんだ！ねえ！私、ちよつと興味湧いてきちゃった！色々と教えてくれると嬉し
いな」

「わかりました！俺で良ければ喜んで！じゃあ、とりあえずこのデッキを組む感じで考
えていきましよう！」

そうして、あげはさんが選んだパックをBOXで買って、開封した後、俺のアドバイ
スを聞きながらあげはさんはデッキを作り上げていった。

「出来た！これで遊べるようになるんだよね？」

「はい！」

「じゃあ一回やってみない？どんな感じか気になるし！」

「そうですね！とはいえ、俺はデッキ持っていないしな…あ、そうだ！あげはさん、余った

カードを使わせてもらって良いですか？」

「もちろん！」

「それじゃあ、速攻でデッキを組むので待っててくださいい！」

そう言つて、余つたカードでデッキを組み始める。

幸いにも今回オススメしたパックは特定のテーマのカードだけが収録されてるから、デッキを組みやすい。

まあ、本格的なデッキを組むには足りないけど、お試してやるくらいなら、そこまで本格的なデッキである必要はない。

そんなことを考えながらデッキを組んでいると、すぐにデッキが組み上がった。

「よし！出来ました！」

「ホントにすぐ出来たね！よし、やってみよう！」

あげはさんの言葉に対して、俺は頷き、ゲームを始めるのだった。

／／／／／／／／／／／／／／

「うーん！楽しかった！カードゲームって結構楽しいね！」

「あげはさん、初めてとは思えないほど強かったです…」

「ソウヤ君が組んでくれたデッキのおかげだよ！むしろ、余つたカードで組んだデッキで戦ってたソウヤ君がすごいよ！」

カードシヨツプを後にし、車内でそんな会話を交わす。

「まあ、一応経験者ですからからね……ただ、あげはさんが強かったのはホントですよ……なによりあげはさんが楽しんでくれて良かったです」

「ソウヤ君も楽しかった？」

「はい！めちやくちや楽しかったです！改めてありがとうございます！」

「全然良いよ！私も楽しかったし！そういえば、ソウヤ君が他に行きたいところって？」

「それはですね……前にあげはさんの言ってた、イングリッシュティー・ラテ・ウイズ・ホワイトチョコレート・アド・エクストラホイップでしたっけ？語呂が良くて覚えてたんですけど、それが気になってまして……俺も飲んでみたいなど」

「お！良いね！じゃあさっそく行ってみよ！それにしても、よく覚えてたね！」

「記憶力にはそこそこ自信がありますから。それに、さつきも言った通り、語呂が良かったので……」

「なるほどね！ふふっ！きつとソウヤ君も気に入るよ！」

「あげはさんがそう言うなら安心ですね！」

そうして、俺達は目的地向かって移動するのだった。

「ふう…美味しかった！俺、あんまりこういうの飲んだことなかったんですけど、美味しいですね！」

「でしょ！また時間があつたら一緒に来よう！」

「そうですね！また一緒に来ましょう！他にも色々メニューがあるみたいだし、他のやつが気になります」

「そつか！ソウヤ君もすつかりハマっちゃったね！…それで、今日はどうだった？楽しかった？」

「すごく楽しかったです！たまには自分の行きたい所とか行くのも良いですね…あげはさんは？」

「私も楽しかった！ソウヤ君の素も見れたからね！今日はソウヤ君のことを知れて嬉しかったよ」

家に帰りながら、俺はあげはさんとそんな会話を交わす。

「ソウヤ君、本当に他に行きたい所はないの？」

「…今の所は思いつかなくて…それに、あげはさんの嬉しそうな顔を見ただけでも満足ですよ」

「そ、そつか…ソウヤ君はさ、そういうことを平然と言っちゃうのが困りものだよね…一

体、何人の女の子が毒牙に掛かったのやら……」

「そんなに変なこと言いましたか？……俺は誰かの嬉しそうな顔を見るのが好きだけなんですけど……」

「無意識かあ……まあ、それもソウヤ君の魅力かもね……ソウヤ君は特に打算もなく、自分の思ったことを口にしてるから、ドキドキしちゃうんだろ？うなあ……その言葉に嘘がないから」

「そうなんですか？そういうのはよくわからなくて……」

「大丈夫！わからなくても良いんだよ……むしろ、わからない方が助かるぐらいだし……」
「あげはさん？最後ら辺、何か言いましたか？一瞬、窓を開けようとしたせいで聞きそびれちゃって」

「ううん、何でもない！」

「そうですか……わかりました」

そうして、会話を続けていくうちに、俺達は家に着いたのだった。

歓迎パーティーとヤーキターイ

「うーん…なんか目が覚めてしまった…前にも似たようなことがあったよ…もしかして、不眠症になっちゃったかな…いや、毎日ってわけじゃないし、たまたまか」

そんなことを呟きながら、夜空を見ようと窓を開ける。

窓を開けて、目に入ってきた景色は綺麗な星空だった。

「うん、たまには悪くないね…あれ？ましろさんの部屋、電気ついてる？どうしたんだろう…ちよつと行ってみるか」

そうして、俺は部屋を出て、ましろさんの部屋の前にやってきて、扉をノックする。

しばらく待っていると、ましろさんが部屋から顔を出した。

「あれ？ソウヤ君？こんな時間にどうしたの？」

「目が覚めちゃって…それで窓を開けて星空を見てたら、ましろさんの部屋に電気がついてるのが見えて、気になってさ」

「そうだったんだ…とりあえず部屋に入って」

「うん、お邪魔します」

ましろさんに促されるまま部屋に入ると、そのまま机の上の便箋を見せてくれた。

「お父さんとお母さんにお手紙を書いてたんだ！」

「そうだったんだ…もしかして、邪魔しちやったか？それなら早いとこ自分の部屋に戻った方が良いよな…」

「大丈夫だよ！もうお手紙は書き終わったから…あのね、ソウヤ君」

「どうかしたの？」

「ソウヤ君には将来の夢とか目標とかある？」

「うーん…あるといえはあるかな？といっても、そんなはつきりとしたものでもないけど…でも、どうしてそんなことを聞くんだ？」

「…ツバサ君は空を飛ぶためにコツコツ頑張ってるし、ソラちゃんもヒーローになるために頑張ってる…でも、私にはそういうのがないから…」

「なるほどね…それで悩んでたんだ」

「うん…」

「そっか…これは参考になるかはわからないけど、実は俺もヒーローになりたいんだよ」「ソウヤ君も？でも、どうして？」

「母の仕事を手伝っていると、依頼人の嬉しそうな顔を見ることも多くてさ…そんな顔を見ていると、俺も嬉しくて…そういう顔をもっと見たいと思ったことがきっかけかな」

「誰かの喜ぶ顔が見たくて、ソウヤ君はいろんな人を助けたって思ったんだ……」

「そうだね。まあ、元々困っている人を見捨てられない性格ではあったけど」

「そっか……でも、ソウヤ君はもうヒーローになつてると思うよ？ 私にとつてもソウヤ君はヒーローだし」

「ありがとう。でも、そうなると俺もましろさんと同じだな」

「えっ……？」

驚いた顔をしているましろさんに俺は言葉が続ける。

「俺が皆からヒーローだと思われてるなら、俺の夢も決まっていってことになるだろう？ だからさ、俺も一緒に悩ませてよ。夢が決まっていけないもの同士、一緒に答えを探そう」

「ソウヤ君……ふふっ！ありがとう！そうだね！一緒に探してくれるなら、見つかる気がする」

「うん、きつと見つかるさ。……それじゃあ、俺はそろそろ部屋に戻るよ」

「あ、待って！」

そう言つて、ましろさんは俺を引っ張り、ベッドに座らせる。

「ましろさん？」

「今日は一緒に寝よう？」

「はい!？」

驚く俺をましろさんはベッドに引きずり込む。

そのせいで、ましろさんの顔がもう少しで顔が触れ合うくらいに近くにあった。

「なんか、恥ずかしいね…」

「だね…やつぱり、俺、戻るよ」

顔を背けつつ、そう伝える。

「それはごめん…でも、今日は一緒に居てほしいなあ…なんて…あはは」

「…わかった。じゃあ今日はここで寝るよ…正直、もう眠いし…お休み、ましろさん」

「うん、お休み…ソウヤ君。…ありがとう」

ましろさんのそんな言葉を聞きながら、俺は眠りにつくのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ん…もう朝か…そうだった、昨日ましろさんに引き止められて一緒に寝ることになったんだっけ…」

目を覚ました俺は昨日の記憶を思い出し、ましろさんを起こそうとする。

「ましろさん、起きて。朝だよ」

「うーん…」

そう声を出しながら、ましろさんも目を覚ました。

「おはよう、ましろさん」

「おはよう…ソウヤ君…えへへ…なんかこういうの良いね」

「あはは…」

「ねえ、ソウヤ君、私のことを名前で呼んでくれないかな？さんづけなしで」「何でいきなり…？まあ、それは構わないけども」

ましろさんの唐突なお願いに困惑しつつ、試しに名前を呼んでみる。

「…ましろ」

「ふぐっ！」

「ましろ？どうしたの？なんか俺、変なこと言った!？」

「だ、大丈夫だよ…破壊力が凄かったただだから…ちよつと私の心が保たないから、もうしばらくはさんづけでお願い…」

「う、うん…わかった。それじゃあましろさん、俺は部屋に戻るよ」

「うん…また後でね！」

そうして、俺は自分の部屋へと戻った。

「ツバサ君の歓迎パーティーですか？」

「うん！新たにプリキュアになったツバサ君とパーティーをしたいなって！」

食事を終え、皆で集まってそんな会話を交わす。

確かに、良いかもしれない……ちよūdどツバサ君も居るみたいだし聞いてみよう。

「良いと思う！ツバサ君はどう思う？」

「えっ？ボクですか？」

そう言つて、ツバサ君は小さな鳥小屋のようなものから、飛び出し、人間の姿に変身した。

「うわあ！ツバサ君、そこに居たんだ！ソウヤ君も気づいてたなら教えてくれれば良かったのに」

「ごめんごめん。俺もさつき気がついてさ……それで、どう？やってみない？歓迎パーティー」

「はい！やりたいです！歓迎パーティー！」

「えるっ！」

ソラとエルは元気にそう答える。

うん……ツバサ君に聞いたつもりだったんだけど……まあ、良いか。

「あの……そんなに気を遣ってもらわなくても……」

「ツバサ君、ダメかな？」

「あつ…いや」

「えるうく！」

「いえ、ダメというわけでは…嬉しいです」

「よし！それじゃあさつそく準備を始めよう！」

「そうだね！」

「ボクも手伝います！」

「「えつ？」」

俺とソラ、そしてましろさんの声が重なる。

まさか、ツバサ君の歓迎パーティーなのに、本人が手伝うと言うとは誰も思っていないな
かったからだと思う。

とはいえ、せつかくの歓迎パーティーだし本人の意思はとても重要だろう。

「わかった。じゃあツバサ君にも手伝ってもらおう！」

「そうだね！4人で準備しよう！」

俺の言葉にましろさんはそう言って、気合いを入れた。

／／／／／／／／／／／／／／

「これがヤーキターイ…いや、これってこっちの世界で言う、たい焼きでは？」

歓迎パーティーの準備をするにあたって、ましろさんがツバサ君に食べたいものはないかと聞いた所、プニバード族のお祝い料理であるヤーキターイを食べたいと言っていた。

ヤーキターイはツバサ君にとって、思い出深い食べ物のようなのだ。

なんでも、俺がツバサ君に会いに行くきっかけになったあの絵がコンクールに入賞した時に、家族でヤーキターイを食べた思い出があるらしい。

そんな大切な思い出のある食べ物を作ってあげたい。そう思つて、俺達はヤーキターイの作り方について聞くために、ヨヨさんの所に来たわけだけど。

「そうだね…これ、こっちの世界で言いたい焼きだね…」

ヨヨさんが見せてくれているミラーパッドに写っているヤーキターイの画像はこっちの世界で言いたい焼きにそっくりで、たい焼きを知っている俺とましろさんは同じ感想を抱いた。

「確かにヤーキターイはたい焼きと見た目が似ているけれど、味は少し違うと思うわ。生地には、プニ麦粉、あんにはプニの実が使われているみたいよ」

ヨヨさんのそんな説明を聞きつつ、呟く。

「なるほど…スカイランドの食材か…とはいえ、味が違うかどうかはわからないな…案外、こっちの世界のたい焼きと同じ味かもしれないし」

「じゃあ試しにこっちの材料でたい焼きを作ってみるから、ツバサ君、食べてみて！」

「そうだな…それで食べてもらって、ヤーキターイと同じ味かどうか確かめてもらえば良いし、もしダメだったら他の奴を試していこう！」

「うん！それじゃあさっそく作っていこう！」

そうして、俺達はたい焼きを作り始めるのだった。

思い出の味

「よし、出来たな！」

「うん！ツバサ君、これがたい焼きだよ」

ましろさんが、出来たたい焼きをツバサ君に見せる。

「見た目はヤーキターイと全く同じですね」

「後は味ですね」

「そうだな…こればかりはツバサ君にしかわからないだろうし、食べてみてもらおう」

「ツバサ君、食べてみて」

俺達の言葉を聞き、ツバサ君はたい焼きを手取る。

「じーっ！」

そんなツバサ君の反応を見ようとしているのか、ソラとましろさんはじつとツバサ君を見つめている。

「2人共、圧がすごいよ…ツバサ君が食べづらそうにしてるじゃんか」

俺がそう言うと、ツバサ君は苦笑してから、たい焼きを背中から食べる。

「…おいしいですー！」

「ということとは……！」

「ヤーキターイと同じ味かな？」

「…そ、それは…！」

ツバサ君はとも言いづらそうな顔をしながらそう呟く。

やっぱり同じというわけにはいかなかったか…

「あつ、でもおいしかったですし、十分ですよ」

「ううん、ここからがスタートだよ！」

「えっ…?」

「ツバサ君に教えてもらえれば、ヤーキターイを作れると思うんだ！」

「そうだな…何事もトライ・アンド・エラーの繰り返しだ…そのためにも聞きたいんだけど、ツバサ君的にはどこがヤーキターイと違った？教えてくれると嬉しいんだけど…」

俺がそう尋ねると、ツバサ君は少し迷ったような顔をしてから言葉を紡いだ。

「生地はほとんど同じ味なんですけど、中のあるが違う気が…」

「じゃあ、あんの材料を変えて作ってみるね！」

「よし、やってみよう！」

そうして、俺達はヤーキターイを作るべく、いくつものパターンのたい焼きを作る。

たい焼きを作る時に粉まみれになったりしたりしましたが、いろんな味のたい焼きを作

り、ツバサ君に試食してもらった。

だが、どれもヤーキターイとは違っていたようだ。

「うーん…ダメか…」

「確かにヤーキターイとは違う味ですけど…でも、全部おいしいです！」

ツバサ君が笑みを浮かべながらそう言うが、やっぱりツバサ君に喜んでほしいし、もつと色々試してみるか。

ヤーキターイのあんか…なんの材料ならいけるかな…あつ、そうだ！

「よし、ちよつと裏山に行つてくる！」

「裏山に？どうして？」

「もしかしたら、スカイジュエルと同じように、スカイランドからプニの実が流れついているかもしれないだろ？それをちよつと見てこようと思つてさ。とはいえ、限りなく可能性は低いだろうし、皆には普通に買い出しに行つてもらつた方が良くと思うけど…」

「なるほど…確かにスカイジュエルがあるなら、他にも流れついている可能性がありま
すね！」

「だろ？それじゃあ俺は裏山に行つてくるから、他の材料の買い出しは頼んだよ！」

「うん！任せて！ソウヤ君、気を付けてね！」

「ありがとう！ましろさん。そつちも気を付けてね！それじゃあまた後で！」

そう言って、俺は裏山へと向かうのだった。

／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／

「うーん…プニの実、プニの実…」

ヨヨさんに見せてもらったプニの實の画像を思い出しながら、裏山でプニの實を探
す。

「なかなか見つからないな…まあ、元々とんでもなく低い確率だとは思っていたけど」

そう呟きながら、裏山を散策する。

例の毒キノコやら、たんぽぽ…他にも、いくつも植物があった。

だが、プニの實らしきものは見つからない。

「川の方に行ってみるか」

スカイジュエルも川の近くにあつたし、プニの實もそこにあるかもしれない。

そう考えて、川に向かって歩き出した。

「うーん…ここにもないか…そういうえば、前にソラが割った岩の中にアンモナイトがあつたよな…今はもうないところを見るに、誰かに持って行かれちゃったか…どうせなら持ち帰りがかつたな…」

アンモナイトがなくなっていることに軽くショックを受けつつ、プニの實をもう少し
搜索しようとする。

その瞬間、嫌な気配を感じた。

「何だ？今の…もしかしてランボーグか!?なら、今すぐ行かないと!」

そうして、周りに人の気配がないか確認した後、俺はプリキュアへと変身する。

「静寂ひろがる夜のとばり!キュアナイト!」

キュアナイトへと変身を終え、俺はおそらくランボーグが出現したであろう場所を指して動き始めるのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

く一方その頃、

「ソウヤ君、大丈夫かな…」

「ソウヤなら大丈夫ですよ!プニの実が流れ着いているかはわかりませんが」

「そうだね!…ソウヤ君のためにも色々と考えておかないと…他のあんは何にしようかな…蜂蜜にカスタード、オレンジとか果物も良いかも!後は…」

「シヤケです!思いつくものは全部試しましょう!」

「時間も無いし、それで作れるなら良いけど…ううん、きつと作れる!」

ソウヤ君も何事もトライ・アンド・エラーの繰り返しだと言ってたし。

「ましろさん、ありがとうございます。ボクのためにソラさんやソウヤ君と一緒にこんなに頑張ってくれて」

「お礼なんて良いよ！私はただ、ツバサ君にヤーキターイを食べてもらって喜んでほしいだけで」

「思い出します…私達がまだこの世界に来たばかりの頃、ましろさんがスカイランドをイメージした雲パンを作ってくれました。あの時、ソウヤが前世のことを思い出して泣いていて…でも、ましろさんのパンを食べた後、表情が和らいでいました」

「うん。私も覚えてる」

あの時のソウヤ君を見た時は驚いた…ソウヤ君はどこまでもヒーローで、泣いたりしないんだって、心のどこかで思っていたから。

でも、あの涙を見て、ソウヤ君はちよつと特殊な事情があるだけで、私達と変わらないう普通の男の子なんだって思った。

だけどヒーローなものもホントで、どっちもソウヤ君なんだって思うと、どんどん私はソウヤ君に惹かれていった。

もつとソウヤ君を知りたい…私の知らないソウヤ君を見せてほしい…私だけにそれを見せてほしい…なんて独占欲が溢れてくる。

うーん…今まで考えたことなかったけど、私って結構重いんじゃない？

「ましろさんの料理には食べた人を笑顔にする不思議な力があるんです！」

ソラちゃんの言葉にハツとして、さっきまでの考えを頭の片隅に追いやる。

「ましろさん？どうかしましたか？」

「ううん！何でもないよ！……私が初めて料理をしたのはね、お仕事で疲れているパパとママにおにぎりを作ってあげたいと思ったからなんだ」

そう言いながら、私は初めて料理した時の話を続ける。

「だけど、上手くおにぎりを作れなくて…でも、そんな私に2人が気づいて一緒におにぎりを作ってくれて…みんな笑顔でずっと忘れられない味。…もしかしたら、私にとつてのヤーキターイみたいなものかも」

あの味はずっと忘れられないだろうなあ…とつても大事な思い出の味だもん。

そんな風に思っていると、ソウヤ君のあの時の表情が頭に浮かんできた。

…私があの時焼いたパンが、ソウヤ君にとつて思い出の味になってたら嬉しいな。

「ボク、気づきました…ボクはヤーキターイが食べたかったわけじゃなくて…」

そう言つて、ツバサ君が言葉を続けようとした瞬間——

「カゝバやゝきいもゝおいも。おいもゝおいもだよ」

そんなカバトンの声によつて、ツバサ君の言葉は途切れてしまった。

ボクらのヤーキターイ

「…と、着いたは良いけど、これは…」

嫌な気配を追い、キュアナイトに変身した俺は目的地へとたどり着いた。

そこに広がっていた景色は…

「カ〜バやく〜きいも〜おいも。おいも〜おいもだよ」

「なにやっつてんの？あいつ…」

カバトンが石焼き芋屋の格好をして、声を出しており、ソラ達はそんなカバトンの声を無視しながら話を続けていた。

「教えて、ツバサ君」

「本当に食べたかったものって？」

「それは…」

「ちよいちよいちよ〜い！聞いてんのか!?!おいしい焼き芋なのねん！」

「今、大事な所なので後にしてください！」

「なっ!?!」

「カバトンなんか気にしないで、話を続けて」

そんな光景を眺めながら、思わず苦笑する。

「あはは…まあ、ソラに同意だけど。…にしても、俺の感じた嫌な気配は一体…確かにカバトンは居たが、ランボーグはまだ出ていない」

単純にカバトンが出てきたことで気配を感じた？いや、でも俺がここに来るまでに多少なりとも時間は掛かったはず…つまり、俺が気配を感じた時はまだカバトンがいなかったはずだ。

「もしかして…少し先の未来を予知した？…いや、まさかね…とりあえず、戦いに備えておこう」

俺がそんな風に準備を進める。

「えっと、美味しい焼き芋なのねん！」

「ごめん。ちよつと静かにしてて！」

ましろさんにそう言われて、カバトンも石焼き芋屋の格好をやめて、ランボーグを呼び出した。

「邪魔しないで（ください）！」

そうして、みんなはプリキュアへと変身する。

「無限にひろがる青い空！キュアスカイ！」

「ふわりひろがる優しい光！キュアプリズム！」

「天高くひろがる勇氣！キュアウイング！」

「レディー・ゴー！！」

「ひろがるスカイ！プリキュア！」

／／／／／／／／／／／／／／

変身を終えたみんなはランボーグと戦闘を開始する。

「よし、やれ！ランボーグ！あつつあつの焼き芋弾で3人まとめてイモっちまえ！」

カバトンはそうランボーグに指示を出し、焼き芋型のランボーグは焼き芋のミサイルを放った。

「まあ、3人ではないけどね！」

そう言いながら、俺はランボーグを背後から蹴り飛ばした。

「キュアナイト！」

「みなさん、お待たせいたしました！」

「キュアナイト！くそっ！いつも神出鬼没に現れやがって！……お前、本当に何者なのねん！」

「さて、何者でしようね？まあ、それは置いて、行きましょう！みなさん！」

その掛け声と共にみんなと再びランボーグとの戦闘を再開する。

ランボーグから焼き芋ミサイルが再び放たれ、それを躲す。

ウイングは空を飛んでミサイルを回避しつつ、太陽を背にしてランボーグとカバトンの目をくらませ、そのまま地上のランボーグに目がけて踵落としを喰らわせる。

スカイはその攻撃によってランボーグが怯んだのを見逃さず追撃する。

俺は攻撃を躲した後、瞬時にランボーグの懐に潜り込み、蹴り上げた。

「みんな、すごいよー！」

「こうなったら芋食って！」

カバトンがそう言うのを聞いた瞬間、嫌な気配を感じ、すぐにその場から移動する。

その後、カバトンが焼き芋を食べ、大きなオナラをした。

「くさくさー！」

「ウツ、ウウ……」

「くさいよー」

「相変わらず最低な技だよね……私はなんとか受けずにすんだけど……待つて……私だけ避けられた？」

さつき、カバトンの攻撃が来る前に裏山で感じた嫌な気配と同じ気配を感じた……もし

かして、これって未来予知とかそういうんじゃないやなくて、所謂、第六感みたいなものなのかも。

そんなことを考えながらも、槍を出現させ、ランボーグ目がけて投げつける。

「よし、今だ！やれ！ランボー……いや、何か来てるのねん！」

「ランボー……！」

俺の投げた槍は当たる直前で防がれてしまった。

「防がれちゃったか……」

「あれを避けた上で、槍をぶん投げて来やがった！やっぱりあいつはやばいのねん……こ
うなったら別のプリキュアに攻撃だ！ランボーグ！」

そうしてランボーグはプリズムを攻撃する。

攻撃を受けたプリズムは近くの壁にめり込み、連続で攻撃を受けていた。

「プリズム……！」

俺はすぐさま駆け寄り、ランボーグを追い払ってから、プリズムの状態を確認する。

「大丈夫!!」

「うん！これぐらいなんともない！私はまだ戦えるよ！」

そう言つて、笑みを浮かべるプリズムを見て安心する。

「良かった……」

「プリズム！」

スカイとウィングも合流し、全員が揃った。

「みんな！ここからだよ！みんなで協力すれば勝てるよ！」

「空も飛べねえ、身軽でもねえ、なーんにも出来ないY O E E E雑魚がなに言ってるのねん！」

俺はプリズムに対してそんな罵倒をするカバトンに怒りが込み上げ、言い返そうとする。

すると、それを制すようにプリズムが言葉を紡いだ。

「そうだね…確かに私は空も飛べないし、身軽というわけでもないけど…それでも、私にも出来ることがあるって気づいたんだ」

そう言いながら、プリズムは言葉を続ける。

「スカイは私の料理には食べた人を笑顔にする力があるって言ってくれた。ソウヤ君は私の優しさは強さで、そんな私が好きだと言ってくれた」

プリズムの言葉にスカイが一瞬、こちらを見た。

いや、確かにデートした時に言っただけ、そういう意味じゃないからね！

俺がそんな風の中にで反論している中、プリズムは言葉を続ける。

「ソウヤ君、言ってたんだ。自分もヒーローになりたかったって…理由を聞いたら、誰か

の笑顔を見たいからって…その気持ち、今ならわかる。私もソウヤ君の笑顔が見たいも
ん！」

あれ？なんか俺、今恥ずかしいこと言われてない？

「私に出来ることはきつと少ない…でも、少しでも私の料理や言葉や行動で、ソウヤ君が
笑顔になってくれた…それだけで、私は誰かを優しく照らすことが出来るんだって自惚
れることができるよ」

「プリズム、それは違うよ。自惚れなんかじゃない…」

プリズムの言葉を聞いて俺は思わずそう告げていた。

「プリズムは…ましろさんはずっとその優しさでみんなを照らしてくれてる、温かい春
の陽気みたい…だから、自信を持って！」

「ナイト…うん！ありがとう！」

プリズムの言葉を聞いた瞬間、俺の持つミライレコードが輝きを放った。

「これは…！力を借りるよ、プリズム！」

そうして、ミライレコードの新たな力を解放する。

「プリキュア・ミライレコード！」

スカイミラージュにトーンコネクトをセットする。

「ミライコネクト！ナイトプリズム！」

青みがかった長い黒髪はさらに長くなり、髪が結ばれポニーテールへと変化する。

黒のドレスアーマーは白のドレスアーマーへと変化し、夜を思わせる格好から純白の白へと。

そうして、ソウヤは新たなスタイルへと変身を遂げた。

キュアナイト、プリズムスタイルの誕生の瞬間だった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「またキュアナイトの姿が変わりましたよ!？」

「まるで、別人みたいですね…!」

スカイとウイングの反応を聞いていると、ランボークが攻撃を仕掛けてきた。

「ナイト！行こ！」

「もちろん!」

俺とプリズムは散開し、お互いに遠距離から攻撃をする。

プリズムはいつも通り、気弾のような攻撃を。

俺はエネルギーで出来た二丁拳銃のようなものを構え、発射する。

「はあああ！」

「ターゲットロックオン！…シヨット！」

そうして攻撃が命中し、ランボーグが怯んだ。

「一気に決めよう！ナイト！」

「うん！プリズム！」

そう声を掛け合い、俺達はランボーグにそれぞれ必殺技を放った。

「ヒーローガール！プリズムシヨット！」

プリズムはまるで元氣玉のような巨大な白の氣弾を放つ。

俺は二丁拳銃を合わせ、巨大なスナイパーライフルのようなものを作り上げる。

そして、それを構えてランボーグをロックオンする。

「ヒーローガール！ナイトバースト！」

スナイパーライフルに溜められたエネルギーが発射され、プリズムの必殺技と共にラ

ンボーグへと命中した。

「スキキッタ〜…」

そうして、ランボーグは浄化され、消えていった。

「みんな〜！」

「ソウヤ！プニの実は見つかりましたか？」

「いや、結局見つからなかったよ…」

「そつか…お疲れ様！ソウヤ君！私達、ちょうど買い物が終わったばかりなんだ」

戦闘を終え、いつも通り姿を消した後、しばらく経ってからみんなと合流した。

「どうやら買い物を終えた後の帰り道のようにだ。」

「みんなもお疲れ様。そうだ…せっかくだし少し休憩してかない？」

「そうですね！ツバサ君からまだ本当に食べたかったものを聞いてませんでしたし」

そして、俺達は近くの川辺に腰掛けた。

「ボク、気づいたんです。本当は、ただヤーキターイを食べたかったんじゃないで、父さんと母さんと一緒に食べたあの楽しい時間を過ごしたかったんだって」

「なるほどね…その気持ちはわかるな…俺も似たような経験はあるし。出来るなら、またあの時間を過ごしたいって思うこともある…だからかな？俺は今、すごく楽しいんだ…ソラやましろさん、ツバサ君と一緒に過ごせるこの時間がさ」

「ソウヤ君…ボクもそうだよ。今日、ソウヤ君やソラさんとましろさんと一緒にヤーキターイを作ろうとして、それが楽しくて…ああ、これってあの時家族で食べたヤーキ

ターイと同じだなんて」

「そっか……」

「うん。だから味は違っても、あれはボクらのヤーキターイだよ！」

本当に嬉しそうな顔をしながらそう言うツバサ君に思わず笑みが零れる。

ましてろさんが歓迎会パーティーをやろうと言ってくれて良かった。

「このことに気付けたのはましてろさんのおかげです……ありがとうございます」

「うん……間違いだね！よし、それじゃあそろそろ帰ろう！それで楽しいパーティーにしよう！」

俺の言葉にみんなも頷き、再び家へと帰り始める。

その後、家で行われた歓迎パーティーは俺にとっても大切な思い出になるのだった。

選択

「よく来てくれたね、ツバサ君」

「珍しいね…ソウヤ君が相談事なんて」

俺の部屋へツバサ君を呼んだのには理由がある。

これは、ソラやましろさんには相談できないことなのだ。

「ソラとましろさんは？」

「ヨヨさんに頼まれて買い物に行ったよ」

「了解。よし、それじゃあ2人が帰ってくる前に話しちやおうか」

そう言つて、ツバサ君に向き直つて言葉が続ける。

「…ツバサ君の意見を聞きたいんだけど…」

「どうしたの？」

「ツバサ君から見て、ソラとましろさんは俺のことをどう思っていると思う？」

「どうとは？」

「こう…なんて言うの…2人は俺のことが好きなのかなつて」

「それって…！えっと、それはもしかして、恋愛的な意味？」

「うん…そういう意味で」

俺の言葉にツバサ君は驚きながらも興味津々といった様子でこちらを見てくる。

「でも、どうして急に？」

「実は、前から気になってはいたんだ…2人が俺に向けてくる愛というか、執着というか…今まで気づかないフリをしていたけど」

「なるほど…確かにボクから見てもソラさんもましろさんもソウヤ君のことがすごく好きだと思う…だって、この前…いや、これは話さない方が良いかな…」

「ちよっ！気になるじゃんか！ちゃんとやってよ！」

「いや、あれに関してはボクも信じられなくて…話すのも躊躇われるというか…」

そう言って、ツバサ君は遠い目をしていた。

「いや、ホントになにがあつたの!？」

「そ、そんなことは置いといてさ！ソウヤ君はこれからどうするの？その…ソラさんとましろさんの気持ちに答えるの？」

「割りと重要なことをスルーされた気がするけど、今は良いか…これからどうするか…」

いつまでも気づかないフリをしているわけにはいかない…とはいえ、誰かの気持ちに答えてしまったら、今までのような関係ではいられないだろう。

「ソウヤ君、ボクはこういうことはよくわからないけど、大事なのはソウヤ君が誰を好きなのかだと思う…」

「俺が誰を好きなのか…」

「だって、恋人になる人達はお互いが好きだから恋人になるんでしよう？」

「まあ、大体はそうだろうね…俺も詳しくは知らないけどさ」

「…ソウヤ君、これはソウヤ君にとつて、すごく大事な決断だと思う…どんな決断であれ後悔のない選択をして」

「後悔のない選択…難しいな」

何を選んだとしても、後悔は生まれるだろうし…今までのような関係ではいられない。

「ただいまー!!」

「ただいま戻りました!」

俺が思考を働かせていると、ソラとましろさんが買い物から帰ってきた。

「2人が帰ってきたね…じゃあボクはこれで。応援してるよ!ソウヤ君!」

そう言つて、ツバサ君は部屋を出ていった。

「…行つてしまった…」

そう呟きながら、俺はツバサ君の言葉を思い返す。

“大事なのはソウヤ君が誰を好きなのかだと思う”

俺が誰を好きなのか…俺の好きな人…

そんなことを考えると、咄嗟に浮かんだのはソラとましろさん、そして、あげはさんの姿だった。

俺は…

夜空の約束

「俺はソラが好きだ…」

スカイランドに転生してから一番長く一緒に居る大切な人。

ソラの何事にも一生懸命な所が好きだ。

ヒーローになるという夢のために頑張っている姿が好きだ。

ソラは真っ直ぐな女の子で、いつも俺に真っ直ぐ気持ちを告げてくれていた。

でも、俺はどこか照れくさくて、勘違いしないように…ソラの気持ちから目を逸らしていた。

「ああもう！改めて自覚すると恥ずかしいな…今まで気づかないフリをしてきたツケが回ってきたのかな…」

決めた。もう俺は逃げない…目を逸らさない。

でも、正直怖いな…これが全部俺の勘違いで、ソラは俺のことをなんとも思っていないかったら？

もしそうになったら、これからめちやくちや気まずいよな…今までの関係が全部崩れてしまう。

でも、逃げない…目を逸らさないって決めたんだ。

となると、後は…どうソラに告白するかだな…いや、マジでどうしよう…

ツバサ君に相談する？いや、相談されても困るだろ…これ。

「ホントにどうしよう…誰か助けて！」

「ソウヤ！何かあつたんですか！」

「うお！びつくりした…ソラか」

突如、部屋の扉が開いたかと思うと、ソラが入ってきた。

まさか、今このタイミングで来るなんて…うん？これはむしろチャンスなのでは？

「何があつたんですか？ソウヤが助けを呼ぶなんて、よっぽどのことですよ！」

「いや、そんなやばいことじゃないんだけど…ちよつと悩みがあつて」

「悩みですか…どんな悩みですか？話してみてください！私が力になります！」

「いや、ホント大したことじゃなくて…そうだ、夜になったら俺の部屋に来てくれない？大したことじゃないけど、みんなが居る前じゃ話しづらくてさ」

「そうなんですか？わかりました！それでは夜になったらソウヤの部屋に行きますね
！」

「ありがとう。それじゃあ詳しい話は夜にしよう」

「はい！」

そう返事をしてソラは部屋から出た。

部屋から出たソラを見送り、ホッとひと息をつく。

「…やってしまった…これはもう腹を括るしかないな」

まあ、なにはともあれソラに告白するチャンスだ。

俺はそう覚悟を決めて、ソラに告白することを決めるのだった。

／／／／／／／／／／／／／／

「ソウヤ、入りますよ?」

「うん、良いよ」

俺の言葉を聞いたソラは部屋の中に入ってきた。

「悪いな…わざわざこんな時間に来てもらっちゃって」

「大丈夫です!ソウヤが相談事をしてくれるなんて滅多にありませんから!それで、相

談事は何ですか?」

「実は…」

「実は…?」

心臓の鼓動が速くなる。

上手く声が出ない。

「ソウヤ?大丈夫ですか?」

ソラの心配そうな声が聞こえてくる。

その声を聞きながら、俺は一度深呼吸する。

そうして心を落ち着けてから、ソラに言葉を伝える。

「…ソラ」

「はい、どうしましたか?」

「…俺はお前のことが好きだ」

「へっ!?それはどういう意味ですか…」

「文字通りの意味だ。俺はソラが好きだ…もちろん1人の女の子として」

「ほ、ホントですか!?嘘とかじゃなくて?」

その言葉に俺は頷く。

すると、ソラの顔がみるみる内に赤くなっていく。

「へっ…あ、えっ!ど、どうでしょう…!すみません、まさか告白されるとは思っ
てなくて…!」

そう言って、ソラはアタフタしている。

正直、めちやくちや可愛いし、もう少し見ていたい所だけど答えを聞かないと安心で
きない。

「ソラ、落ち着いて」

「は、はい！お、落ち着きます！」

「落ち着いてないじゃんか……まあ、かくいう俺もさつきからドキドキしてるけどさ」

「そうなんですね……じゃあ私達、一緒ですね！私もさつきからドキドキしてます……」

ソラは頬を赤く染めながら、そう口にする。

「……ソラ……答えを聞かせてくれないか？改めて言うよ……俺はソラ・ハレワタールが好きです。俺と付き合ってくれませんか？」

俺の言葉にソラは少し間を空けてから、言葉を口にする。

「はい……私もソウヤが大好きです！私で良ければ、ソウヤの恋人になりたいです！」

ソラの返事を聞き、俺はソラを抱きしめる。

「こちらこそよろしく……俺もソラが大好きだ」

「ふふっ！嬉しいです……なんだか夢を見てみたいですよ……私とソウヤが恋人同士だなって……」

そう言って、ソラは俺を抱きしめ返す。

「あの……その、ですね……こうして晴れて恋人になったわけですよ……き、キスをしませんか？」

「ああ、そうだな……ソラが望むなら……」

そう言って、抱きしめ合う形から少し距離を取りお互いの顔が見えるようにする。

ソラの顔は真っ赤になっていて、瞳も若干潤んでいる。

自分の顔は見えないから、なんとも言えないけど…多分、俺の顔も真っ赤になっていることだろう。

「ソラ…行くよ」

「はい…ソウヤ」

そうして、どちらから始めよう等と合図もなく、俺達は自然にお互いに顔を近づけていた。

そして、俺達の唇が触れ合った。

…どれくらい時間が経っただろうか…数分、あるいは数秒か…それはわからない。

そうしてキスをして、しばらく経ってから俺達は唇を離れた。

「キスしちゃいました…ふふっ！ソウヤ…私、すごく幸せです…」

「俺もだよ」

「あの…私のワガママですけど…まだキスしたいです」

「そっか…わかった。それじゃあキスしよう…次は、デープキスつてやつをやってみるっ」

「そ、それはまだ早いというか…い、今は普通のキスでお願いします…」

「了解。それじゃあ普通にキスをしよう」

「はい…お願いします」

そして、俺達は再びキスをするのだった。

皆で山へ!

「ソウヤ、大丈夫ですか？」

「うん。快適快適……うおっ！」

「ごめんね、ソウヤ君……車、定員オーバーで……あはは」

あげはさんが申し訳なさそうにそう口にする。

今、俺達はあげはさんの車に乗って、らそ山に向かっている。

朝、いきなりあげはさんがやってきて、山に行こうと言ったのはびっくりした。

あげはさんの車の定員をオーバーしていたため、俺は家で留守番しようと思っていたのだが、ソラがどうしても一緒に行きたいと言ったので、付いていくことにした。

彼氏としては、彼女の頼みを断るわけにはいかないしな。

ちなみに、晴れて恋人同士になった俺とソラだが、まだ皆に伝えてはいない。

もしかしたら、ツバサ君はわかっているかもしれないが、他の人は知らない。

何故かというと、ソラがまだ俺達の関係を黙っていようと言ったからだ。

『ソウヤ、私達の関係のことですけど…』

『うん？どうかした？』

『…しばらく皆さんには、内緒にしましょう』

『それは良いけど、どうして？』

『ソウヤも気づいていますよね…ましろさんもソウヤが好きだつてことに…』

『…まあ、俺の勘違いでなければそうかなとは思っていたよ…』

『ましろさんは私の友達です…出来れば喧嘩するようなことはしたくないんです…』

『なるほどね…了解。しばらく皆さんには内緒にしておこう』

正直、早い段階で話した方が後々拗れないと思うけど…とはいえ、ソラとましろさんの関係が悪くなるのは俺の望む所ではないし、俺はソラの言う通り、しばらく皆さんは黙っていることにした。

『ソウヤ！ありがとうございます！…それじゃあ、堂々とイチャイチャできない分、今、イチャイチャしましょう！』

『イチャイチャつて、どこで覚えたんだよ…まあ、良いか。これからはしばらくは皆から隠れながら、イチャイチャすることにしよう』

『はい！そうしましょう！…ソウヤ、他の人に目移りしたら、嫌ですよ？』

『うん? そんなのするわけないだろ? 俺はソラが一番好きだし』

『…ソウヤ…そういうのホントにズルいですよ…大好きです』

『俺も大好きだ』

とまあ、そんなこんなでしばらく皆には内緒にすることにしたわけだ。

そして今、ソラの頼みを聞いてトランクに入つて、付いてきているというわけだ。

ツバサ君が自分が鳥の姿になるから席に座つて、とも言つてくれたのだが、鳥の姿から人間の姿に変わる時に誰かにそれを見られてしまったら大騒ぎになるから、俺がトランクに入ることにした。

「ボク、やつぱり今からでも鳥の姿になるうか? ソウヤ君が大変そうだし…」

「大丈夫だつて! でもありがとう、ツバサ君」

その後もトランクで揺られながらも、目的地に徐々に近づいていくのが流れる窓の景色を見てわかつた。

その間にあげはさんがなにやら歌を歌い始めていたが、普通に上手くて聞き入つてしまった。

「はーっ！一体なんて速きですか！木や建物がビュンビュンです！」

「そっか、ソラは車に乗るの初めてか…どうだ？スカイランドの鳥さんに乗るのも良いけど、車に乗るのも良いだろ？」

「はい！」

「でしょう？鳥さんも良いけど、私のピヨちゃんもビュンビュンできやわわ〜でしょ！」

あげはさん、テンション高いな…まあ、きやわわかどうかはともかく良い車だとは思
う。

「ボク達、何で山に向かっているんですか？」

「えー？たまにはみんなまで遠出したくない？あと、君のことも知りたいしね！少年！」

「その少年っていうのやめてくれませんか？」

あげはさんの言葉にツバサ君は拗ねているのか、不服そうだった。

ツバサ君、あげはさんみたいなタイプが苦手なのかな？

「あつ！見えてきたよ！らそ山！」

そうして、俺達はらそ山へとたどり着くのがだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ソラ五郎の出す謎を解きながら、山登りに挑戦しよう…だって」

「謎を解きながら山登りですか！面白そうです！」

「なんか少年に似てるね!」

あげさんがソラ五郎を見ながら、そう口にする。

確かに、似ているかもしれない…というか、もしかしてソラ五郎のモデルってプニバード族なんじゃないかなろうか?

「似てませんよ!フン!」

「えるうく!える…っ」

ご立腹なツバサ君とは対象的にエルはテンションが高いようだ。

「あはは…うん?へえ、ルートが分かれてるんだ」

「そうみたいだね!道は2つあるみたい…1つは歩きやすくてゆったりらくらくのんびりコース。もう1つは…」

そう言いながら、ましろさんは視点を移す。

そこにはいかにも大変そうな道が広がっていた。

「とつても登りがいのある道!」

目を輝かせながら、そう言うソラを見ながら、思わず苦笑する。

まあ、ソラならそつちを選ぶよな。

「ソラちゃん、エルちゃんのお世話は私に任せて、行きたいところに行きなよ!」

あげさんがそう言い、ソラは俺とましろさんを引っ張る。

「ソウヤ！ましろさん！行きましょう！」

「えっ！私もそっちなのだ！」

「あはは…まあ、大変だったら俺も手を貸すから安心してよ」

「そっか！ソウヤ君が居るなら大丈夫だね！よし、頑張るよ！」

そうして、俺達はツバサ君とあげはさんと分かれ、大変な道な方へと進んで行く。

「はあ…はあ…ソウヤく〜ん、ソラちやく〜ん…待つてえ」

「ましろさん、大丈夫？」

へトへトなましろさんを見ながら、俺は駆け寄る。

「ましろさん、ほら背中に乗って」

「ソウヤ君…？これは？」

「うん？おんぶだよ。ましろさん、疲れているみたいだし」

「で、でも…それは悪いよ」

「大丈夫だよ。遠慮しないで」

「わ、わかった…ありがとう、ソウヤ君。それじゃあ、乗るね」

そう言つて、少し遠慮がちに背中に乗るましろさんをおんぶした俺はそのまま移動を開始する。

「なんか恥ずかしいね…ソウヤ君、大丈夫?」

「うん、平気だよ…ましろさんは大丈夫? バランス悪かったりしない?」

「大丈夫だよ! ありがとう! ソウヤ君」

「ソウヤ…ましろさくん! 何してる…んですか?」

俺達より先に行つていたソラが俺達に気づいて、戻つてきていた。

そして、こちらを見るなり、ソラの目のハイライトが行方不明になっていた。

これは不味いと判断し、俺は慌てて言葉を紡ぐ。

「ソラ。ましろさんが疲れてみたいだから、おんぶしてたんだよ」

「な〜なんだ! そうだったんですね! ましろさん、すみません。ペースが早かったですよ

ね…少し、ペースを落としますね」

ひとまず落ち着いたのか、ソラは笑みを浮かべながらそう口にする。

「ソラちゃんもありがとう! ソウヤ君、やっぱり私、歩くよ」

「本当に大丈夫?」

「うん、大丈夫だよ! 心配してくれてありがとう!」

「まあ、ましろさんがそう言うなら良いけど…しんどかったら言つてくれ」

「ありがとう！」

そうして、俺はましろさんを降ろして、再び歩き始めた。すると、ソラが俺の近くに寄り、小声で声を掛けてくる。

「ソウヤ……」

そう言いながら、俺の手を握る。

「ソウヤはましろさんに優しすぎませんか？」

「そうかな？俺はソラが疲れてたら、同じようにおんぶするぞ」

「それって今すぐでも大丈夫ですか？」

「もちろん。じゃあ背中に乗って」

「はい！ありがとうございます！」

そう言って、ソラは俺の背中に跳び乗ってくる。

「うおっ！急に跳び乗ってくるなよ……まあ、良いか」

「ふふっ！おんぶされてしまいました！」

半ば、跳び乗られた形な気はするけど……まあ、これぐらいは慣れたものだ。

「はいはい。そういえば、バランスは大丈夫？」

「はい！大丈夫です！」

「そうか……それは良かった」

そんな話をしながら、歩いていく。

そうやって歩いていると、ソラが頬を擦り付けてくる。

「えへへ…ソウヤ…」

「ホントに2人は仲良いよね…でも、堂々とイチャイチャするのはやめてほしいかな？」

ましろさんが笑みを浮かべながら、そう口にする。

「ソウヤ君、次は私をおんぶしてね」

「それは構わないけどさ…これは大変だな…あはは」

俺は苦笑しながらも歩き続けるのだった。

信頼

「ふう…つ、疲れたあ…」

「ソウヤ、お疲れ様でした…すみません、結局ほとんどおんぶしてもらいましたね…」

「ごめんね…ソラちゃんが羨ましくて、私もついおんぶしてもらっちゃった…」

「ま、まあ…それはもう良いんだけどさ…ちよつと休ませてくれない？」

あの険しい道を歩き続けていたら、延々とソラとましろさんをおんぶすることになつてしまい、疲れ切つてしまった。

「うん？あれつてツバサ君じゃないか？どうしたんだらう…」

視線を移すと、そこにはツバサ君が一人で歩いているのが目に入った。

「本当ですね…行つてみましょう！」

そうして俺達はツバサ君の近くに向かう。

「ツバサ君、どうしたの？あげはさんとエルは？」

「ソウヤ君、それにお2人も！実は…」

どうやらわけありのようだ。

俺はとりあえず近くに座れる場所を見つけて、ツバサ君に座るように促してから話を

聞いた。

「どうやら、あげはさんと一緒に行動するのはツバサ君としては結構大変だったようだ。」

謎を解いて、アスレチックが答えだとわかったものの、とつくにあげはさんは答えに辿り着いていて、しかもアスレチックをクリアした後に、わざわざアスレチックをクリアしなくても先に進めることを知ったり。

次の問題の、『隠れているきれいなものは？』、という問題に対して、何を思いついたのか、ロープウェイに乗ろうと言って、コースとは違う道を先に進んでいき、ツバサ君は我慢の限界を迎えたらしい。

「隠れているきれいなもの…ロープウェイ…ああ、なるほど。そういうことか…あげはさんの考えていることがなんとなくわかった気がする。」

「そうだったんですね…」

「ボク、ああいう強引な人、ちょっと苦手です…」

「なるほどね…でも、あげはさんはきつと…ツバサ君ならわかってくれると信じてるんじゃないかな…まあ、これは俺の想像だけだね」

「ううん、想像なんかじゃないよ…ソウヤ君の言う通りだと思う。あげはちゃんはわかってくれると思ったんじゃないかな…ツバサ君のこと信じてたから」

そう言いながら、ましろさんは言葉が続ける。

「この前、エルちゃんを守った時、ツバサ君、カバトンにすごく怒ってたでしょ？ あげはちゃんもすごく怒ってた…ちよつと強引な所もあるけど、エルちゃんを思う気持ちはツバサ君もあげはちゃんも同じだよ」

ましろさんのそんな言葉を聞き、ツバサ君は何かに気づいたのか、ハツとした表情をして言葉を紡ぐ。

「もしかしたら山を登った先に何かあるのかも…ボク、山頂に向かいます！」

「行つてらっしゃい！」

「私達も後で合流しますね！」

「ツバサ君、足を踏み外さないように気を付けて…俺も休んだらすぐに行くから」

歩き出すツバサ君を見送りながら、俺達はそんな言葉を掛ける。

多分、隠れているきれいなものつていうのは上から見ないとわからないものなんだろう。

一体どんな景色なのやら…楽しみだな。

そんなことを考えていると、突如として嫌な気配を感じる。

これ…前のと同じ…ということとはまたランボーグが居るのか？

「ソラ、ましろさん。ちよつと俺行つてくる」

「行くつてどこに?」

「うん、ちよつと山の頂上に行つてくる。なんか嫌な予感がする…虫の知らせみたいな感じかも」

「そうなんですか? 私は特に何も感じませんが…でも、ソウヤが言うならきつとそうなんでしょう…わかりました! それじゃあ一緒に行きましょう!」

「そうだな…よし、2人とも、悪いけど付き合つて!」

俺の言葉に2人は頷いてくれた。

そうして、俺達は山頂に向かって歩き出すのだつた。

／／／／／／／／／／／／／／

ボクは皆さんと別れて、山の頂上を目指して歩いていく。

そうして、歩き続けると頂上が見えてくる。

だけど、もう少しという所でヘトヘトになる。

「頑張れ! 少年!」

「えるう!」

あげはさんが手を伸ばしてくれる。

ボクはその手を取り、頂上へと辿り着いた。

そして、頂上から景色を見下ろすと、そこにはいろんな色の花畑が並んでいて、虹を

描いていた。

「虹…あれって謎解きの答え？」

「うん。上から見ないとわからないようになってたみたい…本当にきれい…」

「えるう〜」

「…ボクが山頂を目指してくるって、どうしてわかったんですか？」

「ロープウェイから走ってるのが見えたよ」

「えっ！」

「走るの速いんだね〜！」

「わかっていたなら、先に言ってくださいよ！」

「ごめんごめん…」

つまり、ボクはあげはさんの掌の上で踊らされていたわけだ…まったくもう…

「カモン！アンダーグエナジー！」

ボクがそんなことを考えていると、突如としてランボーグがあげはさんとプリンセスを襲おうとしていた。

「ランボーグ！」

「2人共、危ない！」

思わず助けに入ろうとする。

すると、目の前で襲われそうになっていたあげはさん達の姿が消えた。

「どこに行ったのねん！」

「ふう…ギリギリセーフかな？」

そんな声が後ろから聞こえ、振り返る。

そこには、あげはさん達を抱きかかえているキュアナイトの姿があった。

「またお前か！キュアナイト！いつも絶妙なタイミングで邪魔してきやがって！」

「良いタイミングでしょ？ほら、ツバサ君、今のうちに変身して！」

「わ、わかりました！」

そうしてボクはプリキュアへと変身する。

「天高くひろがる勇氣！キュアウイング！」

そうして、変身を終えたツバサ君を見ながら、あげはさんをどこに避難させようか考
える。

「あげはさん、こっちに避難を！」

「ちよつと待つて！私もここに残る！」

「ですが…いや、今はその方が安全かもですね…わかりました。私の傍から離れないように…」

とはいえ、このままではウイングを助けられない…よし、あれを使おう！

「プリキュア・ミライレコード！」

スカイミラーージュにスカイトーンをセットする。

「ミライコネクト！ナイトプリズム！」

青みがかかった長い黒髪はさらに長くなり、髪が結ばれてポニーテールへと。

そして、黒のドレスアーマーは白のドレスアーマーへと変化する。

そうして、俺はプリズムスタイルに姿を変えた。

「えっ!?姿が変わった?どことなくプリズムに似てるし…どういうこと?」

「まあ、それはまたの機会ということで。…今はウイングを支援します！」

そう言いながら、二丁拳銃を一つにし、巨大なスナイパーライフルを作り上げ、構える。

「待つて。一つ作戦を思いついたんだけど、やってみない?」

「作戦ですか?」

「うん…多分、この作戦なら攻撃を当てやすくなると思う」

「…無茶なこと考えてますか?」

「それは…まあ、そうだね…そこはナイトとツバサ君に任せるしかないかな…ごめん」
「…はあ、わかりました。確かに攻撃を外したら困りますし、その攻撃の命中率を上げられるならそれに越したことはありません…やりましょう」

「ありがとう！」

「ただし、危険だと判断したらすぐに退避を。ウイングを頼つて、すぐに逃げてください
！良いですね？」

「もちろん！」

そんな会話を交わしていると、後ろから聞き覚えのある声が聞こえる。

「や、やっと追いついたよ…しかも、ホントにランボグが居るなんて…」

「ソウヤの感じた気配は本当だったということですね…」

どうやらソラとましろさんが俺に追いついたようだ。

これはありがたい…あげはさんの作戦が何かはわからないが、人手が多いに越したことはないだろう。

「2人共、タイミングばつちりだね！うん？そういうえばソウヤ君は？…話しぶりからするに近くに居るの？どこ？」

そう言いながら、あげはさんは辺りを見渡す。

これは不味いな…まさか、ソラ達の言葉があげはさんにヒントを与えてしまうとは…

いつそのこと、このタイミングで話してしまおうか？

そんなふうに思考して、俺は言葉を紡ぐ。

「…あげはさん、実は…」

「…ソウヤ君なら、きつと無事だよね…よし、皆聞いて！」

俺が真実を明かそうとした瞬間、あげはさんは俺達にそう告げる。

タイミングが合わなかったか…なら、後でしつかりと正体を明かすか…ツバサ君にも伝えておかなきゃだし。

俺はそう思いながら、言葉を紡いだ。

「教えて下さい。あげはさんの作戦を」

そうして、俺達はあげはさんの作戦を実行するのだった。

決着と決戦の予兆

「それじゃあ、みんなお願いね！」

あげはさんの言葉に俺達は頷き、作戦を開始する。

ソラとましろさんもすでにプリキュアに変身している。

そうして、準備を終えた俺達は持ち場に着く。

「ツバサ君！こっちに！」

あげはさんはそう口にしなから走り出す。

「あげはさん!? どうして!」

ランボーグとの戦闘中のウイングがあげはさんに気づき、助けに入ろうと移動を始める。

「そこに居たのねん! 追え! ランボーグ!」

ロープウェイにしがみついていたランボーグはあげはさんを追うために、地面に降りる。

ここまでは計画通りだ。

そうして、降りてきたランボーグからあげはさんを逃がすためにウイングはあげはさ

んを掴まえて、空中へと逃げる。

「あげはさん！プリンセスは…って、これは?！」

「ツバサ君、私を信じて」

「…なるほど、そういうことですか…わかりました!」

ウイングは一度、俺達の方を見てから飛行する。

どうやら、こちらの作戦を理解してくれたようだ。

あげはさんの立てた作戦は至ってシンプルだ。

あげはさんが囷になって、ランボーグを引き付け、ウイングと共に俺達の待機している場所へと誘導して、そのまま止めを刺す。

正直、無茶をするなど思ったが、あげはさんがやると聞かなかった。

とはいえ、確かに攻撃を当てやすいのも事実だ。

俺はスナイパーライフル状に変化した武器を構え、機を伺う。

「ちよこまかと！さっさとプリンセスを渡すのねん!」

そうして、躍起になったカバトンはランボーグを俺達の待機してる方向に向かわせてくる。

そして、ついに狙いのポイントへと辿り着いた。

「やっと追いついたのねん!諦めて、プリンセスを…」

「残念。エルちゃんはここにはいないよ！」

あげはさんは腕をランボーグに見せ、エルがいないことを教えてからウィングと共に上昇する。

そして、それと同時にスカイトとプリズムが現れて2人でランボーグにキックする。

「はあーっ!!」

「ランボー!」

「今です(だよ)!!ナイト!」

「了解。必ず当てる!」

2人の攻撃により、ロープウェイから手を放し、無防備なランボーグに狙いを定める。

「ヒーローガール! ナイトバースト!」

スナイパーライフルに溜められたエネルギーが発射され、そのままランボーグを貫く。

「スミキツタ〜」

そうして、ランボーグが浄化され、消えていった。

「える! える!」

「偉かったよ! エル! 大人しくしてくれて助かった」

俺はエルの頭を撫でながらそう口にする。

エルが危険な目に遭わせないように、俺の傍にいさせてあげると、あげはさんに頼まれ、俺としても特に断る理由もないからエルを近くにいさせておいた。

「まあ、ちよつと無茶だったけど、上手くいってよかった」

俺はそんなことを眩きながら、エルと共にみんなの元に向かうのだった。

／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／

「あげはちゃん！エルちゃん！」

「大丈夫ですか？」

「うん。少年も協力してくれたからね！」

「エルもこの通り無事です」

「えるう〜！」

ソラとましろさんの言葉に俺とあげはさんはそう答えた。

「ナイト、今日は姿を消さないんだね？」

あげはさんが俺に尋ねてくる。

「ええ。流石にそろそろ正体を明かそうと思ひまして」

そう言いながら、エルをあげはさんに預け、変身を解いた。

「えつ…ええ〜!!ソウヤ君がキュアナイト!?!」

あげはさんとツバサ君が驚きのあまり大声をあげる。

「あはは…実はそうなんですよ…絶対びつくりするだろうから黙ってたんです」

「あげはちゃん達の気持ちわかるな…私も初めて知った時はびつくりしたもん」

「あの時はホントにびつくりしました…」

ソラとましろさんも俺が初めて正体を明かした時のことを思い出しながらそう言った。

「どういうこと!?!なんでプリキュアになると女の子になるの?少年は普通に変身してたのにな?」

「本当だよ!ソウヤ君、どうして?」

「いや…それは俺が知りたいというか…俺にもさっぱりわからないんだよね…だから、2人共、とりあえずはそういうものなんだと納得してくれ」

「そういうもの、なの?…うーん…まあいっか!ソウヤ君はソウヤ君だし!」

「それで良いんですか!?!…まあ、確かにソウヤ君はソウヤ君、ですね!」

どうやら、あげはさんもツバサ君も納得してくれたようだ。

そんな会話を交わしていると、下の絶景に目を奪われた。

いくつもの色の花が虹を描いているその景色はともきれいで、あの問題の答えとして、びつたりだと感じた。

「きれいな景色だな…」

「うん。ほんと、いい景色……」

あげはさんはそう言つて、景色を眺めていた。

そうして、俺達は満足がいくまでその絶景を眺め続けるのだった。

辺りもすっかり暗くなり、運転手のあげはさんと俺以外はみんな眠りについていた。先ほどまではツバサ君も起きていたのだが、今はもう眠りについていていた。

「ソウヤ君、まだ起きてる？」

「はい、起きてます……流石にトランクで熟睡は難しいですし」

「そっか……それにしても、まさかソウヤ君がキュアナイトだったなんてね……全然気づかなかつたよ」

「あはは……まあ、上手いこと口調を変えたりしたんで……それはそうと、あげはさん……あんな無茶なことは二度としないでください」

「心配してくれてありがとう。でも大丈夫だよ！私はみんなのこと信じてるから……それに、本当に危ない時はソウヤ君が助けてくれるでしょ？」

「まあ、それはもちろん助けますけど……」

「じゃあ、大丈夫だね！これから頼りにしてるよ！ソウヤ君」

「…了解です」

「ふふっ！」

そんな会話を交わしながら、家に帰るまでの道のりを過ごすのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

一方その頃

「ああ…心が寒いのねん…なんでこんなに負け続けるのねん」

カバトンは簀巻きに包まりながら、1人呟く。

そんなカバトンにどこからともなく声が響く。

『カバトン、もはや貴様に猶予はないぞ』

「ですが…」

『役立たずに価値はない』

そんな言葉が響いたかと思うと、カバトンの上空に黒い雲が現れ、黒の稲妻のようなものが近くの建物に落下し、落下した部分が崩れてしまった。

「ひ…ひいつ！」

そう怯えながら、カバトンは必死に頭を下げる。

「もう一度だけチャンスを一！今度こそプリンセス・エルを手に入れてみせます！」

『次が最後だ。今度こそプリンセス・エルを手に入れるのだ…それが出来なければ…わかつているな?』

それにカバトンは必死に頷く。

それを堺に、謎の声はピタリと止んだ。

そうして、ソウヤ達の知らない所で、決戦の火蓋は静かに切られるのだった。

力の起源と宣戦布告

「うーん……ここは一体？」

ふと、目を覚ますと真つ暗な空間に居た。

どうにも地に足がつかない感覚……ふわふわしたような現実味のない心地。

「これは夢か？まさか、こんなはつきりと夢を見ていると自覚することが出来るとは……」
そんな風に今の状況を把握していると、声が響く。

『お久しぶりです……ソウヤ様』

「えっ？誰？姿も見えないけど……」

『私がかつてあなたに助けられたものです……そして、あなたにプリンセスの力を託した張本人といったところですよ』

「プリンセスの力？……まさか！俺がプリキュアに変身した時にミラーージュペンとスカイトーンが同時に出てきたのって……」

『はい。あなたがスカイランドのプリンセスの力を持っているからに他なりません』

その言葉に驚きを隠せない……まさか、俺にプリンセスの力が宿っていたとは……だから、ミライレコードとかも出せたのかもかもしれないな。

「じゃあ、俺がプリキュアになると女の子になるのもそれが原因だったり？」

『いえ、それに関しては私にもわかりません…流石に想定外すぎるので…もしかしたら、なにかしらの関係はあるかもしれませんが…』

「な、なるほど…とりあえず今は良いか。ちなみに、どうして今話せるようになったんだ？今までは話せなかったような…」

『おそらく、ソウヤ様がプリキュアとして戦うことが多くなったからかと…その結果、プリンセスの力に残った残留思念…つまり、私と共鳴し、このように会話という形で繋がっているのだと思われます』

その言葉に、なるほどと頷く。

まさか、こんな形で俺のプリキュアの力の起源を知ることになるとは…

『改めて、あの時助けてくれてありがとうございます…！…ああ、やつと言えた…ずっと言いたかった…！あなたに直接』

「…そつか。うん、どういたしまして！俺があなたを助ける力になれたなら嬉しいよ」

『はい！ありがとうございます…！…そろそろ時間ですね…！またあなたがここに来ることがあれば、その時はこうしてまたお話ししましょうね！』

「まあ、いつ来れるかとかさっぱりだけど…その時はまた話そう！」

『はい！』

その言葉を最後に俺の意識は覚醒していく。

その時、声しか聞こえていなかったはずなのに、満面の笑みを浮かべている女性の姿が見えた気がした。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「おばあちゃんのおつかいが終わったら、プリホリのカフェに寄って、お茶してこっか？」

あの妙な夢を見て目が覚めた後、ヨヨさんにおつかいを頼まれて俺はみんなに付いていくことにして、今に至る。

「ソウヤ君？どうかしたの？」

「うん？…ああ、実はさ…」

そう言って、ましろさんに今日の夢のことを伝えようとした瞬間…

「イラつくぜ！イラついてしょうがねえのねん！こっちはいよいよやばいことになってるってのによ」

カバトンが姿を現し、そんなことを口にする。

「やばい？…どういうことですか？」

「うるせえ！そもそも全部お前らのせいなのねん！お前らさえ邪魔しなけりや！」

そう言いながら、カバトンは俺とソラを睨みつける。

「お前らはオレの疫病神だ！ソラ！ソウヤ！オレと勝負しろ！」

「勝負？でも、それだと2対1になるぞ？お前が不利になるんじゃないか？」

「フン！それぐらいどうってことないのねん！オレには奥の手があるからな！…良いか？勝負は3日後！もしお前らが勝ったら、もう二度とプリンセス・エルには手を出さねえと約束してやる！」

「その言葉に嘘はありませんね？」

「ああ」

即答とは意外だな…奥の手があると聞いていたし、それだけ自信があるということか…いや、それだけじゃないな…あれは覚悟を決めた目だ。

これは、気を抜いているとやばそうだ。

「これは最終決戦だ！首を洗って待ってる！」

「望む所です（だ）!!」

俺とソラの返事を聞き、カバトンはその場を後にした。

そうして、家に帰ってきた俺達はさっそく話し合いを始めた。

「2人共、本当に大丈夫なの？」

ましろさんがそう言って、不安そうな表情を浮かべる。

「大丈夫です。私達で決めたことですから…ね？ソウヤ」

「そうだな…何の考えもなしにあんなことを言ったわけじゃない…このままカバトンに狙われ続ける限り、安心は出来ないからな…これで決着をつけてくる」

「でも、あんなヤツの言葉を信じてても良いんでしょうか？」

ツバサ君が当然の疑問を口にする。

確かにあいつが約束を守る保障はない。

だが…

「カバトンの目はいつになく真剣でした…」

「だな。あれは覚悟を決めたやつのだ…おそらく向こうも後がないんだろう…でも、だからこそ気をつけないとだ…追い詰められた奴は何をしでかすかわからないし」

「そうですね…きつと、奥の手というのもハツタリではないはずです。どんな手かはわかりませんが、それでも勝つのが…」

「ヒーローだよね！」

ましろさんがソラの言葉に続けて、そう口にする。

「こうなったら、2人を応援しようよ！決戦までまだ3日もあるし、良い考えがあるんだ

！」

「良い考え？」

そう疑問を口にする俺にましろさんはその考えを話し始めるのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ふう…なんとか来れた」

ましろさんの考えはバトル漫画のように特訓しようということだった。

そして、さっそくその特訓の場所に向かうことになったわけだが、まさかの荷物が多すぎて定員オーバーとなり、俺は車で移動することが出来なかった。

じゃあどうやって来たのかというと、キュアナイトαスタイルに変身してやってきた。

αスタイルの能力である自分が作った槍の場所に瞬間移動できる能力を利用した。

まず小さいサイズの槍を用意して、ツバサ君に持たせて、目的地に辿り着いた後、あげはさんにヨヨさんに連絡してもらおう。

そして、その後ツバサ君に槍を近くの地面に差してもらい、そこに移動するという方法だ。

「お疲れ様、ソウヤ君。まさか定員オーバーになっちゃうなんてね…」

「ホントごめんね！ソウヤ君」

「いえいえ！大丈夫ですよ！さて、まずはなにから始めようかな」

そうして視線を移すと、滝に打たれている老人が目に入った。

「あれは？」

「ただ者じゃないです…一言で言うなら無の境地、何も雑念がない自然体です」

「なるほど？でもあれ多分…」

俺がそう言いかけた瞬間、滝に打たれていた老人は不敵な笑みを浮かべたかと思うと、声を上げた。

「肩こり！解消〜！」

そうして、滝から出てきた老人は眠ってしまったが、スッキリしたと言いながら通り過ぎて行った。

「やっぱり、寝てるだけだったか…あげはさん、ここはどういったパワースポットなんですか？」

「ちよつと待つてね…あつ、よく見たらここって肩こり解消のパワースポットだった…」

俺の質問にあげはさんはスマホで調べて、そう答えてくれた。

「まったくしつかりしてくださいよ」

「ごめんごめん」

「ツバサ君、辛辣だなあ…まあ、あげはさんは学校のレポートとか色々あるし、大変な

んじゃないかな…調べてくれただけでもありがたいよ」

「まあ、確かにそうかも…さつき、車では自分のこと超優秀とか言っていましたけど、本当は余裕がなかったんですね…」

「えっ！そ、それは…」

…凶星だったのか。あげはさんも大変だな…俺も手伝えれば良いんだけど、知識が圧倒的に足りないな。

「しようがない…ボクがその辺の鳥達に聞いてきます」

そう言つて、ツバサ君は鳥の姿に変身する

「ツバサ君、鳥と話せるの？」

「そりやまあ、ボクも鳥なので、ここは任せてください」

「じゃあ私はみんなのご飯の準備をしておくね！」

「ましろさんが作ってくれるのか！楽しみだ！」

「えへへ…夕飯は期待しててね」

ましろさんの夕飯…期待しかないな。

俺もましろさんの手伝いをしようかな？…いや、今回は一応特訓が目的だし、さらに強くなるための特訓をするべきか。

「では、私は滝に打たれて精神を統一してきます！」

「えっと、私は……」

「『学校のレポート！』」

「える！」

「あはは……あげはさん、ファイトです！」

あげはさんに対するみんなの言葉に思わず苦笑する。

「そういえば、ソウヤ君はどうするの？」

「……俺も少し精神を統一するよ……ちよつと試したいこともあるし」

「では、私と一緒に滝に打たれましょう！」

そうして、俺はソラに引つ張られ一緒に滝に打たれる。

そして、精神を統一すると、だんだん心が清められていく。

そうやって、滝に打たれていくうちに、ついに俺は目的の人物と繋がる事が出来た。

『おや？随分早い再会でしたね……』

「良かった……上手くいけば会えると思ってた」

『ふふっ！会えて良かった！それで、今回はどうしたんですか？わざわざあなたから話しかけてきてくれるなんて』

「実はカバトンっていう敵と勝負することになってさ……俺の力について調べれば、もっと強くなれるかなって……それで、あなたに聞くのが良いかと思って」

『そういうことだったんですね…わかりました！私のわかる範囲であなたの力について
教えます！』

「ありがとう！それじゃあお願いするよ！」

そうして俺は、自分の中の力の残留思念との対話を始めるのだった。

カバトンとの決着

「きれいだね〜」

「はい」

「こういうのって街とかだとなかなかお目に掛かれないよな」

星空を眺めながら、俺達はそんな会話を交わす。

カバトンとの戦いを明日に控え、のんびりとした時間が流れる。

この3日間、可愛らしいリスの山の主と一緒に特訓したり、残留思念との会話を通して、俺の使える力について理解を深めたり、ましろさんの作ってくれたご飯を食べたりと、有意義な時間を過ごした。

あれ？これって傍から見ると、ただキャンプしているようにしか見えないのでは？

まあ、変に力みすぎるよりはマシだし、良いか。

「いよいよ明日だね…」

「はい…」

「そうだな…ソラ、もしかして緊張してる？」

「実は、少しだけ…何だか眠れそうにないです」

「そっか…」

「ボクもです!」

突如として、後ろの鳥小屋で寝ていたはずのツバサ君がそう言いながら、人間の姿に変身し、近くの椅子に座った。

「カバトンはどんな奥の手を使ってくるのか…いろいろと考えていたら、なかなか寝付けなくて…ボクらがこんなに落ち着かないなら、2人はもつと落ち着きませんよね…」「ふふっ!別にそこまで落ち着かないわけじゃありませんよ。もちろん、緊張はしていませんが…でも、ちゃんと特訓しましたし、ソウヤも居るので負ける気がしません」

「俺をそこまで信頼してくれるのは嬉しいけどさ…油断は禁物だ。捨て身で掛かってくる奴は強いからな…まあでも、気負いすぎるよりはマシだな…明日、決着をつけよう!」「はい!」

「私達はこれぐらいのことしか出来ないけど、でも、だから全力で応援するね!」「ありがとう。ましろさん」

そうして、みんなの想いを胸に、俺達は決戦に備えるのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

カバトンとの決戦の当日、河川敷へとやってきていた。

「来たか…なのねん。ビビって逃げ出しかと思ったのねん」

「約束は守ります」

「ソラの言う通りだ。約束は守るさ…お前も約束は忘れてないだろうな」

「ああ。もしオレが負けたらプリンセスには手を出さねえ」

「それを聞いて安心したよ」

そう返すと、カバトンは手に黒いエナジーを溜める。

「これがオレの奥の手だ！この3日で最大限に高めたアンダーグエナジーを、オレ自身に注入する！」

「なるほどな…そういう奥の手か」

「カモン！MAXアンダーグエナジー！」

そうして、カバトンはアンダーグエナジーを自分に注入し、巨大化した。

「ギャハハハ…TRUEE。これがオレの奥の手だ！最強にTRUEE…」

「いこう！ソラ！」

「はい！ソウヤ！」

そうして、俺達はプリキュアに変身する。

「無限にひろがる青い空！キュアスカイ！」

「静寂ひろがる夜のとばり！キュアナイト！」

「レディ・ゴー！」

「ひろがるスカイ！プリキュア！」

そうして、俺達はプリキュアに変身した。

「なっ！お、お前がキュアナイトだったのねん!?」

「そうだよ。もうここに居るみんなは正体を知ってるし、隠す必要もないかなって」

「フーン！お前がキュアナイトだったとしても、関係ないのねん！俺はTUEEE！」

そう言いながらカバトンが殴りかかってくる。

それを回避し、後ろへ下がる。

確かに強力な一撃だ…当たったらひとたまりもないだろう。

ここは…

「プリキュア・ミライレコード！」

ミライレコードを起動し、スカイミラージュにセットする。

「ミライコネクト！ナイト！」

そして、俺はαスタイルへと姿を変える。

残留思念曰く、俺のミライレコードには俺がこの先得るかもしれない未来の可能性が記録されていて、これを起動し、未来の可能性の力を一時的に借り受けることが出来るらしい。

「はぁーっ！」

αスタイルに変化した俺はカバトンとの距離を一瞬で詰め、その勢いのままキックする。

「ぐうっ……！ なかなかやるのねん……だが」

その言葉が聞こえた瞬間、槍を空中に投げ、瞬間移動する。

すると、俺が居た場所にカバトンが虫を叩くように両手を叩いた。

「あつぶな！」

「チッ！ なら、まずはお前からなのねん！」

そうして、カバトンはスカイに殴りかかる。

……だが、山の主との特訓によって、スカイも強くなっている。

カバトンのパンチをスカイは最小限の動きで躲す。

続けてカバトンが連続でスカイに殴りかかるが、スカイはそれら全てを躲す。

「タァーっ！」

そして、一瞬の間隙をついてカバトンにパンチを喰らわせた。

「ぐふう…」

「あれは山の主に習った！」

「特訓の成果出てるよ！」

ツバサ君とましろさんの言葉が聞こえてくる。

あの山の主、実はすごいやつだったんだな…

「ぐぬう…な、舐めやがって…力さえあればお前らなんかに負けないのねん！」

そう叫びながらスカイを叩き潰そうとする。

「スカイ！」

そうして、俺はスカイを助けるために乱入する。

青く光輝く剣を携えて。

そのまま、スカイを叩き潰そうとしているカバトンの手を切り裂く。

すると、カバトンは手を引っ込めた。

「ナイト…その剣は?!」

スカイがそんな疑問を聞いてくる。

「これは…俺の姉が使ってる剣を再現したものだ」

『なるほど…ミライコネクトの力についてはわかったけど…ちよつと疑問があるな…』

『疑問とは？』

『ミライコネクトは未来の可能性の力を借り受ける力なんだよな？』

『そうですが…それがどうかしたんですか？』

『そうだとすると…もし、俺の未来が確定しちゃったらミライコネクトの力が使えなくなるんじゃないか？』

『ああ、それなら大丈夫ですよ！ソウヤ様の力には過去に自身が触れた武器であったり、使用した技や能力を再現することができる力があるので』

『なるほど…確かに未来の可能性が記録されているものがあるなら、過去の記録を遡ることも出来るかもしれないな…まあ、あくまで俺の記憶にあるもの限定だろうけど…でも、これは使えるかも！』

『それは良かった！それではやり方を教えますね！』

『ありがとう！』

そうして、咄嗟に再現したのが姉が使っている剣だ。

姉から剣術に関して教わったこともあったが、剣を握るのは久しぶりだ。

「その剣…あの時、私達を助けてくれたあの人の…まさか、ソウヤは…」

「スカイ！話は後！一気に決めよう！」

「はい！」

スカイの返事を聞き、俺はカバトンに接近し、斬りつける。

αスタイルの高速戦闘を駆使し、ダメージを与えていく。

そして、カバトンのパンチを剣を使って受け流し、その勢いのまま蹴り上げた。

「スカイ！今だ！」

「はい！…ヒーローガール！スカイパンチ！」

そうして、スカイの必殺技がカバトンに命中し、カバトンは地面に仰向けに倒れた。

「や…やりました！」

「か、勝ったんだよね!？」

「すごいよ！スカイ！ナイト！」

「える〜！」

「オレが…負けた…?？」

カバトンは未だに負けたことが信じられないのか、そんなことを口にする。

「カバトン、約束通り二度とエルちゃんには…」

「そんな約束忘れたのねん！」

そう言つて、カバトンは立ち上がる。

「どんな手を使つても、最後に勝つたやつがTUEEEのねん！プリンセスを手に入れられさえすればオレの勝ち！」

そうして、カバトンはエルを手に入れるために、黒いエナジーを手に集める。

「まあ、追い詰められたらそうくるとは思つていたよ」

一瞬でカバトンに接近し、そのまま斬撃を浴びせる。

もちろん、殺すつもりはない。所謂、峰打ちというやつだ。

「なっ…!?!」

「ましろさん！ツバサ君！今だ！変身を！」

俺の言葉を聞き、ましろさんとツバサ君はプリキュアへと変身した。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ふわりひろがる優しい光！キュアプリズム！」

「天高くひろがる勇氣！キュアウィング！」

2人は変身を終えて、それぞれ行動を始める。

ウィングはあげはさんとエルを抱っこして空中へ。

プリズムは俺達と合流し、カバトンに2人の必殺技を放つ。

「スカイブルー！」

「プリズムホワイト！」

「プリキュア・アップドラフト・シャイニング！」

「スキッタのね〜ん」

2人の合体技が命中し、カバトンが浄化される。

流石にランボーグのように消え去るということはなかったが、もう戦う気力は残っていないさそうだ。

「カバトン、あなたの負けです」

「い、嫌だ！負けるなんてぜってえに嫌なのねん！」

往生際悪くそんなことを…いや…これは何かに怯えてる？

そんなことを考えていると、この周囲だけ、空が暗くなる。

「なんだ？おい！カバトン！あれはなんだ！」

「アンダーグ帝国じゃ、YOEEYYアツに価値はないのねん…だから、オレは必死にTU
EEYYアツになろうと…」

「アンダーグ」

「帝国…？」

スカイとプリズムがそう順番に眩く。

その後、カバトンが謎の力によって空中に連れていかれる。

「ひっ……や、やめて！オレはまだ役に立ちます！……どうか……どうかお許しを！あわわ
！ひいっ」

……粛清つてわけか……胸糞悪い！

気づけば、俺は動き出していた。

「ナイト！」

「スカイ……考えていることは同じか」

「はい！」

そうして、俺とスカイはカバトンの元へと向かう。

「お前ら、何で!?!」

「わかりません……でも、これが正しいことだと思ったからです！」

「……助けを求めているやつを見捨てるわけにはいかないからな」

落雷を防ぎつつ、カバトンを助けるために近づいていく。

そうして、カバトンを押しのけ落雷を回避させる。

（オレの負けだ……お前らはTUEEE……オレなんかよりずっとな）

「……って、ええっ!?!下、川なの!?!どぼん！」

そんなカバトンの叫びを聞きつつ、着地する。

暗くなっていた空はいつの間にか、晴れ渡っていた。

そうして、俺達とカバトンの戦いは決着したのだった。

／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／

「カバトンの言っていたアンダーグ帝国って一体…」

「おばあちゃんも知らない国みたい」

「でも、きつともう会うこともありませんよね」

みんながそんなことを呟く。

アンダーグ帝国か…カバトンにはもう会うことはないかもしれないが、他にもエルを

狙う奴がいる可能性があるな…まだまだ油断は禁物だ。

『アンダーグ帝国…やはり、そうでしたか…』

「えっ？」

一瞬、残留思念の声が聞こえた。

だが、本当にそれは一瞬で、今はもう聞こえなかった。

「今の言葉は一体…今度会ったら聞いてみよう」

「ソウヤ？どうかしましたか？」

「いや…何でもない。とりあえずカバトンとの戦いは終わった！まだまだ色々不安な

ことはあるけど、何が来たって必ずエルを守り抜こう！」
「はい！もちろんです！」

その言葉にみんなが頷く。

そうして、俺達の戦いは一旦の区切りを迎えるのだった。

ソウヤと姉の会話

「そういえば、ソウヤ君はスカイランドの家族に連絡しなくても良いの?」

カバトンとの決着がついた数日後、ましろさんがふとそんなことを口にする。

「いや…そうしたいのは山々なんだけど、うちの姉さんは忙しい人でさ…連絡つくかわからないだよ」

「お姉さんがいるんだ!どんな人なの?」

「…立派な人だよ。いろんな人を助けてるヒーローで…なんか俺、前世も今もそういう人達のところにいるよな…」

「確かにそうかもね…ねえ、やっぱり連絡だけでもしてみない?繋がるかどうかはわからないけど」

「…うん、そうだね…繋がるかはわからないけど、連絡だけでもしてみよう」

そうして、俺はヨヨさんを訪ね、久しぶりに姉に連絡をすることにすのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「いや、にしても姉さんに連絡するのは久しぶりだな…一応、手紙のやりとりはしてたけど、こっちに来てからはそれもさっぱりだしな」

そう眩きながら、ミラーパッドを起動し、姉さんに連絡をする。

「うーん……やっぱり繋がらないか……」

そんな風に半ば諦め状態になっていると、突如としてミラーパッドに映像が映った。

『隊長！ミラーパッドに通信が！』

『本当か！ソウヤか……ソウヤからか!?!』

「うん、俺だよ姉さん」

そう言うのと、1人の女性が反応してこちらを見る。

『ソウヤ！ああ、良かった無事だったか！大丈夫だったか？ちゃんとご飯は食べているか？酷い目に遭っていないか？』

「大丈夫だって……心配してくれてありがとう」

俺のことを心配してくれている綺麗な女性は、スカイランドのヒーローチーム、青の護衛隊の隊長、シヤララ……俺の姉である。

『そうか……良かった……！手紙の返信も来なかったし、何かあったのではないかと心配で心配で……今、どこに居る？場所さえ教えてくれればすぐに行く！』

「いや……実はさ」

そうして、俺は姉さんに今までの出来事をかいつまんで説明した。

『なるほど、そんなことが……ソウヤ、よくやったな！私は誇らしいよ……ソウヤの仲間達に

も感謝だ』

「うん、そうだね…それで、もうしばらくはソラシド市に居ることになると思う」

『そうか…本当は今すぐにも駆けつけたいが、ソラシド市に行く方法が…そうだ…嵐が発生した時にそこに飛び込めば…今すぐ嵐を無理やりにも起こして…』

『た、隊長！流石にそれは無謀ですよ！』

『ええい、放せ！私はソウヤの元に行かなければならないんだ！』

『まったく！この人はソウヤ君のことになると見境をなくすんだから！』

「あはは…」

姉さんを必死に止める男性、アリリ副隊長を見ながら苦笑する。

うちの姉さんは過保護というか、なんとというか…そのせいか、時々こんなふう to 暴走することがある。

「そんな焦んなくて大丈夫だよ…ヨヨさんが言うには、ゲートがもう少しで開くらしいから」

『そうなのか？』

俺の言葉を聞いて、姉さんは一旦冷静さを取り戻したのか、落ち着いた口調でそう言う。

「うん。ヨヨさんが言ってたし、間違いないと思う…ただ、いつ頃かと言われると困るけ

ど…でも、もう少しなのは間違いないよ」

『そうか！良かった！これでようやくソウヤに会えるのか…！よし、そうと決まれば、残りの任務をすべて片付けなければ！』

『ソウヤ君が戻ってくるなら、安心だ…君が行方知れずになってからの隊長はそれはまあすごくてな…本当に大変だった…』

「なんかその…お疲れ様です」

アリリ副隊長の心労を思うと、罪悪感がすごいな…いやまあ、わざとソラシド市に来たわけじゃないし、エルを助けようとしたことに後悔は一つもないが。

そんな会話を交わしていると、通信がもうすぐ切れかかる。

「姉さん、アリリ副隊長。もうすぐ通信が切れるみたいだ」

『なっ！もう終わりか!?もう少し話しをしたかったのだが…』

「それは、俺が帰ってからのしよう。俺も姉さんと久しぶりに話したいし」

『ソウヤ…わかった、待っている。スカイランドに戻ってきたら、まずは私に会いに来てくれ…今ある仕事はすべて終わらせておくから』

「まあ、まずはプリンスを王様達の所に連れていかなきゃだし、その後になると思うけど」

『そうだな…まずはそれからだ。では、その後には久しぶりに姉弟の時間を過ごそう』

「うん、そうしよう。それじゃあまたね、姉さん」

『ああ、またな』

笑みを浮かべてそう言う姉さんを見た後、ミラーパッドの通信が切れてしまった。

「切れちゃったか…まあ、姉さんの無事も確認できたし、よしとしよう」

そうして、俺はヨヨさんにミラーパッドを返しに行くのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「良かった…ソウヤは無事だったようだ」

「だから、言ったではありませんか…あの子は強い子だと」

「それはそうだが、やはり心配なものは心配だ…特に変な女に騙されていないか…ソウ

ヤは優しいから、いろんな女に好意を持たれていそうだからな…心配だ」

「そつちですか…」

「…もちろん、怪我をしていないか、食事はちゃんとしているか…酷い目に遭っていない

かも心配だったよ…ああ…早く直接会いたい」

「そのためにも仕事を終わらせましょうか」

「そうだな…では、出発だ！素早く、なおかつ確実に終わらせて、ソウヤを出迎えるぞ！」

「はい！」

そうして彼女達は任務へと向かうのだった。

ファーストシューズ

「えっと、エルちゃんに似合う靴は…」

「これなんかどうですか？とつても頑丈そうですし、防御力も高そうです！」

「ゲームの装備品じゃないんだから、靴に防御力を求めるなつて…」

そんな風にソラの発言にツツコミを入れつつ、店内を見て回り、エルに合う靴を探す。

今、俺達はソラシドシューズという靴屋に来ている。

どうやらこの世界にはファーストシューズという子供がよちよち歩きが出来るようになった記念に靴をプレゼントする風習があるらしく、今日、初めてエルが歩いた記念にファーストシューズを買いにきた。

エルが歩いた時は俺達みんなが感動した。

そういえば、あの時ヨヨさん、なんか用事があるみたいだったけど、何だったんだろう？

まあ、後で聞いてみよう。

「えっと…これどう？ピカピカ光ってるよ！」

「えるー！」

ましろさんの持つている靴を見て、エルは嫌！と言わんばかりに首を横に振る。

ちなみに、さつきソラが持つてきた靴にも同様の反応だった。

そして、ソラとましろさんは次から次に靴を持つてくる。

靴の全体で車がデザインされた靴に、ゾウがデザインされ、ゾウの鼻が飛び出ている歩きづらそうな靴といったような靴で、流石にこれはどうなのだろうかと疑問を抱いた。

「えーるうー！」

「あはは…どうやらお気に召さないみたいだ…」

「めっ！好き嫌いはダメですよ？」

「いや、好き嫌いの問題ではないか？言っちゃあれだけど、このデザインの靴は流石にあれな気がする…」

「フフン！ソウヤ君の言う通りです…プリンセスは悪くありません。足りてないんですよ、お二人のセンスが」

ツバサ君…なんか自信満々だな…

「エルちゃんはスカイランド王家のプリンセス。キラキラ輝く一番星、国民のアイドル…そんじよそこらのデザインで満足するはずが…」

そう言いながら、ツバサ君はやたら豪華な靴を見つけていた。

「さあ、お受け取りください！プリンセス！」

そうして、見つけた靴をエルに渡そうとして…

「える！」

エルに首を横に振られてしまった。

「ええ〜!?!」

「あはは…ちよつと豪華すぎたのかもね…と、なると…こういうのはどうかな？」

すみれ色のシューズを見つけ、エルに見せる。

「えるう？える、える〜」

そのシューズを掴み、見つめていた。

そして、しばらく様子を見た後、首を横に振る。

「うーん、ダメだったか…でも、即答されなかっただけ前進かな…方向性は間違っていないってことだろうし…」

「そうだね！私達のはすぐに拒否されちゃったけど、ソウヤ君のシューズは悩んでたし…これに近いものを探してみよう！」

そうして色々靴を探してはエルに見せていったが、結局どれもお気に召さなかった。

「他の店を探しましょうか…」

「…ですね。せっかくのファーストシューズ、妥協は許されません！こうなったら、この世界の靴屋さんをすべて回りましょう！」

「終わる頃には、エルちゃん大人になっちゃうよ？」

「あはは…とりあえず他の店を探すのは確定として…どこに行こうか？」

「うーん…他にもいくつか靴屋さんはあるけど…」

そんな風にましろさんと話していると、エルが突如として反応した。

「える…える、える！」

エルが反応を示したのは誰かが買おうとしている靴で、確かに可愛いデザインだ。

「あれは人のですよ」

「別のにしよ！ねっ？」

すると、その靴を買おうとしていた年配の女性が声を掛けてきた。

「どえらい可愛い赤ちゃんやな〜」

「おお…関西弁…と、すみません。実はこの子はその靴のデザインを気に入っちゃったみたいで…でも、人様のものをもらおうとは思ってないので大丈夫です」

俺はそう言って年配の女性に答える。

「える…える、える〜！える…」

エルは変わらずその靴を欲しがり、せわしなく動いている。

「ふふっ！ええよ。これ、あげるわ！」

「えっ…？」

俺とましろさんの言葉が重なる。

「えるう〜」

エルは満足気だが俺とましろさんの表情は暗い。

多分だけど、この人は誰かに贈り物をするためにこの靴を買おうとしたはずだ…それをあげるだなんて…

「でも…」

「これ、買ったかったんじゃないんですか？」

「遠慮せんでええんよ。まだお会計済ませる前やしなあ」

「わあ…！ありがとうございます！」

「こない気に入ってもらえて、靴も喜んでるわ」

「ヒーローです。ヒーロー発見です！靴の気持ちまで考える優しさ、それがヒーロー！」

そんなことを言いながら、ソラは手帳とペンを出し、さっそくメモしていた。

「なんでやねん」

ツバサ君がそんな風にツツコミをする。

まあ、それは俺も思った…と、今はそれよりも、この人の気持ちを聞かないとだな。

「あの！本当に良いんですか？これって、誰かにプレゼントする靴…ですよね？」
ましろさんがそう尋ねる。

「これで良かったんや…」

「えっ…？」

これで良かった…：そう言いながら、店から出ていく女性の姿はどこか寂しげに見えた。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「断るべきでした…」

「えっ…？」

家に帰ってきたソラは手帳に何かを書いた後、そう口にする。

「きつと何か事情があったんです…なのに私…未熟！」

「まあ、確かに事情はありそうだったよな…あの人のことを探して、靴を返しに行った方が良いかもしれないな…」

「そうですね！そうと決まればきつそく探しに行きましょう！」

「えっ？プリンセスは？」

「そうなんだよな…エルがこの靴、気に入っちゃってるからな…それに、そもそもどこに行けば会えるのかもわからないし…」

そんな会話を交わしていると、ヨヨさんの部屋から物音が聞こえてくる。

「今の音、なに!？」

「ヨヨさんの部屋から聞こえてきました!」

「急ごう!」

そうして、俺達はヨヨさんの部屋へと向かうのだった。

「おばあちゃん、大丈夫!？」

ましろさんが勢いよくヨヨさんの部屋の扉を開くと、そこには白いゲートのようなのが開いていた。

「ヨヨさん…まさか、これは…!」

「ええ、あなたが思っている通りよ、ソウヤさん。約束通り完成させたわよ」

ヨヨさんの言葉に俺は確信する。

これこそがスカイランドに繋がるゲートなのだ。

おそらく、エルが初めて歩いたあの時に、ヨヨさんが俺達に伝えようとしていたのはこのことなんだろう。

「えるゝ」

「これでエルちゃんをスカイランドに…おうちに帰してあげられます！」

「そうだな…でも、そうなるか…」

「そこまで言って、言葉に詰まる。」

スカイランドに帰れるようになったということは、俺達はソラシド市を離れることになるってことだ。

…正直に言えば寂しい…すでにゲートが繋がっている以上、いつでもソラシド市に戻って来れると言われればそうなのだが、ここで過ごす時間が心地よくて、もう少し居たいと思ってしまう。

そんなことを考えていたせいかな、ヨヨさんと王様達の会話がどこか遠くに聞こえる。

そうして、かろうじて聞こえてきたのは、ミラーパッドの調整が明日の夕方に終わるということだった。

「さて、みんな聞いてちょうだい。アンダーグ帝国はこれからもエルちゃんを狙ってくるでしょう…戦いの舞台はソラシド市からスカイランドへと移る」

ヨヨさんは俺達に諭すようにそう告げる。そして、更に言葉を続けた。

「でも、ましろさんはスカイランドでは暮らせない。ソラシド市で学校に通わなくちゃいけない、勉強もしくちゃいけない。…それに…」

「ラ…ランボーグがエルちゃんを襲ってきたら、私トンネルを使って、スカイランドに助けに行くよ?」

「そうね…そうしてあげて」

徐々に思考が働くようになり、なんとなくヨヨさんの気遣いがわかった。

ヨヨさんはきつと俺達に猶予をくれたんだ…ちゃんとお別れが出来るように。

「でも、皆でひとつ屋根の下で暮らすのは明日でおしまい。寂しいけれど…後であげはさんにも声をかけて、夜はごちそうにしましょう」

「える、えるう〜!」

エルの無邪気な笑顔を見ながら、俺はもうすぐ来る別れに改めて寂しさを感じるのだった。

近づく別れの時

「そっか…帰っちゃうんだ…」

ヨヨさんがあげはさんを選んでくれて、皆でご飯を食べている中、あげはさんはそう口にする。

「はい…正直、寂しいですけどね…まあ、別に今生の別れというわけではないですけど、やっぱり寂しいものは寂しいです」

「ソウヤ君は素直だなあ…誤魔化したりしないんだ」

「…まあ、寂しい気持ちを隠す必要はないと思いますし…」

そんなことを呟きながら、ふと、皆に隠しているあのことを思い出す。

…俺とソラの関係について黙っていたままで良いんだろうか…俺達は明日、スカイランドへと帰る…もしかしたら、俺とソラの間話を話す機会がなくなってしまうかもしれない。

やっぱり、話しておくべきだよな…

俺はそう思いながら、ソラに耳を貸してほしいと伝え、ソラの耳元で言葉を紡ぐ。

「なあ、ソラ…皆に俺達の関係のこと話した方がいいんじゃないか？」

「えっ?でも…」

「このタイミングを逃したら、もう二度と話す機会が無くなるかもしれないぞ?」

「…確かにそうかもしれないですね…うう…でも…」

「…まあ、確かに今言うことでもないか…今は皆との食事を楽しもう!」

「…はい、そうしましょう!」

「なになに、2人でこつそりと何話してるの?」

「あはは…そんな大したことじゃないですよ」

あげはさんの質問にそう返す。

正直、ソラとの関係を話した方が良いとは思いますが、ご飯を食べている時に言うことではなかったな…この家で皆と食べる最後の…ご飯なのに、空気をぶち壊すわけにもいかない。

「ふくん、そつか…そういうえば、ましろんは明日、どうするの?」

「一緒にエルちゃんを送り届けて、ちよつと観光してから帰るよ」

そう言うましろさんの顔はどこか浮かない…そんなましろさんを見ながら、俺はご飯を食べるのだった。

「…どうしてこうなった…」

晩ごはんを食べ終え、お風呂にも入り、後は眠りにつくだけというタイムリングで、ソラとましろさんに一緒に寝ようと誘われ部屋にやってきたわけだが…

何故かベッドの上で、右にソラ、左にましろさんが居るといふ状況でベッドで寝ている。

あげはさんは床に布団を敷いて寝ていて、エルも床にあるベビーベッドで寝ている。俺も普通に下で良かったんだけども…

「ソウヤは嫌ですか？」

「いや、そういうわけじゃないけど…流石にこれはドキドキすると言いますか…」

「そうなんだ…じゃあもつとくつついちゃうね！」

「何で!？」

「ましろさん、ズルいです! 私も!」

そうして、2人が俺の腕に抱きつく。

正直、かなり嬉しい。

とはいえ、流石にこれじゃあ寝られそうにない。

「ぐぐ」

突如として、あげはさんのいびきが聞こえてくる。

「すごいいびきだな…まあ、でも仕方ないか…あげはさんは学校が忙しいだろうし、それに毎日車で通っているわけだしそりやあ疲れれるよな…今日、来てくれただけでも感謝だな」

「そうだね。…それにしても、ソウヤ君はあげはちゃんのことともよく見てるんだね」

「まあ、俺もあげはさんにはお世話になってるしな…」

「…ぐが〜！ぐが〜！ぐが〜！」

またしても大きいいびき。いや、ここまで来るとわざとだな…もしかして、ソラとましろさんが話を出来るようにしてる、とか？

「これじゃあ眠れないよ」

「ちよつと外の空気を吸いに行きませんか？…ソウヤも一緒に」

「…そうだね。せっかくだし付いていくよ」

そうして、俺達は外の空気を吸いに行くのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「うーん！夜風に当たるのも気持ち良いな…なんか色々と思出しちゃうな」

「そうですね…初めてこの世界に来た時は魔法の世界かと」

「フフツ！そんなこと言ってたね！」

「そうだな…俺の場合は懐かしさを感じたな…それから皆と会って…ホント、色々
あったよな」

「はい…今はなんだか、ここがもう一つの故郷のように思えます」

「俺もそう思うよ」

「あーご…ごめんなさい！またすぐに遊びに来ますから！」

「うん、うん！」

「え…えつと…明日！靴を譲ってくれた人を探しに行きませんか？トンネルが開くまで
時間もありませんし」

「そ、そうだね！そうしよう！」

2人はなんだかぎこちない会話をしている。

「…2人はさ、良い子すぎるよな…まあ、悪いことじゃないんだけど、もつと我儘になっ
ても良いんじゃないかな？寂しい、離れたくない…そう言つて、泣いたつて良いと思っ
…そうやって泣いた後は笑つてお別れできると思うし」

「ソウヤ…」

「…だから、俺は寂しいつて気持ちを隠さない…かと言つて、スカイランドに帰りたくな
いってわけじゃないけどね…スカイランドには姉さんも待つてるし」

「お姉さん…そういえば、ちゃんと連絡は出来たの？」

「うん。ちゃんと連絡出来たよ……ものすごく心配を掛けてたみたいけど」

あの時の姉さんはすごくかったからな……アリリ副隊長も言ってたけど、俺が行方知れずになってからはかなりやばかったらしいし。

「ソウヤ君のお姉さんかあ……会ってみたいな」

「……エルを王様達のところに入れて行ったら会う予定だから、その時に会えるかもね……と、そろそろ戻ろう……流石に眠くなってきた」

「そうしましょう。あ、ソウヤの部屋で寝ても良いですか？」

「私も、一緒に良いかな？」

「えっ!?本気?なんでそうなるんだ……」

俺がそう尋ねると、2人は笑みを浮かべて答えた。

「ソウヤ君と一緒に居たいからだよ」

「私も同じ気持ちです」

「いや、それは構わないけどさ……さっきの部屋じゃダメなのか?……あつ、あげはさんのいびきか……」

俺の言葉に2人は頷く。

いや、多分あれは演技だと思っただけ……まあ、でもそんなことを言ってしまったら、あげはさんの気遣いが台無しになるよな。

「私ね…本当はやっぱ寂しいんだ…だから、ソウヤ君とソラちゃんと今日は一緒に居たい」

「はい…私も同じです。だから、お願い出来ませんか？」

「…わかった。それじゃあ今日は一緒に居よう」

俺がそう言うと、2人は嬉しそうな顔をして俺に抱きつく。

「ありがとう！ソウヤ君…フフツ、ソウヤ君と一緒に寝るのは2回目だね？」

「2回目!?ソウヤ、どういうことですか？」

「いや、前にましろさんに頼まれてさ…って、痛い痛い…ごめん…ごめんって！」

いきなり腕に抱きつく力が強くなり、腕に痛みが走る。

俺はそんな痛みを我慢しながら、部屋へと向かうのだった。

「なんとか話は出来たみたいだね…2人共、ソウヤ君にあんなに抱きついて、ちよつと羨ましい…私も一緒に行けば良かったかな…」

あげはさんが寂しげにそう呟いていたのを俺は知る由もなかった。

届けよう!大切な贈り物

「うーん…ここにもいないか」

「そうみたいですね…」

「他の店を探してみよっか?」

俺達は昨日靴を譲ってくれた女性を探しているんな靴屋を巡っていた。

ツバサ君にはエルに靴が無くなったことを悟らせないようにしつつ、面倒を見てもらっている。

正直、損な役回りを押し付けてしまつて申し訳ないとは思っている…だけど、ツバサ君にしか頼めないのも事実だ。

「うん? あれは…」

そんなことを考えていると、俺達に靴を譲ってくれた女性が誰かと通話している姿が目に入った。

「居た…!」

そうして、俺達は女性が通話し終えるのを待つてから声を掛け、近くの喫茶店で落ち着いて話をすることにした。

「そら、ご苦労さんやったなあ…でもお金払ったのはそっちやし」

「まあ、そうなんですけどね…でも、あなたが言っていた『これで良かった』っていう言葉が気になってしまって…どことなく寂しげで、何か理由があったんじゃないかって…」

「心の声が漏れてもうたか…おばちゃん恥ずかしわ〜」

俺の言葉に目の前の女性はそんなふう言葉紡いだ。

「あんな？この靴、孫に買ってやろと思とつてんけど…子供てなホンマに可愛いなあ…未来しかない。でもなあ仕事の都合で外国に引っ越してしまうことになつてな」

そう言いながら、女性は俺達が返そうとした靴に手を置いて、言葉を続ける。

「空港まで見送りに行つて、そこで渡そうと思つてたんや…でも、こんなん渡したら、おばちゃん、絶対泣いてまう…そしたらおばちゃんの息子も、みんなしんどい気持ちになるやろ」

そんなことになつたら、誰も得しない…お別れは笑顔の方が良いと女性は続けた。

確かに、お別れは笑顔でした方が良いというのはその通りかもしれない…でも…自分

の気持ちを隠したままで良いはずがない。

「「そんなのダメです(だよ)！」」

俺達の言葉が重なる。

「ほんとの気持ちを言わないとダメです！」

「『嫌だ』って、『寂しい』って…『ずっと一緒に暮らしたい』って！」

「泣いたっていい」

「駄々をこねたって…きつとその後は本当に笑ってお別れできる」

2人はそう言った後、笑みを浮かべて俺を見る。

俺はそれに頷き、言葉を紡いだ。

「だから、行きましょう!後悔しないように」

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ましろさん、テークオフまでどれくらい?」

「ちよつと待っててね…」

そう言って、ましろさんはスマホで、ももそら空港の飛行機の便がいつテークオフするのかを調べてくれる。

あの女性を説得していたのだが、彼女は諦めたような顔をして、もうすぐ飛行機が来るから遅い。

だから、あの靴はエルに渡してほしいと言って、喫茶店から出て行ってしまった。だが、俺達は諦めが悪い。必ずあの人を家族の元に連れて行く。

ましろさんにテークオフまでの時間を調べてもらったのもそのためだ。

「なるほど、まだ間に合いそうだな…プリキュアに変身すれだけど」

「そうですね…ソウヤ、ましろさん…行きましよう！」

「うん！行くこう！」

そうして、俺達はプリキュアへと変身する。

「無限にひろがる青い空！キュアスカイ！」

「ふわりひろがる優しい光！キュアプリズム！」

「静寂ひろがる夜のとばり！キュアナイト！」

「レディ・ゴー！」

「ひろがるスカイ！プリキュア！」

そうして、変身を終えた俺達は女性を追う。

そして、その女性を見つけ、その人の前に姿を見せた。

「のわっ!誰!?!」

俺達いきなりの登場に女性は腰を抜かす。

まあ、そうなるよな…ホントすみません。

「通りすがりのヒーローガールです!」

「時間がありません、行きましょう!」

「2人共、もう少し説明しましょうよ…すみません、いきなり…手短かに説明します。今からあなたを空港まで私達を送ります」

「空港…?なんで?」

そう疑問を口にする女性に、俺はあの靴を手渡し、言葉を紡ぐ。

「伝えなければいけない思いがあるでしょう?後悔のないようにしてください…あの時、ちゃんと伝えておけば良かった、なんてことがないように」

俺の言葉に女性は頷き、俺の手を取る。

そして、俺達は女性を屋上へと連れていき、スカイが女性をおんぶし、俺は万が一にもプレゼントの靴を落とすことがないように靴を持った。

「しっかり掴まっててください!」

「言われんでもそうするわあ〜!」

「いくよ!スカイ!」

その言葉と共にスカイがプリズムの手の上にジャンプし、プリズムがそのままスカイを空中へと飛ばす。

俺もそれについていくようにジャンプする。

「ひゃあ〜！」

おんぶされている女性から叫び声上がる。

まあ、そりゃあこれは怖いよね…すみません…でもこれが一番早いんです。

俺はそんなふうになんか心の中で謝罪しつつ、移動を続ける。

「もう一回いくよースカイ！」

「お願いしますー！」

「もうやめて〜！」

そんな叫び声を聞きながらも、俺達は移動を続けて、ついに空港へと辿り着いた。

空港へ着いた後、2人と一緒に変身を解き、女性を送り届けた。

一応、俺達に変身を解く時は周りには誰もいなかったから、この女性以外に正体はバレていない。

「亮太」

女性が靴を持ちながら、彼女の息子の名前を呼び、歩き出す。

「どうしたん？さっき電話で急用が入ったって…」

「ばあばー!あいくー!ああくー…」

そう言いながら彼女のお孫さんは手を伸ばす。

「これ、プレゼント…ファーストシューズ」

そう言つて、ファーストシューズをプレゼントする彼女はいつの間にか、涙を流していた。

それを、彼女の息子がそつと寄り添つて、励ましている。

そんな光景を目にしている内に、俺の頭の中にはソラシド市で過ごした思い出がフラッシュバックしていた。

突然の出会いから始まり、ましろさんやツバサ君、あげはさんといろんなことをした…もちろん戦いもあったけど、それを上回るぐらい皆で過ごした思い出がたくさんあった。

気づけば、俺の頬に涙が伝う。

そして、それと同時に俺の両手が2人と繋がれる。

手を繋げば気持ち伝わるというのをどこかで聞いたことがあるが…あれは本当だったみたいだ。

見なくてもわかる…2人も俺と同じように涙を流していると。

ああ…やっぱり俺は、この世界で過ごす時間が大好きだったんだ…

俺は繋がれた手を強く握る。

2人はそれに応えるように手を握り返してくれた。

そうして、俺達はしばらくの間、手を繋ぎ続けるのだった。

／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／

「えるゝ！えるうゝ！えるうゝ！」

「お似合いですよ！プリンセス！」

「どうやら、エルはお目当ての靴を履けて、ご機嫌みたいだ。

「それにしても、同じ靴、よく見つけられましたね」

「空港から戻ってくる途中の靴屋さんを全部チェックして……」

「あれはホント大変だった……」

無事にあの人を送り届けた帰り道、その道中の靴屋をすべて探すのはめちやくちや大変だった。

まあ、結果的にはエルの靴がちゃんと見つかったから良かったけど。

「……さて、そろそろ時間だな」

「そうですね……ヨヨさん、本当にお世話になりました！」

「俺からも言わせてください。本当にお世話になりました！ありがとうございます！」

「ボタンはあなた達が押すと良いわ」

その言葉を聞き、俺とソラはアイコンタクトし、同時にボタンを押した。すると、スカイランドに繋がるトンネルが開いた。

「ましろん!お土産よろしく〜!」

「は〜い!」

「気を付けていってらっしゃい」

「「「はい!」」」

そう一緒に告げて、俺達はトンネルの向こう側へと歩き出すのだった。

スカイランドへの帰還

「そういえば、今さらながら、このトンネルってスカイランドのどこに通じてるんだ？」
「確かに、詳しい場所は知りませんね…」

トンネルを通りながらソラとそんな会話を交わす。

そうして、しばらくするとトンネルの出口が開く。

そこから見えた景色はなにやら落ち着かない様子で歩き回っている王様の姿だった。

「…って、王様の真上!?!嘘だろ!」

そう察した俺はすぐに体を振り、王様の上に落ちないように全力で避ける。

だが、他の皆は間に合わず王様の真上に落下した。

「あちゃー…間に合わなかったか…」

皆が落下して、王様は苦しそうだ。

幸いにも、すぐに皆も気づいて王様の上から退いたから問題はなかったが。

…大丈夫かな? 不敬罪とかにならない?

そんな不安を抱いていると、エルの姿に気づいた王様と王妃様がエルに近づく。

そして、王妃様がエルを抱っこする。

「えるう〜」

「お帰りなさい…プリンセス・エル」

「えるう〜！」

こうして、エルは無事に二両親と再会した。

「えるう〜！」

「歩いた！プリンセスが歩いたぞー！」

よちよち歩きをしてエルは両親の元に歩いていく。

王様も王妃様も、エルの成長をとても喜んでいる。

エルも両親に会えて嬉しそうだ。

「よくぞプリンセスを取り戻してくれた」

「ソウヤ、ソラ、ツバサ、ましろ…あなた達はスカイランドのヒーローです」

王様と王妃様が俺達にそんなことを言ってくれる。

「ヒーローだなんて…そんな、ねえ〜？」

「まあ、確かにね…俺達、そんな大層なもんじゃないしな」

ましろさんと俺が遠慮がちにそんな会話をしているなか、ソラとツバサ君の反応は違っていた。

「スカイランドの…ヒーロー…!」

そんなことを呟きながら目を輝かせていた。

「…あはは…嬉しいのはわかるけど、エルを攫ったやつについて報告しなくて良いのか？」

「そうでした…王様！エルちゃんを攫った者のことでお話か!」

「まあ、待て」

ソラの言葉を遮り、王様はエルを連れて移動を始めた。

そうして、王様と王妃様は民の前にエルと姿を現し、大きな声で叫ぶ。

「私達のプリンセスが戻ったぞ!」

その言葉に集まった民が沸き立った。

…なるほど、報告を聞く前にプリンセスの帰還を伝えたわけか…報告を聞くのが先な気もするが、それと同じくらいエルの帰還を伝えるのは大事ってことか。

俺はそんなことを思いながら、沸き立つ人々を見るのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／

「アンダーグ帝国…何故、プリンセスを狙う?」

王様は少し考え込むような顔をしてから、言葉が続けた。

「この件はすべて、私が預かる。そなた達は安心して家に帰るがよい。親元でゆっくりと体を休め…」

「プリキュアの力、お貸しします！」

「私も！」

「ボクも！」

「もちろん俺もです！」

「だが、アンダーグ帝国は謎の多い存在だ…どんな危険が待ち受けているかわからないのだぞ？」

「相手がどんなに強くても、最後まで正しいことをやりぬく…それがヒーローです！」

ソラの決意のこもった言葉が響いた。

「ヒーローか…」

どこからともなく聞き覚えのある女性の声が聞こえてくる。

この声…まさか!?

そうして視線を移すと、薄紫色の髪をハーフアップにした、騎士を思わせる青と白を基調とした衣装を着た女性が居た。

その女性は紛うことなき、俺の姉であるシャララの姿だった。

そして、姉さんもこちらに気づいたのか、俺の元に駆け寄ってくる。

「ソウヤ！ソウヤだな!?…ようやく会えた!」

そして、姉さんは俺を抱きしめる。

「姉さん、痛いって…まあ、でも…ただいま。ちよつと予定より早かったけど、会えて嬉し〜よ!」

「ああ、私もだ…本当に心配したんだぞ」

「あの人がソウヤ君のお姉さん…」

「ええっ!?ソウヤ君がああのお姉さん!?」

「ツバサ君、知ってるの?」

「もちろんです!シヤララ隊長はスカイランドを守るヒーローチーム、青の護衛隊の隊長で、世界で一番強い剣士なんです!まさか、ソウヤ君がシヤララ隊長の弟だったなんて…!」

ツバサ君が興奮気味にそう口にする。

ツバサ君、姉さんのファンだったんだな…まあ、実際有名な人だし。

「お久しぶりです!あの時は私とソウヤを助けてくれてありがとうございます!」

「ソラ…あの時君を助けたのはソウヤだ。私はただソウヤの後を追ったにすぎないよ…本当にソウヤは自慢の弟だ!」

そう言いながら、姉さんは笑顔で俺の頭を撫でて、抱きしめる。

「ありがとう。そういえば姉さん、王様への挨拶は良いの？」

姉さんは俺の言葉にハツとして、王様へと向き直る。

「失礼致しました…弟との再会が嬉しかったものですから」

「いや、構わぬ。私達もプリンセスが無事に帰ってきて嬉しいからな…そなたの気持ちはよくわかる。久しぶりの家族との時間、大事にせよ」

「ありがたきお言葉、感謝いたします」

そうして姉さんは跪き、深々と頭を下げていた。

そして、姉さんは王様への挨拶と報告を済ませ、俺を連れてその場を後にするのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「姉さん…めっちゃ早く切り上げたな…良かったの？」

「良いんだ。王様も家族との時間を大事にしろと言っていただろ？…というわけで、久しぶりにソウヤニウムを補給させてもらおう」

「ソウヤニウム…？なにその謎言語…」

「ソウヤと触れることで発生し、私を元気にしてくれるものだ。私が名付けた」

何故かドヤ顔でそう言う姉さんを見つつ、歩き続ける。

「よくわかんないけど、とりあえず手でも繋ぐ？」

「…！ああ！繋ごう！なんなら腕を組もう」

「いや、腕を組むのはちよつと…」

「良いじゃないか！久しぶりのデートだ」

「いや、一緒に帰るだけじゃん…まあ、良いけどさ…それじゃあ腕を組む？」

「では、遠慮なく」

そうして、姉さんは俺の腕に抱きつく。

「うーん…やつぱり恥ずかしいな」

普通、姉弟でこういうことしなくね？

まあ、姉さんも俺のことを心配してくれたみたいだし、これぐらいは良いか。

ご機嫌な様子姉さんと共に青の護衛隊の本部へと戻ると、アリリ副隊長が出迎えてくれた。

「ソウヤ君！君も一緒だったのか！いつ帰ってきたんだ？連絡してくれれば迎えに行つたのだが」

「ホントにさつきです。王様達にプリンセスを送り届けたところに姉さんがたまたま来て、一緒に帰ってきました」

「そうだったのか…お帰り、ソウヤ君」

「ただいま」

「さあ、ソウヤ、早く私の部屋に行こうじゃないか！」

「隊長…ソウヤ君をあまり困らせないでやってください…そして、彼の腕から手を放してください。ここには他の隊員の目もありますので」

「…つまり、他の隊員の目に触れなければ問題ないと？」

「…すまない、ソウヤ君。隊長を頼む…この人は私の手に負えない」

「あはは…任せられました。アリリ副隊長、改めてありがとうございます。姉さんを止めてくれていて…大変だったでしょうに」

「うう…ソウヤ君、君は本当に良い子だね〜！」

涙ぐみながらそう言うアリリ副隊長を見て、申し訳なさが溢れてくる。

ホントにアリリ副隊長には苦勞を掛けた…明日、何か市場で買ってきてあげよう。

そんなことを思いながら、本部の中へ入る。

姉さんも一応アリリ副隊長の忠告を聞いたのか、腕から手を放してくれた。

そうして、姉さんの部屋へと向かう途中、俺と同一年くらいの赤髪の女の子と会った。

「隊長、お疲れ様です。…そちらの方は？」

「ああ、紹介がまだだったな…この子はソウヤ、私の弟だ。ソウヤ、彼女はベリイベリイ、青の護衛隊の隊員だ」

「隊長に弟が…!？」

「初めまして、俺はソウヤ…ベリイベリーさん、よろしくね」

「よ、よろしく…ところで、隊長の弟とはどういうことでしょうか？」

「そのままの意味だ。まあ、ソウヤが私の弟ということは公にはしていないから、知らないのも無理はない」

「どうして、公にはしていないんですか？」

彼女の疑問は当然だろう。

俺はそんな彼女の疑問に答えるために、言葉を紡ぐ。

「姉さん曰く、俺が変な色眼鏡で見られるのを避けるためらしいよ…ほら、青の護衛隊の隊長の弟だつて知られたら、色々大変なことになりそうじゃない？」

「まあ、それは確かに…」

「例えば、俺も青の護衛隊の一員なんだけど、それがどうせシャララ隊長の弟だから、特別に入隊出来たんだろうとか思われたり、シャララ隊長の弟なのにこんなことも出来ないのか、とかさ…まあ、そういう偏見に晒されないためにも公にしていないんだ」

それを聞いて、ベリイベリーさんも思い当たる節があったのか、考えるような仕草をしている。

「そういうことだ。だが、安心して良い…身内びいきだと思われるかもしれないが、ソウ

「ヤは強いぞ。実力は私が保証する」

「隊長がそこまで仰るなんて…わかりました、ひとまずは信じます。…それでは失礼します」

そう言つて、ベリイベリーさんはその場を後にする。

「さて、部屋へと戻ろうか」

「そうだね」

そうして、俺と姉さんは部屋に入る。

「うーん！久しぶりにここに入るな…姉さん、仕事残つてたりする？残つてるなら手伝うけど」

「フツ…ソウヤとのんびり過ごすために今入っている仕事はすべて終わらせてきた！だから安心して姉さんとのんびり過ごそう」

「それなら良かった。色々姉さんに話したいこともあるしさ」

「ああ、聞かせてくれ。私もソウヤの話を聞きたい…もちろん、私の話も聞いてもらおうぞ」

「うん、もちろん」

そう返事をし、俺と姉さんは久しぶりに2人きりの時間を過ごすのだった。

ソラの入隊

「隊長に！」

姉さんに向かって、青の護衛隊の皆が胸の前に腕を掲げる。

どことなく前世で見た、心臓を捧げよ！のポーズに似ている気がする。

まあ、今はそんなことよりも。

「見習い隊員を紹介する」

そうして、姉さんが紹介したのはソラだ。

スカイランドに帰った翌日、ソラが新しく青の護衛隊に入ると聞いて、こうして皆の前でソラを紹介している。

「ソラ・ハレワタールです！今日から皆さんの仲間にしてもらえることになりました！未熟者ですが、一生懸命頑張ります！」

「うん、よろしくな！ソラ！」

「はい！よろしくお願ひします！ソウヤ！」

そんなふうにはソラと話していると、1人の隊員が口を開く。

「まだ子供じゃないですか……」

ベリイベリーさんがそう口にする。

「え…その流れだと俺も子供になるんだけど…」

「あ、あなたは大丈夫！だって、隊長に実力を認められてるし、私よりも前に青の護衛隊に入ってるし…でも、その女はわからないでしょ？弱いやつを仲間に入れるのは反対です…邪魔ですから」

「いや、ソラは…」

「大丈夫です、ソウヤ。…そこまで言うなら私の力をテストして下さい！」

「おもしろい」

「2人ともよさんか」

アリリ副隊長が2人を止める。

「よし、わかった…良いだろう」

「隊長!？」

「アリリ副隊長、ここは2人の思うようにやらせましょう。多分、2人にとつてもそれが良いと思います」

「むう…ソウヤ君までそう言うのか…はあ、わかった。認めよう」

渋々といった感じでアリリ副隊長はそう口にする。

こうしてソラとベリイベリーさんの戦いが始まるのだった。

「さあ、始めようか」

ベリイベリーさんの言葉と共に2人は構える。

「タアツ！」

先に仕掛けたのはベリイベリーさんだ。

拳のグローブから雷がほとぼしり、雷の弾を放つ。

それをソラは回避し、反撃する。

ベリイベリーさんはそれを防ぎ、再び拳で反撃するが、ソラもそれを回避していた。

なるほど：グローブから雷が放出される：そういうものもあるのか。

一通り武器の使い方を教わったが、ああいうものは初めて見るな。

と、今は2人の戦いに集中しよう。

今のところ、2人は互角の勝負を繰り広げている。

「うーむ、互角か」

「これ、どういう状況なの？」

そう言いながら、ましろさんは大量の荷物を持ってここに来ていた。

ツバサ君も荷物を持ってここに来ている。

…それにしても、すごい荷物だな。

「どこから入った!？」

「ましろさん! ツバサ君! ごめんね。わざわざ来てもらったのに」

「ソウヤ君が呼んだのか?」

「そうです…今日はソラの入隊記念に2人にも来てもらったんですよ。…すごい荷物だな…持つていくよ。こんなにいっぱいありがとう」

そう言いながら、俺は2人から荷物を受け取る。

「ううん、こつちこそありがとうだよ。それで、これはどういう状況なの?」

「そうだな…わかりやすく言えば、バトル漫画にある、戦いの中で分かり合おうとしてる、みたいなの?」

「なるほど!」

「いや、それで納得しないでくださいよ…」

ツバサ君のツツコミも虚しく、ましろさんは2人の戦いを見守っていた。

「青の護衛隊は最強のチームだ! 弱いやつに居場所はない!」

そう叫びながらペリィペリーさんは雷を拳に集中し、ソラに殴りかかる。

ソラはそれを回避し、一瞬のうちに後ろへと回る。

そして、そのまま殴りかかり、ベリイベリーさんに当たる直前で寸止めた。

「勝負ありかな…」

そう呟きながら、俺は2人を見つめる。

「強いとか、弱いとか…大事なものは正しいことをしたいって気持ち…あなたは間違っています！」

ソラはベリイベリーさんにそう言い放つ。

まあ、確かにその通りではあるかもしれない…でも、強さこそがベリイベリーさんの正しさなら、それに拘る理由だってあるはずだ。

「ソラ、お疲れ様」

「ソウヤ！見ていてくれましたか？」

「もちろん！ただ…」

「ただ？」

「…ベリイベリーさんにちよつと聞きたいことが…」

俺がそう言って、ベリイベリーさんに視線を移す。

すると、彼女は悔しそうな顔をしながら涙を流していた。

「くっ…！」

そう言って、ベリイベリーさんはその場から立ち去ってしまった。

「…ごめん、姉さん。ちよつとみんなのことを頼んで良いかな？」

「わかった。こちらに任せておけ」

「ありがとう！ちよつとベリイベリーさんの様子を見てくるよ」

「気を付けてな」

「うん！」

そう言つて、俺はベリイベリーさんの後を追うのだった。

「居た居た！おーい、ベリイベリーさん！」

「あなたは…なにか用？あなたもあのソラとかいう女みたいには間違っているって言いたいのか？…それとも、あんな大口叩いて負けた私を笑いに来たのか？」

「やさぐれてるなあ…そんなじゃないよ。単純に、泣いてどこかに行った君のことが気になつてさ」

「余計なお世話だ」

「余計なお世話はヒーローの本質らしいし、これも青の護衛隊の仕事のうちだよ」

俺の言葉にベリイベリーさんは呆れたような顔をする。

「どうして、そんなに私に構うの？」

「…知りたいんだよ。君がどうしてそこまで強さに拘るのか…きつとそこには君なりの正しさがあるんじゃないかって思うから」

「…！そのためにわざわざ？」

「まあね。あ、そうだ！せつかくだし、ちよつと付き合つてよ」

「付き合う？どこに…？」

「実は、アリリ副隊長に何か買ってきてあげようと思つててさ…その買い物に付き合つてほしいなつて」

「どうして私が…」

「まあまあ、気分転換も兼ねて、どうかな？」

「…わかつた、付き合う」

「ありがとう。それじゃあ一緒に行こう！」

そうして、俺はベリイベリーさんと共に行動を始めるのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「わあ〜！」

「ソラ・ハレワタールです！改めてよろしくお願いします！」

護衛隊の制服を身に着け、私は皆さんに挨拶する。

「すごい、すごい！ヒーローって感じだよ！」

「ましろさん、ありがとうございます。…私、青の護衛隊に入れてほしくて田舎から出てきたんです…ソウヤはそんな私を心配して一緒に来てくれたんです」

「あの子は変わらないな…」

「はい！ソウヤはいつまでも私のヒーローです！…まあ、どうすれば入れてもらえるかなんて分からなかったけど…でも、そうしたら拐われたエルちゃんを偶然見つけて…そしてましろさんと偶然出会った」

でも、今思えば、すべて偶然なんかではなかったのかもしれない。

「でも、ヨヨさんはそうは言いませんでした…」

『出会いに偶然はない。人と人が巡り会うこと、それはいつだって必然…運命…物語の始まり』

ヨヨさんの言葉を思い出しながら、私は言葉を続ける。

「出会いから物語は無限に広がっていく…ましろさん、出会ってくれてありがとう。これからもずっと友達でいてくれますか？」

「もちろんだよ！ソラちゃん！」

「ありがとうございます…ましろさん」

「うん！…そういえば、ソウヤ君、遅いね…まだあの人と話してるのかな？」

「そうかもしれないね…ソウヤは優しいですから…あの人、まさかソウヤを誘惑しているんじゃない！」

もし、そうなら一大事です！私の恋人に手は出させません！

「それはない。ペリイペリーはそんな真似が出来るとは人間ではない。それこそ、ソウヤが彼女を誘惑しなければ…いや、あの子ならあり得るな…もちろん、意図してではないが…それでも素で誰かに好意を持たれやすいからな」

「…ちよつと行つてきます」

「そうだね。私もついていくよ…ソウヤ君を縛り付けてでも連れて帰つてこなくちゃだし」

「私も行こう。姉として、弟が他の誰かをたらし込むのを黙つて見ているわけにはいかない…もし、恋人が出来たら、私と過ごす時間も減つてしまうからな」

その後、ソウヤの元に行こうとする私達をツバサ君とアリリ副隊長が引き止め、私達は渋々諦めることになるのでした。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「素晴らしい1日でした…」

「えるう〜」

「ああ、続くと良いのだが…」

城から外の景色を眺めながら、王と王妃は今日という日が続くことを祈る。
だが、それを脅かす邪悪な存在が確実に迫ってきていることを、まだ誰も知らない。

新たな刺客

コンコンと扉をノックする。

そして、扉を開けて部屋の中に居る隊長に声を掛ける。

「お先に失礼します」

「ああ。…そういえば、ソウヤはまだか?」

「はい…まだ。なんだか複雑な気分です」

結局、夕方になってもソウヤはまだ戻ってきていない。

ソウヤは優しい人です…だから、ベリイベリーさんのことを放っておけなかったんでしよう。

だけど、あまりにも遅すぎます…帰ってきたら、今日はソウヤとイチヤイチャしまくってやります。

誰にも邪魔はさせません!

「私もだ…だが、ベリイベリーのことを考えると、ソウヤがついていったのは正解だったのかもしれないな」

「それはどういう…?」

「ベリイベリーは、小さい頃、腕に大きな怪我をしてな…そのせいで、3年間入隊試験に落ち続けた。だが誰よりも努力して強くなった…だからあんなふうに拘る。強さと弱さに」

「じゃあ、ソウヤはそれに気づいて…！私、ベリイベリーさんにひどいことを言ってしまった…！」

「今のベリイベリーには必要な言葉だった」

そう言った後、シャララ隊長は少し間を置いて、言葉を続けました。

「正しいことを最後までやり抜くそれがヒーロー…でも、だからこそ、正しいとは何なのか…ヒーローは考え続けなければいけない。…ベリイベリーにはベリイベリーの正しさがあるように。…難しいな、ヒーローというものは」

「そうかもしれないね…！」

「ああ。…その点、ソウヤは自分の正しさを持っているが、それと同時に、誰かの正しさを認めることが出来る子だ。きつと、ベリイベリーに手を差し伸べたのもそういう理由だろう」

「…私、ベリイベリーさんに謝ってきます！ソウヤのことも気になりますし！」

そう伝えた後、私はベリイベリーさんの元に向かう。

その途中でましろさんとツバサ君とすれ違いましたが、一言2人に伝えてから、すぐ

に向かうのでした。

／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／

「ベリイベリーさん、付き合ってくれてありがとう」

「気にしなくて良い。私も副隊長にお世話になってるし」

「そっか…それでどう？気分転換にはなった？」

「…まあ、少しは…」

「それなら良かった。ベリイベリーさんが元気になって」

「…ベリイ」

「うん？」

「ベリイで良い」

そう照れくさそうに彼女はそう口にする。

「了解！じゃあ改めてよろしく！ベリイ」

「うん、よろしく…ソウヤ先輩」

「先輩？何故に？」

「だって、あなたの方が先に入隊してるんだから私は後輩ということになるわけだし」

いやまあ、その通りではあるんだけどさ…なんとというかむず痒いな…

「…まあ、それで良いか…」

「ありがとう……実は私、小さい頃に腕に大きな怪我をして、3年間入隊試験に落ち続けたんだ……でも、誰よりも努力して強くなった……だから、強さに拘っていたの……」

「……なるほど、そういうことだったのか……」

確かに、そういう経験をしたら強さや弱さに拘ってしまうのも無理はないな……だから、ソラに言われた言葉にもすぐダメージを受けたのか。

「でも、私はソラのことを理解しようともせず、否定してしまった……私自身も否定されたら嫌なの……後で謝らないと」

「その方が良いと思う……きつと、ソラも今頃同じように思っているんじゃないかな……」

真面目なソラのことだ、姉さんからベリーの事情を聞いたら、すぐにでも動くだろう。

「だから、そのうちこっちに……うん？」

嫌な気配を感じ、近くの石を手にとり嫌な気配を感じた場所に投げる。

すると、投げた石を防ぐ謎の人物が姿を現した。

その人物は所謂、ビジュアル系のバンドのような服を着ている緑色の髪で、触覚のよ
うな2本の黄緑色の髪が伸びている。

カバトンはわかりやすいやつだったが、こいつはよくわからないな……まあ、なんであれ警戒はしておかなければ。

「すごいね……まさか僕がここに來ることがわかってたのかい？」

「…何者だ？アンダーグ帝国のやつか？」

「そうさ。それにしても驚いたなあ…まさか、僕の気配を事前に察知するなんて…君の方こそ何者だい？」

「さあね…」

「まあ、どうでも良いか…カモン！アンダーグエナジー！」

そう言つて、ベリーの着けていたグローブがアンダーグエナジーによりランボーグへと変化した。

「ベリー！」

そうして視線を移すと、ベリーが倒れ込んでいた。

慌てて駆け寄つて確認すると、気を失っているだけだった。

「ソウヤ…ランボーグが！」

ソラの声が聞こえて、振り返るとそこにはソラとましろさん、それにツバサ君もいた。

「ソウヤ、ベリーベリーさんは!？」

「大丈夫。気を失っているだけだ」

「良かった…!」

「あなたは誰？」

ましろさんがそう尋ねる。

「バツタモンダー」

「バツタモンダー…新しいアンダーグ帝国の刺客か」

まあ、カバトニー人だとは思っていなかったが…というか、あの触覚みたいな髪はなにかと思っただらバツタのあれか。

「…とりあえず、ベリイを安全なところに連れて行く！ここは任せても良いかな？」

「もちろんです。ソウヤはベリイベリーさんをお願いします！」

「ああ！」

そう返して、俺はベリイを安全なところに連れて行く。

「追わないんですね？」

「弱いものには手を出さない。そう決めてるんだ」

「…行きましょう！皆さん！」

「うん！（はい！）」

「無限にひろがる青い空！キュアスカイ！」

「ふわりひろがる優しい光！キュアプリズム！」

「天高くひろがる勇氣！キュアウイング！」

「レディ・ゴー！！」

「ひろがるスカイ！プリキュア！」

／／／／／／／／／／／／／／／／

「よし、ひとまずはここで…」

辺りを見渡し、近くの建物の物陰にベリイを避難させる。

「ヒーローの定番だ！」

そうして、俺はプリキュアへと変身する。

――

――

「静寂ひろがる夜のとばり！キュアナイト！」

そして、変身を終えた俺はバッタモンダーが呼び出したランボーグに高速で接近し、キックする。

そして、ランボーグは少し遠くへ吹っ飛んでいった。

「なんだよ！お前！どこから出てきやがった！」

そう言った後、慌てて口を抑え、先ほどのキャラへと戻る。

「…一体何者だい？君は」

「なるほど…さっきのが、素というわけですか…」

「「キュアナイト！」」

「みなさん、お待たせしました。さて、いきましようか！」

そう言つて、俺達はランボーグとの戦闘を再開する。

俺は姉さんの剣を再現し、手に持つ。

そして、接近し斬りかかる。

「ラン…ボーグ！」

「なるほど、雷撃は健在というわけですか」

ランボーグから放たれた雷撃を回避する。

そして、その隙にスカイが蹴りかかる。

ランボーグはそれを防ぐために雷撃を飛ばし、スカイの攻撃が止まる。

「うっ…」

あの雷撃は厄介だ…まあ、あれだけなら対処可能か。

「ハアーツ！」

プリズムは気弾を放つがランボーグにはダメージはあまりないようだ…なるほど、防

御力も高めというわけか。

「こつちだ！」

ウイングがランボーグの周りを高速移動し、敵の目を引き付ける。

だが、ランボーグに動きを捉えられ、攻撃をくらい吹っ飛んでしまう。

状況を把握し、勝利への道筋を組み立てる。

そうして、ランボーグへと接近する。

「ランボー！」

俺を迎撃するためにランボーグが雷撃を放つ。

「これぐらいは想定内の範囲内！」

ランボーグの雷撃を剣に集中させ、それを受け流し、地面へとぶつける。

そして、ランボーグに接近して、左手に槍を出現させてランボーグに刺す、そしてそ

のまま右手の剣を振り下ろす。

「ランボー!?!」

「通った！」

「ありえねー！雷を剣で受け流すとか、どんだけだよ!?!なんなんだあいつ、化け物かよ

！」

「…あなたには絶対に言われたくないのですが…まあ、良いです。スカイ！プリズム！

今ですー！」

「はい（うん）ー！」

「スカイブルーー！」

「プリズムホワイト！」

「プリキュア！アツプ・ドラフト・シャイニング！」

「スミキッタ〜」

そうして、ランボーグは消えていった。

「あつ？ふざけんなよー…おっと、僕としたことが…おめでとう！お互い、良い勝負だったよね？また会おう。バツタモンモン」

そう言つて、バツタモンダーはその場から消えていった。

後半から、全然素を隠せていなかったな…あいつ。

新しいアンダーグ帝国の刺客か…また来るんだろうな…にしても、アンダーグ帝国の目的は一体…まあ、今はベリーの様子を見に行くとしよう。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ベリー、起きてくれ」

「ん？…ソウヤ先輩？…はっ！あいつは!？」

「さっきの不審者か…あいつはアンダーグ帝国の刺客だったらしい。ランボーグを呼び出して戦闘を仕掛けてきたが、ソラ達がプリキュアに変身して倒してくれたよ」

「ソラがプリキュアに…?」

「そうだよ。…それで、ソラが話があるつてさ」

俺がそう言うのと、ソラが先ほどまでランボーグにされていたベリーのグローブを持ちながら、歩いてくる。

「ベリイベリーさん…その、ごめんなさい!一人で苦しんでいたこと、でもずっと頑張ってたこと…私、何にも知らないのに『間違っています』なんて…そんな酷いことを言うてしまつて」

「ソラ…私の方こそごめん!私もあなたのこと何も知らないのに否定するようなことを言つて…:…ありがとう、グローブ取り返してくれて」

そう涙ながらに謝罪する2人を見ながら、仲直り出来たことに安堵する。

「お前達、無事か!」

「姉さん!この通りみんな無事だよ。そつちはどうだった?被害は出てない?」

「ああ、こちらも被害はないよ。ソラとベリイベリーは…なるほど、仲直り出来たようだな。ソウヤのおかげか?」

「いや、俺は特別なことはしてないよ…とりあえず、しばらくそつとしておこうか」

「そうだな」

姉さんとそんな会話を交わしながら、俺はソラ達を見守るのだった。

ランボーグの襲撃と微かな違和感

「まったくソウヤは…気を抜くと、すぐに他の女の子を引っ掛けてくるんですから」

「いや、別に引っ掛けてきてるわけじゃないんだけど…でも、ごめん」

ソラの部屋へとやってきて、しばらく経ち、ようやくソラの怒りが収まった。

「わかれば良いんです！…お詫びにキスしてください」

「どうしてそうなるの？いや、別に良いけどさ…それじゃあキスをしようか」

「は、はい…お願いします」

そう言いながら、ソラは顔を近づける。

俺も顔を近づけ、そつとキスをする。

「えへへ…もつとしましょう」

「もちろん…それじゃあもう一度…ん？」

嫌な気配を感じた俺はソラを制す。

「ソウヤ？どうかしましたか？」

「多分、ランボーグだ…行こう！」

「わかりました！…ランボーグめ…絶対に許しません！私とソウヤの時間を邪魔したこ

とを後悔させてやります！」

そうして、俺達は夜のスカイランドへと走りだすのだった。

「ラン!？」

「私とソウヤの時間を邪魔したこと、後悔しなさい!ハアッ!」

「おお…すごい気迫だな…」

さっそくプリキュアに変身したソラはいつにもましてすごい気迫でランボーグとの戦闘を行い、あっという間にランボーグを浄化してしまった。

うん?なんか妙だな…ソラは強いし、いつも以上に気迫がある…でも、なんだか今回のランボーグは弱く感じる。

「2人共、そちらは片付いたか?」

「はい!シヤララ隊長の方はどうですか?」

「こちらも片付いた…うん?ソウヤ、どうかしたか?」

「ちよつと、今回の襲撃が引つ掛かってさ…姉さん、ランボーグって他の場所にも出現してん?」

「ああ。だが、他の隊員が対処してくれた。それがどうかしたのか？」

今回のランボーグはやっぱり普段より弱い気がする…もちろん、青の護衛隊のみんなは強いし、充分対処可能だけど…俺達が夕方に戦ったランボーグレベルになると、姉さんかベリイぐらいしか戦えないだろう。

他の皆が戦うには複数人で望む必要があるはずだ。

今回の襲撃でそこまでの人員を割けるとは思えない。

つまり、今回のランボーグはあえて戦闘力を落とされている可能性がある。

だが、どうしてそんなことを？

「…うーん、やっぱりなんか引つかかるな…」

「ソウヤの考えはよく当たりますからね…何かしらの意図があるんでしょうか？」

「まあ、まだそこまではわからないけど…とりあえず戻ろうか」

「そうですね…戻りましょう！ソウヤ！」

そうして、俺はソラに手を引かれ、そのままソラの部屋へと戻るのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ここですぐに食いを止めて！」

姉さんの号令と共にみんなが返事をする。

この前と引き続き、ランボーグの襲撃が起きた。

ソラはすでにプリキュアに変身している。

「ヒーローガール！スカイパンチ！」

「ソウヤ先輩！私達も！」

「わかってる！」

剣を持ち、ランボーグとの戦いを始める。

今回はプリキュアにあえて変身していない。確かめたことがあるからだ。

そうして、ランボーグと戦うと、思った通り簡単に倒せてしまった。

…やっぱり、弱い…プリキュアに変身しなくても勝てるレベルだ…でも、これではつきりした。

ここ最近、襲撃を仕掛けてきたランボーグは戦闘力が低いんだ。

そんなことを考えながら戦いを続け、今日の襲撃を乗り越えることが出来た。

「これで、10体目！バッタモンダーとアンダーグ帝国もそろそろ懲りたころであろう」

襲撃を乗り越えた後、俺達は王様の元へと呼ばれた。

どうやらお褒めの言葉を頂けるようだ。

「よくやってくれたヒーロー達よ、これからも力を合わせてスカイランドの国民達を守り抜いてほしい」

その言葉はありがたく受け取っておこう。

そして、振り返るとましろさんとツバサ君が居て、俺とソラは笑みを浮かべるのだった。

／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／

「うーん…」

「ソウヤ先輩、難しい顔をしていますね…襲撃のことが気になるんですか?」

「まあ、そんなところだ…襲撃の時のランボーグ、想像以上に弱かったから…あれじゃあ、まるで倒されるために呼び出したみたい…な…まさか!?そういうことなのか?」

「先輩?」

「ベリイ!ランボーグの襲撃があった場所を地図で印をつけてくれないか?」

「は、はい…それは可能ですが…」

「悪いけど、今すぐ用意してくれ。すぐに調査に行く!」

「了解しました!今すぐ用意してきます!」

「よろしく!」

俺の指示を受けたベリイはすぐさま行動を開始する。

「一応、姉さんにも知らせとかないとな…まあ、今はソラとちよつと遠くにいるから早いところ知らせておかないと」

そうして、俺も行動を開始するのだった。

「うう…」

「痛むか？」

「ぜんっぜん痛くありません、このくらい…アイタタタ」

シヤララ隊長と、とある村へとやってきた私は走り回る動物を捕まえたのですが、勢い余ってぶつかり、シヤララ隊長に休ませて頂いてました。

まあ、あの動物は足を怪我していたせいで、気が立っていたので仕方ありませんが。

「お手柄だったぞ」

「でも、かっこわるいです…」

「でも村のみんなが助かった」

「はい！そうですね…護衛隊っていろんな仕事をしているんですね」

「ああ。都を襲う危険な敵と戦うのも大事だが、パトロールも同じくらい大事だ…辺境

の地には助けを求める人が大勢いるしな」

「私も、あの時の私もそうでした…」

「そうだな…あの時はソウヤと一緒にパトロールをしていたんだ。そしたら、ソウヤが女の子が森に入って行つたと大騒ぎしてね…助けに行くと行って、あの子はすぐに助けに向かつたんだ」

「そうだったんですね…」

ソウヤが私を助けに行くためにそんなことを…えへへ…なんだか嬉しいです。

「随分と嬉しそうな顔をしているな」

「はい…ソウヤが私を助けるために頑張ってくれたことが嬉しくて…」

「そうか…確かにソウヤはあの頃からソラのことを気にしていたよ。ソラを助けて都に帰る時、あの子がこう言つたんだ」

『あの子、ソラちゃんだっけ？何かこれからも色々巻き込まれそうで心配なんだけど…姉さん、あの子を近くで見守ってあげたいんだけど、ダメかな？』

「ソウヤがそんなことを…」

「ああ。ソウヤがそんな我儘を言うのは珍しくて、私はソウヤのやりたいようにさせることにしたんだ…そして、その後ソラの家近くにあの子を住まわせて、他の青の護衛隊のみんなに面倒を見てもらうことにした…もちろん、定期的に都に帰るように約束を

させたが」

シヤララ隊長の言葉を聞き、心の中が温かくなっていく。

当時のソウヤの想いを知れて嬉しかった。

本当に：ソウヤはあの時からずっと、私のヒーローです！

「こうしてまた再会できたのはこのジュエルの導きかもしれないな」

そう言いながら、シヤララ隊長が取り出したのはハート型のスカイジュエルが象られたネックレスだった。

そして、それは私が助けてもらった時にシヤララ隊長とソウヤに渡したものだだった。

「まだ持つていてくれたんですね…」

「ああ。幸運のお守りだからな…それに、私だけではない。ソウヤも大切に持っているんだ」

「ソウヤも：!?でも、一度も見せてくれたことがなかった気が…」

「ふふっ! 『ソラからもらった大事な物だから、大切にしたいんだ』、そう言って、部屋の引き出しに大事に仕舞っているんだ。可愛いだろ?」

「へっ!?!」

シヤララ隊長の言葉に顔が熱くなる。

「そういえば、ソラ…先ほどから思っていたのだが」

「は、はい！なんででしょうか？」

「もしかして、ソウヤのことが好きなのか？」

「ど、ど、どうしてわかったんですか？」

「ソラはわかりやすいからな」

「う、うう……」

シヤララ隊長の言葉に照れくさくなる。

……そういえば、シヤララ隊長に私達がお付き合いしていることをまだ伝えてませんでした！

ど、どうしましょう……せめて、シヤララ隊長には伝えた方が良いでしょうか？

そうして悩んだ後、伝えることにしました。

「シヤララ隊長、実は……私とソウヤは少し前からお付き合いしているんです」

「……うん？すまない……もう一度言ってくれないか？」

「で、ですから……ソウヤと私はその……恋人なんです」

「……なん……だど!?!ソウヤとソラが恋人……?本当なのか？」

「本当です」

「……そうか……いや、ソラは信頼できるし、ソウヤのことを任せられるのだが……複雑だ。

そもそも、こういうことは事前に私に相談するべきではないだろうか?……お姉ちゃんは

「寂しいぞ……これは後でソウヤから話を聞かなければ……」

そんなふうには1人考え込むように呟くシヤララ隊長を見ながら、私はひとまずはソウヤの恋人として認められたことに安堵するのでした。

巨大ランボーグと絶望

「ましろさん！ツバサ君！」

例のランボーグの襲撃について調査しようとした所で、時間が余り、ましろさん達が居る部屋にやってきていた。

「ソウヤ君！どうしたの？」

「うん。これからちよつと調査をしようとしたんだけど、まだ準備が掛かるみたいだから、ましろさん達に会いに行こうと思ってさ」

「そうだったんだ…」

「ソウヤ君、調査って？」

「える？」

ツバサ君とエルの質問に答えるために、言葉を紡ぐ。

「例のランボーグの襲撃について、ちよつとね…あくまで俺の主観だけど違和感があったよ」

「違和感？」

「例のランボーグの襲撃の時、ランボーグの数は多かったけど、どれもがあんまり強くな

かった…まるで、初めから倒されることを前提にしてるみたいだった」

俺がそう伝えると、みんなが頭に疑問符を浮かべていた。

「どうしてそんなことをしたの？」

「さあね…俺もまだわかってない。と、調査の話はとりあえず置いて…ましろさん、帰っちゃうのか？」

リュックいっぱいにはスカイジューエルが詰められていて、ましろさんは帰る準備を進めているようだった。

「うん。トンネル開いてって、明日おばあちゃんに連絡するつもり」

「そっか…まあ、ましろさんは学校もあるしな…そういうえば、俺とソラはソラシド市の学校ではどういう扱いになるんだろう？」

「確かに、ずっと休みってわけにもいかないもんね…でもトンネルは繋がってるし、いつでも好きな時に来れば良いんじゃないかな？」

「そうだな…住む場所が変わるだけだもんね…ましろさん、ちょっと早い気もするけど、元気で。俺達、またそっちに遊びに行くからさ」

「うん！みんなもね！…エルちゃん」

ましろさんはエルに近づく。

そして、エルの頭に手を置きながら言葉を続ける。

「お腹出して寝ちゃダメだよ…ツバサ君にあんまりイヤイヤ言っちゃダメだよ」
「えるう…」

「私のこと忘れないでね」

寂しそうにそう口にするましろさんを見て、思わず抱きしめる。

「ソウヤ君？」

「いや、いきなりこういうのは良くないんだろうけど…なんとなくこうしなきゃいけない気がする」

「そっか…ふふっ！ありがとう。ソウヤ君…またね。大好きだよ…」

「ああ、またな。…あはは…なんか照れくさいな…」

急に照れくさくなり、遠慮がちにましろさんから距離を離す。

「失礼します。ソウヤ先輩、準備が終わりました。さっそく出発しましょう」

「わかった。それじゃあ行ってくるよ」

「うん、気を付けてね」

「プリンセスのことはボクに任せて、安心して行ってきてください」

「…にーに…あんあ…え」

「えっ…！エル、今…！」

「える？」

「もしかして気のせいだったのか?…まあ、良いか…ありがとう。行ってくるよエル」
そう言つて、エルの頭を撫でてから俺は調査へと向かうのだった。



「うーん…とりあえず地図の場所に来てみたけど、特になんの異常も…いや、なんか嫌な気配を感じるな…でも、目に見えないいんじややりようがないな」

『ここは私にお任せを』

「うおっ!なんだ…」

突如として聞こえてきた声に驚きを隠せない。

「これって、残留思念の声だよな?なんで急に…」

「まあ、良いか。それよりも任せろつて?」

『私の力を使つて、この場所に残留しているアンダーグエナジーを浄化しましょう』

「残留…?そうか!ランボーグの浄化はプリキュアにしか出来ない…青の護衛隊のみんなはランボーグを倒せても、浄化できない…だから、プリキュアが倒していない場所にはアンダーグエナジーが残ったままなんだ…つまり、バッタモンダーの狙いは…」

あえて、青の護衛隊のみんなにランボーグを倒させ、アンダーグエナジーを浄化させずに残させた…そうして、大量にアンダーグエナジーを用意し、強力なランボーグを生み出すことなのかもしれない。

「よし、やってみよう」

『私も力を貸します。集中してください』

「ああ」

そうして集中すると、残留しているアンダーグエナジーの場所を察知し、右手に力が集まり、その力を放出し、アンダーグエナジーを浄化した。

「おお！もしかして、プリキュアに変身しなくても浄化できるようになった？」

『いえ、そこまで便利な能力ではありません…あくまで、今のようになら、残留しているアンダーグエナジーを浄化することしか出来ません』

「まあ、そんな都合よくいかないか…次の場所に行こう！」

そうして次の場所へ行き、再びアンダーグエナジーを浄化する。

「次！」

もう一度、別の場所へ行く。

そして、浄化に成功した瞬間、アンダーグエナジーが一つの場所に集結していき、やがて巨大なランボークが出現した。

「遅かったか…」

「おや？ランボーグの出力が少し落ちてている…土壇場で誰かが気づいたのかな？…まあ、この王国を吹き飛ばすには充分か…仮にランボーグの出力が落ちていたとしても結果は変わらない。…この世界はなんて残酷で、なんて悲しいんだろう」

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ソラ！姉さん！戻ってきてくれたんだ！」

「はい！ついさきほど。ソウヤ、これは一体？」

「とりあえず王様の所に行こう！」

「わかりました！」

そうして俺達は王様の元へと向かう。

「王様…これは一体…」

ソラがそう尋ねると、王様は今の状況を説明してくれた。

王様の話を簡潔に説明すると、こうだ。

・突如として、巨大なランボーグが出現する。

・バツタモンダーからの脅迫状のようなものが貼られていた。内容としてはランボーグが一時間後に爆発すること。その爆発はとんでもない被害を生み出すこと。エルを渡せばそれを止めてやってもいいといったような内容だった。

そんな話を聞いていると、ましろさんに抱えられながら城に入ってくるボロボロのツバサ君の姿が目に入った。

「1人で無理しちゃダメだって言ったのに」

「ツバサ君！大丈夫か？」

「役に立てなくてすみません。うう…」

「無理するな。それにしても、ここからどうしようか…流石に俺がプリキュアになって浄化しようにも、俺の浄化技は物理技だからな…衝撃を加えてしまえば、ランボーグが爆発する可能性があるし…」

「…プリキュアの力で、あの爆弾を浄化できないか？キュアスカイとキュアプリズム、2人が手を繋いで放つ最強の技」

「アツプ・ドラフト・シャイニング…」

「確かにそれならなんとかなるかもしれないな…どう？ソラ、ましろさん、出来そうかな？」

「…やってみます！」

「出来るかはわからないけど、私も頑張ってみる！」

「…わかった！俺もバックアップ出来るように待機してる」

そうして、俺達はランボーグを浄化するために移動するのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

プリキュアに変身し終えた俺達は空中に居るランボーグを見る。

今まで見た、どのランボーグよりも大きいランボーグだ。

確かにこんなのが爆発したら甚大な被害を及ぼすだろう。

果たして、アツプ・ドラフト・シャイニングで浄化しきれんだろうか？…いや、それでも…

「「やるしかない！」」

「スカイブルー！」

「プリズムホワイト！」

「プリキュア！アツプ・ドラフト・シャイニング！」

そうして、いつものようにランボーグの頭上に巨大な円盤が出現し、ランボーグに向かって光を放出して、吸い込んでいく。

だが、吸い込まれそうになったランボーグがいくつも長い手を伸ばし、頭上の円盤を破壊しようとしていた。

嘘だろ!? あいつの腕って伸びるのか？ そもそもあの円盤って物理干渉出来るのか？

いや、そんなことよりも…!

「うう…」

「クツ…」

スカイとプリズムは苦しそうにそう呟く。

「もう限界…でも！」

「諦めない！」

そんな2人を様子を見て、俺もすぐさま行動する。

「プリキュア！ミライレコード！」

ミライレコードを起動し、スカイミラージュにセットする。

「ミライコネクト！ナイト！」

そうしてαスタイルに姿を変える。

流星にプリズムスタイルでは、狙いを外したら爆弾を爆発させかねない。

だから、αスタイルであるランボーグへ接近し、腕を引っ剥がす。

そして、ランボーグに向かって接近しようとした瞬間、ランボーグに向かうもう1つ

の人影が見えた。

「姉さん!?!何やってるんだ!…:姉さんのバカ!」

姉さんの姿を確認し、全力でランボーグに接近する。

そして減速しそうになり、槍を投げて、その場所に瞬間移動する。

そうこうしているうちに姉さんはランボーグに突撃し、円盤を掴んでいた手を剥がす

ことに成功していた。

だが、突撃をしたせいか、姉さんはボロボロになっていて剣は折れ、無防備に空中に投げ出されていた。

更に、そんな姉さんを狙ってランボーグが攻撃を仕掛けてくる。

「間に合え！」

俺は槍を投げて、投げた場所に瞬間移動し、姉さんとランボーグの攻撃の間に割って入る。

「あぐうっ!!」

背中に焼けるような痛みが走る…そして、全身が鉛のように重くなる。

「2人共、今だー！」

俺の言葉が聞こえたのかはわからないが、2人は再び立ち上がり、アップ・ドラフト・シャイニングを強くし、ついにランボーグを浄化することが出来た。

「はあっ…はあ…姉さん、無事？」

「私は大丈夫だ！私のことよりもお前のことだ！どうしてあんな無茶をした!？」

「先に無茶をしたのは姉さんでしょ？…くっく…」

「しつかりしろ！もう良い！無理するな…早く治療を！誰か！誰かいなか!？」

「ありがとう。でも、まだやることがあるから…姉さんもちやんと治療を受けて…」

そう言いながら、重い体を動かし、立ち上がる。

お城に向かわないと…バツタモンダーが実力行使に出ないとも限らない。

一応、城に槍は忍ばせてある…αスタイルの能力で移動しよう。

そうして、俺は城へと向かうのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「着いた…くっ…これはしんどいな…」

体が重い…歩くだけでも、精一杯だ…

「動くな!!」

スカイの怒号が響く。

視線を移すと、スカイがエルを攫おうとしているバツタモンダーと対峙していた。

ツバサ君は倒れていて、王様と王妃様も黒いエネルギーが体を包み、倒れ込んでいた。

直接、現場に居たわけじゃないが、大体の事情を察することができた。

バツタモンダーめ、許せない!

「そこからエルちゃんに1ミリでも近づいたら、絶対に許さない!!」

ソラの言葉に俺も背後からバツタモンダーに近づき、再現した姉さんの剣をバツタモ

ンダーの首に近づける。

「スカイの言う通りだ…そこから動いてみる。お前の首をすぐに斬り落としてやる」

「ひっ……い、いつの間に……」

「正直、今すぐ首を落としてやりたいところだけど……私は優しいからな……選ばせてやる。このまま首を斬り落とされるか、それとも尻尾を巻いて逃げ帰るか……選べ！」

「う、うう……」

ソラがにじり寄り、俺も剣をさらに首に近づける。

「バ……バツタモンモン……」

そう言つて、バツタモンダーは消えていった。

「ふう……」

バツタモンダーが消えて、少しホッとする。

流石に今の俺には首を斬るには力が足りなかった。

ハツタリが通じるかは賭けだったが、ソラの迫力のおかげもあってか上手くいった。

「うう……ソラあ……ウワ〜ン！」

エルが泣きながらソラに近づく。

俺も体を引きずりながら進むが、途中で変身が解け、そのまま地面に倒れ込んだ。

「ソウヤ……ソウヤ!?!大丈夫ですか?」

「にーに……い、あいじよぶ?」

ソラがエルを抱っこして、こちらに近づいてくる。

失意の帰還

「うーん……はっ！俺はどうなったんだ……？」

何もない暗い空間で目を覚ます。

「もしかして、俺、死んだ？」

『いえ、それは違います』

そう言いながら、俺の目の前に白い髪の女性が姿を現した。

「あれ？もしかして残留思念が実体化したとか？」

『はい、そういうことです。ソウヤ様、あなたの体は今、アンダーグエナジーに蝕まれています』

「アンダーグエナジーに？」

『……いえ、もはやあれは呪いの類ですね……あなたが呪いを受けた結果、意識はより深い底に追いやられ、こうして私があるあなたの前に実体化するほどまでに深く私と繋がってしまつたというわけです』

「なるほど……どうすれば良い？早いところ目を覚まさないといけないんだけど」

『……しばらくは休みましょう……今はそれしかありません』

「そうか…ソラ達、大丈夫かな」

俺はソラ達の心配をしながら、打開策を考えるのだった。

／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／

「ソウヤ…待っててください…バツタモンダーに報いを受けさせて、必ず助けます。…あいつにはソウヤをこんな目に合わせた罰を受けてもらいます…地獄を見せてやる…絶対に許さない…泣いて許しを請われても、容赦しません」

そう眠っているソウヤに告げて、王様達の部屋へと向かう。

そこにはましろさんとツバサ君、そしてシャララ隊長が居た。

「ソラシド市に戻りましょう」

「ソラちゃん？」

「…見た所、王様と王妃様の症状とソウヤの症状は同じです。ソラシド市に戻って、ヨロさんにこれを治す方法を調べてもらいましょう」

「ソラさん？」

「皆さん、さつきからどうしたんですか？…まあ、良いです。バツタモンダーがエルちゃんを狙ってくる以上、スカイランドに1人で放っておくわけにはいきません…ここはエルちゃんと一度ソラシド市に戻りましょう…ここで私達がバラバラになる方が危険です」

「それはその通りだが…ソラ、酷い顔をしているぞ…まるで、復讐者の顔だ」

「復讐者…確かにそうかも知れませんが…正直に言えば、今の私はバツタモンダーへの復讐心でいっぱいです…あいつに報いを受けさせるまでは、止まってもらえません…絶対に許せませんから…あいつには地獄を見せてやる…ソウヤが受けた何倍もの苦しみを与えて、後悔させてやらないと気がすみません…」

「ソラ…気持ちわかる。私もあいつを許すことなどできない…バツタモンダー、そしてアンダーグ帝国には私が必ず報いを受けさせる。だから、ソラ、君が復讐に囚われる必要はない」

「隊長になにが出来るっていうんですか!!ランボーグの浄化はプリキュアにしか出来ない!ソウヤが調べていたことを忘れたんですか?ソウヤが調べていた場所にはアンダーグエナジーが残ったままでしたよね?隊長がいくら強くても、ランボーグを浄化出来ないんだったら、意味がないじゃないですか!!」

思わず叫んでしまう。

「…ごめんなさい。ともかく一度ソラシド市に戻りましょう…準備をします」
そう言って、私はその場を後にした。

「ソラちゃん…大丈夫かな…」

「そうですね…あんなソラさん、初めて見ました」

ツバサ君とそんな会話を交わす。

ソラちゃんの気持ちわかるな…私もバツタモンダーやアンダーグ帝国を許せないよ。

いろんな人を傷つけて…私達の大切な人を傷つけて…絶対に許せない。

…でも、ソウヤ君はきつと私達が復讐に囚われることを望んだりしないよね…
だけど、私も怒りを抑えるので精一杯だよ。

うう…頭の中ぐちゃぐちゃだよ…いつそソラちゃんみたいに復讐心に囚われた方が
楽なのかも…でも、ソウヤ君が好きだと言ってくれた私はきつとそんな私じゃないよ
ね。

「よし！頑張ろう！おばあちゃんならきつと治療法を見つけてくれる…それで、王様達
を助けてソウヤ君も助ける！そしたら、また…また…」

堪えきれずに涙が零れる。

「ましろさん…」

「ごめん…なんか涙が…」

「いや、良い…誰かを思って、泣くことは悪いことではない」

「う、うう…本当は辛いよ…あいつが許せないよ！今すぐにも殺したいぐらいに憎いよ！でも、ソウヤ君はきつとそんなこと望まないから…そう思ったら、どうしたら良いかわからなくて…ただ、辛くて、悲しくて…寂しくて…」

「そうか…」

「ソウヤ君…うああああ！」

涙が流れてくる。

溢れてきた感情を止められなくて、私はただ泣きじやくることしかできなかつた。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ソラ…ソウヤを連れて行くのか？」

「はい。シャララ隊長には申し訳ありませんが…ソウヤを私達の傍にいさせてください」

「…わかった。私の方でも治せる方法探しておく…アンダーグ帝国の情報も集めておくよ」

「お願いします…それではソラシド市に戻りましょう」

私の言葉にましろさんとツバサ君が頷く。

そうして、私達はヨヨさんが開いてくれたトンネルを通り、ソラシド市へと戻るのでした。

「そつか…そんなことがあつたんだ…ソウヤ君が」

ソラシド市へと戻つてきた私はソウヤを部屋に寝かせてから、ヨヨさんとあげはさんに今まであつたことを説明した。

「…つていうか…そのバッタモンダーつてやつ、許せないね」

「…おばあちゃん、どうしてアンダーグ帝国はスカイランドを襲うの？…いろんな人を傷つけて、ソウヤ君も傷つけた…どうしてそんなことが出来るの？」

「あれから色々調べてみたわ。スカイランドとアンダーグ帝国はいわば光と影…正反対の2つの国は大昔に戦つて以来、交わることなく過ごしてきた」

「それなのにどうして？」

「…何故今になつてスカイランドを襲い、プリンセス・エルを狙うのか？たくさんの書を紐解いても、その答えは見つからなかつたわ」

ましろさんの質問に、ヨヨさんがそう答えた。

「そうですか…でも、そんなことはどうでも良いんです…ソウヤを助ける方法は見つかりましたか？」

「ええ、それは見つかったわ。ランボーグを浄化した時に現れるキラキラエナジー、それをミラーパッドに集めれば、呪いを解く薬が作ることが出来るわ」

「やったね！ソラちゃん！ソウヤ君を助けられるよ！」

「そうですね…確かにそれなら安心です…」

ソウヤを助ける方法がわかり、ひとまず安堵した。

「える？」

「エルちゃんも安心して！この薬が作れたら、パパとママを目覚めさせることが出来るかもしれないよ！」

「パパ、ママ？」

そう言った後、エルちゃんはすぐに泣き出してしまった。

「パ〜パ〜！マ〜マ〜！」

「プ、プリンセス…」

戸惑うツバサ君をよそにあげはさんがエルちゃんを抱っこした。

「よーし、よーし…」

「…まずはエルちゃん的笑顔を取り戻しましょう」

「そうだね。でも、どうすれば良いんだろう？」

ましろさんの言葉にあげはさんが答える。

「子供が喜ぶ、あれしかないでしょ！」
そうして、私達はあげはさんの提案を聞くのです。

束の間の平穩

「ああ…みんなのことが心配だ…というか、外ではどれくらい時間が経ってるんだろ」

『「ここだとそういうのはわかりませんからね…まあ、おそらく数日程度だとは思いますが」』

「それなら良いけど…嫌だぞ、目が覚めたら何年も経っているとか」

『そうですよね…』

残留思念と会話しながら、これからどうするべきか考える。

せめて、外の様子を知る方法があればな…ちよつと聞いてみるか。

「あのさ…どうにか外の様子を知れる方法はないか？」

『そうですね…私はあなたを通して、外の世界を見ていましたが、今はその方法を使えませんがね…』

「そつか…こう精神体みたいな感じで、外に出られたりしないの？」

『それは、可能かもしれませんが…』

「本当か!?なら、さつそくその方法を教えてくれ!」

『わかりました。…プリキュアの伝説はご存知ですか?』

いきなりの質問に、困惑しつつも答える。

「まあ、一応。確か、大昔に闇の軍勢にスカイランドが襲われて大ピンチになって、スカイランドのお姫様が、助けてヒーロー！ って祈ったらプリキュアがやってきてスカイランドに平和をもたらしたってやつだろ？」

『…少々、端折られているように感じますが、大体その通りです』

「それと俺が精神体になって、外に出られることになんの関係があるんだ？」

『プリキュアは祈りによって姿を現しました。つまり、外の世界で誰かがソウヤ様の復活を祈れば、肉体は動かずとも、精神体だけは外の世界にいけるかもしれません』

「なるほど…もしそれが可能なら、少しはみんなを安心させられるかな」

そう口にした瞬間、俺の体が光に包まれ、徐々に上昇していく。

「えっ！なにこれ？どうなってるんだ？」

『まさか、こんなに早く精神体として外に出られることになるとは…皆さんのソウヤ様を思う気持ちがとても強いんですね』

「なるほどな…詳しくはわからないけど、行ってくるよ」

『はい。行つてらっしゃい…お気をつけて』

そうして、俺は外の世界に向かうのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／

『えっと…なんだこれ?』

俺が外の世界にやってきて目に入ったのは人形劇をする皆の姿だった。

「昔、昔、あるところに小さな雲がフワフワと降りてきました」

「桃じゃないんですか?」

「だよね?」

ソラとましろさんが小声で話している姿が見える。

…なるほど、大体察した。

これは桃太郎の話をベースにした話で、おそらくそれをエルに見せているんだろう。

エルは目の前で両親が倒れているのを見て…悲しいに決まってる。

この人形劇はエルを励ますにはうってつけかもしれないな…提案したのはあげはさんかな? こういうことを思いつくのはあげはさんだと思うし。

それにしても、誰も俺に気づいてないのか? 皆の後ろに居るんだけど…精神体だから、誰にも認知されないのか? うーん…とりあえず色々試してみるか。

…いや、やめておこう。変なこととして人形劇を台無しにするわけにはいかないし。

「そして、舞い降りた雲がぱかっと開くと、中から元氣なえるたろうが出てきました」

そこは雲太郎とかじゃないんだ…まあ、エルが主役ならこつちの方が良いか。

「える太郎はミルクを飲んでぐんぐん大きくなつていきました。…しかしある日、える

太郎の大好きなあげは姫が鬼に連れ去られてしまったのです」

そう言った後、鬼の人形があげはさんをモチーフにしているあげは姫の人形を連れ去るような動きをした。

「あゝれ〜。助けて〜！えるたろうさま〜！」

「だいぶ桃太郎の話とズレてる気がするけど、まあ、面白そうだし良いか。

せっかくだし、エルの傍に行つて人形劇を楽しもうかな…誰かが気づくかもしれないし。

そう考えて、俺はエルの近くに移動する。

「える？…にーに？」

移動している俺にエルが視線を向けてくる。

最初はたまたまかと思っていたが、エルは俺が移動するたびに視線を向けてきていた。

そうしてエルの傍に寄り、声を掛ける。

『もしかして、俺が見えるのか？エル』

「えるえる！にーにー…わあっ！」

「にーに？誰のこと？」

「エルちゃんはソウヤのことをにーにと呼んでいます…でも、ソウヤはここにいないの

に、どうしてでしょうか？」

「きつと、エルちゃんもソウヤ君が恋しいんだよ……」

「……続けましょう！プリンセスを笑顔にするために！」

みんなの会話を聞いた感じ、エルにしか俺の姿は見えていないのか……そういえば、赤ちゃんの頃は幽霊とか見えるって聞いたことあるな。

『とりあえず、みんなには内緒にしようか』

「える」

『ほら、人形劇を見よう。ここから、えるたろうの冒険の始まりだ！』

「えるる！」

話が進み、イヌ役のソラ、サル役のましろさん、キジ役のツバサ君を雲パンで仲間にしつつ、えるたろうはついに鬼ヶ島へと向かう。

「あれが鬼ヶ島……」

「えるたろうさん……ボクはあなたのためなら、た……たとえどんな敵が相手でも戦ってみせます！ソウヤ君がそうであったように……」

「私も皆を悲しませる人達に、負けていられないから…今度こそ、絶対に守らなきや…そうじゃないと、ソウヤ君に胸を張って会えない」

「私はもつと強くならなければ…たとえ、どんな手段を使つても、あいつに地獄を見せる…逃げられたら、世界の果てだろうと追い詰めて、報いを受けさせる…それがソウヤを奪つたあいつへの復讐だ…絶対に逃さない…許さない」

あまりに物語とマツチしすぎて、みんなが思い思いの言葉を紡ぐ。

なにより酷いのはソラだ…言葉に憎しみが込められてる。

バツタモンダーへの復讐心…それに支配されているソラの表情は見ているこつちが苦しくなるほどだ。

『ソラ』

思わず、大切な彼女の名前を呟いていた。

「…えっ？ 私は幻を見てるんでしようか…ソウヤが目の前に…」

「私にも見えるよ…ツバサ君は？」

「ボクにも見えます！」

「私にも見えるよ…ソウヤ君がそこに…」

「えっ？ 皆、俺の姿が見えるのか？…えっと、とりあえず…ただいま？」

「ソウヤ…ソウヤ…ソウヤああああ!!」

ソラが涙を流しながら、俺に抱きついてくる。

「良かった…本当に良かった…！目が覚めたんですね…」

「いや…それは…」

「ソウヤ君!!本物だよな?偽物じゃないよね?」

「うん、本物ではあるけど…」

その言葉を聞いた瞬間、ましろさんも泣きながら抱きついてくる。

それに釣られるように、ツバサ君とあげはさんも泣き出し、抱きついてくる。

エルもみんなの雰囲気の影響を受けたのか、泣き出してしまった。

どうしよう、收拾つくかな…これ。

まあ、今はみんなが落ち着くまで待つとしよう。

そうして、俺はみんなが落ち着くまで待つことにするのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「落ち着いた?」

「はい…少しは…」

「私も、なんとか…」

「ボクも落ち着きました…」

「私も…エルちゃんも落ち着いたみたいだよ」

とりあえずみんなが落ち着いたようで、ホッと胸を撫で下ろす。

ただ、ソラとましろさんは左右でがっちり腕を掴んでいる。

ツバサ君も俺の目の前に陣取り、あげはさんはエルを抱っこしながら後ろで陣取っている。

「なんだこれ？前後左右、全部塞がれてるんだけど…い、言いづらい…まだ完全に復活したわけじゃないって言わなきゃなんだけど。」

「みんな…非常に言いづらいことなんだけど…俺はまだ完全に復活したわけじゃないんだ」

「そうなんですか？でも、ソウヤは今ここに居るじゃないですか…」

「うん。今の俺は謂わば精神体みたいなもので、体はまだ眠ったままなんだ…今の俺の状態は…バトスピレイヴのダンさんみたいなものかな？いや、サーガブレイヴのダンさんの方がわかりやすいか？」

「その例えはわからないけど…今のソウヤ君はまだ目を覚ましてないってことだよね…どうにかならないかな？」

「俺もどうにかしたいところなんだけど、体がちゃんと呪いから解き放たれないと無理かな…まあ、流石に今すぐ消えちゃうわけじゃないけどさ」

「そうなんですな…」

「そんな暗い顔しないでくれ。俺は今ここに居るし、死んでるわけじゃないからなんとかなる。まあ、呪いを解くのはみんなに任せるしかないけど」

こればかりはみんなに任せるしかない：一応、プリキュアに変身することが出来たら力になれるとは思うんだけど。

そういえば、この状態でプリキュアに変身出来るのだろうか？まあ、チャンスがあれば試してみよう。

「よし！とりあえず一旦、人形劇の続きを見せてくれないか？まだ終わってないし、早く続きが見たくてさ」

俺の言葉にみんなは少し笑みを浮かべて、頷いた。

「わかりました！ソウヤ、ちゃんと見ていてくださいね！」

「ああ。楽しみにしてる！」

俺の言葉を聞いたソラは嬉しそうに笑い、人形劇を再開するために移動するのだった。

希望を胸に

「いよいよだな」

「える！」

ソラ達も人形劇の準備を終えたようで、続きが再開される。

鬼ヶ島へと辿り着き、ついにえるたろう達は鬼と対面する。

「ついにえるたろう達は鬼ヶ島に着きました」

「鬼達よ！えるたろうさんにあげは姫を返してください！」

「何の用だ？」

「えっ！大きすぎウキ?!」

なるほど…物語的には鬼は大きいのか…まあ、確かに鬼の姿は見たことがないけど、大きい鬼ぐらいは居そうでもないな。

「頑張れ！えるたろう達！」

「えるる！」

俺とエルがノリノリで応援していると、物語が進む。

「フン！どれだけ強いか試してやる！」

「まずは私から行きますワン！」

そうして、犬が鬼にパンチする。

「うおっ……」

そうして、犬のパンチが鬼に命中する。

それで終われば良かったのだが、そのままの勢いで幕が崩れてしまった。

「大丈夫か？」

思わず駆け寄る。

「あはは……ごめんね、2人とも」

「み……未熟……つい力が入ってしまっ……」

「ほら……大丈夫ですよ。プリンセス」

困惑している様子のエルにツバサ君がそう告げる。

エルは気まずい空気を察したのか、椅子から降りてこちらに歩いてくる。

「ソラ……ましお……ちゅばさ……あげは……にーに……ばあ！」

そう言うエルは平気だよ、大丈夫だよ……元気だして……そう伝えたいかのようだ。

「エルちゃん……ましろって……」

「ああ……プリンセスが……ボクの名前を！」

ツバサ君は感激のあまり、地面にへたり込んでいます。

「何で俺だけ、にーに？名前を呼んでくれても良くないか？」

「良いじゃん！お兄ちゃん！ソウヤ君に合ってると思うよ？」

「あげはさん…まあ、良いか…エルは優しい良い子だな。ありがとう」

そう言いながら、エルに視線を合わせて頭を撫でる。

「えゝるゝー！」

エルはご満悦のようだ…良かった良かった。

「そういうところじゃないかな…お兄ちゃん認定されるの」

「えっ？そうかな？」

「ふふっ！…エルちゃんを元気にしたかったのに、逆に元気をもらってしまいましたね

…」

「そうだね…でも、良いんじゃないかな？そうやって俺達は助け合って来たんだしさ」

「ソウヤ…そうですね！」

そんな会話を交わしていると、ヨヨさんがこちらにやってきた。

「スカイランドから連絡よ」

そうして、ミラーパッドに映されたのは、スカイランドの映像だ。

『聞こえるか？』

「アリリ副隊長、聞こえてますよ」

『ソウヤ君！目が覚めたのか!?』

『先輩が!?ちよつと私にも見せてください!』

そう言つて、アリリ副隊長に割り込む形で姿を見せる。

「2人共、元氣そうで良かった…ただ、俺は目が覚めたわけじゃなくて、精神体の状態でここに居るんだ。多分、時間が経つたらまた戻っちゃうと思う」

『そうか…隊長に朗報を伝えられると思つたのだが…』

「姉さんは大丈夫ですか?」

『ああ。この前までは酷い有様だったが、今は立ち直り、ソウヤ君を治す方法を調べつつ、アンダーグ帝国の情報を集めているよ』

「そうですか…とりあえず姉さんには一応、一時的に復活したこと伝えといてください」
『わかった。…スカイランドのことは任せてくれ!みんな希望を胸に前に向かって進もうと頑張っている。こちらのこととは心配するな』

『先輩、ソラ…私達は私達のやるべきことをする。だから、そつちもプリンセスのことを頼んだよ!』

「…任せてくれ」

俺の言葉にみんなは頷く。

そうして、スカイランドとの通信が終わった。

「みんな、希望を胸に頑張ってるんだな……アリリ副隊長の話を聞いた感じ、姉さんも大丈夫そうだけど……ちよつと心配だな……元気がどうかは姉さんに直接聞く方が良いかもしれない」

姉さんは割りと無理するからな……俺が一時的とはいえ復活したことを知って、少しは安心してくれれば良いんだけど。

俺がそんなことを考えていると、窓に鳥が集結していた。

「うわっ！何!？」

驚いた様子のあげはさんをよそにツバサ君は窓を開ける。

「ボクの鳥友達です！」

そう言つて、ツバサ君は鳥の姿に変わり、なにやら話を聞いている。

そして、しばらく話した後、ツバサ君が驚きの声を上げる！

「えっ！公園に!？」

「ツバサ君、どうかしたのか？」

「実は……」

ツバサ君の聞いた話によれば、公園に怪しい人物が出現したとのことだった。

「多分、バツタモンダーだ！行こう！」

「はい……でも、ソウヤはここに居てください」

「どうしてだ？」

「…怖いんです…！もし、ソウヤがまた私の目の前で倒れたら？もし、今の精神体の状態さえ保てなくなってしまうたら？…そう考えるだけで怖くて…！お願いします。絶対にここに居てください」

ソラの縋るような声に俺は言葉を詰まらせる。

「私からもお願い…ランボーグは私達でなんとかするから」

「ましろさんまで…」

「ソウヤ君…ボクも2人と同じ意見だよ…ランボーグはボク達が絶対なんとかするか」

ツバサ君にまでそう言われ、俺は渋々その言葉に頷いた。

そして、俺が頷いたのを見た皆はそのままランボーグが出現した公園へと向かうのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ああ…ようやく来たね。いい加減待ちくたびれたよ」

公園にたどり着くと、ツバサ君の聞いた通り、大きい鬼の人形とバッタモンダーが待ち構えていた。

「プリンセスを狙って来たんですね！」

「いいや、僕の目的は、君達だよ！プリキュア！」

「御託は良いです。さっさとかかってきてください！」

「随分と気が立っているようだね…良いよ。お望み通り始めようか！カモン！アンダーグエナジー！」

そうして、鬼の人形がランボーグへと変化する。

「行きましょう！」

そして、私達はプリキュアへと変身する。

「無限にひろがる青い空！キュアスカイ！」

「ふわりひろがる優しい光！キュアプリズム！」

「天高くひろがる勇氣！キュアウイング！」

「レディ・ゴー！」

「ひろがるスカイ！プリキュア！」

そして、変身を終えた私達はランボーグとの戦闘を開始するのでした。

「ハアーツ！」

一番最初に私はランボーグへとキックする。

「ラン！ボーグ！」

それを金棒をバットののように振り、私を跳ね返す。

「くっ……！」

「大丈夫ですか？」

「ありがとうございます……！」

空中に投げ出された私をウイングが受け止めてくれる。

「ランボーグ！」

それを逃さず、ランボーグが金棒を振るおうとする。

「させないよ！はあっ！」

プリズムのパンチにより、私達は攻撃を受けずにすみしました。

「いきますー！」

私はウイングの腕を足場にして再びランボーグへと接近し、パンチしようとする。

ウイングもそれに続き、ランボーグにパンチしようとする。

だが、攻撃を防がれて吹き飛ばされる。

「ハアッ！」

プリズムの援護射撃が放たれる。

しかし、それをランボーグが金棒で跳ね返し。私達に攻撃が命中してしまう。

「「うわああー！」」

そして、私達は地面に倒れ伏してしまう。

「ああっ！みんな?！」

あげはさんの言葉が響く。

さらにランボーグの攻撃は続き、辺りがめちやくちやになってまう。

「あゝあ、めちやくちやだ。これじゃまるでスカイランドのようじゃないか…王と王妃が倒れ、護衛隊の隊長を庇って君達の仲間も今は来ていない…弱いつてなんて可愛そうなんだ…」

その言葉に私の中で何かがぎれた。

「…お前のせいだ…お前のせいだ…！絶対に許さない！」

そうして立ち上がり、ランボーグに攻撃をしかけようとする。

「ま、待って！スカイ！危ないよ！」

プリズムの声を無視し、走る。

だが、走っている途中で転んでしまう。

「あうっ！くっ…！」

「…怒りに吞まれて自滅するなんて愚かだね…ランボーグ、やつちまえ！」

「ランボーグー！」

ランボーグが攻撃を仕掛けてくる。

避けなければならぬ……でも、体が上手く動かない。

「スカイ！」

みなさんの声が聞こえてくる。

……ソウヤ、ごめんなさい。

覚悟を決めて、思わず目を瞑る。

「まったく……やっぱり来て正解だったね」

「えっ……？」

聞き覚えのある声に思わず目を開ける。

そこには……ランボーグの攻撃を防ぐ、キュアナイトの姿があった。

「ナイト!? どうしてここに? ……来ないでって言ったじゃないですか!!」

「でも、おかげで間に合ったよ?」

「そういう問題じゃありません……! どうして? どうして? ソウヤが危険な目に遭う必要なんかないのに……! 完全に復活したわけじゃないのに……もしかしたら本当に消えてしまいかもしれないのに!」

「そんなの決まってる……」

そう言いながら、倒れている私に手を差し伸べて、ソウヤは言葉を続ける。

「ソラのことかほつとけなかったから…知ってるだろ？俺がそういうやつだって」

「ソウヤ…」

ああ…そうでした…ソウヤはほつとけなかったから…そんな理由であの時も私を助けに来てくれた…自分の身をかえりみずに…

あの日から、ソウヤは私にとっての目標で、理想のヒーローで…そして、大切に大好きな人…ソウヤみたいになりたいくて…私を助けてくれたみたいに今度は私がソウヤを助けるんだって決めたんです。

それなのに…私は怒りと恐怖のあまり、大切なものを見失っていた…だから、今も上手いかなかった…でも、今なら！

私はソウヤの手を取り、立ち上がる。

「いきましよう！ナイト！」

「うん！いこう！スカイ！」

私とナイトの手が繋がれ、新たなスカイトーンが誕生する。

「これは…！」

「新たなスカイトーン…よし！やってみよう！」

「はい！」

新たなスカイトーンをマイク状に変化したスカイミラージュにそれぞれセットする。

「スカイブルー！」

「ナイトブラック！」

「エンゲージ!!」

ナイトとスカイ、2人のスカイミラージュを重ねる。

すると、スカイの青と白を基調にした衣装にナイトのドレスアーマーと同じ黒の装飾が所々に追加される。

逆にナイトには黒のドレスアーマーにスカイと同じ青と白の装飾が所々に追加される。

そして手を繋ぎ、エネルギーが集まっていく。

「プリキュア！ナイト・スカイ・エンゲージ!!」

集まったエネルギーが放出され、ランボーグの下から黒と青の竜巻が舞い上がる。

そして、ランボーグに技が命中する。

「スミキツタ〜」

ランボーグが浄化され、その上空には夜空がひろがっていた。

「ミラーパッド！OK！」

そして、ランボーグが浄化された時に発生するキラキラエナジーがミラーパッドに集まった。

／／／／／／／／／／／／／／／／／／

「ありえねえ！こんな弱えヤツらに負けるなんて！ぜってえ俺の前に跪かせてやるからな〜！」

「ええ〜…」

もはや顔芸とも言えそうな表情をしながら、そう言うバツタモンダーにドン引きする。

みんなも同じようで、それぞれ呆れ顔をしていた。

「おっと、僕としたことが…君達の奮闘ぶり、とても素晴らしかった。また会いにくるよ…バツタモンモン！」

そう言つて、バツタモンダーは姿を消した。

「相変わらず、すごい変わりようだな…うん？」

ふと気づくと、俺の体が再び光に包まれる。

「…時間みたいだ。とりあえず、一旦俺は自分の体に戻るよ」

「ソウヤ…戻ってしまっんですね…」

「まあね。でも、今回みたいにもた出てくることも出来るからさ。また出てこれたら、ゆっくり話そう」

「はい…私達もソウヤを目覚めさせるために、全力を尽くします！だから、待っていてくださいー！」

「ああ。待つてるよ」

そう告げると同時にさらに俺を包む光が強くなる。

「ソウヤ君！またね…絶対絶対、また戻ってきてね！」

「ソウヤ君！ボク達待つてるから！呪いを解くために頑張るから！」

「ソウヤ君！また私のピヨちゃんと一緒にいるんなどこに行こうね！」

「にーにー！あいあい！」

そうして、みんなに見送られながら、俺は体に戻るのだった。

「ソウヤ…」

「ソラちゃん、大丈夫？」

「はい！ソウヤのおかげで大事なことを思い出せましたし…それに、ソウヤを信じていますから」

「そうだね！ソウヤ君なら大丈夫だよ！スカイランドのみんなも希望を胸に進んでいる…私達も頑張ろう！」

「はい！」

そうして、私達は希望を胸に家へと帰るのでした。

私のヒーロー

「ふう…ただいま？で良いのか？」

『お帰りなさい…ソウヤ様、異常はありませんか？』

「うん、大丈夫だ…」

心の中に帰還した俺は、残留思念とそんな会話をする。

『…ふむ。ソウヤ様、これからは自由に外へ出られるようですよ』

「えっ！本当か？というか、そんなのわかるの？」

『はい。私はあなたの中に宿る力です…変化があればすぐにわかります。今のソウヤ様なら、世界の壁すらも越えられるでしょう…誰かの強い祈りがあなたに届けば、ではあります』

「なにそれすごい…まあ、流石に精神体の時、限定だろうけどさ」

『そうですね…生身の状態では難しいでしょう』

「だよな…」

もし、別の世界の誰かの強い祈りが俺に届いたら、今の俺なら助けに行けるってことか…まあ、そんなこと滅多にないだろうけど。

「それにしても、何で急にそんなことが出来るようになったんだ？」

『ソラ様との新たな力のおかげでしょう。ソラ様との絆が更に深まり、新たな力が芽生えたことになり、ソウヤ様の存在がより強固になったことが理由だと思われます』

「なるほどな……」

ソラとの絆のおかげか……本当に俺はいつも助けられてばかりだな。

「……そういえば、前から気になってたんだけど……残留思念って何者なんだ？」

『ついにそのことを聞いてしまいますか……』

「あはは……正直、一番最初に聞くべきことだったけど……それで、一体何者なんだ？」

『そうですね……ちゃんと話しておくべきですね』

そう言いながら、残留思念は改めてこちらを見る。

『ソウヤ様は、転生する前に助けた女性のことを覚えていますか？』

「もちろん。顔までは思い出せないけど、長い黒髪の女性でキレイな人だったような……」

そうして、残留思念に視線を向けると、雷を受けたかのような衝撃を受けた。

似ている……髪とか、全体に白いけど雰囲気似ている気がする。

まさか！

「もしかして、残留思念は俺が前世で助けた女性なのか？」

『はい、その通りです。改めて助けてくれてありがとうございます』

「そうだったのか…どういたしまして。…それにしても、こんなことがあるんだな」

まさか、俺が転生する前に助けた女性が俺にプリンセスの力を渡してくれた人だったなんて。

「…でも、どうして俺にプリンセスの力を渡してくれたんだ？」

『それに関しては少々長くなってしましますが、聞いてくれますか？』

「まあ、それは全然構わないけどさ。そんなに長くなる話なのか？」

『はい』

「…わかった。聞かせてくれないか？」

『ありがとうございます…まず、私の正体から』

「うん」

『私はプリキュアの伝説の始まり。かつて、闇の勢力がスカイランドを襲った時にヒーロー…プリキュアを祈りによって呼び寄せたプリンセスです』

／／／／／／／／／／／／／／／／

闇の勢力との戦いの後、スカイランドには平和な時代が続きました。

私はプリンセスとして、スカイランドの人々を守り、導き…平和に過ごしていました。

そんなある日、当時のアンダーグ帝国のトップが攻め込んできました。

私はみんなを守るために戦い、アンダーグ帝国のトップと一進一退の攻防を繰り広げ

ました。

そして、半ば相討ちのような形で決着し、私とアンダーグ帝国のトップはお互いにその命を散らしました。

そして、私は生まれ変わり、ソウヤ様が前世で暮らしていたあの世界に行きました。

「つまり、あなたは元々、大昔のスカイランドのプリンセスで、転生して、俺が前世で暮らしていた世界に来たわけか」

『はい。スカイランドのプリンセスとしての記憶を持ち、転生した私は最初、あの世界を魔法の世界だと思って過ごしていました』

「まあ、スカイランドの記憶を持ったままだとそうなるよね…それで、どうして俺にプリンセスの力を渡すことになったんだ？」

『それは…』

残留思念は表情を曇らせながら、言葉を紡ぐ。

『…ソウヤ様が死ぬ原因になったあのナイフを持った不審者のことは覚えていますか？』

「そりやあまあ…忘れるわけないよ。でも、あの不審者が一体…」

『…あの不審者は、アンダーグ帝国のかつてのトップのアンダーグエナジーに乗り移られていたんです』

「どういうことだ？」

ソウヤ様が私を助けてくれたあの日、家への帰り道に、突如として声を掛けられました。

「見つけたぞ…プリンセス！貴様のせいで、微弱なアンダーグエナジーでこの世界を彷徨うことになった上に、こんな脆弱な人間の体に乗っ取るしか出来なかった…この屈辱、果たさずにはいらねえ」

「まさか…まだ完全に消え去っていなかったの？この世界に来てまで、なにをしたいの？」

「お前を亡き者にし、この世界をアンダーグエナジーに染めてやる」

「そんなことのために、罪のない人を巻き込むつもり!?許されぬことよ！」

「貴様に許されたいなどと思っていない…死ね！」

そうして、アンダーグエナジーのあやつり人形とかした不審者が私にナイフを突き刺そうとした。

「危ない！」

その時に、ソウヤ様が私を庇ってくれました。

「大丈夫ですか!?!どうして私を助けてくれたんですか?」

「…良かった…無事で。早く逃げてください…」

そう言いながら、ソウヤ様は息も絶え絶えといった様子で、倒れ込んでいました。

私はそんなあなたの様子を見ながら、心の底から何かが湧き上がってくるのを感じていました。

「とんだ邪魔が入ったが、今度こそ！」

「…それはこちらのセリフです！今度こそ消え去りなさい！」

あなたが庇って刺されたことに、悲しみ、怒り、罪悪感…いろんな感情がごちゃまぜになりながら、私は転生しても使えていた浄化の力を使い、アンダーグエナジーを浄化しました。

「おのれ…一度ならず二度までも…！だが、アンダーグ帝国は不滅だ！長い時間を掛けて、スカイランドに再び侵攻する！その時が楽しみだ！」

そう言って、笑いながらソレは消え去りました。

「あれ?…私はどうしてここに?…なにこれ!? 血のついたナイフ?…これを…わ、私が?…ああ…ああ…うああああ!」

そう叫びながら、操られていた人はその場から逃げ出してしまいました。

「うう…」

「大丈夫ですか? しつかりしてください!」

そうして声を掛けると、ソウヤ様がアンダーグエナジーに蝕まれてしまっていました。

命の灯火が消えかかっており、このままでは転生も叶わない状況であると、直感した私はある覚悟を決めました。

「聞こえているかはわかりませんが、聞いてください。これからあなたに私のプリンセスの力を託します。これでアンダーグエナジーは浄化できるはずです」

そう言って、さらに私は言葉を続けました。

「…ですが…ですが…あなたの死を避けることは出来ません…そして、これから私はあなたに自分勝手な願いを託します」

そう言いながら、私はソウヤ様にプリンセスの力を託しました。

「どうか…アンダーグ帝国が再びスカイランドを襲った時、スカイランドを…そこに生きる人々を守ってください…そして、プリキュアが再び現れた時に、あなたの力でプリ

キュアを導いて…私のヒーロー」

そうして、私はあなたをこの世界に転生させました。

／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／

「なるほど…俺にプリンセスの力が宿っていたり、この世界に転生したのはそういう理由だったのか…」

『はい…そして、すみません。ソウヤ様が戦いに巻き込まれてしまったのは私の身勝手な願いのせいです…あなたを巻き込んでしまい、本当にすみません』

そう言っ、残留思念の彼女は頭を下げた。

「良いよ。あなたがプリンセスの力を託してくれなかったら、俺が転生することはなかったし…ソラ達に会うこともなかった。むしろ、お礼を言いたいぐらいだよ…ありがとう」

『いえ、お礼を言うのは私の方です…私を助けてくれてありがとう…私の願いを叶えてくれてありがとう』

「どういたしまして…そういえば、俺にプリンセスの力を託した後、あなたはどんなったんだ？」

『それはわかりません。あくまで私はあなたの中に宿るプリンセスの力、そこに残った残留思念にすぎませんから』

「そっか…プリンセスの力を託した後、幸せに生きていてくれてたら良いんだけど」

『幸せ…とは言い切れないかもしれないかもしれませんが…きつと、スカイランドのことも気にかけていたでしょうし、ソウヤ様を転生させたことも気にしていたでしょうから』

「そうか…なら、せめてここに居るあなたぐらいは笑顔にしないとイケないな」

『えっ…？』

「まあ、どうすれば良いかわからないけど…とりあえず、話を続けてみる？」

『…ふふっ！そうですね！もつとソウヤ様のことを教えて下さい。もちろん、私のことも覚えている範囲でお教えしますよ』

「よし！それじゃあ、色々と話そうか。お互いを知るためにも」

そうして、俺は残留思念との対話を続けるのだった。

体育祭に行こう

「さて、一旦外に出ようかな？」

『そうですね…では、私はここで待っていますね！』

「…そういうえば、残留思念も一緒に外に出たり出来ないのか？」

『可能ではありませんが…私が外に出すぎると、ソウヤ様の体を守ることが難しくなりますからね…もちろん、あなたが危機的状況に陥っている時はすぐさま助けに参ります』

「そっか…ありがとう。そういう状況に陥らないことを祈るばかりだけど…でも、そういうのじゃなくて普通に一緒に出かけられると良いんだけど…」

『ふふっ！ありがとうございます。その日が来るのを楽しみにしていますね』

「うん。その時は外の世界を色々と案内するよ！それじゃあ、行ってくる！」

『はい、行ってらっしゃい！』

そうして、俺は外に出るのだった。

『ソウヤ様は不思議な方ですね…ただの残留思念に過ぎない私をこんなに気にかけてくれるなんて…もっと、ソウヤ様のことを知りたい…我儘かもしれないかもしれませんが、早く帰って

きてほしいと思つてしまいます……早く会いたいです』

「うーん！シャバの空気は美味いぜ！……とまあ、おふざけはこれぐらいにして……みんなはどこにいるかな？」

そう言つて、家の中を散策する。

「ソウヤさん、戻つてきていたのね。お帰りなさい」

「ただいま、ヨヨさん。みんなはどこに出かけてるの？」

「実はましろさんが、今度の体育祭のリレーの選抜に選ばれたの。それで、今はみんなでリレーの練習をしに出かけたわ」

「ましろさんが!?すごいじゃないですか！早速、ましろさんの応援に行つてきます！場所はどこですか？」

「ソウヤさんが応援に向かえば、ましろさんも喜ぶわ。場所は……」

そうして、俺はヨヨさんに場所を教えてもらい、すぐにその場所に向かつて、走りだすのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／／／

ヨヨさんに教えてもらった場所にやってくると、ましろさんがソラとツバサ君に指導してもらいながら、リレーの練習をしているのが目に入った。

「おーい！みんなー！」

俺がその声を掛けると、俺の声に気づいたソラが嬉しそうにダッシュしてきた。

「ソウヤ~~~~!!」

そう叫びながら、もうスピードで接近し、ソラは俺に抱きついてきた。

「ぐはっ！ちよっ！勢いが凄まじいんだけど……」

「当然です！ソウヤとこうして話をするのが私の楽しみになってるんです！この日をどれだけ待ちわびていたことか！」

そう言いながら、ソラは顔をスリスリしてくる。

さすが俺の彼女、めちやくちや可愛い……だけど、ずっとこのままだと身動きが取れない。

俺の様子に気づいたみんなが、こちらに駆け寄ってくる。

「ソウヤ君！戻ってこれたんだね！」

「こーこー！」

あげはさんに抱っこされたエルがこちらに手を伸ばす。

流石に今の状況でエルを抱っこするのは難しいので、俺は代わりにエルの頭を撫でる

ことにした。

「えくるう〜！」

「エルちゃん、ソウヤ君に頭なでなでされるの好きなんだね」

「ましろさん！聞いたよ！リレーの選抜選手に選ばれたんだってね。すごいじゃん！」
声を掛けてくれたましろさんにそう伝える。

「あはは…ソラちゃんに推薦されて、だけどね」

「なるほど…そういうことだったのか…でも、頑張ろうと思つて練習してるんだろ？」
「うん」

「なら、偉いことだと思うよ」

そう言つて、エルの頭を撫でるようにましろさんの頭を撫でる。

「ソウヤ君…みんなの前で恥ずかしいよ…でも、これ良いかも…ありがとう！ソウヤ君
！」

何故か満面の笑みを浮かべるましろさんに、俺は頭に疑問符を浮かべながらも、とりあえず喜んでくれた事に安堵した。

「そういえば、俺は学校ではどういう理由で休んでることになってるんだ？」

「えつとね…事故に遭つて入院中で、家族以外は会えないっていう風に言われてたよ。あ、私とおばあちゃんは会えることになってるよ」

「マジか…まあ、あながち間違いでもないんだけどさ」

いつ頃、呪いが解けるかわからないけど…こりゃ、しばらくは学校に行けないな。

「クラスの皆さんもソウヤのことを心配してましたよ…ソウヤが居れば、男子リレーのアンカーはソウヤだったでしょうね」

「まあ、そうかもな…それにしても、懐かしいな…ソラと一緒にラルー…こつちでいうリレーではよく代表に選ばれてたっけ」

「そうですね…懐かしいです。…ソウヤ、体育祭、応援しにきてくださいね!」

「もちろん!よし、それじゃあ練習の続きでもする?俺にも手伝えることがあるなら、手伝うよ!」

「ソウヤ君、ありがとう!それじゃあお願いしても良いかな?」

「了解!」

そうして、俺達はリレーの練習を再開するのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「どうしてこうなった…」

あれからリレーの練習を続け、その練習は何日にもわたり、ついに体育祭の本番を迎えたのだが…

俺はというと、何故か女装させられて体育祭の応援をしにきている。

薄紫色の長いウィッグを着け、黒のベレー帽を被り、謎の英語が印字されている白のTシャツに黒のレザージャケットを羽織り、黒のミニスカートに黒のニーハイソックスに黒のブーツ、そして、首に黒のチョーカーを着けている。

そして、あげはさんにメイクされ、声を出さなければ女の子に見えるとあげはさん達に言われた。

確かに俺は事故に遭って入院中という設定であるため、そのままの姿で応援に行くわけにはいかないというのはわかっている…わかっているんだけどさ。

「何も女装しなくても良いじゃないですか…」

「まあまあ。似合ってるし、良いんじゃない?」

「良くない!」

「あげはさんの言う通り、似合ってるよ!ソウヤ君…:本当に女の子にしか見えないよ」
「ツバサ君まで!?!いや、本当に勘弁してくれ…」

なんでツバサ君までノリノリなの?おかしくない?

「試しにちよつと高い声だしてみてよ!」

「えつと…:コホン。…:こんな感じかな」

そうして普段より高い声を出してみる。

「おお…:すごい!これなら誤魔化せるんじゃない?よし、今日はそれでいこう!」

「本気ですか？嫌なだけで…」

そんな会話を交わしていると、ハンカチを落とした男性が目に入った。とりあえず、さっきの感じで声を掛けてみるか。

「ハンカチ、落としましたよ？」

「うん？ああ、すみません！拾ってくださいありがとうございます」

（キレイな娘だな…ハンカチを落としたのをわざわざ教えてくれるなんて優しいし…）
「いいいえ。気を付けてくださいね」

「…あの！良ければ連絡先とか教えてくれたりしませんか？」

「えっと…お、私はそういうのはちよつと…友達を待たせてるので失礼します！」

そう言って、ダッシュであげはさんとツバサ君を連れて学校へと向かった。

「せめてお名前だけでも〜！」

そんな声が背後から聞こえてきたが全力でスルーした。

そうして、なんとか学校へと辿り着いた。

「ね？女の子の子としか思われないでしょ？」

「…もう帰って良いですかね？」

「ダメ」

「…あんまりだ…俺がなにをしたというのか…」

そんな風に嘆きながらも、俺は体育祭を観戦するのだった。

バトンパスと悔しい気持ち

体育祭を観戦し、綱引きに騎馬戦といった体育祭のプログラムが進行していく。

そして、いよいよリレーが始まる。

「いよいよだね…」

「そうですね…ましろさん、大丈夫かな？」

あげはさんの言葉に、そう返す。

「大丈夫だよ！ましろん、あれだけ頑張ってたもん！」

「そうですね！きつと大丈夫です！」

「そうだね…信じよう！」

そうして、皆が所定の位置につき、いよいよリレーが始まった。

リレーの展開はほとんど互角の状態で、もうすぐましろさんの番がやってくる。

「やば…こつちがドキドキしちゃうんですけど…」

「頑張れ…ましろさん」

俺達が固唾を呑んで見守る中、ついにましろさんにバトンが渡された。

「ましおー！」

「ましろさん！頑張れ！」

俺達は次々に応援の言葉を掛ける。

ましろさんはバトンを持って走り続ける。

だが、走っているうちにましろさんが転んでしまった。

ましろさん！そう口に出しそうになるが、ぐっと堪える。

きつと、ましろさんはここで諦めたりしない…立ち上がったって走ると信じてる。

すると、ましろさんは本当に立ち上がり、走り出した。

そして、ソラへとバトンを渡すことに成功した。

バトンを受け取ったソラはそのまま全速力で走り抜け、アンカーの選手を全員抜き去

り、1位でゴールした。

それと同時に歓声上がる。

これを見ている皆さんが全力で走ったみんなを讃えている。

そんな中ましろさんに駆け寄るソラの姿が目に入った。

だが、話している内にましろさんがどこかへ走り去っていく。

「ましろさん、どうしたんだろう…ちよつと行ってきますね」

そうあげはさん達に声を掛けてから、俺はましろさんの後を追うのだった。

ましろさんの後を追うと、水で顔を洗っているのが目に入った。

そして、声を掛けようとする、ソラがましろさんに声を掛けた。

「ましろさん！」

そんな様子を見て、近くの物陰に隠れて、こっそりと2人の様子を見る。

「ど…どうしてもお水飲みたくなっちゃって！」

そう言いながら、ましろさんは背を向ける。

「大丈夫ですか？」

ソラの質問にましろさんはポツリと言葉を零す。

「私…走るの苦手だし…リレー選手だって自信なくて…なのに、自分にも出来るって、

思っちゃったんだよ」

そう言いながら、声がだんだんと涙ぐんだ声になっていく。

「みんなとたくさん練習したから…ソラちゃんみたいに速く走れなくてもちゃんと走れるって。でも…大事なところで転んじやって…それが悔しい…」

それを聞いて、ましろさんが何故ここに来たのかわかった。

そりゃあ悔しいよな…あれだけ練習したのに大事なところで転んでしまったら、悔し

いだろう。

俺が同じ立場なら悔しいし、それでも俺が転んでしまったせいであらう。罪悪感でいっぱいになるし、しばらく引きずる自信がある。

「ごめんね。せつかく勝てたのにこんなこと言っちゃって…」

その言葉を聞いて、俺は物陰から姿を見せようとする。

「ごめんなさい！」

「えっ…」

だが、姿を見せる前にソラがましろさんに謝罪する。

「私、言いました。勝つためにはましろさんのバトンパスが必要だって」

「うん」

「それは半分はほんとと言えますか…もう半分はただ…友達と一緒に走りたかったんです」

頭を下げながら、ソラは自分の思いを口にしていく。

「ましろさんが転んだあの時、ほんの少しだけ諦めてしまったんです…負けるかもしれないけど、しょうがないって」

そう言うソラを見て、だからソラは謝ったのかと納得する。

「でも、ましろさんは転んで悔しいとか、追い抜かれて悲しいとかじゃなく、ただひたす

ら前を見て走っていた」

そう言った後、ソラは顔を上げる。

「ましろさんのその走りが私に火をつけてくれたんです…絶対に勝つんだって、何かなんでも1位になるんだって！」

そう言いながら、ソラはましろさんの元に走る。

そして、手を握り、言葉が続ける。

「ましろさんは私に最高のバトンを渡してくれましたよ」

「良かった良かった…」

2人の様子を見て、そう呟く。

ソラもましろさんも更に絆が深まったみたいだ。

そんなことを思いながら、物陰から姿を現し、声を掛ける。

「おおい、2人共！こんなところに居たんだね」

俺がそう声を掛けると、2人はポカんとした顔をして言葉を紡いだ。

「誰？」

「やっぱりこうなるのか…まあ、ソラとましろさんにすら気づかれないぐらいの変装ってことか…えっと、俺だよ…ソウヤ」

「ソウヤ!?えっと、どうしてそんな恰好を?いえ、すごく似合ってはいるんですが」

「本当に別人だよ…知らない女の子がいるって思ったぐらいだもん」

「あはは…一応事故で入院中ってことになってるから、そのまま体育祭を応援するわけにもいなくてさ…それで、あげはさんがノリノリで女装させてきた」

「な、なるほど…そうだったんですね…」

「あはは…確かにあげはちゃんならノリノリでやりそうだよね…そういうえば、ソウヤ君も心配して来てくれたの?」

「うん。ソラと何か話した後、どこかに走って行ったから気になっちゃってさ…でも、その様子なら、もう心配いらなかな」

「うん! ありがとう! ソウヤ君」

「よし、それじゃあ戻ろうか…ん? この嫌な気配…バツタモンダーが近くに居るっぽいな。警戒していこう」

「…! わかりました」

「ソウヤ君が言うなら、そうなんだろうね…わかった!」

そうして、俺達は戻ることにするのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

俺達が戻ると、案の定、ランボーグが出現していた。

どうやら、今回のランボーグは運動場とかに白線を引く、白線敷が元になっているよ

うだ。

「体育祭をめちやくちやにさせるわけにはいきません！」

「ソラさん！ましろさん！」

気合いを入れていている俺達に、ツバサ君がソラとましろさんのペンを持ってきてくれた。

「行こう！みんな！」

俺の掛け声にみんなも答え、俺達は変身するのだった。

「無限にひろがる青い空！キュアスカイ！」

「ふわりひろがる優しい光！キュアプリズム！」

「天高くひろがる勇氣！キュアウイング！」

「静寂ひろがる夜の帳！キュアナイト！」

「レディ・ゴー！」

「ひろがるスカイ！プリキュア！」

そうして、俺達は変身を終え、ランボーグとの戦闘を開始するのだった。

「はあっ!」

スカイが殴りかかろうとすると、ランボーグが高速で移動して、それを回避する。

「待ちなさい!」

「ランボーグ!」

移動したランボーグが回転し、白い粉塵を起こす。

「ゴホッ…ゴホッ…ゴホッ」

なるほど…あれはなかなか厄介だな。

そんなことを考えている内にウイングがスカイを助けだす。

「スカイ!大丈夫ですか?」

「助かりました」

「ウイング、ありがとう!こっちは任せて!」

俺はそう声を掛け、ランボーグに接近する。

だが、ランボーグはこちらの動きに気づいて、高速で移動する。

俺はそれを追いつつ、ランボーグの進行方向に槍を投げて動きを封じる。

それを回避するためにランボーグは急ブレーキを掛け、別の方向に移動しようとする。

だが、無理な方向転換のせいで、移動方向がバレバレだったため、そちらに槍を突き

刺す。

そうして、その動作を何度か繰り返す。

そして、ランボーグを袋小路に追い詰める。

「今なら！はあーっ！」

ランボーグに上からキックする。

そして、攻撃が命中し、ランボーグがよろめいた。

「スカイ！いくよ！」

「はい！」

ランボーグが怯んだ隙に、スカイと俺は合体技を準備をする。

「スカイブルー！」

「ナイトブラック！」

「エンゲージ！」

お互いのスカイミラーージュを重ね、お互いの衣装にそれぞれの装飾が加わる。

そして、手を繋ぎ、エネルギーが集まっていく。

「プリキュア！ナイト・スカイ・エンゲージ！」

集まったエネルギーが放出され、ランボーグの下から黒と青の竜巻が舞い上がり、そ

のままランボーグに命中した。

「スミキッタ〜」

ランボーグの上空に夜空がひろがり、ランボーグは浄化された。

「ミラーパッド！OK！」

そして、発生したキラキラエナジーをミラーパッドに回収し、戦闘が終了した。

／／／／／／／／／／／／／／／／

体育祭は大盛況なまま終わり、俺達は家の庭でのんびりとしていた。

「涙が出るくらい悔しいって思ったのは初めてだよ」

「ましろさんは意外と負けず嫌いなんだな…ちよつと意外かも」

「そうだね。私、自分で思ってたよりも、負けず嫌いみたい」

ましろさんはそう言って、微笑んだ。

「今日、ましろさんは新しい自分に出会えたんだね」

「うん！私は思ってたよりも負けず嫌いで、思ったよりも走るのが好きな自分に！」

「…ましろさんはエルちゃんと同じ歩き出したばかりの赤ちゃんね」

ヨヨさんはそう言いながら、ツバサ君と歩いているエルに視線を移す。

「自分の中にたくさんの可能性があることに気づいて、どんどん成長していく」

「そうかもしれないな…多分、ましろさんだけじゃない、いろんな人がそうなのかも」

「きつと、そうです！ましろさん、日課のランニング、これからも一緒に頑張りましょうね！」

「うん！」

そうして、ソラとましろさんは笑いあうのだった。

「そういえば、ソウヤ君」

さきほどまで俺達を見守っていた、あげはさんがそう口にする。

「しばらくは、女装したままにしない？」

「はい？正気ですか？」

思わず過剰に反応する。

「いやいや、真面目な話だから安心して。ましろんとソラちゃんも気づかないぐらいだったし、変装するにはうってつけじゃない？」

「まあ、それはそうですけど…せめて、どこかに出かける時限定にしてほしいです…」

「それはもちろん！じゃあ決定ってことで！ふっふっふ…どうせならソウヤ君が女装した時の名前も決めちゃおう！」

「良いね！あげはちゃん！私も一緒に考えるよ！」

「よくわかりませんが、私も参加します！」

「…勘弁してくれ…」

くそう…みんなして俺をからかいやがって…最悪、心の中に引き籠もってやる…!
俺はそんなことを思いながら、皆の話を聞くのだった。

実習に行こう！

「みなさん、早く避難を！」

キユアナイトへと変身している俺はウイングと一緒に周りの人を避難させている。

何故こんなことになっているかと言えば、バッタモンダーが釣り竿のランボーグを出現させたことが原因だ。

バッタモンダーは卑怯なこととか平然とするからな…周りの人を人質にしないと制限らないからこうして避難させているわけだ。

スカイとプリズムは俺とウイングが避難を完了するまで、ランボーグを遠ざけてくれている。

「さあ、アイツを遠ざけているうちに」

ウイングがその声を掛ける。

「…ウイング！看板が男の子に！」

視線を移した先にランボーグの攻撃が命中してしまった看板が避難中の男の子に向かっていくのが目に入った。

俺の声が届いたのか、ウイングが男の子に向かっていた看板を蹴り飛ばす。

「大丈夫? さあ、早く逃げて」

ウイングは少年の頭を撫でながら、そう口にする。

それを見て一安心し、ウイングとアイコンタクトをしてランボーグに向き直る。

「スカイ! プリズム! 避難完了です!」

ウイングのその言葉を聞いて、スカイとプリズムは頷き、ランボーグの攻撃を躲し、そのまま2人でランボーグを蹴り飛ばす。

そして、ランボーグが倒れたのを確認し、俺は槍を出現させる。

そのまま槍をランボーグに突き刺し、地面に縫い付けるようにして動きを封じる。

「ウイング!」

「今です!」

「決めて!」

俺達の言葉を聞き、ウイングは必殺技をランボーグにぶつける。

「ひろがる! ウイングアタック!」

そうして、ランボーグにウイングの必殺技が命中し、ランボーグが浄化される。

「スミキッタ」

「ミラーパッド! OK!」

ミラーパッドにキラキラエナジーが回収され、戦闘が終了した。

ランボーグとの戦闘が終了し、バッタモンダーが口をあんぐりと開けて驚いている。「やった、やった〜！流石プリキュア！」

「えるう〜！」

あげはさんとエルはテンションが上がっているようだ。

「おい！その外野！」

「はあ？」

「言つとくけど、まだ僕は全然本気出してないからね」

バッタモンダーはあげはさんを見ながら、そんなことを口にする。

相変わらず小物臭いやつだな…

俺がそんなことを考えていると、あげはさんが呆れた顔をしてバッタモンダーに言葉を告げた。

「負け惜しみってかっこ悪いよ」

「んなつ!!戦つてもない外野のくせに…お前ら、次は覚悟しろよ！フーン！」

そんな捨て台詞を吐きながら、バッタモンダーはその場からいなくなつた。

「だから、かっこ悪いのに…まあ、確かに私は外野なだけだね」

「そんなことありません（ないよ）！」

そう言つて、スカイとプリズムはあげはさんの元に向かう。

俺もそれに付いていき、あげはさんの元に向かう。

「あげはちゃんは大切な仲間だよ!」

「いつも私達を応援してくれているから頑張れるんです!」

「そうだね…あげはさんが居るおかげで安心して戦えてるし…他にも色々と助けてくれる…ありがとう、あげはさん」

「プリンセスも大好きですしね」

俺達が次々と言葉を伝えていくと、エルがあげはさんに抱きつき『大好き』と舌つ足らずに伝えていた。

「みんな!ありがとう!」

そんな話をした後、俺達は帰路へと着く。

「よし!私も頑張らないと!」

「えっ?」

「実は、ついに保育園で実習なんだ!もう!今から楽しみすぎる!」

「わあ!あげはちゃん、頑張つてね!」

「もちろん!アゲアゲで行つちやうよし!」

「頑張つてね、あげはさん」

「あつ、そうそう!実はソウヤ君に手伝ってほしいことがあるんだ!」

「手伝ってほしい」と。

「うん！実はね…」

そう言った後、俺にある頼み事をするあげはさんに俺はただ驚くことしか出来なかった。

／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／

「初めまして！私は聖あげは！まだ見習い先生だけど、最強の保育士を目指してます！よろしく願います！」

そう言って、あげはさんは園児達に挨拶をする。

そして、それに続いて俺の番が回ってきた。

「は、初めまして…お、私はソウナ・ハレワタルです。さきほど自己紹介していたあげは先生の知り合いで、同じく見習い先生です。よろしくね」

ランボーグを倒した後の帰り道で、あげはさんに頼まれたのは、一緒に実習を受けてほしいということだった。

何故かと聞いたら、実習を受けるはずだった人が急遽来れなくなってしまったようで、その代わりに俺に出てほしいとのことだった。

なんでも、2人分の実習の用意をしていたが、その内の1人が急遽来れなくなってしまったせいで、予定が狂ってしまうらしく、代わりに参加出来る人がいないかあげはさ

んに聞いたらしい。

確かに現状、自由に動けるのは俺だけだし、仕方ないと思つた俺はその話を受けることにした。

そして、体育祭の時と同じように薄紫色の長いウィッグを着け、それを後ろで縛り、ポニーテールにして、動きやすい半袖とジーンズの恰好をして、実習に参加している。

「ふたりとも、よさそうなせんせいだね」

「ね! あげはせんせいはさいきようだつて」

「カツコいい!」

そんな会話が聞こえてくる中、1人の男の子が手を上げて言葉を発する。

「さいきようはプリキュアだもん!」

「プリキュアのこと知ってるの?」

そう言いながら、あげはさんは男の子に近づく。

「うん! わるいかいじゆうとたたかってくれる、とつてもつよいヒーローだよ!」

「わたしもしってる!」

「しってる!」

「かつこいいよね」

園児達がプリキュアについて話をして盛り上がっている。

驚いたな…プリキュアは思ったより有名人らしい。

「ぼく、かわらでキュアウイングにたすけてもらったんだ！だから、ぼくもキュアウイングみたくつよくなりたいたいんだ！」

「ああ…あの時の子か…」

キュアウイングに助けてくれたという男の子を見て、あの時ウイングを助けた男の子だったことに気づいた。

「へえ〜！ウイング喜ぶよ！」

そう言いながら、あげはさんは男の子の頭を撫でた。

「ちよつと、あげはさん！」

そう慌てて声を掛けたが、時すでに遅し。

「プリキュアと知り合いなの？」

「あつ…！」

あげはさんの言葉を聞いた皆は一斉に騒ぎ出し、元気な声が響く。

「す〜い！」

「あげはせんせいもプリキュアなの？」

「だつてさいきょうなんですよ！」

「あばばば…私はプリキュアじゃないよ！」

皆の言葉にあげはさんは慌ててそう答える。

「だけど…仲間的な感じ?」

あげはさんがそう言うと、みんなは再び騒ぎ出す。

あはは…プリキュアは本当に人気なんだな…

「もしかして、ソウナせんせいもプリキュアの仲間なの?」

「私?!ま、まあ…そんな感じかな…」

いやまあ、俺はプリキュア本人ではあるんだけど、流星に正体を明かすわけにはいかないし。

俺の言葉を聞いて、またまた盛り上がる皆。

それはしばらくの間続き、俺は思わず苦笑するのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／／／

「…というわけで保育園のみんなからお手紙!」

「つ、疲れた…まあ、子どもは元気なぐらいがちょうど良いんだけどさ」

「ソウナ先生、人気だったもんね!またよろしくね!」

「…了解です。さて、さっそく手紙を読んでみよう!」

そう言つて、あげはさんの持っているたくさんの手紙が入っている箱を預かり、ソラ達の前に置いた。

「わあ〜っ！」

「おみがてー！」

ソラとましろさんが嬉しそうにその言葉を紡ぎ、エルも嬉しそうに声を出していた。声には出していないが、鳥形態のツバサ君も嬉しそうだ。

「オホン！あんまりボクらのことを喋らないでくださいよ…もし、正体がバレたりしたら…」

そんなことを言いつつ、ツバサ君は嬉しさを隠しきれていない。

「ごめんごめん。でも、見て見てー！」

そう言いながら、あげはさんは河原でウイングが助けた男の子から預かっていた手紙をツバサ君に見せる。

『きゅあういんぐ、だいすき』

その手紙を見たツバサ君はズキューンと言って、手紙の内容に感動していた。

「たける君、ウイングの大ファンみたい」

「ドキューン…へ、返事はいつまでに書けば？」

その言葉に嬉しくなったのか、あげはさんがありがとうとお礼を言いながら、抱きしめようとする。

それをツバサ君はジャンプして回避し、鳥形態から人間の姿に変わりながら着地す

る。

「へ、返事を書かないのは騎士ナイトとしての礼儀に反しますから」

「ツバサ君は素直じゃないな…本当は嬉しかったくせに」

「ソウヤ君!それは言わないで!」

「ふふっ!…あつ、そうそう実習中はこちらに泊まらせてもらうね!…つてことで、実習の準備、準備。ソウヤ君も付いてきて!」

「了解。それじゃあ行ってくるね!」

俺はみんなにそう伝えて、あげはさんの後を追いかけるのだった。

実習の続きと最強とは

迎えた実習の日、あげはさんは園児達と遊んでいた。

「ガオー！ 怪獣だぞー！」

「わあー！」

「なにをく！ キュアウイングパーンチ！」

そう言いながら、たける君が怪獣役をしているキュアウイングに殴りかかろうとする。

だが、あげはさんはそつとたける君を抱き上げた。

「怪獣はやられなくちゃダメなの！」

「先生、最強だから」

「さいきようはプリキュアなの！」

「はいはい」

流石、あげはさん…子ども達の対応に慣れてるな。

「ソウナせんせい！ こっちでおままごとしよ！」

「うん、良いよ！ 先生、演技は大得意だからね！」

「そうなんだ！じゃあ、せんせいはおかあさんやくね！」

「了解！任せて」

そうして、俺は子ども達とおままごとを始めた。

続いて、保育園で預かっている赤ちゃんのお世話だ。

「よいしょ。は〜い、さっぱりしたね〜」

あげはさんがオムツを変えながらそう言っているのを聞きながら、俺も隣でオムツを変えていく。

「さっぱりして、良かったね！さあて、他の子達は大丈夫かな？よーし、一気にやつちゃうよー！」

そうして、他の子達のオムツをてきばきと変えていく。

「おお〜！ソウナちゃん、すごいね！」

あげはさんのソウナちゃん呼びは気になるが、褒められるのは悪い気はしない。

「ソラの年の離れた弟の面倒を見ていたことがあって、慣れているんです」

「そうだったんだ！よーし！この調子で頑張ろう！」

そして、その後、赤ちゃん達にあげはさんと一緒に離乳食を食べさせ、園児達と一緒に
にお花に水やりをし、そしてプリキュアへの手紙を書いてくれた園児達の所へと戻つ
た。

「みんな〜！プリキュアからのお返事だよ！」

あげはさんの言葉と共にみんなが盛り上がりつつある、

…あれ？　そういうえば…

「あげはさん、キュアナイト宛ての手紙ってあったんですか？」

「うん。あつたつて聞いてるよ！　ただ、その時私達は実習の準備だったでしょ？　だから、
ソラちゃんともしろんが代わりにお返事を書いてくれたんだつて」

「そうなんですわね…帰つたら、2人にお礼を言わないと」

「そうだね！」

そんな会話をしながら園児達を見ると、それぞれプリキュアからの返事を見て、喜ん
でいた。

そんな中、一部の男子園児達は何故か涙を流していたが、よほどプリキュアからの返
事が嬉しかったのだろうか？

『『さいきょう目指してがんばつてね。キュアウイングより』わあ〜！　やつた〜！』

たける君もウイングからの返事をもらつて嬉しそうだ。

良かった…みんな喜んでくれたみたいだ。

そんなことを思いながら、俺は園児達を見つめるのだった。

／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／

「はあく…満たされるう〜！」

職員室の机で、ご満悦の様子であればさんは机に頭を乗せながら、そんなことを口にする。

「子ども達は元気ですよね…こつちが圧倒されるぐらい」

「ふふっ！ソウナちゃんはぐったりしてるね！でも、なんかこう心が満たされない？」

「…そうかもしれないね」

「だよね！」

そんな会話を交わしていると、突如として、扉が開かれた。

「あげは先生！ソウナ先生！たける君が！」

俺達はその言葉を聞き、すぐさまたける君の元へと向かった。

――

――

――

「エ〜ン！エ〜ン！」

「ケンカ？」

「あいつがじゅんばんまもらないからやつつけただけだもん」

事情はさきほど俺達を呼びに来た先生からおおまかに聞いていたから知っているが、これはどうしたもんかな…

そんなことを思っていると、あげはさんがたける君に視線を合わせるために座り込む。

「そつか…でも、ぶつのはどうかなく」

「ぼく、さいきょうになるんだもん！プリキュアみたいに悪いヤツ、やつつけるんだ！」
そんなたける君の言葉にあげはさんはたける君の手を握り、言葉を続ける。

「最強になるために大事なのはさ…先生はやつつけることじゃないと思う」

「…そうだね。たける君、プリキュアは悪いやつをやつつけることしかしてないかな？」
俺もたける君と視線を合わせて、そう口にする。

「それは…」

「してないよね？もし、悪いやつを倒すことしかしてないなら、たける君のことをプリキュアは助けてなかったはずだよ…もしそんなプリキュアだったら、それは本当に最強だったかな？」

俺の言葉にたける君は言葉を詰まらせる。

「うう…ぼく、正しいもん！」

「あつ…!!」

あげはさんの手を払い、たける君は走っていく。

「あげは先生もソウナ先生も最強じゃないもん！」

「たける君！」

俺とあげはさんはそんなたける君を追って走り出した。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「あれ?どこ行っちゃったんだろう?」

「手分けして探そう！」

「はい！」

そうして、手分けしてたける君を探しに行く。

だが、あちこち探しても見つからず、あげはさんに合流しようと移動を始めると、嫌な気配を感じた。

「まさか!?!」

そして、気配を辿り、気配の大元に辿り着くと、そこにはあげはさんとたける君がおり、目の前にゾウさんジョウロが元になっているであろうランボーグが居た。

「たける君、私から離れないで」

「あげはさん！ たける君！」

「ソウナちゃん！」

あげはさんと同じように、たける君を守るように前に出る。

「おい、その外野！ よくも、この前は『負け惜しみ』とか言ってくれたね…君や子供達の前でプリキュアをボッコボコにして、現実を見せてあげよう」

そういうのが小物臭いんだけどね…だが、状況は良くない…ソラ達が近くに居るのかわからない以上、戦えるのは俺しかない。

しかも、ここには子ども達が大勢いる…ちゃんと子ども達を守らないと。

…まあ、考えてもしょうがない。とりあえず、一旦変身して…

そう考え、ペンを取り出そうとすると、聞き慣れた声が響いてくる。

「「ひろがるスカイ！プリキュア！」」

そう、いつもの決め台詞を言って、プリキュア達が姿を見せた。

良いタイミングだ！ これはかなり助かる。

子ども達もプリキュアの登場に嬉しそうだ。

「たける君、お手紙ありがとう。後は任せて」

「うん！」

「皆さんは早く安全な場所へ！」

「はいーさあみんなー！」

スカイの言葉に、中に残っていた先生が、子ども達を避難させる。

…よし、とりあえず一安心だ。

俺はあげはさんとたける君を守ることに集中できる。

「たける君も避難しよう。先生に付いてきて！」

そうたける君に伝えるが、近くで戦いを見たいのか、とても嫌がっていた。

結局、たける君はあげはさんに抱きかかえられ、俺達は避難を開始しようとする。

「おい、観客がいなくなったら意味ないじゃないか」

やばっ！あいつ、たける君を狙うつもりだ。

そう理解した瞬間、咄嗟に2人を庇うように前に出る。

「やめなさいーダー！」

俺達に襲いかかろうとしたランボーグがプリズムの気弾によって怯み、続け様にスカイがランボーグに殴り掛かる。

そして、さらにウイングの上からのドロップキックによって、ランボーグが倒れ込んだ。

そのおかげで、あげはさんはたける君を避難させられたようで、俺とそのまま合流した。

「やった！」

「そうですね…ただ…」

「エルちゃんのことだよね…ちゃんと隠れられてたら良いんだけど…」

「はい…」

そんな会話を交わしていると、砂埃が晴れ、倒れているランボーグが目に入る。

「見せたい現実ってこれ〜？」

あげはさんが煽るようにそう口にする。

「まさか！観客が君達だけになったのは残念だけど、今から見せてあげるよ」

そう言つて、バツタモンダーが指を鳴らすと、ランボーグが起き上がり、鼻をどこかに向けていく。

一体、どこを狙つて…まさか!?

「みんな！エルを！」

俺がそう叫ぶと同時に、ランボーグがエルに向かって、水のようなものを放つた。
「えるう！」

エルはなんとか回避し、その場から離脱するが、ランボーグはエルを執拗に狙う。
そして、巨大な黒い水のような球体をエルに向かって放つ。

それをスカイ達が3人で庇うが、その結果、その黒い水のような球体に3人は囚われ

てしまった。

「閉じ込められた!？」

「アハハハッ！正義の味方気取りの君達ならそうすると思つたよ！これで籠の中の鳥だ！」

「プリズムショットが出せない！」

「それはアンダーグエナジーを濃縮した球体さ。君らの力は使えない：脱出は不可能だ」

「クッ……！」

「それだよ！それ！その顔が見たかつたんだよ！プリキュアくん！あくん！」

もはや顔芸のような表情をしながら、バツタモンダーはそう口にする。

「後はプリンセスを手に入れれば、完全勝利さ」

「いや……まだだよ！まだ私達がいる！」

俺がそう返すと同時に俺の手にスカイトーンが出現する。

「これは……！」

『本来、ソウヤ様以外のスカイトーンを創り出すのはエネルギーの消費が激しいので、あまりやりたくありませんし、そもそもそこまで数を用意出来るわけではないのですが……彼女一人分くらいなら、なんとかなります』

「なるほど…ありがとう」

残留思念の声が響き、その言葉にお礼を言う。

『どういたしまして。…さあ！彼女と共にあのランボーグを討ち倒しましょう！私もあのバツタモンダーという奴にムカついて仕方がないので、容赦なく叩きのめしてやりましょう！』

「あはは…それが本音か…よし、わかった…あげはさん、覚悟は出来てる？」
俺はスカイトーンをあげはさんに見せながらそう尋ねるのだった。

誕生!キュアバタフライ!

「あげはさん、覚悟は出来てる?」

ソウヤ君が私にそう尋ねる。

「えるう!」

「ソウヤく…ソウナちゃんがスカイトーンを!」

「そんなことがあり得るんですか?」

「まさか、プリンセス以外がスカイトーンを生み出したなんて…」

「どういうことだよ!」

ソウヤ君がスカイトーンを生み出したことに、みんなが驚きを隠せていない。

まあ、私もびつくりしてるんだけどね…

「まあ、細かいことは後で…今はあげはさんの気持ちを聞かせて」

そう言つて、ソウヤ君は私を見つめる。

真つ直ぐな目…本当にソウヤ君は真つ直ぐな男の子だよね…そんなソウヤ君が私は大好きなんだけど。

「…うん!覚悟は出来てるよ!ソウナちゃん」

「その、ソウナちゃん呼びは未だに慣れませんけど…まあ、それは良いです。今の私はこの保育園の見習い先生ですからね！」

「そうだね！私達は保育士…最強の保育士も最強のヒーローも目指す所は一緒！それは…大切な人達を守ること！」

そう言いながら、髪をほどいていく。

「そのために…私は！」

そうして決意を固めると同時に、私の胸の辺りに光が現れ、プリキュアに変身するためのミラージュペンが出現する。

「たける君、多分どこかで見てるだろうから先に言っとくね！私とあげは先生は今から最強になるよ！」

ソウヤ君の言葉にどこからともなくたける君が返事をする。

「2人はもうさいきようだよ！」

その言葉を聞き、私とソウヤ君は笑い合う。

「よし！それじゃあソウナちゃん！アゲアゲでいこっ！」

「はい！」

そうして、私達はプリキュアへと変身する。

「スカイミラージュ! トーンコネクト!」

マイク状に変化したスカイミラージュにトーンコネクトをセットする。

「ひろがるチェンジ! バタフライ!」

スカイミラージュにBUTTERFLYの文字が現れ、ディスク上のステージが現れる。

そして、髪が金色の髪へと変化し、ハイカットブーツが装着される。

「煌めきホップ!」

頭に蝶を象った装飾がついた帽子のようなものが装着され、彼女の両耳には蝶の形を半分ずつにしたようなイヤリングが装着された。

「爽やかステップ!」

赤みがかかったピンクのドレスが装着され、右足に黒タイツ、左足にアンクレットのついた白のニーハイソックスが出現する。

「晴れ晴れジャンプ!」

腕に中指で止められたアームカバーが肌と一体化するかのようにながった。そして、最後に目元にピンクのアイシャドウが描かれ、変身が完了する。

「アゲてひろがるワンダホー！キュアバタフライ！」

バタフライが名乗りを上げた後、同時に変身を終えたキュアナイトが名乗りを上げる。

「静寂ひろがる夜の帳！キュアナイト！」

「2人だけどやっちゃおう！」

「ええ…まあ良いですけど」

「ひろがるスカイ！プリキュア！」

そうして、2人の最強の保育士が誕生するのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「キュア…」

「バタフライ!!」

「あげは先生とソウナ先生がプリキュア!?!」

いつの間にか近くに来ていたのか、たける君がそう口にする。

「キュアバタフライ、頑張れ〜！」

「了解！」

「私への応援はなしですか…まあ、良いですけど…」

「まあまあ。今はランボーグを倒すことに集中しよ！」

バタフライの言葉にランボーグに再び向き直る。

「まさか、その外野がプリキュアになって…しかも、あの可憐な少女がキュアナイトだったとはね…」

「うへえ…勘弁してよ…」

バツタモンダーに可憐な少女とか言われるとか、気持ち悪いんだけど…

「でも、僕達は敵同士だからね。容赦なく叩きのめしてあげるよ!」

バツタモンダーがそう言うと同時にランボーグから黒いエネルギーが発射される。

それをバタフライが蝶型のシールドを展開して防いでくれた。

「アゲアゲの私には効かないよ!」

なるほど…バタフライの力はそういう感じか。

「待ってて! さっさとあいつを倒して解放してあげるから!」

「…はい!」

スカイ達の返事を聞き、俺達はランボーグへと向かう。

「バタフライ!」

「…! OK!」

バタフライは俺の意図を理解してくれたのか、そう返事をしてくれた。

そして、俺達はランボーグの攻撃を回避していく。

「お遊戯の時間はおしまい！」

そして、バタフライが投げキッスをすると蝶が出現し、そのままランボーグに向かって飛んでいき、ランボーグにぶつかると同時に爆発した。

「ナイト！受け取って！」

バタフライが蝶型のシールドを展開し、それを俺にパスしてくれた。

それを受け取りランボーグに接近していく。

俺の接近に気づいたランボーグが黒のエネルギーを放つ。

今だ！喰らえ！ブレワイリンク式、ビーム弾きだ！

タイミングを合わせ、ランボーグのエネルギー波を跳ね返し、逆にランボーグにぶつ
ける。

そして、その攻撃を受けたランボーグは怯んだ。

よし、上手くいった！バタフライのシールドを見て思いついた戦い方だったが、上手
くいつて良かった。

バタフライのおかげだな…バタフライが咄嗟に俺のやりたいことを理解してくれた
おかげだ。

「バタフライ！今だよ！」

「OK！…ひろがる！バタフライプレス！」

バタフライがそう言うと、巨大な蝶型のエネルギーが出現し、そのままランボーグを押し潰し、ランボーグを浄化する。

その時、一瞬蝶があげはさんが乗っている車…確か、ハマーって言うんだっけ？それに變化したのには驚いたが、ランボーグを浄化することが出来たため、一瞬の内にその考えは頭の片隅に移動した。

「スミキツタ〜」

「ミラーパッド!OK!」

そうして、あの空間から解放されたスカイがミラーパッドにキラキラエナジーを回収した。

「い…良い気になるなよ!僕がさらに本気を出せば…」

「いつでも相手になるよ」

バタフライがバツタモンダーを睨みつけながら、さらに言葉が続ける。

「でも…もし、また私の大切な人達に手を出したら…許さない!」

「ひっ…ば、バツタモンモン!」

バタフライの迫力に負けたのか、バツタモンダーは怯えながらその場から消えていった。

「やった〜!キュアバタフライもキュアナイトもかっこいい!」

「フフ：先生達のことはみんなに秘密ね！」

「たける君、約束できるかな？」

「うん！だれにもいわないよ！あげは先生、ソウナ先生：ぼく、大切な人を守る最強になるよ！」

あげはさんと俺の言葉にたける君はそう返してくれた。

「きつと、たける君ならなれるよ！先生も応援してるからね」

そう言いながら、俺はたける君の頭を撫でた。

そんな会話を交わしているとみんながこちらに集まってくる。

「バタフライ！これからは…」

「一緒に戦えるんですね！」

「すごくすごく嬉しいです！」

「あげっ！」

何故かみんなは両手の人差し指を上にあげるといふ、あげはさんがよくやっているアゲアゲのポーズをしながら次々に声を掛けてきた。

「そのポーズはともかくとして、確かにバタフライと一緒に戦えるのは私としても嬉しいですよ！これからよろしくお願いしますね！」

「ありがとー！これからは保育士とプリキュア、両方頑張っちゃうから、よろしくね」

！」

キュアバタフライが笑顔を浮かべながら、そう口にする。

俺は心強い仲間の姿を見ながら、思わず笑みを零すのだった。

／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／

「たける君、バタフライも大好きになったみたいですね」

たける君の書いた絵を見ながら、ソラがそう口にする。

「そうみたいだな…」

「ソウヤ、保育園での実習はどうでしたか?」

「まあ、色々あったけど、楽しかったかな」

「それなら良かったです!…あ、告白とかされませんでしたか?大丈夫でしたか?子ども達とかにも…」

「うん?なんで告白されるんだよ…最後まで、変装はバレなかったし、告白なんてされてないよ。子ども達の告白とかもなかったし…でも、なんでそんなことを聞くんだ?」

「いえいえ!なんでもありません!ともかく、それは良かったです…ほっ」

ソラが安堵したような表情でそう口にする、何故かましろさんもホッとしたような顔をしていた。

どういふことなんだ?…まあ、良いか。

「…あげはちゃん、また泊まりに来てほしいな…」

「ましろさん、そのことなら…」

俺がそう言うと同時に、インターホンが鳴り、ソラが出ようとした瞬間、大荷物を持つたあげはさんがやってきて、ソラに抱きついた。

「サプラーイズ！」

「わっ！うう…」

「はいはい。あげはさん、ソラがしんどそうだから退いてあげて」

「あっ！ごめんごめん！」

そう言いながら、あげはさんはソラから離れた。

「ソウヤ…ありがとうございます。助かりました…」

「どういたしまして。…それで、実はあげはさんは…」

「待つて！そこから先は私が言うから！」

そう言つて、あげはさんは少し間を空けて言葉が続けた。

「実は、今日から私もここに引つ越してきたんだ！ほら、私もプリキュアになったことだし…みんなを驚かせたくて、ソウヤ君以外には内緒にしてたんだ！これからよろしくね！」

「「サプラーイズ！」」

「あげっ!」

「イエース!アゲアゲ!」

「:…なんだこれ?」

謎の会話に思わずそう言いつつも、俺はこれからの生活に思いを馳せるのだった。

旅立ちのプロローグとエピローグ

「そういえば、ソウヤがスカイトーンを創り出したのはどうしてなんですか？」

あげはさんの荷物を無事に運び終えて、落ち着いた所でソラが俺に質問する。

「そっか…：そういえば、みんなにはまだ話してなかったな」

そうして、俺はみんなに俺がスカイトーンを創り出した理由について話し始めた。

俺が転生する前に助けた女性が、プリキュア伝説の始まりのプリンセスが転生した存在であること、そして、俺にプリンセスの力を託し、彼女が俺をスカイランドに転生させたこと。

そして彼女が、俺が前世にいた世界に転生することになった理由も。

「…というわけで、俺はエルと同じようにプリンセスの力を持っているんだよ。プリキュアに変身出来たのはその副産物？みたいな感じ」

「なるほど…：そうだったんですね…：確かに、ソウヤはエルちゃんがいなくても、何度かスカイトーンを創り出していましたが…：それはソウヤに宿るプリンセスの力だったんですね！」

「すごいね…：でも、大丈夫かな？ソウヤ君がエルちゃんと同じ力を持つてること

は…アンダーグ帝国はソウヤ君も狙ってくるんじゃない？」

ましろさんが不安そうにそう口にする。

まあ、俺もその可能性を考えなかったわけじゃない。

でも、今のところはそこまで気にしなくても良いだろう。

「俺もそれは考えたけど、今は大丈夫だと思う。俺はプリキュアに変身出来るから自分の身を守ることは出来るし、アンダーグ帝国も俺がエルと同じ力を持っているという確信はないだろうから」

「でも、ソウヤ君の体は家で眠っている状態だよ？そっちを狙われたりしたら…」

「うん。それはそうなんだよね…ただ、最近変装して動いていたし、今回のことでバツタモンダーは女装している俺…つまり、ソウナがキュアナイトだと思い込んでいるから、しばらくは大丈夫だと思う」

カバトンに質問に行ったら不味いかもしれないけど、見た感じ、同じアンダーグ帝国の刺客ではあるが、お互いに干渉しあったり、協力したりしてるわけじゃないさそうだから、その可能性は低いだろう。

とはいえ、警戒は必要か…

「…でも、一応念のため、俺の体をどこか別の場所に移動することも考えないといけない」

「…大丈夫です！ソウヤのことは私達が守ります！だから、安心して下さい！」
「ありがとう。それじゃあみんなにお願いしようかな」

俺がそう答えると、みんなが一斉に頷いてくれた。

本当にみんなには感謝しかないな…一応、俺は俺で何か考えておく必要があるそうだけだ。

ヨヨさんか、残留思念になにかアイディアがないか聞いておこう。

そんなことを考えていると、どこからともなくエルの悲しそうな声が聞こえてきた。

「エル!？」

「えるう?！」

慌ててエルに視線を移すが、エルはきよとんとした顔をしていて、特に異常はなさそう
うだ。

「ソウヤ?どうかしたんですか?」

「いや…エルの悲しそうな声が聞こえてきたんだけど…っ!ただ…これは一体…」

『…ソウヤ様、どうやらこのプリンセスの声はここではない世界から届いているよう
です』

「ここではない世界…?」

そういえば、前に残留思念が今の俺なら世界の壁すら越えられるとか言ってたっけ…

確か、誰かの祈りが俺に届けばってことだったけど。

つまり、このエルの声は別の世界のエルの祈りってことか…それなら！

「助けに行かないとだな」

「助けに行く？誰をですか？」

「別の世界のエル…多分、そこにはみんなもいるのかも…まあ、なんであれ、助けを求める人を見捨てることは出来ない！だから、ちよつと別の世界のみんなを助けに行つてくるよ」

俺の言葉にみんなは一瞬ポカンとしていたが、すぐに俺を見つめて言葉を紡いだ。

「わかりました！きつと、それはソウヤにしか出来ないことです。ソウヤが無事に帰ってきてくれるまで待っています！」

「私も待つてるね！正直、今の状況はわからないけど、ソウヤ君にしか出来ない大事なことだもん！私も信じて待つてるね！」

「ソラ、ましろさん…ありがとう」

「ソウヤ君！別の世界のプリンセスを助けてあげて！もちろん、その世界にはボクも居るとは思うけど、ソウヤ君が協力してくれたら助かると思う！」

「私も状況はよくわかってないけど、ソウヤ君が本気で誰かを助けようとしてるのはわかるよ。だから、頑張つて！美味しいご飯を作つて待つてるから！」

「にーに！あんばえ！」

「あげはさん、ツバサ君、エル…みんなありがとう！それじゃあ行ってくる！」

「「行ってらっしゃい！」」

俺はみんなに見送られながら、別の世界へと旅立った。

『ソウヤ様、一つ注意して頂きたいことが』

「なんだ？」

『今から向かう世界はおそらく、私達の世界とは異なる部分があるでしょう…どんな変化があるのかわかりません…用心しておくに越したことはないと思います』

「まあ、別の世界だし、それはそうだろうな…だけど、どんな世界でもみんなは変わらな
いさ、きつとな」

『ふふっ！そうかもかもしれませんね…あつ、ソウヤ様、もうすぐ別の世界に着きそうです。そろそろプリキュアに変身しましょう！』

「了解！別の世界でもヒーローの順番だ！」

そうして、俺はキュアナイトに変身し、別世界に降臨する。

「お前は……何なんだ？」

「あの子も……プリキュアなの？」

「私達以外にもプリキュアっていたんですね……」

「でもプリキュアになるにはエルちゃんの花の力が必要なんだよ？ あんな子、今まで見た事
ない」

そんな声が聞こえてきて、俺はそちらに視線を移す。

見ると、ボロボロになりながら立っている見たことがないプリキュアの子以外は、みんな変身が解除されて、倒れていた。

「……大丈夫ですか？ ソラ、ましろさん、ツバサ君、あげはさん」

「え？ どうして私達の名前を？」

「私達、あなたと会ったっけ？」

ソラ達の言葉に困惑する。

俺のことを知らない……？ さっきの見たことのないプリキュアといい、残留思念の言っていた俺達の世界との違いということか……まあ、今はそれよりも。

そうして、俺は邪悪な気配を放っている3人組の方を向く。

「もう一度聞く。お前は何者だ？」

そういえば、まだ名乗ってなかったっけ……それじゃあ一応名乗っておこう。

「……私はキュアナイト……静寂ひろがる夜のとばり！キュアナイト！」

そうして、名乗りを終えた俺はこの状況を打開するために、3人組に向かって戦いを始めるのだった。

これは別の世界の戦いのプロローグ。

俺が過ごした、短く……けれど、大事な時間が始まり。

俺達の世界では語られない、別世界の英雄譚だ。

//////

イーヴィルとの戦いを終え、俺は元の世界に帰還する。

「ふう……今回は本当にやばかったな……」

『そうですね……ソウヤ様が無事で良かったです』

「そうだね……あつちの世界のみんなも無事で良かった。残留思念も力を貸してくれてありがとう」

『いえいえ。前に言ったではありませんか、ソウヤ様が危機的状況に陥っている時はすぐさま助けに行くと』

「そうだったな……それにしても、いつまでも残留思念って呼ぶのは大変だな……名前を決めようか……どんな名前が良い？」

『ソウヤ様が名付けてくれるなら、よほど酷い名前でない限りはそれが良いです！』

「なるほど…了解。考えてみるよ」

そうして、俺は頭を働かせる。

残留思念の名前、名前…あ！こんなのはどうだろう！

「…エトなんてどうかな？」

『エト？良い名前ではあると思いますが、どうしてその名前にしたんですか？』

「いや、大昔のプリンセスだから、エンシエントと言えそうだし、その頭文字と後ろの文字を重ねて、エト。後はエルをもじってかな」

『なるほど…ありがとうございます！では、この瞬間から私はエトです！改めてよろしくお願ひしますね！ソウヤ様！』

「うん！よろしくね！エト！」

『はい…と、そろそろ元の世界に戻りますよ』

「了解！」

そうして、俺は元の世界へと帰還した。

最初に目に飛び込んできた景色は、みんながエンゲージスタイルのスカイトーンを持っていてソラの側に寄り、泣きそうな顔をしている姿だった。

「ただいま。どうやら色々と心配掛けちゃったみたいだね」

俺の声を聞いた皆が気づき、一斉に抱きついてきた。

「ソウヤ!!良かった!良かった...このスカイトーンが光ったかと思ったら、急に光が消えて...ソウヤに何かあったんじゃないかって心配で...」

ソラが泣きそうな顔をしながら、そう伝えてくる。

確かに、あつちの世界で一回スカイトーンが砕けたりして、大変だったからな...エンゲージのスカイトーンは俺とソラの絆の力...俺の異変もスカイトーンを通じて、感じていたのかもしれないな。

「良かったよお...!私達もソラちゃんもソウヤ君に何かあったんじゃないかって...無事で良かったあ!」

「本当に無事で良かった...!ごめん!ボク、何の力にもなれなくて...!」

「本当に良かった...!ソウヤ君、しばらく無茶は禁止だからね!...本当に無事で良かったよ...!」

「うん、おかげで無事に帰ってこれたよ...改めて、ただいま」

俺の言葉に皆は涙を流しながらも、笑みを浮かべて言葉を紡いだ。

「...お帰りなさい!!」

その言葉を聞いて、俺はようやく自分が元の世界に帰ってきたことを実感した。

その時、ポケットに入っていたサンライズの力が宿っている赤いスカイトーンが光を放った。

それを取り出すと、皆がそれを見る。

「ソウヤ、それは何ですか？スカイトーンのように見えますが…」

ソラの質問に俺は笑みを浮かべながら答える。

「これは、別の世界の友達との友情の証みたいなものだよ。いつかは別の世界のみんなと一緒に紹介できる時もあるかもね」

「そうなんですか！なら、その時を楽しみにしてますね！」

「ああ！…とりあえず、何か食べさせて…今回はかなり疲れた…」

「ふふっ！OK！腕によりをかけて作っちゃおうよ！」

「あげはちゃん、私も手伝うよ！」

「私も手伝います！」

「ボクも！…ソウヤ君はゆっくりしててね」

「うん、そうさせてもらうよ…よろしくね」

そう言つて、俺はみんながご飯の用意をしているのを見ながら、ふと、あちらの世界のみんなのことを考える。

『あちらのソラ様達のことを考えているのですか？』

「まあね。…あさひ達の世界はあまりに俺達の世界とかけ離れているからちよつと心配で…」

『確かに：イーヴィルという存在、そしてイーヴィルと同じ世界の出身だったというベリアル：…どれもこちらの世界には存在しない存在ですからね』

「そういうこと。もしかしたら、これからもやばい敵が来るかもしれないからな…まあ、きつと皆なら大丈夫か！いつかはこっちの世界に来てくれるっていう約束もしたし」

『そうですね！私達は私達の世界を守ることには力を尽くしましょう！』

「もちろん！これからも俺達は俺達の世界を守るために戦おう！」

そう言っつて、俺はあさひとの絆によって出現した赤いスカイトーンを眺める。

「…お互いに頑張ろうな。あさひ」

そして、誰に言うでもなく、そんな言葉を口にした。

そんな言葉に応えるように、赤いスカイトーンが輝きを放ったような気がした。

ソラはソウヤとイチヤイチャしたい!

「最近、ソウヤとイチヤイチャ出来てません…これは由々しき事態です!」

私は部屋で一人そう呟く。

いえまあ、ソウヤの状態を考えるとこれは仕方ないのですが…やっぱり寂しいものは寂しいです。

「何か、良い方法があれば良いんですが…あ、そういうええ!」

ふと、エンゲージのスカイトーンが気になり手に取る。

ソウヤが別の世界へと向かった時にこのスカイトーンがソウヤの状況を教えてくれました。

もしかしたら、これを使えばソウヤの居るところにも行けるのでは!?

「少し試してみましようか…」

そして、私はソウヤが眠っている部屋へと歩き出した。

「ソウヤ、入りますよ…」

そう言いながら、部屋へと入る。

ソウヤは未だに眠っているままで、私はソウヤの側に寄る。

そうして、エンゲージのスカイトーンを握りながらソウヤの手を握る。

「ソウヤ…」

そう呟いていると、だんだん意識が遠のいていく。

そうして、私は意識を手放した。

『…！ソウヤ様！侵入者です！』

いつものようにエトと会話していると、いきなりエトが驚いたような声をあげる。

「侵入者…？一体誰が…嫌な気配は感じなかったけど…」

『ともかく警戒を！本来なら、ここに來れる存在はいません…最大級の警戒を』

エトにそう言われ、俺も警戒する。

「うわああ！落ちる！落ちてしまいます！」

あれ？聞き覚えのある声だな…そうして、上を見上げるとソラが上から落ちてきていた。

「ソラ!? どうやってここに!?!」

「ソウヤ！会いたかったです！…後、すみません！受け止めてください！このままでは

地面に激突してしまいます!」

ソラが落ちてきているのを確認した時点で、俺はすでに動き出していたので、なんなくソラを受け止めることが出来た。

「ありがとうございます…ソウヤ」

「どういたしまして。…それにしても、ソラはどうやってここに?」

ソラを降ろしながらそう質問する。

「ソウヤに会いたくて、エンゲージのスカイトーンを持って、眠っているソウヤの所に行っただんです。そしたら、いつの間にか私も意識を失って、気づいたらここに…」

「つまり、エンゲージのスカイトーンの力でこっちに来たのか?あのスカイトーン、そんなことも出来るんだ…」

『…これは予想外ですね…ソウヤ様とソラ様の絆がとても強い証拠ではありますが、外の世界の人がこちらまで来れるとは思っていませんでした』

そう言うエトを見て、ソラが言葉を紡ぐ。

「ソウヤ…この人は誰ですか?浮気ですか?私というものがありませんが、この女に現を抜かしていたんですか?私のことが嫌いになったんですか?」

一瞬で、目のハイライトが行方不明になり、そんなことをソラはブツブツと呟いている。

「待て待て…前に、話した俺にプリンセスの力を託してくれた人の残留思念なんだよ、エトは。ここで、俺の話し相手になってくれたり、俺の体を守ってくれてるんだ」

俺の言葉を聞き、ソラはひとまず迷子になっていた目のハイライトを連れ戻し、まだ釈然としない表情をしながらも、とりあえずは納得してくれたようだ。

「…そうだったんですね。エトさんでしたか？ソウヤのことを守ってくれてありがとう
ございます」

『いえいえ、ソウヤ様のサポートをするのは私にとつては当たり前のことですから！ちなみに、エトという名前もソウヤ様が付けてくださったんですよ！ソウヤ様は本当に優しい方です』

「へえ…ソウヤが付けてくれたんですか…」

「ずっと残留思念って呼ぶわけにはいかないだろう？頼むから、そのハイライトが迷子になつている目はやめてくれ」

そんなことを言いながら、なんだか懐かしさを覚える。

なんか久しぶりにこういうソラを見た気がするな…俺はちよこちよこ外に出たりはしてるけど、そんな長い時間いるわけじゃないからな。

ソラには寂しい思いをさせてしまったな…エンゲージのスカイトーンがあればこうしてソラから会いにくることも出来るなら、少しでも長くソラとの時間を過ごしたい。

「ソラ」

そう名前を呼びながら、ソラを抱きしめる。

「ソウヤ!? どどど、どうしたんですか!? 急に抱きしめて…もちろん、すごく嬉しいですけど!」

「いや、ソラを抱きしめたくなくなってき…ごめんな。寂しい思いをさせて…心配させて」

「ソウヤ…ふふっ! 大丈夫ですよ…」

そう言いながら、ソラは俺を抱きしめ返す。

「私はソウヤにこうして会えただけで嬉しいです…ソウヤに自分から会いに行けることもわかりましたし、これからは毎日会いにきますね」

「毎日はキツくないか?」

「平気です! ソウヤに会えるなら…」

「そっか。…じゃあソラが来るのを楽しみにしてるよ! といっても、ここには何もないけどね…もちろん、こんな風に話したりは出来るけど」

「じゃあ、その日に何があったのかとか、色々とソウヤに話しますね! そしたら、きつと楽しいと思います!」

『あの…盛り上がっているとところ申し訳ないのですが、私のことを忘れないでください! さつきから空気だったの、悲しいんですけど!』

「いや、別にエトのことを忘れていたわけじゃないよ。ちょうどエトに聞こうと思つていたこともあつたし」

『なんだか釈然としませんが、今は良いです。…それで、聞きたいことは何ですか?』
「こうして、ここにソラが居ることに問題とかつてあるか? ソラが戻れなくなるとか…
外のソラに影響があつたりとか…」

俺が質問すると、エトは少し考えるような仕草をした後、言葉を紡いだ。

『…問題がないとは言えませぬ。そもそも外の世界の人がここに来ること自体がイレギュラーな事態です。短時間なら問題はないと思いますが…あまり長くここにいない方が良いでしょう』

「そうか…まあ、少しでもソラとの時間が作れるなら、悪くないか…ただ、ソラもこつちに来る時は気を付けてくれ」

「はい! ソウヤに会いに行く時は気を付けて行きますね!」

ソラは笑みを浮かべながら、そう言った。

『…どうやら、話は纏まったようですね…というわけで、ソラ様は今すぐに帰ることをオススメします! さあ早く!』

そう言いながら、エトは半ば強引にソラを押ししていく。

「えっ!? 私はまだソウヤと話したいです! ちょっと、押さないでください!…」

『はい。それではソラ様、またのお越しをお待ちしています』

「うわああ!今度は浮いてます!…あ、ソウヤ!また会いに行きますからね〜!」

そう言いながら、ソラは上に飛んでいき、そのまま外に帰って行った。

『ふう…脅威は去りました』

「脅威って…ソラはそんなんじゃないぞ…」

『いえ、脅威です…少なくとも私にとっては』

「そうなのか?よくわからないけど、ソラと仲良くね。…と、俺も一旦、外に行ってくるよ」

『むう…せっかくソウヤ様とゆっくり過ごさせていたのに…』

「戻ってきたら、またゆっくり話そう!」

そう言って、俺はソラを追って外へと出るのだった。

『むむ…やはりソラ様が一番の脅威ですね…まさか、私とソウヤ様の2人きりの空間を邪魔してくるとは…ソラ様はソウヤ様の恋人ですが、正妻の座は譲りませんよ!』

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ソラは自分の部屋に戻ったのかな?」

そうして、俺はソラの部屋の前まで行き、扉をノックする。

「ソラ、居る？」

俺がそう尋ねると同時に扉が勢いよく開かれ、ソラにそのまま部屋へと引きずり込まれる。

「ソウヤ！こんなに早く会えるなんて思いませんでした！」

そう言いながら、ソラは俺を強く抱きしめる。

「あはは…もつとソラと話したくてさ。俺も外に出てきちゃった」

「そうだったんですね…えへへ、嬉しいです！ソウヤも同じ気持ちで…」

そう言って、ソラは笑みを浮かべる。

「ソウヤ…今日は久しぶりにイチャイチャしましょうね！」

「うん、そうだな！そうしようか」

そう会話を交わし、俺とソラはそつとキスをするのだった。

あげはの氣遣いと壁画アート

「へえ…あげはさんがそんなことを…」

「はい！朝から豪華な朝食を作ってくれましたし、私とましろさんのお弁当も作ってくれました！このネイルもあげはさんがしてくれたんですよ！」

俺のところによつてきたソラは今日あったことを話してくれた。

あげはさんが色々とやってくれたことや、学校で何があったのか、エルの様子はどうかだったかといったような内容で、外の状況について知れるし、ソラが楽しそうに話していると、俺も嬉しくなってくる。

「ソウヤにもこのネイルを見せたくて来たんですよ！」

「うん。良いんじゃないかな？キレイなネイルだと思う！それにこれはパウダーフレグランスか？良い匂いがする」

「えへへ。氣づいてくれて嬉しいですよ！今日のこと、私は「アゲ」の何たるかを理解できました！」

「えっと、一応聞くけど、アゲとは一体…」

「それはですね…可愛いものや楽しいことで自分を元気にする。それが「アゲ」です！」

「なるほど…確かにそうかもしれないな」

「はい！きつとそうです！」

『はい、そこまで！ソラ様はそろそろ戻ってください。明日も学校でしょう？寝坊しないためにもそろそろ戻ることをオススメします』

エトは俺とソラの会話の途中でそう口にし、ソラに帰るように伝える。

「もう少しだけ！もう少しだけ、ソウヤと話をさせてください！」

『これはソラ様のためでもありませんから、早く戻ってください！』

「良いじゃないですか、もう少しぐらい…エトさんに決められる筋合いはありません」

『確かにそうかもしれませんが、以前にも伝えた通り、あまり長居しすぎたらどんな影響が出るかわかりません…もし、そのせいでソラ様が外に戻れなくなったら、ソウヤ様は後悔するでしょう。それはソラ様も望むところではないでしょう？』

「うっ…そう言われると、返す言葉ありませんね…わかりました。今日は戻ります…ソウヤ、また明日会いに行きますね！」

「ああ。また明日！」

「はい！」

そう言つて、笑みを浮かべてソラは帰って行った。

『ふう…まだソウヤ様と話したいと言われた時は焦りましたが、なんとか帰ってくれま

したね…』

「そういえば、本当に長時間ここに居ると、ソラに影響があるのか？」

『はい…もちろん現実とは言えませんが、用心しておくに越したことはないかと…まだわからないことばかりですからね』

「確かにそうだな…にしても、あげはさん大丈夫かな…ソラの話聞く限り、色々とお世話をしてきているみたいだけど、無理してなきや良いけど」

あげはさんは好きでやってくれるんだらうけど、色々とやって無茶しそうだ。

「明日、ちよつと確認しに行ってみるか」

『それが良いと思います。あげは様のこととも心配ですからね』

「うん、そうしよう！」

そうして、俺は明日あげはさんの様子を見に行くことを決め、休むことにするのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「よし！あげはさんより早く起きられたぞ」

「あれ？ツバサ君。思ったより早起きだね…おはよう」

「ソウヤ君！戻ってきたんだね！おはよう…でも、どうしてこんなに朝早く？」

「ソラからあげはさんのことを聞いてき…ちよつと心配で見に来たんだ」

「ソラさんから?」

「うん、まあね。と、今はそれよりもあげはさんの様子を…」

ツバサ君とそんな話をしながら近くの部屋に入ると、そこには机に

机に突つ伏したまま寝ているあげはさんの姿が目に入った。

「うわあ〜!」

「ツバサ君は大げさだな…あげはさん、起きて下さい」

そう言いながら、寝ているあげはさんを揺する。

「う〜ん…やばっ!寝ちゃった!」

「なんだ寝てただけか…ソウヤ君も気づいていたなら、教えてくれれば良いのに」

「いや、普通に気づくかなって…うん?あげはさん、何か作業中だったの?課題かな…も

しかして、ずつとこここで?」

「えっ?…エヘツ!」

「エヘツ!…じゃないよ!あげはさん、ソラから話を聞いていただけだけど、思ったより頑張りすぎだな…」

まあ、あげはさんは好きでやっていることだと言いつうではあるけど、流石に無理をして倒れたりしたら大変だ。

「ソウヤ君の言う通りですよ!ボク達のためにいろいろやってくれてるのはわかりま

す。でも、自分のことは自分で出来ますし、むしろ、あげはさんがボク達をもっと頼ってくれて良いんですよ！」

「俺は毎日いるわけじゃないけど、いる時ぐらいはあげはさんも頼ってよ」

俺達がそう言うのと、あげはさんが言葉を紡いだ。

「そこまで言うなら、頼っちゃおっかな〜」

「もちろん！俺達に出来ることなら…ね？」

そう言つて、俺はツバサ君にアイコンタクトする。

「はい！遠慮なく頼ってください！」

そうして、俺達はあげはさんの頼み事を聞くのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「うーん…上手く書けないな…」

あげはさんが俺達を連れてきた場所は、ソラシド保育園の皆が書いた壁画アートの前だった。

あげはさんの頼みはこの壁画アートの空白の部分を一緒に書いてほしいとのこと、俺もそれに協力しているわけなんだけど…これがどうにも上手くいかない。

「私はツバサ君のように上手く絵が書けないみたい…」

ちなみに今回も女装状態である。

今回の服装は長い薄紫色のウィッグに黒のベレー帽を被り、黒のチョーカー、肩出しの黒い長袖に、チエツクのミニスカートに黒のニーハイソックス、そして黒のブーツという恰好だ。

万が一にも知り合いに会った時のためにもこれは仕方ないとはいえ、やはり慣れないな。

「ソウヤ君…いや、今はソウナちゃんか。別に上手く書こうとしなくても良いんだよ。自分の思うままに自由にアゲてこ！それに、困ったら少年にアドバイスをしてもらえば良いと思うし」

「確かに…ツバサ君は絵を書くのが上手いもんね！良かったら、アドバイスとか教えてくれないかな？」

「えつと…その…」

何故かツバサ君は俺から視線を逸らした。

「ツバサ君？どうかした？」

小首を傾げてそう尋ねると、ツバサ君は顔を赤くしながら言葉を紡いだ。

「その…ソウヤく…ソウナさんがとても魅力的に見えてしまつて…すみません」

その言葉に思わずポカンとしてしまう。

え？どういふこと？

「あはは！ソウナちゃん、女の子にしか見えないもんね！しかも仕草も女の子みたいだし、わかってても混乱しちゃうよね…私も最近、ソウヤ君って女の子だったっけ？と思う時があるもん」

「怖い冗談はやめてくださいよ…」

「ごめんごめん！でも、ソウナちゃんの演技力はすごいよね…役者さんになれるんじゃないかな？」

「役者さんですか…考えたこともなかったですね…少し考えてみようかな」

確かに正体がバレないように、女装したり、演技したりはしているし、意外と向いているのかもしれない。

まあ、そんな甘い世界じゃないだろうけど、選択肢の一つとしてはありかもしれない。

そんなことを考えていると、あげはさんがツバサ君に尋ねる。

「それにしても、少年、本当に絵が上手いよね！」

「父さんが絵描きなので、これくらいは」

「すごいよね！師匠って呼んで良い？」

「や、やめてくださいよ！ソウナさん！」

「ふふっ！ねえ、少年…少年のスカイランドのご両親ってどんな人？」

「うーん…2人ともいつまで経ってもボクを子ども扱いですよ…何かと構ってくるから

鬱陶しくて」

そう答えるツバサ君を見て、これが思春期というやつか……などと思う。

俺はそこまで反抗期とかそういうのがなかったから。

「あげはさんの世話焼きな感じ、誰かに似てると思つたら、父さん、母さんに似てるんだ」
「あはは……まあ、お母さんっぽいってのは確かにそう思うかも……それにしても、あげはさんはどうしてこんなに私達に世話を焼いてくれるんですか？」

「それは……ソウナちゃん風に言うなら放つておけないから、かな？ 両親と離れ離れで暮らしてる皆を見ると、いろいろとやってあげたくなっちゃうというか。……皆がいくつぱい頑張ってるの知ってるし」

「なるほど……」

そんな会話を交わしていると、エルが手に絵の具をつけ、壁画にペタつと手をつけた。

「「あっ！」」

「プリンセス！ダメですよ！」

「……いや、これはこれでアリなのでは？」

「そうだね！むしろ良いと思う！」

俺の言葉にあげはさんはそう返し、エルの手形に絵を付け加える。

「ほら、こうすればチューリップ！こっちはツバサ君。どう？」

「ツバサ君に關してはなんとも言えませんが、悪くないと思います」

「よし！エルちゃん、もっとお手々ぺたぺたしよ！」

「なら、私はエルがぺたぺたした後、それに付け加える形で絵を書きますね！これなら絵が苦手な私でもなんとかなりそうです」

「ぺた！って！ぺた！」

エルがノリノリで手をぺたぺたさせていき、俺はそれに付け加える形で絵を描いていく。

そうして、俺達は壁画アートを描いていくのだった。

バッタモンダーの襲撃と怪しい影

「出来たー！」

ついに壁画アートを描き終わり、俺はそう口にする。

皆で描いた壁画アートはとても良い仕上がりがだった。

「ありがとね！3人共！おかげで最高の壁画が出来たよ！」

「まあ、私はあんまり力になれなかった気がするけど……」

「そんなことないよ！ソウナちゃんはエルちゃんの絵に合わせて、いっぱい工夫してたしー！」

「あはは……ありがとうございます」

俺がそうお礼を口にする、ツバサ君が言葉を続ける。

「でも、本当に良かったんですか？ボクとソウナさん、プリンセスが交ざっちゃって……」
「だからいいんじゃない！相乗効果ってやつ？私1人で書くより、もつとずつと楽しい絵になったよー！」

「そうですね」

そんな会話を交わしていると、嫌な気配を感じた。

これはバッタモンダーか…性懲りもなくまた来たな。

そうして、視線を後ろに向けてると、そこにはバッタモンダーが居た。

「バッタモンダー…!」

「ああ…なんて可哀想なんだ…せつかく1人増えたのに、ここにいるのは3人だけなんてね」

「今、良いところなんだから、邪魔しないで欲しいんですが…」

「そんなにつれないことを言わないでくれよ」

俺の言葉にバッタモンダーがそんな気持ち悪いことを言う。

「そういうのは良いので、早くしてください」

「まったくせつかちだな…カモン!アンダーグエナジー!」

バッタモンダーにより、ごみ箱のランボーグが出現した。

「いきましよう!ツバサ君、あげはさん!」

「はい! (うん!)」

そうして、俺達はプリキュアに変身する。

「天高くひろがる勇氣！キュアウイング！」

「アゲてひろがるワンダホー！キュアバタフライ！」

「静寂ひろがる夜のとばり！キュアナイト！」

「レディ・ゴー！」

「ひろがるスカイ！プリキュア！」

そうして、プリキュアへと変身した俺達はランボーグとの戦闘を開始しようとする。

「悲しいけれど、戦いとは時に非情なもの。あとの2人が来ないうちに決着をつけさせてもらおうよ」

「なくんか、カツコつけてるけどさ…要は5人相手じゃ勝つ自信がないってことじゃん
！」

「ですね」

「自信がどうかじゃねえし！こういうのは頭を使った作戦っていうんだよ！」

バツタモンダーが怒りながら、そんなことを口にする。

煽り耐性が低いやつだ…まあ、分断して各個撃破っていうのは作戦としてはありなん
だけでも。

そんなことを思っていると、ランボーグがごみの形をしたミサイルのようなものを
放ってくる。

「ごみをポイ捨てしちゃダメだろー！」

「ごみはごみ箱へ！ポイー！」

ウイングとバタフライはその攻撃を防いでいき、バタフライが弾き飛ばした攻撃はランボーグに命中し、ランボーグがよろめく。

俺はその隙を逃さずキックした。

ランボーグが後退り、俺は追撃をしようと動くが、ふとランボーグやバッタモンダーとは別の存在を感じ、とっさに剣を構える。

それと同時に漆黒のエネルギー弾が飛んでくる。

俺はそれを剣で弾く。

「え!?今のなにー！」

「ナイト、大丈夫ですか?」

バタフライとウイングが俺にそう声を掛けてくれた。

「大丈夫です。心配してくれてありがとう…先ほどの襲撃者は私に任せて、ウイングとバタフライはランボーグを！バッタモンダーのことです、隙が出来たらチャンスとばかりに攻めてくるはずですから」

「…わかった！ナイトも気を付けて！」

「ランボーグはボク達に任せて！」

「はい！よろしくお願いします！」

そうして、俺達はそれぞれの敵の元に向かう。

2人のことも心配だし、2人の様子も見ながら戦うべきかと、見つけた！

「そー！」

気配を感じたところに向かって、槍を投げつける。

「まさか、こんなにあっさり見つかるとは…」

そう言いながら姿を現したのは、全身にボロボロのローブを身に纏っている存在だった。

声もノイズが混じったような声で、性別もわからず、そもそもどんな存在であるのかもわからない。

「あなたは何者ですか？」

「そうだな…今の私は何者でもない。アンノウンとも呼ぶが良い」

「アンノウン…あなたはバツタモンダーの仲間ですか？」

「仲間？冗談じゃない。あんなやつと一緒にするな…私はただ、私を2度も打倒したあの女を倒すためにここに居る」

「あの女…？」

「無駄話はここまでだ。貴様に恨みはないが、ここで果ててもらおう」

そうやって、アンノウンは俺に攻撃を仕掛けてくる。

アンノウンが攻撃してきたのは死神が使うような鎌で、俺はそれを後ろに飛んで回避し、剣で攻撃を仕掛ける。

アンノウンはそれをバックステップで回避する。

そして、続け様に鎌を横薙ぎに払って仕掛けてくる。

俺はそれを剣で防ぎつつ、その衝撃を利用し宙に浮かび、そのまま槍を左手に出現させ、アンノウンに投げつけた。

その槍はアンノウンの腕に刺さり、アンノウンは武器を落とす。

「ぐっ……」

俺は相手が落とした武器を蹴り飛ばし、遠くへと飛ばした。

「なるほど……なかなかやるな……だが」

そう言うと同時にさっき槍が刺さって受けた傷が回復した。

「再生した!?!…厄介ですね……」

そう言いながら、チラリとランボーグと戦っている2人に視線を移す。

見たところ、ランボーグがみんなで創り上げた壁画アートを攻撃を集中していて、2人はそれを防いでいる。

この前は保育園、今回は壁画アートを狙うとか……どこまでも卑怯なやつだ。

いや、卑怯なんて上等なものじゃないな。

「余所見するとは随分余裕だな！」

そうして、俺に斬りかかってきたアンノウンの攻撃を防ぎつつ、そのまま回し蹴りをして、後退させた。

「私の相手など、余所見しながらで十分というのか…気に食わない…あの女もそうだ…私のことなど歯牙にもかけず、常に自国の民のことを考えながら私と戦っていた。私との戦いなど片手間に済ませられると言わんばかりに！」

「…別にそんなことは思っていないません。私はあちらにも注意を向けなければならない…ただ、それだけです」

「ぐっ…：貴様あ！貴様を見てると、あの女のことかチラつく…そのもの言いも、私に対する態度も…！」

そう言つて、邪悪なエネルギーを解放しながら、こちらに攻撃を仕掛けてくる。

さつきよりも速い…！

荒々しく剣を振るアンノウンの攻撃を捌きながら、戦い方を思考する。

驚異的な回復能力…：そして、先程より出力が上がっていることから察するに、まだ全力ではないだろう…：このまま戦つても埒が明かない。

相手の回復能力を上回る強力な攻撃を叩き込むしかないか。

そんなことを考えていると、赤いスカイトーンが輝きを放つ。

俺は距離をとり、そのスカイトーンを手に取る。

「これは……サンライズのスカイトーン！これなら……力を借りるよ！あさひ！」

そうして、俺はサンライズのスカイトーンを起動する。

「プリキュア！ミライレコード！ミライコネクト！ナイトサンライズ！」

スカイミラーージュにサンライズのスカイトーンをセットする。

すると、青みのかかった長い黒髪に赤いアクセントが入り、ハーフアップで纏められ、服装が赤いドレスアーマーに変化し、左肩から白いマントが追加された。

そうして、俺はサンライズスタイルへとスタイルチェンジを完了した。

「姿が変わった……？それに……この力の波長……貴様！まさか貴様があプリンセスか！見つけたぞ！私はこの時を待っていた！」

「私がプリンセス……？」

その言葉が引つ掛かり、アンノウンの発言を思い起こす。

アンノウンを2度も打倒した……自国の民のことを考えながらの戦い……そして、俺をプ

リンセスと言った…まさか！

…ともかく今はこいつを倒すことだけに集中しよう。

そうして、サンライズスタイルの炎の剣を右手に、そして左手にいつもの剣を手にする。

「プリンセス！あの時の雪辱を果たさせてもらおう！」

「私はそのプリンセスじゃない！後、仮にそうだとしてもしつこいよ！」

そんな風に対話しながら、剣戟が飛び交う。

そして、しばらく剣とか剣がぶつかり合う。

そうしている内に、アンノウンが剣を振り上げる。

俺はそれに合わせて、左手の剣でアンノウンの剣を防ぎ、サンライズスタイルの力を解放する。

「バーストタイム」

サンライズスタイルにはバーストタイムという短時間、出力を3倍に引き上げる能力がある。

だが、体力の消耗が激しいから連発できるわけじゃない。

でも、今の状況は使い時だ。

そうして、バーストタイムを発動し、右手の炎の剣で回転斬りをする。

「ぐうっ！」

そして、すかさず連続で攻撃をする。

両手の剣で高速で何度も何度も斬りつける。

相手に休む暇は与えない。

そうして、何度か斬りつけた後、トドメの一撃を放つ。

「ヒーローガール！ ナイトエクスプロージョン！」

右手の剣の炎の出力を上げていき、それと同時に夜を思わせる黒いオーラを纏わせる。

そして、それを突き出し炎の力が宿る特大のエネルギー砲を発射した。

そのエネルギー砲がアンノウンに命中し、浄化されていく。

だが、その途中で小さな黒い玉のようなものがどこかに飛んでいく。

「くっ……このままでは終わらせんぞ！ プリンセス……首を洗って待っている！」

そうして、アンノウンはどこかへ消えていった。

「……ふう。ひとまず安心ですね……」

サンライズスタイルを解き、俺はひと息つく。

『ソウヤ様……おそらくアンノウンは……』

「うん。エトがかつて戦ったアンダーグ帝国のトップだろうね」

『ええ。まさか、復活していたとは…』

「何度もしつこいやつだ…」

『すみません…ソウヤ様にまた背負わせてしまって』

「大丈夫だよ！さあ、2人のところに行こう！」

『…はい！』

そうして、俺はウイングとバタフライの元へと向かうのだった。

ウィングとバタフライの新たな力

アンノウンを撤退させた俺は、ウィングとバタフライの元に駆けつける。

すると、バタフライが蝶型のシールドでランボウグの攻撃を防いでいるが、そのシールドは壊れかかっている、それをバタフライが必死に耐えているのが目に入る。

「めくっ!! ふええええ…」

エルの悲しそうな叫びも聞こえてきて、状況があまり良くないことを理解した。

「そっだよね…エルちゃんだつて守りたいよね…正直、バリアーはこれ以上もちそうにない…私が隙を作るから、なんとかか…」

「大丈夫です! ボクを頼ってください!」

「私のことも頼ってください!」

「ナイト!」

俺の登場に安心したような様子で、2人は声を掛けてくれた。

「お待たせしました! 私もいるので、遠慮なく頼ってください!」

「…じゃあ、2人に頼っちゃおっかな!」

「はい!」

そうして、俺とウィングはランボーグに向き直る。

「力比べの続きはボクらが引き受ける！」

そう言つて、ウィングはランボーグを殴り飛ばすようにシールドの内側から右ストリートを浴びせる。

俺もそれに合わせて、殴り掛かると、ランボーグが大きく後退する。

よし！形勢逆転だ！

そして、俺達はエルに視線を移し、言葉を紡ぐ。

「エル、もう大丈夫だよ！」

「ボク達と一緒に守りましょう！プリンセス！」

「泣くのはもうおしまい！ここからアゲてくよ！エルちゃん！」

「アゲ！……ぷりきゅあ〜！」

そうして、エルが新たなスカイトーンを出現させ、俺達に飛ばす。

ウィングとバタフライには2人の色が混ざったスカイトーン、俺には2人と俺の3人の色が混ざったスカイトーンが飛んできた。

これは…あさひ達の世界でウィングとバタフライと一緒に放った技のスカイトーンと同じ…エルはあの場になかったはずだけど、俺の記憶と結びついて、このスカイトーンが出来たのか？

まあ、なんであれ、あの技、ダウンバースト・インパクトは体力の消耗が激しいから、今の状態で使うには俺は体力を消耗しすぎている。

ここは2人の新たな力を見せてもらおう。

「これって……!」

「ボク達もスカイとプリズムみたいに……!」

「そうかも!それに、ナイトも新しいスカイトーンを持つてるんだね!」

「はい。ただ、おそらくこれは私が別世界の2人と一緒に放った技のスカイトーンです

…体力の消耗が激しいので、今使うのはオススメできませんね」

バタフライの質問に俺はそう答える。

「そっか……よし!じゃあここは私とウィングに任せて!」

そう言いながら、バタフライはウィングはスカイとプリズムが、アップ・ドラフト・シャイニングを放つ時と同じ動きをする。

「アップ・ドラフト・シャイニング!」

2人はそう言い放つが、出てきたのは絵の具のパレットのようなものだった。

「わっ!」

「な、何ですか?これ……」

「あつ!これ、絵の具のパレットじゃない?……ってことはお絵描きっ!」

「…なるほど、なんとなくわかりました」

「えっ！本当に？教えて！ナイト！」

「これは…と、その前にランボーグをなんとかしないとイケませんね」

「わかった！ランボーグはボクに任せて！ハアッ！」

そうして、ウイングが襲いかかってきたランボーグに向かっていく。

急がないと！

「手短に言います。これはいくつかの色を合わせることで、様々な支援を行えるアイテムだと思えます！なんでも良いので色を混ぜ合わせてみてください！」

「わかった！やってみる！」

そうして、バタフライは行動を開始した。

パレットに新しいスカイトーンをセットし、ミラージュペンを筆のように使い、色を混ぜ合わせていく。

「2つの色を一つに！レッド！ホワイト！」

パレットにある赤色と白色を順番にタッチしていき、スカイトーンをセットした部分で色を混ぜていく。

「ハアッ！」

すると、ウイングが強化されたのか、ウイングがランボーグをそのまま持ち上げてい

た。

「えっ?」

「はあ!」

ウィングとバツタモンダーの驚いたような声が響く。

「ちよっ、どうしたらいいんですか?何なんですか?これ!」

「みつくちゅばえつと!」

ウィングの言葉にエルが笑顔でそう言う。

なるほど…これはミックスパレットって言うのか。

「ああ、そういう名前…じゃなくて!」

「やった!ナイトの言った通り、ミックスパレットはみんなをパワーアップ出来るんだよ!」

「そういうことなら…えいつ!」

そうしてウィングはランボーグを地面に投げつけた。

ミックスパレットのバフはすごいな…色々使い勝手も良さそうだし、便利そうだ。

そんなことを思っていると、スカイとプリズムもこちらに向かってきているのを感じた。

よし、後はランボーグを浄化するだけだ!

そう考えている内に、ウイングは体勢を整えて正面からぶつかってきていたであろうランボーグをパンチで吹き飛ばしていた。

「バタフライ！」

「うん！すべての色を一つに！ミックスパレット！レッド！イエロー！ブルー！ホワイト！まぜまぜカラーチャージ！」

バタフライがミックスパレットのすべての色を順番にタッチしていき、それを混ぜていくと、虹色のエネルギーが発生し、それがウイングに流れ込む。

そして、ウイングがフェニックスの姿になり、その上にバタフライが乗り込み、ランボーグに突っ込んでいく。

「プリキュア！タイタニック・レインボー！」

そして、ランボーグの上に辿り着く。

「アタック！」

すると、フェニックスの姿をしたウイングが巨大な虹色のプニバードへと姿を変え、そのままランボーグにヒップドロップした。

「スミキッタ〜」

「ミラーパッド！OK！」

ランボーグが浄化され、発生したキラキラエナジーを先程合流していたスカイが回収

し、戦闘が終了した。

「やりましたけど…もつとかつこいい技が良かったです…途中まではいい感じだったのに」

「いいじゃん！これが私達のスタイルってことで！」

「そうですね！あれはあれで良かったと思いますよ！」

「ナイトまで!？」

「チツ！でかけりやいいってもんじゃねえんだよ！バツタモンモン！」

そうして、バツタモンダーは姿を消した。

それにしても…アンノウンはどうやって復活したんだ？

誰かが復活させたのか？それとも自力で？

…なんにせよ、今まで以上に警戒の必要がありそうだ。

俺はそんなことを思いながら、変身を解くのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ソウヤ、どうかしましたか？」

戦いを終え、帰路についている途中、ソラがそんなことを口にする。

「実は、ランボーグと戦っている途中で、アンノウンっていうエトが昔戦ったアンダーグ帝国のトップが復活していて、戦うことになったんです」

「えっ!? あれってそういうことだったの!? というか、エトって誰?」

「そういえば、あげはさん達にはまだ説明してませんでした: エトは前に話した残留思念の名前です。私が名付けました」

「そうなんだ。でも、ソウナちゃんの話だとそのランボーグのトップはエトちゃんに倒されたんだよね?なんで復活したの?」

「そこまでは: ただ、これからもアンノウンは私を狙ってくるでしょう: 戦いはどんどん激しくなってくる: 今まで以上に警戒しておいた方が良いと思います」

「そっか: 大丈夫! 何かあったら私達を頼ってよ! 私もこれからはみんなに頼っちゃうからさー!」

「あげはちゃんの言う通りだよ! 私達を頼ってくれて良いからね!」

「私も必ずソウナの力になりますよ!」

「ボクも、ソウナさんの力になるからね!」

「みんな: : : ありがとう! 困ったことがあったら遠慮なく頼らせてもらおうね!」

俺の言葉にみんなは笑みを浮かべて、頷いた。

そうして、俺は頼りになるみんなと共に家に帰るのだった。

「ついに見つけたぞ！プリンセス！今回は敗北してしまっただが、今度こそ、この手で！」
アンノウンは誰もいない暗黒の空間でそう叫ぶ。

「…だが、今のままではあのプリンセスを倒すことは出来ない…しばらくは力を蓄える
としよう」

プリンセスがプリキュアになる…この事態はアンノウンにとつても想定外だった。

しかも、プリキュアとしての実力も高い。仲間のことを気にしながらの戦いであり、
しかも瞬時にアンノウンを倒す方法にたどり着き、それを実行した上で今回の戦いに勝
利したのだ。

「プリンセスを倒すにはそれ相応の準備が必要だな…ククツ！首を洗って待っているが
いい！プリンセス！」

暗黒の空間でアンノウンは一人、ほくそ笑むのだった。

再びスカイランドへ

『ソウヤ様…』

いつも通り、精神世界で過ごしてしているとエトが重苦しく声を出した。

「エト？どうかしたのか？なんか深刻そうな顔をしてるけど」

『はい…アンノウンのことが気になってしましまして…』

「なるほどな…そりやあ気になるよな」

『私が決着をつけないといけなかったのに…ソウヤ様にまた負担をかけてしまうことに…』

そう言いながら、エトは悲しそうな顔をする。

「エト、お前のせいじゃないよ…そもそもあの時、アンノウンは完全に倒されたはずなんだから？」

『はい…でも』

「復活した…確かにそれはそうだ。でも、復活したっていうなら、エトはあの時、アンノウンをちゃんと倒しきったってことだ…その後に復活したなら、それはエトのせいじゃない」

『ソウヤ様…あなたは本当に優しい人ですね』

「そうかな？ 誰でも今のエトを見たら同じ言葉を掛けるさ」

『ふふっ！ ありがとうございます。…よし！ 私、決めました！ アンノウンを今度こそ倒します！ 二度と復活なんて出来ないようにボコボコにしてやります！』

「ああ！ その意気だ！」

『はい！ 頑張ります！ ソウヤ様も協力してくださいね！』

「もちろん！ 俺達なら出来るさ！」

そうして、俺とエトは笑い合った。

その時、眩い光が俺達を覆い、その光が消えると同時に俺達の間にはスカイトーンが出現した。

『これはスカイトーン!? 今回は私、創り出してませんよ!?!』

「それならなんでスカイトーンが?…まあ、今は良いか。これはきつと俺とエトの絆の証だ」

『そうですね!…私とソウヤ様の絆の証…』

エトが嬉しそうにそう口にする。

そんなエトを見ると、こちらまで嬉しくなってくる。

「そのスカイトーンはエトが持ってたよ」

『私ですか!? 良いんですか?』

「もちろん! エトに持っていてほしいんだ」

『ありがとうございます…! 大切にしますね!』

「うん! そうしてくれると嬉しいな」

俺の言葉にエトは頷き、スカイトーンを大切に握りしめていた。

「それじゃあ、俺は一旦外に行ってくるよ!」

『はい! 気を付けて行ってくださいね! …行ってらっしゃい!』

「行ってきます!」

そうして、俺は外の世界へと向かうのだった。

『ソウヤ様との絆の証…なんてすばらしい響きなんでしょう! 嬉しくて小躍りしてしま
いそうです…本当に大切にしなければ』

／／／／／／／／／／／／／／／／

「よつと! さて、みんなはどうしてるかな?」

そうして、家の中を歩いていると、ティータイム中のましろさんを見つけた。

「ましろさん、おはよう」

「ソウヤ君! おはよう!」

「珍しいね。みんながないなんて」

「うん。ソラちゃんは朝のランニングだし、ツバサ君は飛行機を見に行つてて…あげはちゃんは最近『Pretty Holiday』のアルバイトを始めたみたいで、そこに行つてるよ」

「みんな、用事があるんだな…あれ？ヨヨさんは？」

「おばあちゃんは乗馬クラブに行つてるよ」

「乗馬クラブ!?なんとというか、上流階級の趣味つて感じだな…」

「あはは…確かにそうかもね。ソウヤ君も紅茶飲む？」

「うん、ありがとう。じゃあ淹れてもらつて良いかな？」

「うん！待つてて！今淹れるから」

そう言いながら、ましろさんは俺に紅茶を淹れてくれた。

「ありがとう。ましろさん」

「どういたしまして！」

みんながないと静かだな…まあ、こういう時間もたまには悪くないか。

さて、今日はどうしようかな…そういえば、姉さんと連絡取つてないな…久しぶりに連絡してみよう。

「ましろさん、俺、ミラーパッドでちよつと姉さんに連絡してきても良いかな？」

「うん！大丈夫だよ！エルちゃんのお世話は任せて！」

「ありがとう。それじゃあ連絡してくるよ」

そう伝えて、俺は姉さんに連絡しに向かうのだった。

自分の部屋に戻った俺はミラーパッドを起動し、姉さんと連絡を取ろうとする。

しばらく待っていると、姉さんの姿がミラーパッドに映しだされた。

『うん？誰から…っ！ソウヤか！本当にソウヤなんだな？』

「正真正銘、俺だよ。久しぶり、姉さん」

『ああ、久しぶりだな！ソウヤが精神体で出現したとは聞いていたが、本当だったんだな

…調子はどうだ？どこか悪いところはないか？』

「大丈夫。心配してくれてありがとう」

『そうか、良かった…！』

俺の言葉に姉さんは安心したように笑みを浮かべる。

「姉さんの方こそ大丈夫？疲れているように見えるけど…」

『ソウヤにはわかってしまうか…』

「まあ、姉弟だし、それぐらいはね」

『お前には敵わないな…実は、ここ最近、アンダーグ帝国について調べていたのだが、調査していくうちにスカイランドとアンダーグ帝国は光と影のような関係であり、大昔に争って以降、交わることなく過ごしてきたということがわかった』

「大昔の争い…」

多分、エトとアンノウンの戦った時のことだろう…その戦い以降、交わることなく過ごしてきたのに、どうして今になって、スカイランドに攻めてきたんだ？

『…そして、その時の戦いの跡地らしきものを見つけたんだ』

「戦いの跡地？」

『ああ。ちょうど今から調査に行こうと思っていたんだ』

姉さんの言葉に少し考える。

エトとアンノウンの戦いの跡地か…俺も調査に行けばアンノウンやアンダーグ帝国についてわかるかもしれないな。

「姉さん…その調査、俺もついて行って良いかな？」

『それは構わないが…むしろ、来てくれるなら大歓迎だ！』

「あはは…よし、それじゃあついていくよ！そっちに行くから待ってて！」

『ああ！待ってる！』

嬉しそうな姉さんの笑顔を見た後、俺は通信を切り、スカイランドに行くために行動を開始する。

「エト、もしかして今の俺の状態ならスカイランドに行けたりする?」

『おそらく可能だと思います。今から向かいますか?』

「うん。ヨヨさんを待つてトンネルを開いてもらうのも良いんだけど、行けるなら行っちゃった方が良いかと思つてさ」

『そうしましょうか! おそらく私がかつて戦つたであろう場所…そこにはアンノウンが復活した原因もあるかもしれない』

「わかつた。ましろさんに伝えてから向かおう」

そうして、俺はましろさんにスカイランドに行くことを伝えに向かう。

「ましろさん」

「あ! ソウヤ君! もう連絡は良いの?」

「うん。それで今からスカイランドに向かうことになってさ…ソラ達が帰ってきたら、伝えておいてくれるか?」

「わかつた! 伝えておくね!」

「よんで〜!」

エルが本をましろさんに差し出しながら、そう口にする。

「エル、さすがに本が多くないか？まあ、絵本がそれだけ大好きってことか…ましろさんもあまり無理し過ぎないでね」

「大丈夫だよ！心配してくれてありがとう！よし、こうなったらとことんまで読んじゃうよ」

「あはは…それじゃあ行ってくるね。ましろさん、エル」

「行つてらっしゃい！」

「にーに…てらっしゃい！」

俺は2人の言葉を聞いた後、部屋に戻り、支度を済ませた後、そのままスカイランドに向かうのだった。

探索

「えっ!? ソウヤがスカイランドに!? どうしてそんなことに?」

ランニングが終わって家に戻ってきた私は、ましろさんからソウヤがスカイランドへ向かったと聞かされ、驚きの声を上げてしまう。

「うーん… 私も詳しい事情は聞いてなかったから、わからないけど… ソウヤ君はシャララ隊長と連絡してたから、シャララ隊長の用事でスカイランドに行ったんじゃないかな?」

「シャララ隊長の用事…」

確かに、シャララ隊長だってソウヤのことを心配していましたし、久しぶりに会いたくもなりますよね… 姉弟水入らずの時間を邪魔するわけにもいきませんね。

「どんな用事なのかは気になりますが、ソウヤとシャララ隊長の時間を邪魔するわけにもいきませんね…」

「そうだね… 久しぶりに家族で過ごさせてあげよう」

「はい! 戻ってきたら、ソウヤに今日あったことを聞きましょうか」

「そうしよっか!」

そんな風にましろさんと話しながら、私はソウヤから聞く話を楽しみにするのでした。



「ここが、戦いの跡地か…」

「ああ。私も初めて来る場所だ」

姉さんと一緒にエトとアンノウンの戦いの跡地にやってきたのだが、この場所は想像以上にボロボロだった。

まあ、よく考えればかなり昔の戦いの跡地だし、当然だ。

むしろ、こうして現存しているだけでも奇跡だろう。

「ところで、姉さん…いつまで腕に抱きついてるの?」

「すまない。こうしていないとソウヤがどこかに行ってしまうそうで怖いんだ…あんな思いは二度とごめんだ」

「…そっか。なら、姉さんの気の済むまでこのままで良いよ」

「ありがとう」

姉さんのそんな言葉を聞きながら、跡地を探索する。

辺りは当時の戦いの激しさを物語るように、建造物のようなものが倒壊していたり、あちこちにクレーターの跡が残っていた。

『エト、ここで間違いない?』

『はい…間違いありません。ここは私とアンノウンが戦った場所です』

『そつか…ちなみにこの跡地にはなにかすごいエネルギーが眠っていたりとかする?』

『いえ…特にそういったものはなかったはずですよ。この跡地に地下は存在してはいませんが』

『地下?…なるほどな。なにかあるとしたらそこか』

『おそらく…ですが、危険だと思います…調べる際は慎重に』

『了解』

エトと心の中で会話しつつ、これからどうするか思考を働かせる。

「ソウヤ? 難しい顔をしているが、どうかしたか?」

「いや、これだけこの場所がボロボロになるって、どんな激しい戦いがあつたんだろうと
思ってます」

「…本当にそれだけか? 私になにか隠していることがあるんじゃないか?」

「…わかつちやうか…」

「当然だ、私はお前の姉だからな。それぐらいはわかるさ」

「そつか…流星は姉さんだな。…実はこの下には別の跡地があるんじゃないかと思っ
てさ」

「この下に別の跡地が？」

「そ。俺の中のプリキュアの力がそう言ってるというか…まあ、何を言っているかわからないとは思うけどさ」

「ソウヤの中のプリキュアの力が…ソウヤがそう言うなら、そうなんだろう。…どうする？調べてみるか？」

「そうだね…調べてみるべきだと思う。ただ、一応念のため、俺はプリキュアに変身しなくよ。だから、一旦離れて、姉さん」

「…わかった」

渋々といった様子で姉さんは腕から離れた。

それを確認し、俺はプリキュアへと変身した。

「静寂ひろがる夜のとばり！キュアナイト！」

「…前から気になっていたのだが、どうしてソウヤはプリキュアになると女の子になるんだ？」

「…それは俺が一番気になつてる…まあ、もう慣れたものだけどさ。姉さんも周囲の警戒をよろしくね」

「ああ、もちろんだ」

そうして、姉さんは剣を構えて周囲を警戒する。

俺はエトの案内に従い、地下への入口を見つけ、中に入る。

そうして中に入ると、上の跡地と同じぐらいの広さの跡地があり、ここもボロボロだった。

だが、それ以上に、俺はこの場所の嫌な気配を警戒する。

「…ここ、すごい嫌な気配で満ちてるな…アンダーグエナジーが蔓延してるのか?」

「私ですら、この異様な空気を感じ取れる…ここは一体なんだ?」

「…アンダーグエナジーの溜まり場? ってことなのか?」

「…なんにせよ、対処が必要だろう。ここの探索を開始しよう」

「うん、そうしよう」

そうして探索を開始しようとすると、何者かの声が響く。

「まさかここまで来るとは、驚いたぞプリンセスよ」

その何者かは黒い影として姿を見せた。

「アンノウン!? どうしてここに?」

「私はアンノウン本体ではない…言うなれば、アンノウンにリソースを供給する装置のようなものだ。故に、こんなことも出来る」

アンノウンのリソース供給装置だと言う黒い影は、ランボーグを複数体出現させた。

「ランボーグ?!しかも複数体…リソース供給装置…つまり、アンダーグエナジーを大量に生成出来る…厄介ですね」

「ああ。だがやるしかない!」

そうして俺達はランボーグ達との戦闘を開始する。

姉さんと俺は2人で連携し、次々とランボーグを倒していく。

だが、倒しても倒しても、次から次へとランボーグが出現してくる。

「…っ!キリがない!」

「本当に厄介だな…」

どうする?このまま戦ってもキリがない…待てよ?あいつは自分のことをリソース供給装置だと言った…つまり、リソース供給装置であるあの存在を倒せば!

「姉さん…ランボーグ達を引き付けてもらって良いかな?」

「わかった!任せておけ!」

そう言つて、姉さんはランボーグの群れに突撃していき、ランボーグ達を引き付ける。

「よし!今のうちに…ミライコネクト!ナイトサンライズ!」

そして、俺はサンライズスタイルに変身し、姉さんが引き付けてくれたランボーグ達に向かい、浄化技を放つ。

「ヒーローガール！ ナイトエクスプロージョン！」

夜を思わせる黒のエネルギーを纏った特大の炎の爆発がランボーグ達を包み、浄化していく。

「ぐうっ！」

ランボーグ達が浄化されたことで、リソース供給装置もダメージを受けたのか、少しだけ怯んだ。

「バーストタイム」

すかさずバーストタイムを発動し、リソース供給装置に浄化の力を宿した炎の剣で斬りかかる。

そして、炎の剣が直撃し、リソース供給装置が浄化されていく。

「くくっ！ 良いだろう…この私はここでおとなしく消えるでしょう…だが、用心しろプリンセス。本体の私はこうしている間にも、貴様を倒す準備を進めているぞ」

「私を倒す準備…」

最後に、リソース供給装置はそう告げて消え去っていった。

すると、辺りの嫌な気配はすべて消え去り、澄み切った空気が広がった。

『ソウヤ様を倒す準備：アンノウンは一体何を企んでいるんでしょうか…』

『それはわからないけど、警戒はしておかないとだな…』

『そうですね…それにしても、結局アンノウンが復活した理由はわからずじまいでしたね…』

『そうだな…一応、ある程度予測は立てられるけど、確証はないな』

そう心の中でエトに言いながら、俺は変身を解いた。

「ソウヤ！無事か！」

「うん。姉さんの方こそ大丈夫？」

「私は大丈夫だ…心配してくれてありがとう。それと、すまない…私の調査に付き合っただばかりに危険な目に合わせてしまった」

「大丈夫。姉さんと久しぶりに話せて嬉しかったし…それに、こういう場所を探索するのはすごく楽しいしきー…あつ、そうか…これかもしれない…俺のやりたいこと」

「ソウヤ？どうかしたのか？」

「姉さん…俺、やりたいことが見つかったかもしれない！この調査に同行させてくれてありがとう！」

「そうか…ソウヤにとって良い経験になったなら良かった」

「うん、本当にありがとう！それじゃあ戻ろうか、姉さん」

「ああ…帰ろう…せっかくだ、青の護衛隊のみんなにも挨拶をしていったらどうだ？」
「そうだな…せっかくだし、みんなにも挨拶をして行こうかな」

そうして、俺は姉さんと腕を組みながら、その場所から立ち去るのだった。

追撃

「青の護衛隊のみんな、元気にしてるかな？」

「ああ、元気にしているぞ。皆、スカイランドの復興のために頑張っている」

「そっか…それなら良かった」

そんな会話を交わしながら、姉さんと一緒に青の護衛隊の本部へと向かう。

ベリイとアリリ副隊長に何かしら、お土産とか持って来たほうが良かったかな？

そんなことを考えていると、ふと誰かが俺達をつけているのに気がついた。

誰だ？アンノウンか？…いや、この感じは違うか。

「姉さん…」

「…ああ、わかっている。あちらの曲がり角に誘い込もう」

「了解」

そう返事をして、近くの曲がり角に向かって歩き始める。

「せっかくだし、みんなを驚かせちゃおうか…」

「そうだな！きつと、ソウヤの姿を見たら驚くだろう」

そんな会話を交わしながら曲がり角に入り、そのまま後ろを振り返る。

「誰だ！俺達をつけてたのは……！って、ソラ？それにましろさん？」

俺達が振り返ると、そこにはソラとましろさんの姿があった。

「あはは……バレてしまいましたか？」

「ごめんね、ソウヤ君……会いたくなつて、ここまで来ちゃつた」

「全然良いよ！2人が来てくれて嬉しい！ヨヨさんにトンネルを開いてもらつて来たの？」

俺がそう尋ねると、2人は何故か今にも泣き出しそうな顔をしていた。

「ソラ、ましろさん……どうかしたのか？」

「ソウヤ（君）!!」

そう言つて、2人は涙を流しながら俺に抱きついた。

「ソウヤ……！ソウヤああ！会えて嬉しい……本当に良かった！」

「え!?どうしたんだ、急に……何かあつたのか？」

「なんでもない……なんでもないよ……！ソウヤ君……ただ、会えて嬉しいだけなんだよ。私もソラちゃんも……」

「そうなのか？……よくわからないけど、心配掛けちゃつたかな？大丈夫だよ、2人共。俺はこの通り無事だからさ」

俺は安心させるようにそう言いながら2人を抱きしめ返す。

2人はうんうん頷きながら、涙を流し続ける。

俺は2人が落ち着くまで、抱きしめ続けるのだった。

「落ち着いた？」

「はい…ありがとうございます」

「ありがとう、ソウヤ君…」

どうやら、2人は落ち着いてくれたみたいだ。

それにしても…どうにも様子がおかしい…まるで、二度と会えないと思ってた人にも一度会えたみたいな感じの喜び方だったような気がする…まあ、俺は今のところはそういう経験をせずに済んでいるから推測にすぎないけど。

「…まあ、今は良いか。2人も一緒に青の護衛隊のみんなに会っていく？」

「私達は…その」

ソラが何かを言いかけると同時に、俺は嫌な気配を感じた。

狙いは姉さんか！

「姉さん！」

咄嗟に姉さんを突き飛ばすと、俺は謎の空間に囚われてしまった。

「また会えたな、プリンセス…」

黒色の影がそんなことを口にする。

「アンノウン！まさか、こんな早く再会するとは…」

というか、プリキュアに変身しているわけじゃないのにプリンセス呼びつて…こいつには何が見えてるんだか。

「私としても想定外だ。まさか、リソース供給装置を破壊してくるとは…おかげで、計画を早めに進めることになってしまった」

そう言いながら、アンノウンは前に戦ったボロボロのローブ姿の存在を5体ほど出現させた。

「くっ…！やるしかない！」

「ソウヤ！お待たせしました！」

「私達も一緒に戦うよ！」

「ソラ！ましろさん！来てくれたんだ！ありがとう…一緒に戦おう！」

「はい（うん）!!」

そうして、俺達はプリキュアに変身する。

／／／／／／／／／／／／／／／／／／

「無限にひろがる青い空！キュアスカイ！」

「ふわりひろがる優しい光！キュアプリズム！」

「静寂ひろがる夜のとばり！キュアナイト！」

「レディ・ゴー！」

「ひろがるスカイ！プリキュア！」

プリキュアに変身した俺達は戦闘を開始する。

「スカイ！プリズム！こいつらはダメージを与えても再生するから、再生速度を上回る強力な一撃を叩き込まないとダメです！」

「わかりました！ナイトも気を付けてください！」

「強力な一撃…わかった！やってみる！任せて！ナイト！」

そうして、2人にアンノウンが出した存在に対するアドバイスを伝えて、戦闘を続ける。

ここで、再びサンライズスタイルのバーストタイムを使うのも考えたが、先ほども使ったばかりだ…俺1人だったら無理してでも使っていたが、今はスカイとプリズムがいるから、他の選択肢も取れる。

「ヒーローガール！プリズムショット！」

プリズムが放った技は偽アンノウンに命中するが、すぐに回復する。

「ナイトの言った通り……このままじゃ倒しきれない！でも、まだまだ！」

だが、プリズムは偽アンノウンに諦めずに攻撃を仕掛ける。

「ヒーローガール！スカイパンチ！」

スカイも必殺技を放ったが同じくすぐさま回復してしまう。

「くっ……このままじゃ、また……！」

流石に今の状態ではジリ貧か……どうする？

俺がそう思考していると、プリズムが白の気弾を飛ばす。

「煌めけ！」

プリズムがそう言うと、白の気弾が光り輝き、周りの敵の目を眩ませる。

その隙に、プリズムが俺の側に来る。

「ナイト！」

「プリズム……ここは私がなんとかします！」

そうして、サンライズスタイルに変身しようとする。

「ダメ!!」

だが、プリズムは俺の手を強引に掴み、必死の形相をしていた。

「それだけはダメだよ……絶対にバーストタイムだけは使っちゃダメ。お願いだから、それは使わないで」

「でも…今のままじゃー！」

「大丈夫。私達が絶対になんとかするから…ナイトは無理せず休んでて」

そう口にするプリズムは必死だ…なんとかしなければならぬ、だけど、どうすれば良いかわからない…そんな表情だった。

「…プリズム…いや、ましろさん。俺は2人がどんなものを背負っているのかはまだわからない…だけど、1つ聞かせてほしい」

「なに？」

「私達でなんとかするって言ってたけど、その私達に俺は入ってる？」

「…！そ、それは…」

ましろさんは俺の質問に言葉を詰まらせる。

「やっぱり入ってなかったか…2人が俺を助けようとしてくれるのはわかる。けど、俺を助けるために俺の力を借りちゃいけないなんてことはないと思う」

「確かにそうかもしれないけど…それじゃあソウヤ君が！」

「なら、ましろさんが俺を守ってくれば良い。俺もましろさんを守る…これなら対等じゃない？」

「ソウヤ君…もう！こつちの気も知らないで…わかったよ…一緒に行こー！ソウヤ君！」

「もちろん！行こう！ましろさん！」

その瞬間、大きな光が発生し、俺とプリズムの色が混じったエンゲージのスカイトーンが出現した。

「これは……！スカイの時と同じ！」

「私とプリズムのエンゲージのスカイトーン……プリズム！」

「うん！」

そうして、俺達はエンゲージのスカイトーンを起動し、スカイミラージュにセットする。

「ナイトブラック！」

「プリズムホワイト！」

「エンゲージ!!」

そう言つて、それぞれのスカイミラージュを重ね合わせる。

すると、ナイトにプリズムの白を基調とした装飾が追加されていき、逆にプリズムにはナイトの黒の装飾が追加されていく。

そしてナイトの右目がルビーのような赤い瞳からプリズムと同じ翡翠色の瞳にオツ

ドアイへと変化し、プリズムも同じく右目がルビーのような赤い瞳に変わり、オッドアイへと変化する。

そうして、ナイトとプリズムのエンゲージスタイルが誕生した。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「行くよー！」

「もちろんー！」

エンゲージスタイルに変身した俺とプリズムは偽アンノウンに攻撃を仕掛ける。

「ヒーローガール！ナイトミラージュー！」

複数の槍を出現させ、一体の偽アンノウンに高速で接近する。

出現させた槍は俺と同じ姿に変化し、偽アンノウンにキックしていき、最後に俺がキックした。

すると、偽アンノウンは再生することなく浄化された。

「すごっ！威力がかなり上がってる…これなら！」

「ヒーローガール！プリズムショット！」

すぐさまプリズムの技がヒットし、再び偽アンノウンが再生せずに浄化された。

「本当に威力が上がってる！いけるよー！ナイトー！」

「うんー！」

「ナイト！私も一緒に！」

スカイの一言に頷き返し、今度はスカイとのエンゲージスタイルへと変身する。

「スカイブルー！」

「ナイトブラック！」

「エンゲージ!!」

プリズムとのエンゲージスタイルになっていた影響か、黒と白が合わさった恰好にスカイの青色がさらに加わり、左目のルビーのような赤い瞳が空を思わせる青色に変化した。

そして、スカイと手を繋ぎ、エネルギーが集まっていく。

「プリキュア！ナイト・スカイ・エンゲージ!!」

そうしてエネルギーが放出され、偽アンノウン達の下から黒と青の竜巻が舞い上がり、そのまま偽アンノウン達に命中した。

そして、偽アンノウン達は再生することなく浄化された。

「待つて！1体取り逃してる！ナイト！今度は私と！」

「わかった！」

プリズムの言葉に俺はすぐに移動した。

そして、プリズムと背中を合わせて手を繋ぎ、取り逃した1体に技を放つ。

「プリキュア！ナイト・プリズム・エンゲージ！！」

繋いだ手に黒白のエネルギーが集まっていき、まるで弓から矢を放つようにエネルギーを放出する。

そして、それが残りー体に命中し、再生することなく浄化された。

「ぐっ……ここまでか……また会おう、プリンセス……そしてその仲間達よ」

そう言つて、黒い影は姿を消し、俺達は元の場所に戻つてきた。

「……これであの結末は変わるよね？」

「きつと、変わります……信じましょう」

「ましろさん、ソラ……何の話をしてるんだ？」

俺の言葉にましろさんは何でもないと言つて、笑みを浮かべた。

「……ソウヤ君、今回のことは他の誰にも言わないでね？もちろん、私やソラちゃんにも話さないで」

「うん？……どういうこと？」

「今はわからなくても大丈夫だよ。だから、お願い」

明らかに何かを隠している……でも、2人が隠そうとしているってことは、それだけ大事なことってことか。

「……わかった。言わないでおくよ」

「ありがとう、ソウヤ君…それじゃあ私達はそろそろ帰るね」

「ああ！またね！」

「うん！またね！」

「ソウヤ！また会いましょう！」

2人は俺にそう言つて、この場から去つて行つた。

そういえば、さつきはそんな余裕なかつたから流してたけど、俺はソラ達にバーストタイムについては話していなかつたはず…なのに、なんでバーストタイムについて知っていたんだろうか？

…ソラ達の様子はどこか変だつた…しかも、知らないはずの情報だつて、知つていた…ここから考えられる可能性は…

とはいえ、そんなことがあり得るんだろうか？まあ、あり得るかあり得ないかで言え
ばあり得るか。

「ソウヤ！無事だつたか！…ソラとましろは？」

「2人は帰つたよ。後、姉さん、今回のことは俺達の秘密にしておこう…他の人に話しちゃダメだ。もちろんソラとましろさんにもね」

「…？わかつた、そうしよう。ともかく無事で良かった…！私は情けない姉だな…またソウヤに助けられてしまった」

「大丈夫だよ、気にしないで！どうしても納得いかないなら、今度は姉さんが俺を助けてくれ。それなら良いでしょ？」

「そうだな…今度は私がソウヤを助ける。だから、安心しろ」

「ありがとう、姉さん。それじゃあついでにお願いがあるんだけどさ」

「何だ？言ってみてくれ！」

「もし、ソラとましろさんが姉さんを頼ってきたら、例えそれが理解できない話だったとしても協力してあげてくれ」

「もちろんだ！」

「ありがとう！…よし、それじゃあ青の護衛隊のみんなのところに向かおうか」

そうして、俺達は青の護衛隊の本部に向かって、再び歩き始めるのだった。

帰宅と対抗策

「ただいま！」

「ソウヤ！お帰りなさい！スカイランドでの用事はどうでしたか？」

「うん。昔の戦いの跡地に行つてさ、ちよつとしたトラブルはあったけど、楽しかったよ」

「それは良かったです！」

「ソウヤ君、お帰りなさい！お姉さんとゆつくり過ごせた？」

ソラに続けて、ましろさんがそう言葉を続ける。

「そうだね…跡地に行つた後は青の護衛隊の本部に行つて、ベリイとアリリ副隊長にも挨拶して…後は姉さんと2人でゆつくり過ごしたよ。ましろさんはどうだった？良いことあった？」

「うん！実は、私のやりたいことが見つかったんだ！」

「そうなんだ！ちなみにましろさんのやりたいことつて？」

「絵本作家！この前、絵本コンテストがあつて、それがきつかけだったの！そのコンテストには落選しちやつたけど、私、もっと絵本を書きたい！そう思つたんだ！」

「そっか…良い夢だね！実は、俺もやりたいことが見つかったんだ」

「ソウヤ君も!?聞かせて!ソウヤ君!」

ましろさんは食い気味に俺に質問する。

そうして、俺が答えようとする、ツバサ君とあげはさんも合流した。

「ソウヤ君、お帰り!」

「元氣そうで良かった!それで、ソウヤ君のやりたいことって?」

「みんな居るし、言っちゃっても良いか…俺はスカイランドに遺跡調査隊を作りたいんだ…スカイランドに遺跡調査隊を作って、今回の跡地みたいないろんな場所を調査したいなって」

「確かに、スカイランドに遺跡調査隊なんてものはないですもんね…」

「うん。だから俺が作るんだ!それで、みんなから忘れられてるプリキュアの伝説…エトの物語をみんなに伝えていきたい。エトの生きた証を残したいんだ」

『…!ソウヤ様!ありがとうございます…!』

俺の言葉を聞いた、エトの嬉しそうな声が響く。

「そっか!うん…良い夢だと思う!ソウヤ君、私達の夢、見つかったね」

「そうだね」

そうして、俺とましろさんは笑い合う。

穏やかな時間が流れる中、俺はこの時間がいつまでも続くことを祈るのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「…やつぱり、ソラとましろさんは今日、スカイランドで一緒に戦ったことを覚えていない…いや、そもそも知らないみたいだな」

もちろん、2人に直接聞いたわけじゃないけど、おそらくそうだと思う。

ということは、俺の推測は残念ながら当たっているようだ。

自分の部屋でそんなことを考えていると、ふと人の気配を感じた。

「ソウヤ…」

気配を感じた方向に視線を移すと、そこには暗い表情をしているソラの姿があった。

そして、同じように暗い表情をしているましろさんの姿も確認できた。

「ソラ、ましろさん…2人は未来から来たソラとましろさんで良いんだよね？」

俺がそう尋ねると、2人は驚いたような顔をした。

「どうして、わかったんですか？」

「スカイランドで会った2人は様子が変だったし、バーストタイムに関しては誰にも言っていないのに、それを知っていたからな…」

「そうだったんですね…やつぱりソウヤはすごいです…」

「2人がどうして過去に来たのか…その理由もわかったよ」

俺はそう言って、一瞬間を置いて言葉が続けた。

「…何が起きたかまではわからないけど…未来で俺はやばいことになっていて、それを助けるために2人は過去に来てくれた…そうだろう？」

俺がそう言うと、2人は頷いた。

そして、そのまま2人は泣き出してしまった。

「ソウヤ…私…もうどうすれば良いかわからないんです…」

「ごめんね…ソウヤ君…こんなこと言ったらダメだってわかってるけど…助けて…ソウヤ君…私もどうすれば良いかわからないの…」

「もちろん。最初からそのつもりだよ…聞かせてくれるか？」

俺がそう尋ねると、2人はポツポツと今までの経緯を話してくれた。

「なるほど…俺がランボーグに…」

2人から聞いた話はこうだ。

俺がスカイランドに出かけた日から俺の姿が見えず、ベリイやアリリ副隊長に捜索を頼んで、数日が経った後、俺の姿を見かけたという情報が入ったらしい。

そして、街中で俺の姿を見たソラが後を追いかけると、それがバツタモンダーが作り出した幻であることが判明する。

そして、さらに衝撃的な事実が判明する。

ランボーグの素体は俺で、しかも浄化Ⅱ死であり、ソラの心は折れてしまった。

そんな時にエトが姿を見せ、エトと俺の絆によって誕生したスカイトーンの力を使って、ソラとましろさんと共に過去へと跳んできたのだという。

その時に、エトから俺がアンノウンとの戦いで、バーストタイムを使用しすぎたせいで、体力を消耗しアンノウンと相討ちという形で倒れてしまったことを伝えられたらしい。

「だから、俺が跡地で戦闘した後の時間に跳んだのか…そして、介入した結果、俺は今回ランボーグにならずに済んだわけか…ありがとう。2人のおかげで今ここにいます」

「いえ、そんな…」

「結局、未来は変わらなかつたし…私達のやったことは無駄だったのかな…」

「いや、それは違うよ。2人のおかげで猶予が出来た…そして、その猶予のおかげで、なんとかする方法を思いついた」

「「えっ!?!」」

2人は同時に驚いたような声を上げる。

「といつても、博打みたいなものだけどね…でも、俺はみんなを信じてる。きっとこの方法だつて上手くいくと思つてるよ」

「どんな方法ですか？」

「無茶な方法じゃないよね？」

「ある意味、無茶かもね…要するに、みんなに丸投げするわけだし…俺に出来るのはお膳立てぐらいなものさ」

そう口にして、俺は続けて思いついた方法を2人…いや、ソラ達を連れてきたエトも含めた3人に伝えた。

「まず、今回は俺がランボーグになるのを止めなくて良い」

「どうして？それじゃあソウヤ君が！」

「まあ、多分だけど、仮に止めたとしても日にちがズレるだけで、最終的な結末はおそらく変わらない…某運命石の扉で言うところの世界線の収束みたいなものじゃないかな」

「世界線の収束？それは一体…」

「要するに、このまま過去を変えるだけじゃダメだつてこと…俺がランボーグになることが決まっているなら、そこから救うのがベストだと思う」

どれだけ過去を変えても俺がランボーグになるのが確定しているというのは、逆に言えばその先のことは確定していないということだ…つまり、やりようによつては何とか

なる…そういうふうに考えられる。

「確かにそれが出来るなら良いですが…でも、どうするんですか？」

「…これをエトに渡してくれ。本当はその辺にいるんだろうけど、過去の自分に会うとタイムパラドックス的な何かが起きるんだろうから、後でエトに渡してくれれば良い」
そう言いながら、俺はサンライズのスカイトーンをソラへと手渡す。

「これは…！良いんですか？」

「うん。これは俺とあさひの絆の証…これを使えば、あさひに助けを求められると思う。俺達の世界にランボーグ化した人間を助ける方法が今はなくても、あさひ達の世界にはあるかもしれない…今のエトなら、あさひをこちらの世界に呼ぶことも出来るはずだ」

まあ、実際呼べるかどうかはわからないけど、何もしないよりはマシだろう。

それに、あさひを呼ぶことが出来るなら、きっと来てくれると信じている。

「…わかりました！必ずエトさんに渡します！」

「ありがとう。…後は姉さんにも協力してもらえよう頼んでみてくれ…姉さんなら協力してくれるよ」

「わかった！後でシャララ隊長のところにも行ってみる！…ごめんね、ソウヤ君…私達がソウヤ君を助けないといけないのに、結局、頼っちゃって…」

「良いよ！2人が頑張っているのに、俺だけ何もしないわけにもいかないからさ」

俺がそう言うと、2人の表情が少し和らいだ。

さっき来たばかりの時は、2人共暗い表情をしていたから少し安心した。

「ソウヤ〜…ご飯が出来ましたよ！」

「おっと、こっちのソラが呼んでる…それじゃあ2人共、またね…大丈夫。きっと上手くいく！俺を…そしてみんなを信じてくれ」

俺がそう言うと、2人は大きく頷いた。

そんな2人を見た後、俺は部屋を出るのだった。

未来を変えるピース

「うーん…」

「ソラちゃん？どうかしたの？」

「…最近、ソウヤの様子がおかしい気がして…」

あげはさんの車に乗って、ヨヨさんの野菜畑に向かっている途中、ましろさんとそんな会話をする。

最近、ソウヤは忙しく動いている。

何をしているのかと聞いても答えてくれず、心配しないでと言うだけでした。

「確かに…今日だって、やることがあるから私達と一緒にには行かずに、後で合流するって言ってたもんね…本当にどうしたんだろう…無理してないと良いけど」

「そうですね…ソウヤと合流したら聞いてみましょうか」

「うん！そうしよう！」

「いらっしやい！なのねん！」

「久しぶりだね。カバトン」

「お客さん、どこかで会ったのねん？オレ様はお客さんみたいな女性と会ったことはいのねん」

「あれ？俺のこと忘れちゃった？ソウヤだよ、ソウヤ」

「…ソウヤ？…ソウヤ!?嘘だろ…どうしたのねん、そんな恰好して」

「あはは…実はカバトンに聞きたいことがあつてさ、知り合いにバレたら面倒そうだから、ちよつとした変装をね」

俺は今、カバトンが働いているおでん屋に来ている。

アンダーグエナジーについて聞きたいことがあつたからだ。

その為にかバトンの居所を突き止め、女装してここにきたわけだ。

「流石にびつくりしたのねん…女にしか見えなかった…それで、聞きたいことって、なんなのねん？」

「…人間をランボーグ化したらどうなるんだ？」

「人間をランボーグに？そんな馬鹿なことをするやつがいるのねん？」

「人をランボーグにするのが、馬鹿なことなのか？」

カバトンの発言に思わず聞き返す。

「そうなのねん。そもそも人間にアンダーグエナジーを注ぎ込むこと自体、無理があるのねん。そのくせ、アンダーグエナジーをかなり消耗する上に、素体にした人間がYOE E Eやつだとランボーグも弱くなるのねん…それならその辺のものをランボーグにした方がよっぽどTUE E Eつてもんだ」

「なるほどな…もし、人間をランボーグ化するとそういつたデメリットがあるのか…それを実行しようとするやつは、なんでそんな思考に至るんだろうな」

「素体の人間がめちやくちやTUE E Eか…それ以外にやりようがないかのどつちかだろう…前にも言ったが、アンダーグ帝国はYOE E E奴に居場所はねえ…だから、なりふり構ってられない状況での最後の手段として使うというのはあり得るのねん」

「そっか…ちなみに、ランボーグにされた人間を戻す方法はあるのか？」

俺がそう尋ねると、カバトンは一瞬考えるようは仕草をして、答えた。

「…そもそも人間をランボーグにすること自体がないから、方法があるのかはわからないのねん…ただ、プリキュアの技ならなんとかなると思うのねん」

「そうか…わかった。ありがとう…参考になったよ」

そう言つて、俺は屋台の席から立つ。

「ソウヤ、気をつけるのねん。ねえとは思うが、お前がランボーグになったら、他のプリキュアじゃ歯が立たねえ」

「随分と俺のことを評価してくれてるんだね」

「まあ、お前は他のプリキュアに比べて頭一つ抜けてTUEEE奴だからな…：そういうば、人間をランボーグにした時はその人間の自我が残る時があるらしいのねん。そうなるランボーグは大幅に弱くなるし、ランボーグ化が解けることもあるようなのねん」
「なるほど…：だから、人間をランボーグにすることは滅多にないわけか…：ありがとう！助かったよ！また来たらここにおでんを食べに来るよ」

「それまでに腕を磨いておくのねん」
「ああ、楽しみにしてる」

そう言つて、俺はカバトンが働いているおでんの屋台を後にするのだった。

もし、カバトンの話が本当だとするなら、ランボーグ化した人もプリキュアの力で戻せるつてことだ…：だが、アンダーグエナジーを生命力に置き換えられたら、浄化＝死ということになるわけか。

つまり、裏を返せば、生命力をアンダーグエナジーに置き換えられなければ、プリキュアの技を受けても死なない…：もちろん、ダメージは喰らうだろうけど。

…よし、ピースは揃った。後は揃ったピースを組み立てていくだけだ。

そのためにももう少し準備をするか。

俺はそうして新たに行動を開始するのだった。

「ふう…よし…これで準備は整った。後は皆に任せるしかないのが悔しいけど…これ以外に今の俺に出来ることがない」

準備は万端。

後はみんなに任せた…まあ、俺も俺でみんなが戦えるように精一杯足掻いてやるさ。

そう思いながら、俺はみんなが向かって行ったヨヨさんの野菜畑へと、αスタイルの瞬間移動能力で移動した。

「みんな…お待たせ!」

野菜畑に移動した俺は変身を解き、みんなに声を掛ける。

どうやら雨が降っているみたいで、みんなは雨宿りしていた。

まあ、この雨ならすぐに止むだろう。こういう雨は大体すぐに止むからな。

「ソウヤ君! いや、今はソウナちゃんって呼んだ方が良いかな?」

「どっちでも良いよ。ただ、知り合いとかに会った時はソウナ呼びの方が良いけど」

「わかった! あ、そうだ! ソウヤ君もピーマン食べる? デイックソースもあるよ」

「ピーマンか…苦手なんだよな…あの独特の苦味がどうにもあれでさ」

「わかる…!」

俺の言葉にあげはさんがそう頷く。

「あげはさんもピーマン苦手なの？」

「そもそも、そんなわけないじゃん！私、大人なんですけど？い、今のは一般的な意見というか……」

なるほど……さてはあげはさん、俺と同じくピーマンが嫌いだな。

「とりあえず食べてみて！ソウヤ君！」

そうして、ましろさんに促され、ディップソースにつけてピーマンを口に運ぶ。

「うん！これはいける！ピーマンの苦味が中和されて美味しい！」

俺の反応を見た2人はあげはさんにもピーマンを進める。

あげはさんは遠慮がちにピーマンをディップソースにつけて口に運んだ。

「あれ？美味しい……カレーマヨのおかげで食べやすい！」

「あげはちゃん、それはピーマンが嫌いな人の感想だよ」

そんな会話を交わしている今も雨は降り続けている。

「それにしても、この雨、いつまで降るんでしょうか？」

「すぐに止むと思います」

「よくわかるね」

「朝は小さかった雲が雨を降らせる大きい雲に成長してたんです。あの雲は短い時間、雨を降らせるので」

「なるほど…こういう天気は大抵すぐに止むのは知ってたけど、そういう理屈があったんだね…」

ツバサ君の言葉に感心する。

「空を飛ぶためには天気も大事なので。それで勉強してて…あつ…」

そう言つて、ツバサ君は何かを掴んだようにクリアな表情になる。

何があつたのかはわからないけど、ツバサ君が何かを掴んだなら良かった。

「私ね、何かを学ぶことと畑は似ていると思うの」

そう言つて、ヨヨさんはさらに言葉を続けた。

「学んだことは肥料になつて、あなた達の夢の種を育ててくれる。けれど、その種がいつ芽吹くかはわからないから、学んだことは全部無駄だったんじゃないかって、そう思うこともある」

流星はヨヨさん…良いこと言うな。多分、そう考えてしまつて夢を諦めてしまつた人もいるんだろう…でも、きつと今までやってきたことは無駄にはならないと俺は信じている。

「でも大丈夫」

俺がそんなことを考えていると、ヨヨさんが大丈夫だと言つてくれた。

「それは明日かも…ずっと先の未来かもしれないけれど、必ず花開く時が来るわ。しか

も、自分の思いもよらない花が咲くこともあるのよ」

すごいな……めっちゃ良い話だ。

人生の大先輩の言葉は響くな……俺も頑張るか。

俺がそんな風に思っていると、嫌な気配を感じた。

「君達を倒す作戦を考えるために、こんな山奥まで来たのに……まさか、ここで会うことになるとはね……」

「バツタモンダー……!」

俺達はバツタモンダーに気づき、臨戦態勢を取るのだった。

アンノウンの乱入と消えたソウヤ

「バッタモンダー……！」

俺達はバッタモンダーに気づき、臨戦態勢を取る。

まさか、こんなところにまでやってくるとは……まあ、なんにせよ俺達のやることは変わらない。

「そんなに警戒されると、悲しいね……まあ良いよ、お望み通り始めようか。カモン！アンダーグエナジー！」

そうして、バッタモンダーは鳥の模型をランボーグへと変える。

「よりによって、少年の作った鳥さんを！」

「いきましよう！」

俺の言葉と共にみんなはプリキュアへと変身する。

「無限にひろがる青い空！キュアスカイ！」

「ふわりひろがる優しい光！キュアプリズム！」

「天高くひろがる勇氣！キュアウイング！」

「アゲてひろがるワンダホー！キュアバタフライ！」

「静寂ひろがる夜のとばり！キュアナイト！」

「レディ・ゴー！」

「ひろがるスカイ！プリキュア！」

そうして、俺達はプリキュアへと変身を完了した。

そして、変身が完了すると同時に鳥のランボーグとの戦闘を開始する。

「ハアツ！」

プリズムは白の気弾をランボーグに放つが、それをランボーグは回避し、反撃してくる。

その攻撃をバタフライがシールドを展開し、防いでくれた。

「今のままじゃ届かない…なら！ミライレコード！ミライコネクト！ナイトプリズム！」

そうして、俺はプリズムスタイルへと姿を変える。

そして、出現させた二丁の銃を合体させ、スナイパーライフルへと変化させる。

そして、ライフルを構え、ランボーグをロックオンする。

「これでも喰らいなさい！」

そうして、ランボーグを狙撃する。

だが、ランボーグは着弾するギリギリでそれを回避した。

「ギリギリで回避されてしまいましたか…なかなか素早いですね…どうにか素早さを奪えれば…」

「私に任せて！」

そう言つて、バタフライはミックスパレットを使用する。

「2つの色を一つに！ホワイト！ブルー！温度の力、サゲてこー！」

すると、ランボーグが凍りついた。

「ミックスパレットつてこんなことも出来るんですか？」

「すごい！かなり便利ですね！今なら！」

俺はミックスパレットの力により、凍りついたランボーグに狙いを定め、技を放とうとする。

だが、その瞬間、俺に高速で接近する存在に気づき、咄嗟に防御する。

その直後、衝撃が走る。

「くっ……！」

「私の接近に気づくとは流星はプリンセスだ！」

俺にそう言う存在はボロボロの黒いローブを纏った存在…アンノウンだ。

「アンノウン！いい加減にしつこいですよ！早いところ成仏してください！」

「それは貴様もだらう？この世界で再び私の前に立ち塞がっているのだから！お前がいる限り、私は何度でも蘇るとも！」

「この変態ストーカーめ！」

そんなふう言い合っているうちに、俺は後方へと大きく飛ばされる。

「「「ナイト!!」」」

「大丈夫です…こいつの相手は私が引き受けます！皆さんはランボーグを！」

そう伝えると同時に俺はランボーグと戦っているみんなから距離を取る。

その最中、スナイパーライフル状態を解除し、二丁の銃に姿を戻す。

そして、二丁の銃を撃ちながら、移動する。

だが、命中してもすぐに再生する。

「この程度、大したことはない！」

そう言いながら、俺が銃を撃つのもお構いなしに接近する。

「くっ！」

腕に撃つても再生し、足に撃つても再生する…そして胸に撃つてもそれを避けて、俺に接近し掴みかかる。

そして、俺の頭を掴み、そのまま地面に叩きつける。

「あぐつー！」

だが、俺はすぐに体勢を整えて、アンノウンを蹴り飛ばす。

そして、地面に向けて銃を撃ち、砂埃を発生させアンノウンから距離を取る。

すぐさま、二丁の銃を再び合体させスナイパーライフルに変化させ、アンノウンに向

けて銃撃を放った。

「そこかー！」

そう言つて、アンノウンは俺に接近してくる。

だが、これは俺の狙い通りだ。

俺はとつさに剣を出現させて、アンノウンの攻撃を防ぎ、スナイパーライフルをアンノウンの体に突きつけ、技を放つ。

「ヒーローガール！ ナイトバースト！」

そうして、スナイパーライフルから放たれた技がアンノウンを襲う。

「ぐおおお！ ぐつ……！」

アンノウンはたまらず後退し、俺と距離を取った。

うん？ 妙だな……どうして距離を取ったんだ？ あいつは再生するはずだ……確かにナイトバーストは強力な技だが……あいつの再生速度を考えると、そこまでのダメージではな

いはずだ。

そういえば、あいつは胸を撃たれる時は避けていたな…他の部分は気にせず接近してくるのに…ちよつと小突いてみるか。

そして、腕を撃ち、胸を撃つ。

アンノウンは腕を撃たれても気にしないが、胸を撃たれる時は避けていた。

これは確定かな？

「今だ！ミライレコード！ミライコネクト！ナイト！」

そうして、俺はαスタイルへと姿を変える。

そして、左手に槍を右手に剣を持ってアンノウンに接近する。

「プリンセス！例の姿にならなくて良いのか？」

「そうそうあなたの思い通りにはいきませんよ！」

そう言いながら、距離を詰め、そのまま攻撃を仕掛ける。

だが、その攻撃を回避され、俺は槍を投げつける。

それをアンノウンは避け、反撃に出る。俺は左手に槍を出現させ、地面に刺してそれを支えにして跳び、アンノウンの攻撃を避けつつ蹴り飛ばす。

続けて槍を遠くに投げ飛ばし、そこに瞬間移動し、槍を地面に突き刺し、その後そのままアンノウンに接近して斬りかかる。

「甘いー」

そうして攻撃を防がれ、腕を掴まれて地面に叩きつけられる。

「かはっ！」

肺の中の空気がすべて吐き出され、意識が朦朧とする。

その直後、意識が飛ぶ前に俺は槍の場所に瞬間移動する。

「ケホッ……ケホッ……はあ……はあ……」

「上手く逃げたか……だが、これで終わりではないぞー」

「……っ！」

俺は咄嗟に左手に槍を出現させ、投げつける。

それを腕で弾き、アンノウンは接近して俺にそのまま殴り掛かる。

それを剣で防御したが、衝撃を防ぎきれず後方へと飛ばされ、壁にぶつかる。

「あうっ！……うう……はあ……はあ……」

「随分と苦しそうだな……フツツ、貴様のその姿は嗜虐心を唆られるな……もつとその表情を見せてくれ……プリンセス」

「この……変態め……！」

そう言いながら、咄嗟に左手にプリズムスタイルの銃を出現させ、銃を放つ。

それをアンノウンは避けた。

「無駄な足掻きを！」

そうして、アンノウンは俺の首をとてつもない力で締め、体を持ち上げる。

「あ…あがつ！うう…」

「これで終わりだ！プリンセス！」

アンノウンがそう言い終わると、同時に爆発音が響く。

そして、アンノウンの手が俺の首から離れた。

「ケホツ…！ケホツ！はあ…はあ…上手く…いきましたね…」

アンノウンの方に視線を移すと、胸に大きな穴が開いていて、アンノウンは苦しそうな顔をしていた。

「何をした…？」

「私は何の考えもなく槍を突き刺していたとも思っていたんですか？」

「まさか…!?すべてはこの時のために？」

「そうです…銃の攻撃を槍にぶつけながら、最後はあなたの胸に命中させる…それが私の狙いです…あなたは胸だけは執拗に守っていましたがね…そこが弱点だと思いましたが」

「くっ…まさか、ここまでとは…」

そう言いながら、アンノウンは消え去った。

「…ふう…とりあえずアンノウンはなんとかなったかな…後は…」
そう言っている内に俺は倒れ込む。

『ソウヤ様！しつかり！』

「エ…ト…後は…よろ…しく」

そうなんとか言い切り、俺は意識を失った。

／／／／／／／／／／／／／／／／／／

「ソウヤ！どこですか！」

「ソウヤ君！いるなら返事して！」

「ソウヤ君！どこ！」

「ボク達の声が聞こえますか！」

ミックスパレットの力と、ツバサ君の作戦によりランボーグを浄化した私達は戻ってこないソウヤを探しにきていました。

でも、一向にソウヤの姿が見当たりませんでした。

「ソウヤ…どこに？」

「…もしかしたら、先に家に帰ってるのかも…」

「私達に声も掛けずに？あり得ません…きつと、何かあったんです！ましろさん、どうしましよう…ソウヤに何かあったら…私！」

「落ち着いて、ソラちゃん。…とりあえず、ましろんの言う通り、1回家に帰ろう。もしかしたら、戦いに疲れて私達に声を掛ける暇もなく、休みに行っただけかもしれないし」
「はい…」

そうして、私達は家へと帰りました。

しかし、そこで私達は驚くべき光景を目にしました。

「ソウヤの体がない…！どうして？…まさか!? バッタモンダーに？」

「いえ、それはないわ、ソラさん。どこにも誰かが侵入した形跡がないもの」

ヨヨさんが冷静にそう告げる。

「じゃあどうして…？」

「…ごめんなさい。私にもわからないわ」

ヨヨさんが申し訳無さそうにそう口にする。

「そんな…！」

目の前が真つ暗になる…ソウヤ…どこに？

再び降り始めた雨は、真実を覆い隠すかのように降り続けた。

ソラの帰省と託されたもの

「シャララ隊長…今、良いですか？」

ソウヤからサンライズのスカイトーンを預かった後、未来に戻る前に私とましろさんはシャララ隊長に会いに来ていました。

「ソラ、ましろ…どうかしたか？まさかソウヤに何か!？」

「いえ…そういうわけでは…」

私がそう言い切る前に、ましろさんが言葉を続けた。

「…信じられないかも知んですが…ソウヤ君はこれから大変な目に遭うんです…だから、ソウヤ君を助けるために力を貸してくださいませんか？」

ましろさんがそう言うのと、シャララ隊長は少し考えるような仕草をする。

「…そうか。あの子が言っていたのはこのことだったのか…」

「シャララ隊長…どういうことですか？」

「あの子…ソウヤが、もし2人が私を頼ることがあれば、例え信じられない話であっても、助けてあげてほしいと頼まれていてね…」

「ソウヤがそんなことを…」

「ソウヤ君…私達の為に、頑張ってくれてるんだね…私達も諦めてる場合じゃないね！」
「はい！」

「私も協力する…ソウヤに頼まれたからというのも、もちろんあるが…何より私はソウヤと約束した。今度は私がソウヤを助けると…いつもあの子に守られてばかりの情けない姉だが、今度こそ、私が助ける」

シヤララ隊長はそう言つて、私達を見つめる。

「シヤララ隊長…ありがとうございます！その時になったら連絡します！」

「ああ！待っている！一緒にソウヤを助けるぞ！」

シヤララ隊長の言葉を聞き、私とましろさんは頷く。

そして、シヤララ隊長との話を終え、私達は未来…自分達の元いた時間へと戻るのだった。

待っていてください！ソウヤ！必ず助けます！

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ここは…元の時間に戻ってきたんでしょうか？」

「そうみたいだね…エトさん、私達、ちゃんと戻つてこれたんだよね？」

「ええ。その証拠にあちらをご覧ください」

そう言つて、エトさんが指差す方にはあげはさんとツバサ君がこちらに駆け寄つてく

る姿がありました。

「2人共!どうだった?」

「あげはさん…ソウヤはどうなりましたか?」

「どうもこうも…もしかして、忘れちゃったの?さつきまでソウヤ君がああのランボーグだつて、ソラちゃんとましろんが必死に止めて…最後にはランボーグがエネルギー切れして、バッタモンダーはそのまま帰っちゃったでしょ?」

その話を聞いて、今のところ状況はまったく変わつてないことを理解しました。

ソウヤの言っていた通り、ソウヤがランボーグになるのはどうあつても変わらない過去なんです…なら、問題はここからです!

でも、不安がないと言えば嘘になります。

もし、別の世界のプリキュアを呼べなかつたら?呼べたとしても、ランボーグになつた人を助ける方法がなかつたら?私達の誰かのミスで、ソウヤが準備してくれたすべてが台無しになつたら?

そんな考えが頭の中を巡つていく。

「…とりあえず、一度、家に帰ろつか。ソウヤ君を助ける方法を考えなくちゃ!大丈夫!ソウヤ君が力を貸してくれてる…もちろん、他の人も…だから、ここで諦めるわけにはいかない!」

「そう…ですわね」

私はましろさんの言葉にそう答えつつ、みなさんと一緒に家に帰るのでした。

「ソウヤ…私はあなたを助けられるんでしょうか…」

あれから話し合っても、ソウヤを助けられる方法はあまり思いつかず、結局、別世界のプリキュアの力を借りることと、ランボーグを浄化して、すぐさまミックスパレットの癒やし力の力を使って、ソウヤを救うという、どちらかの方法にすることになった。

そんなことを考えていると、ふと私の実家のことが気にかかりました。

「みんな…元気にしてるかな…そういえば、ソウヤは私の実家にも何か用意してくれていたりするんでしょうか…」

自分でそう言って、気づく。

そうです！ソウヤはもしかしたら、私の実家にもなにか…行ってみましょう！

…私の決心を固めるためにも。

そうして、私は書き置きを残してスカイランドの実家へと戻るのでした。

／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／

チリンチリンと家のベルを鳴らす。

すると、聞き慣れた声が聞こえてきた。

「はいはい…ソラ!?!」

「ただいま」

出迎えに来てくれたママにそう口にする。

「王様と王妃様…そして、ソウヤ君の呪いを解くために向こうで戦ってるって聞いたけど…」

「実は…」

「ソラお姉ちゃん!」

後ろから声が聞こえて、振り返るとそこには弟のレッドがいた。

「レッド…」

「お帰り!あれ?ソウヤお兄ちゃんと一緒にじゃないの?」

「レッド…ソウヤは…」

「この前、家に来てたから、てっきり一緒だと思ってたよ」

「ちよつと待って!レッド、今のはどういう…」

思わずそう聞くと、家からパパの声が聞こえてくる。

「チシューが冷める。中に入りなさい」

「パパ…」

「とりあえず中に入って。詳しい話は中でしましょう」

「わかった」

そうして、私は久しぶりに我が家に足を踏み入れた。

「それで、ソウヤが来たってどういう…」

「実は、前にソウヤ君がやってきてね。ソウヤ君が王様達と同じく、眠っちゃったって聞いていたからびつくりしたわ。まあ、その後、ソウヤ君から自分は無事に目を覚ましたって聞いたから、私達も納得したの」

「そうだったんだ…」

「ソラお姉ちゃん！ソウヤお兄ちゃんと恋人になったんでしょ！結婚するの?」

「へっ!!?どどど、どうしてそのことを?」

レッドの言葉に思わずそう口にしてしまう。

「ソウヤお兄ちゃんとソラお姉ちゃんが結婚したら、ソウヤお兄ちゃんが僕のお兄ちゃ

んになるのか……楽しみだなあ」

「ちよつと！まだ気が早いよ！ソウヤと私はまだ結婚できる年齢じゃないし……まあ、そういう年齢になったら結婚したいとは思ってるけど……って、それは今は良いの！ソウヤが来たことについて教えてよ！」

「ふふっ！はいはい。……ソウヤ君が来た時は軽く世間話をして、その時にソウヤ君とあなたが恋人になったことを聞かされたの……ソウヤ君は『ソラに怒られるから話せない』、言つてたのに、私達が無理やり聞いたただけだから、怒らないであげてね」

「本当はソウヤと一緒に挨拶に来たかったけど……仕方ないね……それで、その時に、ソウヤから何か預かってない？」

「ああ、預かっている。持つてくるから待つていなさい」

「うん」

そうして、しばらくしてパパが手紙と見たことのないスカイトーンを持つてきてくれた。

「手紙……？それにこのスカイトーン……見たことない……もしかして、ソウヤが私のために？」

「ええ。もし、ソラが家に戻つてくることがあれば、これを渡してほしいって……ソウヤ君はこうなることがわかつてたのかしら？」

「多分ね…ソウヤはきつとわかってたんだと思う」

「…食べ。母さんの作ってくれたチシユード、美味いぞ」

「そうだね！いただきます！」

そうして、私は久しぶりに家族との時間を楽しむのでした。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ソウヤの手紙…何が書いてあるんだろ」

チシユードを食べ終え、私はソウヤからもらった手紙を読もうとする。

でも、途中で手が止まってしまう…

「怖い…この手紙を読むのが…」

もし、これがソウヤからの別れの手紙だったら、どうしよう…最後の別れを告げるために家に手紙を預けていたとしたら、どうしよう…もし、そうだったら私…！

「ソラ、ついてきなさい」

「パパ？」

パパは短くそう言って、外に出かける。

私もパパの後に続いて行く。

そうしてたどり着いた場所は幼い頃にパパに連れてきてもらった星がたくさん降っている思い出の場所だった。

「懐かしいね……ここ。あの時は弱い者いじめする子たちと大喧嘩して……でも、全然敵わなくて……」

そう言いながら、私はその時のことを思い出していた。

『ヒーローになれますように！』

流れ星が降るのを見て、何度も流れ星にお願いをした。

ただ、あの時の私は自信がなくて……

『でも、本当にヒーローになれるのかな……ソウヤみたいに、優しくて、強くて、カッコいいヒーローに……私、強くないし……ケンカ怖いし……ソウヤみたいなヒーローになれるのかな』

『お前の心は何て言ってる？』

『私の心……』

その瞬間、空にはさらさらにとくさんの流れ星が降ってきて、私は自分の心の声を聞いた。

『ヒーローになれますように!!』

そうして、私は何度も何度もそう言った。

あの思い出はずっと心に残っている。

「あの星はパパが降らせてくれたの？」

「お前が降らせたんだ…多分な」

「パパ…私、決めた…絶対に諦めない！ソウヤを絶対に助ける！」

「そうか…それがお前の決めたことなら、応援するだけだ」

「パパ、ありがとう！」

私の言葉にパパは笑みを浮かべた。

「…ソウヤ君を助けだしたら、また家に帰ってきなさい。その時に改めて挨拶しよう。」

…ソウヤ君になら、安心してソラを任せられる」

「えっ!?だ、だから気が早いつてば！」

私のそんな叫びが、星が瞬く夜空に響いた。

決戦と別世界からの助っ人

「それじゃあ、行ってくるね」

実家で一日を過ごした、翌日の朝。

私はソラシド市に戻る準備をしていた。

「ソラ、気を付けてね」

「ソラお姉ちゃん！悪者を頑張ってやつつけてきてね！」

「ソラ、頑張れ」

「ママ、パパ：レッドも：みんな、ありがとう！：行ってきます！」

「行つてらっしゃい！」

そうして、みんなに見送られながら、私は再びソラシド市へと向かうのでした。

「今戻りました！」

「ソラちゃん！いきなり、ソウヤ君が残してくれたものがないか見に行くつて書き置き

だけ残して行っちゃうから、びっくりしたよ…大丈夫だった？」

「はい！もう大丈夫です！私は諦めません！ソウヤを必ず助け出します！」

「その意気だよ！ソラちゃん！私達でソウヤ君を助け出そう！」

「はい！…そういうえば、ツバサ君はどこに？ましろさんとあげはさんはここにいますけど」

「少年なら、外にいるよ。鳥さんと話してるんじゃないかな？」

「行ってみましょう！」

そうして、私達は外へと向かった。

「ツバサ君、今戻りました！何か異常は…」

「みなさん！大変です！街に例のランボーグが現れました！」

ツバサ君の言葉に私達はお互いに頷きあう。

ツバサ君もプニバードの姿から人の姿になり、私達のところに走ってきました。

「エトさん！別の世界のプリキュアをお願いします！」

「お任せ下さい！…とはいえ、やはり別の世界の人を巻き込むのは気が引けますね…ソウヤ様もなるべく巻き込みたくはなかったでしょうに…」

「そうですね…でも、ソウヤを助けられる可能性があるなら、やる価値はあると思います」

「はい！…では、私は一足先に行ってきます。みなさんはランボーグをお願いします！」
そう言つて、エトさんはその場から消えた。

「私達もいきましよう！」

「うん！」

「ランボーグを浄化して、ソウヤ君を助ける！」

そうして、私達はプリキュアへと変身する。

大切な人を救うために。

／／／／／／／／／／／／／／／／／／

「はい！強い！こいつを操る僕も強いんだよな〜！」

「バツタモンダー！これ以上、好きにはさせません！」

「あれ〜？変身出来たんだ〜…てつきり、もう心が折れてると思つたよ…ソラ・ハレワ

タール」

バツタモンダーの言葉に怒りが沸いてくる。

許せない…ソウヤをランボーグにしてこんなことをさせて…こいつだけは何かあつ

ても許さない！

「この世界のことわざをあなたに一つ教えてあげる…『弱い犬ほどよく吠える』」

「ワン…ワン！」

バタフライの言葉にそう返しながら、バツタモンダーは煽るような表情をする。

そんなふうには私達が睨み合っていると、突如として、私達の前に見たことのない人が姿を現した。

その顔はましろさんによく似ていて、思わず私は眩く。

「あなたは……誰？」

「私そっくりな顔」

「もしかして……ソウヤ君が前に言っていた」

「別の世界の友達……」

「えっと、初めまして……で良いのかな？ ソラ、姉さん、ツバサ、あげは」

「な、何なんだよ……お前は」

全く状況が掴めていないバツタモンダーはそう口にする。

「俺？ 別世界の助っ人」

「はあ？」

バツタモンダーが驚く中、謎の少年は片手にスカイミラージュを持ち、プリキュアに変身した。

「スカイミラージュ！ トーンコネクト！ ひろがるチェンジ！ サンライズ！」

すると、少年は灼熱の赤色の髪、頭に太陽の形を模した小さな髪飾り、そして、赤を

基調としオレンジと白のラインが入っているスーツとスポン、白色のグローブに腰まで垂れ下がった白のマントという太陽や朝日をイメージさせるような姿のプリキュアへと変身しました。

「夜明けにひろがる眩い朝日！キュアサンライズ！」

「キュアサンライズ！これが別の世界のプリキュア！」

「はっ！別の世界のプリキュアだかなんだか知らないが、ナイトランボーグに勝てるかな？」

そう言って、バツタモンダーはナイトランボーグをこちらに差し向ける。

「ソウヤ…待ってて！絶対に助けるから！」

ランボーグになったソウヤを見ながら、サンライズはそう口にする。

「サンライズ、状況はエトさんから聞いてると思いますが、助ける方法がありますか？」

「もちろん！ソウヤとの絆で生まれたこのスカイトーンを使えば、助けられるはずだ。実際、このスカイトーンの力でランボーグにされた人を助けたこともあるし」

その言葉に安堵する。

ソウヤを助ける方法はあった…それだけで嬉しい。

「いきましょう！」

「ああ！いこう！」

そうして、私達は戦闘を開始する。

「先手必勝！ひろがる！サンライズカリバー！」

すごい速度でナイトランボーグに接近し、手に出現させた長剣に炎を宿し、朝日のエフェクトが出現する。そして、浄化のエネルギーを集中し、そのまま振り下ろす。

放たれたエネルギーの奔流がナイトランボーグに向かう。

しかし、ナイトランボーグはそれを体を少し逸らすだけで回避する。

「くっ……！やっぱりそう簡単にはいかないか」

「まだまだ！ひろがる！ウイングアタック！」

続けて、ウイングが突進の浄化技を放つが、それを受け流すように回避し、槍を右手に出現させ、槍を叩きつけてウイングを地面に落とす。

「うぐあっ！」

「ひろがる！バタフライプレス！」

バタフライが頭上から技を放つても、今度はそれを槍で砕き、反撃してくる。

「バタフライ！」

攻撃を受けたバタフライはそのまま地面に落下していき、咄嗟にサンライズが受け止める。

「スカイ！いくよ！」

「はい！」

私とプリズムは走り出し、ナイトランボーグへと向かう。

プリズムは白の気弾を放ち、空中に停止させる。

「煌めけ！」

そして、気弾が輝きを放ち、目眩ましをする。

今なら！

「ヒーローガール！スカイパンチ！」

そうして、ナイトランボーグにパンチする。

でも、その攻撃はあっさりを受け止められ、そのままプリズムに向かって投げ飛ばされた。

「ああああ!!」

そのまま2人共、壁に叩きつけられる。

つ、強い……!

「前より強くなってる!?!」

「アンダーグエナジーを限界まで注ぎ込んだからね」

「くっ！バッタモンダー！」

思わず、バッタモンダーを睨みつける。

「あれ？心折れちゃった？」

「…いいえ！まだまだこれからです！」

「そうだよ！こんなところで諦めない！ソウヤ君を絶対に助けるんだから！」

私とプリズムがそう叫ぶと、みなさんも再び立ち上がった。

そうです…こんなところで諦めたりしない！

そうして、私達は再びナイトランボーグとの戦闘を開始した。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「スカイミラージュ！トーンコネクト！スタイルチェンジ！グリフォン！」

キュアサンライズこと、あさひがスカイミラージュにトーンコネクトをセットすると、どこからともなくグリフォンが飛んでくる。

そして、グリフォンがパワードスーツのようにサンライズに装着される。

これはサンライズのスタイルチェンジの力であり、このグリフォンスタイルはパワー型のスタイルだ。

「みんな！離れて！」

サンライズの言葉に戦闘中のスカイ達が離れ、それを確認した後、浄化技を放つ。

「ひろがる！サンライズボルケーノ！」

サンライズが剣を出現させ、それを地面に突き刺すと、ナイトランボーグの周りに炎

柱が出現し、動きを封じる。

そして、後はナイトランボーグの下から巨大な炎が噴き出すはずだったのだが：

ナイトランボーグは剣を出現させ、それを用いて回転斬りをし、周りの炎柱を消滅させ、さらに地面に槍を突き刺し、下からの攻撃すらも封じてしまった。

「嘘だろ!?あれでもダメなのか?」

そう驚いていたその瞬間、ナイトランボーグはサンライズに接近し、剣で斬りつける。慌てて、防御耐性を取るが、そのまま後方へと吹き飛ばされ、壁に衝突する。

「かはっ!!」

「「サンライズ!」」

スカイ達の心配するような声が響く。

しかし、その後すぐさまナイトランボーグにスカイ達は倒されてしまう。

「みんな!!くっ!まだまだ!スカイミラージュ!トーンコネクト!スタイルチェンジ!ドラゴン!」

すると、どこからともなくドラゴンが飛んでくる。

そして、アーマーとなりサンライズに装着される。

グリフォンスタイルとは違い、パワードスーツではなく、最低限の装甲しかないスーツであり、両手に何かのエネルギー発生装置が装着されている。

「くぐー」

サンライズは両手から、四角の足場を作り出し、それを蹴って跳躍する。

そして、跳躍しながら次々足場を作っていく、それを連続で蹴っていく、立体的な移動をしてナイトランボーグを翻弄する。

そして、両手に双剣を召喚し、死角からナイトランボーグに攻撃する。

だが、その攻撃さえ、ナイトランボーグは剣で弾き返してしまう。

「くっ！攻撃が当たらない！反則だろーこれ！」

サンライズは思わずそう口にしてしまう。

だが、それもそうだろう。

さきほどから誰一人として、ナイトランボーグにかすり傷一つ、つけられていないのだから。

「そういえば、ソウヤが俺達の世界に来て、初めてイーヴィルと戦った時も、まるで相手の動きがわかっているみたいだった…しかもあの時は3人に分裂していたはずだし、1人の動きしか見えないわけじゃなさそうだ」

そう考えると同時にサンライズは焦燥感に駆られる。

「どうすれば…ヤタガラススタイルに変身して、ソウヤを助け出そうにも…そもそも攻撃が当たらないんじゃ、意味がない…なんとか隙を作らないと…」

「隙を作れば良いのか？」

「え…？あなたは！」

「「「シヤララ隊長!!」」」

姿を見せた人物はソウウヤの姉であり、青の護衛隊の隊長。シヤララ隊長、その人だつた。

「私に任せてくれ！必ず隙を作る！」

流星の想いと決着

「シャララ隊長…隙を作るってどうやって…?」

「…事情はエトから聞いている。お前がキュアサンライズ…別の世界からソウヤを助けにきてくれてありがとう…あの子は本当に仲間に恵まれているな」

「いや、そんな…ソウヤは俺達の世界を救ってくれました。だから、ソウヤが困っているなら、今度は俺が助ける…そう決めていただけです」

「そうか…」

シャララはサンライズに笑みを浮かべながら、そう口にする。

そして、青の護衛隊の剣を構え、ナイトランボークに向かって歩いていく。

「死に損ないの護衛隊の隊長が、今更なんの用だい?」

「バッタモンダー…私の家族を返してもらおうぞ」

「やってみなよ、出来るものなら」

そう言って、バッタモンダーがナイトランボークをシャララに差し向ける。

「シャララ隊長! 良かったら、これを使ってください!」

バタフライが蝶型のシールドを生成し、シャララに投げ渡す。

シヤララはそれを受け取り、盾として構える。

「ありがとう。お前たちは私が戦っている間に作戦を考えるんだ！安心しろ、隙は必ず作る。…頼んだぞ、ヒーローガール」

そうして、シヤララはナイトランボーグとの戦闘を開始した。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「はあっ！」

ランボーグと化したソウヤに剣を振る。

だが、ランボーグはそれを防ぎ反撃をしてきた。

それを何とか回避するが、凄まじい風圧が私を襲う。

「くっ……これは一撃でも喰らったら、そのまま倒されてしまうな……」

ならば、戦い方を変えるまで。

落ち着け……私の役割はプリキユア達がソウヤを助け出せるように隙を作ることだ。

あの子の動きは私が一番良く知っている。

よく見る……ソウヤと稽古をしていたあの頃のように。

そうして、ナイトランボーグの攻撃を観察し、攻撃を受け流す。

続けざまに攻撃をされるが、それをすべて受け流すか、盾で防ぐ。

「ん？妙だ……」

さきほどから、攻撃を凌げてはいる。

だが、どの攻撃も途中で威力と速度が落ちている。

そのおかげで、ギリギリで攻撃を凌げている。

「……そうか、そういうことか……！ソウヤも必死に抵抗しているのか……ならば、私がここで諦めるわけにはいかない！」

そうして、盾を構えて攻撃を防ぎ、好機を待つ。

そして、ナイトランボーグは再び大きく剣を振ってくる。

今だ！

剣が振るわれるタイミングに合わせ、盾を前に突き出す。

そして、剣を弾き体勢を崩す。

ナイトランボーグは体勢を崩し、隙が生まれた。

「はあっ！」

そうして、そのまま剣を振り下ろし、ナイトランボーグを斬り裂いた。

くシヤララが戦闘を開始した直後く

「サンライズ！」

シヤララ隊長がナイトランボーグと戦闘を開始し、私はソウヤを助けるための作戦を考えるためにサンライズの元に向かう。

「どうしましようか？何か作戦を考えないと」

「そうだな…といつても、やることはただひとつ、ヤタガラススタイルの攻撃を当てることだけ、なんだけど…」

「問題はどうか当てるか、ですね…」

正直、ナイトランボーグに私達の攻撃が当たらない以上、シヤララ隊長が隙を作ってくれることを信じるしかありません。

「シヤララ隊長を信じるしかない…俺達は俺達に出来ることをしよう」

「私達に出来ること…そうです！ソウヤから託されたこのスカイトーンなら…」

そうして、スカイトーンを取り出す。

「スカイ、それは？」

「ソウヤが私のために用意してくれたスカイトーンです。1回きりの最後の切り札…私を気遣う言葉と一緒にこのスカイトーンについて手紙に書かれていました…これなら、きつと」

『このスカイトーンは、ソラの願いの強さによって、いくらでも力を発揮できるスカイ

トーンだ。ただ、この力は強大で、1回きりの最後の切り札だ：使いどころには気を付けて。：ソラ、心配かけてごめん。いくら未来を変えるためとはいえ、無茶して。でも、これだけは言える。俺の行動は何一つ無駄になんかならない：みんなを信じてるよ。

最後に。

帰ったら、一緒にいろんなところに行こう。後、ソラの両親に挨拶もしないとだ：やることがいっぱいだな：それじゃあ、またね。ソラ』

手紙の内容を思い出し、スカイトーンを握る手に力が入る。

：ソウヤ、絶対に助けます。私だって、ソウヤともつと一緒に未来を見たい！また一緒に笑い合いたい：いろんなものを見たい：だから、絶対に諦めません！

「はあっー！」

直後、シャララ隊長がランボーグを斬り裂く姿が見え、私はソウヤから託されたスカイトーンを準備する。

「シャララ隊長がくれたチャンス：無駄にはしません！」

そうして、私はスカイトーンを起動する。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「プリキュア！スカイ・ミライレコード！ミライコネクト！シューティングスター！」
スカイミラージュにスカイトーンがセットされる。

すると、キュアスカイの青空のような色の長いツインテールが一つに束ねられ、ポニーテールに変化する。そして、羽のような髪飾りが飾られる。そして、髪の一部がキュアナイトのような青みがかつた黒髪に変化した。

そして、スカイの白を基調とした衣装の白色の部分が黒へと変化し、星を模した装飾が施される。

そして、左肩にしかなかったマントが両肩から装着され、背中を覆う。

そして、キュアスカイの切り札が姿を現した。

「これが…ソウヤが託したスカイトーン…!」

「サンライズ!この力でさらに追撃します!ヤタガラススタイルの準備を!」

「ああ!」

そして、私は全力でナイトランボグに浄化技を放つ。

「プリキュア!ナイト・スカイ・シユートイニングスター!!」

その技を放った瞬間、夜空が現れ、私は分身して流星の如くナイトランボグに超速で接近し、分身が連続でパンチをし、トドメに私自身がナイトランボグにパンチする。

ナイトランボーグはシャララ隊長の攻撃を喰らい、私の攻撃を避けることができず、咄嗟に防ぐ。

「ソウヤ！私の願いはソウヤを助け出すことです！…いえ、違いますね…たつた一つだなんて、それだけじゃ足りません…私はもつとあなたと一緒に居たい！いろんな場所に行きたいし、もつと恋人らしいことだってしたい…あなたと未来を見ていたい！」

そう言っているうちに、私の眼から涙が流れてくる。

「また一緒に笑い合いたい…また声を聞きたい…また笑顔を見たい…だから！戻ってきて！ソウヤ!!」

私の想いに応えるように体が星の煌めきのように輝き始める。

「はああああっ！」

私の中から力が溢れてくる…今なら、きつと！

そして、そのまま私の攻撃により、ナイトランボーグは吹き飛ばされる。

「今です！サンライズ！」

「ああ！任せろ！スカイミラージュ！トーンコネクト！スタイルチェンジ！ヤタガラス！」

サンライズに漆黒の鳥、八咫鳥がアーマーのように飛んでいき、夜を思わせる黒と青を基調としたアーマーが装着される。

それはまるでキュアナイトを思わせる姿で、サンライズのあのスカイトーンはソウヤとの絆の力というのがよくわかりました。

「ソウヤ！今助けるから！ひろがる！サンライズシャドー！」

サンライズが技を放つと、ソウヤを傷つけることなくナイトランボーグから救出した。

「ソウヤ!!」

「スカイ！ソウヤを！」

ソウヤを助けだし、サンライズは私にソウヤを預ける。

「後はソウヤが抜けたランボーグの後片付けだ！」

サンライズがそう言うと、サンライズを黒い炎が包み、槍がサンライズの周りを回転し、槍が重なる。

「ひろがる！サンライズエクリプス！」

そして、巨大な槍を持ち、サンライズが飛び上がると日食が起きる。そして、巨大な槍をランボーグに向けて投げつけた。

「スミキツタ〜」

そうして、ランボーグが浄化された。

「ミラーパッド！」

いつの間にか来ていた、ヨヨさんがミラーパッドにキラキラエナジーを回収していた。

「ソウヤ君！」

「大丈夫ですか！みなさん！」

「待たせてごめん！ミックスパレット！癒やし之力、アゲてこー！」

ようやく目を覚ましたプリズムとウイング、そしてバタフライが合流し、ソウヤに癒やしの力を掛けてくれる。

「ソウヤ！お願い…戻ってきて！」

私は必死にソウヤの手を握り、呼びかける。

「やれやれ…そんな悲しそうな顔をされたら、起きないわけにはいきませんね…ほら、私ってヒーローですから…泣いている誰かを見捨てるわけにはいきません」

そう言って、キュアナイトの姿のままソウヤは笑みを浮かべる。

私は耐えきれなくてソウヤに抱きついた。

「…ソウヤあ…良かった…良かった…私、もうあなたに会えないかと…」

「心配かけてごめん…でも、全部上手くいったでしょ？」

「そういう問題じゃないですよ…もう…」

ソウヤの言葉に私は泣きながら笑みを浮かべた。

「…ソウヤ、スカイ…空気を壊すように悪いんだけど…こいつのことはどうする?」

そう言つて、サンライズは気まずそうにバッタモンダーにヤタガラススタイルの槍を向けていました。

「ひっ…!」

「…放つておきましょう。こいつには倒す価値もありません…というより、ソウヤが無事だったので、正直どうでもいいです」

「お、おう…こつちのソラは辛辣だな…でも、わかつたよ。ソラがそう言うなら、バッタモンダーにトドメは差さない。みんなもそれで良い?」

サンライズの言葉にみなさんも頷き、私はソウヤを抱っこして帰路へと着く。

「と、トドメを差さなくて良いのか…?じゃないと、また来るぞ!またお前の嫌がることをしてやる!それでも良いのか?ソラ・ハレワタール!」

「…構いません」

「はっ」

「何をされたつて負けないぐらい、強くなりますから」

項垂れているバッタモンダーにそう告げて、私達は家へと帰るのでした。

戦いの後とネタバラシ

「ふう…とりあえず、まずはありがとう、あさひ。助けにきてくれて…おかげで助かったよ」

「どういたしまして。これで、ソウヤに少しは恩返し出来たかな…」

戦いが終わり、みんなに助け出された俺は家でそんな会話を交わす。

「恩返しだなんて、そんな大げさな…」

「いやいや、自分達の世界を救ってもらったのに、恩を感じないわけないだろう！」

「まあ、それもそうか…俺もあさひに助けてもらった恩を感じてるし。ありがとう…もし、また何か困ったことがあったら呼んでくれ、すぐに駆けつけるから。とはいえ、今の俺は精神体じゃないからな…しばらくは自由に世界を歩き来できないか」

今回のことで、俺の体の呪いは解け、こうして体をちゃんと動かせるようになった。

だが、それは同時に精神体ではなくなったことを意味する。

つまり、前みたいに世界を歩き来できなくなってしまうたわけだ。

「…ま、精神体でなくなっただけとはいえ、出来ることはあるだろうし、どんな形であれ、あさひの力になるよ」

「ありがとう、ソウヤ。その気持ちだけでも嬉しい……でも、俺達の世界のことは俺達の力でなんとかするよ！いつまでもソウヤに頼りっぱなしってわけにはいかないし」

「そっか……うん。あさひ達なら大丈夫だ！自信を持って！」

俺の言葉にあさひは力強く頷いた。

そんな会話を交わしていると、ましろさんがあさひを先ほどからずっと見ていることに気づいた。

「……ましろさん、あさひの顔に何かついてるのか？」

「ううん、そういうわけじゃないんだけどね……こうして、見るとやっぱり私にそっくりだなんて」

「まあ、あさひはましろさんの双子の弟だからね、そりやあ似てるんじゃないかな？」

「それもそっか……ねえねえ、あさひ君！そっちの私はどんな感じなの？」

「こっちの姉さんもこの世界の姉さんと同じで、優しい人だよ。なんなら、みんなほとんど変わらないかな？……ソウヤの世界のソラはちよつとおつかないけど……」

「私がどうかしましたか？」

最後の部分が上手く聞き取れなかったのか、ソラがそう聞き返す。

「えっ!?!い、いや……こっちのソラもあんまり変わらないなあって……」

あさひが誤魔化すようにそう口にする。

まあ、俺は聞こえていたから、なんで誤魔化しているのかわかるけどね…ソラに聞かれなくて良かったな、あさひ。

「そ、そういうえば！ソウヤの体はアンダーグエナジーに蝕まれてたって聞いたけど…もう大丈夫なのか？」

話題を変えるようにあさひが言葉を紡いだ。

「うん。もう大丈夫だ…ソラの攻撃のおかげで、俺を蝕んでいたアンダーグエナジーは綺麗さっぱり消えたよ」

「そっか、それなら良かった…うん？ちよつと待てよ？ランボーグの素体になったのは、ソウヤの精神体じゃなくて、実際の体ってこと？」

「そうなるね」

「どうして？だって、ソウヤは今の今まで精神体だったわけだよな？」

「…それに、関してはおそらくバツタモンドーがなにかしらの手段を使って、ソウヤの体を家から奪っていったんだと思います」

あさひの疑問にソラがそう返す。

そっか…そういうえば、その時のことはまだ話してなかったな。

「…そのことは俺が説明するよ。聞いてくれるか？」

俺の言葉にみんなは頷く。

「…実は、体を移動させたのは俺なんだ…ちよつとした仕掛けのためにな」

「「「ええー!?」」」

みんなの驚いた声が響いた。

まあ、それもそうだろう…普通に考えたら、バッタモンダーが連れ去つたと思うだろうし。

「ソウヤが!?でも、どうしてそんなことを?」

ソラがそんな疑問をぶつける。

俺はそれに答えるために説明を始める。

「まあ、簡単に言えば、バッタモンダーを欺くためだよ…まず、俺は予め、 α スタイルの槍を俺自身の体に仕込んでおいたんだ。そして、アンノウンの戦闘後、 α スタイルの能力で部屋へと移動して、俺の体を抱っこして、元の場所に移動したんだ」

そう言いながら、俺はさらに言葉を続ける。

「そして、移動した後、俺が体の中に入る。すると、俺の体は α スタイルの姿になり、まるで俺がアンノウンとの戦いの後、力を使い果たして倒れているように見えるというわけだ。だが、精神体の俺は体の中でピンピンしている…そういうカラクリだ」

「なるほど…どうして、ソウヤが体を移動させたのかはわかったけど、なんでそんな仕込みをしたんだ?」

「その理由は人間をランボーグにした際のデメリットを利用するためと、俺の生命エネルギーがアンダーグエナジーに置きかわっているとバツタモンダーに錯覚させるためだ」

あさひの質問にそう返す。

だが、あさひとみんなは頭に疑問符を浮かべていた。

「…まあ、要するに、ランボーグになってしまっても俺が必死に抵抗して、ランボーグを弱体化させるためってことだな。バツタモンダーを錯覚させたのは、あいつに精神体の俺がピンピンしてることを勘付かれたら厄介だからだ。たまたま俺の体はアンダーグエナジーに蝕まれていたから、バツタモンダーも勘違いしやすい状況にあったし、それを利用してもらったんだ」

「…すごいな。つまり、俺達があこのランボーグと戦えたのはソウヤが必死に抵抗してくれたおかげってことか…」

あさひが感心したようにそう口にする。

「うん…上手くいって良かった…」

「というか、あれでも弱体化してたのか…俺達の攻撃、ほとんど当たらなかったのに」

「なんというか…ソウヤの強さを思い知らされますね…」

「まあ、ランボーグになっていた時はリミッターみたいなものも外れていただろうから、

普段よりも無茶な動きが出来たつてのもあるんだと思う」

俺はそう言ってみるが、あさひとソラは苦笑するだけだった。

「…まあ、それはさておき…あさひ、俺達の世界で今回の出来事があつたつてことは、そつちの世界でも多分同じようなことが起きると思う」

「…わかつてるよ。絶対にあんな未来にはさせない!」

「あんな未来…なるほどね…どういう理由かはわからないけど、あさひはこれから起ることわかつてるのか…あさひ、未来を変えるのは簡単なことじゃない。それでもやるのか?」

俺がそう尋ねると、あさひは少し悩んだような顔をした後、力強く答えた。

「約束するよ!俺は絶対に絶望の未来を変えてみせる!」

「…そつか。わかつた!あさひ、頑張れよ!俺は祈るしか出来ないけど、あさひ達なら出来るつて信じてる。…エト、あさひを送つてあげてくれ」

「もちろん!お任せ下さい!」

「ありがとう!それじゃあ、またね。ソウヤ!」

「ああ、またな!あさひ!今度会えたら、遊びに行こう!戦いとか関係なしにさ」

「そうだね…今度会えたら、その時は遊びに行こう!」

あさひは笑顔でそう答えてくれた。

そうして、俺達はあさひの姿が見えなくなるまで見送るのだった。

「行つてしまいましたね……」

「そうだな……ちよつと心配事はあるけど」

「あさひ君の世界でも今回と同じようなことが起きるかもつてことだよな？」

俺の言葉にましろさんがそう口にする。

「うん。それに……あさひが未来を変えても、同じような未来に収束する可能性もある……例えば、犠牲になる人が変わるだけとかね……ともかく、万が一のためにも出来ることを探しておこう」

俺はみんなにそう告げながら、あさひ達に何事も無いことを祈るのだった。

だが、嫌な予感というのは当たるもので、しばらく経つた後、あさひのスカイトーンが砕けてしまった。

俺は部屋でスカイトーンが砕けたのを確認し、自分に出来ることを探し始める。

「今の俺は精神体じゃないから、世界の壁は超えられない……でも、誰かに声を届けることぐらいは出来るか……この行動はなんの意味もないかもしれない……でも、やらないよりは

マシンだ」

そうして、俺は別の世界のソラに言葉を届けた。

俺の言葉で、ソラを立ち直らせることが出来るかはわからない…でも、放っておけなかった。

「…とりあえず、あつちのソラに伝えたいことは伝えた…後はエトに頼みがある」

「お任せください！」

すつかり、こちらのの世界にも顔を出せるようになったエトが笑顔でそう口にする。

「あさひ達の様子を見てきてくれ。そして、万が一の時はエトのスカイトーンの力で、あつちのみんなをサポートしてくれ」

「わかりました！…その、ソウヤ様…もし、私が無事にソウヤ様のお願いを達成したら、ご褒美をください！」

「もちろん。俺に出来る範囲なら」

「ありがとうございます！よし、頑張りますよ！」

「それじゃあ、気を付けて…行つてらっしゃい！」

「行つてきます！」

そうして、エトはあさひ達の世界へと向かった。

そして、エトが戻るのを待っていると、思いの外早く帰ってきてくれた。

「エト！無事か!?」

「ソウヤ様！そんなに私のことを心配してくださいませんか？」

「当たり前だろ…やっぱり、自分が何も出来ない状況で、誰かに任せられないってのは怖いな…何かあっても助けることができないし…」

「ソウヤ様は優しいですね…心配してくれてありがとうございます！私はこの通り無事ですよ！」

「そっか…良かった！エトも無事で…そうだ！あつちの世界の出来事を教えてくれないか？あさひ達がどうなったのかも気になるし」

「はい…あちらの世界のことですが…」

そうして、俺はエトからあさひ達の戦いについて、聞かされた。

「そっか…あさひ達、なんとかなったんだな…良かった」

ホッと胸を撫で下ろすと、砕けていたあさひのスカーションが元に戻っていた。

「とりあえずは一安心だな…お疲れ様、エト」

「いえいえ！ソウヤ様のためですから…それで、ご褒美なんです…」

「うん。俺に出来る範囲なら叶えるよ」

「それじゃあ、今度、デートしてくれませんか？前に言ってくれましたよね？私に外の世界を案内してくれるって…」

「もちろん、覚えてるよ。よし、それじゃあ今度、デートしようか！エトとの約束を果たすためにも」

「はい！今から楽しみですよ！」

エトは笑みを浮かべてそう口にした。

そうして俺達の戦いは、俺達の世界もあさひの世界もハッピーエンドを迎えるのだった。

エトとのデート

「さあ、ソウヤ様！今日はいろんなところに行きましよう！」

エトはテンション高めにならうと口にし、俺の腕に抱きつく。

今日はエトとの約束を果たすために、デートをしに行こうとしていた。

エトは俺との絆で生まれたスカイトーンを手に入れてから、こうして実体化出来るようになったようで、俺としてはエトとの約束を果たせそうで嬉しい。

ただ…

「エト、恰好は変えた方が良くないかな？そのお姫様のドレスもよく似合ってるけど、流石に街に出かけるとなると、目立ちすぎるし」

「そうですね…では、現代風に装いを変えましようか」

そうして、エトが光を放ったかと思うと、服装が変わっていた。

その恰好は、長い銀色の髪を束ね、右のサイドポニーテールにし、服装は肩が露出している白の長袖に、黒のミニスカートに黒のタイツに茶色のショートブーツというような恰好だった。

「エト、よく似合ってるよ」

「そう…ですか？ありがとうございます！ソウヤ様！それじゃあ行きましょうか！」
「うん、行こうか」

そうして、俺達はデートに向かうのだった。

「ソラさん、やっぱりソウヤ君達を尾行するなんてやめましょうよ」

「いいえ、これは必要なことなんです！エトさんが、ソウヤを誑かす可能性は高いです！私のソウヤに手は出させません！」

「私の、なんて言い方はどうかと思うよ、ソラちゃん。私とあげはちゃんもいるんだから」

「そうそう。私達もソウヤ君のこと好きだもん…けど、確かに気になるよね…エトちゃんにはお世話になったけど、いくらなんでも距離が近すぎない？」

「ですよね！やっぱり、彼女は危険です…しつかりと後をつけましょう！」

そうして、私達が尾行を再開すると、ソウヤの腕に抱きついていたエトさんがこちらを見た。

「フフッ！」

そして、勝ち誇ったような笑みをこちらに向けてきました。

「…すみません。やはり尾行はやめて突撃して良いでしょうか…」

「…賛成だよ。エトさんには助けてもらったけど、これは許せないよ…今すぐにもソウヤ君を連れ去って、縛らなきゃ…」

「そうだね…流石に私もカチンときたよ…邪魔しちゃおう？」

「みなさん！落ち着いて！これで邪魔したら、大変なことになりますって！きつと、エトさんもソウヤ君と出かけるのが嬉しいだけで、他意はないですよ…多分」

「…そうですね…今、突撃したら全てが台無しですね…我慢します」

ツバサ君の言葉を聞き、なんとか冷静になつた私達は引き続き、尾行を続けるのでした。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ソウヤ様、ここは…」

「よく俺達が行く店で、『Pretty Holic』って言うんだよ。香水とかコスメ系があつたりして、2階には喫茶店もあつて、なかなか楽しいよ」

「なるほど…ここがそうなんです！色々と試してみても良いですか？」

「もちろん…！…そういえば、前にましろさんが書いた絵本、まだ残つてたりするかな？」

コンクールに応募したのは聞いていたけど、内容は知らないんだよな…読めるなら読

んでみたいけど、流石に残ってないよな。

俺がそんなことを考えていると、エトが俺の手を強く握り、言葉を紡いだ。

「ソウヤ様…今は私とのデート中です…他の女の子のことなんか考えなくてください」

「え？あ、ああ…わかった。確かに今のは失礼だったな…よし、それじゃあ色々試してみよつか！」

「はい！」

俺の言葉にエトは笑顔でそう答えた。

そうして、店に置いている試供品を一通り試し、エトに合いそうな香水を買って、店を出た。

「ソウヤ様！ありがとうございます！この香水、大切にしますね」

「どういたしまして。それじゃあ次は映画を見に行かない？」

「映画ですか！良いですね！さっそく行きましょう！」

「オツケー！」

そうして、俺達は映画館へと向かった。

「……ここが映画館！どことなく懐かしい感じがしますね……」

「まあ、エトも俺が前世で暮らしていた世界に居たわけだし、懐かしいと感じるかもね……俺も転生してから映画館に来るのは初めてだから、なんか懐かしいし」

「そうですねか……フフツ！一緒ですね！」

「そうだね。……エトはどんな映画が見たい？」

「うーん……ソウヤ様の見たい映画で良いですよ」

「俺の見たい映画か……うん？これは……シユタインズ・ゲートの映画!?何年か前の映画なのに、どうして？」

驚きながら辺りを見渡すと、どうやらこの映画館は昔の映画をリバイバル放映するところがあるらしく、今回はたまたまこの映画が選ばれたようだ。

……なんというか、運命を感じるな……ちょうど最近、タイムトラベル案件が発生したばかりだし。

「……これにしよう！この映画は好きだし」

「はい！わかりました！……そういうえば、どういうお話なんですか？」

「タイムトラベルものの映画って言えば良いのかな？……とりあえず、簡単に概要だけ説明するよ」

そうして、俺はシユタインズ・ゲートの大まかな内容と、この映画の概要を説明した。

「なるほど…少し概要を聞いたのですが、面白そうですね！」

「だろ？俺も友人から進められてアニメから入ったんだけど、すごく面白くてさ！まさか、またこの映画が見られるとは思わなかったよ」

「私も楽しみになってきました！さっそく見ましよう！」

そう言つて、エトは俺の手を引き、スクリーンへと向かうのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「いやあ…久しぶりに見たけど、やっぱり良いな…感動した…」

「そうですね…私も思わず泣いてしまいました…ヒロインの子の心情が痛いほど伝わってきましたし…ソウヤ様…」

そう言つて、エトは俺の腕に抱きつき、言葉が続けた。

「もう二度と、私の前から居なくならないでくださいね…」

「もちろん。皆に心配かけるわけにはいかないし…あんな綱渡りみたいな方法も取りたいとは思わないからな」

「そうですか…でも、やっぱり不安ですね…というわけで、証をくれませんか？」

「証…？」

俺がそう聞き返すと、エトがさらに距離を詰める。

「はい。簡単に言えば…キ…」

「ちよつと待ったー!!」

エトが俺に顔を近づけた瞬間、突如としてそんな声が響いた。

「あれ？ ましろさん？ それに、ソラもあげはさんも、ツバサ君まで…どうしたの？ みんなも映画を観にきたのか？」

「ま、まあそんな感じかな…」

「それよりも、エトさん！ ソウヤから離れて下さい！ いくらなんでも近すぎます！」

「それは出来ない相談ですね…それでは、失礼します！」

そう言つて、エトは俺の手を引つ張り、その場から走り出した。

その後をみんなが追いかけてくる。

「あははっ！ 楽しいですね！ ソウヤ様！」

「ちよつと想像とは違うけどね…というか、逃げる必要がある？」

「それはまあ、ソウヤ様との時間が減つてしまいますし…」

「はあ…わかつたよ。こうなつたら、とことんまで付き合うよ」

「ありがとうございます！ さあさあ、愛の逃避行と行きましょう！」

「はいはい。意味のわからないことを言つてないで、行くよ」

「はい！」

そうして、俺達は手を握り走り続けるのだった。

／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／

「ふう…疲れた」

家に戻ってきた俺は部屋へと戻り、そう呟く。

エトも疲れたのか、俺の中に戻っていた。

だが、帰ってきたエトは満足げだったので、俺としては嬉しい限りだ。

「ソウヤ…入っても良いですか？」

部屋の外からソラの声が聞こえる。

「うん…どうぞ！」

俺がそう言うなり、ソラはすぐさま部屋に入り、俺に抱きついた。

「ソウヤ！大丈夫ですか？変なことされてませんか？」

「いやいや、エトはそんなことしないって…でも、心配してくれてありがとう」

「はあ…良かった…もう、心配しましたよ…」

そう言つて、ソラは隣に座り、俺の手を握る。

そして、俺に寄りかかる。

「ソウヤ…私達、ちゃんとソウヤを助けられたんですよ…」

「うん、この通りだよ…みんなのおかげで、ちゃんとここに居る」

「はい…ソウヤはここに居ます…ソウヤ、私は二度とこの手を離しません…何が起きて

も、絶対に」

そう言つて、ソラは俺の手を強く握る。

「ソウヤ、大好きです…これからも、ずっとずっと一緒に居てくださいね」

「もちろん」

俺は笑顔でソラにそう口にするのだった。

「あ、そういうえば…みんなは何の映画を観に行くつもりだったんだ？」

「え!?…えつと、それは…」

そう言つて、ソラはあたふたとし始める。

うん、なんとなくわかった気がする…まあ、わざわざ言う必要はないか。

「大丈夫。ちよつと気になつて聞いただけだから…」

「ソウヤ、ごめんなさい！実はソウヤとエトさんを尾行していました！ソウヤのことが

心配で…つい」

「いや、まあそんなところだとは思つてたけど…まあ、そんな気にしなくても大丈夫だよ

…とはいえ、あんまり尾行とかはほしくないけど」

「すみません…」

ソラはシユンとした表情でそう口にする。

「…それじゃあ、お詫びとして今度、シドさんとレミさんに挨拶に行く時にチシユーをこ

馳走してよ。ソラン家のチシユー、すごく美味しいからさ！」

「……はい！もちろんです！楽しみにしていてください！」

「うん。楽しみにしてるよ！」

俺はソラの実顔を見ながら、そう答えるのだった。

謎の夢と王様達の日覚め

夢を見ていた。

自分のようで、自分ではない誰かの夢を。

その夢の自分は誰かと話しをしていた。

家族のように話している自分と誰かはまるで兄妹のようだった。

その誰かを俺はどこかで見たことがあるような気がする。

そこまで考えて、その景色が遠ざかる。

そして、夢の最後で誰かの言葉が響いた。

『お兄ちゃん、またね!』

その言葉を最後に俺は夢から醒めるのだった。

「う……ん……」

「ソウヤ……すみません、起こしてしまいましたか?」

「ソラ：おはよう。みんな、もう起きてる？」

「はい。それと朗報です！ミラーパッドにキラキラエナジーが貯まって、王様達の呪いを解く、キラキラポーションが出来ましたよ！」

「それは良かった！これで、王様達を助けてあげられるな！」

「はい！それと、ミラーパッドを通じて、別の世界に繋がったって、ヨヨさんが言ってきました！」

「別の世界？って、ことはあさひ達の世界とも？」

「はい！」

「マジか！すごいな…でも、あさひと遊ぶっていう約束が思ったより早めに果たせそうで嬉しいな」

「そうですね！また会えるのが楽しみです！もしかしたら、あちらの世界の私達にも会えるかもしれません！」

「まあ、そうなったら、ちよつとややこしいことになりそうだけど…でも、楽しみではあるな」

俺がそう答えると、ソラが笑みを浮かべて頷いた。

「よし、それじゃあ準備して、スカイランドに行こう！王様達の呪いを解いて、エルを安心させてあげたいしな」

「はい！行きましょう！ソウヤー！」

そうして、俺達はスカイランドへと向かうのだった。

それにしても、あの夢は一体…最後の言葉も気になるな…まあ、とりあえずは王様達の元へと向かうか。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ソウヤ君！良かった、無事だったんだな…」

「本当に良かった…ソウヤ先輩、あまり無理はしないでくださいね…」

スカイランドにやってきた俺達を出迎えてくれたのは、アリリ副隊長とベリイだった。

「2人共、心配かけてごめん…この通り、今はピンピンしてるから安心してよ」

俺がそう言うと、2人は一瞬呆れたような顔をした後、すぐに笑みを浮かべてくれた。

「まったく、あなたという人は…ソラ、先輩を助けてくれてありがとう」

「いえ、当然のことをしただけです。それに、私1人の力じゃありません」

そう言って、ソラは近くに居た俺とましろさんを手を握り、言葉を続ける。

「みんなの力です！」

「…そうだな。みんなのおかげだ！…あ、みんなと言えば…姉さんはどこに？俺を助けた後、青の護衛隊のみんなに俺のことを報告するって言って、帰っちゃったんだけど」

「ああ、隊長ならもうすぐこちらに来るはずだ」

アリリ副隊長がそう言うのと、姉さんがやってきた。

噂をすればなんとやらだな。

でも、嬉しい限りだ。姉さんに碌にお礼も言えなかつたし。

「ソウヤ！ すつかり元気になったみたいで良かった！」

「姉さん、改めてありがとう。俺を助けてくれて……碌にお礼も言えなくてごめんね」

「いや、良いんだ……私が説明もせずに戻ってしまったからな……それに、私は嬉しいんだ」
「嬉しい？」

「ああ……いつもお前に守られてばかりだったからな……これで、少しは情けない姉から成長出来ただろうか……」

「いや……俺は姉さんのことを情けない姉だなんて思ったことは一度もないよ……いつだって姉さんは俺にとって、最高の姉さんだ！」

「ソウヤ……お前にそう言われると、嬉しいな……」

姉さんはそう言って、照れ隠しなのか、後ろを向いてしまった。

「……隊長、今は存分にソウヤ君を可愛がっても、誰も文句を言いませんよ」

アリリ副隊長がそんなことを言う。

すると、姉さんは振り返り、俺に抱きついた。

「ソウヤ！私はお前の姉さんで本当に良かった！こんなに可愛くて、立派な弟がいて幸せだ！」

「姉さん!?ちよつ！急にどうしたの…変わり身が凄いんだけど…」

「良いじゃないか…先ほどから我慢していたのだから…ああ…こうやって抱きしめるのは久しぶりだな…ソウヤニウムが私の体を駆け巡っていくのを感じる…」

「その謎の言語、まだ残ってたの!?というか、みんな見てるんだけど！」

そうして、周りを見渡すと、困惑している人が数名…そして、微笑ましそうにこちらを見ているアリリ副隊長と、ベリイの姿があった。

「良かったですね、隊長」

「フツッ！先輩が照れくさそうにしてるのを初めて見ました…良かったですね…シヤララ隊長」

その微笑ましいものを見る目はやめてほしいな…まあ、2人は俺が居ない間、ずっと姉さんを見ていてくれていたわけだし、今の姉さんの様子を見たら、微笑ましく思うのかもかもしれないな。

「…まあ、いつか…姉さんの気が済むまでこのままで良いよ…後、アリリ副隊長とベリイもありがとう。姉さんのこと、支えてくれて」

俺がそう言うと、2人は笑顔で頷いた。

そうして、姉さんの気が済むまで待ち、その後王様達の元へと向かった。

そして、キラキラポーシヨンにより、王様と王妃様は深い眠りから目覚め、エルは元氣な両親と再会することが出来た。

「プリンセス！」

「えるう〜！あい〜！」

両親が目を覚まし、エルは2人の元にハイハイで向かう。

そして、王妃様に抱きしめられる。

「えるう〜」

「ああ…無事で良かった！」

エルの無事を確認し、王様と王妃様は安心したような表情をする。

本当に、また会えて良かったな…エル。

「お二人はバツタモンダーの呪いにかかり、深い闇を彷徨っていましたが、もう大丈夫です」

「そうだったのか…」

ヨヨさんの説明に納得したのか、王様はそう答えた。

「ばば！まあま！」

「お喋り出来るなんて…」

「もう一度呼んでっらん」

エルは成長に2人は涙を流す。

本当にエルは成長したな……こつちまで涙が出てきそうだな。

俺はそんなことを思いながら、王様達の様子を見るのだった。

／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼

「えるう〜。えるる〜、え〜る〜」

エルが楽しそうに絵を描いている。

みんなは、王様と王妃様の呪いを解き、ランボーグ化された人を救ったヒーローとして号外の新聞に載り、スカイランドの人々にプリキュアの名前がより知れ渡ることとなった。

その結果、パレードを行う運びとなったのだが、俺はエルに『にーに、えるといつしよ！』と呼ばれ止められ、王様達と一緒にエルを見ることになった。

そんなことを考えていると、エルが絵を描き終えた。

「おお〜！この絵は……私と王妃ではないか！」

「そうですね。エル、上手に描けたな」

そうやって、思わずエルは頭を撫でた。

「こうして見ると、本当の兄妹のようだな……うん？これは何かかな？」

王様がエルの描いた自動車の絵に興味を示した。

「ぶーぶー」

ハンドルを動かすような動作をしながら、エルが答える。

「ぶーぶー？」

「あー…あつちの世界には自動車っていう、乗り物がありました…そのことだと思いません」

「なるほど…そうであつたか…では、これは？」

王様が次に聞いたのは、エルの描いた、おそらく俺達がソラシド市中に住んでいる家だ。

「えるのおうち！」

「ここもプリンセスのお家なのですが…」

嬉しそうに絵について話すエルに、王妃様は少し悲しげな顔をする。

「あはは…多分、第2のお家とかそういう意味だと思いますし、気にしなくても良いんじゃないでしょうか」

「お気遣いありがとうございます」

「いえいえ…というか、本当に俺がここに居て良いんですか？場違いでは…」

「いや、ここに居てくれて良かった…私達だけでは、プリンセスの意図を読み取れなかつただらう…それに」

「()えー！」

「うん？」

王様が何かを言いかけるが、エルが自分の絵を見てほしいと言わんばかりに、絵に手を置く。

「おや、プリンセス、これは？」

「ぶりきゅあー！」

エルが見せた絵は俺を含めたプリキュアのみんなが書かれている絵で、それぞれの特徴がちやんと捉えられていて、プリキュアだとわかる。

すごいな…エル。もしかしたら、俺より上手いのでは？

俺がそんな風に感心していると、エルが立ち上がった。

「とくねくとー！ひおがるしゆかいー！ぶりきゅあー！」

まるで、プリキュアの変身ごっこをするかのように、エルがポーズを決める。

その瞬間、エルの胸の辺りが輝く。

「えるー！える…」

突然の出来事にエルは驚いたようでバランスを崩す。

俺はエルをすぐさま支え、なんとか安全に座らせる。

「ふう…良かった…」

「にーに、あいあと…」

「どういたしまして。…それにしても、さっきの光は一体？」

どこことなくプリキュアの光に似ている気がするけど…今は別に敵もないし、スカイトーンが生み出されたわけでもないのに…どうしてだ？

「今は…」

「あの時と同じ光！」

どうやら、王様と王妃様はエルから放たれた光に心当たりがあるようだ。

「お二人は何か心当たりがあるんですか？」

「うむ…だが、この話は他のプリキュアも交えて話をしたい…プリンセスのこと…そして、そなたのことを」

「俺のこと、ですか…？」

俺の言葉に2人は頷く。

俺はこれからどんな話を聞かされることになるのか、不安に思いながら、王様と王妃様を見るのだった。

一番星と2人の繋がり

「広場でパレード！ワクワクするね！」

「そうですね……ソウヤがいないのが残念ですが……」

私達が王様達を救い、ランボーグ化された人を救ったと新聞でスカイランド中の人に知れ渡り、一躍有名人になりました。

これで、パパとママを安心させられます。

ただ、ソウヤがランボーグにされたとは書かれていませんでした。

それに関しては、シャララ隊長もベリイベリーさんもアリリ副隊長も、ソウヤの為だとしか言ってくれませんでした。

ソウヤ自身に聞いてみたくても、ソウヤはエルちゃんにお願いされ、王様達と一緒にエルちゃんの側にいるため、聞くに聞けない状況です。

「ソウヤの為……シャララ隊長達が嘘を言っているとは思えませんが、一体どういうことなんでしょうか？」

「まあ、シャララ隊長達にも事情があるんだよ、きつと」

「そう、ですね……では、パレードの準備をしに行きましょうか」

そうして、私達はパレードの準備をしに向かうのです。

「わ…私、乗れるかな…」

「大丈夫。スカイランドじゃ、小さい子も乗ってる」

初めての乗鳥体験に緊張している様子のましろさんに、ベリイベリーさんがそう宥める。

「はいはい！あげはさん乗ってみま〜す！」

対してあげはさんはまさにアゲアゲの状態で、鳥さんに乗る。

鳥さんがあげはさんが乗りやすいようにおとなしくしていたおかげで、あげはさんはすぐに乗ることに成功していました。

「優しい〜ありがと！」

「ギャア」

すぐに鳥さんと仲良くなったあげはさんに続くように、ツバサ君も鳥さんに乗る。

「行きましようか、あげはさん」

「OK！」

2人は先に行つてると言つて、先に行つてしまいました。
私達も向かわなければ!

そう考えた私はましろさんに乗鳥のアドバイスをする。

「良いですか? コツは…ヒヨイツ、スーツ、ラッタッターです!」

「…ごめん。擬音だけじゃさっぱりわからないよ…もつと、わかりやすく説明してほしいかな…」

「そうですね…では、お手本をお見せしますね! 見ていてくださいね…」

そうして、私はましろさんにお手本を見せました。

「ヒヨイツ、スーツ、ラッタッター!」

そうして鳥さんに乗り、私は先へと進むのでした。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「おっと、ついこんなところまで…ましろさん、乗れたでしょうか?」

「ソラ」

ふと、シャララ隊長の声が響き、視線を移す。

すると、そこには穏やかな笑みを浮かべたシャララ隊長の姿がありました。

「少し話さないか?」

「はい! ちょうど私もシャララ隊長に聞きたいことがあつたんです」

「そうか…では、あそこで話そうか」

そうして、私達は近くの草原で話をする。

「それで聞きたいことは何だ？」

「はい…ソウヤのことを知らせないことが、ソウヤの為という話がどうしても気になつてしまつて」

「ちようど、そのことについて私も話そうと思つていたところだ。といつても、そこまで複雑な話というわけでもない」

そうして、シャララ隊長は理由を話してくれました。

その理由はシャララ隊長の言う通り、複雑な話ではなく、けれどソウヤへの愛を感じる理由でした。

ソウヤがシャララ隊長の弟だという理由で他の人から色眼鏡で見られることがないように…そして、言われのない中傷からソウヤを守るため…シャララ隊長はそう言いました。

「そうだったんですか…」

「ああ。…ソラ、これからもあの子のことをよろしく頼む」

「もちろんです！ましろさんとあげはさんにもソウヤの隣は譲りません！」

「…ソウヤは、相変わらず好意を持たれやすいのか…2人はソウヤとソラが付き合つて

いるのを知っているのか？」

「はい。実は、ソウヤを助ける前にみなさんにソウヤと私が付き合っていることを話したんです」

「そうなのか…2人はなんと言っていたんだ？」

「最初は驚いていたんですけど、2人共、負けなと言っていました…どうやら、ソウヤを諦めてはくれないようです」

「そ、そうか…我が弟ながら、凄まじいな…ソラは大丈夫なのか？」

「はい…さつきも言いましたが、ソウヤは誰にも渡しません！」

私がそう言うと、シヤララ隊長は少し苦笑した後、頑張れと言ってくれた。

「ソラちゃん！やったよー！」

ましろさんの声が聞こえて振り返ると、ベリイベリーさんに連れられながら、ましろさんがやってきていました。

そうして、私達はましろさんと合流し、先に行ったあげはさんとツバサ君を追いかけるのでした。

／／／／／／／／／／／／／／／／／

「ソウヤ！」

「ソラ！それにみんなも！」

王様達がみんなを呼び寄せたと聞き、迎えに行くと元気なみんなの姿があった。

「どうだった？」

「はい！楽しかったです！ここに来る前にみんなで、ドールポーナツを食べたりもしたんですよ」

「そっか、それは良かった。…でも、ましろさん達からすると、ややこしくなかった？あれはボールドーナツにそっくりだし、名前も似てるし…」

「うん…正直、未だに頭が混乱してるよ…」

ましろさんはよほど困惑したのか、そんなことを口にする。

「そっか…それはお疲れ様だったね…まあ、そういうのも含めて別の世界ってことなんだろうけど。…うん？思ったんだけど、そんな中、俺達が出会えたことって奇跡みたいなものなんじゃ」

俺がそう言うのと、みんなが驚いたような顔をした。

「うん？どうかしたの？」

「いや、ましろんと同じようなことを言ったから…ちよつとびつくりしちゃって…」

「なるほど、そういうことか…」

「私とソウヤ君は以心伝心だね！」

そう言って、ましろさんは笑みを浮かべる。

「そうなるのかな?…まあ、ともかく王様達の所に向かおう」

そうして、俺はみんなと一緒に王様達の所へと向かうのだった。

「勇敢なるプリキュア達よ、そなた達には何度も救われた」

「プリンセスのこと、私達の呪いを解いてくれたこと…本当にありがとうございました」
「そしてもう一つ…大事な願いを聞いてはもらえまいか?」

王様はそう言つて、真剣な顔をする。

もちろん王妃様も同じく真剣な表情をしている。

そして、言葉が続けた。

「この子を…プリンセスを再びあなた達の世界に連れ帰つて欲しいのです」

「「「ええっ!?!」」」

突然の発言に俺達は、驚きの声を上げる。

「どうしてプリンセスをソラシド市に?」

「ツバサ君の言う通りですよ!何でエルをソラシド市に?ようやくお二人と再会出来たのよ!」

ツバサ君の言葉に俺もそう続ける。

「我々も可愛いプリンセスと一緒に居たい…だが、この子は『運命の子』なのだ」
「運命の子…?」

俺の眩きに答えるように王妃様が言葉を紡ぐ。

「あれは1年ほど前のこと…」

そうして、王妃様は当時の出来事について語り始めた。

『ここに居たのかい?』

『あなた…今日は特に空が美しく…あら?もう一番星が…』

そうして、一番星を眺めていると、一番星からこの子が降ってきたのです。

慌てて王様が抱きかかえ、私達はこの子の姿を見た。

『この子は一体…』

《その子は『運命の子』。滅びの運命にあるこのスカイランドを救ってくれるでしょう》

一番星の言葉に私達は困惑を隠しきれませんでした…そして、さらに一番星は言葉を続けました。

《あなた達の手でこの子を育てるのです。ただし、そう遠くない未来に旅立ちの知らせが届きます。あなた達はそれまでの間、面倒を見るだけの、謂わば仮りその親…親としての時間はほんのひと時…それでも良ければ、この子の手を取りなさい》

『私達が断つたら、この子は？』

《その時は、他の適任者を探すのみです。…ですが、私としてはあなた達にお任せしたいのです》

『どうして？』

《…いずれあなた達の前に私のヒーローが現れます。その時に彼の力になってほしいのです》

『あなたのヒーロー？』

《この子と共に滅びの運命を変える、私を救ってくれたヒーローです。そして、その子の兄でもある》

『この子の！？』

その言葉に私達は驚きを隠せませんでした。

まさか、目の前のこの子に兄が居るとは思ってませんでしたから。

《2人は謂わば魂の兄妹…血の繋がりこそありませんが、魂で繋がっているのです。例え、生まれ変わっても、必ず再会する…そんな魂の繋がりがあるのです。…さて、語る

べきことは語りました…後はあなた方次第です」

そう言つて、一番星は私達に選択を委ねました。

『…あなた、私にもその子を抱かせてください』

そう言つて、私はあの子を抱いたのです。

その時の温かい気持ち私はずっと忘れることはないでしょう。

『なんて可愛らしくくて…なんて儂いなのでしょう』

『うう…』

その時、あの子は目を開いたのです…そして、不安そうな表情を浮かべていました。

『大丈夫。何も心配はいらない』

王様がそう言つて、あの子の手を握ると、安心したような表情に変わりました。

『えるう…』

『エル…この子の名前、エルはどうでしょう？』

王様もそれに賛成し、エルも嬉しそうに笑みを浮かべていました。

『エル…今日からここがあなたのおうち…私達があなたのパパとママよ』

／／／／／／／／／／／／／／／／

「そして、プリンセスに再び運命の光が宿つた…無情にも旅立ちの知らせを告げたのだ」

王様達の話の聞き、俺は思いの外冷静だった。

なんとというか、話を聞いて妙に腑に落ちたというか…まるで、そうであるのが当然かのような認識が俺にはあった。

これが、魂で繋がっているということなんだろうか…まあ、なんであれ、俺達のやることは変わらない。

「なあで、なで…えーん、ちないよ。いいこ、いいこ〜」

涙を浮かべている自分の両親に、エルは体を動かし、励まそうとしているのが目に入る。

こんな優しい子を助けない理由なんてないからな。

「こんなにも優しい子になっていたのね…」

エルの優しさに触れた王様達は涙を拭き、言葉を続けた。

「そうね。きつと大丈夫…ここを離れても、あなたには守ってくれる温かな家…家族がいるんだもの」

「家族…」

ましろさんがそう呟く。

家族か…：そうだな…俺達は家族みたいなものだ。

「アンダーグ帝国はこれからもスカイランドや、そなた達の元へ刺客を差し向けるに違いない。危険を背負わせてすまぬ…だが、どうかプリンセス・エルを守ってほしい」

王様のそのお願いに、俺達は頷くのだった。

澄み切った青空と一番星

「まさか、ソウヤとエルちゃんが兄妹だったなんて…びっくりしました！」

「そうだな…俺も思ったよりその事実を受け入れてる自分にびっくりしてる」

「ソウヤ君は、そんなにびっくりしてないんだね」

俺の言葉にましろさんがそう口にする。

「うん。自分でも不思議なんだけど…エルと魂の兄妹って言われても、違和感なくてさ…むしろ、そうであることが当たり前みたいに感じてるんだ」

「まあ、確かにソウヤ君はエルちゃんのお兄ちゃんみたいな感じだったもんね…もしかしたら、ソウヤ君もエルちゃんが妹だって、心のどこかで覚えてたのかもね」

あげはさんがそう言うのと、ツバサ君がハッとしたような顔をして突然、言葉を口にす
る。

「プリンセスとソウヤ君が兄妹ということとは…次の王様はソウヤ君になるんじゃない！」

ツバサ君の言葉にみんなもハッとする。

「いやいや、みんな、落ち着いてよ…俺とエルは血が繋がっているわけじゃないし、それはないよ。それに俺が王様とか絶対に向いていないって」

「そうですか？ソウヤが王様になったら、とても良い王様になりそうですけど…」
ソラが笑みを浮かべながら、そう口にする。

「まあ、そう言ってくれるのは嬉しいけど…そもそも、王様達も健在だし、滅多なことは言うもんじゃないって」

「確かに、それもそうですね」

ソラは苦笑しつつ、そう言葉を紡ぐ。

「さて、それじゃあパレードの準備をしに行こうか！」

俺がそう言うと、みんなも頷き、俺達はパレードの準備に向かうのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「…で、何故俺はここに？」

「にーに、えるといっしょ！」

「ソウヤさん、申し訳ありません…プリンセスがどうしてもあなたと一緒に良いようにして…」

「はははっ！プリンセスはよほどそなたのことが好きなようだな！正直、少し羨ましいほどだ」

パレードに向かう途中で、俺は姉さんに呼び止められた。

なんでも、王様達が俺を呼んでいるとのことで、そのまま向かうと、王様達と共にパ

レードを観ることになってしまった。

俺もプリキュアだし、本来ならパレードに参加する側のはずなんだけど…どうやら、エルのお達しらしく、王様達もその想いを尊重することにしたようだ。

「にーにー！だいすき〜！」

そう言つて、エルはこちらに歩いてくる。

俺は歩いてきたエルをそのまま抱っこする。

「ありがとう。俺もエルが大好きだよ」

そう言いながら、エルの頭を撫でる。

エルは満足げに笑う。

「プリンセスも嬉しそうですね！」

「あはは…エルが嬉しそうで良かった…」

「さて、では我々はパレードを見るとしよう」

そうして、俺達はみんなのパレードを観ることにするのだった。

「むむ…まさか、ソウヤがまたしてもエルちゃんと一緒とは…もしかして、エルちゃん、

わざとソウヤを連れて行ってませんか？」

「まさか……エルちゃんはそのなことしないよ……しない、よね？」

「ソウヤのことが気になるのはわかるが、今はお前たちのやるべきことに専念するんだ。せつかくだ、ソウヤにもお前たちの活躍を見せてあげよう！」

シヤララ隊長の言葉に私達は領き、ますますやる気を出します。

そうして、シヤララ隊長が先導を務め、パレードを始めようとすると、突然一つの黒い雲が現れました。

「やだなあ……いじわる雲か」

「何？それ」

「晴れている時に1つだけ現れる黒い雲のことをスカイランドではいじわる雲って呼ぶんです」

せつかくの晴天なのに、これでは台無しです。

「私達でなんとか出来ないかな？スカイランドの晴れた空、エルちゃんに見せてあげたい！ソウヤ君もきつと、そっちの方が嬉しいと思うし！」

「そうですね！やりましょう！」

そうして、私達はプリキュアへと変身する。

「無限にひろがる青い空！キュアスカイ！」

「ふわりひろがる優しい光！キュアプリズム！」

「天高くひろがる勇氣！キュアウイング！」

「アゲてひろがるワンダホー！キュアバタフライ！」

「レディ・ゴー！」

「ひろがるスカイ！プリキュア！」

そうして、私達はプリキュアに変身した。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「プリキュア！アツプドラフト・シャイニング！」

スカイとプリズムが合体技を放ち、黒い雲を晴らす。

「おお！さすがスカイとプリズムの合体技だな！空が澄み切ってる」

スカイ達が放った必殺技によって、青空がひろがる。

そして、さらにウイングとバタフライが続ける。

「次はボク達に任せてください！」

「オッケー！」

バタフライがそう返事し、ミックスパレットを使用する。

「2つの色を1つに！レッド！ブルー！ワンダホーにアゲてこー！」

すると、紫色のエネルギーがウイングを覆う。

「何が出るかな？ サプラーイズ！」

ウイングが航空シヨーのように空を飛び回り、エルの似顔絵を空に描き、花火が上がった。

それに周りの人達話ワンダホーと歓声を上げていた。

「みんなすごいな！ よーし、俺も！」

みんなのシヨーに俺もテンションが上がり、見ている場所から飛び出す。

「にーにー！」

「エル、ちよつと待っててくれ。一番星を見せてあげる！」

そう告げて、俺はプリキュアへと変身する。

「静寂ひろがる夜のとばり！ キュアナイト！」

「「「キュアナイト！」」」

「遅ればせながら、私もパレードに参加させて頂きますー!」

そう言つて、俺は辺りに5本の槍を出現させ、浄化技の準備をする。

「ヒーローガール! ナイトミラーージュ!」

5本の槍と共に空中に飛び、槍がキュアナイトの姿に変化する。

そして、空に星を描くように高速で移動し、最後に俺が描かれた星の中心にキックする。

すると、空に描かれた星が輝き、一番星となつた。

「少々、早い時間の一番星ですが、喜んでもらえたでしょうか?」

俺がそう呟くと周りから歓声が上がつた。

どうやら喜んでもらえたみたいだ。

「ナイト! すごく良かったです! エルちゃんも喜んでくれますよ!」

「みんなも、とても澄み切った青空にしてくれてありがとう! この一番星も喜んでもらえたなら嬉しいよ!」

俺がそう言つと、スカイがそつと俺の手を握る。

「ナイト! …いえ、ソウヤ! …私、二度とこの手を離しません。ソウヤに何かあれば必ず助けます! …あなたに守られるばかりじゃなく、隣に立って一緒に戦います!」

「ソラ! …」

「私も同じ気持ちだよ」

プリズムも同じく俺の手を握り、そう口にする。

「私もソラちゃんと同じ気持ちだよ……絶対にこの手を離さない。ソウヤ君の隣に立って、一緒に戦う……二度と失わないためにも」

「ましてさんも……2人とも、ありがとう」

「ちよつとー、私達のこと忘れないでよ！ソウヤ君の力になりたい……二度と失いたくないって思ってるのは私達だって同じなんだからね！」

「そうですよ！ボク達のことを忘れないでくださいね！」

「もちろん。忘れてないよ……あげはさんもツバサ君もありがとう。これからもよろしくね！」

俺がそう言うと、2人は笑顔で頷いてくれた。

まだまだ俺達の戦いは続くだろう……だけど、みんなと一緒に乗り越えられる。

俺は澄み切った青空を見ながら、そんなことを思うのだった。

みんなで動物園に行こう!

「にーに、だっこ!」

「はいはい…」

エルにねだられ、抱きかかえる。

「エルちゃん、お兄ちゃんにべったりだね〜! 本当にお兄ちゃんのことを大好きなんだね!」

あげはさんの言葉にエルは笑みを浮かべる。

俺達がスカイランドから帰ってきてからというもの…エルは以前に比べて甘えてくる頻度が増えてきた。

といっても、毎日というわけでもないし、我儘を言ったりもしないから被害は少ないが。

「ソウヤ君もエルちゃんに優しいよね〜。やっぱり、お兄ちゃんからすると、妹は可愛いものなのかな?」

「まあ、そうかもかもしれない…うちの姉さんも俺に優しいし、弟とか妹は可愛いものなのかも…もちろん、そうじゃない人もいるだろうけど」

「あはは…：シヤララ隊長とソウヤ君の仲の良さは普通の姉弟とは違う気がするけど…」
何故か苦笑しながら、あげはさんはそう口にする。

俺と姉さんからすると、あげが普通なんだけどな…：まあ、確かに姉さんは心配性ではあるけども。

「まあ、それはさておき、ソラ達の準備はそろそろ終わったかな？」

「そうだね。ソラちゃん達の所に行こう！」

あげはさんの言葉を聞き、俺は頷く。

ちなみに準備というのは、動物園に向かう準備だ。

ソラ達はその準備をしていたはずなんだけど、未だに部屋から出てこないし、何かあったのかもしれないな。

そんなことを思いながら、あげはさんと一緒に部屋の前にやってきた。

「みんな、準備出来た…：つて、ええ!？」

「えつと、どうしたんだ？みんな…」

「えゑゑ？」

部屋の扉を開けると、そこには奇妙な光景が広がっていた。

何故かアメフトの恰好をしているソラとましろさんとツバサ君という奇妙な光景。

俺はその光景を見て、苦笑するしかできなかった。

「えっど?…流行ってるの?それ」

流石のあげはさんも困惑しているようだ。

そうして、とりあえずアメフトの恰好をやめるように3人に言い、元の服装に戻してもらってから、俺達は動物園に出発するのだった。

「なるほどね…それであんな奇行に走ったのか」

「奇行って言わないでくださいよ…ボク達はただ、プリンセスを守ろうとしただけです」
俺の膝の上にプニバードの姿で座っているツバサ君はそう口にする。

動物園に向かうためにあげはさんの車に乗り込む際、ツバサ君がプニバードの姿になり、助手席に俺を座らせてくれた。

そして、車の中で事情を聞くと、エルが運命の子だと知り、もつと良いご飯を食べさせた方が良くはないか…もつと豪華な服を着せた方が良くはないか等、色々と考えすぎてしまい、何故かアメフトの恰好にたどり着いたらしい。

まあ、わからないでもないけど。

「みんな、色々考えすぎー!」

「あげはさんの言う通りだ。みんな、色々と考えすぎだよ…例え、エルが運命の子だろうと、俺達にとつてのエルが変わるわけじゃないんだからさ」

「そうかもしれないね…まあ、わかっていても考えすぎてしまうのですが…」

「これに関しては慣れていくしかないかもね。…ところで、あげはさん…1つ聞きたいんだけど」

「どうしたの？」

「何でまた俺は女装させられているんですか？」

「ほら、アンダーグ帝国の敵がどこかに潜んでいるかもしれないし、変装は大事でしょう？」

「なるほど」

確かにその可能性は高いかもしれない…実際、俺の変装は効果があったしな。

ちなみに今回の恰好は薄紫色の長いウィッグをつけ、黒いキャップを被り、白の長袖に、青のショートパンツに黒のニーハイソックスと白のスニーカーという動きやすい恰好になっている。

「…わかりました。とりあえず、今日はこれで行きましょう」

「そう…なくっちゃ！あつ、見えてきたよ！ソラシド自然公園！」

あげはさんの言葉を聞き、視線を移すと、ソラシド自然公園の看板が目に入った。

そして、俺達は自然公園に入るのだった。

「わあ!カピバラですよ!」

／／／／／／／／／／／／／／／／／／

自然公園に入り、最初こそエルもソラシド自然公園のテイラノサウルスの姿をしたマスコットキャラ、ソラシノサウルスに怯えていたが、みんなが楽しみにしてる様子を見たおかげか、こうして中に入ることができた。

そして、最初にカピバラを見にきたのだ。

「カピバラさん、水浴びしてるね!」

ましろさんの言う通り、カピバラは気持ちよさそうに水浴びしている。

そして、しばらくそんなカピバラを眺めていると、一匹のカピバラがこちらにやってきた。

「あれ?なんかこっち来たよ」

カピバラがエルの前に歩いてくる。

「キューキュー」

〈ご飯ちようだい〉

「うん?」

「える?」

俺とエルは同時にそう口にする。

今、声が聞こえたような…気のせいだろうか？

「かぴら、ッはん？」

エルの呟きに周囲を見渡すと、ここに訪れた人がカピバラにご飯をあげることが出来るようにカピバラのご飯が置いてあった。

それに気づいたあげはさんが、ご飯のところに向かう。

「私達がご飯をあげられるんだ！それで近づいてきたんだね」

「なるほど…うん？じゃあ今のって幻聴じゃない？」

まさか、俺とエルは動物と話せるのか？これも魂で繋がっている影響なんだろうか。

そんなことを考えながら、カピバラのご飯を取りに行く。

「あ、ソウナさん、プリンセスにご飯を持っていくんですよね？ボクが持っていきますよ」

「…そんなに気を遣わなくても良いんだけど…でも、ありがとう。それじゃあお願いしようかな」

「はい！任せてください！」

そうして、ツバサ君と一緒にエルの元に向かい、持ってきたご飯をエルに渡す。

それをエルは受け取る。

そして、持ってきてくれたツバサ君にお礼を言い、さっそくカピバラにご飯をあげる。

「どうぞ」

「キュー」

〈おいしいよ!〉

「かぴら、おいちゅね!」

また声が聞こえた…:どうやら、俺とエルは動物と話せるようだ。

「何ですか?あの動物!何だかビョクンってしてます!」

そんな風にソラが興味を示したのはゾウだった。

「あれはゾウだね…:うわあ!久しぶりに見るよ!」

スカイランドにゾウはいなかったから本当に見るのは久しぶりだ。

こうして改めて見ると、本当に大きいよな。

「うわあ!本当だ!本物のゾウだ!ゾウはあの鼻を手みたいに使うんですよ」

ツバサ君の解説が入り、思わずうんうんと頷く。

ツバサ君は本を読んでいるみたいだし、動物についても詳しいんだらうな。

そんなことを思いながら、次の場所へと向かう。

すると、またまたソラが動物に興味を示した。

「大変です！あのお馬さん、首が伸びちやつてますよ！」

「あれは、キリンさんだね！そういえば、キリンさんってなんで首が長いんだろう…」

「キリンは、高い所にある葉っぱを食べるために進化して、首が長くなったそうですよ」

「そうなんだ！ツバサ君は詳しいね」

「そんな…ボクはただ、本で読んだことがあるだけで」

「それでもすごいよ！教えてくれてありがとう」

「…ソウナさんのためになったなら、良かったです」

「こちらの世界の動物は摩訶不思議です…それにしても、なんだかツバサ君、ソウヤがソ

ウナさんになっている時の様子がおかしいような…」

「あはは…ツバサ君は色々と困惑してるんだよ。ソウナちゃん状態のソウヤ君は本当に

女の子みたいだし」

「本当にソウヤ君は演技が上手だよね…」

みんなの視線が気になり、そちらを向く。

「みんな、どうかしたの？」

首を傾げてそう言うと、みんなは何でもないと行って、首を横に振った。

「そう?それじゃあ他の動物を見よう!」

そうして、俺達は他の動物を見ることにするのだった。

「あつ!あの馬はスカイランドのシマシマウマに似てます!色はちよつと違いますけど
…」

「そうだね…シマシマウマは青と白だし」

「ですね」

「青と白!」

俺達の話にましろさんとあげはさんは驚いている。

まあ、それはそうだろう…こっちの世界のシマウマは黒と白だしな…青と白のシマウマとか、俺もスカイランドで生活してなかったら、驚いたと思うし。

「スカイランドは空の上にありますから。空と同じ色をしていると他の動物から見つかりづらくなるんです」

「それに、シマウマ以外にも牛や犬…あと、パンダなんかも青と白だったりするの!」
ツバサ君の言葉に続けるように、俺はそう口にする。

「私達からすると、そつちの方が不思議なんですけど！でも、見てみたいね！」
「うん！見てみたいなあ〜」

2人の反応を見てみると、エルが動物達に声を掛けた。

「おいで、おいで〜！」

エルがそう言うと、近くの動物達が集まってきた。

「ほ、ほんとに来ちゃったよ！」

「ぞうしゃん、ちりんしゃん、しまましゃん！」

エルが動物達の名前を呼ぶと、みんなエルに挨拶していた。

「つて、俺にも挨拶してる？なんで…えつ、俺もプリンセス扱い？おかしくない？」

「にーに、いっしょだね〜」

「あ、あはは…そうだね、エル」

「まさか、こちらの世界の動物は赤ちゃんが大好きなのでしょうか？」

「まあ、その可能性はあるかもだけど…多分、エルは動物と話せるんじゃないかな？」

「やつぱり、ソウヤ君もそう思うよね！」

ましろさんの言葉に頷くと、ツバサ君が言葉が続けた。

「わあ…！それならボク、話してみたい動物がいるんです！」

「話してみたい動物？」

「はいー！」

そうして、俺達はツバサ君の話してみたい動物を見に行くことにするのだった。

新たな敵

「というわけで、ライオンさんを見にきたわけだけど……」

ツバサ君が話したいと言っていた動物は百獣の王と呼ばれているライオンだった。

だが、今のライオンさんは眠っていた。

「……寝ちゃってますね」

「まあ、ライオンさんは夜行性だって聞いたことがあるし、今はお昼寝の時間なんだろうね」

俺がそう言うと、ツバサ君が頷く。

「起こすのも申し訳ないし、また機会があったら……」

そう言つて、その場から去ろうとすると、ライオンさんが目を覚ました。

「あつ、起きた！ 起きましたよ！」

ツバサ君が嬉しそうに口にする。

だが、どうやらライオンさんはそうではなかったらしい。

「グルルル……ガオーッ！」

へうるさい！ 昼寝の邪魔するな！ 静かにしろ！

ライオンさんの叫びに、俺達は驚いてしまう。

ごめんね…お昼寝の邪魔しちゃって。

俺は心の中で謝罪しつつ、ライオンを見た。

だが、特に反応はない…どうやら、テレパシーみたいな感じではないようだ。

「プリンセス！ライオンさんがなんて言ってるかわかりますか？」

「らいおんしゃん、ぶんぶん！ねんね、しー」

「うるさい…昼寝の邪魔するな、静かにしろだって…ライオンさん、お昼寝の邪魔して、

ごめんね」

「そうだったんですね…ライオンさん、ごめんなさい」

「「ごめんなさい」」

ツバサ君の言葉にソラ達も続けて謝罪する。

そうして、俺達はその場を後にした。

「…あれ？ソウナさんもライオンさんの言葉がわかったんですか？」

ライオンさんの場所から、他の場所に移動していると、ツバサ君がそんな質問をする。

「うん、そうみたい。最初は幻聴なのかとも思ったんだけど、何回も聞こえたら動物の声

が聞こえてるとしか思えないよ…多分、私とエルは魂で繋がっているから、エルと同じ

能力も使えるのかも」

「なるほど…」

「なんにしてもすごいですよ！」

ソラが嬉しそうにそう言う。

「にーに、しゅごい！」

「これはエルのおかげでもあるけどね…ありがとう」

そんな会話を交わしながら、俺達は移動を続けるのだった。

//// //// //// //// //// //// ////

「やっぱり、エルちゃんも動物とお話できるみたいだよ。まさか、ソウヤ君も動物とお話できるとは思わなかったけど」

「そうだね…俺もびつくりしたよ…」

草原で一旦休憩を取ることにし、レジャーシートをひき、おにぎりを食べたりしながら、俺達は和やかに会話を交わす。

「これから、もつといろんな力を使えるようになるんでしょうか？」

「あり得るかも…ただでさえ、私達をプリキュアにしたり、不思議な力を持つてるんだし」

「もしかしたら、空が飛べたり…？」

「力持ちになったり？」

「目からビームを出したり?」

「みんな、想像力が豊かなのはいいけど、発想が飛躍しすぎじゃない? あり得るとしてもプリキュアになるとかだと思うけど…あれ? もしかしてプリキュアになったら、みんなの想像が全部あり得るんじゃない?」

プリキュアになったら、力持ちになるだろうし、空が飛べたりもするかもしれない…目からビームは、正直わからないけど、浄化技が目からビームとかの可能性もなくはない。

冗談で言ってみたつもりだったんだけど、割と有り得そうでちよつとびつくりだ。

「そ…そんなの、ハイパーズゴスギ赤ちゃんだよ! やっぱり、ご飯にも、もつと拘るべきかも!」

「やっぱり今からでも英才教育をするべきなんでしょうか?」

ましろさんとツバサ君が再び考えすぎモードに突入してしまったようで、頭をかかえていた。

そして、ソラも言葉が続けた。

「まさか、こんなにあく早くエルちゃんにスカイランド神拳を伝授するときは来るとは…」

「それはまだ早すぎるんじゃない?」

「流石に早すぎるって…そもそも、エルはまだ体が出来てないんだからさ…スカイラン

ド神拳を教えたら体を壊しちゃうよ」

「うっ…確かに、それもそうですね…一体どうすれば!」

ましろさんとツバサ君につられるようにソラまで考えすぎモードになってしまったみたいだ。

「みんな、落ち着いて!また考えすぎモードになっちゃつてるよ」

あげはさんがみんなを落ち着かせるためにそう口にする。

「じゃあ、あげはちゃんはどうすれば良いと思う?」

ましろさんがそう尋ね、あげはさんはそれに答えたは

「わかんない」

「「ええ〜!」」

あげはさんの言葉に、みんなは驚く。

そんなみんなの様子を見ながらあげはさんは言葉を続ける。

「だってそれ、プリンセスや運命の子じゃなくなつて、パパさんママさん、みんな悩んでいることだし!」

あげはさんの言葉に俺は思わず頷く。

「絵本は何を読めば良い?習い事はさせる?させない?素敵な大人になってほしくて、みんな悩みながら育ててるんだよ」

「そうだね…うちの姉さんも俺の将来について、めちやくちや悩んでくれてたし…俺に隠れて、みんなで家族会議をしてくれるぐらいでさ」

昔、家族会議をしているところを見たことがあり、迫力がすごくて、こっそりとその場から去ったこともあったっけ。

そんなことを考えていると、エルが俺達に声を掛けてくる。

「いたいたい、ちた？」

「いえ、そういうわけでは…」

「たいのたいの、とんでけ〜！」

俺達の心配をしてくれたのか、エルはそう言ってくれた。

「エル、ありがとう。本当にエルは優しい子だね！」

エルの頭を撫でながら、そう口にする。

「ありがとう！エルちゃん」

「プリンセスのおかげで、いたいのは空の向こうまでとんでいきました！」

俺の言葉にましろさんとツバサ君が続ける。

その言葉にエルは笑顔で返した。

「どたまちて！」

俺はそんなエルの頭を再び撫でる。

エルがどんな風に成長するかはまだわからないけど、このまま心の優しい子に育ってくれたら、嬉しいな。

俺は頭を撫でられて嬉しそうなエルを見ながら、そんなことを思うのだった。

／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／

「わあ〜！」

「うしゃしゃん、かわい〜ね〜」

俺達が次にやってきたのは、小動物達のコーナーだ。

ソラとましろさん、そしてツバサ君はぶいぶい鳴く小動物を撫でていて、エルはうさぎさんを撫でていた。

俺とあげはさんはその様子を見ていた。

「よ〜ち、よ〜ち」

「エルも楽しそうで良かった。…っ！これは！」

ふと、邪悪な気配を感じる。

これは、カバトンやバッタモンダー…アンノウンとも違う気配だ…アンダーグ帝国の新たな刺客か？

「ソウヤ君、どうかした？」

「…邪悪な気配を感じました…ちよつと様子を見てきます。あげはさんはみんなの様子

「静寂ひろがる夜のとばり！キュアナイト！」

「なるほど…お前があのかキュアナイトだったか！我は運が良い！まさか、いきなり最強のプリキュアと手合わせ出来るとは！」

「最強のプリキュア？私は随分と高く評価されているんですね…まあ、今はそれよりも…」

「では、始めようか！キュアナイト！」

そう言つてミノトンが構え、俺も構える。

そして、俺達は同時に飛び出し、お互いの拳がぶつかる。

すぐさま俺は距離を取り、ミノトンが攻撃してくるのを回避する。

すると、ミノトンの蹴りが空を切る。

だが、ミノトンは動揺することもなく、高速で接近し殴り掛かる。

それを俺は受け流し、バランスを崩したミノトンに蹴りを入れる。

（こいつのスピードとパワーはカバトンやバッタモンダー以上だ…アンダーグ帝国最強の武人を名乗るのも領けるな）

そんなことを考えつつ、戦いを続ける。

そして、再び拳がぶつかる。

そうして、俺達はお互いに距離を取った。

「流石だな、キュアナイト……噂に違わぬ実力だ」

「そちらも。アンダーグ帝国最強の武人を名乗るだけではありませんね」

俺達がそんな会話を交わしていると、後ろから声が響く。

「ナイト！無事ですか！」

「無理しないで言って言ったのに、もう戦ってるじゃん！」

「本当ですよ！一人で行くなんて、水臭いじゃないですか！」

「私達も一緒に戦うよ！」

「みなさん……気を付けてください、今回の刺客は今までのやつ以上に強いです」

そうして俺達は合流し、臨戦態勢を取るのだった。

武人の意気とエルの成長

「その赤子、プリンセス・エルとお見受けする…なれば、貴様らが他のプリキュアか…であるなら、再び名乗るとしよう！我が名はミノトン！」

合流したみんなを見て、ミノトンは再び名乗りを上げた。

「ミノトン…ってことはカバトンのお兄さんとか？」

「あんな下品で下劣な愚か者と一緒にするでない！」

ましろさんの眩きに、ミノトンがそう叫ぶ。

「ひゃっ！」

そんなミノトンにましろさんがびっくりした声を上げる。

だが、ミノトンは構わず言葉を続ける。

「意地汚いわ、オナラで戦うわ…武人の風上にも置けんわ！」

どうやら、カバトンは禁句だったようだ…でも、ましろさんが言ったお兄さんという言葉に反論していない辺り、カバトンの身内である可能性は高そうだ。

「我こそ、まことの武人。キュアナイトの次はお前達に手合わせ願おう！来たれ！アンダーグエナジー！」

そうやって、ミノトンはソラシノサウルスにアンダーグエナジーを注ぎ込み、恐竜のランボーグを出現させた。

「ラン…ボーグ！」

恐竜のランボーグは咆哮しながら、いつもの台詞を口にした。

「みなさん！来ますよ…：エルは安全な場所に隠れていて！」

「える！」

エルは俺の言葉に頷き、空飛ぶ揺り籠に乗って、安全な場所に移動した。

『エト、エルを頼んで良いか？』

『もちろんです！エルちゃんのことには任せてください！ソウヤ様の妹は私にとっても妹

同然ですし、そうでなくとも、あんな小さな子を放っておけません』

『うん、ありがとう』

『いえいえ。それでは行ってきます！』

そうやって、エトはエルの元に向かった。

そして、エルが避難したのを確認したみんなはプリキュアへと変身する。

「無限にひろがる青い空！キュアスカイ！」

「ふわりひろがる優しい光！キュアプリズム！」

「天高くひろがる勇氣！キュアウイング！」

「アゲてひろがるワンダホー！キュアバタフライ！」

「レディー・ゴー！！」

「ひろがるスカイ！プリキュア！」

そうして、みんなはプリキュアへと変身を完了した。

／／／／／／／／／／／／／／

変身を終えた俺達はランボーグとの戦闘を始める。

「やあっ！」

プリズムがランボーグに白の気弾を放つ。

だが、ランボーグはそれを嘯み砕いた。

「ええ!?」

プリズムのそんな声が響くが、ランボーグはそのまま攻撃を続ける。

「我はアンダーグ帝国最強の武人！故に、我が生み出すランボーグもまた最強なのだ」

ランボーグが攻撃を仕掛けるが、バタフライがバリアを展開して、その攻撃を防ぐ…

だが、ランボーグそれをも嘯み砕いた。

「…流石に、テイラノサウルスをモチーフにしているだけではありませんね…」

「テイラノサウルスって、あの?」

バタフライがそう質問する。

「そうです。あの最強の恐竜で有名な…確か、顎がかなり強かったはず。もし、アニメとかのイメージも引き継いでいるなら、炎とかも吐いてくるかも」

「ナイトの言う通りです! ソラシノサウルスのモデルはテイラノサウルス、顎がとても強いんです!」

ミラーパッドで情報を確認したウイングがそう口にする。

「顔が駄目なら、体を狙うまでです…」

そう言って、スカイがランボーグに回り込んで攻撃を仕掛けようとする。

「危ない!」

俺は咄嗟にスカイの後を追いついて、すぐさまスカイを抱えてその場から移動する。

すると、ランボーグの口から火が放たれた。

「やっぱりも火も吐いてきた!」

「助かりました! ナイト」

「まだです! みなさん、回避を!」

俺がそう言うと同時に、ランボーグが空中に飛び、そのままヒップドロップをしてく

る。

俺達はそれを回避し、ランボーグから距離を取る。

…流石に、恐竜を相手にするのは厄介だな。

「えるう…えるう？」

『どうかしましたか？エルちゃん』

エルちゃんがこっそりと木陰から辺りを見渡しているのを見て、私も思わず辺りを見渡す。

すると、一匹の白いうさぎさんが目に入った。

「うしやしゃん！…たしゆける！」

そう言つて、エルちゃんはそのうさぎさんを助けに向かつてしまう。

『エルちゃん!?!危ないですよ…もう、誰に似たんでしようね…!』

私も慌てて後を追うと、エルちゃんがうさぎさんを落ち着かせていた。

「だいじよぶ…よくちよち」

『エルちゃん、今すぐここから離れましょう！危険です』

私の言葉にエルちゃんは首を横に振る。

「うしゃしゃん、こわいこわい…える、たしゆけたい」

そう言つて、エルちゃんはこちらを真つ直ぐ見る。

…流石は兄妹と言つたところでしょうか…そんな真つ直ぐ見られたら、断れませんですよ。

「わかりました。なら、戦えずとも実体化して、あなたを守りますね」

そうして、私は実体化してエルちゃんを守るように構える。

すると、ランボーグが私達を見つけ、こちらに向かつてくる。

それに気づいたみなさんが私達を助けるために動いてくれました。

「「エルちゃん！」「」

「プリンセス！」

「エト！エル！」

みなさんがこちらに向かつている最中、エルちゃんほうさぎさんを抱きしめ、言葉をつぐ。

「おうち、かえろ！」

「その言葉は…！」

そうして、私達の前にみなさんが守るように前に出てくれました。

ですが、ランボーグの攻撃を止めたのは意外な人物でした。

「ララ!？」

「つわものに立ち向かうその心!ただの少女と赤子ながら、あつぱれ〜!」

そう言つて、ミノトンは自ら生み出したランボーグを投げ飛ばしてしまいました。

「…エト!今のうちにエルとうさぎさんを安全な場所に避難させて!」

「もちろんです!」

そうして、私はエルちゃんとうさぎさんを連れて、安全な場所に向かいました。

／／／／／／／／／／／／／／／／／／

「ミノトン…まずはお礼を。2人を助けてくれてありがとうございます…あなたは、どうやら本当に武人のようですね。一応、理由を聞かせて頂けますか?あなたが、2人を助けた理由を」

「か弱き少女と赤子に牙を向けるなど、武人のすることではない。プリンセス・エルは貴様らを倒した後でよい…我はずっと待ち望んでいたのだ、貴様らのようなつわものとおのを!」

俺の質問にそう答えたミノトンは合流したランボーグに告げる。

「再開だ!いけ!ランボーグ!」

「…あなたの意志はわかりました。ならば、こちらもそれに応えましょう!」

俺がそう言うのと、俺の胸の辺りが輝きを放ち、新たなスカイトーンが出現した。

…やっぱり、俺自身にスカイトーンを生み出す能力が備わってきているのか…まあ、今は目の前のことに集中だ！

そうして、俺は新たなスカイトーンを起動する。

「プリキュア・ミライレコード！」

起動したスカイトーンをスカイミラーージュにセットする。

「ミライコネクト！βナイト！」

そうして、スカイトーンをセットすると、キュアナイトの青みがかった長い黒髪がさらに長くなり、一つに束ねられてポニーテールになる。

そして、黒のドレスアーマーがミニスカートの黒の和装へと変化し、黒のニーハイソックスとハイカットブーツに装いを変えた。

そして、キュアナイトの手に刀身が淡く白銀に輝く刀が握られた。

そうしてここにキュアナイトβ^{ベータ}スタイルが誕生した。

「あれがナイトの新しい力！」

「なんか、侍みたいだね！」

「和装美少女、ワンダホー！」

「なんかバタフライだけ、反応がおかしくくないですか？ボクも似合ってるとは思いますが……」

そんなみんなの反応を聞きながら、刀を構える。

「いきますー！」

そう言って、俺は高速でランボーグに接近する。

「速い！だが我の目には貴様の動きが見えておる！そこだ！ランボーグ」

ミノトンの指示でランボーグが俺に攻撃を仕掛けてくる。

「なに!?これは……残像!?!」

ミノトンがそう驚愕すると同時にランボーグが俺に斬られたことでバランスを崩した。

そして、俺は姿を見せる。

「まるで見えなかった……なんたる剣技！」

「終わらせませすー！」

そう言つて俺が刀を掲げると、夜空のエフェクトが現れ、月が輝く。

そして、月の輝きが刀に宿り、刀身を更に輝かせる。

「ヒーローガール！ ナイトスラッシュユー！」

俺はそのまま高速でランボーグに接近し、斬り裂いた。

そして、刀を納刀する動作をするとランボーグが浄化されていく。

「スミキッター」

「うむ！ それでこそ我が戦うに相応しい。ミノトントン！」

そうして、新たなアンダーグ帝国の刺客、ミノトンは去つていった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「そっか…：さっきのエルちゃん、ソウヤ君とソラちゃんの真似してたんだ」

「危ないことは真似してほしくないのですが…」

「本当にね…：まあ、エルが優しい子になつてるのは素直に嬉しいけど…：エルは思ったよりも、私達から色んなことを受け取ってくれてるんだね…」

「ほら、こわくないよ」

ふと、そんな声が聞こえてそちらに視線を移すと、男性が自分の娘にうさぎさんのご飯を上げさせようとしていて、動物を怖がっているのか、女の子はお父さんの後ろに隠

れてしまっていた。

そこにエルが近づき、女の子にうさぎさんのご飯を譲っていた。

エルが譲った：!?確か、前は砂場で男の子に遊び道具を貸さなかつたって聞いたけど
…エルも成長してるんだな。

「ど〜ぞ」

女の子はエルからご飯を受け取り、怖がりながらも、うさぎさんにご飯を上げた。

そのご飯をうさぎさんが食べてくれたのが嬉しかったのか、女の子は笑顔を見せた。

「わあー」

「なかよちー」

エルも女の子とうさぎさんが仲良くなったのが嬉しかったのか、笑顔を見せていた。

「エルちゃん…」

「前はこんなふうに譲ったり出来なかつたのに…」

「ましろんの絵本がエルちゃんの心に届いたんだよ」

「うん、そういうことだと思う。ましろさん、あるかわからないけど、ましろさんの絵本、
見せてもらっても良いかな?…どんな絵本なのか気になるんだ」

「もちろんだよ!…これで良いのかなっていう、不安や悩みはこれからも続いていくん
だよね…でも、エルちゃんは今、優しく育ってる…だから、今はこれで良いのかな?」

「ボク達なりの答えをみんなで考えていきましよう！」

「うん！これからも見守っていこ！」

「そうですね！エルの成長を見守っていきましよう！」

俺達はうさぎさんと戯れるエルを見ながら、これからのエルの未来を思い描くのだった。

久しぶりのデート

あさひ達とゲームで遊んだ翌日、俺とソラは久しぶりにデートをしようと話し合っていた。

「確かに、最近デート出来てないもんな…久しぶりに行こうか！」

「はい！実は、ソウヤと行ってみたい場所があるんです」

「行ってみたい場所？」

「ソウヤもよく知っている場所ですよ！」

そうして、俺達はデートの場所へと向かった。

「ソラの行きたい場所ってカードショップだったのか！確かに俺もよく知ってる場所だな」

「でしょ！前に、一緒にカードショップに行こうって言ったのに、なかなか来れませんでしたから…」

「そうだったな…本当にいろいろあったもんな…何はともあれ、せつかくカードショップに来たんだし、楽しもう！」

「はい！それでソウヤ…ヒーローのカテゴリのカードというのはどこにあるんですか！」

目をキラキラさせながら、ソラがそう口にする。

「待ってて、今案内するから」

「はい！ワクワクしますね！」

そうして、俺達はカードショップを見て回る。

「やっぱり、あるならストレージか…」

「すつれーじ？何ですか？それ？」

「まあ、簡単に言えばシヨーケースに置けない、安いカード達がいっぱいあるやつだな。

こちらの店はストレージのカードは1枚、10円か…お値段もお得で良いな！さつそく探してみよう！」

「わかりました！ここはソウヤにお任せしますね！」

「ふつ、任せてくれ！俺はストレージのカードを探すのが大得意だからな！」

そう言つて、さつそくストレージを漁り、ソラの欲しがっているHEROのカードと、それに関係のあるカードを探し出した。

「すごいです！あつという間にカードが積まれていきます！」

「まあ、俺の手に掛ければ楽勝さ！ソラ、さっそく見てみてくれ」

「はい！では失礼して…おおく！これがヒーローカード！エレメンタルヒーローと言うんですね！カッコいいです！」

「だろ？まあ、他にもヒーローのカードはあるんだけど、とりあえず代表的なものを選んでみた」

「そうなんです…あれ？このコクーンというカードとネオスペーシアンというのは？ヒーローという名前ではなさそうですが…」

「そのカード達はネオスっていうエレメンタルヒーローをサポートするカード達なんだ…まあ、ぶっちゃけネオスペーシアンだけでも良いんだけど、ネオスペーシアンに進化する前のコクーンも入れておこうかと思っただけさ」

「どうしてですか？」

「なんていうのかな…コクーン状態から進化して、立派な戦士になるのが良いっていうか…まあ、実際のデッキに採用されるのはほとんどないんだけど…ファンデッキですら、採用されるか怪しいし」

実際、コクーンを採用しているデッキなんて俺以外に見たことがないし…多分、HEROデッキにコクーンを入れてたのは俺ぐらいなものだろう。後、アニメのデッキを再

現してる人ぐらいか？それでもコクーンが入っている人は少なそうだけど。

「…立派な戦士に成長…良いですね！私もこのカード達が好きになりました！」

「そう？それなら良かった…でもどうして？お世辞にも強いとは言えない気がするけど…」

「なんとなく私達に似ている気がして…」

「似ている？」

「はい…私達はまだまだ未熟です…ソウヤに守られてばかりで…まさにコクーン達みたいなものです。でも、いつかコクーン達がネオスペーシアンに成長するように、私達も成長して、ソウヤの力になれたらなって」

そう言って、ソラは笑みを浮かべる。

その顔に見惚れてしまう。

やっぱり、ソラの笑顔は綺麗だな、青空に輝く太陽みたいだ。

「ソウヤ？どうかしましたか？」

「いや、ソラの笑顔は太陽みたいで素敵だなんて思っただけだよ」

「へっ!?そ、そうですか…？なんか照れますね…あ、ありがとうございます…」

恥ずかしそうに俯きながら、ソラはそう口にする。

「…好きだよ、ソラ」

「わ、私も大好きです…ソウヤ」

未だに恥ずかしそうにしながらもこちらを見て、ソラはそう言ってくれた。

「…さて、それじゃあカードを買って帰ろうか！帰りはちよつと寄り道したいんだけど、付き合ってくれる？」

「はい！もちろんです！」

そうして、俺達はカードを買って、手を繋いでカードショップから出るのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ソウヤ、ここは？」

「アクセサリーショップだよ。…前にましろさんと来た…ソラも行きたいって言ってたから」

「例のペアリングの場所ですか…あの時は嫉妬に狂いそうでした…未だにあれはズルいと思ってます」

「いや、あれに関しては本当にごめん…」

「ふふっ、冗談ですよ。今は気にしてませんし…それに、ソウヤが私の言葉を覚えていて嬉しいです」

「あはは…そう言ってくれれば、気が楽になるよ…さて、それじゃあ見ていこうか」

「はい！」

そうして、店内を見ていくと手作りでアクセサリーを作れるというコーナーがあった。

「へえ、アクセサリーを手作り出来るんだってき！やってみる？」

「やってみましょう！」

そうして、俺とソラは店員さんから、アクセサリーの材料を受け取り、アクセサリーを作り始める。

だが、これがなかなか難しく…俺は苦戦してしまう。

対して、ソラは順調に作業が進んでいる。

俺はソラの動作を参考にしながら進めることでなんとか上手く作業を進めることができた。

「で、出来たり…ふう、一時はどうなるかと思ったけど、ソラと一緒にだったおかげでなんとかなったよ」

「お役に立てたなら良かったです…ソウヤは何を作ったんですか？」

「俺はペンダントだよ」

そうして、俺は完成したペンダントを見せる。

「実は、私もペンダントにしたんですよ！考えることは一緒ですね！」

「そうだね！それじゃあお互いに作ったペンダントをプレゼントし合おうか」

「はい！受け取ってください！ソウヤ」

「ありがとう。俺からどうぞ」

「ありがとうございます！えへへ！私の宝物がまた増えました」

「そうだな…俺もソラからもらった宝物がまた増えた」

そう言つて、俺とソラは笑いあつた。

そして、俺達はお互いに贈りあつたペンダントを身に着けながら、アクセサリーシヨップを出た。

そして、帰路に着くと辺りが夕日で照らされていた。

「もう夕方か…時間が経つのは早いな…」

「そうですね…ソウヤと一緒に居ると、時間があつという間に過ぎていきます」

「楽しい時間はあつという間に過ぎていくよな…ソラ、今日はどうだった？」

「はい！とても楽しかったです！ずっとこの時間が続けば良いのに…」

「そうだね…」

「ねえ、ソウヤ…」

「うん？」

「これからも、ずっと一緒に居ましようね。もつといろんな思い出を積み上げながら」

「…ああ、もちろん。…そうだ、ソラ」

「どうかしましたか?」

「思い出になるかはわからないけど、久しぶりにキスする?」

「…!はい!お願いします」

そう潤んだ瞳でそう口にするソラを見て、俺はソラを抱きしめる。

顔を近づけ、唇が触れ合った。

そうして何度かキスをし、最後に舌を入れてキスをする。

いわゆるデーブキスだ。

そして、俺達は長いキスを終えて、再び帰路につくのだった。

ツバサの憂鬱

「はあ〜…」

思わず大きなため息をついてしまう。

最近、ボクは大きな悩みを抱えている。

「ツバサ君?どうかしたの?そんなため息ついて」

「ソウヤ君:なんでもないよ」

「そう?それなら良いけどさ」

そう言つて、ソウヤ君は作業に戻る。

作業というのは、ソウヤ君がカードゲームのデッキを弄っていることだ。

最近、ソラさんとカードショップに行つて、自分のカードも買ってきたらしく、今はそれを組み込んでいる途中なのだとか。

そのことで、ましろさんが嫉妬したのか、『今度は私と行こう?良いよね?』と光の無い瞳でそう言っていた:あれは怖かった:ボクはましろさんを絶対に怒らせないようにしようと思つた。

だが、今のボクはそんな出来事よりも悩みで頭がいっぱいだ。

そして、その悩みはソウヤ君についてだ。

ソウヤ君が女装した姿……ソウナさん状態があまりにもキレイすぎることで……それは本当に女の子であると錯覚するほどで、混乱してしまう。

そのせいで、ソウナさん状態で接して来る時はドキドキしてしまう。

(ソウヤ君状態なら、特に気にならないのに……本当に何でだろう?)

「ねえ、ソウヤ君、前から聞きたかったんだけど……」

ふと、あげはさんがそんな風にソウヤ君に質問する。

「なんであんなに演技が上手なの?」

「演技というと……キュアナイトになつてる時とか女装してる時の話ですか?」

「そう!前から気になつてたんだよね!」

「そう言われましても……その場のノリと勢いでなんとかしてましたね……まあ、今はキュアナイトに変身することも女装も何度かしてるから、こうやれば良いというのがわかってるので、そうしてますけど」

「そうなんだ……意外とアドリブで頑張つてたんだね……あ!じゃあ私が課題を出すから、その通りのキャラを演じるっていうのやってみない?」

「何で急に?やる必要があります?」

少し嫌そうな顔をしながらソウヤ君はそう口にする。

「まあまあ、そんなあからさまに嫌そうな顔しないでよ。ちよつとしたゲームだよ！もし、このゲームをクリア出来たら、私から豪華賞品をプレゼントしちゃいます！」

「豪華賞品ですか…ちなみにどんな？」

「それはクリアしてからの楽しみだよ！どう？やらない？」

「…どんな賞品かもわからないのにやるのはちよつと…」

「そこをなんとか！お願い！ソウヤ君」

「…はあ…わかりました。やりましょう…そのゲーム」

あげはさんに押し切られ、渋々といった様子でソウヤ君はそのゲームをすることにした。

「やった！ありがとう！ソウヤ君！」

あげはさんはソウヤ君の手を握り、そう口にする。

「あ、ツバサ君も付き合ってね！キャラを演じるにしても人がいないとやりづらいと思うし」

「えっ!? ぼ、ボクもですか!?!」

「うん…! だけど、嫌なら無理に付き合わなくても大丈夫だよ。ツバサ君にはツバサ君の用事があるだろうし」

「…わかりました。ソウヤ君一人だけというのも大変でしょうし、ボクも付き合います」

「！」

「そうこなくっちゃ！じゃあ、ソウヤ君は着替えに行こっか！」

「そう言つて、あげさんはソウヤ君の手を引つ張りながら、その場を後にした。

／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／

「はあ…どうしてこんなことに…」

「そう言いながら、姿を見せたのはソウナさん状態のソウヤ君だった。

「まあそう言わずにさ、いつも通り切り替えていこう！」

「…そうですね！それで、私はどうすれば？」

「そう言つて、いつも通りのソウナさんへと切り替わる。

「その様子を見て、胸の鼓動が速くなる。

「それじゃあ、さっそくクーデレな女の子で行つてみよう！」

「そんな軽い感じでやるんですか!?!…まあ、やれるだけやってみます」

「相手役はツバサ君にお願ひするね！それじゃあやってみよう！」

「あげさんの合図と共に、ソウナさんが一度大きく深呼吸をする。

「そして、ソウナさんが動き始めた。

「あなた、なにそのだらしない恰好は…身だしなみくらい整えなさい」

「は、はい！す、すみません…」

「まったたく…」

そう言つて、ソウナさんは近づき、服を直すフリをする。

当然だ、あくまでこれはお芝居なんだから。

「これでよし…本当にあなたと言う人は…こういう恰好を見せるのは私だけにしなさいよ…」

「へっ!?それはどういう…」

そう思わず聞き返してしまうと、フツと笑つてソウナさんが言葉を返す。

「あなたのだらしない姿を見て良いのは私だけ…そういうことよ」

「あ…」

ボクの眩きの後、ソウナさんはあげはさんの元に向かった。

「ふう…こんな感じでどうでしょうか?あんまり自信はないんですけど…」

「いやいや!すごかったよ!こないきなり課題を出したのに、乗り切っちゃうなんて

…なんか、私、女の子として負けてる気がする…おかしくない!」

「いや、そんなこと言われても…あれ?ツバサ君、大丈夫?なんかボーっとしてるけど」

「……はっ!すみません!一瞬、天使が目の前に居たかと…」

「天使つて、大げさだよ…まあ、演技としては100点満点つてことかな?」

そう言つて、微笑むソウナさんに目が奪われてしまう。

「うん……これはクリアということの良いかな！それじゃあ賞品を今から用意するから、ソウヤ君は着替えてきて！」

「わかりました……って、今から用意するのね……まあ、良いか」

そうして、2人が部屋から出ていったのを見た後もボクはその場から動けずにいた。どうやら、ボクの悩みはまだまだ消えそうにない。

ボクの脳裏には未だにあの時のソウナさんの姿が焼き付いたままなのだから。

//////

「それで、あげはさん……豪華賞品というのは？」

着替えを終えた俺は、改めてあげはさんに豪華賞品について聞いて聞いてみる。

まだツバサ君が戻ってきてきていないのが気になるが、そのうち戻ってくるだろうと考えて、一番重要な部分を聞いてみることにした。

「それはね……いろいろと悩んだ結果、これになりました！」

そう言って、あげはさんは紙切れのようなものを手渡す。

「これは……紙切れ？いや、なんか書いてるな。なにに……『あげはとー日デート権』……うん？えつと……これは？」

「……恥ずかしいから、言わせないでよ……書いてある通りだよ……」

「な、なるほど……そういうことか……でも、それなら直接言ってくれば良かったのに……」

「いやあ……直接言うのはちよつと恥ずかしいし……それに、直接そのまま言ったら、ソウヤ君も断つてただろうし」

「まあ、確かにそれはそうかも……でも、わざわざ演技させる必要はなかったのでは？」

「あはは……一応それにも理由はあるんだけどね……でも、これは私達が何かするわけにもいかないから」

「……まあ、よくわからないけど、とりあえずこれは受け取っておきます。せつかくの景品だし」

「うんうん！受け取って！なんなら、今すぐ使ってくれても良いよ！」

「うーん……それはちよつと勿体ない気がするし、また今度使わせてもらいます」

「わかった！楽しみにしてるね！」

「はい、俺も楽しみにしてます。……それにしても、ツバサ君遅いな……どうしたんだろ？」

「ツバサ君には刺激が強かったかな？……2人で迎えに行こっか！」

「そうですね！一緒に行きましょうか！」

そうして、俺とあげはさんは先ほどの部屋にツバサ君を迎えに行き、部屋で放心状態になっていたツバサ君を連れて、元の場所に戻るのだった。

本当に、今日はよくわからないことばかりだったな……まあ、あげはさんから賞品も貰えたし、上手く演技も出来たし、それで良しとしよう。

俺はそんなことを思いながら、
一日を終えるのだった。

空港に行こう！

「この空港に来るの久しぶりだな…」

「そうですね…あの時、人を送り届けた以来です」

現在、俺達はももぞら空港に来ている。

なんでも、ましろさんのご両親の仕事が落ち着いたらしく、一度こちらに帰ってくるようで、ご両親を迎えに来るためにここに来ている。

まあ、ツバサ君とエルがノリノリだったというのもあるが。

俺がそんなことを考えていると、パイロットさんとキャビンアテンダントさんがこちらに歩いてくるのが目に入った。

「あのキリツとした方達は…」

「飛行機を操縦するパイロットさんと、空の旅をエスコートしてくれるキャビンアテンダントさん達です！」

ツバサ君がそう口にする。

「うん、そうだね！あの人達のおかげで、私達は安全で快適な空の旅が出来るんだよ」

俺はツバサ君の言葉にそう続ける。

ちなみに今回もソウナ状態だ…もはや、慣れてしまっている自分に驚きを隠せない…それにしても、変装は大事だけど、これじゃあましろさんのご両親に勘違いされかねないよな…

まあ、その辺は何とかするとあげはさんが言ってくれたから、それを信じるしかない。そんなことを考えながら、俺はましろさんのご両親が来るまで、みんなと一緒に空港を回ることにするのだった。

そうして空港を回り、みんなでたい焼きを食べたり、飛行機の模型を見たり、後、謎の物体も見たりした。

本当にあれは一体何だったんだろう？飛行機の前部分に桃？のようなものがついているやつで、最初はゆるキヤラかとも思ったのだが、見た感じ、それとは違っていた。

本当に謎だな…もはや、不気味さを感じるほどだ。

俺がそんなことを考えていると、エルが嬉しそうな声を上げる。

「くーん、すきー！」

「エルも楽しんでいるみたいで良かった…エル、次はもつとすごいのが見られるかもし

れないよ！」

「そうだね！次の場所は、少年が一番楽しみにしている場所でもあるし！」

「ボクが一番楽しみにしてる場所…それって！」

ツバサ君は次に行く場所を察したのか、とても嬉しそうな顔をしていた。

そして、俺達はツバサ君が一番楽しみにしている場所へと向かうのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「やっぱ空港っていえば、飛行機っしょ！」

「そうですね！私も久しぶりに飛行機を近くで見ましたけど、すごいです」

「ソウナさんは近くで見たことがあるんですか!？」

「まあ、前世の話ですけど、航空ショーを家族で見に行ったことがあって…あの時の

ショーは本当にすごかったです」

「そうなんですネ！確かにソウナさんの目、すごくキラキラしてます。きつと、すごい

ショーだったんだろうな…」

「そういうツバサ君もすごくキラキラしてる。やっぱりワクワクしてる？」

「はい！夢が叶った今も、飛行機が憧れの存在であることに変わりはないですから」

ツバサ君は瞳を輝かせながらそう口にする。

まあ、かくいう俺もワクワクしている。飛行機について詳しいというわけでもないん

だけど、飛行機は見ているだけでも楽しいし、ワクワクする。

そういうえば、やたら戦闘機とか飛行機に詳しい友人が居たな…確か、飛行機はジェットエンジンとかで加速して、翼に風を受けて飛ぶのだとか。確か揚力？だっけ？そういうのがあると言っていた。

「それにしても不思議です…あんなに大きなものが飛ばたきもせず飛ぶなんて…まして、一体どうなっているんです？」

いや、流石にそれはましろさんよりツバサ君に聞くべきことでは？

俺がそんなことを思っていると、ましろさんがツバサ君に近づく。

「ツバサ君、タツチ！」

「まあ、それが良いよね…ツバサ君、よかったら説明してくれない？」

俺がそう言うと、ツバサ君は説明を始めてくれた。

「鳥は飛ばたくことで風を受けますが、飛行機はジェットエンジンなどで加速して、その時に受ける風の力で飛ぶことが出来るんです」

「ジェットにんじん…？」

「空飛ぶ野菜かな？」

ソラの言葉にましろさんがそうツッコミを入れる。

「ジェットにんじんじゃなくて、ジェットエンジンね…確か、最新の飛行機の重さは約1

00トンぐらいで、そこに燃料や人、荷物なんかも入れると、さらに重くなるだろうし、そんな飛行機を加速させるジェットエンジンってすごいよね」

「そうですね……コホン、鳥も飛行機も翼で受ける風の力で飛んでいて、それを専門用語で言う……」

「揚力！」

「そう！揚力……って、今のは誰が？」

聞き覚えのない声で答えが返ってきたことに驚いた俺達が声が聞こえた方に視線を移すと、そこには幼い女の子が居た。

「そんなの簡単すぎよ。風って、目には見えないけど」

そう言いながら、女の子はポシエットからシャボン玉を吹くことができる道具を取り出し、そのままシャボン玉を吹く。

そして、シャボン玉は風に乗って、どこかへ飛んでいく。

「ほら、シャボン玉も風に乗って飛んでくの。風って飛ぶのに凄く大事なのよね」

なるほど……この子はツバサ君と同じく飛行機が好きなんだな……その証拠にポシエットも飛行機模様だし……模様から察するにこの空港の飛行機がモデルだろう。

そういえば、家族はどこにいるんだろう？流石に幼い女の子が一人で空港に来てるとは思えないし……後で聞いてみようか。

「もしかして、君も飛行機に興味が?」

ツバサ君もポシエットから察したのか、そう尋ねた。

「あなたも詳しそうですね。一緒に望遠鏡で見ましよう!お姉さんも一緒に見ない?」

「私も?ありがとう。でも、私は大丈夫だよ。2人でどうぞ」

いきなりこちらに声を掛けてくるとは思わず、少し驚きつつもそう返す。

そして、それを聞いた女の子はわかったと言って、ツバサ君と望遠鏡を見に行った。

その後、ソラ達の所に向かうと、ソラが望遠鏡を逆から見ている。

「凄く遠くに見えます…」

「ソラ、見る所逆だよ…それじゃあ飛行機が見えないよ」

「そうだったんですね!」

そう言うソラを正しい位置に誘導し、一緒に飛行機を見る。

飛び立つ飛行機を望遠鏡で見ることができ、俺とソラも満足できたのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

飛行機を見終わった後、とりあえず休憩を挟むことにし、女の子が自己紹介をした。

「わたしは天野翔子。翔子には空高く飛ぶ子って、意味があるのよ!あなたの名前は?」

「ボクは…」

女の子…翔子ちゃんに声を掛けられたツバサ君は俺とあげはさんの方を見る。

ツバサ君の意図を察した俺とあげはさんは頷いた。

「夕風…夕風ツバサです」

「へえ、あなたも素敵な名前ね！」

「はい！」

「夕風…？」

ソラとましろさんがそう口にする。

「名字もあつた方がなにかと便利でしょ？この前、ソウヤ君と少年と一緒に考えたんだ」

「そうなんだ！」

「うん、中々いい感じの名字を考えられたと思う」

そんな会話を交わしながら、ツバサ君と翔子ちゃんの会話に耳を傾ける。

「翔子ちゃんってほんとに飛行機が好きなんですネ」

「そうよ。だってわたし、いつかママみたいなパイロットになるのが夢だもの！」

「じゃあ翔子ちゃんのママって、パイロットさんなんですネ？」

「そうなの！今日はね、ママが操縦する飛行機にはじめて乗る日なの」

嬉しそうにそう言う、翔子ちゃんを見ながら、さきほどから気になっていたことを尋ねる。

「そうなんだ！それは楽しみだね…：：：そういえば、一人みたいだけど、大人の人は？」

「あつ、パパなら今搭乗手続きをしてて…近くで待ってて…あれ？そうだ、わたし…待ってなきゃいけないのに…」

「それは大変です！きつとパパが心配してます！」

「うぐ…どうしよう…ふええ…」

自分の置かれた状況がわかってしまったのか、翔子ちゃんは泣き出してしまふ。

すぐさま俺とあげはさんは翔子ちゃんに近づき、安心させるようにあげはさんが頭を撫でる。

「大丈夫。一緒に探してあげるから」

「一緒に？パパ、見つかる？」

「もちろん！私はこう見えて人探しは得意なの！それに、きつとパパも翔子ちゃんのことを探してるはずだし」

翔子ちゃんの質問に俺は笑顔でそう答える。

「ソウナちゃんの言う通りだよ！多分、そろそろ…」

あげはさんがそう言うと同時に、チャイムが鳴り響き、アナウンスが流れる。

内容はあげはさんの予想通り、翔子ちゃんをお父さんが探しているという内容で、案内所の方で待っているというアナウンスだった。

「流石ですね、あげはさん」

「ソウナちゃんこそ、アナウンスが鳴らなかつたら、本当に探し出す気だつたでしょ？」
「それはまあ…一応、経験はありますからね」

そんな会話を交わしていると、ソラが翔子ちゃんに声を掛けていた。

「では、私の背中に！もう、ジェットにんじんの速さでパパの所に送り届けます！」

「だから、ジェットエンジンね…」

そんなツツコミを入れていっているうちにソラは翔子ちゃんをおんぶし、すごい速さで走り出した。

だが、すぐさまこちらにUターンし、言葉を紡いだ。

「案内所つてどこですか!？」

「「でええ!？」」

「あはは…：そういえば、ソラは場所を知らなかつたね…」

みんながズコーと効果音が鳴りそうなりアクションをしているなか、俺は一人苦笑するのだった。

ましろの両親との再会

「無事で良かった〜」

「ごめんなさい！わたし、パパの近くで待つてなきやいけなかったのに…」

「ううん、パパも目を離しちゃってごめんね」

翔子ちゃんを無事にお父さんの元に送り届けた俺達は2人の様子を見ていた。

2人ともお互いに無事を確認し合って嬉しそうだ。

「2人がちゃんと合流出来て良かった」

「そうですね、合流出来て本当に良かったです」

ソラとそんな会話をしていると、翔子ちゃんのお父さんが俺達に声を掛けてくる。

「皆さん、本当にありがとうございました。妻は…翔子のママはパイロットという仕事柄、飛行機であちこちを飛び回っていて、寂しい時もあると思うんですが、そんな素振りは見せずに…」

そう言つて、翔子ちゃんの頭を撫でながら、言葉を続ける。

「ママのことを応援していて、いつか一緒に空を飛ぶんだつて、楽しみに…」

なるほど…だから、翔子ちゃんは1人である場所にしたのか…きつと、楽しみすぎて

気持ち先走っちゃったんだろうな。

俺がそんなことを思っていると、ましろさんが翔子ちゃんに近づき、声を掛けた。

「楽しみすぎて、飛行機が見られる場所まで一人で行っちゃったんだよね？」

「うん！」

ましろさんの言葉に翔子ちゃんは笑顔でそう答えた。

「あつ、そろそろ行かないと」

お父さんの言葉に翔子ちゃんも頷き、手を繋いで移動を始める。

「みんな〜！またね〜！」

翔子ちゃんは笑顔で手を振りながらそう言う。

俺達はそれを手を振って見送った。

「やっぱり、飛行機って良いな…乗客を乗せて飛ぶだけじゃない。乗る人の思いも繋げ

てるんですね」

「そうですね」

ツバサ君の言葉に俺はそう返す。

「ましろさん、そろそろ〴〵両親を迎えに行きましようか」

「そうだね…そろそろ」

そうして、ましろさんの〴〵両親を迎えに行こうとすると、突如としてアナウンスが聞

こえてくる。

《迷子のお呼び出しをいたします。プリキュア様、プリキュアさま、ミノトン様がお探しです。屋上展望デッキまでお越しください》

「ミノトンって…」

「嫌な予感しかないんだけど」

「これはまた斬新な果たし状ですね…行きましょう、みなさん！」

俺がみんなにそう言うと、みんなは頷いてくれた。

そうして、俺達は屋上展望デッキへと向かうのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

俺達が展望デッキにやってくると、トレレンチコートを着ているミノトンの姿があった。

あれ、暑くないんだろうか…と、今はそんなこより。

「私達を呼び出してどうするつもり？」

あげはさんの声で俺達の存在にミノトンが気づき、嬉々とした表情をしながら、トレレンチコートを脱ぐ。

「こうするのだー！」

そう言っつて、さらに言葉を続ける。

「来たれ！アンダーグエナジー！」

そうして、ミノトンは小型の扇風機をランボーグ化した。

「ランボーグ！」

「貴様らがここに来た目的は我を恐れて、飛行機で高飛びするためだろうが、そうはいかん！」

「何を言ってるんですか？ミノトン……」

いや、本当に何言ってるんだ、こいつ？

俺がそんな疑問を抱いていると、ランボーグが凄まじい風を起こし、空が暗くなる。

「これで我からは逃げられんぞ！」

「私達は逃げも隠れもしません！」

「思い込みの激しいタイプみたいだね」

「なんて、はた迷惑な……みなさん、行きましよう！飛行機を待っている人達のためにも！」

俺の言葉にみんなが頷き、俺達はプリキュアに変身する。

「無限にひろがる青い空！キュアスカイ！」

「ふわりひろがる優しい光！キュアプリズム！」

「天高くひろがる勇氣！キュアウイング！」

「アゲてひろがるワンダホー！キュアバタフライ！」

「静寂ひろがる夜のとばり！キュアナイト！」

「レディー・ゴー！」

「ひろがるスカイ！プリキュア！」

そうして、俺達はプリキュアに変身を完了した。

「いざ、尋常に勝負！」

ミノトンがそう言うと同時に、ランボーグが攻撃を仕掛けてきた。

「ラン、ボーグ！」

ランボーグから放たれた暴風は凄まじい威力だった。

俺達は上手くそれを回避するが、間髪入れずに刃のような風が放たれ、再び回避する。

だが、ウイングは気流の乱れもあつてか避けきれず壁に叩きつけられる。

「ぐはっ！」

「ういんぐ〜！」

エルがそう叫ぶ。

「ウイング！大丈夫ですか!？」

「ナイト…大丈夫です！でも、上空の風がこんなに強いと、空高く飛ぶことが出来ません」

「ちよつと…私達のこと忘れてない?」

バタフライがそう口にすると同時に投げキッスをし、蝶がランボーグに飛んでいく。

同時にプリズムも小型の白い気弾を放ち、その気弾はランボーグに飛んでいく。

そして、それが命中する。

「ほらほら、ボクもいますよ!」

そうして、ウイングは低空飛行で飛びながら、ランボーグを錯乱する。

「低空飛行ならいける!」

「いや、それではダメです!」

咄嗟に俺は槍を構える。

「ならば、さらなる力で打ちふせるのみ!」

そうして、ランボーグがさらに攻撃を仕掛けようとする所に槍を投げる。

すると、槍が扇風機に突き刺さり、風を起こすことなく動きが停止する。

「ら、ランボ!？」

「バカな!？」

「さっさと終わらせましょう！プリキュア・ミライレコード！ミライコネクト！βナイト！」

そして、俺はβスタイルへと変化し、武器である刀を構え、浄化技の準備をする。

「ヒーローガール！ナイトスラッシュユ！」

そうして、高速で接近しそのままランボーグを斬りさき、刀を納刀する。

そして、ランボーグは浄化されていった。

「スキキッタ〜」

ランボーグが浄化され、空が再び晴れ渡った。

これで、翔子ちゃんもお母さんの飛行機に乗れるだろう…ましろさんのご両親も無事にこちらに来れるだろうし、一安心だ。

「まさか、私のランボーグがこうもあっさりと…ここは深く引くとするが、次はこうはいかんぞ！ミノトントン！」

そう言つて、ミノトンは去っていった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「行つてらっしゃい、翔子ちゃん」

ランボーグが消えたことで、飛行機は無事に飛び立つことができ、翔子ちゃんの乗った飛行機が空高く飛んでいく。

「これで、ご両親の飛行機も着陸できますね！」

「いよいよ感動の再会！緊張してる？」

ソラとあげはさんがましろさんにその声を掛ける。

「うん、確かに緊張してるかも…でも、ちよつとわくわくしてるかな。みんなのこと、早くパパとママに紹介したいし！」

「私は別の意味でちよつと緊張してますけど…あげはさん、本当に大丈夫なんですか？」
俺は思わず、そう聞いてしまう。

「大丈夫！私に任せて！」

俺の質問に自信満々にそう答えるあげはさんに、少し不安を覚えつつ、俺はみんなと一緒にましろさんのご両親を迎えに行くのだった。

「ましろちゃん！会いたかったよ〜！」

そう言つて、ましろさんのお父さんは感動しながら、ましろさんに抱きつく。

ましろさんはちよつと困つたように笑いながら、そのまま抱きしめられていた。

でも、嫌がっているわけでもなさそうだし、家族仲は良さそうだ。

「初めまして、ましろの母です。いつも娘がお世話になってます」

「いえいえ、むしろ私達の方がましろさんのお世話になってます！」

「そうなんです！本当にましろさんにはいつもお世話になってます！」

ソラとツバサ君はましろさんのお母さんに頭を下げながら、そう口になっている。

「おばさん、この青い髪の女の子がソラちゃん、オレンジ色の髪の少年がツバサ君です」

「あら、そうなの！2人のこともましろから聞いているわ！よろしくね！ソラちゃん、ツバサ君」

「は、はい！よろしくお願ひします！」

2人は同時にそう口にする。

「後は…ほら、そんなところに隠れてないで、早くおいでよ！」

あげさんが隠れていた俺を呼び出す。

俺は呼ばれたことで、みんなに姿を見せ、ましろさんのお母さんの元に向かう。

「は、初めまして…」

「初めまして！あなたもましろのお友達？」

「は、はい…」

「この子はソウヤ君、女の子にしか見えないけど、男の子なんです。といつても、普段は

普通に男の子で、今は訳あって変装しているんです」

「あなたが、ソウヤ君なのね！ ましろからいつも話は聞いているの！ 会えて嬉しいわ！ でも、どうして女の子の恰好を？」

「それは…」

俺はそう言いながら、あげはさんの方を見る。

あげはさんはそれに気づき、頷いて言葉を紡ぐ。

「実は…ソウヤ君、かなりモテモテでして…変装でもしないと大変なことになるんです。中には監禁しようとした人も居たぐらいで」

「それは大変だったわね…最悪な事態を避けられてなによりだわ…それじゃあ、男の子ってことはみんなの前では言わないようにするわね」

「はい、それはありがたいです…すみませんが、お願いします」

俺の言葉にましろさんのお母さんは『任せて！』と言ってくれた。

「そうか…君がソウヤ君か」

俺達の会話を聞いていたましろさんのお父さんが声を掛けてくる。

「君はましろちゃんのことをどう思っているんだい？」

真剣な表情をしてましろさんのお父さんがそう尋ねる。

「どう…どう…」

「すまない、質問の仕方が悪かったね…君はましろちゃんがどんな人だと思ってる？」
「それは、もちろん、とても優しい人だと思ってます。春の陽気のような優しく暖かい人…そして、とても心の強い人だと思っっています。実際、ましろさんの優しさには何度も救われてきましたから」

俺がそう答えると、ましろさんのお父さんは表情を緩め、にこやかに言葉を紡ぐ。

「そうか、そうか！いやあ、いきなりすまなかつたね。ましろちゃんがよく君のことを話すものだから、どんな人か気になっていたんだ」

「は、はあ…」

「ましろちゃんの話していた通り、君は優しくて、真っ直ぐな男の子だ。…これからもよろしく頼むね」

「よ、よろしくお願ひします」

そうして、一通り話を終えた俺達は家に帰るのだった。

楽しい時間はあつという間

「な、なにこれ〜?!」

空港から家に帰ってきた俺達にましろさんのご両親がお土産があると言って渡してくれたのは、I ♡ MASIROと書かれたTシャツだった。

しかも、♡の部分にはましろさんの写真がプリントされていた。

それを渡されたましろさんは顔を真っ赤にしてる。

そりやそうだ、俺だってこれをもらったらそういう反応をする自信がある。

「あはは…これは流石に…まあ、外で着るのはあれだけど、部屋で着るぶんには、ギリギリセーフ…かな？」

俺は苦笑しつつ、精一杯のフォローをする。

ましろさんへの愛情を感じられるし、Tシャツの出来自体は良いものだったから、それを否定するのは憚られた。

「ソウヤ君…無理やりフォローしなくて良いよ…でも、ありがとう」
ましろさんが困惑しつつもそう口にする。

そして、しばらく黙った後、何かを閃いたのか、ましろさんが俺の近くに来る。

「ソウヤ君、良かったら一緒に着ない？」

「えっ!?それは構わないけど、ましろさんは良いの?」

「…ちよつと恥ずかしいけど、ソウヤ君と一緒になら大丈夫かなって…それに、私にとつても嬉しいことがあるし」

「嬉しいこと?」

「うん!ほら、着替えにいいこ!」

「わ、わかった…」

そうして、俺は着替えに向かうのだった。

(ふふっ!やった!これでソウヤ君とペアアルツクだよ!それに、ソウヤ君がああTシャツを着るってことは、これは実質私への告白になるのでは?ふふっ、嬉しいなあ!…) まあ、本当に告白されたわけじゃないけど、気分の問題だよね)

「ましろつたら、積極的ね!」

「そうだね…ましろちゃんも恋をする年頃か…嬉しいような、悲しいような…複雑な気分だよ」

「一応着てみたけど…：やつぱり、ちよつと恥ずかしいね…」

「俺も一緒だよ…：まあ、Tシャツのデザインはともかく、着心地は良いね」

「そうだね…：ソウヤ君、ありがとう。私の我が儘を聞いてくれて」

「どういたしまして。…それで、どうしようか？これはもう脱いじやう？」

「うーん…出来ればだけど、今日はこのままにしない？せつかく、パパとママが作ってくれた服だし」

「了解、そうしようか」

「うん！ありがとう！」

ましろさんが笑みを浮かべてそう口にする。

俺はましろさんの笑顔を見ながら、今日はこの恰好で過ごすことを決めるのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「うわあ〜！すごく美味しそうです！まるで、宝石みたいです！なんですか！これ！」

ソラがテンション高めに聞いているのはましろさんのお母さんが作ってくれた天ぷらだ。

「これは天ぷらだよ。食材に衣をつけて揚げるんだけど、すごく美味しいんだよ！」

「そうなんです！さっそくいただきます！」

「うんうん、どんどん食べて！ママの天ぷらはすごく美味しいんだよ！」

「それじゃあ私も！いただきまーす！」

「ボクもいただきます！」

「俺も！いや、久しぶりの天ぷら、楽しみな！」

そうして、天ぷらを口に運ぶ。

美味しい！海老の天ぷらに、さつまいもの天ぷら……！他の天ぷらもめっちゃ美味しい！

「……美味しい！」

「ふふっ！喜んでくれて良かった！まだまだあるから、いっぱい食べてね！」

「……はい！」

俺達は次々と天ぷらを食べていく。

そして、あまりの美味しさに俺達は天ぷらを完食した。

「……ご馳走様でした！」

「久しぶりの天ぷら、めっちゃ美味しかった……ましろさんのお母さん、ありがとう……
ます」

「良いのよ！喜んでくれて良かったわ」

ましろさんのお母さんは笑顔でそう言った。

そして、天ぷらに満足した俺達は後片付けの手伝いをするのだった。

「ましろ」

「うん？どうかしたの？ママ」

片付けが終わって、ひと息ついていると、ママが話をする。

「ましろの気になってる男の子ってソウヤ君？」

「へっ!?…ま、まあ、そうなんだけど…」

「やっぱり!…ましろのソウヤ君を見る目は恋する女の子そのものだったもの」

「そ、そんなにわかりやすいかな？」

「ええ、とつても！」

ママには私の気持ちはお見通しだったみたい。

「そっか…ねえ、ママ…私は間違ってるかな？」

「間違っているってどうして？」

「…実は、ソウヤ君には恋人が居るんだ」

ママの質問に私は悩みながらもそう答える。

「ソウヤ君の恋人…もしかして、ソラちゃん？」

「うん…恋人が居る人を好きになるって、間違ってるかな？」

「…これはなかなか難しいわね…確かに良いか悪いかで言えば、悪いのかもしれないけど…」

「うう…やつぱり？」

「でも、諦めきれないんでしょ？」

「うん。これだけは絶対に諦められないよ…私ね、初めてなんだ…こんなに誰かを好きになったの」

「…なら、諦めずにアピールしていくしかないわね！ちなみに、ソラちゃんはましろがソウヤ君のことが好きなのを知ってるの？」

「うん、知ってるよ…でも、ソウヤ君のことは譲らないって。まあ、当然だよね」

「そうね。自分の恋人を奪われたい人なんて居ないでしょうし…ましろ、困難な道になるとは思うけど、頑張ってる」

「ほんとに困難な道だよお…あげはちゃんもライバルだし…」

「あげはちゃんも!?ソウヤ君、モテモテね…いつそのこと、全員と恋人になれば解決するんじゃないかと思っちゃうけど…そんなこと出来ないだろうし…」

「そうだよね…でも、頑張るよ！私…ママ、ありがとう。おかげで元気が出たよ！」

「ふふっ、どういたしまして！」

「ましろちゃん！こっちで一緒に遊ばないかい？いや、カードゲームなんて、学生の頃にやった以来だけど、やっぱり面白いね」

ソウヤ君達と一緒に遊んでいるパパが楽しそうにそう口にする。

流石、ソウヤ君…もうパパと仲良くなってるよ。

「ましろさん、こっちに来て！一緒にカードゲームしよう！ましろさんの分のデッキも用意したよ！」

「ホント!?ありがとう！ソウヤ君！今から行くね…それじゃあ、ママ、また後でね」

「ええ、楽しんできてね」

「うん！」

そうして、私はみんなのところに向かうのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

ましろさんのご両親が帰ってきて数日が経ち、ご両親が海外に戻る日がやってきた。

この数日、ご両親とは一緒にゲームをしたり、料理を作ったり…そして、買い物に行ったりと楽しい時間を過ごした。

ましろさんも、ご両親と久しぶりに過ごさせて楽しそうだったし、良かった良かった。

それにしても、買い物に行く時、ご両親に誘われて俺達も一緒にについていくことになったのだが本当に良かったんだろうか？

せつかくの家族水入らずの時間を邪魔したことになるだろうか……まあ、ご両親は『気にしないで、むしろ大歓迎だから！』と言ってくれたから、良かったのかもしれないが。

そんなことを思いながら、俺は飛び立つ飛行機に手を振る。

「いつてらっしやい！」

ましろさんのその言葉に続けて、俺達も『行つてらっしやい』と言葉を続けた。

こうして、ましろさんのご両親との初めての対面はたくさんの思い出と共に過ぎ去つていくのだった。

突然の来訪

「今日の花火大会、楽しみだな…」

『そうですね！ソウヤ様！』

あさひ達との特訓により、新しく＼スタイルへ変身できるようになってから数日、今日は絵の練習のためのスケッチブックを買いに来ていた。

今はその帰り道だ。

『今日はどんな絵を書くんですか？』

「花火大会があるし、花火の絵でも書こうかなって」

『良いですね！ソウヤ様なら、きっと素敵な絵を書けますよ！』

「あはは…だと良いんだけどね」

俺がエトとそんな会話を交わしていると、目の前に時空の裂け目のような穴が現れた。

「えっ!?なにこの穴…怖っ！さっさと家に帰ろう」

『そうですね！帰りましょう！』

「待って待って！まだ帰らないで、お兄ちゃん！」

穴の向こうから声が聞こえたかと思うと、穴の向こうから手が伸びてきて、俺の腕を掴んだ。

「ちよっ！絵面がホラーなんだけど！」

「良いから早く来て！あ、エトお姉ちゃん、そこにいるんでしょ？お兄ちゃんの荷物、家に持って帰ってあげてね！それじゃあ、お兄ちゃんをお借りするね！ばいばい」

「せめて、理由を……！」

そう言うが、俺の手を掴んだ人は答えてくれず、そのまま穴に引きずり込まれてしまったのだった。

「……うーん……はっ……ここは？」

目を覚ました俺の目に入ってきたのは、スカイランドによく似た景色だった……というより、スカイランドそのものだ。

だが、少し建物とかが変わってるような……

「目が覚めたんだね！お兄ちゃん！」

「お兄ちゃん……？さつきもそう言ってたけど……っ！まさか、君は……！」

「やっぱりお兄ちゃんはすぐに気づいてくれたね」

「エル、なのか…？なんか、俺達と同一年くらいになってるけど…」

「そうだよ！お兄ちゃんの可愛い妹、エルだよ！」

そう、さきほど俺を謎の穴に引きずり込んだ人物はエルだった。

だが、俺達の知ってるエルはまだ赤ちゃんだ…それがこんなに大きくなっているということは…

「…ここは、未来のスカイランドとか、そういうパターン？というか、そのノリなに？自分で可愛い妹とか言っちゃってるし…」

「このノリは私なりに学習した結果なのです！ちなみに、お兄ちゃんの言うとおり、ここは12年後のスカイランドだよ」

「絶対、教材間違えてるだろ…と、それは一旦置いて、ここは12年後のスカイランドなのか…そして、俺が過去から連れて来られたということは、何か厄介事か？」

「流石お兄ちゃん！理解が早くて助かるよ！お兄ちゃんを過去から連れてきたのは、解決してほしい問題があるからなの」

「解決してほしい問題…？もしかして、アンノウン絡みか？」

俺がそう言うと、エルが驚いたような顔をする。

「すごっ！そこまでわかっちゃうんだ！そうなの、こっちで前に遺跡を調査した時に、ア

ンノウンの残滓が見つかったんだけど、こつちのお兄ちゃんは今は忙しい身でさ…」
「なるほど…それで俺を」

「うん。エトお姉ちゃんのスカイトーンを借りて、ちよちよいつと過去からお兄ちゃんを連れてきたってわけ」

「そんな軽い感じで時間超えるなよ…まあ、エトのスカイトーンなら可能だろうけどさ。
…それにしても、何でこの時間軸の俺にしたんだ？もつと強くなつた俺の方が良かったんじゃない？」

「それは私も考えたんだけど、お兄ちゃんが未来に来て、そこまで問題がなく、尚且つ戦闘力がある程度高いお兄ちゃんはその花火大会の日のお兄ちゃんしかいなくて」

「なるほどな…」

「うん。ごめんね、お兄ちゃん…いきなりこんなこと頼んじゃって…」

エルはそう言つて、申し訳なさそうな顔をする。

「いや、大丈夫だよ。異世界であれ、未来の世界であれ、助けを求める人が居るなら助けるさ」

「お兄ちゃん…！ありがとう！」

「どういたしまして！それじゃあ、さっそく案内してくれ」

「うん！ついてきて！お兄ちゃん」

そうして、エルは先に進んでいく。

(やつぱりカツコいいなあ…お兄ちゃん…いつそのこと、今のうちに既成事実？つていうのを作れば、お兄ちゃんと…えへへ…)

「…何故だろう…今、エルにめつちや不穏なことを考えられてた気がする…」

「ま、まさか…そ、そんなわけないよ…多分、別の誰かが噂してるんじゃないかな？」
「そうか…ま、とりあえず行ってみよう」

そうして、俺はエルについて行き、アンノウンの残滓が見つかったという遺跡に向かうのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「はあ…はあ…みなさん！大変です！ソウヤ様が…あれ？静かですね…何かあったんでしようか？」

ソウヤ様が謎の穴に連れ込まれてしまったことをみなさんに伝えるために慌てて家に戻ってきたのですが、どうにも静かです。

私はソウヤ様が買ったものを持ちながら、家の中に入る。

すると、そこにはミラーパッドを手に持ち、どこか悲しそうな顔をしているエルちゃん姿がありました。

「エルちゃん？どうかしたんですか？みなさんは…」

私は座り込み、エルちゃんと目線を合わせる。

「える、やあくつてしたら、みんなが…」

エルちゃんがそう言つて、ミラーパッドを私に渡す。

それを受け取り、確認したおかげで状況を理解できました。

「なるほど…ミラーパッドの隠し機能…ワクワクレスンモードを起動してしまつたわけですか…でも大丈夫ですよ、エルちゃん。みなさんは無事に帰つてきますから」

「ほんと?」

「本当です。だから安心してください」

「エトさんの言うとおりよ、エルちゃん。みんなはきつと戻つてくるわ」

私がエルちゃんと話していると、ヨヨさんがこちらにやつてくる。

「エルちゃん、みんなが帰つてきた時のために、今から一緒におやつを作りましょう。きつと、みんな喜んでくれるわ」

ヨヨさんの言葉にエルちゃんは立ち上がる。

「うん…える、ちゆくる!」

そうして、エルちゃんはヨヨさんに自分も一緒に作ると答えた。

そして、エルちゃんは辺りを見渡す。

「エトちゃん」

「ソウヤ様は……少し、急用が出来てしまったようで、帰りが遅くなるそうです。だから、ソウヤ様の分もお願ひしますね！」

「える、にーにも、ちゅくる！」

「ありがとうございます。私もお手伝ひしますね！」

エルちゃんにそう答え、私はヨヨさんとエルちゃんと一緒におやつを作り始めるのでした。

//////

「あれがアンノウンの残滓が見つかったっていう遺跡か……」

「そうだよ」

遺跡の入口から少し遠くの物陰に隠れながら、そんな会話を交わす。

「……そういえば、今回の遺跡の調査はエルがやったのか？」

「うん。さつきも言ったけど、今のお兄ちゃんは忙しい身だから、私が代わりに調査に行っただ」

「ソラを頼らなかつたのか？」

「……ソラもソラで護衛隊の仕事が忙しいみたいだから言いづらくて……それに、今日は……」

「今日は？」

「……うん、なんでもない。とにかく今頼れるのはお兄ちゃんだけなの」

「なるほど、了解。あんまり未来について知るのはいくはないし、これ以上の詮索はしないでおくよ」

「それが賢明だよ。それに、未来はわからない方が楽しいだろうし」

「それもそうだな…よし、それじゃあ行こうか」

「うん！」

そうして、俺達は遺跡の中に向かっていく。

「一応、入る前にプリキュアに変身しておこうか」

そして、俺はプリキュアへと変身する。

「静寂ひろがる夜のとぼり！キュアナイト！」

「おおう！お兄ちゃんのプリキュアの姿、久しぶりに見たよ！」

「そうなんだ…」

未来の俺はプリキュアに変身する機会が少なくなってるのかな…まあ、今はアンノウンの残滓をどうにかするのが先だ。

「さて、プリキュアに変身したし遺跡に入ろう。エルは安全な場所…」

「大丈夫！今の私は赤ちゃんじゃないし、自分の身は自分で守れるよ！なんなら、お兄ちゃんをサポートするぐらいなら全然出来るから、安心して」

「…そっか、わかった。ただ、あんまり無理はしないようにね」

「もちろん！」

エルの頼もしい返事を聞き、俺は遺跡の中に入る。

すると、俺達の前にボロボロのロープを纏った存在が姿を現した。

「これは、随分と懐かしい気配だ…久しぶりと言っておこうか、キュアナイト」

「…ええ、お久しぶりですね、アンノウン。私がおここに来た理由はわかっていますね？」

「ああ、もちろんわかっているとも…始めようか」

そう答えて、アンノウンは剣を構える。

俺もそれに倣い、剣を構える。

そうして、未来の世界でのアンノウンとの戦いが始まるのだった。

アンノウンの最期と帰還

「はあっ！」

「ふんっ！」

俺とアンノウンの剣戟が飛び交う。

互いに譲らない、一進一退の攻防。

だが、アンノウンの実力は今まで戦ったアンノウンに比べて弱い…おそらくこれまでの俺との戦いで消耗しているんだとは思うけど、なんとというか、戦意そのものがないように感じる。

俺はそう思い、一度アンノウンを蹴り飛ばし、距離を取る。

「…アンノウン、あなたは随分と消耗していますね」

「ふん…お前と戦い続けた結果だ…今の私は僅かに残ったしぼりかすに過ぎない」

「いい加減成仏したらどうですか？」

「そうしたいが、1つ、心残りがあつてな…」

そう言いながら、アンノウンはこちらに斬りかかる。

俺はそれを受け流して、アンノウンを蹴り飛ばす。

「心残り……？」

「お前だ、キュアナイト」

「私ですか？」

「ああ。お前に敗れ、私という存在が消えたあの時……私にも1つ欲が出来てしまった」

「欲……？」

俺がそう尋ねるとアンノウンは構えを解き、言葉を紡いだ。

「……もう一度だけ、お前に会いたいという欲だ……我ながら、おかしな感情だとは思うが、あの時の私が思ったのは、それだけだった」

そう言いながら、アンノウンは一旦武器を下ろす。

「私に？ どうして？」

「……私がお前に執着していたのは、なにも復讐だけが理由ではない、そう理解したからだ」

「どういうことですか？」

「……私はお前に憧れていたのだ……どんな時でも民を思いやり、守ろうとする気高さ……美麗な動き、意志の強さを感じさせるその瞳……私はそんなお前に見惚れ、憧れ、嫉妬した……お前は私にとって、手が届かない存在だと理解した」

そう言って、アンノウンはさらに言葉を続ける。

「…だが、手が届かないからこそ、伸ばしたくなる…例え、この手がお前に届かないと知っていても、手を伸ばし続けるしかなかったのだ」

「…なるほどね。だから、この遺跡にいたんだ…おに…キュアナイトなら、ここに来るって信じて」

エルがそう口にする。

「ずっと、気になつてたの…なんで今さらあなたの残滓が遺跡に出現したのか…もちろん、時間が掛かったのは間違いないんですけど、それほどまでの時間を掛けてまでここに来たかった理由が、今わかったよ」

そう言つて、エルは俺達の戦いの邪魔にならないように後ろに下がる。

「ナイト、全力で戦つてあげて。それがアンノウンにとつての救いになるはずだから」

「…わかっています。…さあ、構えてくださいアンノウン…長きに渡る戦いに決着をつけましょう」

「…感謝する…キュアナイト。そして、プリンセス・エル、私とキュアナイトを引き合わせてくれたことに感謝を…いくぞ！キュアナイト！」

「受けて立ちます！」

そうして、俺達は同時に接近し、剣がぶつかり合う。

鏢迫り合いの状態、俺はそこから一瞬力を抜き、アンノウンの剣を受け流して斬りか

かる。

アンノウンはそれを咄嗟に回避することで、俺の剣はアンノウンの体を掠めるだけにとどまってしまった。

だが、掠っただけのその攻撃をアンノウンは回復出来なかった。

本人が今の自分はいしぼりかすと言っていたが、それは本当だったようだ。

「まだまだいきませよ！」

そう言いながら、左手に槍を出現させ、アンノウンに追撃を仕掛ける。

アンノウンは防戦一方といった様子で、反撃に転じることが出来ないでいた。

「まだだ！」

そう言って、俺を蹴り飛ばし、アンノウンは距離を取る。

「ハア…ハア…まったく、随分と弱くなったものだな…この私が。…次で決めよう、キュ

アナイト」

「ええ…次で決めましょう」

そうして、アンノウンは自分の分身を出現させ、分身と共に攻撃を仕掛ける。

俺もそれに対応し、槍を出現させ、その姿が俺と同じ姿になる。

「ヒーローガール！ナイトミラーージュー！」

俺は分身と共にアンノウンに向かって接近し、俺の分身がアンノウンの分身を撃破し

ていき、最後に俺がアンノウンの本体に向かってキックする。

そして、キックが命中し、アンノウンが浄化されていく。

「…こうやって、完全に倒されるのは二度目か…私がこうして復活することは二度とないだろう」

「そうですか…これで、あなたとはお別れということですね」

「ああ…今まで、すまなかつたな…私の都合に付き合わせて。だが、おかげで思い残すことは何も無い」

そうして、アンノウンの姿が消えていく。

「ありがとう…キュアナイト」

最後にそう言い残し、アンノウンの姿は完全に消え去った。

俺はそれを見た後、変身を解除する。

「終わったね、お兄ちゃん」

「ああ。この時代のアンノウンは消え去った…まあ、俺のいる現在のアンノウンとの戦いはもうちょい続きそうだけど」

「そうだね…でも、お兄ちゃんなら大丈夫！妹である私が保証するよ！」

「ありがとう。エル」

そう言つて、エルの頭を撫でる。

「お、お兄ちゃん!？」

「ごめん、もしかして嫌だったか？」

「ううん、嫌じゃない…こんなふうに頭を撫でられたの久しぶりだったから…」

「そうなのか？」

「うん…だから、もつと頭を撫でて、お兄ちゃん」

「わかった」

そう答えて、俺はエルの頭を更に撫でる。

「えへへ…ありがとう、お兄ちゃん…やっぱり、お兄ちゃんに頭を撫でられるの好きだな…」

そうして、俺はエルが満足するまで頭を撫でるのだった。

「本当にいろいろとありがとう！お兄ちゃん！」

「どういたしまして！それじゃ俺はそろそろ帰るよ」

「そうだね…本当は、もうちよつと一緒に居たいけど…タイムパラドックスとかが起きる可能性もあるし、早く元の時間に帰してあげないと」

そう言つて、エルが俺を連れ込んだ時の穴を出現させる。

「この穴を通れば、元の時代に帰れるよ」

「ありがとう、エル」

「私はむしろ、お兄ちゃんに頼んだ側なんだけど…まあ、お兄ちゃんらしいと言えば、お兄ちゃんらしいか」

そう言つて、エルは笑みを浮かべる。

「…それじゃあ、またな！エル」

「うん！またね！お兄ちゃん！…あつ、そうだ！お兄ちゃん、ちよつとこつちに来て」
「うん？どうかしたのか？」

俺がそう言つると同時に、エルが俺にキスをする。

「エル!?急になにを…」

「えへへ…お兄ちゃんに私のファーストキス、あげちゃった…」

「いや、そういうのはもつと大事にした方が良くないじゃ…」

「いいの！私、お兄ちゃんのこと大好きだから！ほら、早く戻つてあげて！」
そうして、エルが俺を押ししていく。

「え、ちよつ！エル!?!」

「それじゃあ、またね、お兄ちゃん！赤ちゃんの私にもよろしくね」

「…うん、任せてくれ。エルも元気だね」

俺はそう言ったのを最後に元の時代へと戻るのだった。

「うん…お兄ちゃんも元気で…大好きだよ、お兄ちゃん」

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ここは…俺が穴に引きずり込まれたところか…と、早く戻らないと」

そうして、俺がすぐさま家に帰ると、ちゃんとみんながいた。

「ソウヤ様！お帰りなさい！…ご無事で良かったです！」

エトのその言葉を聞くや否や、ソラ達も出迎えてくれた。

「ソウヤ！エトさんから謎の穴に引きずり込まれたと聞きましたが、何があつたんですか!? 怪我はしていませんか?」

「ごめんね！ソウヤ君！私達、何も出来なくて…実は、私達もミラーパッドに吸い込まれちゃって…」

「ミラーパッドに? どういうことだ?…とりあえず、一旦話そうか」

そして、俺達はお互いにあつたことを話した。

といつても、俺は未来に行ったことは伏せ、別の世界に呼ばれてその世界の人を助けたということにしたが。

どうやら、ソラ達はエルが誤ってミラーパッドのワクワクレックスンモードを起動し、それにより、ミラーパッドの中に吸い込まれ、特訓をしたらしい。

まあ、ピンクツトンというやつので、本来やろうとした特訓とは別のものになってしまったようだが、なんだかんだ楽しかったと言っていた。

「そうか…お疲れ様」

「ソウヤもお疲れ様でした。まさか、私達がミラーパッドにいる間に別の世界を救ってしまっなんて…やつぱりソウヤはすごいです！」

「あはは…まあね」

そんなふうにもんなと話していると、エルがこちらに近づき、何かを渡してくれる。

「にーに、どぞぞー！」

エルが手渡してくれたのはフルーツポンチだった。

みんなから聞いた話だと、エトとヨヨさんと協力してエルが作ってくれたものらしい。

よく見ると、みんなもフルーツポンチをすでに持っている。

「ありがとう。エル」

「どいたまちてー！」

そして、フルーツポンチを口に運ぶ。

「美味しい！上手に出来てるよ、エル」

そう言つて、エルの頭を撫でる。

「え〜る〜！」

「満悦なエルを見ながら、未来のエルに思いを馳せる。

「エル」

「える？」

「…これからも元気で、健やかに成長するんだぞ」

「える…？える！」

エルは笑顔で頷いた。

それと同時に花火が上がる。

俺達は空高く上がる花火を見ながら、今この瞬間を心に刻むのだった。

突然のスカウト

「あなた！素晴らしいわ！ねえ、モデルやってみない？あなたならきつとスターになれるわ！」

「あの…えつと…どちら様でしょうか？」

困惑しつつ、そう尋ねる。

今日はエルの服を買いに来ていて、いろんな店を回っていた。

エルは最近、服へのこだわりが出来てきたらしく、みんなが選んだ服はどれもお気に召さなかった。

まあ、流石にソラが選んだ『ヒーロー見参！』と書かれている服は俺もダサイと思うが。

そして、皆が近くのベンチで休んでいる間、飲み物でも買いに行こうと思つて歩いていると、オネエ口調の男の人にいきなり声を掛けられて今に至ると言うわけだ。

…うん、なんか冷静になるために経緯を思い出してみたけど、なんで声を掛けられたのか、さっぱりわからないな。

「どうしたの？カッコーさん…つて、誰!?この美少女！」

「やっぱ！超可愛いじゃん！」

この男の人カッコーさんっていうのか…まあ、本来の名前が加古さんとか、そういう感じなのかな？…というか、このキレイなお姉さん達は誰だろうか？

どこことなくあげはさんに似てるような…

「ソウナちゃん、どうしたの？」

あげはさんのそんな声が聞こえてきて振り返ると、そこには皆がいた。

「わあっ！早乙女姉妹だ！」

「早乙女姉妹…？こちらの方達は有名な方なんですか？」

「うん！有名なモデルさんだよ！」

「そうなんですわね…」

ましろさんの言葉に俺はそう言葉を紡ぐ。

なるほど…いきなりモデルにならないかと言われたから、びっくりしたけど、このカッコーさんは早乙女姉妹のマネージャーなのかもしれないな。

そんなことを考えていると、早乙女姉妹はあげはさんの元に歩いていく。

「久しぶりだね！」

「バツタリ会えるなんて、超嬉しい！」

「私も会えて、アゲアゲだよ！まり姉ちゃん、かぐ姉ちゃん」

そんな風にあげはさんと早乙女姉妹が会話をしていると、カツコーさんもあげはさんに気づいたのか、そちらに向かう。

ひとまず解放されたことに安堵しつつ、視線を移す。

「ウツソ、やつだ、会いたかった！もう、放さないんだから！」

「私たちも〜！」

そう言つて、3人はあげはさんに抱きついた。

「みんなもアゲアゲだね！」

なるほど…大体の事情は察した。

とはいえ、流石にここでは目立つし、どこかで落ち着いて話した方が良さそうだ。

「とりあえず、一度どこかの店に入りませんか？ここで話すのはいろいろと問題ありそうですね」

俺の言葉にみんなも頷き、俺達はその場から移動するのだった。

「とりあえず、ここなら大丈夫かな…」

俺達は近くの『Pretty Holy』へとやってきた。

まあ、ここも目立つといえれば目立つけど、人が一気に入ってくることはなさそうだし、その点でいえば安全だ。

「そういえば、私は早乙女姉妹？というのがどんな人達なのか知らないんですけど、どんな人達なんですか？」

「あら〜！ソウナちゃん、もしかして、モデルの仕事に興味が出てきたの？あたしはいつでも大歓迎よ！」

俺の質問にカツコーさんはそう答える。

「いえ、全然。あげはさんの知り合いのようなので、気になっただけです」

「そう、それは残念ね…2人についてだけで…まず、早乙女まりあ。雑誌の読者モデル出身で、最近ドラマでヒロイン役を演じて、話題沸騰中！」

へえー、読者モデル出身なのか…しかも、ドラマのヒロイン役を演じたのはすごいな。今度、そのドラマを見てみるのも良いかもしれない。

そんなことを思っていると、カツコーさんが言葉が続けた。

「早乙女かぐや。モデル兼ファッションデザイナーで、KAGUYAっていうブランドで海外からもすごく注目されているわ」

「姉妹揃ってすごいですね…」

「そうよ。2人は姉妹で大人気！ファッションとかメイクとか、女の子達がみ〜んなマ

ネして、いわばカリスマ的存在なの！」

「なるほど…教えてくれてありがとうございます」

「いいのよ。…それで、どう？ソウナちゃんもやってみない？あなたは逸材よ！端正な顔立ち、抜群のスタイル、まるで夜空のようにすべてを包み込むかのような雰囲気、その上で人を惹き付けるカリスマ性…どれをとっても素晴らしいわ！」

「あはは…そう言ってくれるのは嬉しいのですが、お断りします。他にやりたいこともあるので」

「…ここまで言われたら仕方ないわね…今回は諦めるわ。でも、気が変わったら、いつでも言ってみてね！」

「あの…とところであなたは？」

俺達がそんな会話を交わしていると、ましろさんが遠慮がちにそう尋ねる。

そういうえば、俺はこの人がカツコーさんだと聞いてたけど、ましろさん達は知らないもんな。

「あたしは2人のマネージャーの加古…人呼んでカツコーよ！」

あ、本当に加古さんって人だったのか。

そんなことを思っていると、渡し忘れていたと言って、カツコーさんが俺達に名刺を渡す。

そうして、俺達はしばらく会話をし、ましろさんは早乙女姉妹からサインをもらって
いた。

そして、あげはさんが2階から降りてきて、俺達を2階の喫茶店の席へと案内してく
れた。

「あげはちゃんにお姉さんがいるのは知ってたけど、まさか早乙女姉妹だったなんて…」
みんな、喫茶店のパフェを食べていると、ましろさんがそう口にする。

「あれ？言ってなかったっけ？」

「…少なくとも、私は初耳ですね…まあ、なんで名字が違うのかは想像が付きませうけど
…」

「流石だね、ソウナちゃん…まあ、隠すようなことでもないんだけど。…私が小さい時、
両親が離れて暮らすことになってね、お姉ちゃん達はお父さんと暮らすことになったん
だ」

「…やっぱり、そうだった事情が…」

「うん。ましろんと出会う前のことだったから、ましろんも知らなかったんだよ」

「なるほど…」

「早乙女ってというのは父の名字なの」

「名字は違うけど、私達は正真正銘の3姉妹だよ」

「そうだったんだ…」

そう言いながら、ましろさんは悲しそうな顔をする。

そんなましろさんにあげはさんが声を掛ける。

「ましろん、顔上げて。昔のことなんだし、笑顔でアゲてこー！」

「そうそう！親は親、私達は私達。やりたいことやってるしね！」

「自由に好きなことやって、楽しかったらオールOK！」

「「イエーイー！」」

そう言って、3姉妹はハイタッチする。

そのノリを見て、俺は3人は間違いなく姉妹なんだなと思った。

その後、あげはさんがカツコーさんにモデルにならないか誘われ、それをあげはさんが自分になりたいのには最強の保育士だと言って断ったり、昔、一度だけモデルをやったことがあるということを教えてもらったりしながら、時間が過ぎていった。

すると、寝ていたエルが目を覚ました。

「える…」

「あ、エルちゃん起きた？おはよ」

「おあよー！」

「ハッ！原石はつけ〜ん！」

そう言いながら、カッキーさんはエルに近づく。

「全身から滲み出る品の良さ…高貴なお顔だち…あなた、お名前は？」

「える」

「エルちゃん！ベリープリティー！あなたなら、きっとモデル界のプリンセスになれるわ！」

「エルちゃんは元々プ…」

ソラがエルの正体を口にしてしまいそうになり、慌ててましろさんがソラの口を塞ぐ。

「もっとプリンが食べたい？もう、食いしん坊なんだから！」

「ナイスだ！ましろさん！」

「そうみたいです…追加でプリンを注文しましょうか」

「すかさず、俺はましろさんのアドリブにそう答える。」

「かぐや、どうかしら？」

「うん、良い。適任だと思う」

「適任とは？」

「実は…」

そうして、まりあさんが話してくれたのは、明日、まりあさん達のファッションショー

が行われるのだが、そこに出演する予定だったモデルの子が体調を崩してしまっただけ、その代わりにエルにファッションショーに出てほしいということだ。

「実は、初めて子供服をデザインしたんだ。こんな服なんだけど」

そう言っただけ、かぐやさんがスマホの画面にデザインした服を映して見せてくれる。

その服は大きな黄色のリボンが印象的な可愛いらしいドレスで、素人目にも良いデザインだと思う。

現に、エルもスマホを見てご機嫌な様子だ。

そして、話はトントン拍子に進んでいき、エルは明日のファッションショーに出ることになった。

「ちよつと待つてください！ショーって…ステージに上がるってことですよね？エルちゃん、大丈夫かな…」

「私はエルちゃんの気持ちを大事にしたいな…それに」

ましろさんとあげはさんの言葉を聞いていると、エルがちよんちよんと俺の手を叩く。

「えるといっしょよ！」

「うん？それは私もファッションショーに出ると？」

「える！いっしょによ！」

「ええ!? いや、私はそういうのは…それに私の分の衣装なんてないでしょうし…」

「ソウナちゃんに参加してくれるなら、大歓迎だよ! 実は、まだいくつかファッションショー用の服があつて、ソウナちゃんにも着てもらいたいんだよね」

「私も大歓迎! 2人とファッションショーが出来るの楽しみ!」

「あたしも大歓迎よ〜!」

「どうやら、みなさん乗り気なようだ…しかも、エルも俺と一緒に出たがっているし。」

「…はあ…わかりました。今回だけですよ…まあ、上手く出来るかはわかりませんが」
そうしてみんなの圧に負け、俺は明日のファッションショーに出ることになるのだつた。

楽しいファッションショー

「ふう…流石に緊張してきた…」

「大丈夫だよ！リラックス、リラックス！」

「ありがとう…あげはさん」

今日はいよいよファッションショーの日だ。

もちろん、ファッションショーの練習はした。

まりあさんとかぐやさんにも筋が良いと褒められたし、なんとかなる気はする。

俺が男だとバレるかもしれないという不安もあげはさんがサポートしてくれてるおかげで大丈夫そうだ。

そんなことを色々と考えているうちに、落ち着いてきた。

ちなみに俺の衣装は驚くべきことに、キュアナイトのαスタイルの恰好にそっくりだった。

なんでもかぐやさんはキュアナイトの大ファンらしく、キュアナイトのαスタイルが特に好きらしい。

そうして、自分の好きを取り入れつつ、デザインに昇華したのがこの服のようだ。

実際、αスタイルの恰好とは異なっている部分がある。

肩が露出しているし、星の装飾がない。

シックな感じ？と言えば良いんだろうか…上品で落ち着いた印象を受ける服装だ。

「…服も大丈夫そうですね。あげはさん、エルのところに向かいましょうか」

「そうだね！エルちゃんのところに行こー…それにしてもびっくりしたよ…まさか、か

ぐ姉ちゃんがキュアナイトの大ファンだったなんて」

「私もびっくりしました…プリキュアは意外と有名なのかもしれませぬね」

「そうだね！あ、もしかぐ姉ちゃんに新しいキュアナイトの姿を教えたら喜ぶかな？あ

の和装スタイル、めっちゃ可愛かったし！」

「あはは…どうでしょうね…まあ、とにかくこのファッションショーを成功させてから

ですー！」

「それもそうだね。ソウナちゃん、頑張つて！応援してる！」

「はい！エルと一緒に頑張ります！」

そうして、俺達はエルの元に向かうのだった。

「かぁいいい……」

エルの元に向かうと、エルは自分の服を見て嬉しそうだつた。

「はあく……！エルちゃん、ラブ！めっちゃ似合ってる！」

あげはさんは目がハートになっていて、エルにメロメロ状態のようだ。

確かによく似合ってると思う。

「エル、よく似合ってるよ」

「にーにも、かぁいいいよー！」

「あはは……これは喜んで良いのかな……まあ、かぐやさんのデザインした服は素敵だと思うし、素直にその言葉を受け取っておくね」

そう言いながら、エルの頭を撫でる。

「ふふっ……こうして見ると、兄妹というより姉妹だね……エルちゃん、あのお姉ちゃん達の所まで歩いていくんだよ」

「うん！」

「エルの後が私の出番だから、後で合流するね」

「うん！」

そう言つて、エルはまりあさん達の所まで歩いていった。

エルの登場に、観客から歓声上がる。

エルも楽しそうにしていたのだが、あまりの歓声にびっくりしてしまったのか、泣きそうな顔をしていた。

「エル……」

思わず飛び出そうとすると、あげはさんが俺を制し、任せてと一言言つてエルのもとに向かった。

「エルちゃん見て、あの雲、うさぎさんみたいじゃない？」

「える……あゝ！うさぎしやん！」

「あつちのは羊さんかな？」

「あゝい、ひつじしやん！……あれ、くましやん！」

「ほんとだ！お空の動物だね！アハハハ」

あげはさんのおかげで、エルは落ち着いてきたようだ。

やつぱり、あげはさんはすごいな。

そんなことを思っていると、周りがざわざわとしてきた。

きつと、いきなり出てきたあげはさんに驚いているんだろう。

「あつ、やば！やつちやつた！……こんな時は……思いつきり楽しんじやお！」

そうして、あげはさんが急遽参戦することになり、カッコーさんがそれに合わせてミュージックを流し、他のスタッフさんがメイクを施した。

そして、ファッションショーが再開する。

ショーの盛り上がりは最高潮。もはや、俺の出番は必要なさそうだ。

「ソウナちゃん！そろそろ出番よ！」

「はい？でも、盛り上がってますし、私が行く必要はないのでは？」

「何言ってるの〜！ソウナちゃんがいないと、ショーが成功したとは言えないわよ」

「…わかりました」

そう言つて、俺は観客が待つ場所に向かう。

そうして、一步踏み出した。

すると、俺の姿を見た観客が静まり返る。

そして、視線が俺に集中する。

何か失敗してしまっただろうか…まあ、だとしてもやり切るしかない。

だが、そんな不安はすぐに消え去った。

「綺麗…」

「誰、あの子…超絶美少女なんだけど！」

「あんな可愛い子見たことない！」

「しかもあの服、よく見たら、キュアナイトの服に似てない？」

「確かに！」

「私、キュアナイト大好きなんだよね！」

そんな声が聞こえてくるうちに、どんどん周りが盛り上がっていく。

俺もそれに合わせて、パフォーマンスをする。

ポーリングを決めたり、観客に手を振ったり。

後は俺らしくもなく、ウイंकをしてみたり。

その度に歓声が上がった。

そうして、ファッションショーは無事に成功したのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／／／

「はあ…つ、疲れた…」

「お疲れ様！ソウナちゃん。すごい盛り上がりだったね！最後、ソウナちゃんが登場した時、みんなの視線を全部奪っちゃったもん！すごいよ！」

「そうですかね…まあ、ちゃんとファッションショーを成功させられて良かったですけど」

そんな会話を交わしていると、嫌な気配を感じる。

「これはミノトンか！」

「ソウナちゃん？」

「あげはさん、敵です…あげはさんはみなさんを避難させてください！私は先に行つて、

迎え討ちます」

「わかった！こっちは任せて！」

あげさんの言葉を聞き、俺はそのままプリキュアへと変身する。

「静寂ひろがる夜のとばり！キュアナイト！」

そうして、変身を終えた俺がステージへと戻ると、そこにはミノトンとコードのようなものが何本か伸びている、よくわからないランボーグがいた。

観客は避難しているのか、ステージにはカツコーさんとまりあさんとかぐやさんしか残っていないかった。

あげさんにはさつき頼んだばかりだし、こんなにも早く避難が終わるとは思えないけど。

…もしかしてミノトンが避難させたのか？…色々と迷惑なやつではあるが、こういうところは好感が持てる。

まあ、はた迷惑であるのは変わらないが。

「来たか！キュアナイト！」

「キュアナイト!? 本物!? すごい! リアルキュアナイトじゃん! あの! 私、かぐやつて言います! 良ければサインを…!」

「サインは後で。みなさんは今のうちに避難してください。ここに居ては危険ですから」

「そうね! 2人共、今のうちに避難するわよ」

「キュアナイト! 助けてくれてありがとう! サインも出来れば…」

「かぐや、今はそれどころじゃないでしょ…助けてくれて、ありがとうございます」

3人はそれぞれそう言つて、その場から避難した。

「お待たせ!」

「バタフライ! それにみんなも!」

「出揃つたようだな…プリキュア」

「みんな楽しんでアゲアゲだったのに…」

「楽しい? 楽しさなど不要だ」

「みんなのアゲアゲな気持ちをサゲンな!」

「せっかく、ファッシュョンショーが成功したのに、こんな後味の悪い気持ちにさせるなんて許せません…! 容赦はしませんよ」

そう言つて、俺達は全員でランボーグに飛びかかり、そのままランボーグを遠くに投

げ飛ばす。

それに巻き込まれて、ミノトンもランボーグと共に遠くへと飛んでいく。

俺達はそれを追って、ランボーグ達の元へと向かう。

そして、その場に辿り着いた俺達は再び臨戦態勢を取った。

「この程度では鍛え上げた我を倒すことは出来んぞ！」

「もちろん、ここから本番です！プリキュア・ミライレコード！ミライコネクトβナイト
！」

そして、俺はβスタイルへと姿を変える。

「ラン…ボーグ！」

ランボーグの咆哮と共にコードのようなものから、赤いレーザー光線が放たれる。

「一か八か…！」

そう言って、スカイはレーザー光線を躲しながら、接近していく。

だが、避けきれず、レーザー光線が命中しそうになる。

「危ない！」

俺はすぐさまスカイを助けにいき、レーザー光線を刀で弾いた。

「ナイト、ありがとうございます…助かりました」

「どういたしまして。…それにしても、あのレーザー光線は厄介ですね」

「無闇に近づいてはダメです！狙い撃ちされますよ」

「ウイングの言うとおりですね…っ！来ます！」

ウイングの言葉に返事をしている途中で、攻撃を察知し、俺はみんなにそう伝える。ウイングは攻撃を避けていくが、避けきれず攻撃が命中する。

プリズムは小型のプリズムショットで防ぎ、バタフライは蝶型のシールドを展開して防いでいく。

俺は最低限の動きで、それを回避する

(なるほど…これがレーザー光線の軌道、速さ、威力…うん、大体把握した)

俺がそんなことを考えていると、ミノトンが言葉を紡ぐ。

「軟弱者どもが…日々の鍛錬を怠り、チャラチャラした恰好で笑っているからだ」

「みんなが笑う…最高じゃん」

ミノトンの腹が立つ言葉にバタフライがそう呟く。

「いつも笑えるわけじゃない…苦しい時、辛い時、泣きたい時もある。でも、そんな時こそ笑顔で、みんなを笑顔にするために頑張つて…頑張つて！笑顔が返ってきたら最高なんだって教えてくれた！だから、私もそんな風になりたいんだ！」

あげはさんの言葉が心に響く。

きつと、あげはさんの今までの経験によって言葉に重みがあるんだろう。

「そうですね…バタフライの言う通りです！だからこそ、私もみんなを笑顔にするために、もっとアゲていきます！」

俺の言葉と共に胸の辺りが光り輝き、新たなスカイトーンが出現する。

「バタフライ、力をお借りします！」

そうして、俺は新たなスカイトーンを手に取り、新たな姿へと変身する。

「プリキュア・ミライレコード！ミライコネクト！ナイトバタフライ！」

スカイトーンをスカイミラーージュにセットする。

すると、青みがかかった黒髪のポニーテールはそのままに、ミニスカートの黒の和装が赤とピンクを基調としたミニスカートの和装へと変化する。

それに伴い、黒のニーハイソックスが白のニーハイソックスへと変換し、ハイカットブーツが黒のローファーへと変化した。

そして、キュアナイトの刀は淡い白銀の輝きから、淡いピンク色の輝きを放つ。

そうして、キュアナイト、バタフライスタイルが誕生した。

「これがナイトの新しい姿！」

「バタフライに似てる姿だね」

「うん！ナイトもアゲアゲだね！」

「そうですね…アゲアゲです！バタフライの力、しっかり使わせて頂きますね！」

そう言つて、ランボーグに向かう。

それに対してランボーグがレーザー光線を放つ。

それを回避していくが、すべてを避けきれず一部が俺に命中しそうになる。

「「「ナイト!!」」」

だが、その攻撃を俺はシールドを出現させて防ぐ。

レーザー光線を回避し、時にシールドを出現させて防ぎ接近する。

「バカな!?!あの攻撃をすべて防ぐだど!?!」

驚くミノトンをよそに接近していき、ランボーグに辿り着いた俺はランボーグのコードをすべて回転切りで斬り裂いた。

そして、一度距離を取り、浄化技を放つ。

「ヒーローガール！ナイトスラッシュユ！」

月の輝きが宿り、刀が淡いピンクの輝きがさらに光り輝く。

そして、そのままランボーグを斬り裂いた。

最後に納刀の動作を行い、ランボーグは完全に浄化された。

「スミキツタ〜」

「なかなかやるな…：そうでなくては。我もさらに鍛錬に励むとしよう…：ミノトントン」
そうして、ミノトンは去っていった。

／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／

「ふう…：今日は本当に疲れた…」

「お疲れ様。でも、ソウヤ君、すっごく似合ってたよ」

「うーん…：それは喜んで良いんだらうか…」

「でも楽しかったでしょ？」

「まあ、楽しかったと思います」

「ふふっ！そっか！」

「あ、そうだ、あげはさん。後でサインを書くので、かぐやさんに渡してください」

「そういえば、サインをお願いされてたんだっけ？OK！任せて！」

「はい、お願いします」

そんな会話を交わしながら、俺達は帰路につくのだった。

忘れ去られたぬいぐるみ

「ひゃ〜！急に降ってきましたね…」

「そうだな…ゲリラ豪雨ってやつか」

ソラとお出かけしていたのだが、急に雨に降られてしまった。

「どこか雨宿り出来るところでもあれば良いんだけど…」

「あ！ソウヤ！あそこで雨宿りさせてもらいましょう！」

そう言つて、ソラが指差したのは洋館だった。

…何故だろう、とてつもなく嫌な予感がする。

とはいえ、今のままじゃ風邪を引いてしまうかもしれないし、背に腹は代えられないか。

そうして、俺達は洋館で雨宿りするのだった。

「まさか、急に降ってくるなんて…」

「そうだな…まあ、天気というのはそういうものだろうけど」

《こつち》

「えっ？どなたですか？」

「俺も聞こえたけど誰？」

そんなことを話している内に、急に扉が開いた。

え？怖つ…いや、家の中の人が開けてくれただけか？

「助かります」

「ちよつ！ソラ…」

ソラはそのまま家へと入り、俺もその後が続く。

「お邪魔しまゝす…誰かいませんか？」

「お邪魔します…あれ？まったたく人の気配を感じないな…空き家なんだろうか？」

鍵も開けっ放しだし、どことなく古びている印象を受ける。

でも、中はまだ新しいような気もするし、もしかしたら空き家になって、そんなに時間は経っていないのかもしれないな。

というか、待て…もし、ここが空き家なら扉は誰が…

俺がそんなことを考えていると、ソラの声が聞こえてくる。

「ぬいぐるみ？」

ソラに視線を移すと、汚れたネコのぬいぐるみを触ろうとしていた。

「ネコさん！可愛…」

「ソラ、ちよつとま…」

《連れてってニヤン!》

雷が鳴り響くのと同時に、ぬいぐるみが立ち上がり、急に喋りだした。

一瞬の思考停止…そして、俺とソラは…

「じゃ、しゃべった〜!!」

そう叫んで、一目散に逃げ出すのだった。

「はあく、さっきのは何だったんでしょうか…」

「本当に何だったんだ…喋るぬいぐるみ? ホラー映画かよ…」

「ソウヤ君! ソラちゃん! 2人共、大丈夫? はい、タオルで体を拭いて」

俺達を出迎えてくれたましろさんからタオルを受け取る。

「ありがとうございます」

「ありがとう、ましろさん。実は…」

俺がさっきあつたことを話そうとすると、ましろさんが言葉を紡ぐ。

「あれ? どうしたの? その子」

ましろさんの言葉に背筋が寒くなる。

「ま、まさか……」

若干、怖がりながらソラと一緒に顔を動かす。

すると、足元にさきほどのネコがぬいぐるみが居た。

「うわああああ!!」

俺とソラの叫びが響き渡る。

俺とソラの叫びが響き、あげはさんとツバサ君がこちらに来る。

だが、今はそんなことを考えている場合じゃない!

「ニヤニヤニヤニヤニヤ、ニヤんでここに居るんですか!？」

「こんなのおかしいだろーなんでここに、このぬいぐるみが……ガチのホラーじゃんか……」

「こういうのガチで苦手なんだけど……!」

転生する前の話だが、幼い頃に見たホラー人形の映画があまりに怖く、それ以降ぬいぐるみや人形……特にフランス人形が怖いのだ。

ぬいぐるみはそこまで怖くないのだが、いざ目の前でこういった怪奇現象が起きると、流石に恐怖を感じる。

「怖がつているソウヤ君、可愛い……(何があったの?)」

「ましろん、本音と建前が逆になってるよ……」

ましろさんとあげはさんが何かを言い合っていたが、それに耳を傾ける余裕はなかつ

た。

「…こほん。それで何があつたの？ソウヤ君、ソラちゃん」

そう聞かれて、俺とソラはさきほどの出来事を説明するのだった。

///
///
///
///
///
///
///
///

「えつと…このぬいぐるみがソラちゃん達について、うちまで来たつてことで良いのかな？」

「うん。ざつくり言えばそういうことかな…」

「私、確かに声を聞いたんです！『連れてつて』つてー！」

「俺も聞いた…！どことなく、『へけ！』とか言いそうな声で」

ちよつと遠くのソファで震えているソラの言葉にそう返す。

「ソウヤ君の例えは相変わらずわからないけど、2人共聞いたつてことは本当に『連れてつて』つてこのネコさんが言ったんだらうね…：そういうえば、ソウヤ君、落ち着いてるね」

「うん。さつきまでは怪奇現象が連続で起きてびつくりしたけど、今は落ち着いてる。よく見たら可愛いネコのぬいぐるみだし、今のところ特に害があるわけでもなさそうだしな。…もし、これがぬいぐるみじゃなくて、フランス人形だったら部屋に引きこもつていたかもしれないけど」

「あはは…ソウヤ君、フランス人形とか苦手なんだね…」

「あれはめちやくちや怖いんだよ…夜中に見たら叫び声上げる自信がある。うう…思い出しただけで寒気が…」

俺とましろさんがそんな会話を交わしていると、あげはさんが言葉が続ける。

「なるほどね…確か、街外れの洋館は今空き家になってたはずだよ」

「ということは…やつぱりこのぬいぐるみが…」

ツバサ君もその結論に至ったのか、そう口にする。

「おばけえ！」

「ひええええ！」

「ソラちゃん、怖いのは苦手なんだね…」

「まあ、昔からソラはそういう類のものが苦手なんだよ…それに関しては俺も人のことは言えないけど…と、それはさておき、エルの言う通り、多分このぬいぐるみは…」

俺がそう言うと同時に、突如としてぬいぐるみが動き出した。

「「えええ〜！」」

みんなが叫ぶと、ネコのぬいぐるみは周りにある本を動かし始める。

あまりの怪奇現象に、ましろさんとツバサ君、さらにはあげはさんも驚いて固まってしまう。

そして、ネコのぬいぐるみは動かした本でバリケードを作る。それはまるで自分の身を守るかのようだ。

それを見た俺は、気づけばネコのぬいぐるみに近づいていた。

「ネコさん、大丈夫だよ。何を怖がっているかはわからないけど、この場所は、ここにいる人達は怖くないよ」

「にやーにやー、だいじょうぶだよー」

俺に続くように、エルが笑みを浮かべてそう口にする。

すると、ネコのぬいぐるみはバリケードにしていた本を元の位置に丁寧に戻し、姿を見せてくれた。

それを見たエルはネコのぬいぐるみを抱きしめる。

「にやーにやー、あははははー！」

エルはネコのぬいぐるみを抱きしめて楽しそうに笑っている。

「…2人に教えてもらっちゃったね。誰が相手でも同じように接するってこと！」

「うーん、2人というよりはエルにじやないかな…俺は最初怖がってたし…まあでも、助けを求める人がいるなら、それが誰であれ手を差し伸べる…そうありたいとは思ってるけど」

あげはさんの言葉に俺はそう返す。

「確かにソウヤ君は最初は怖がってた……だけど、困っているネコさんに手を差し伸べたでしょ？ソウヤ君はすごいよ！だから、私は2人に教えてもらったって言ったんだ」

「未熟でした……その通りです！」

「ソラちゃん？」

『ヒーローは困っている人には誰にでも手を差し伸べる！』なのに……」

そう言いながら、ソラはネコのぬいぐるみに近づき、その手を握った。

「ネコさん、あなたの気持ちを分かろうともせず……ごめんなさい。私で良ければ力になります！」

そんな風に頼もしく言い放つソラだが、顔が若干引き攣っていた。

やっぱり、まだ怖いようだ。

「ひとまず綺麗にしてあげよっか！」

「そうだね……それじゃ俺がやるよ。意図したわけじゃないけどネコさんを家に連れてきてしまった？わけだし」

俺がそう言って、ぬいぐるみを洗おうとすると、ソラが声に掛けてくる。

「い、いえ！私がやります！これは私がするべきことなので！」

「そっか。わかった！それじゃあソラをお願いしますよ」

「はい！任せてください！」

そう言つて、ソラはぎこちない動きでぬいぐるみを手に取り、洗い始めようとするのだった。

：それにしても、あのネコさんは何故洋館に居たままだつたんだろう：引越しの時に持ち主が忘れてしまつたんだらうか。

捨てられたという感じでもなさそうだし：どちらかというと、遊んでいた時に親御さんに呼ばれたりとかして、そのまま放置して忘れてしまつたのではないかと思う。

あのネコさんの持ち主を探してみるか：まあ、ネコさんが望むことかはわからないが、持ち主を見つけることが出来れば、何かわかるかもしれない。

俺はそんなことを思いながら、ソラがネコさんを洗う光景を見るのだった。

ぬいぐるみの想いとソウヤの試練

「ふう……とりあえず欲しい情報は手に入ったかな……」

ネコさんのぬいぐるみとの生活が始まってから数日、俺は無事に持ち主を探し当てることが出来た。

詳しい情報は伏せるが、元の持ち主は小さな女の子だ。

約1年前に、あの洋館から引越した際にあのネコさんのぬいぐるみを忘れてしまっただけだ。

やはり、俺の思っていた通り、捨てられたわけではなかったのだ。

今日、電話してネコさんのぬいぐるみを見つけたと話したら、持ち主の母親は明日、洋館で待ち合わせをしようと答えてくれた。

「ただいま〜」

「ただいま戻りました!」

俺がそんな風に情報をまとめていると、出かけていたソラとましろさんが帰ってきた。

「お帰り。大丈夫? 何も問題はなかった?」

「それなんですが…実は」

そうして、ソラが今日あったことを話してくれた。

なんでも、ネコさんが急に動き出しかと思えば道行く人の元に向かったらしい。

なんとかましろさんがネコ型ドローンだと誤魔化し、事なきを得たようだが、一歩間違えたらアウトだった。

「…なるほどな、そんなことが…多分だけど、持ち主の女の子に似ている人がいたのかも」

「そうなんですか？」

「うん。ネコさんがうちに来てから、俺も持ち主を探しててさ、ようやく見つけたんだ。

その持ち主が小さな女の子なんだよ」

「持ち主、見つけたんだ！すごいよ！ソウヤ君！」

「まあ、探偵の仕事はよく手伝ってたから…物を探したり、人を探すのは得意なんだ。

まあ、これがネコさんにとって良いことかはわからないけど」

「きつと、ネコさんも喜びますよ！」

「そうだと良いけど…とりあえず、明日、洋館で待ち合わせしてるからネコさんも連れて行く」

「そうですね！ソウヤ、ありがとうございます！」

「どういたしまして！」

ネコさんを隣に寝かせ、一緒に眠る。

すると、辺りが虹色に輝いている空間にいました。

「うん？これは…」

これは夢でしょうか…もしかして、ネコさんの影響？

そんなことを思っていると、目の前にネコさんが姿を現した。

「ソラ、今日はごめんニヤ」

「大丈夫ですよ。なんともありませんでしたし」

「でも騒ぎになっちゃったニヤ…」

「大丈夫です。事情はわかってますから」

「そうなのニヤ？」

「はい。ネコさんがあの女の子の元に向かったのは、お友達に似ていたから、ですよね？」

私がそう言うと、ネコさんは少し驚いたような顔をして、言葉を続けた。

「…そうニヤ。友達に似てたんだニヤ…その友達とは嬉しい時も悲しい時も一緒だったニヤ」

ネコさんの言葉と共に、周りの景色が変化する。

それはネコさんとその友達の思い出の光景でした。

「ずっとずっと一緒にいられると思ってたニヤ」

ですが、ネコさんの悲しそうな言葉と共に再び景色が変わる。

それはネコさんが洋館に忘れ去られてしまった時の記憶でした。

「でも、ひとりぼっちになったニヤ…さみしいニヤ。…昼間の子はあの子に似てたんだニヤ」

「ネコさん…大丈夫です！ソウヤがネコさんの友達を見つけてくれたんです！一緒に会いに行きましょう！」

「ホントニヤ？ソウヤが見つけてくれたのニヤ？」

「はい！ネコさんのために頑張ってくれたんですよ！」

「…でも、やっぱり怖いニヤ…もしかしたら、あの子はもうぼくのことなんて嫌いになっているかもしれないニヤ…」

「そんなことはありません！それに、もしネコさんが嫌われていたとしても、その時は私はずっと一緒にいます！」

「ずっとなんてないニヤ…それに、これ以上迷惑はかけられないニヤ」

そう悲しそうに言つて、ネコさんはさらに言葉が続ける。

「ソラ、見つけてくれて、一緒に遊んでくれて…嬉しかったニヤ…ありがとニヤ。ソウヤにもお礼を言つておいてほしいニヤ」

ネコさんはそう言つて、笑みを浮かべた。

それを最後に私は夢から醒めました。

「ネコさん!!」

目を覚まし隣を見ると、そこにはネコさんがいませんでした。

私は慌ててベッドから降り、皆さんにこのことを伝えに向かうのでした。

／／／／／／／／／／／／／／／／／／

「ネコさんはあの洋館にいるはずですよ」

ソラがネコさんがいなくなったと俺達に伝えにきて、俺達は慌てて身支度をし、ネコさんを探しに向かつていた。

「ネコさん、大丈夫だと良いけど。…っ!この気配は何だ?ミノトンでもなく、アンノウンでもない…とりあえず、行くしかないか」

俺はそう呟きながら、方向転換をしようとする。

「ソウヤ?どうしたんですか?」

「今まで感じたことのない気配を感じた…ソラ、悪いけどネコさんのことはお願いして良いかな？俺も後で合流するから」

「…わかりました！ネコさんのことは私達に任せてください！…ソウヤ、無茶しないでくださいね」

「うん、大丈夫。…ソラ達も気をつけて！」

俺の言葉に皆が頷いてくれた。

俺はそれを見た後、気配の元に向かうのだった。

「気配はここからだけど…」

俺がそう呟くと同時に謎の空間が広がり、俺は閉じ込められてしまった。

「まさか、こんな偶然があるなんて…これは私の後悔が引き起こしたことなんでしょうか」

どこか聞き覚えがある声が響き、視線を移す。

そこにいたのはキュアナイトだった。

「俺？どうしてキュアナイトの姿が…もしかして、別の世界の俺とかそういうパターン？」

「流石、私。理解が早くて助かります」

「マジで？でも、どうして…」

「どうしてここに、という質問をされても困りますね…私も気づけばここに居たので…ですが、ちようど良かった。さあ、変身してください。今からあなたに試練を与えます」
「試練…わかった。詳しい状況はわからないけど、俺は今、あなたと戦わなければいけない気がする」

そうして、俺はミラーージュペンを構えて、キュアナイトに変身する。

「静寂ひろがる夜のとばり！キュアナイト！」

プリキュアへと変身した俺はさっそく臨戦態勢を取る。

「あなたのことはなんと呼べば？同じキュアナイトだとややこしいですし」

「そうですね…私のことはアナザーとでも呼んでください。別の世界のあなたでもありますし、これ以上ないネーミングでしょう？」

「なるほど…わかりました。いきますよ！アナザー！」

「ええ。あなたの力を見せてもらいましょう」

そうして、戦闘を開始する。

俺とアナザーは同時に接近し、拳がぶつかり合う。

槍を出現させて、お互いに何度もぶつかり合う。

別の世界の俺ということもあってか、実力は互角。

お互いに思考も似通っているせいか、戦況は拮抗したままだ。

「ふむ、やはり自分同士との戦いのせいか、なかなか決着がつきませんね…そろそろギアをアゲていきましょう！」

そう言つて、アナザーはαスタイルの姿へと変化する。

「ミライコネクトではないんですね…」

「ええ。私の未来は、あの時にすでに閉ざされてしまいましたから。これは私の過去の力を再現する力によって、一時的に変化した姿にすぎません」

そう言つて、アナザーはさらに言葉を続けた。

「そして、これから見せる力こそ、私があなたに試練を与えた理由です」

そうしてアナザーは力を開放し、αスタイルの姿が変化していく。

黒のミリロリ風の姿が白と黒のミリロリ風の姿に変化し、瞳の色が黒曜石のような黒い瞳と、翡翠色のオッドアイへと変化する。

そして、αスタイルの槍とプリズムスタイルの銃が手に握られていた。

「これは…！」

「そう。これこそが私の辿り着いた力…デュアルスタイルです」

「デュアルスタイル…！つまり、この姿はαスタイルとプリズムスタイルの力が合わさった姿…」

「ええ。さあ、ここからアゲていきますよ。あなたもちやんとしないと、すぐに死んでしまいますよ？」

そう言い放つアナザーはとてつもない威圧感を放っていた。

アナザーの思いとぬいぐるみとの別れ

「くっ……」

俺はデュアルスタイルとなったアナザーの攻撃に防御に徹することしか出来ない。

デュアルスタイルは銃で攻撃しつつ、瞬時にこちらに移動してきて槍で攻撃をしてくる。

しかも、こちらに移動するタイミングがまるで読めない……かといって、銃による攻撃を無視すれば、ダメージを避けられない。

正直、第六感がなければ一瞬で殺されてしまっていただろう。

「まさか、この程度ではありませんよね？」

「当然！ まだまだこれからです！ ミライコネクト！ βナイト！」

そうして、俺はβスタイルに姿を変える。

「βナイト？ 見たことがないスタイルですね……これがあなたの可能性の一端ですか」

「βスタイルを知らない？ アナザーはβスタイルに覚醒しなかったんですか？」

「ええ。私にはあなたのように未来への可能性が残されていなかった……さて、油断は禁物ですよ」

そう言いながら、アナザーは何発もエネルギー弾を放つ。

俺は最小限の動きで、それを回避し、時にエネルギー弾を受け流す。

すると、アナザーは姿を消し、俺が受け流したエネルギー弾の場所に移動してきた。

なるほど…そういう理屈か。

俺は思考を働かせながら、アナザーの攻撃を防ぐ。

攻撃を防がれたアナザーは俺から一度距離を取る。

「ようやくカラクリがわかってきました。おそらくデュアルスタイルの力、いや、 α スタイルの本来の能力は槍の場所に瞬時に移動する能力ではなく、正確には私の力の痕跡がある場所に移動する能力なのでしょう？」

「流石の理解力です。 α スタイルには槍の場所に移動する能力がある…これは半分正解、半分不正解です。正確には私の力の痕跡がある場所なら、どこでも移動可能です」

「だからこそ、エネルギー弾の場所にも瞬時に移動できた… α スタイルの瞬間移動能力とプリズムスタイルの銃撃が合わさることで、予測不能の連続攻撃を可能にしている…それがデュアルスタイルなのでしょう」

「その通りです。ただ、エネルギー弾の場所に移動できるのはデュアルスタイルの時限定ですが」

「なるほど…一つ聞いても良いですか？」

「なんですか？」

「戦っていて感じましたが、あなたから絶望や後悔…そして、どこか何かに縋っているような、そんなことを感じました…一体何があつたんですか？」

俺がそう言うのと、アナザーは少し悲しげな顔をして、語り始めた。

「…俺は大切な人を誰一人として守れなかった…ソラもましろさんも、そしてあげはも…」

「あげは？ その呼び方…アナザーはあげはさんと恋人だつたんですか？」

「…ああ。俺は姉さんがランボーグになるのを止められず、後悔した…絶望した…そんな時に俺を助けてくれたのが、あげはだつたんだ」

「…そうだつたんですか…」

「でも、ミライレコードは輝きを失ってしまった。これはつまり、俺にはこれ以上未来がないことを示しているに等しい…そして、その理由についても俺は後に理解することになった」

そう言つて、少し間を置いてアナザーは言葉が続けた。

「近い未来、お前達の前にとつともない敵が現れる…あれは破壊の化身そのもの…戦い方の工夫とか、戦略を立てるとか…そんなレベルでなんとかなるものじゃない…」

そう口にするアナザーは震えていた。

「…その敵の名前は？」

「その敵の名前は…」

そうしてアナザーが6文字の言葉を口にした。

「…聞いたことのない名前です。アンダーグ帝国の誰かですか？」

「いや、違う…確かにスキアヘッドという幹部もお前達の前に姿を現すだろうが、あれはまだ対処可能だ。あいつのように勝ち目がわからないわけじゃない」

今、さらつと知らない名前が出てきたんだけど…スキアヘッドか…覚えておこう。

そんなことを考えていると、アナザーが深呼吸をし、戦闘モードへと切り替えていた。「…さて、続きを始めましょうか。さらにギアをアゲていきますよ！」

そうして、さらにアナザーの姿が変化する。

その姿は赤と黒のセパレートタイプのミニスカドレスであり、青みがかった長い黒髪は金色の髪に変化し、瞳がルビーのような赤い瞳とアメジストのような紫のオッドアイに変化していた。

「これは、αスタイルとバタフライスタイルのデュアルスタイル!?…確かに、デュアルスタイルが1つとは一言も言っていないませんでしたね」

「その通り。さて、いきますよ」

「なら、こちらにも…ミライコネクト! ナイトバタフライ!」

アナザーがバタフライとの力を使うなら、こちらも使うべきだろう。

「あなたもバタフライとの力を…少し複雑ですね…」

「私って、意外と独占欲強め？…まあ、ともかく始めましょうか」

そうして、再び私達の戦闘が始まった。

「ふっー」

アナザーが槍を10本ほど出現させて、一斉に投げつける。

それを回避しようとしたが、嫌な予感がし、それを中断して咄嗟にシールドを展開する。

すると、槍がシールドに着弾すると同時に爆発が起きる。

「爆発!?なるほど、バタフライの投げキッスの…っ！」

爆風の中にアナザーの気配を感じ、刀で斬りかかる。

それをアナザーは槍で防ぐ。

「流石ですね、キュアナイト。ですがまだまだ！」

そう言って、アナザーは刀を弾き、そのまま俺を蹴り飛ばす。

「あぐっ！」

俺は体勢を整えることが出来ず、何度か地面に叩きつけられる。

そして、ようやく立ち上がるが、立ち上がった矢先に俺の周りを囲むように無数の槍が出現していた。

「しまっ…!?!」

「シヨット」

アナザーのその言葉と同時に無数の槍が俺に襲い掛かる。

「さて、どうなり…:…っ！やはりそう上手くはいきませんか」

俺は、自分の周りに無数のシールドを展開し、咄嗟に槍の攻撃を防いだ。

危なかった…:流石に全方位からの攻撃を防ぐのは至難の業だ。

だが、ここから反撃だ。

俺はすぐさま刀をアナザーに投げつける。

アナザーはそれを弾く。

だが、おかげでアナザーの視線を誘導することが出来た。

俺はアナザーの視線が外れた瞬間に跳び上がり、シールドを足元に出現させ、それをキックしながらアナザーに向かう。

「ひろがる！ナイトスタンプ！はあああっ！」

足元に出現させたシールドが巨大化させ、そのままアナザーにキックする。

そして、それが直撃したアナザーはデュアルスタイルが解除され、キュアナイトの姿で倒れていた。

「…完敗です。あなたは強いですね、キュアナイト」

「アナザー、何故、私が攻撃する前にαスタイルの力で移動しなかったんですか?」

「しなかったのではなく、出来なかったんです。私には第六感がもうありません…だから、あなたの攻撃に気づくのが遅れた…その遅れが致命的だったんです」

「第六感が…それは死んでしまったから、ですか?」

「そうです。…さて、私はもうこれまでですね」

そう口にするアナザーの体が薄くなっていく。

「良かった…最後にあなたにデュアルスタイルを教えることが出来て。きつと、あなたなら最良の結末を迎えることが出来ます。…私には出来ませんでした」

「はい。必ず…あなたが果たせなかったこと、私が果たします」

「…ありがとう。…そうだ、最後に1つお願いが」

「なんですか?」

「私達を殺したあの破壊の化身のことも助けてあげてください」

「…どうしてですか?まあ、助けることに理由はいりませんが。あなたがそう思ったこ

「とには理由があるんでしよう？」

「…彼女はよくも悪くも純粹です。もし、あの時私達が何か出来ていたら何かが変わったのではないか…そう思えてならないんです…まあ、戦っているときはただ圧倒的な絶望と焦燥感にかられて、それどころではなかったのですが」

俺の問いに苦笑を浮かべて、アナザーはそう答えた。

「でも、今はそう思うんです」

「…わかった、やれるだけのこととはやるよ。だから、俺に…俺達に任せてくれ」

「ありがとう…これで安心してみんなの所に行ける」

そう言つて、安心したように笑いながらアナザーは消えていった。

俺はそんなアナザーを見送つてから、みんなの元に向かうのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ソウヤ！大丈夫でしたか？」

「うん。そつちも大丈夫だった？」

「はい！ミノトンと戦うことになりましたが、ネコさんのおかげでなんとかかかりました
！」

「そつか…ネコさん、ありがとう。…そういえば、もうすぐ元の持ち主との待ち合わせ時間だな…」

俺がそう眩くと同時に、車がこちらに向かってくる。

そこから母親とその娘らしき人達が姿を現した。

「すみません…もしかして、この子の持ち主の方ですか？」

そう尋ねて、ソラの持つネコさんを見せる。

「マロン！」

「ネコさんの名前はマロンさんと言うんですね…」

「もしかして、あなた達がぬいぐるみを預かってくれていた方達ですか？」

「はい。…急にお電話してすみませんでした」

「いえ、むしろありがとうございます。そのぬいぐるみ、この子のお気に入りだったんですが、引越しの時に忘れてしまって…でも、なかなかこっちの方まで来られなくて…」

母親がそう答える中、娘さんは少し悲しげだ。

もしかして、マロンさんを置いていってしまったことに負い目を感じているんだろうか。

「いいんだよ、りほ。マロン、ちゃんと見つかったよ」

母親が娘さん…りほちゃんにそう言っていると、マロンさんもどことなく緊張しているように感じた。

「マロンさん、大丈夫」

「ソラの言う通りだよ。大丈夫だ」

俺とソラはアイコンタクトを取り、ソラがマロンさんの手を持ち、動かした。

「ずっと、待ってたニヤ」

マロンさんの思いをソラが代弁する。

それを聞いたりほちゃんは涙を流し、マロンさんに抱きついた。

「マロン！会いたかった！…マロン、置いていつてごめんね…これからはずっと一緒だよ！」

そうして、しばらく泣いた後、りほちゃんはマロンさんを大事に抱えて母親と共に帰っていく。

「にやーにやー、ばいばい」

「ソラちゃん、ちよつと寂しい？」

「…大丈夫です！マロンさん、嬉しそうだったから…」

「そうだね…マロンさん、嬉しそうだった。マロンさんの助けになれて良かった」

そんな会話を交わしていると、ふと、マロンさんがこちらを見たような気がした。

「ソラ、ソウヤ…ありがとニヤ。フフツ」

そう言つて、マロンさんは笑顔を浮かべていた。

俺とソラはお互いに顔を合わせ、笑みを浮かべる。

「ぬいぐるみつけていいですね」

「そうだね」

俺達は晴れ渡った空を見ながら、そんなことを思うのだった。

のだ…それでは戦闘する時に途中でデュアルスタイルが解除される可能性がある。

「別のやり方を考えるか…」

「ソウヤ君！入るよ」

あげはさんの声が聞こえてきて、どうぞと声を掛ける。

俺の返事を聞いて、あげはさんが部屋に入ってきた。

「あげはさん、どうかしたんですか？」

「ソウヤ君！海いこー！」

「海に？」

あげはさんの言葉に俺はそう聞き返すのだった。

「広〜っ！」

海に着き、水着に着替えた俺達は海を見渡す。

ソラは初めて見た海に驚きの声を上げていた。

「この世界の7割は海だそうですねよ」

「それって、この世界のほとんどが海ってことですか!？」

ツバサ君の言葉にソラはそう反応する。

「うん、そうなるかな…しかも、海のこととはほとんど判明していないって聞いたことがある。人間は海についてほとんど知らないんだとか…色々と未知の場所なんだよ、海は」
ソラは俺とツバサ君の話の聞いて、軽くカルチャーショックを受けているようで、目眩を起こしている。

「ねえ…早く泳ごうよ」

ソラの様子を見かねたのか、ましろさんがそう口にする。

「そうだね！あ、でもソラは…」

「大丈夫です！ソウヤ！ガッツでなんとかします！」

「いや、海はスカイランドの湖とはちが…」

俺の静止も虚しく、ソラは海に入るのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／／／

「ソラちゃんが泳げないなんて意外だね…」

海に入ったソラは案の定泳げず、砂浜に打ち上げられてしまった。

そして、ソラは今、ましろさんから渡された飲み物を飲んで休憩している。

「ソラは昔から泳げなくてさ…泳げないから、ガッツとハートで湖の底を歩いていたりもしてたんだよ…まあ、ソラも別に困ってなかったし、湖の底を歩けるのはそれはそれ

ですごいから放置してたんだけど」

「湖の底って歩けるんだ…」

「ソラが例外なだけだよ…普通は無理」

「海もいけると思ってたんですが…」

「歩くつもりだったんだ…海の底を」

ましろさんが苦笑しながら、そう口にする。

「…一刻も早く克服しなければ!」

そう言ってソラが立ち上がり、言葉が続けた。

「地上のほとんどが海なのに、今まで戦いの場にならなかったのは、ただラッキーが続いていただけです!」

「まあ、確かにそれはそうかもな…」

「はい…ヒーローたるもの泳げなくてはなりません!だから、皆さん、私に泳ぎ方を教えてください!」

「フン!とソラはやる気まんまんだ。」

「そうして、ソラの水泳特訓が始まるのだった。」

「結局、こうなるのね……」

特訓が始まり、まずはツバサ君が泳ぎ方を教えてくれたのだが、泳ぎ方が羽根を使つての泳ぎ方だったので、ソラの参考にはならなかった。

続いて、あげはさんが教えてくれたのだが、アレは泳ぎを教えるというより、小さい子を海に連れてきて一緒に遊ぶ感じで、泳ぎ以前の問題だった。

そして、最終的に小学生の時にスイミングスクールに通つて8級だったというましろさんに泳ぎを教えてもらうことになった。

俺もそれに付き合う形になり、ましろさんと一緒にソラに泳ぎを教えることになった。

「まずは水に浮く練習から始めようか。…力を抜いて、空に浮いているような感じで……」
そう言いながら、ましろさんは海に浮かぶ。

「俺もやろうかな……こうぶか〜つとね……」

俺もましろさんに習い、海に浮かぶ。

思わず鼻歌を歌いそうになる。

「ソラちゃんもやってみて」

「うん、俺とましろさんがやったみたい」

「はい！力を抜いて…」

そうして、浮かぼうとしてソラはバランスを崩した。

「うーん…やっぱりソラは力が入りすぎてるな」

「そうだね。ソラちゃん、そんなに緊張しなくて大丈夫だよ」

「そう言われても、やっぱり緊張してしまいます」

「海に身を委ねるんだよ！ふわ～って」

ましろさんがソラの緊張を解そうとそう口にする。

だが、相変わらず動きが硬い。

「あはは…ソラの緊張を解するのは苦労しそうだね…」

「うう…どうしても力が入ってしまいます…なんとしても海を…この壁を超えなければ…」

ソラが必死な顔でそう口にする。

「…ソラ、その認識は間違いだよ。そもそも海は超えなければいけない壁じゃない」

「海は超えなければいけない壁じゃない…」

「うん。…あ！そうだ！ましろさん、ここにスノーケルはある？まずはソラに海の綺麗な景色を見せてあげよう！」

「うん、そうだね！まずは楽しまなきゃ！さつそく、持つてくるね！」

そうやって、ましろさんが海から出てスノーケルを取ってきてくれた。

「これは？」

「これは、さつきソウヤ君が言っていたスノーケルだよ！泳ぎながら呼吸が出来るんだ」

「これをつければ、海の中の綺麗な景色を見ることが出来るんだ。一回、ソラも着けて海に潜ってみて！きつと感動するよ」

「わかりました！やってみます！」

そうして、俺達はスノーケルを着けて海に潜る。

すると、そこにはたくさんのお魚が泳いでいる、とても綺麗な景色が広がっていた。

その景色に感動しているのか、ソラも目を輝かせている。

そうして、綺麗な景色をひとしきり堪能してから、俺達は海から顔を出した。

「ぶは…ソラ、どうだった？」

「はい！とても綺麗でした！溺れるのに忙しくて気が付きませんでした、海の中にはこんな綺麗な景色が広がっていたんですね！」

「喜んでくれたみたいで良かった」

そんな会話を交わしていると、あげはさん達が浮き輪を持ってこちらに向かってきた。

「浮き輪！レンタルしてきたよ」

「ありがとう！あげはさん！ソラ、浮き輪を使ってみてくれ」

「は、はい…」

そう答えて、ソラは浮き輪を使う。

「し…沈まない!?浮いてますよ!」

「浮き輪には空気を溜め込んでいるので、水に浮くんですよ」

「なるほど…」

「こう考えると、浮き輪ってすごい発明だよな」

その後、浮き輪に乗ったソラと一緒に泳いだり、バナナボートにみんなで乗ったりと海水浴を楽しんだ。

そして、ひとしきり海水浴を楽しんだ後、スイカ割りをするようになった。

「目隠しをしたままスイカを割れば良いんですね?」

「うん!その前にまず、3回、回らなきゃだよ」

ましろさんがそう言うと同時にソラはその場で3回、回った。

そうして、スイカ割りが始まる。

「右ですよ!右!」

「もつと前だよ!前」

そんな風に皆が声を掛けている中、ソラは何かを感じ取ったかのようにスイカに迷い

なく近付き、そのままスイカを割ることに成功した。

「「「おぉ〜!」」」

俺達の歓声が響く。

「迷わずに割った!」

「どうしてわかったの?」

「スイカの気配を感じ取りました」

「なるほど…:そういうことか。確かにそれならいけるな」

「当たり前のように話してるけど、スイカの気配ってなに!?なにが確かにそれならいけるなの!?!」

ましろさんのツツコミに、相変わらず的確なツツコミだと思いつつ、割ったスイカをあげはさんと一緒に切り分けた。

そして、切り分けたスイカを食べ始める。

「美味しいです!」

「夏だねえ…」

「スイカ良いよな…:久しぶりに食べたけど美味しい」

そんな会話を交わしながら、俺達はこの時間を楽しむのだった。

進化のピース

「うーん！やっぱり海って楽しいな」

みんなでスイカを食べた後、ビーチバレーをしたり、砂でいろんなものを作ったりして楽しんだ。

俺は今、ソラとましろさんと一緒に、砂で作ったプールで遊んでいるエル達を見ながら休憩中だ。

「そうですね！海…スカイランドの湖とは、また違った美しさがあります」

「夏休みの最後に来られて良かったね…みんなでき」

「そうだね。みんなで来られて良かった」

ましろさんの言葉に俺はそう返す。

またみんななどの思い出が1つ増えた。

これからもうろんな思い出をみんなと積み重ねていきたいな。

「あぁっ！」

「急にどうしたんだ？ソラ」

「泳ぎの練習をすっかり忘れていました！」

「なんだそんなことか…もう問題ないと思うけど」

「練習していませんですよ！このままでは…」

「ふふっ！ソラちゃん、大丈夫だよ。ソウヤ君の言う通り、もう大丈夫だと思う」

「どうして…」

「だって、海…楽しかったでしょ？」

「それは…はい。とても楽しかったです！」

ましろさんの質問にソラが笑みを浮かべながら、そう答える。

「だったら、大丈夫。もう泳げると思う」

「うん、俺もそう思う。好きこそものの上手なれとも言っし、まずは楽しむことが大事だ。そして、ソラはもう海を楽しめてる。なら大丈夫だよ」

「ソウヤ…ましろさん…」

「…さて、俺も、もう少し海を満喫するでしょう。…その前にちよつとやる事が出来ちやっただけど」

「やること？それは一体…」

「まあ、いつものやつだよ。…行ってくる」

「…！わかった。ソウヤ君、気をつけてね」

「…まさか、アンノウン？…ソウヤ、気をつけて行ってきてくださいいね」

「うん、行ってくる」

そうして、俺はプリキュアへと変身し、ある人物のところに向かうのだった。

「…あなたがどうしてここに？」

「やはり来たか…プリンセス」

そう口にするのはやはりというべきか、アンノウンだった。

「安心しろ。今日は貴様と戦いにきたわけではない」

「…では何故？」

「貴様に情報を教えにきた」

アンノウンの言葉に疑問符が浮かぶ。

何故アンノウンが俺に情報を教えるのか理解出来なかった。

俺がそんなことを考えていると、アンノウンが言葉を続ける。

「なに、単なる気まぐれだ。…現在のアンダーグ帝国の女王には目的がある。そのためにはプリンセス・エルが必要…これは貴様も知るところだろう」

「ええ、それは私達も知っていることです。敵のボスが女王だとは知りませんでした

「まさか、それが情報ではないでしょうね？」

「当然だ。私が伝える情報は女王の名前と、1人の幹部についてだ」

「女王の名前と幹部：もしや、その幹部はスキアヘッドという名前ですか？」

「ほう：スキアヘッドについては知っていたか」

「名前だけは。どんな能力を持っているのか、どんな容姿なのかまでは知りませんが」

「スキアヘッドは今まで貴様達が戦ってきた幹部とは格が違う。おそらくミノトンがいなくなれば次に来るのはそいつだろう。だがまあ、そいつに関しては問題あるまい：プリンセス、貴様の敵ではない」

アンノウンの俺への謎の信頼の言葉を聞きつつ、心の中で苦笑する。

「：ちなみに、どんな能力を持っているんですか？」

「さあな：だが、奴の言葉に反応して、なにかしらの術が発動する仕組みのようだ」

「なるほど：言霊のようなもの：いや、どちらかというと、詠唱で発動するタイプの魔法に近いのかもしれないね。それにしても、スキアヘッドの能力について知っているとは：もしかして戦いましたか？」

「ああ。まさかアンダーグ帝国に入った瞬間に戦う羽目になるとは思わなかった：確かに、私のことを知るものは既にもいないだろうが、失礼にもほどがあるだろう」

アンノウンは不満気にそう口にする。

もしかして、俺に情報を教えたのって、その憂き晴らしをしたいという理由もあったりするんだろうか。

「…そして、現在のアンダーグ帝国の女王の名前はカイザリン・アンダーグ…お前達の戦うべき相手だ」

「カイザリン・アンダーグ…」

それがアンダーグ帝国の女王の名前か。

アンダーグ帝国の女王…一体何者だ…その目的は…まあ、アンノウンの口ぶりから察するに、アンノウンもそこまでは知らないだろう。

「…これはあくまで私の推測だが…カイザリン・アンダーグの目的を達成するにはプリンセス・エルの力がまだ自分達で御せる範囲である必要があるのだろう」

「それはどういう…」

「疑問に思わなかったのか？何故、同じくプリンセスの力を持つお前が狙われず、プリンセス・エルが狙われるのか…確かに赤子の方が狙いやすいが、それを加味してもお前がいつさい狙われないというのはおかしい…そうは思わなかったのか？」

「確かに…改めて考えると妙ですね…」

今まで考えたこともなかったことを指摘され、そう呟く。

「それはひとえに、お前の力はすでに奴らが御せる範囲ではないからだ。少なくとも、私

はそう考えている」

「なるほど…ということは、もしエルがもつと強い力を手に入れたら…」

「その時は、躊躇なくプリンセス・エルを消そうとするだろうな…」

その言葉を聞き、信じられないという気持ちとそれがあり得るかもしれないという考えが過る。

「せいぜい気をつけろ。奴らは赤子だろうと容赦なく襲い掛かる。…私はそういう行為は好まないがな…あくまで私の目的はキュアナイト、お前だけだ。…だから、他の奴らに負けるようなことにはならないでくれよ？」

「…忠告ありがとうございます。ついでと言ってはなんですが、私の悩みを聞いてもらえますか？」

「なんだ？お前が私に相談するなど、普通は考えられないが…何を企んでいる」

「私もあなたと同じで、ただの気まぐれですよ。…実は、2つのスタイルを合体させる方法を考えているんですが、何か良い方法はありますか？」

「2つのスタイルを？それは面白い。…ふむ、合体させる方法か…」

そう言つて、アンノウンは考え込むような仕草をする。

そして、しばらく考え込んだ後、アンノウンは言葉を続けた。

「それならこういうのはどうだ？」

そうしてアンノウンが考えた方法はデュアルスタイルになるための大きなヒントとなるのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／

「う〜ん！海、楽しかったなあ」

アンノウンと話した後、ランボーグと戦っていたみんなと合流し、見事にランボーグを浄化することができた。

しかも、ソラが泳いでこちらに来てくれたりと、助かった。

ああ…本当に楽しかった。

途中でアンノウンと話したりもしたせいかな、少し海で遊べなかった時もあったが、その後とはとても楽しめた。

「そういえば、ソウヤ君…アンノウンと話したって言ってたけど、大丈夫だったの？」

「ああ、こっちは大丈夫だったよ。珍しくアンノウンがまともでさ…なんならヒントももらった」

「ヒント…？なんのですか？」

「新しい力のヒントだよ」

ソラの質問にそう答えながら、アンノウンに言われた言葉を思い返す。

『2つのスタイルを合わせるのなら、ベースを決めて、そこからもう一つ重ねがけをすれば良い。例えるなら、遊戯王のエクシーズモンスターだ』

『何故、そこでエクシーズモンスターなんですか？』というか、アンノウンもそのカードゲームを知ってるんですね…』

『まあな。あれはなかなか面白い…話を戻すが、基本的にエクシーズモンスターは素材となるモンスターを何体か素材にして呼び出すだろう？それと同じように2つのスタイルを合わせれば良い』

『うーん…それはわかっていますが、合わせ方がわからないんです』

『ふむ…ならばいくつか例を挙げよう。2つの力を合わせる時の定番としては、過去と未来、光と闇…炎と氷といったように相反する2つの要素を組み合わせる人が多い。まあ、もちろん相性の良い属性を組み合わせることもあるだろうが』

『過去と未来…光と闇、炎と氷…はっ！もしかしてこれならいけるかもしれません！ありがとう…ございます！アンノウン』

『フツ。お前が強くなるのは私としてもありがたい…ではまたな』

「アンノウンが…そんなこともあるんですね」

「そうだね…多分、単なる気まぐれだろうけど…後、私怨もあると思う」

「あはは…なんかアンノウンのイメージが変わるね」

ましろさんがそう言って、苦笑する。

確かにソラとましろさんは俺と一緒にアンノウンと戦ったことがあるし、そう思うのも無理はないだろう。

「まあ、なにはともあれ楽しい夏だったよ」

「うん。本当に素敵な夏だったねえ」


そんな風に会話を交わしながら、俺達は夕暮れで赤く染まった海を眺めるのだった。

異聞の物語の結末

これは異なる世界の後日談。

アナザーと呼ばれた別の世界のソウヤのその後の物語。

「……は……」

確か、俺は別のソウヤと戦い、デュアルスタイルと、 について伝えた後、そのまま消え去ったはずだ。

俺の願いを聞き入れてくれた別のソウヤには感謝しかない。

「……は、あの世か……まあ、これはこれでいつか……これでようやくあげはのところ……みんなのところにいける」

辺りは白い空間が広がっているし、他に人の気配も感じない。

どこことなく神秘的な雰囲気を感じるし、おそらく死後の世界とかそんなところだろう。

死後の世界というのも悪くないな…もう戦う必要もない。

痛い思いもしなくても良い…悲しい思いも、苦しい思いも…もうしなくて良い。

これが2度目の死か…転生するかはわからないけど、もう一度みんなに会えるなら、それも悪くないな。

そんなことを思いながら、意識を手放

「起きなさい！キユアナイト！」

突如として、声が響く。

そして、その声によって目を覚ます。

そうして目を覚ました俺の目に映ったのは、純白の衣装に身に纏っている長い銀髪の女性の姿だった。

「誰…?」

「私は…いえ、名乗るほどのものではありませんね。それにしても、情けない限りです…もう諦めてしまうのですか？」

「はあ？」

突如として出現し、そんな言葉を放つ謎の女性に思わず苛立ってしまう。

「何も知らないくせに…お前に何がわかる！お前はあんな絶望を味わったこともないだろう！それなのに勝手なことを言うな！」

「…絶望ですか…味わいましたよ」

「え…?」

「…一度は諦めかけました…でも、別の世界のあなたはあれほどの絶望的な状況でも諦めなかった。最後の最後まで抗い続け、希望を繋いだ」

女性が話したのはおそらく別のソウヤの話だろう。

「それは別のソウヤの話か?」

「ええ。別の世界のあなたです…これを聞いてもまだ諦めるつもりですか?」

その女性の真つ直ぐな白い瞳が俺を突き刺す。

「それは…でも、もうどうにもならないだろう…どうしろっていうんだよ…」

「本当にどこまでも貧弱なメンタルですね…いえ、私の知っている彼が強すぎるだけでしょうか…」

「うるさい!あのソウヤがすごいのは俺だってわかってるよ!悪かったな!貧弱クソザコメンタルで!」

「そこまでは言つてませんが…それで、どうしますか?あなたが望むなら、もう一度チャンスを与えることが出来ますが」

「それは本当か?」

女性の言葉にそう聞き返す。

俺の質問に女性は頷く。

それを見て、俺の中に一筋の希望の光が輝く。

もう一度、みんなに…あげはに会える？ そんなことが可能なら、可能なら！俺は…

「…ちなみにチャンスを与えるというのはどういう？」

「時間を巻き戻します。正確には世界の時間というよりは、あなた達の時間を巻き戻して、■■■■の創り上げた世界に飛ばします。もちろん、メンバーは限られた人数しか飛ばせませんが…それでもやりますか？」

「…もちろん！やるに決まっている！もう一度、みんなに…あげはに会えるなら！そして、今度こそみんなを救う！」

「わかりました。では行きましょうか…」

そうして、謎の女性は手に時計のような魔法陣を出現させ、それが周囲に広がっていく。

「…言い忘れていましたが、時間が巻き戻ったら、あなたの記憶も一時的に消え去ります」

「え…？」

「ここでの会話も忘れるでしょう…ですが、ご安心を。きっかけがあれば思い出せますよ」

「そのきっかけってなに？」

「さあ、それは秘密です。それに教えたところで忘れるので、意味はないでしょう」

「それもそうか…なら、せめて名前を覚えてくれないか？ どうせ忘れるんだ。教えてくれても良いだろう？」

「…まあ、それぐらいなら良いでしょう。仮に私の名前を思い出したところで、そこまで影響もないでしょうし」

そして、謎の女性はさらに言葉を続けた。

「私の名前は…」

そうして、語られた彼女の名前を胸に刻みつけ、俺の意識は遠のいていった。

「あれ？ここは…」

目を覚ますと、そこは見たことのない場所だった。

そして、ふと驚くべきことに気づいた。

自分が何故ここにいるのか、まるで思い出せない。

さつきまで、誰かと話していたような気がするのだが…一体それは誰だったのだろうか

…思い出せない。

だが、動かなければ…今度こそ失わないために。

「うん？今度こそ失わないために…？なにを？どうして俺はそんなことを思ったんだろ
うか？…まあ、良いか…ともかくみんなを探さない」と

そうして、俺は歩き出す。

この世界のどこかにいるであろう仲間達と合流するために。

そんな風に歩き出すと、俺の目の前に光が溢れる。

そして、徐々に光が収まると、そこから輝きを放つミライレコードが現れた。

「これは…ミライレコード！どうしてここに？ミライレコードは輝きを失っていたはずなのに…」

ミライレコードはあの日を堺に輝きを失ったはず…うん？あの日ってなんだ？

「ああもう！わからん！とりあえず、悪いことではないし、前に進もう」

そして、俺は再び歩き始めるのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「これで良しですね…後はこの世界の皆さん次第です」

歩き出した別の世界の彼を見送り、私はそう呟く。

この世界の運命はこの世界の彼らの手に委ねましょう。

果たして、この世界の彼らはどんな未来を築くのか…まあ、例えばどんな未来であれ、可能性は無限大です。

「だから、諦めずに前に進み続けてくださいね、この世界のキュアナイト。…もし、また挫けそうになったり、どうにもならない事態が起きた時は、私が…いえ、私達が再び手を差し伸べますから」

さて、私もそろそろ帰らなくては。

私のいるべき場所へ…私のヒーローの元へ。

そうして、私はこの世界を後にするのだった。

「…本当に上手くいったんだな…夢じゃないよな…」

そう言いながら、自分の頬をつねる。

痛い…ということは夢ではないんだろう。

俺達を助けてくれた彼女には感謝しかない。

「どうしたの？ソウヤ」

「あげは…いや、なんとというか今回の戦いは奇跡としか言いようがない勝利だったなっ

て…」

「そうだね…まあ、結局みんな無事だったんだし、良いんじゃない?」

「確かに、そうだね…」

その言葉の後、しばらく沈黙が続く。

そして、俺は口を開いた。

「…信じられない話なだけでさ、聞いてくれるか?」

「もちろん! ソウヤの話だもん、信じるよ」

「ありがとう、それじゃあ聞いてくれ。…まずはなにから話そうか…そうだ、別の世界の俺の話からにしよう」

「別の世界のソウヤ!? すっごい気になるんだけど!」

「そんなに焦らなくてもちゃんと話すよ。別の世界の俺は、正直俺が凹むレベルですごい奴でさ…」

そうして、俺はあげはと別の世界の俺について語り合ったり、今回の奇跡の立役者である彼女について語り合う。

そんな風に大切な人との時間を過ごしながら、俺は助けられてくれた彼女と俺の願いを聞き入れてくれた別の俺に感謝するのだった。

ソウヤの誕生日パーティー!

「みなさん、今日は集まって頂きありがとうございます」

「それは全然良いんだけど、なんでこんな会議みたいになってるの?」

「でも、これはこれで雰囲気あるし、良いんじゃない?」

「そうですかね…それでソラさん、どうしたんですか?」

「える?」

今、私はソウヤ以外の皆さんを集めて、話し合いをしようとしていました。

その理由は私達にとって、とても大切な事があるからです。

「今日、みなさんに集まって頂いたのは他でもありません…明日のソウヤの誕生日についてです」

「ソウヤ君の…!」

「誕生日!?!」

「確かにこれは大事な話ですね…」

「だいじ!」

「その通りです! 大事なんです! せっかくの誕生日、ソウヤには楽しんでほしいんです」

！とはいえ、私一人では上手くいく自信がなくて…みなさんの力を貸してください！」

「もちろんだよ！ソウヤ君の誕生日、盛大にお祝いしなくちゃね！」

「ましろさん…！」

「私も協力するよ！明日、みんなでケーキの材料を買いに行こう！せっかくだし、サプライズしちゃおう！」

「良いですね！でも、そうなると…ソウヤ君を誰かに連れ出してもらわないといけませんよね…どうしましょうか？」

「そうだね…買い物に行くだけならソウヤ君に家で待ってもらえば良いけど、そのまま家に帰ったら絶対バレるよね…」

ツバサ君の言葉にましろさんがそう返す。

「ふむ…面白い話をしているな」

そんな声が響き、視線を移す。

すると、そこにはアンノウンの姿があった。

「アンノウン!? どうしてあなたがここに?」

「?なにを言っている…ここは、プリティホリックだろ? 客として私がいることに問題があるか?」

「客!? アンノウンが?」

「ああ。ここのパフェという食べ物が入っててな…たまに食べにくるのだ」

「そ、そうなんだ…アンノウン、意外とこっちの世界を満喫してるんだね…」

ましろさんがそう言いながら、苦笑する。

私も驚きました…まさか、アンノウンがパフェを食べたりするなんて…ソウヤが聞いたら、絶対びつくりするでしょうね。

「さて、キュアナイト…ソウヤの誕生日の話だったな。私が連れ出してやろう…必要なのだろう?」

「「えっ!?」」

みんなの声が重なる。

「なぜ、そこで驚く?他の有象無象の人間なぞどうでもいいが、我が宿敵の誕生日ならば祝わなければな」

「えっと…どうしてソウヤの誕生日をあなたが?ソウヤとあなたは敵同士…ですよね?」

アンノウンの言葉の意味がわからず、そう尋ねる。

「ああ、その通りだ。いずれは決着をつけなければいけないだろう…だが、それとこれは話が別だ。ソウヤあつての私…私あつてのソウヤだからな…ソウヤの誕生日を祝うのは私の誕生日を祝うのに等しい」

「どういうこと?」

「そもそも私が復活したのは、奴のプリンセスの力が高まったことが原因だ。奴の高まったプリンセスの力を受け、それに対応するかのように私は蘇った。謂わば、私達はお互いがお互いのカウンターなのだ」

「お互いがお互いのカウンター!…うーん、よくわからないなあ…でも、今のところアンノウン以外に適任者もないよね…どうしよう」

ましろさんはそう言いながら、腕を組んで考え込んでいる。

「…アンノウン、1つ約束してください」

「なんだ?」

「絶対にソウヤを…他の人を傷つけないください」

「言われるまでもない。私は純粹にソウヤを祝いたいだけだ…それに、他の人間には興味もないし、傷つけるつもりはさらさらない…あくまで私の狙いはキュアナイトだけだから」

アンノウンはそう言つて、約束をしてくれました。

もちろん、その言葉をすべて信じたわけではありませんが、ひとまずはアンノウンの提案を受けることにしました。

「よーし! 若干、不安は残るけど…とりあえず明日の誕生日をみんなでアゲちゃおう!」

「「おー!!」」

そうして、私達は明日のソウヤのサプライズパーティーに備え、話し合いをするのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／
～翌日～

「それじゃあソウヤ君、私達、買い物に行つてくるね!」

「うん、行つてらっしゃい!…それにしても、随分と大人数だね…何を買いに行くんだ?」

「…うん、ちよつとね」

「ふくん…了解。気をつけてね」

「はい!行つてきます!」

そうしてみんなを見送り、部屋へと戻る。

「絶対、なんかあるよね…まあ、みんなが悪いことをするとは思えないから大丈夫だとは思うけど」

それにしても、本当にどうしたんだろうな…今日はなにかあつただろうか?

そんなことを考えていると、ふといつもの気配を感じた。

「マジか…こんな時に…行くしかないか」

そうして、俺は気配を感じた場所に向かうのだった。

「それで…性懲りもなくどうしたんだ？アンノウン」

「よく来てくれたな、キュアナイト…いや、今はソウヤか。変身せず来るとは、警戒心はないのか？」

「まあ、疑ってはいるけど、ここはプリティホリックだし、キュアナイトの姿で来たら、色々大変なことになるしな…それに、あんなにわかりやすく気配を出していたってことは、戦うつもりはなさそうだと思う」

わかりやすい気配を出して、わざわざ自分の場所を教える…戦おうという意志があるなら、こんなことはしないだろう。

まあ、もしアンノウンの居る場所が人気のない場所とかなら、戦うつもりだと考えたかもしれないが、プリティホリックにいるとわかった後はその可能性もなくなった。

少なくとも、こいつは関係のない人間を巻き込むタイプではないし、人がいるところで戦ったりはしないだろう。

「なるほどな…まあ、その通りだ。私はただ、お前と行きたいところがあるだけだ」

「行きたいところ?」

「ああ。カードショップだ」

「カードショップ!? アンノウンが?」

「そこまで驚くことではなからう。私がカードゲームをしているのをお前は知っているだろう」

「まあ、前にエクシーズモンスターを例えに出していた辺りから、察してはいたけどさ…でも、なんで俺を誘うんだ?」

「フツ…決闘者^{デュエリスト}同士が戦う理由など決まっているだろう…ソウヤ、デツキの用意はもちろんしているだろうな?」

「えっ…いやまあ、なんとなく持っていった方が良いと思つて持ってきたけども…」

「よし!ならばさっさとカードショップへ向かうぞ!」

そうして、アンノウンに手を引かれ、俺はカードショップへと向かった。

「…で、着いたのは良いけど…お前、まさかそのローブのまま入るつもりじゃないだろうな?」

「当然だろう。待っている、すぐに姿を変える」

そう言つて、アンノウンがローブで隠れていた顔を見せる。

長い紫色の髪に、ツリ目の碧色の瞳の端正な顔立ちだった。

「うん？どうかしたか？」

「いや、ちゃんと顔があつたんだなと…：つきり実体がないパターンかと思つてた」

「失礼なやつだ…：こう見えて、私はレディだ。デリカシーのない発言は流石に傷つく」

「あはは…：それに関してはおごめん。というか、女性だったのか…：普段は声が違うのはあのローブの仕様か？」

「ああ、そんなところだ…：さて、こんなもので良いだろう」

どうやら話しているうちに服装を変えたらしく、先ほどまでのローブはすっかり見えなくなり、代わりに、青のキャップを被り、黒を基調とした現代風の恰好に変わつていった。

「さあ、ソウヤ！私達のデュエルをするぞ！」

そんな風にテンション高めにカードショップへと入っていくアンノウンを追つて、俺もカードショップに入るのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ふう…：なかなか楽しめたぞ」

「俺も楽しかったよ」

「お前に一度も勝てなかつたのが悔やまれるが…：まあ良い。褒美だ、受け取れ」

そうやって、アンノウンはカードを俺に渡す。

「ありがとう?…なんのカードだ…うん? 死者蘇生のカードか…ありがたいけど、なんでこのカードをチョイスしたんだ?」

「私達は共に蘇った存在だからな…私達に相応しいカードだろ?」

「まあ、そうかもしれないな…俺の場合は事情が違いそうだけど…ともかく一応礼は言っておくよ。ありがとう」

「気にするな。それではまたな…お前とのデュエル、心が踊った…またデュエルできるのを楽しみにしているぞ」

そうやって、アンノウンは消えていった。

「あはは…アンノウンのやつ、この世界をエンジョイしてるな…というか、デュエリストに影響を受けすぎじゃないか?…とりあえずそろそろ帰るか」

「ただいま〜!…あれ? まだ誰も帰ってきてないのか?」

そういえば、アンノウンに付き合っ忘れてたけど、みんなどこに出かけたんだろう

?

そんなことを考えながら、歩いていくと突如としてパアンと音になる。

「うわっ！なにになに……！」

「「ソウヤ（君）！誕生日おめでとう!!」」

「おめでとー！」

「えっ……！」

突然の出来事にしばらくフリーズした後、ようやく事態を呑み込めた。

美味しそうな大きなショートケーキに、唐揚げやサンドイッチが並んでいて、とても美味しそうだ。

これはつまり……

「サプライズパーティーってこと？」

「そうですよ！今日はソウヤの誕生日ですから、みんなでサプライズパーティーをしようということになったんです！」

「まさか、アンノウンまで協力してくれるとは思わなかったけどね……」

「アンノウンが!?マジか……それはかなり意外だな」

「だよね……まあ、結果的にアンノウンのおかげでサプライズに成功したし、オールオツケー……だけどね」

「ソウヤ君、改めて誕生日おめでとうございます！」

「にーに、おめでとー!」

「みんな…ありがとう!」

みんなのサプライズパーティーに喜びが隠せない。

「喜んでくれて良かった!」

「本当に嬉しいよ! さっそく食べても良い?」

「もちろんだよ! それじゃあ、一緒に食べよう!」

そうして、俺達はさっそくみんなが用意してくれたご馳走を食べ始める。

「おいしい〜!」

「ソウヤ! こっちのサンドイッチも食べてみてください! 私が作ったんですよ! はい、

あ〜ん」

「あ、ありがとう…はむっ! うん! おいしい! ありがとう、ソラ!」

「えへへ! ソウヤに喜んでもらえて良かったです」

そう言つて、ソラは恥ずかしそうに笑みを浮かべる。

「ソウヤ君! 私が作った唐揚げも食べてみて!」

「私からどうぞ!」

「ボクからも!」

「えるもあげる〜!」

「あはは…ありがとう。でも、一気には食べられないかな…」

その後、みんなから渡されたものを食べて、感想を言ったり、みんなでちよつとしたゲームをしたりしてサプライズパーティーを楽しむのだった。

写真館と新たな敵の影

「うーん…どうしたものか…」

「どうかしたのか？」

「いや、ディアベルスターのデッキを弄ってさ…このデッキは元々、黒魔女ディアベルスターで勝つためのデッキではあるんだけど、サブギミックとかもあつた方が良いのかと思つてさ」

「なるほどな…なら、ブラックマジシャンを追加するのはどうだ？同じ魔法使い族レベル7で閻属性だ。相性は悪くないと思うが」

「ああ、確かにな…黒の魔導陣とかもあれば効果破壊できないモンスターも除外出来るし、同じ魔法使い族、閻属性ではあるからシナジーもありそうだ。ディメンションマジックとかも入れたら、状況次第ではかなり強そうだし」

「悪くないと思うぞ。…そうだ、ついでに私の相談にも乗れ。実はピユアリイというデッキに興味があるのだが、足りないカードがあつてな…持つてないか？」

「ああ…そういえば、何枚か持つてたな…今度持つてきてあげるよ」

「それは助かる。ありがとう」

「どういたしまして…って！待て待て！なんかあんまりにも自然だから違和感なかったけど、俺達、なんでカードシヨップで普通に会話してるんだ！」

危ない危ない…あやうく遊戯王の話だと勘違いされるところだった。

とまあ、そんな誰に対する配慮なのかもわからない思考は置いておこう。

「何故と問われても…お前が私の気配を察して、来てくれたのだろう？」

「うん、まあそうなんだけど…改めて考えると、不思議な状況だなと…」

「そうかもしれない…そういえば、お前はこの世界のスマホという通信端末は持っていないのか？」

「持っていないな…流石に今お世話になっている人にこれ以上負担を掛けるわけにもいかないし」

「なるほどな…なら、これを受け取れ」

そう言つて、アンノウンは俺に黒色のスマホを渡す。

「スマホ!?なんでこれをアンノウンが？」

「うん?ああ…この世界のスマホを模して私が作ったんだ。これなら料金も掛からず、いつでも私と連絡が取れる」

「すごっ!こんな便利な能力を持つてるんだな…ちなみに聞くけど、なんか仕掛けてないだらうな?」

「当然だ。そんな姑息な真似はしない。これさえあれば、いつでもお前をデュエルに誘えるから便利というだけだ」

「あはは…：そういうえば、これは他の所にも連絡出来たりするのか？」

「もちろんだ。機能自体はこの世界のスマホと変わらないからな」

「マジか！お前、本当にすごいな！ちよつと電話を掛けてみて良いか？」

「ああ、それはもうお前のものだからな、好きにしろ」

「ありがとう！それじゃあさつそく…」

そう言って、アンノウンからもらったスマホを操作し、ヨヨさんに電話を掛ける。

『もしもし？どちら様でしょうか？』

「ヨヨさん、ソウヤです。急に電話を掛けてすみません」

『あら、ソウヤさんだったのね。でも、あなたは携帯を持ってなかったはずだけど…』

「実はスマホをくれた人がいまして…と、それは後にするとして…ヨヨさん、ソラ達はいますか？」

『ソラさん達なら、ソラシド写真館に行ったわ』

「ソラシド写真館…？そうなんです…でもどうしてそこに？」

『実は…』

そう言いながら、ヨヨさんは事情を説明してくれた。

なんでも、エルがプチイイヤ期になっていたらしく、エルの機嫌を治すために、みんな写真館に向かったそうだ。

本当は俺も連れて行きたかったようだが、俺に連絡する手段がなく、仕方なく他のみんなで行くことになったらしい。

「なるほど…わかりました。教えてくれてありがとうございます」

そう言つて、俺はヨヨさんとの通話を終了した。

「マジか…俺も行きたかったな、ソラシド写真館」

「ふむ…ならば、今から一緒に行くか？」

「そんなことまで出来るのか？」

「ああ。この街については大まかに把握しているし、目ぼしい場所には印も残してある」
「なるほどな…でも、印になんの意味が？」

「私は印のある場所に瞬間移動できるのだ。まあ、お前というαスタイルの槍を投げた場所に移動できる能力と同じだ」

「そんな能力まであるのか…もしかして、アンノウンって結構万能だったりする？」

「お前ほどではないがな。それでどうする？」

「うーん…ぜひお願いしたいところだけど、お前が嘘をついて罠に嵌めようとしてるかもしれないしな…」

「そこまで落ちぶれてはいない…確かに罨を仕掛けることもあるだろうが、それはあくまでお前と戦う時のみだ。今の私に戦う気がないのはお前にもわかるはずだ」

「…まあ、確かに今のお前からは敵意は感じないけど…仕方ない、どっちにしても俺はソラシド写真館の場所も知らないし、今回は頼んだ。…ただし、嘘ついてたらカードは渡さないからな」

「それは困る……まったく、疑り深いやつだ」

そうぶつくさ言いながらもアンノウンは俺の手を握り、ソラシド写真館に瞬間移動しようとする。

「待て待て、カードショップの中から瞬間移動するつもりか？目立つからやめろ」

「…それもそうだな。外に出て、人目のつかないところから行くでしょう」

そうして、俺達はカードショップを出て、人目のつかないところに行つてから、ソラシド写真館に向かうのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「おお！本当に着いた！」

「だから言ったではないか……本当に疑り深いやつだ」

「あはは……ごめんごめん。ありがとう、連れてきてくれて」

「気にするな。さて、私はそろそろ帰るとしよう。…ソウヤ」

「うん? どうしたの?」

「…またな」

「ああ、またな」

そうして俺が手を振り、アンノウンも手を振り返す。

そして、アンノウンはその場から消え去った。

それを見送った後、ソラシド写真館へと入る。

「失礼しまーす…あれ? ソラ達がいらない?」

「いらつしやいませ! お客様、どうかなさいましたか?」

「ああ、えつと…ここに知り合いが来ているはず…なんですけど…あの、青い髪の女の子とその友達が小さい子を連れてここに来ていませんでしたか?」

「そのお客様達でしたら、先ほど帰られましたよ」

「そうだったんですね…行き違いになってしまったみたいです。ありがとうございます。…うん? これはプリキュアの衣装ですか?」

「その通りです! この衣装は当館限定の衣装、今話題のプリキュアの衣装になっております」

そう言って、店員の人が見せてくれた衣装はプリキュア達の衣装だった。

しかも、キュアナイトの衣装もあった。

「これはエルも大喜びだったろうな…後でみんなに教えてもらおうと。…ありがとう
ごじます…それじゃあここで失礼しますね」

そう言つて、俺はソラシド写真館から出た。

「まさか、もう帰つた後だったとは…どうやつて帰ろうか…またアンノウンに頼むしか
ないか」

幸いにもスマホはあるし、連絡は可能だろう。

そう考えて、アンノウンに連絡をしようとすると、ふと嫌な気配を感じた。

「なんだこの気配…今までの誰とも違う…もしかして、この気配がスキアヘッドつてや
つか？」

「ソウヤ」

「アンノウンか…お前もこの気配を追ってきたのか？」

「ああ。…スキアヘッドだ…この気配、忘れるものか」

「なるほどな…場所はわかるか？」

「もちろんだ。ついてこい！案内してやる…プリキュアに変身するのを忘れるなよ」

「了解！というか、なんで協力してくれるんだ？」

「別にお前のためというわけではない、私がスキアヘッドのやつを殴らなければ気が済
まないだけだ」

「なるほどね……まあ、理由はどうあれ、協力してくれるなら大歓迎だ」
「さあ行くぞ！……フッフッフ……スキアヘッドめ、目にも見せてやる」

そう言つて、怪しく笑いながらアンノウンは俺の手を握る。

俺は瞬間移動する前にプリキュアへと変身し、アンノウンと一緒にスキアヘッドの居る所へと瞬間移動するのだった。

壊される平穩

「ソウヤとアンノウンが向かう前」

「なんだかこっちの方が楽しんじゃったな」

「フフ…ましろん、エルちゃんはどう？」

「はしゃぎすぎちゃったかな…」

「そうですね…エルちゃん、寝ちゃってます。…ソウヤも一緒に行ければ良かったんですけど」

ソラシド写真館で、エルちゃんがプリキュアの衣装で撮影した後、私達はあげはさんの車で帰っている。

本当はソウヤも一緒に行きたかったんですが、アンノウンの気配を感じたと言って出かけてしまい、連絡を取る手段もなく、仕方なく私達だけで向かうことになりました。

それにしても…なんだか最近、ソウヤとアンノウンの距離が近い気がします…まさか、アンノウンがソウヤを!?

いやいや、流石にそんな筈はありませんよね…大丈夫ですよ？なんだか不安になつてきました…これは後でソウヤを問い詰めなければ。

そんなことを思っていると、エルちゃんが目を覚ます。

「うん……？ ソラ？」

「はい？ エルちゃん、起こしてしまいましたか？」

「だいすき」

ふにやりと笑みを浮かべながら、エルちゃんはそう口にする。

そんなエルちゃんを見て、叶わぬ願いが頭を過りました。

ふと、頭に浮かんだ考えを一旦片隅に置き、私はエルちゃんの小さな手を握りながら、言葉を紡ぐ。

「私も大好きですよ……エルちゃん。……いつの日かアンダーグ帝国との戦いが終わって、世界に平和が訪れて……もうプリキュアがいらなくなった時」

この先の言葉を口にするのは良くないとは思う……でも、言葉は止まりませんでした。

「エルちゃんはスカイランドに帰って、私達のプリンセスからみんなのプリンセスになる……なのに、エルちゃんが大きくなるのを隣でずっと見ていたい……今、そう思っていました……」

そこまで言うのと、私の目から涙が流れてきました。

「そうだね……いつか離れ離れになる日が来る。……でも、それは今じゃないよ」

「はい……」

ましろさんの励ましを受け、私の気持ち少し晴れました。

すると、いきなりあげはさんが車のブレーキを掛ける。

「あげはさん！大丈夫ですか？」

「う、うん」

「今のは？」

「いきなり目の前に人が…って、あれ？いない？」

あげはさんの言葉を聞き、目の前に視線を移す。

ですが、あげはさんの言葉の通り、誰もいませんでした。

「た…確かに人が…」

「あげはさん！あれ！」

ふと、バックミラーに視線を移すと、そこにはとても冷たい目をした人物が立っていた。

「だ…誰？」

「あげはさん！早く車を動かしてください！」

「わかってる！」

そう答えて、あげはさんが車を急発進させる。

「アンダーグ帝国の新たな敵なら戦いましょう！」

「やばいよ……あれ」

「えっ……?」

ツバサ君の言葉にあげはさんは敵の異質さを伝える。

私も同意です……アレはただの敵ではありません。

「あの目……戦いの前につきまもの高ぶりも、緊張も、怒りも憎しみも何もありませんでした。……あんなに冷たい目、見たことはありません」

手が震える……手汗が止まらない。

せめて、ここにソウヤが居てくれたら……きつと、どんな敵であれなんとか出来たのでしよう。

こんな時でもソウヤのことを頼ってしまおう自分が嫌になる……いえ、自分の無力さを嘆いている場合じゃありませんね……今はソウヤがいらない……私達でなんとかしないと。

そんな風に考えていると、突如としてドンと音になる。

「上……どうやって?」

そんな疑問を抱いている中で、先ほどの敵が言葉を続ける。

「開け」

その言葉と共に黒い謎の空間が出現し、そのままその空間に車ごと突っ込んでしまった。

「アンノウン、この先に例の気配が」

「そのようだな…急ぐぞ、キュアナイト」

「はい！」

アンノウンの案内によりスキアヘッドのいる場所へとやってきた俺はスキアヘッドの気配がする場所へと向かう。

そして、進んでいくと、エルがシャボン玉のようなものに閉じ込められ、どこかに吸い込まれていく姿が目に入る。

「エル！」

俺はすぐさまαスタイルに姿を変え、槍を一本地面に突き刺してから、エルの元に飛ぶ。

「「キュアナイト！」」

俺は下にいるみんなを見て笑みを浮かべながら、引き続きエルの元に向かう。

「そうはさせん」

そう言って、ローブの男がこちらに攻撃を仕掛けようとする。

「それはこちらのセリフだ！キュアナイトの邪魔はさせん」

「貴様は…あの時の侵入者か…何故、プリキュアに協力する？」

「それもこちらのセリフだな…何故、お前はカイゼリン・アンダーグに協力する？どうにも私には、お前がカイゼリン・アンダーグとは違う目的を持っているように思えてならないのだが」

「…世迷い言を」

なにやら会話をしているようだが、どんな内容かはわからないが、ともかくここはアンノウンに任せよう。

「アンノウン！ここは任せます！」

「ああ！ここは任せておけ」

その返事を聞き、俺は槍を投げる。

そして、その槍の場所へと瞬間移動する。

そのおかげでエルに近付くことが出来た。

「ニーニー！」

エルのその声を聞きながら、俺はエルが閉じ込められているシャボン玉のようなものを抱きかかえ、エルと共に謎の空間に吸い込まれてしまった。



「ふむ…キュアナイトを一緒に送ることになるとは…まあ、この程度は誤差の範囲だ」
そう言いながら、先ほど私達を襲った敵はアンノウンを弾き飛ばし、さらに地面に突き刺さっていた槍を粉々に破壊した。

「これでキュアナイトはこちらに戻ってこれない」

「チツ…！流石にキュアナイトの能力は把握済みか…」

アンノウンが恨めしそうにそう口にする。

ソウヤが戻ってこれない？エルちゃんも戻ってこない…そんなの！

「おい、プリキュア達…キュアナイトとプリンセス・エルを取り戻したければ、さっさと変身しろ。…安心しろ、今回は私も協力してやる」

アンノウンの言葉に私達は頷き、プリキュアへと変身する。

「無限にひろがる青い空！キュアスカイ！」

「ふわりひろがる優しい光！キュアプリズム！」

「天高くひろがる勇氣！キュアウイング！」

「アゲてひろがるワンダホー！キュアバタフライ！」

「「レディ・ゴー!!」」

「「ひろがるスカイ！プリキュア！」」

そうしてプリキュアに変身し、構える。

「キュアナイトとエルちゃんを返しなさい！」

「答えろ！2人はどこだ！」

ウイングの質問にローブの敵は淡々と言い放った。

「アンダーグ帝国に送った」

「2人が……」

「アンダーグ帝国に……」

「そんなのウソに決まってる！」

「ウソ……？ウソはつかない。私が求めるのは真実のみ」

そう言つて、ローブの敵はローブを外してその姿を見せた。

「私の名はスキアヘッド。アンダーグ帝国の支配者、カイゼリン・アンダーグ様の命により、プリンセス・エルを頂いた」

「カイゼリン・アンダーグ……」

「それがアンダーグ帝国の支配者……！」

「…私はすでに知っていたことだな…それよりも、ようやく素顔を拝めたな…ツノ？ みたいなものが生えたスキンヘッドとは驚いた…お前の名前の由来は、スキンヘッドと怖いといった意味合いもあるスケアードという単語を組み合わせた造語か？ まあ、なんであれなかなか洒落た名前だ」

「名前を褒めている場合ですか！…そういうえば、アンノウンはスキアヘッドと戦ったことがあるんですか？ あるなら、どういった戦い方をするか教えてくれませんか？」

「そうだな…あいつは何かしらの言葉を口にするので、それに対応する事象を起こす能力だ…まあ、どんな理屈かは知らないが」

「そうなんですか…」

「ああ。だが、言葉を発しなくてもちよつとした事象は起こせるようだから、気をつけろ」

「わかりました！」

アンノウンの言葉に、私達は臨戦態勢を取るのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ここは…」

「ないと…！」

「エル、大丈夫そうですね…良かった。…それでここは？」

「ふむ、招かれざる客がいるな……まあ、良い。貴様もまたプリンセスの力を持つもの……スキアヘッドは仕事を果たしたと言えよう」

突如として、女性の声が響く。

「……なるほど、この声……あなたがアンダーグ帝国の女王、カイゼリン・アンダーグですか」
「ほう……私のことを知っていたか」

「ええ、まあ……そして、あなたがここにいるということは……なるほど、ここがアンダーグ帝国ですか」

「ああ、その通りだ……ここがアンダーグ帝国だ、キュアナイト」
俺の言葉にカイゼリンはそう返すのだった。

謎の戦士

「アンダーグ帝国…なんというか、随分と寂しい国ですね」

「…確かに貴様から見ればそうだろうな」

「あなたの目的は？ 目的次第では協力できるかもしれません」

「ずつと気になっていたことを尋ねる。」

「まあ、答えてくれるとは思っていないけど。」

「ハハハッ！ 敵地に来て、まずは話し合いとは甘いやつだ…そんな質問に答えるとしても？」

「まあ、そうでしょうね…」

「当然だろう。…それよりも、良いのか？ 貴様の大事な仲間が大変な目に遭っているぞ？」

「なっ…！」

カイゼリンの言葉と共に、丸い鏡のようなものに映像が映し出される。

そこにはスキアヘッドとみんなの姿があり、さつきまでいた場所を中継しているのだとわかった。

「みんな！」

「貴様の帰還手段はすでに潰している。助けに戻ることは出来ないぞ」

その言葉に思考を働かせる。

…確かに槍は壊されているようだ…まあ、αスタイルの力は槍の場所に移動する能力ではなく、俺の力の痕跡がある場所に移動する能力だから、問題はないが…ただ、カイゼリンがそれを見逃すかどうか。

俺一人ならなんとかなるが、エルのことも考えると無茶は出来ない。

「える…」

「大丈夫です…みんなは強いですから」

不安そうなエルの頭を撫でながらそう口にする。

ともかく、今はここでみんなの戦いを見守るしかなさそうだ。

『ソウヤ様…私に1つ考えがあります』

『エト？ 考えってなんだ？』

『それは…』

そうして、エトが自分の考えを口にする。

俺はその考えに驚きを隠せない。

『本当にそんなことが可能なのか？』

『はい。ソウヤ様とエルちゃんなら…いえ、ソウヤ様とエルちゃんだからこそ、ですね』
『なるほどな…一応、聞いておきたいんだけど、エルに負担が掛かったりはするか?』
これが一番大事だ。確かにこの方法ならこの状況を切り抜けられるとは思…だが、エルに負担が掛かるなら、俺はこの方法を試す気はない。

まあ、エトがそんな作戦を立てるとは思えないし、あくまで確認するだけだが。

『大丈夫です。エルちゃんにも、私達にも負担は掛かりません』

『そうか…それなら良かった』

エトとの会話を終え、エルと一緒に鏡のようなものに映し出された中継映像を見る。

みんなは俺とエルを取り戻す為に戦っている。

だが、スキアヘッドはいろんなところにワープしながら攻撃をいなし、まるで意に介していない。

アンノウンもワープを続けるスキアヘッド相手に攻めあぐねている。

アンノウンの戦闘力はかなり高い…だが、あんな風にワープばかり繰り返されては攻めづらいだろう。

だが、諦めずに立ち上がり、みんなが一斉にスキアヘッドに飛びかかる。

「ぷりきゅあー!がんばれ〜!」

エルが泣きながら、みんなを応援している。

…悩んでいる暇はなさそうだな。

「エル」

「える？…ないと…？」

「みんなのこと、助けたい？」

俺の言葉を聞きながら、エルはみんなの映像をちらりと見る。

そして、力強く頷いた。

「える、みんな…たしゆけたい！」

「そう…なら、手を握って。みんなを助ける力を貸してあげる」

俺の言葉を聞き、エルは迷いなく俺の手を握った。

そして、俺はそれを確認し、エルの持つプリンセスの力と俺の持つプリンセスの力を共鳴させる。

すると、俺達の周りを眩い光が包む。

「なに…?!なんだこれは!?!」

これがエトの考えだ…俺とエルの中にあるプリンセスの力を共鳴させ、一時的にエルをプリキュアにする。

要はエルに俺のミライコネクトの力を共有させるのだ。

まあ、これはつまりエルがプリキュアになる可能性があるということなんだが、今は

それは良い。

この方法は同じプリンセスの力を持っていて、なおかつ魂で繋がっている俺とエルだからこそ出来る裏技みたいなものだ。

「さあ、行きましょう！エル！みんなを助けに！」

「うん！」

そうして、俺達は光と共にみんなの元に向かうのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「やはり、なかなか厄介だな……」

先ほどからプリキュア達が攻撃を仕掛けているが、奴は意に介していない……キュアナイトがいれば変わったかもしれないが。

まあ、この程度の逆境などキュアナイトの手を借りるまでもない。

「私達のエルちゃんを……ソウヤを」

「……返せ……！！」

そうして、プリキュア達はスキアヘッドに殴り掛かる。

「守れ」

スキアヘッドの短い言葉と共に、奴の体を守るように球体状の黒いシールドが展開される。

やはり言葉をトリガーにした術式のようなものか…待てよ？もし、その言葉を途中で途切れさせたらどうなる？

…フツッ！見えたぞ！スキアヘッド…貴様の能力の攻略法が！

「弾ける」

スキアヘッドの言葉により、プリキュア達が弾き飛ばされる。

私はいくつか球体のようなものを発生させ、こちらに弾き飛ばされたプリキュア達のクツション代わりになることで、プリキュア達の受けるダメージを減らす。

だが、攻撃の余波でプリキュア達が乗ってきたであろう車が大破してしまう。

仕方ないとはいえ、少々罪悪感があるな…この戦いが終わったらしつかりと直してやろう。

そんなことを考えつつ、私はスキアヘッドに接近していく。

スキアヘッドは再び言葉を放ち、自分の身を守ろうとする。

私はその瞬間、スキアヘッドの口にクツキーを投げる。

「まも…むぐっ!?!」

クツキーを噛み砕いたスキアヘッドの周りにはシールドが展開されていない…よし、思った通りだ。

それを確認し、私はそのままスキアヘッドに殴り掛かる。

スキアヘッドは咄嗟に腕で防ぐが、威力を殺しきれずそのまま後ろへと下がった。

「まさか、ここのも上手くいくとはな！店で買ったクッキーだ。どうだ？美味しいだろ？
…おや？口に食べかすがついてるぞ？」

「…消えろ」

口の食べかすを拭い、スキアヘッドは先ほど以上の速度で私に接近してくる。

「なんだ？怒ったのか？意外と沸点が低いようだな」

「……………」

無言のままスキアヘッドが攻撃を仕掛けてくる。

それをひとまず防ぐが、スキアヘッドがすぐさまワープする。

「消し飛ばせ」

「はい……………」

そのまま強力なエネルギー波が放たれ、私は避けきれずに攻撃が直撃する。

「ぐっ……………」

なるほど…まだ全力ではなかったか…それとも、私に挑発されて頭にきたか？なんにせよ、状況はあまり良くないな。

私はこの程度の傷ならすぐに回復するが、決め手がない。

「だが、このまま諦めるのは良い気分ではないな」

そう言いながら、立ち上がる。

プリキュア達もキュアナイトのため、プリンセス・エルのために再び立ち上がった。そうして、立ち上がると空が晴れ渡る。

「何が起きた!?!」

「来たか…」

私達が事態を呑み込めていない中、スキアヘッドだけは予想通りといったような反応を見せる。

まあ、私達もこれはソウヤが起こしたことだと推測はしているが…これは一体どういうことだろうか?

そんな風に思考していると、空に1人の少女が姿を見せる。

遠目だから確実とは言えないが、どこことなくプリンセス・エルの面影があるように見える。

だが、プリンセス・エルはまだ赤子だ…いきなり成長するとは思えないが。

「誰…なの?」

プリキュアの1人、キュアプリズムがそんなことを言うと、スキアヘッドは謎の少女と相対する位置に移動する。

「消し飛ばせ」

スキアヘッドが現れた謎の少女に向けて、私に放ったものと同じエネルギー波を放つ。

だが、それはかき消された。

現れたもう一人の少女によって。

その少女は長い銀色の髪に白い瞳を持つ少女で、純白のドレスアーマーを身に纏っていた。

どこことなくキュアナイトのプリズムスタイルに似ている気がするが、それとはまた違う純白の衣装だった。

「なんだ？何が起きた…貴様は一体何者だ」

スキアヘッドにとってもこの少女の登場は予想外なのか、らしくもなく連続で質問を投げかけている。

「私は…いえ、名乗るほどのものではありませんね。…それに、これは例外的な変身…ちゃんとした変身の時にまた名乗るとしましょう。今回の主役はこの子ですし」

そう言って、白銀の少女はもう一人の少女を見る。

「…ひろがるチェンジ」

そう言って、もう一人の少女の姿が変わる。

紫色のドレスを身に纏い、その少女はスキアヘッドに接近する。

「あれって…新しいプリキュア!? しかも2人も!」

そんな反応を聞きつつ、私は少女がスキアヘッドに攻撃を仕掛けるのを見る。

「守れ」

「フツ!」

その言葉と共に再びスキアヘッドを守るようにシールドが出現する。

そのシールドと少女の拳がぶつかり合う。

「問おう、汝の名は?」

「キュア…マジエステイ…」

「キュアマジエステイ…その名前、知識の宮殿に記録しておこう…そして、謎のプリキュ

ア…本来ではあり得ないイレギュラー…貴様のことも記録しておこう」

「…イレギュラーとは随分な物言いですね…まあ、確かに本来なら私が出張ることなど

ほとんどないようですから、間違いではありませんが」

そんな会話が交わされるなか、辺りが光り輝き、気づけばスキアヘッドも謎のプリ

キュア達もその場からいなくなっていた。

それに壊れた車まで直っていた。

こうして、私達の戦いはとりあえずの決着を迎えるのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／

「…まったく、薄情な奴らだ…お前を放つたらかして、プリンセス・エルの心配ばかりとは」

みんながエルを心配して声を掛けているのを見ながら、アンノウンがそう口にする。

「あはは…まあ、俺もみんなの立場だったらエルの心配をするし、仕方ないよ」

「そうか…だが、プリキュア達は自分達の危機に気づいているのか？」

「危機？」

「私が今ここでお前を攫つても誰も気づかないということだ」

そう言いながら、アンノウンはローブのフードを外す。

「なるほど…まあ、俺は全力で逃げさせてもらうけど」

「安心しろ、ただのジョークだ。そもそもいずれは倒さねばならない敵と共同生活など

…いや、存外悪くないかもしれん…世には殺し愛というものも存在するようだしな」

「その謎知識はなんなんだ…冗談でもそういうことを言うな」

「本当に冗談だと思うか？」

アンノウンが俺を見つめて、そう口にする。

そして、しばらく見つめた後、笑みを浮かべて『なんてな』と言って、踵を返す。

そして、ローブのフードを被り直し、言葉を紡いだ。

「それではまたな、ソウヤ。また連絡する」

「ああ、またな…アンノウン、今日はありがとう！おかげで助かったよ！」
「…気にするな。私がやりたくてやったことだ…それにスキアヘッドに一泡吹かせるこ
とも出来たしな」

そう言いながら、アンノウンは俺に手を振り、その場から去るのだった。

キュアマジエスティと謎の戦士の正体

「ましろさん？おーい、ましろさん」

「…あれ？どうしたの？ソウヤ君」

「パンが焦げそうだよ」

「あー！ごめんごめん！すぐに取り出すね」

ましろさんとご飯の準備をしていると、ましろさんがブーツとしていたので声を掛けた。

「あちやく…ちよつと焦げちゃった…大丈夫かな？」

「まあ、これぐらいなら大丈夫だと思うよ。さて、持っていこう」

「そうだね！」

そして、俺とましろさんはみんなにご飯を運ぶ。

「お待たせ〜。…ごめんね。少し焦げちゃった」

「ましろさんが失敗するなんて、珍しいですね」

「昨日のこと、色々と考えちゃって…」

「なるほど…それでさっきもブーツとしてたのか」

俺がそう言うのと、みんなの表情が暗くなる。

「無事に戻ってきたから良かったものの、ボク達はプリンセスを守ることが出来なかった……」

「スキアヘッドは恐ろしい強さでした……私達がなんとか戦えたのもアンノウンの協力があつてこそです」

確かに、なんだかんだアンノウンが協力してくれたのも大きい……アンノウンが居たおかげで、俺もエルを助けに行けたわけだし。

「うん……これからのことを考えると、心配だよね……」

「……まあ、クヨクヨしてもしょうがない！俺達に出来ることをやるしかないさ」

「そうだね！ソウヤ君の言う通り、私達に出来るのはエルちゃんを守るために今よりもっと強くなること！前を向いて、気持ちアゲてこ！」

あげはさんの言葉にみんなの表情に明るさが戻る。

良かった……とりあえず暗い雰囲気はなんとかなったな。

「まぜまぜ……まじえすてい！」

上機嫌にスプーンでまぜまぜしながら、エルがそう口にする。

その様子を見て、みんなの表情が綻ぶ。

そんな中、ソラがふと思ひ出したように言葉を紡ぐ。

「そういえば、キュアマジエスティとあの白銀のプリキュアは一体何者なんでしょうか？」

「そうだよね…ソウヤ君、なにか知らない？」

「うん？もちろん知ってるよ。キュアマジエスティの正体も、あの白銀のプリキュアの正体も」

「「「ええ!?!」」」

「まあ、正体に関しては答えたい人に答えさせてあげよう」

「える!」

俺の言葉を聞き、エルが元氣よく手を挙げる。

「お、エルは誰かわかったんだな」

「エルだよ!」

「「「えっ?」」」

「エル、きゅあまじえすていななの!」

エルの言葉にみんなが一瞬、静かになる。

そして、すぐにソラとましろさんが言葉を紡いだ。

「エルちゃんが…」

「キュアマジエスティ!?!」

「へんちゃん！つよいの！」

ソラとましろさんの反応にエルは笑顔でそう口にする。

「でも、キュアマジエステイは…」

「エルちゃんより、ずっと年上だったよね!？」

「でも、あり得るかも。運命の子だもん！」

「える〜！」

「ソウヤ君、実際どうなの!？」

「教えて下さい！ソウヤ！」

ましろさんとソラに詰め寄られ、俺はそれに答えるために言葉を紡いだ。

「そうだよ、エルがキュアマジエステイだ…ちなみに白銀のプリキュアはエトだ。…いや、正確には俺とエトが合体したプリキュアだな。まあ、主体はエトんだけど」

「「えっ!」「」」

2度目のみんなの驚きの声が響く。

「じよ、情報量が多い…」

「ま、まあ、エトさんがプリキュアになることはおかしくないし?とりあえずは大丈夫じゃないかな?そ、そうだ!エルちゃん、今キュアマジエステイに変身できる?」

あげはさんの言葉にエルは頷き、ご飯を食べた後、場所を移動してエルが変身できる

環境を整えた。

「よし、ここなら大丈夫だ。さて、エル…やってみようか!」

まあ、おそらくまだ出来ないとは思うけど…エルが自分の力でプリキュアに変身できるようにするには必要なことだと思う。

そうして、みんなが見守る中、エルは気合いを入れて変身しようとする。

「える…ひーおーがーる!ちえーんじ!」

だが、何も起きなかった。

それもそのはず…

「あの…」

「エルちゃん…」

「スプーンで変身は…」

そう、エルはスプーンで変身しようとしていたのだ。

そりゃあ変身できないというものだ。

そもそも、エルがああの時プリキュアになれたのは俺達がミライコネクトの力を共有していたからだ…まあ、それは同時にエルがプリキュアになれる可能性を持っている証拠だし、そのうち変身できるようになるだろう。

「える!?ぶりきゅあー!ぶりきゅあ〜!」

何度もポーズを決めて、必死に変身しようとするエルはついに泣き出してしまう。

「える、へんちん！つよいの！うそでないの！」

「…大丈夫。ウソなんて思つてないよ」

そう言つて、あげはさんはエルの頭をそつと撫でる。

「エルちゃん」

「ボクらもです！」

「うん！」

「安心しろ。俺という証人もいるからな…エルが嘘をついてないのはみんなわかつてるよ」

「うん、みんなわかつてるよ。…でも、今はなぜか変身できなくて困った困った、なんだよね？」

「える…」

あげはさんの言葉にエルは頷く。

「よつしや！…こは最強の保育士を目指してる私の出番かな！どうすれば変身出来るか一緒に考えてみよ！みんなはもつと強くなるために頑張る！」

そうして、方針が定まった俺達は行動を開始するのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「では、ソウヤ…お願いしますー！」

「まさか、ソラと特訓することになるなんてな…でも、わざわざ俺じゃなくても良い気がするけど」

「いえ！むしろ、ソウヤでなくてはならないんです！正直、私達の中で一番強いのはソウヤですから」

「あはは…ありがとう。それじゃあ始めようか」

「はいー！」

そうして、ソラが一瞬で距離を詰め、俺に殴り掛かる。

俺はその攻撃を受け流し、そのまま背負い投げのようにソラを地面に投げる。

「あたっ！いきなり一本取られてしまいました…でも、まだまだこれからです！はあっ！」

立ち上がり、ソラが再び俺に攻撃を仕掛けてくる。

俺はその攻撃をすべて捌くか、受け流し、ソラにカウンターを浴びせた。

「うあっ！…やつぱり、ソウヤは強いですね…さあ、まだまだこれからです！」

「まだやるのか？まあ、良いけどさ。…今度はこっちから仕掛けてみようか」

そう言つて、一瞬でソラに接近する。

「速い…！」

そうして、接近してソラにデコピンした。

「あいたつ！うう…またやられました…」

俺にデコピンされた場所を押さえながら、ソラはそう口にする。

「俺の勝ちだね。…そういえば、小さい時にもソラと特訓したよな…こんな風に模擬戦闘はやらなかったけど」

「そうですね！懐かしいです…あ、そういえばソウヤ、パパとママにはいつ挨拶しに行きましようか」

「そうだな…なかなか暇がなかったからな…よし、じゃあ今度の休みの日にでも行かないか？」

「良いですね！よし！ますます燃えてきましたよ！」

「俺も休みの日が楽しみになってきたよ！」

「そらく！にくに！」

ソラとご両親への挨拶について相談していると、あげはさんとエルがこちらに向かってくる。

「エルちゃん、あげはさん。変身のほうはどうですか？」

「える…」

ソラの質問にエルは落ち込んだ様子を見せる。

あげはさん曰く、あの後変身ポーズを変えたり、色々試してみたものの変身は出来ず、先輩プリキュアであるソラを見学してきたのだとか。

おそらく、あげはさんはエルがどうやって変身出来るのか、既にわかっている。

その上で、エル自身に答えを見つけさせようとしているんだろう。

なら、何も言わずに見守るとしよう。

そんなことを思っていると、気合いを入れたソラが百裂拳を見せ、エルもそれを見ていた。

「エル、やる！」

そう言つて、エルは手を挙げてやる気を見せている。

「あつ、でもまだエルちゃんには…」

そんなソラの言葉を無視し、エルは構えを取る。

そして、そのまま拳を突き出して…

「るっ…るっ!？」

バランスを保てず、小さくジャンプしながら進み、最後には倒れそうになる。

だが、それをあげはさんが支えて、事なきを得た。

ふう…良かった…ナイスキャッチだよ！あげはさん！

「トレーニングしたら変身できると思ったんだよね？」

「える…」

そんなエルの反応を見て、あげはさんは笑みを浮かべて言葉を続ける。

「次はましろんのとこに行ってみる？」

そうして、あげはさんはエルを連れてましろさんの元へと向かうのだった。

…俺もデュアルスタイルの特訓をするか。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ふう…よし、良い感じだ！もうデュアルスタイルになること自体は出来るな。後は調整していけばなんとかなりそうだ」

デュアルスタイルに変身する方法は、まず俺の過去の力を再現する力で1つのスタイルに変化する。そして、その後ミライコネクトをすれば変身出来る。

アンノウンが言っていた相反する2つ…過去と未来を合わせることで、デュアルスタイルに変身することは出来た。

後は細かい調整をすれば実戦で使えるようになるだろう。

そんな風に考えながら変身を解き、家へと戻る。

すると、エルの泣き声が聞こえ、俺は慌ててエルの場所へと向かう。

そこはツバサ君の部屋で、みんなも集まっていた。

「うっ…うっ…うっ…」

「よしよし」

ミラージュペンを持ちながら泣いているエルのことをあげはさんが宥めている。

ああ…なるほど。ましろさんのところに行ってもダメで、ツバサ君のところに来て、ミラージュペンを借りて変身しようと思ったけど、それもダメで落ち込んだじゃったのか。

「エルちゃん、すつごくすつごく頑張ったんだよね?…でも、なかなか上手くいかななくて悲しくなっちゃったんだよね?」

「える」

「エルちゃんにはエルちゃんだけのミラージュペンがあるはずだよ。それはエルちゃんにしか見つけられないものなんだ…でも、きつとエルちゃんなら見つけられる」

「その通りだよ、エル。ミラージュペンは俺達の心が形になったもの…エルにはエル自身の心が、強い思いがきつとあるから…だから、大丈夫だ」

「にーに…」

そんな風に会話していると、ふと、嫌な気配を感じた。

この気配はミノトンか!…スキアヘッドの気配も感じる…妙だな…何故、ミノトンとスキアヘッドが一緒に居るんだ?

俺がそんな違和感を感じていると、窓から鳥さんがやってきて、ツバサ君に事態を伝

えた。

俺達はお互いにアイコンタクトをし、敵の場所へと向かうのだった。

降臨する白銀のプリキュア

「鳥さん達が言っていたのはあいつです」

そう言つて、ツバサ君が指を差したのは以前に戦つた時よりも巨大になっているミノトンでした。

以前とはまったく雰囲気違います…あれはまるで…

そんなことを考えていると、スキアヘッドが姿を見せる。

「スキアヘッド！ミノトンになにをしたんですか!？」

「奴はアンダーグエナジーによつて生まれ変わった。我らの目的を果たす忠実な下僕としてな」

「プリキュア…倒す!…」

「ソウヤに使つたのと同じ手を！許せません!」

「あなた達にエルちゃんは渡さない!」

「もはや、我々はプリンセス・エルを連れ去ることに拘つてはいない」

「それは、どういふ…」

「…つまりあなた達は、エル諸共私達を消し去るつもりということですか…アンノウン

が言っていた通りですね」

そう言いながら、キュアナイトが姿を見せる。

「その通りだ。ここで貴様ら諸共消えてもらう」

「そうですか…みなさん、ミノトンの相手は任せます」

そう言つて、キュアナイトはゆっくり前に出ました。

そして、さらに言葉を続けた。

「スキアヘッドは私が相手をします」

そうして、キュアナイトは凄まじい速度でスキアヘッドに攻撃を仕掛ける。

「守れ」

昨日、私達の攻撃を防いだ黒いバリアによりキュアナイトの攻撃を防ぐ。

ですが、徐々にスキアヘッドが後ろへと下がっていく。

「バカな…!」

そんなスキアヘッドの眩きの後、キュアナイトにバリアを展開したまま大きく後ろへ飛ばされる。

そして、キュアナイトはスキアヘッドへと再び接近していきました。

「…スキアヘッドはキュアナイトに任せましょう! 私達はミノトンを!」

「うん! いろいろ!」

「プリンセスは安全な場所へ！」

「えるー！」

そう返事をして、エルちゃん及安全な場所に移動したのを確認し、私達はプリキュアへと変身した。

「無限にひろがる青い空！キュアスカイ！」

「ふわりひろがる優しい光！キュアプリズム！」

「天高くひろがる勇氣！キュアウイング！」

「アゲてひろがるワンダホー！キュアバタフライ！」

「レディ・ゴー！」

「ひろがるスカイ！プリキュア！」

そうして、プリキュアに変身した私達は臨戦態勢を取るのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ここなら大丈夫そうですね」

スキアヘッドを殴り飛ばし、その後を追ってきた俺はそう言いながら、臨戦態勢を取

る。

「キュアナイト…やはり貴様は危険だ。ここで排除する」

スキアヘッドは俺を睨みながらそう口にする。

『ソウヤ様、ここは私に任せてくれませんか？』

『それは構わないけど…あの姿に変身できるのか？』

『はい、可能です！私もスキアヘッドを許すことは出来ません…お願いします。私に任せてください』

『わかった。やろう！』

『ありがとうございます。ソウヤ様』

エトの言葉を聞き、俺はエトに交代する。

「変身を解除したのか？愚かな。…消し飛ばせ」

そう言いながら、スキアヘッドはこちらに闇のエネルギー波を放つ。

だが、それをエトは手を翳し、その攻撃を防いだ。

「なに…？」

「邪魔をしないでくれませんか？初めての私の見せ場なので」

そう言いながら、エトはミラーージュペンを手に持ち、変身した。

「スカイミラージュ！トーンコネクト！」

スカイトーンを起動し、マイク状に変化したミラージュペンにセットする。

「ひろがるチェンジ！エンシエント！」

マイク状にANCIENTの文字が浮かび上がり、エトがステージへと舞い降りる。

「煌めきホップ！」

長い白髪が長い銀色の髪へと変化し、ハーフアップになる。

「爽やかステップ！」

純白のドレスアーマーと白のロングブーツを身に纏い、瞳が白色の瞳へと変化した。

「晴れ晴れジャンプ！」

白の長手袋が装着され、左肩に黒のマントが装着され、変身が完了した。

「降臨する古代の奇跡！キュアエンシエント！」

そうして、ここに新たなプリキュアが誕生した。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「キュアエンシエント。それが貴様の名というわけか」

「そういうことになりますね…さあ、始めましょうか」

キュアエンシエントはそう眩くと同時に姿を消す。

そして次の瞬間、スキアヘッドは殴られていた。

「は……？」

そして、吹き飛ばされた先にもキュアエンシエントがおり、再び蹴り飛ばされる。

「くっ……守れ」

そして、スキアヘッドがバリアを展開する。

だが……突如としてバリアが消失し、そのまま蹴り飛ばされて地面に叩きつけられた。

「どういうことだ……なにをした？」

「何もしていませんよ。ただ、あなたの行動がなかったことになった……それだけです」

「なかったことになった、だと……」

「言葉の通りです。試しにもう一度やってみたらどうですか？」

「くっ……消し飛ばせ」

そうして、黒いエネルギー砲を放つが、キュアエンシエントに命中することなく消失する。

「バカな……！」

驚くスキアヘッドに目もくれず、キュアエンシエントは少しずつ距離を詰めてくる。

その間、スキアヘッドは何度も攻撃を放つが、すべて命中することなく消失した。

そして、キュアエンシエントが再び殴り掛かる。

「守れ」

そう言つて、バリアを再び展開するが、またしてもバリアが消失した。

そして、距離を詰めたキュアエンシエントがスキアヘッドにボディーブローを喰らわせた。

「かは…っ!」

そして、そのまま蹴り飛ばされ、壁へとぶつかつた。

「ふう…これで少しは気分が晴れましたね。私達諸共エルちゃんを消そうとするだなんて、許されることではありません。ここで始末しましょうか?」

そう言いながら、キュアエンシエントは汚物を見るかのような目をスキアヘッドに向ける。

その目を向けられたスキアヘッドに今までにない感情が溢れてくる。

(なんだこれは…体が動かない…手が震える。まさか、私が恐怖を覚えている?)

「…その目、怯えているんですか? まさか、あなたにそんな感情があつたとは驚きですね。…興が削がれました…この程度なら、わざわざキュアナイトに変わつてもらうまでもありませんでしたね。まあ、私としては私達を傷つけようとしたものに罰を与えられて満足ですが」

そう言って、キュアエンシエントはその場を後にしようとする。

「トドメを差さないのか？」

「トドメを差して欲しいんですか？あなたがお望みなら、今すぐにもトドメを差しますよ？」

その言葉にスキアヘッドは反射的に首を横に振る。

そして、自分の無意識の行動にスキアヘッドはキュアエンシエントに対して、恐怖を覚えていると理解する他なかった。

「それでは…私はみなさんを助けに行かなければならないので」

そうして、キュアエンシエントはその場を後にした。

／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／

『ソウヤ様ああ！あれで大丈夫ですかね？あんな偉そうなこと言っちゃいましたけど！』

『大丈夫だよ。実際、スキアヘッドはかなり恐怖を覚えたみたいだし…時間制限があることもバレてないだろう』

『良かったです…』

先ほどの威圧感はどこへやら…まあ、エトの心配もわかる。

平たく言えばキュアエンシエントの能力は時間操作だ。エトが一瞬でスキアヘッド

に接近し、攻撃を当てられたのは少し先の未来に飛んだから。スキアヘッドのバリアやエネルギー砲を消せたのは、言葉の通りスキアヘッドの行動をなかつたことにしたからだ。

そんなとてつもない能力を持つキュアエンシントだが、1つ欠点がある…それは10分間しか変身できないことだ。

さつき、戦いを途中で切り上げたのも時間制限があることがバレないようにするためだ。

キュアエンシントには他にもいくつか能力があるし、むしろ時間制限がないと俺の身体が保たないから、時間制限があるのは仕方ないが、敵にそれがバレるのはあまり良くないだろう。

そんなことを考えているうちにみんなの元へと辿り着いた。

すると、ミノトンから放たれた巨大なエネルギー波が放たれた所で、みんながバタフライの蝶型のシールドを支えて、必死にエルを守ろうと攻撃を防いでいる。

「エルちゃんは！」

「プリンセスは！」

「私達が！」

「絶対！」

「「「守る！」「」」

「みなさん！」

キュアエンシェントがみんなに駆け寄ろうとすると、ミノトンの攻撃とプリキュア達のシールドがぶつかり合い、消失した。

『急ぐうー！』

「はい！」

そうして、俺達はみんなの元に向かうのだった。

降臨!キュアマジエスティ

「みなさんが…」

みんなの元に辿り着いた俺達の目に映ったのはボロボロになりながらも立ち上がっている姿だった。

そして、そんなみんなにアンダーグエナジーにより正気を失っているミノトンが攻撃を仕掛けようとしていた。

だが、そんなミノトンの前にエルがみんなを守るようにして飛び出してくる。

『エル!』

「いやいや!みんなだいじ!だいすき!」

そう言つて、さらにエルは言葉を続ける。

「えるも…まもる!」

エルの言葉に共鳴するように、エルの胸から光が溢れる。

これは…!エルがプリキュアに!

『エンシエント!ミノトンを!』

「はい!」

エンシエントはそう言って、エル横に立つ。

そして、そのままエルを攻撃しようとしていたミノトンの攻撃をなかつたことにした。

「ナニガ起きた…?」

「エルちゃんの邪魔はさせませんよ。あなたの武人としての誇りを守るためにも」

「あなたは！」

「私のことは後で、今はエルちゃんを見守りましょう。…エルちゃん、見つけたんですね

…自分だけのミラージユペンを」

エンシエントの言葉にエルは頷く。

「みつけたの…えるも…ふりきゅあー！」

そうして、エルはプリキュアへと変身する。

赤ちゃんだったエルが成長し、ソウヤ達と同じくらいの年齢の少女へと姿を変え、ミラージユペンを手に取る。

「スカイミラージユートーンコネクト！」

トーンコネクトを起動し、マイク状に変化したミラージュペンにセットする。

「ひろがるチェンジ!マジエスティ!」

マイク状に変化したミラージュペンにMAJESTYの文字が浮かび上がり、エルはステージへと舞い降りる。

そして、ステージに舞い降りると同時にエルの髪がフワリと長いウェーブの掛かったツインハーフアップへと変化する。

そして、靴底が低い紫色のヒールが装着される。

「煌めきホップ!」

王冠を思わせる髪飾りが装着され、耳に刺々しいイヤークフが装着される。

「爽やかステップ!」

エルの服装が紫と白を基調としたお姫様のようなドレスと白のニーハイソックスと
いう恰好へと変化する。

「晴れ晴れジャンプ!」

白の長手袋が装着され、どこからともなく星が流れて、ドレスへと流れ着き、それが
ドレスを彩るアクセントになった。

そうして、変身が完了した。

「降り立つ気高き神秘!キュアマジエスティ!」

そして、ここに新たなプリキュアが誕生した。

／／／／／／／／／／／／／／／／／／

「キュア…」

「マジエステイ！」

「やりましたね」

「見つけたんだね…エルちゃんだけのミラージュペン！」

「そのようですね…良かったです」

「バタフライ…エンシエントも最初からわかってて…」

プリズムの言葉にエンシエントとバタフライは笑みを浮かべる。

「信じてくれて…ありがとう」

エル…キュアマジエステイはそう言って笑みを浮かべた。

「クツ…返り討ちにしてくれる」

そう言いながら、ミノトンは黒いエネルギー弾を放つ。

それを避けながら、マジエステイはミノトンに接近し、そのままパンチをお見舞いした。

そして、飛び上がり追撃のキックをする。

見事な着地を決めた後、一瞬でミノトンとの距離を詰め、背後から強烈な蹴りをミノ

トンに浴びせる。

ミノトンはたまらずといった様子で電線へと倒れ込み、電撃を受けて体中が焼けていた。

「あり得ぬ…ワレハ最強!」

そう言いながら、マジエスティに殴り掛かるが、それを受け流しマジエスティはミノトンにカウンターを喰らわせていた。

『これは、私の出番はなさそうですね』

『そうだな…にしても、マジエスティ強いな…』

『そうですね。…それにしても、どこことなく戦闘スタイルがソウヤ様に似ている気がしますね。兄妹はそういう所も似るんでしょうか?』

『どうだろうな…エルはずっと俺達の戦っている姿を見てきただろうから、俺個人というよりは、みんなの戦闘スタイルを組み合わせているのかもな。…なんにせよ、一応戦いを見ておこう。多分、マジエスティはこのまま勝つだろうけど、念には念を入れておかなきゃだ』

『わかりました!』

そうして、俺達はマジエスティの戦いを見守る。

すると、終始ミノトンを圧倒し、トドメとばかりにソラが見本を見せた百裂拳を使い、

ミノトンを怯ませた。

「今よー！」

マジエステイはスカイとプリズムにその声を掛け、2人は合体技の準備をした。

「プリキュア・アップドラフト・シャイニング！」

「スキキッタ〜」

2人は浄化技を受け、ミノトンが空中から地面に落下していく。

だが、そんなミノトンは突如として現れた黒い空間のようなものに呑み込まれた。

『スキアヘッドか…』

「そのようですね…もう一度スキアヘッドを殴りにいった方が良いでしょうか？」

そう言いながら、エンシエントがスキアヘッドを睨みつける。

スキアヘッドはそれに気づいたのか、慌ててその場から去って行った。

『…まあ、もうすぐ時間切れだし、今回は諦めよう』

『そうですね…』

『エト、お疲れ様。最高にカッコよかったよ』

『ソウヤ様…！はい！ありがとうございます！』

そう言つて笑みを浮かべ、エトは心の中へ帰つていった。

そうして、俺の姿がキュアナイトへと戻ると同時に、キュアマジエステイが倒れ込み、

姿がエルへと戻る。

幸いにも空飛ぶ抱っこ紐により、エルが受け止められたので良かったが。

俺がエルに駆け寄ると、バタフライが言葉を紡ぐ。

「疲れて眠っちゃったみたい…」

「それはそうですよね…頑張ったもんね。お疲れ様、エル」

俺は眠っているエルの頭を撫でながらそう呟くのだった。

//////

「こんな小さな体にあんな力があるなんて…」

「心配は心配だけど、これからは私達の目の届く所で一緒に戦った方が良い気がするな」

戦闘が終わり、帰路についている中、ソラとあげはさんがそんな会話を交わす。

確かに、その方が良いかもしれない。正直、心配ではあるが、エルにとってもその方

が良い気がする。

エルは自分の意志でプリキュアになった…みんなを守りたい、そんな強い気持ちで。

だからこそ、俺はエルの決断を尊重したい。もちろん、ちゃんと危ない時は守るけど。

「そうだね…俺としてもその方が良いと思う。ただ、エルに頼ってばかりもいけない

し、もつと強くならないとな」

「そうですね!最強のエルちゃんを守るために、私達はもつと強くなるのみです!…そ

ういえば、ソウヤとエトさんが合体した白銀のプリキュアですが、なんて名前なんですか？」

「キュアエンシエントだよ。実際に戦つてるところを見たらびつくりすると思う」

「キュアエンシエント…それがあの白銀のプリキュアですか！今度、私達に見せてください！」

「わかった、楽しみにしてて」

そうして、俺達は帰路を歩き続ける。

そんな中、俺はどこか不安そうな顔をしていたましろさんのことが頭から離れなかった。

見知らぬ場所、見知らぬプリキュアとの出会い

「…さて、私の足掻きが吉と出るか凶と出るか」

「キュアナイト…いえ、ソウヤ様…大丈夫ですか？」

「まあ、ここから動けないこと以外は問題ないよ。それよりも、エトはみんなのことを頼んだ」

「…わかりました。お任せください…待っててくださいいね、ソウヤ様…必ず迎えに来ます」

そう言つて、エトはみんなの元へと向かった。

「…頼んだよ。エト、みんな」

「ふむ、ソウヤとデュエルでもしようかと思つて来たというのに…ここはどこだ？」

辺りを見渡すと、そこには岩場が広がるばかりで、人の気配をまるで感じない。

ソウヤの気配を見誤ったか？…いや、それはない。私があいつの気配を見誤るなど、

あり得ない。

…また何かに巻き込まれたか…まあ、ソウヤならあり得ない話ではないな。

「ほう…どうやら、事情を知ってそうな人物が1人いた」

視線を移すと、そこにはキュアスカイと見たことのないプリキュアが2人いた。

1人はピンクのツインテールの少女でそのツインテール部分はお米のような形になっている。衣装は着物を型どったようなピンクのドレスを纏っており、どこことなくエプロンのようにも見える。

もう1人はピンクと青のグラデーションが混じった金髪のサイドテールの少女で、ハイベスカスのような髪留めをしている。衣装は白を基調としたドレスを纏っていた。そのドレスはセーラー服というものに似ている気がする。

「…やつらが戦っているのはランボーグではないな…ともかく合流してみるか」

そうして、キュアスカイ達に合流するために移動した。

「お前達、いつまで苦戦している」

そう言いながら鎌を用意し、やつらが戦っていた黒い怪物を斬り裂いた。

すると、その黒い怪物は消滅した。

「すげー！一撃で倒しちゃった！」

「あなたは？」

「アンノウン!? どうしてあなたがここに!」

「アンノウン?」

キュアスカイの言葉に他の2人のプリキュアが首を傾げる。

まあ、初対面の人間に対する反応はそうだろう。

「…ふむ。まずは自己紹介といくか…私としてもそちらの2人のことは気になるしな。
…私はアンノウン、すでに自分の名前など忘れ去ってしまったし、そう呼んでくれて構わない」

私がそう告げると、プリキュア達は変身を解除し、自己紹介を始めた。

「私は和実ゆい、キュアプレシヤスだよ…この子はコメコメ」

「コメ!」

そう言つて、返事をしたのはリス? いや、狐か? とにかく小さい生き物だった。

どうやら、この少女がピンクのプリキュアだったらしい。

「プレシヤス…貴重な、大切なといった意味があるのだったか? いい名前だ。ゆいというのは結ぶといった意味で着けられたのだろう…名は人を表すというが、とてもいい名前だ」

「そ、そうかな…ありがとう! アンノウン!」

「じゃあ、次は私ね! 私は夏海まなつ! キュアサマーだよ! よろしくね!」

「お前はなんというか……そのままだな。名前がそのままプリキュアの名前となっているとは……だがまあ、名前の通り、真夏の太陽のような明るさを持っているな……とても気持ちの良い人柄だ」

「おおー！私のこと褒めてくれた！アンノウンって人の名前を褒めるの好きなの？」
「どうだろうな……だが、確かに誰かの名前を聞くのは好きかもしれない。今の私は名前がないから、名前がある人物の名前……その意味を知るのは好きだ。まあ、アンノウンという今の名も気に入っているが」

アンノウン、実に今の私にふさわしい名前だ。それに、何者でもないからこそ、何者にもなれるとも言えるからな……私がこの名前を気にしているのもそういう理由だ。

「私は先ほど自己紹介したので大丈夫ですね。アンノウンも私のことを知っていますでしょうし。……まあ、一応しましょうか。私はソラ・ハレワタールです！改めてよろしくお願ひします！」

「ああ。……ちなみにソラ、ソウヤの場所を知らないか？」

「それが……私にもわからないんです。そもそもここに来るまでの記憶が曖昧で……」

「記憶が曖昧……？」

そんなことが起こり得るのか？まあ、良い……それならそれで私が直接探しにいけば良い。

「そうか…なら、私は私でソウヤを探しに行くでしょう」

「ちよつと待つて！アンノウンも私達と一緒に行くよ！」

「断る。あの程度の敵に手こずっているようでは先が思いやられる…お前達のお守りはごめんだ」

ゆいの言葉にそう返す。

「まあまあ、そう言わずにさ！一緒に行こ！アンノウン！」

「まなつ、お前もそんなことを…何度も言うが、私は……む？何だ、この気配は…なるほど。お前達、さつさと変身しろ！敵だ」

私の言葉に3人は驚きながらも変身した。

「ときめく常夏！キュアサマー！」

「あつあつごはんでみなぎるパワー！キュアプレシヤス！おいしい笑顔で満たしてあげる！」

「無限にひろがる青い空！キュアスカイ！」

そうして、名乗りを終えたプリキュア達を見て、準備が整ったことを理解した私は敵に視線を移す。

そこにいたのは思いも寄らない人物だった。

「バカな…キュアナイトだと…」

「本当ですわね…どうしてキュアナイトがここに？」

「あの子もプリキュアなの？」

「はい。ソウヤは普段は男の子なんですけど、プリキュアに変身したら女の子になるんです」

「ええ!?!」

サマーとプレシヤスが同時に声を上げるのを聞きつつ、私は目の前の存在に違和感を覚える。

どういうことだ？目の前のこいつの気配はキュアナイトではない…だが、その姿は、内に秘める強大な力は、間違いなくキュアナイトだ。

そうか…そういうことか！クソが！

「良かった！無事だったんですね！ソウヤ…！ちょうど今——」

「バカ！下がれ！そいつはキュアナイトじゃない！」

「えっ…」

スカイがそう呟くと同時にヤツが攻撃を仕掛けてくる。

私は慌ててスカイを庇い、なんとか難を逃れる。

スカイに仕掛けてきた攻撃は命中することこそなかったが、地面に大きなクレーターを作っていた。

「これは一体……？」

「あれはキュアナイトではない。おそらく、キュアナイトの容姿と戦闘力だけをコピーした人形だ。……どうやらこの世界の上位存在は、よほどキュアナイトのことが気に入っているらしい」

そんなことを話しながら、視線を移すと、サマーとプレシヤスが人形によつて、地面に倒れ伏していた。

「つ、強い……！」

「なんなの……こいつ！」

……流石はキュアナイトの戦闘力をコピーしているだけはある。

だが、私から言わせれば、あんなものはキュアナイトではない……模造品を名乗るのも烏澁がましい粗悪品だ。

「貴様……キュアナイトを舐めるな！」

私は怒りのままに接近し、剣を出現させる。

そして、そのまま粗悪品へと攻撃を仕掛けようとする、カウンターを仕掛けてくる。だが、こんなものは予想の範囲内、私はあえて攻撃を中断し、着地と同時に下から上へ全力で剣を振るう。

粗悪品は咄嗟に槍を出現させるが私はお構いなしに剣を当て、空中へと粗悪品の体が

飛んでいく。

「消え去れ、粗悪品が」

そう言つて、黒のエネルギー波を飛ばし、粗悪品を消滅させた。

「…大丈夫か？お前達」

私の言葉に3人は変身を解きつつ立ち上がり、頷いた。

「そうか。…気が変わった。お前達と一緒に行動しよう」

「ほんとに！」

「やったー！これでアンノウンと一緒にに行けるね！」

「ありがたいですけど、どうして急に心変わりを？」

「理由は単純だ。…あのキュアナイトの粗悪品を創り上げたものを一発殴つてやらなければ気が済まない。あれがキュアナイトだと？笑わせるな…あれを創り出したものはキュアナイトのことをミミリも理解していない…よつて、ボコボコにする。以上だ」

「…アンノウンはキュアナイトのことが大好きなんだね」

「あはは…それはどうか…」

「でもさ、心強い仲間が増えたのは間違いないよね！」

私達がそんな会話を交わしていると、突如として、大きな腹が鳴る音が響いた。

「腹ペコつた〜」

「この腹の音はゆいか…とはいえ、ここには何も無いな…ひとまずは食料を探すとしよう。腹が減っては戦はできぬともいうしな」

私の言葉に3人は頷き、私達は食料を探しに行くのだった。

ロンのようなドレスであり、所々に洋菓子を思わせるデザインが施されている。

あの人は…キュアファイナーレ！ 菓彩あまね様！ 他にもキュアプリズム…あともう一人も！

そのもう一人は、水色の長い髪に2つのお団子ヘアで、その中には真珠のような寶石が1つずつ入っている少女で、衣装は肩が露出している長袖にへそ出しルックといったようなドレスで、両足にはピンクと水色のレギンスを履いている。

あの人は、キュアラメール！ ローラ様！ 確か、人魚だったはず…変身すると、ヒレの部分人間足になるのとか。

そして、灰色と白を基調としたタレ耳のうさぎさん？ あの方は見たことがありませんね…と、そんなことより早く助けに行かなくては！

そうして、私はみなさんを助けに向かうのだった。

「キリがないわね！」

「一旦、逃げたほうが良いかもだよ！」

プリズムは合流した別のプリキュアの、キュアラメールとキュアファイナーレにそう告

げる。

そして、灰色と白を基調としたうさぎのような妖精に手を差し伸べる。

だが、その妖精は何かを怖がっているようで、なかなか手を取ろうとしない。

「プカ…」

「プカ？」

「その子はプカしか言えないみたいなんだ！」

プリズムの疑問にフィナーレはそう答える。

「そうなんだ…」

「つて、二人とも、なに呑気に話してるのよ！」

「そうだったあ！」

ラメールの言葉に慌てて走り出す。それと同時に、ラメールが妖精を抱えて、走り出す。

すると、怪物達もプリズム達を追ってきた。

(もしかして、この子を狙ってる？いや、今はまず逃げないと！)

そんなことを思いながら、プリズムは走り続ける。

「やはり追ってきたか…！」

「なんとか撒けそう？」

「うん！ やつてみる！ ……つて、あれはキュアナイト!? しかも、私に似ている姿…ということはプリズムスタイル?」

逃がっている3人の前にキュアナイトのコピーが姿を現す。だが、コピーということを知らないプリズムは疑問を抱く。

（どうしてキュアナイトがここに? 私達を助けに来てくれた? それにしては声を掛けてもくれないし…: おかしいよ…: あれは誰?）

そんなキュアプリズムの思考を余所に、キュアナイトのコピーはスナイパーライフルを構えている。

「ちよつ! あれつてあなたの知り合い? なんかこつちを狙っているみたいなんだけど!」

「あの姿はキュアナイト…: 私の大切な…: でも、あれは偽物だよ! 本物のキュアナイトはあんなに冷たくないもん! ……つ! 避けて!」

プリズムの叫びと共にファイナーレとラメールが横に移動する。

それと同時にスナイパーライフルから、強烈なビームが放たれる。

キュアナイト・プリズムスタイルの浄化技、ヒーローガールナイトバーストだ。

それが放たれたことにより、プリズム達を追ってきた人型の怪物が消滅する。

「ある意味ラッキーだけど、あんなのに当たったらひとたまりもないわよ!」

「そうだな…どうにか切り抜けなければ…」

「私に任せて！」

そう言いながら、プリズムはコピーから放たれる銃撃を小型のプリズムショットで相殺していく。

「今…ヒーローガール！プリズムショット！」

そして、プリズムの浄化技を放ち、それがコピーへと直撃する。

その隙にプリズム達はコピーを追い抜いた…かに思われた。

「嘘!？」

舞い上がる煙の中、確かにプリズムを狙う銃口が見えた。

「まずい!避けろ！」

フィナーレが言葉を掛けるが、時すでに遅し…弾丸は放たれてしまった。

だが、その瞬間…

「そうはさせません！」

そんな言葉と共に放たれた弾丸が停止する。

いや、弾丸だけではない。コピーのキュアナイトも停止しており、さらには周辺の場所さえも停止していた。

「今のうちです!ついてきてください！」

「エトさん!」

「あなたの知り合い?」

「私のことは後で!今は逃げましょう!これも長くは持ちません!」

エトの言葉に3人は頷き、一齐にその場から撤退するのだった。

//////

「まったく、マスターも人使いが荒いんですから……まあ、私の仕事はあくまでプリキュアのみなさんを見守り、情報を収集することですから、それは良いんですけどね。戦闘?私にそんなことを期待されても困ります」

そんなことを思いつつ、今様子を見に行こうとしているプリキュアのみなさんのことを確認する。

「なるほど……この近くにいるプリキュアさん達は……人に変身できるプニバード族の少年、ツバサ君ことキュアウイング……スカイランドのプリンセスにして、マスターの魂の妹、エルちゃん……魂の妹……今更ながら凄まじい関係性ですよ」

そんなことを言いながら、続けて他のプリキュアの情報を確認する。

「えーと、他には水色の髪、美少女という言葉が体現したかのような少女……薬師寺さあやさんことキュアアンジュに……薄いピンクのロングヘアの魔法使いの少女、花海ことはさんことキュアフェリーチェ……これまた異色な組み合わせですね。……マスターはどう

いう意図で…まあ、私は私の仕事を全うしましょう」

そうして、ローラースケートでプリキュアのみなさんの元へと向かった。

ですが、向かっていく途中で驚いた事態に出くわしました。

「ウソ!?あれってマスター…なわけないですよね…ということは偽物ですか…とりあえず、情報共有をしておかないと…『あ、あー聞こえますか?ディアベルスターさん。こちらマスターレーナです』」

『聞こえてるわ。どうかしたの?』

『実は、マスターのそっくりさんを見つけまして…そちらにも居たりしますか?』

『こちらでも確認したわ。ただ、今は偽物の対処もそうだけど、プリキュア達も不穏な様子ね…あの紫の髪の女の子、琴爪ゆかりだったかしら?あの子が揉めているみたい。まあ、あれはプリキュア達自身に丸投げしてしまいましょうか』

『まあ、そういう問題は当人達で解決した方が良さそうですね、お任せしちゃいましょう。ともかく、私は後でエトさんにも連絡を取って、情報を共有しておきますね!マスターの偽物が蔓延っているって』

『了解。気を付けなさい…もし、あれがマスターの偽物で、同じくらいに戦闘力を持っているなら、今のプリキュア達では勝てないわ』

『わかってます。例え、今回限定の実体化だとしても、マスターの願いをしつかり叶えま

すとも』

『そうね。それじゃあ、お互いに頑張りましょうか』

『了解です!』

そうして、情報共有を終えた私は再びプリキュアのみなさんの元へと向かうのでした。

感じる違和感

「さつきはありがとうございましたー」

「いえいえ、お気になさらず！私はマスターの為に動いているだけです」

キュアウイングの言葉に私はそう返す。

あの後、プリキュアのみなさんのもとに向かうと、新たに春野はるかさんこと、キュアフローラと合流したのを見届けました。

キュアフローラは花のプリンセスと呼ばれているプリキュアで、キュアウイング達と合流した時も黒い人型の怪物を必殺技で追い払っていました。

あれがプリンセスというものですか？確かに、強く！気高く！美しく！を体現したかのような方ではありましたね。

ツバサさんが思わずプリンセスですよねと言ってしまうのも納得です。まあ、あの後のキュアフローラのニヤけ顔はプリンセスとは思えないへにやり顔でしたが。

まあ、あれもまたキュアフローラの魅力でしょうけど。

「まさか、キュアナイトの偽物があるなんて…しかも、あれはβスタイルでしたし、僕の仲間達の元にも、キュアナイトの偽物があるかも」

「…すでに、私の仲間が偽物を確認済みです。それに、みなさんが戦ったあの偽物も、倒したわけではなく、あの大きな城…拠点に戻しただけにすぎませんから、油断は禁物ですよ」

そう言いながら、私はこの世界で一番目立つ大きな城を指差す。

その城はこの世界で、もつとも目立つ場所で、おそらく他のプリキュアのみなさんもあそこを目指して進むことでしょう。

むしろ、そうでなくては困ります。

「まあ、ご安心を。あの城へはこの私、マスカレーナがご案内しますよ！おそらく他のプリキュアのみなさんもあの城へ向かうはずですから、そこに行けばみなさんの仲間にも会えますよ」

私の言葉にみなさんは頷き、私達は城へと進むことにしたのでした。

「やれやれ…流石にマスターの偽物の相手は骨が折れるわね」

どうにか突如として現れた、マスター…キュアナイトの偽物を撤退させた私はそう呟く。

「えと…助けてくれてありがとうございます！」

「あなたはキュアバタフライ…聖あげはだったわね。まあ、私はマスターの指示通りに行動しただけだから、気にしないで」

「どうして、私の名前を知っているの？」

「他のプリキュアのことも知っているわよ。あの緑髪の娘は羽衣拉拉…サマーン星人、宇宙人のプリキュア、キュアミルキー…金髪の大人っぽい娘は風鈴アスミ、地球によって生み出された精霊だったかしら？その誕生の経緯もあつてか名前はキュアアースね。そして、もう一人の紫の髪の娘は琴爪ゆかり、キュアマカロン」

「すごっ！みんなのこと知ってるんだ…でも、なおさらどうして私達のことを知ってるの？」

「あなた達の情報はマスターによって共有されてるからね」

「もしかして、ディアベルスターさんのマスターって…」

あげはがそう言いかけると、拉拉達が騒がしくなる。

「ゆかり！どこ行くルン！」

「どこに行こうが、私の勝手でしょう」

「どうして一緒に行動しないル！バラバラに行動したら、危ないル！さっきのやつが強さを忘れたルン？全員掛かりで戦って歯が立たなかったのに…」

「ここにいる全員がプリキュアなのはわかったわ。でも、だからといって一緒に行動する道理はないわ…それに、さっきの敵はそこにいる彼女によって追いつかれたじゃない。あの敵と遭遇する心配もないでしょう」

「もし、遭遇したらどうするル？ ゆかり1人じゃどうしようもないル」

「ちなみに言っておくけど、私は今度あなたが襲われても助けられないわよ。もし、襲われても私は知らないから、そのつもりでいて」

ララとゆかりの会話を聞き、私はそう口を挟む。

私の言葉にゆかりは一瞬怯えた表情をしたが、すぐに表情を戻す。

「まあまあ、ゆかりんはララルンより年上なんだから、話ぐらいは聞いてあげないと。…ディアベルスターさんもそんな冷たいこと言わないで、ね？」

私達の険悪な雰囲気を感じたのか、あげはがフォローに入る。

「子供扱いしないでほしいル。こう見えて、私の星では大人ル！」

「疲れる子ね…良いわ。そっちは四人で行動して。私は1人で構わないわ」

「はあ…マスターと縁深いあげはの顔を立てて、あなたのことをフォローしてあげようかと思っただけど、この際だからハッキリ言うわね…ゆかり、あなた…大事なパートナーがいなくて精神的に不安定になるのは理解できるけど、自ら死に行くなんて正気？ こんな自暴自棄なやり方でマスターのおかげで拾った命を台無しにするなんて馬鹿じゃ

ないの？意地を張るのはやめなさい」

「あなたになにが…もういいわ！」

そう言いながら、ゆかりはズカズカと歩いて行ってしまった。

…少し、言い過ぎだったかしら…後は他の皆に丸投げしましょう。

「ディアベルスター…容赦ないルン。流石に言い過ぎルン」

「そうね。あの娘にもいろいろと事情があるだろうに、少し踏み込みすぎたわね…私が行くのはあれだから、あなた達が彼女を見つけてあげて…きつと、気丈に振る舞っているだけで寂しい思いをしているだろうから」

「もちろん！ゆかりんのこと心配だし！」

「私も行くル！ゆかりに謝らないと…もちろん、ディアベルスターも一緒に行くル！」

「…はあ…そうね。私も言い過ぎたし、ちゃんと謝らないとね。マスターにもあなた達のサポートをしてほしいと頼まれてるし」

「ラテ…どこに行くのですか？」

私達が会話していると、アスミのパートナー妖精である犬のラテが走り出していく。

「ついていきましよう」

そうして、私達はラテの後を追うのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／／／

「うう…さむっ！アスミさんは平気なの？」

「私は平気です。それよりも心配なのは…」

「ゆかりね。だから、自分から死に行くなんて正気かって言ったのに…あげははこれでも羽織つてなさい」

吹雪の中、ラテを追いながらそんな会話を交わす。

「ありがとう。ディアベルスターさん…」

「それはマスターの上着よ。お礼ならマスターに言いなさい」

「そ、ソウヤ君の!? た、確かにソウヤ君の匂いが残って、ソウヤ君に抱きしめられてるみたい…」

「…マスターは愛されているわね…あげは、マスターについて詳しくは聞かないの？」

「まあ、ほんとは色々聞きたいことがあるけど、ソウヤ君のことだから、みんなのために色々やってくれてるんだろうなって…そう思ってるから。…多分、私達に何も話してくれないのも、それがみんなのためになるからでしょ？」

「信頼してるのね」

「うん。…あ、でもこれだけは聞かせて」

「何かしら？」

「ソウヤ君は無事なの？」

「…希望を持たせるような言い方はしたくないから、正直に言うと、マスター…ソウヤは死んではない。ただ、少し込み入った状況でね…あの状態を無事と言えるかどうか…まあ、本人は至って元気ではあるんだけど、今はこちらに干渉できない状態よ」

「…そっか。教えてくれてありがとう！死んでないってわかっただけでも良かったよ！」

「…そう」

そんな風に話していると、ラテが何かを見つけたのか吠え始めた。

そして、ラテが吠えている部分に視線を向けると、大きな洞窟のようなものがあり、その中には寒さのあまり蹲っていたゆかりの姿があった。

「ゆかり！見つけたル…」

「ご無事でしたか…」

「…余計なお世話よ」

「素直じゃないわね…まったく」

そう言いつつ、ゆかりの様子を確認する。

…流石に、この吹雪の中過ごしていたから寒そうね…まずは体を温めないよ。

そういえば、ここに来るまでにつけての場所があったわね。

「ゆかり、まずは体を温めるわよ。確か、ここに来るまでにちょうど良いものがあったか

ら」

そう言うと、あげはとアスマも頷き、私達はそこから場所を移動するのだった。

「温かいル！」

「まさか、こんな所に都合よく足湯があるなんてね」

「はい、私の街にも似たような場所があります」

私達はラテを追っている途中で見つけた足湯に浸かっていた。

なぜこんなところに都合よく足湯があるのか…私はすでに知っているけど、まだ言うべきではないわね。

そんな風に思考を働かせていると、ララがゆかりに言葉を紡ぐ。

「…ごめんル。私、自分のことばかり考えてたル」

「…私もごめんなさい。…ディアベルスターの言う通り、意地を張っていたわ。…心配してくれてありがとう」

「…私もごめんなさい。あなたにも事情があるというのにズケズケと言い過ぎたわね…
本当にごめんなさい」

私もゆかりへと謝罪する。

すると、ゆかりは『もういいわ。こちらも悪かったし…』と笑みを浮かべて口にしてくれた。

そして、私の謝罪が終わると、ララが頭についている先端が丸い触覚のようなものをゆかりへと伸ばす。

「これは？」

「ララルンの星の挨拶みたいなものらしいよ」

「ふふっ！面白いわね」

そう言いながら、ゆかりは指先で丸い先端に触れた。

…なにはともあれ、仲直り出来て良かった。

「…ッ!？」

私達が2人の様子を見て安堵していると、ゆかりが何かに気づいたのか、驚きの表情を浮かべている。

「ゆかり？」

「どうしたの？」

「……アレは」

「アレって？」

「…いいえ、何でも無いわ」

そう言うゆかりの表情は何かを考え込んでいるようだった。

…聡い娘ね…この世界に違和感を抱いているようだし…まあ、今は確証を持ってないから言わないのでしょうけど。

私はそんなことを考えながら、彼女達と足湯でのんびりするのだった。

謎の少女との出会い

「採ったどー!」

「おお〜!」

「確かに見事な身体能力だな」

私はまなつが木に登り、木の実を採っているのを見ながら、そう呟く。

食料を集めに来た私達だが、幸いにも、この辺には木の実もちゃんとあるらしく、食料には困らなさそうだ。

そんなことを考えていると、続けてゆいも崖を登り果実を取っていた。

「採ったよー!」

「おお〜!」

「…私も何か探しに行くか」

そうして、私も何かしらの食料を探すために動き始める。

そして、いくつか食料を探している内に、ソラ達の悲鳴が響く。

「まったく、何があったのやら…」

そうして、悲鳴が聞こえてきた方向へと向かうと、牛のようなイノシシのようにも見

える謎の生き物にソラが掴まり、その生き物にゆいとまなつが追いかけて回されていた。

「うわあああ!」

「わくく!」

「アンノウン! 助けてえく!」

「…はあ。お前達、何をやっている…」

そんな様子を見て、呆れつつも、その生き物に向かって黒い小さな矢のような形状にエネルギーを変換させ、そのまま放った。

すると、矢を放たれた生き物は地面に倒れ伏した。

「「「おおく!」」」

「まったく世話が焼けるな…ほら、さっさとあの生き物を回収して食事をしよう」

「ありがとう! アンノウン!」

「アンノウンって、意外と面倒見が良いよね!」

ゆいとまなつのそんな言葉を聞き流しつつ、私は3人と共に場所を移動するのだった。

「ふむ…なかなか美味しいな…本当はもう少しちゃんとした料理を用意したかったのだが」

「デリシャスマイル〜！この果実もすごく美味しい！」

「でりしやすまいる？」

「うん！ご飯は笑顔だよ！」

「良い言葉ですね…」

「こつちの肉も美味しい！アンノウン、下ごしらえとかも出来るんだね！すごいじゃん！」

「ああ。慣れれば楽なものだぞ…うん？どうしたソラ、お前は何か食べないのか？」

ゆいとまなつが美味しそうに果実や肉を食べている中、ソラは少し大きめな丸い食べ物を持ちながら、どこか思い詰めたような顔をしていた。

「…私達、こんな風にのんびりしてて良いんでしょうか…今、この時も私の友達は大変な目に遭っているかもしれないのに！ソウヤだって…」

「ソラちゃん…」

ゆいが心配そうに声を出す。

おそらくゆいもまなつも自分の友人のことが心配なはずだ。それなのに、そんな素振りを少しも見せないとは、プリキュアというのは、どこまでもお人好しばかりなのか。

「それでも、ご飯を食べないと元気が出ないし、歩けないよ」

「私もトロピカル部のみんなが心配だけど、今一番大事なことをする！だから、全力で腹ごしらえしてるの！」

「2人の言う通りではあるな…腹が減っては戦は出来ぬとも言うし、今の私達に必要なのは腹ごしらえだ」

「それにホラ、おばあちゃんが言ってたの。人の力も出汁も合わせるのが味噌だつて！私達の力を合わせればきつと探し出せるから！」

「…まあ、安心しろ。私がここに居る…それ自体がソウヤが生きていることのためによりの証拠だ。私あるところにソウヤあり、だからな。…そして、ソウヤが生きているなら、他の仲間達を助けるために策を弄しているだろう…つまり、お前達の仲間もきつと無事だ」

らしくもないアドバイスをしてしまった…まあ、ここでソラに折れてもらっては困るし、この言葉によって立ち直れるなら、それも悪くはない。

「…そうですね。お二人とも励まして頂きありがとうございます！…アンノウンも、ありがとうございます」

そう言つて、ソラは笑みを浮かべ、手に持っていた食べ物を口に運んだ。

そんな風に過ごしていると、突如として音が響き、空を見上げると、先ほどソラ達が

戦っていた怪物が飛んでいた。

「あれは……！」

「待て。何かがおかしい！」

私がそう止めると同時に、その怪物に向かって白いビームのようなものが飛んでいき、その怪物を撃墜していた。

私達はその方向に視線を移すと、1人の少女が飛び出していき、あの怪物に連続でパンチをし、そのままオーバーヘッドキックを喰らわせ、地面に叩きつけた。

「何?！」

「あの子強い……！」

そんな感想が出てくるなか、その少女はピースサインをし、そこから白いビームを放ち、怪物は消滅した。

……なんだ、やつから感じるこのプレッシャーは……こいつ、一体何者だ?

私がそんなことを考えていると、3人は少女の元に向かっていく。

バカ!警戒心がなさすぎるだろ……いや、違う……あの3人はやつの強さを感じることが出来ないんだ。

これはあれか……一定の水準の強さがなければ、そもそも力量差を理解出来ない……そういう領域にあるということか。

私はそう結論づけ、3人の後を追う。

「違う……こんなものじゃない……彼女達の強さはもつと……それに、この程度じゃ、彼女の足元にも及ばない」

「あの一！」

「あなたもプリキュアなんですか？」

その声を掛けられて少女が振り返る。

「……どうして？あの時確か……」

「はい……？」

ソラが疑問符を浮かべながら、そう口にする。かくいう私も目の前の少女が何かを呟いていたのを聞き取れなかった。

というより、少女がこちらに振り向いた瞬間、私の中の警戒心が最大になったせいもあり、そちらに意識を割く余裕がなかった。

その少女は、水色よりの淡い緑色と白を基調とした衣装を着ており、髪はツーサイドアップと、それとは別にウサミミのように髪が束ねられていた。服装としては、ベアトップのワンピースにかぼちゃパンツ、腕にアームカバー、脚は白いタイツにショートブーツという服装だ。そして、胸元は虹色の帯のようなものに囲われている。

また、側頭部から謎の白い耳が出ており、人間の耳は確認できない。そして、何故か

その耳の一部に小さな傷跡のようなものがついていた。

「どういうことだ？片方の謎の耳に傷はついていない…ということはあそこだけ、何者かによるダメージを受けた？…いや、今はそんなことよりも。」

私はぐるぐると回る思考を落ち着かせ、少女を見る。

「…何でも無い。僕はシュプリーム、僕もプリキュアだ」

「やっぱり！」

「キュアシュプリームコメ！」

「待て、お前達…こいつのことをそんなにあっさり信用していいものか？いくらなんでも怪しすぎるだろう」

私は鎌をシュプリームと名乗る存在に突きつける。

「そういう君も大分怪しいと思うけど？君こそ何者？」

「私はアンノウン。通りすがりの旅人だとも思っておけ…それにしても、シュプリームか…最高という意味があるのだったか？どういう意図でそう名乗っているのか気になるな…まあ、なにはともあれ信用するのは難しいが」

「まあまあ！プリキュアだって言ってたし、大丈夫だよ！」

「さっきの怪物に襲われていたのが、敵ではないなよりの証拠ですし！」

「そうそう！」

「お前達…はあ…まったくどこまでお人好しなのやら…誰かを信用するのは良いが、誰も彼もを信用していたら、そのうち痛い目を見るぞ」

そう呆れつつもひとまず武器を仕舞った。

こいつから放たれるプレッシャーは気になるが、こちらに手を出さないのであれば構わないか。

そんなことを思っていると、シユプリムが変身を解いた。

その姿は薄い淡い緑色と紫が混じったショートヘアで、耳元辺りには束ねられた白い髪が手のように伸びており、やはり髪の一部には傷跡のような物が残っていた。

恰好はパーカーのようなものを着ている。

「この姿の僕のことにはプリムと呼んでほしい」

それを聞いた3人は嬉しそうな様子で手を差し出す。

「…これは？」

「えっと、よろしくねの挨拶だけど…」

「そっか。それじゃあ、よろしく」

そう言つて、プリムは3人とそれぞれ握手する。

「君はしないの？」

「私は、お前のことを信用したわけではないからな」

「そっか…残念だよ」

そう言いながらプリムは笑うが、どうにも本当に残念に思っているようには思えなかった。

そんなことを思いながらも、私はソラとゆいとまなつ…そして、プリムと名乗る存在と共にその場を後にするのだった。

プリキュアとは

「暑いな…」

「なんでこんな砂漠を歩かないといけないのよ…」

「プーカは大丈夫？」

「プカ…」

「プーカ？」

「そう。プカプカ言ってたから、プーカ」

「なかなか良い名前ですね。名付けは少々シンプルすぎる気はしますが…」

砂漠を歩きながら、私達はそんな会話を交わす。

なんとか、キュアナイトの偽物を撒き、逃げた先は砂漠。

とにかく進むより他になく、歩き続けて今に至るわけなのですが、流石にみなさん限界が近いようです。

気に掛かるのはましろ様がプーカと名付けた灰色と白色を基調とした先ほどの兎の妖精さんですね。

どうやら、誰かに手を触れられるのを怖がっているようで、あまね様が背負おうかと

提案した時も、それを拒絶していました。

…それに、なにより私が知らない妖精です…何人もの他のプリキュアについて情報を集めていましたが、今までのプリキュアに、あんな妖精さんはいなかったはずです。

つまり、この世界で誕生した新しい妖精ということ…そして、おそらくこの妖精さんはあいつによって誕生した…まあ、あくまで私の推測にすぎませんが。

「エトさん？大丈夫？」

「ましろ様…大丈夫です。心配してくれてありがとうございます」

「そっか…それなら良いけど」

「ふーん…まあ、何かあつたら言いなさいよ。…それにしても、エト…なんでこの暑さの中で平気そうなのよ」

「まあ、私は自分の体にバリア的なものを張っているので」

「なにそれズルい。私達にもバリア張りなさいよ」

「それは無理です。…ん？あれは！」

ふと、視線を移すとオアシスが見えた。

あれは、本物のオアシスでしょうか？幻だったら困りますが。

そんなことを思いつつも、私達はそこに向かうのでした。

「はい。エトです…ええ、本当のオアシスで良かったです…それにまた他のプリキュアと合流できましたし…他には」

ディアベルスター様とマスカレーナ様に現状を報告する。

オアシスにたどり着いた私達は、『生きてるって感じ』が口癖？の、花寺のどか様と出会いました。

彼女のプリキュアとしての名前はキュアグレース。ソウヤ様曰く、すぐくみんなに好かれそうなプリキュアとのこと。

彼女もまた仲間と逸れてしまったらしく、パートナー妖精のラビリンと仲間達を探していると言っていました。

そういえば、ソウヤ様が『ラビリンとましろさんの声って似てるよな』と言っていましたね…探すのは意外に簡単かもしれせん。

そんなことを思っているうちに情報の共有が終わりました。

「…そういうえば、ソラ様達は大丈夫でしょうか？他の皆様は私やお二人がいるので、問題はありませんが、ソラ様達を見守る存在はいませんし…」

ソウヤ様曰く、あいつが来るから大丈夫だと言っていましたがあいつ…おそらくア

ンノウンのことでしょうか？確かに最近のアンノウンはまともになっていますが、果たして協力してくれるのか…

「…ソラ様達、大丈夫でしょうか？」

私は空を見上げながら、未だに合流できてないソラ様達のことを思うのでした。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「何だ？今、ものすごく失礼なことを誰かに考えられていた気がする…どこの誰だか知らんが、失礼な奴もいたものだ」

「そうだね。あ、おかわり食べる？」

「頂こう」

そう言いながら、ゆい達が作った鍋を食べる。

「「デリシヤスマイル〜！」」

ソラとゆい、そしてまなつのそんな声が響く。

確かに美味しい。流石というかなんというか…私も料理について学んでみるのも良いかもしれない。

「そういえば、ずっと気になってたんだけど…アンノウンはフードを外さないの？」

「それ！私も気になってた！」

「確かに、アンノウンの素顔を見たことはありませんね…」

「なんだ？私の素顔に興味があるのか？」

私がそう尋ねると、3人は頷く。

「…ふむ。まあ、いいだろう。減るものでもないしな」

そう言つて、私はフードを外す。

「ええ!!アンノウンつて女性だったんですか!!？」

「おおー！めっちゃ美人！メイクして良い？」

ソラとまなつがそんな反応をする。

「まったく…ソウヤもそうだが、お前達も似たような反応をするのか…」

「ソウヤ…」

ふと、プリムがそんな反応を示す。

「プリム？ソウヤについて知っているのか？」

「…いや、知らないな」

「そうか…」

そう呟きながらも、私はプリムへの警戒を怠らない。

どうにも気にかかる。

こいつは何かを知っているような気がしてならない。

まあ、私の気のせいかもしれないが。

「ねえ…」

そう言つて、プリムが顔を上げる。

「プリキュアってなに？」

プリムがそう質問した。

その質問にソラ達は考え込む。

確かに改めて言われると、プリキュアとはなんだろうか？

まあ、私はプリキュアではないが、私にとってプリキュアとはどんな時も諦めず、心は折れず、前に進むソウヤのような人物だ。

「うーん、確かに改めて考えると、プリキュアってなんでしょうか？」

「というか、プリムもプリキュアじゃ？」

「え…ああ…つまり、どうしてプリキュアになったのかなって」

まなつの言葉にプリムがそう口にする。

「私は今一番大事なことをやるって思ったから！」

「私はブンドル団からレシピツピを守るために！」

「私は元々ヒーローを目指していて…仲間達からいろんなことを学びながら、日々手帳に書き足しています」

そう言いながら、ソラは悲しげな表情を浮かべる。

「…心配するな。お前達の仲間はみんな無事だ。あのソウヤがなんの策も立てないわけがないだろう」

私がそう言うのと、ソラ達は笑みを浮かべる。

プリムを除いてだが。

「ちなみにアンノウンはどうしてプリキュアになったの？」

「…勘違いするな。そもそも私はプリキュアではないぞ」

「「ええ!？」」

まなつとゆいが驚いたように声を上げる。

嘘だろ?まさか、私をプリキュアと勘違いしていたとは…

「あはは…アンノウンはプリキュアではありませんよ」

「そうだったの!?! てつきり、プリキュアだと思ってたよ…」

「私も! みんなプリキュアだから、てつきり…」

「全く…私をプリキュア扱いするとは…」

そんな風に呆れていると、コメコメがプリムの元に向かっているのが見えた。

「プリムもおかわり食べるコメ?」

「要らないよ」

そう言い放つプリムの、コメコメを見る目はとても冷たかった。

コメコメもそんな気配を感じ取っているのか、少し悲しげに見える。

…やはり、プリムにはなにか裏がありそうだ。

まったく、ソウヤのやつめ…厄介事を押し付けてくれたものだな。

まあ、あいつが私を頼るような状況になるというのはよほどの状況なのだろう。

なんとなくだが、私がここにいる理由がわかってきたぞ…おそらく今ソウヤは…

…いや、今はまだ仮説にすぎないな。なにせよ、あの城に向かえばすべてがわかる。

この世界に来てから、一際目についていたあの城…きつとあそこにすべての答えがある。

私はそんなことを考えながら、夜を明かすのだった。

／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／

「ふう。どうにか落ち着いたか」

俺はある空間で一人そう呟く。

「エト、マスカレーナ、ディアベルスター…みんな上手くやってきているな…アンノウンも協力してくれているみたいだし」

とりあえず、今のところは順調だな。

そろそろみんなも本格的に城を目指してくるだろうし、もう少し頑張ってみるか。

「にしても……なかなかキツいな。彼女達の想いが消え去らないように、必死にこの世界に繋ぎ止めるというのもさ」

だが、泣き言ばかりも言っていられない。ここで俺が諦めてしまったら、すべてが台無しだ。

「さて、もう一踏ん張り、頑張ってみよう！」

そう言いながら、俺は再び気合いを入れ直すのだった。

断章　　ある戦いの記憶

夢を見ていた。

ボクが夢を見るとは思ってもみななかったが、それほどまでに彼女との戦いが印象に残っているということだろうか。

…まあ、良いだろう。

あの時の戦いを振り返ってみるのも悪くない。
キュアナイトとのあの戦いを。

「…!?驚いたよ。まさか、アレを受けてまだ立っているなんて…」

「くっ…あっ…はあはあ」

その存在は目の前で、フラフラになりながらも立ち上がっている少女の姿を見下ろす。

その少女は青みがかった長い黒髪を下ろしたロングヘアーストレートという髪型

で金と紺色を基調とした肩出しのドレスを身に纏っている。

そして、その服の両腕には袖があり、腰から後ろにローブが垂れ下がっており、そこには夜空の幻想的な星々が描かれていた。

その少女はキュアナイトスタイル、想像の力を宿している。

「今さら、立ち上がったところで君の仲間はもういないよ」

「そうですね…でも、必ず取り戻します。まだ諦めるには早いです」

そう言いながら、彼女は元の黒のドレスアーマーを纏った姿へと戻る。

「さて、ここからですよ。最後の最後まで抗います！」

そうして、彼女の姿が変化していく。

その姿は赤と白を基調としたドレスへと変化し、そのドレスに所々、黒のラインが描かれていた。髪は青みがかった黒髪の一部が赤とピンクのメッシュに変化し、瞳が黒曜石のような黒い瞳と翡翠のような翠色のオッドアイに変化した。

デュアルスタイル・プリズムサンライズ。プリズムスタイルとサンライズスタイルの力を併せ持つ、キュアナイトの超火力型のスタイルだ。

「へえ…まだそんな力が。やっぱりプリキュア…興味深い」

「行きます！」

そう言って、突撃するキュアナイトにある超常存在は攻撃を仕掛けてくる。

それをキュアナイトは高速で回避しながら接近し、炎を纏いしガンブレードで斬りかかる。

それを超常存在は防ぐ。

「ぐっ……！驚いた……まさかここまでやるなんて……でも、無駄だよ」

そうして、超常存在によりキュアナイトは弾かれてしまう。

「っ……まだまだ！」

そうして、再びキュアナイトが攻撃を仕掛ける。

そして、何度も攻撃を仕掛けていると、力が尽きかけているのか、キュアナイトは膝をついてしまう。

「くっ……！流石に限界ですか……」

その隙を逃さず、超常存在は白いエネルギーを溜め、そのままそれをキュアナイトに放つ。

「……そうきましたか」

そう言いながら、キュアナイトはガンブレードの銃身部分にエネルギーを溜めていく。

「これが私の全力です……ヒーローガール！ナイトエクリプト！」

そうして、キュアナイトは溜めたエネルギーを放出し、超常存在の放ったエネルギー

とぶつかり合う。

「くっ……うっ！」

キュアナイトは表情を歪ませながらも超常存在のエネルギーと拮抗する。

「うっ……はああっ！」

そうして、キュアナイトが最後の力を振り絞り、ついに超常存在の攻撃を押し返し、その攻撃が超常存在の髪のような部分を掠めた。

「なっ!? ボクがダメージを受けた?」

超常存在から初めて驚きの声が零れる。

それもそうだろう。

今まで超常存在に傷を負わせたものはいなかったのだ。そもそも超常存在とここまですり合えたのもプリキュアが初めてだ……今まで使ったことのない世界を破壊する力、それを使わせたのもプリキュアが初めてだ。

その力を受けてなお立ち上がり、さらには掠り傷を負わせたプリキュア……キュアナイトの強さは驚嘆の一言につきる。

超常存在の中に今までにない感情が芽生える。

それはプリキュアに対しての強い興味、そしてキュアナイトという存在に対する執着にも似た感情。

もつとキュアナイトと戦いたい、あの強さに近づきたい。

そうして、超常存在はプリキュアの力の秘密を知るために、自分がプリキュアになるために、世界を再び創り直すのだった。

その時、超常存在はキュアナイトのコピーを創り出した。

だが、キュアナイト本人は最後の攻撃の後に姿を消しており、超常存在はキュアナイトとの戦闘を思い出しながら、キュアナイトのコピーを創り出した。

キュアナイトの基本スタイルと、 α スタイル、プリズムスタイル、バタフライスタイルの4つの姿だ。

超常存在に見せた γ スタイルはコピーに想像力がなく、実現不可能であり、デュアルスタイルの一部のサンライズスタイルもソウヤとあさひの絆の結晶であるため、再現することが出来なかった。

まあ、創り出したコピーは本当の意味でそれぞれの力を持っているわけではなく、ガワだけを真似たにすぎないが。

アンノウンの言葉を借りるなら、超常存在の創り出したコピーは模造品を語るのも烏澁がましい粗悪品といったところだろう。

だが、超常存在がそれに気づくことはなかった。

／／／／／／／／／／／／／／／／／／

「う…ん。…妙な気分だ…ボクが睡眠というものを取るとは」

「起きたか。ソラ達はまだ眠っているぞ」

そう声を掛けてきたのはアンノウンだ。

彼女は少々、イレギュラーな存在である。

プリキュアではないはずなのに、プリキュアと同等かそれ以上の力を持っている。

本来であれば、彼女はプリキュアに倒される患者という立ち位置であると考えられるが、今はプリキュア達の仲間だ。

妙なことだ…ボクの認識のプリキュアは女の子が変身し、悪者を倒すという存在であるのだが、その悪者がプリキュアと一緒にいるのが不思議で仕方がない。

「ねえ…」

「どうした？」

「君はどうしてプリキュア達と一緒にいるの？」

「何故そんなことを？」

「君はどちらかといえば、プリキュア達の敵の立場だと思うのだけど、どうして一緒にいるのか気になって」

「なんだそんなことか…」

そう言いながら、アンノウンは言葉を続ける。

「私はただ、あのキュアナイトの粗悪品を創り出した奴を殴ってやらなければ気が済まないだけだ」

「それだけ？」

「それだけだ。…まあ、他に理由をあげるとするなら、キュアナイトが私を必要としているからだ」

「キュアナイトが、君を？」

「ああ。あいつが私を必要とすることなど滅多にないからな…それに、おそらくそれは私でなければならぬ。ならば、手を差し伸べるだけだ」

「ふーん…よくわからないな。それにしても、よく他人の為にそこまで出来るよね…しかも、おそらく敵であろう他人にさ」

「…まあ、私とソウヤの関係はそう単純なものではないからな。…とはいえ、貴様に言つたところでわからないだろうが」

「そう言いながら笑みを浮かべるアンノウンを見て、ボクはますますわけがわからなくなつた。」

「本当によくわからない。」

「何故、敵であろう他人に手を差し伸べるのか、何故キュアナイトの話をする時に嬉しそうな顔をしているのか。今のボクには理解出来そうもない。」

「さて、そろそろソラ達が目を覚ます頃だろうし。貴様も準備をしておけ」
アンノウンにそう言われ、ボクも準備を始める。

まあ、特に準備をすることもないのだけど。

そうして、他のプリキュア達も目を覚まし、ボク達は城へ向けて歩き始めるのだった。

月虹ルート

夜に架かる虹

「俺はましろさんが好きだ」

出会ってから、日はそこまで長くないけど、ましろさんの優しさには何度か助けられた。

ましろさんは、まるで春の陽気みたいに温かい人で、一緒に居ると安心する。

まあ、たまに怖かったり、ちよつと重いこともあるけど…それでも全部引つくるめてましろさんが好きだ。

とはいえ、ここで告白しても良いんだろうか…俺の勘違いで、ましろさんが俺のことをなんとも思っていなかったら？

もしそうなら、気まぜくなるのは間違いないよな…今までのような関係ではいられないかな。

「うう…急に不安になってきた…大丈夫だろうか？」

とはいえ、黙ったままというのはスツキリしない。

ちゃんとましろさんに気持ち伝えずに、だよね…でも、どうやって告白しよう

か…やばい、相談できる人がいない！

自分で考えるしかないか…うーん、どうしよう？

みんなの前で告白というのは流石に…となると、ましろさんを呼んで告白するしかないか。

とはいえ、どう呼び出したものか…

そう考えながら部屋を出ると、買い物から帰ったばかりのましろさんと会った。

「お帰り。ましろさん」

「ただいま！ソウヤ君、どうしたの？難しい顔をしてるけど」

「いや、えつと…」

一瞬、言葉に詰まる。

…待てよ？これ、いつそのことましろさんを今、誘えば良いのでは？

そんな風に考えて言葉を紡ぐ。

「…そんな大したことじゃないんだけど…ましろさんに相談したいことがあってさ」

「相談したいこと？」

「うん」

俺の言葉に、ましろさんは一瞬考えるような仕草をしてから言葉を紡いだ。

「それじゃあ、今から私の部屋で話してくれないかな？ソウヤ君が相談してくれるなん

て滅多にないもん」

「ましろさんが良いなら、それで良いけど…それじゃあ、お願いしようかな?」

「うん!それじゃあ行こっか!」

そうして、俺はましろさんの部屋に招かれるのだった。

／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／

「それで相談ってなにかな?」

部屋の鍵を閉めながら、ましろさんはそう口にする。

…って、え? 鍵を閉めながら? 何で?

そんな疑問を抱きつつも、誰かが乱入してくる心配がなくなったことにひとまずは安

心し、ましろさんに告白しようとする。

「実は…」

「実は?」

「えつと…」

言葉に詰まる。

心臓の鼓動が早くなる。

告白というのはこんなにも緊張するものだったのか…

一度深呼吸をし、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

「ましろさん、俺は君のことが好きだ」

「えっ…!?それって…」

「うん。言葉の通りだよ…俺はましろさんの事が1人の女の子として好きだ…俺と付き合ってくれませんか？」

「ソウヤ君…！嬉しいよ！私で良ければソウヤ君の恋人になりたいです」

そう言ってみましろさんは頬を赤らめている。

だが、その後になんか表情が暗くなってしまう。

「ねえ、ソウヤ君…こんなこと聞くのも変なんだけど、本当に私で良いの？」

「もちろん！ましろさんが良い」

「…だって、ソウヤ君の周りにはソラちゃんやあげはちゃんがいるんだよ？私は2人みためにキラキラしてないのに…」

「何言ってるんだ？ましろさんはずっとキラキラしてるよ？ずっと、優しさっていう輝きを持つてるじゃないか」

「…私、最近気づいたけど、重いよ？」

「知ってる」

「ソウヤ君が他の女の子と話してるだけで嫉妬しちゃうよ？隙あらば、ソウヤ君を閉じ込めようとするかもしれないよ？」

「それはほどほどにしてほしいけど…でも、そういうところも含めて好きだ」
「…！…ソウヤ君！」

そう言いながらましろさんは俺に抱きついた。

「ありがとう…！ソウヤ君…大好きだよ。私をソウヤ君の恋人にさせてください」
「喜んで。俺もましろさんのことが大好きだ」

そう返しながら、ましろさんを抱きしめる。

「えへへ…ホントはね、ちよつと期待してたんだ…ソウヤ君が用事があるって言うてくれた時に、これが告白だったら良いなって」

「それじゃあ期待に応えられたかな？」

「うん！すごく嬉しいし、幸せだよ！ねえ、ソウヤ君…」

そう言うて、ましろさんはベッドに俺を押し倒す。

「えつと、ましろさん？これは一体」

「せっかくソウヤ君を独占できるのに何もしないなんて勿体ないでしょ？」

そんなことを言いながら、ましろさんは顔を近づけてる

そして、そのまま俺とましろさんの唇が触れ合った。

「ふふっ！キス、しちゃったね…」

「そうだね…でも、今は不意打ちみたいな感じで、実感が湧かなかったからもう一回しよ

う

そう言って、起き上がりましろさんを見つめる。

視線の先のましろさんは頬を赤く染めている。

そんなましろさんを見て、ちよつとしたイタズラ心が出てきてしまった。

…でも、意外とそんなに驚かないかもしれないな…ま、やるだけやってみるか。

そう思いながら、俺はましろさんに顔を近づける。

「ましろ…好きだ」

「へっ!？」

ましろさんは更に、顔を赤くしながらそう口にする。

そんな反応を見ながら、俺は再びましろさんにキスをした。

「もう…ソウヤ君!」

「あはは…ごめん。さっきの仕返しをしたくてさ…よし、じゃあ今度こそちゃんとしよう」

「うん…ちゃんとしよ!」

ましろさんの返事を聞いて、ましろさんをしっかりと見つめる。

そして、お互いに顔を近づける。

そうして俺とましろさんの唇が触れ合った。

さつきまでも同じようにキスをしていたが、それとは違った、じんわりと幸せが広がっていくような優しいキスだった。

「ソウヤ君……これからもずっと一緒に居ようね」

「そうだね……これからも一緒に」

俺はそう伝えて、再びましろさんを抱きしめるのだった。

皆で山へ！（ましろルート）

「ツバサ君ありがとう。ごめんね、鳥の姿になつてもらつちやつて…」

「いえいえ、ましろさんの言う事も最もですから」

今、俺達はあげはさんの車に乗って、らそ山に向かつている。

朝、いきなりあげはさんがやってきて、山に行こうと言つたのはびっくりした。

あげはさんの車の定員をオーバーしていたため、俺は家で留守番しようと思つていたのだが、ましろさんがツバサ君に『ツバサ君、申し訳ないけど、鳥の姿になつてもらつて良い？そうすればソウヤ君も座れるから』と言つて、俺を車に乗せようとしてくれた。俺としては別にトランクでも構わなかつただけだ。

彼女としては、彼女の気遣いを無碍にするわけにもいかない。

ちなみに、晴れて恋人同士になつた俺とましろさんだが、まだ皆に伝えてはいない。もしかしたら、ツバサ君はわかつているかもしれないが、他の人は知らない。

何故かというと、ましろさんがまだ俺達の関係を黙つていようと言つたからだ。

『ソウヤ君、私達の関係のことだけ…』

『うん？どうかした？』

『…しばらくみんなには、内緒にしよう』

『それは良いけど、どうして？』

『ソウヤ君も気づいているよね…ソラちゃんもソウヤ君が好きだつてことに…』

『…まあ、俺の勘違いでなければそうかなとは思っていたよ…』

『ソラちゃんは私の大事な友達だから…本当のことを言うのは、もうちよつと後にしたいなつて…』

『なるほどね…了解。しばらく皆には内緒にしておこう』

正直、早い段階で話した方が後々拗れないと思うけど…とはいえ、ソラとましろさんの関係が悪くなるのは俺の望む所ではないし、俺はましろさんの言う通り、しばらく皆には黙っていることにした。

『ソウヤ君！ありがとう！…それじゃあ、堂々とイチヤイチャできない分、今、ここでイチヤイチャしよう？』

『イチヤイチャつて…まあ、良いんだけども。これからしばらくは皆から隠れながら、イチヤイチャすることにしよう』

『うん! そうしよ! : ソウヤ君、他の人に目移りしたら、嫌だよ?』

『うん? そんなのするわけないよ! 俺が一番好きなのはましろさんだし』

『: ソウヤ君: そういうのホントにズルいよ: でも、そんなところも大好きだよ』

『俺も大好きだ』

とまあ、そんなこんなでしばらく皆には内緒にすることにしたわけだ。

そして今、ましろさんの気遣いを無碍にしないために付いてきているというわけだ。

「ツバサ君、今からでも、俺がトランクに入ろうか? せっかくのお出かけなのに、申し訳ないっていうか: :」

「大丈夫だよ! ありがとう、ソウヤ君!」

そんな会話を交わしているうちに、目的地に徐々に近づいていくのが目に入る。

その間にあげはさんがなにやら歌を歌い始めていたが、普通に上手くて聞き入ってしまった。

「はーっ! 一体なんて速さですか! 木や建物がビュンビュンです!」

「そっか、ソラは車に乗るの初めてか: : どうだ? スカイランドの鳥さんに乗るのも良い

けど、車に乗るのも良いだろ？」

「はい！」

「でしよう？鳥さんも良いけど、私のピヨちゃんもビュンビュンできやわわくでしよ！」
あげはさん、テンション高いな…まあ、きやわわかどうかはともかく良い車だとは思
う。

「ボク達、何で山に向かつてるんですか？」

「えー？たまにはみんなで遠出したくない？あと、君のことも知りたいしね！少年！」
「その少年っていうのやめてくれませんか？」

あげはさんの言葉にツバサ君は拗ねているのか、不服そうだった。

ツバサ君、あげはさんみたいなタイプが苦手なのかな？

「あつ！見えてきたよ！らそ山！」

そうして、俺達はらそ山へとたどり着くのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ソラ五郎の出す謎を解きながら、山登りに挑戦しよう…だつて」

「謎を解きながら山登りですか！面白そうです！」

「なんか少年に似てるね！」

あげはさんがソラ五郎を見ながら、そう口にする。

確かに、似ているかもしれない……というか、もしかしてソラ五郎のモデルってプニバード族なんじゃないかなろうか?

「似てませんよ! フン!」

「えるう〜! える……」

「ご立腹なツバサ君とは対象的にエルはテンションが高いようだ。」

「あはは……うん? へえ〜、ルートが分かれてるんだ」

「そうみたいだね! 道は2つあるみたい……1つは歩きやすくてゆったりらくらくのんびりコース。もう1つは……」

そう言いながら、ましろさんは視線を移す。

そこにはいかにも大変そうな道が広がっていた。

「とつても登りがいのある道!」

目を輝かせながら、そう言うソラを見ながら、思わず苦笑する。

まあ、ソラならそつちを選ぶよな。

「ソラちゃん、エルちゃんのお世話は私に任せて、行きたいところに行きなよ!」

あげはさんがそう言い、ソラは俺とましろさんを引っ張る。

「ソウヤ! ましろさん! 行きましよう!」

「えっ! 私もそつちななの!」

「あはは…まあ、大変だったら俺も手を貸すから安心してよ」

「そっか！ソウヤ君が居るなら大丈夫だね！よし、頑張るよ！」

そうして、俺達はツバサ君とあげはさんと分かれ、大変な道な方へと進んで行く。

「はあ…はあ…ソウヤく〜ん、ソラちやく〜ん…待つてえ」

「ましろさん、大丈夫？」

へトへトなましろさんを見ながら、俺は駆け寄る。

「ましろさん、ほら背中に乗って」

「ソウヤ君…？これは？」

「うん？おんぶだよ。ましろさん、疲れているみたいだし」

「で、でも…それは悪いよ」

「大丈夫だよ。遠慮しないで」

「わ、わかった…ありがとう、ソウヤ君。それじゃあ、乗るね」

そう言つて、少し遠慮がちに背中に乗るましろさんをおんぶした俺はそのまま移動を開始する。

「なんか恥ずかしいね…ソウヤ君、大丈夫？」

「うん、平気だよ…ましろさんは大丈夫？ バランス悪かったりしない？」

「大丈夫だよ！ ありがとう！ ソウヤ君」

「ソウヤ…ましろさくん！ 何してる…んですか？」

俺達より先に行っていたソラが俺達に気づいて、戻ってきていた。

そして、こちらを見るなり、ソラの目のハイライトが行方不明になっていた。

これは不味いと判断し、俺は慌てて言葉を紡ぐ。

「ソラ。ましろさんが疲れてたみたいだから、おんぶしてたんだよ」

「な〜んだ！ そうだったんですね！ ましろさん、すみません。ペースが早かったですよ

ね…少し、ペースを落としますね」

ひとまず落ち着いたのか、ソラは笑みを浮かべながらそう口にする。

「ソラちゃんもありがとう！ ソウヤ君、やっぱり私、歩くよ」

「本当に大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ！ 心配してくれてありがとう！」

「まあ、ましろさんがそう言うなら良いけど…しんどかったら言ってくれ」

「ありがとう！」

そうして、俺はましろさんを降ろして、再び歩き始めた。

すると、ソラが俺の近くに寄り、小声で声を掛けてくる。

「ソウヤ……」

そう言いながら、俺の手を握る。

「ソウヤはましろさんに優しすぎませんか？」

「そうかな？俺はソラが疲れてたら、同じようにおんぶするぞ」

「それって今すぐでも大丈夫ですか？」

「もちろん。じゃあ背中に乗って」

「はい！ありがとうございます！」

そう言つて、ソラは俺の背中に跳び乗ってくる。

「うおっ！急に跳び乗ってくるなよ……まあ、良いか」

「ふふっ！おんぶされてしまいました！」

半ば、跳び乗られた形な気はするけど……まあ、これぐらいは慣れたものだ。

「はいはい。そういうえば、バランスは大丈夫？」

「はい！大丈夫です！」

「そうか……それは良かった」

そんな話をしながら、歩いていく。

そうやって歩いていると、ソラが頬を擦り付けてくる。

「えへへ…ソウヤ…」

「ホントに2人は仲良いよね…でも、堂々とイチャイチャするのはやめてほしいかな？」
ましろさんが笑みを浮かべながら、そう口にする。

だが、目が笑っていない…私という恋人がいながら、何やってるの？これ浮気だよ
？とでも言いたげだ。

「…私の言いたいこと、わかるよね？」

怖い怖い…相変わらずというか、ましろさんは本人が言うように独占欲が強いらしい。

まあ、そんなところも含めて、俺はましろさんが好きなんだけど。

「あはは…後でまた、ましろさんをおんぶするよ」

「うん！ありがとう！ソウヤ君！」

そうして、俺はその後、ソラとましろさんを交互におんぶすることになるのだった。

翔び立つ想いのルート

あげはとソウヤ

「俺は、あげはさんが好きなのかもしれない……」

我ながら、なんともハッキリしない答えだとは思う。

もちろん、好きだという気持ちに嘘はない。

だが、わからない……何故、ここであげはさんのことが浮かんだのか……俺はあげはさんと出会って間もない……ましろさんよりも付き合いが短いくらいだ。

多少の付き合いはあれど、長い時間を一緒に過ごしたわけではない……でも、どうしようもなくあげはさんが好きだという気持ちが溢れてくる。

「これは困ったな……気持ちだけ先走って、肝心の理解が追いついていない……こんな感覚は初めてだ」

1人、思わずそう言葉を零す。

こういうのはどうすれば良いんだろうか……ダメだ、相談出来そうな相手がない。

いつそのこと、本人に尋ねてみた方が良いだろうか？

いやいや、何を馬鹿なことを……そもそもどうやって聞くんだ。

でも、この気持ちの答えを知るにはあげはさんに会うのが一番な気がする……うーん、でもな……こんな気持ちであげはさんに向き合うのは失礼な気がする。

「……ここで悩んでても仕方ない。とりあえずあげはさんに会いに行こう……」

正直、怖くないと言えば嘘になる……あげはさんにこの思いを伝えたら、今までの関係が崩れてしまうかもしれない。

こんな自分の気持ちが変わらない状態で向き合ったら、呆れられるかもしれない。だが、そんな気持ちとは裏腹に俺はヨヨさんから携帯を借りるために移動を始めた。

……こうなったら、腹を括るしかない。

例え、この先に何が起こるかかわからないとしても、俺は自分の気持ちを知りたい。そう決意して、俺はヨヨさんの所に向かうのだった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ソウヤ君、どうしたの？急に会いたいわって言われて、びっくりしたよ」

あげはさんをヨヨさんの携帯で呼び出した場所は前にデートの相談をする時に行った喫茶店だ。

そういえば、あげはさんと会う時って大体ここだな……まあ、俺が他に落ち着いて話せる場所を知らないというのもあるけど。

「突然、すみません…実はあげはさんに相談したいことがあって」

「相談したいこと？」

「その、ですね…」

言葉に詰まる。

伝えるのに躊躇する。

でも、言わないと前には進めない。

「…俺はあげはさんのことが好きなのかもしれません」

「へっ!?それってどういう…」

「もちろん、言葉通りの意味です…俺は一人の女性としてあげはさんのことが好きなん

だと思っています」

俺がそう伝えると、あげはさんは顔を赤くしていた。

「…こういうの、思ったより照れるね…」

「そうですね…俺も結構照れくさいです…でも、ちよつと困惑してます…何ていうか気持ち先走りすぎて、理解が追いついていないというか…こういう感覚は初めてで、困惑してます」

「あ…えっ!えつと…」

「あげはさんはどうですか?俺のことをどう思ってますか？」

「わ、私は……」

そう言つて、あげはさんは戸惑いながらも、言葉が続けてくれた。

「私も、ソウヤ君が好きだよ」

「えっ……！本当ですか!？」

「ふふっ！こんなこと冗談で言うわけないでしょ……ソウヤ君のこと、本当に好きだよ」

あげはさんは頬を赤く染めながらも、こちらをじつと見つめてそう告げた。

「だから、私と付き合つてくれないかな？」

「もちろんです！俺で良ければ、あげはさんの恋人になりたいです」

「うん！よろしくね！」

あげはさんはそう言つて、笑顔を見せてくれた。

その笑顔を見て、俺の抱えていた思いについて1つの答えについてたどり着いた。

「そっか……俺、あげはさんに一目惚れしたんだ」

「一目惚れ……？」

「はい……多分ですけど、俺はあげはさんに一目惚れしたんだと思います……これから、もつとあげはさんのことを知りたいです！」

「ソウヤ君……もちろん！これから、もつとお互いのことを知つて行こう！」

「はい！よろしくお願ひしますね、あげはさん！」

俺の言葉にあげはさんは笑みを浮かべて頷いた。

「それじゃあ、さつそく色々聞いてちやおうかな？まずは、無難に好きな食べ物とか教えてもらおうかな？」

「自己紹介みたいな流れですね…まあ、好きな食べ物はおムライスとかハンバーグとかですかね？子供っぽいとか言われそうですけど」

「良いじゃん！美味しいよね！オムライスもハンバーグも！今度、私が作ってあげよつか？」

「マジですか！ぜひ、お願いします！」

「うん！任せて！」

「ありがとうございます…でも、やってもらってばかりというのは申し訳ないので、こつちで何かお礼が出来ないか考えておきますね！」

「そんなに気を遣わなくても良いのに…でも、ありがとう！」

そんな会話を交わしながら、俺はあげはさんと楽しい時間を過ごすのだった。

／／／／／／／／／／／／／／

「ねえ、ソウヤ君…恋人になったのに、話すだけで良かったの？こう…もつと恋人らしいこととかさ…」

車で送ってもらおう中で、あげはさんがそう口にする。

「もちろんしたいですよ。あげはさんはどうですか？」

「そ、それは…私もしたい」

照れくさそうに言うあげはさんを見て、思わず笑みを浮かべる。

「じゃあ、今度デートする時にでもしましょう！」

「そうだね！あつ、そろそろ家に着くよ！」

「ありがとうございます！」

そうして、家にたどり着き、俺は車から降りる。

あげはさんも見送りをしてくれるために車から降りていた。

「それじゃあ、またね！ソウヤ君！」

「はい！また…あつ、そうだ。あげはさん」

「ん？どうしたの？」

そう聞いてくるあげはさんに顔を近づけ、そつと頬にキスをした。

「ええっ!？」

「それじゃあ、気を付けて帰ってくださいね！あげはさん」

そう言つて、俺は家へと戻つて行く。

「こんなのズルいよ…ソウヤ君。こんなの急にされたらドキドキするじゃん…」

あげはさんが赤面しながら、そんなことを言っているとはつゆ知らず、俺は家の中に
入っていくのだった。